

愛情の運命

ジャック・シャルドンヌ

森 健二 訳

青山社

愛情の運命

ジャック・シャルドンヌ

森 健二 訳

青山社

Jacques Chardonne : LES DESTINEES SENTIMENTALES (roman)
EDITIONS BERNARD GRASSET 61, rue des Saint-Pères,
VI^e Paris 1947

ジャック・シャルドンヌ自身の全集版への序文

アンリ・クルアールは『愛情の運命』について私よりも上手く話すことが出来た。彼は言っている。《シャルドンヌは夫婦から家族へと移っている。彼は自分の流儀を修正し、彼の小説の中に二十世紀の最初の三分の一の時代の経済的な出来事と歴史的なそれを導入している。どうしてこの小説家は、その社会的な複雑さの試練を魂の代数学に対せしめるようにはしていないのか。》或いはルネ・ラルーはこう言っている。《行動の世界は絶えず愛の世界にある種の反対の証拠を提供しているのだ。》そしてジネット・ジタール・オーヴィストはこの小説の纏れた主題の中で、特に愛の情熱と男の自分の仕事への情熱との間の対立というものを取り上げることになるが、それは騎士小説がそれらで一杯になっている古い議論なのである。アーサー王の時代には「行動」はお手柄であり、狩猟、戦争であつた。それは職人にあつては主要な仕事への好みとなつたのだ。

私は、先ずは三巻で公開されたこの長い作品を書き始めたのであるが、それらの事柄のことも、はっきり決まつた構想も考えてはいなかつた。私は一九〇五年から一九三八年にかけて自分の周辺で自分が見たことを語ることを欲したのであるが、私にとって極めて親しかった人物たちの横顔をほとんど修正することはしなかつた。その人物たちを見る流儀は私にとっては恐らく個人的なものでらう。私は彼ら

を最も高い所で、最も美しい光の中で捉えたのである。このようにして彼らはもつと真実のものに思えたのである。

真実の尊敬はこの小説の各行間にあるのだ。それはその慎ましい形の内に、そして最も小さな詳細への大いなる配慮の内にある。私は決して即興的に書いたのではなかった。

人間にあつてはすべては感情である、自分の仕事への愛情、自分が作り上げている作品への信頼、その質への配慮、それらはこの束の間の闇の様な世界では非常に奇妙なものである。そしてそれらはそこでは高貴さの極めて注目すべき表現なのである。この思想は私の創り出したものではない。それは私が知っていた人々によって与えられたのである。それは商人たちであり、ブルジュワたちである。フランスには極めて多様なブルジュワたちがいる。私はその内の最善のものを選択した。正しくは私は彼らとどこに生を受けたのである。

フランスの小説家は男たちを、そして特にブルジュワたちを褒めたたえる習慣は持つていなかった。これらの作家たちは一世紀前から我々に怪物たちのギャラリーを紹介してきた。私は人間というものはその作家が恐ろしいものに基ついてしか洗練することはないこれらの描写の内には正確に表現されているのかを私は確信することは出来ない。

けれども一人のフランスの作家はブルジュワジーに対する考察を行つたのであり、それを話すことを敢えてやつたのである。それがジョレースなのである。《活動的な産業のブルジュワジーは、若し人間たちのすべての集団の為の仕事の究極的な卓越を信じることが無ければ、様々な恐るべき困難を通じての経済的な革命を導いていく力は持つていなかったであろう。そして彼らが少なくとも寛大さの壮大な幻

想と人類の進歩への狂信を持っていなければ、広大な近代の世界を作ることには無かったであろう。ブルジュワジーの最大の力の一つは、そして最も確固とした肩書きの一つは、それに対して労働の要求が鳴り響く社会の内にあるのであり、彼らは働く階級なのだ。』

いつも慎重で公正な判断は病弱な人達に中傷の非難を付け加える一つの社会では、理解されたり、知覚されたりするのだろうか。人々はこの押し殺された正義を信じてきたのだ。そして不確かな信仰が彼らの生きる理由だったのだ。

もし私が作品の登場人物をまったく閉ざされた世界で選んでいたとすれば、すべての人間と同様に欠点と野卑さを持っている評判の好くない一つの階級を讃えるためではないのだ。単に私は、私が彼らを良く知っていたが故に、発明する必要はなかった人々を通して、人間についてのもっと一般的な見方というものを手に入れることを望んだからなのである。私は小説家たちの発明や彼らが想像力と名付けているものを信用しない。しかし我々が内面的で確かな学問について知っている対象は数多くないのだ。私の立場では一九〇五年には若い娘だったのではないし、一九一四年に国土防衛兵ではなかったし、陶器の製造者でもなかった。私はただそのすべてを少しだけ吸い込んだのだ。一つの直接の経験、すなわち独創的であったり、また深いものであったりしたそれが自分に欠けていた時には、私は自分に奉仕することが出来た人々に問い合わせたのである。フランスでは書くことが出来て、それを夢想したりすることはない好い観察者はうようよしているのだ。それを私は自分の近隣で見つけたのだ。ジャンヌ・ドラマンは私の主な協力者であったし、それから私の妹のジェルメーヌ・ドラマン、そしてジャック・ドラマンと、モーリス・ドラマンがいる。そして多数の別の者も私が選んだ自分のページをそっと囁いてく

れた。私は一つの芸術作品は共同の物であると信じている。

この決定版では（それはきちんと終えなければならぬが）、前の版に比べて（一九四七年版）いくつかの手直しが見いだされるだろう。とりわけこの小説の三つの部分は異なったものである。この点では私はピエール・ドリー（Pierre Dolley）の忠告に従った。

Jacques Chardonne

『愛情の運命』について

この作品は三つの部分から構成されている。第一部は「ジャン・バルヌリーの妻」、第二部は「ポーリーヌ」、第三部は「リモージュの陶器」となっている。そしてこれはシャルドンヌの代表作と言つてよいだろうと思われる。彼はこの作品を一九三四年から三六年にかけての三年間に書いているが、それは彼が五十歳になった頃のこと、彼の処女作である『結婚歌』を公にしてから第七作目に当たるのである。彼はしばしば *romancier du couple* 「夫婦小説家」と言われるが、この作品は彼の最も円熟したものと言えるだろう。量的にも大部であるし、その内容も自分の人生を全面的に取り入れた注目すべきものとなっているのである。

彼はこの作品の中で二十世紀の最初の時期の経済的歴史的事件を導入しているという点で他の作品とは一線を画しているのである。彼のそれまでの作品はいつも社会から孤立した男女の心理や感情を掘り下げて描くことに集中しており、その周辺を描くことはあまり無かったのである。しかし彼が重視したのは人間の内面を描くことであり、外面を描くことは避けていたように思えるのだが、この作品に至って彼の眼は自分の周囲の世界全体に向けられた。そしてリモージュの陶器工場の経済的な繁栄と没落、第一次大戦の時の様子、そして時代の変遷による若者たちの風俗の変転等も描かれている。シャル

ドンヌの最も深い理解者であったジネット・ジタール・オーヴィスト女史は『ジャック・シャルドンヌの生涯と芸術』(La vie de Jacques Chardonne et son art)という著書の中でこの作品について次の様に書いている。

「三つの舞踏会がこの本の中の時代を特徴付けている。最初のものは一九〇五年、その次は第一次大戦後、そして最後は一九二九年の恐慌の前の興奮した時代である。『愛情の運命』は従って、三つの舞踏会を通して見られた一つの社会の歴史であるとも言えるだろう。」

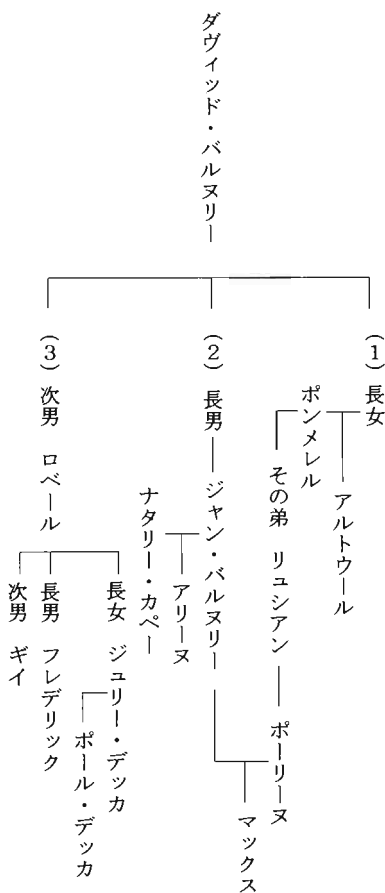
しかし彼が描くことを考えたのはその様な社会史ではあるまい。彼は自分が見てきた周囲の世界、先ず陶器製造会社バルヌリー商会、コニャック製造業者であるボンメル家等は自分が幼いときから見てきたものと重なり合うものである。彼は自分が良く知っている世界のみを描こうとしたのであるが、それは写真主義的に描こうとしたのではない。その描写は真実の調子を持っているが、彼が目指したのは「人生の流れっていく内に感じられる人生の詩」というものである。彼は人間の感覚が捉えるのが困難であると思われるものが人生の内では如何に重要なものであるかを考えて、それを有りのままに捉えようとしたのである。一見何の変哲もない人生の流れの内に、長い年月の移り変わる間に渾然と人生の深い意味を感じ取られるなかでの「人生の詩」というものを描こうとしたのではないかと思われるのである。従ってこの作品はゆつくりと時間をかけて味いながら読み進んでこそ、それが理解されるのではないかということなのだ。

そしてジャン・バルヌリーという挫折した牧師が、心を切り裂かれるような思いで、最初の妻と娘のアリーヌと決別し、やがてどん底生活の流れる内に自分に近づいてきた遠縁の娘のポーリーヌと出会

い、結ばれ、再婚して第二の人生をスイスのレンスで開始し、やがてリモージュの陶器製造会社に呼び出され、それを指揮しながら、生きていくという物語である。

第一部「ジャン・バルヌリーの妻」はこの作品の始まりの部分であるが、ジャンの最初の妻であるナタリーと彼が出会い、結ばれ、やがて別れていく迄がその中心となっている。その破局はナタリーの強烈な個性によって、ジャンは苦しめられることになっている。つまり彼は富豪の息子として生まれながら、質素な生活を好み、物質的な満足よりも精神の世界に生きる人間であろうとするためにナタリーの理解が得られないのである。この部分の背景としての人間関係を判りやすく図表にすると次のようになる。

バルヌリー家の家族関係



第二部「ポーリーヌ」はこの作品のクライマックスであり、一人でパリに出て、オフィス・レディーとして働いているが、ナタリーと別れてやはりパリに来ていたジャンと再会し、二人の気持ちは急接近することになる。パリの病院に入院していたジャンはポーリーヌの勧めでスイスの山中の町で静養することになり、ポーリーヌもそこに駆けつけて間もなく二人は結婚する。しばらく平穏な生活が続くが、やがてダヴィッド・バルヌリーが世を去った後の後継者としてバルヌリー商会の指揮をする為に呼び出されたり、戦争が勃発して出征を求められて従軍したりする事になるが、その間の二人の結婚生活の分析と愛情のモラル等が描写されている。シャルドンヌは、結婚生活に必要なのは恋愛感情ではなく、自己の没却と、あるがままの相手を受け入れる精神の太らかさであると言っているのである。サン・テクジュペリも「愛とはお互いを眺めることではなく、共に同じ方向を見つめることである。」と言っているが、ポーリーヌがジャンを自分の幸福の為に独占することを断念して、レンスでの穏やかな日々を捨てて、ジャンと共にリモージュで陶器工場の経営に積極的に参加する様子は、正に古くからの女の役割を演じていて、少なからず保守的な感じを与えるが、シャルドンヌは伝統主義者として、この様な女性の理想像の姿を作り上げたのかもしれないのである。彼はまた男と女の違いを次の様に分析しているのである。

《男というものは自分の魂を様々なものに置いている。しかし女性は全てを愛情に求めている。愛情というものは時には魂を息詰まらせることがある。愛情は生命の全てかもしれないが、魂は生命を越えている。そして本当の愛情という生命の最も大きな贈り物を知った女性だけがそれを感じることが出来るのだと……。》

第三部「リモージュの陶器」はジャンが復員してくるが、陶器工場の方はジャンの様々な努力にも拘

らず経営不振に陥り、なかなかそこからは抜け出ることが出来ない。それに自分は思わぬ事故で負傷する。そして全てを失ってしまうが、再び静かな生活に戻ることが出来る。この間ボーリー又は献身的に尽くしてくれるし、自分の別れた娘のアリー又は紆余曲折の後に修道院に入っていく。彼はバルヌリー家を盛り起こすこととキリスト教的精神に対する尊敬の念を持っている。彼のキリスト教は孤独に耐えることを求める厳しいプロテスタント的な立場であるが、それはボンメル氏の人格の内にハッキリと示されている。その精神にはフランスのモラリストの伝統的な精神が合流している。彼の文章は理知的で、入念に練り上げられており、この作品が洗練された印象を与えるのは彼の精神の厳しさと優しさという不思議な結びつきに基づいているように思われるのである。

最後にジャンは病床にあつて、そこから人生を眺めてボーリー又はその感慨を語るのである。《愛情……人生の内には他に何にもないのだ。》と。この文句は彼が言わんとした最も重要なものかもしれない。この作品は日本ではほとんど知られるには至らなかったが、フランスでは一流の批評家たちに喝采された。その名前を挙げれば、シャルル・デュ・ボス、エドモン・ジャル、アルベール・ティボーデ、アンリ・ビドウ、アンドレ・テリーヴ、ルネ・ラルー、アンドレ・ビリー、マルセル・アルラン、アンリ・ド・レニエ、アンドレ・ルツソー、アンドレ・モーロワ達である。

この作品は一度は紹介されたことがあるにも拘らず、フランス文学史の中では忘れられているのでその因縁をここに書いておきたいと思う。

先ず昭和二九年に岡田真吉という人によって訳されて、新潮社から公刊されたことがある。それは現在絶版になっているのは言うまでもない。その訳はなかなか立派なものではあったが、その訳者は最初

の版であるストック(Stock)書店版を用いているので、作者自身が後になって手直しして公刊したアルバン・ミシェル(Albin Michel)の全集版と比較してみるとかなりの異同がある。それに訳文が古すぎて現代の読者には難しすぎるように思えるし、判らない言葉を数多く含んでいる。

以上の様な点を鑑みて訳者はこの作品を改訳して世に送り出すことの必要性を痛感したということである。どうか読者はこの作品を真正面からじっくりと味わいながらシャルドンヌの世界を心ゆくまで堪能していただきたいものである。

目次

ジャック・シャルドンヌ自身の全集版への序文	1
『愛情の運命』について	v
第一部  ジャン・バルヌリーの妻	1
第二部  ポーリーヌ	二二一
第三部  リモージュの陶器	三六九
ジャック・シャルドンヌの生涯	六二二
訳者後記	六二七

第一部



ジャン・バルヌリーの妻

I

黒い僧服の長袖の間で蒼白い顔をして、ジャン・バルヌリー牧師は祝福するために両腕を高く挙げ、説教壇に立ち上がって言った。「心を安らかにして進みなさい。そして貧しい人達のことを、そして神があなたたちとあなたたちの家族とともに居られますことを思いなさい、アーメン。」

ハルモニウムの低音がその声に呼応した。そして副執事達の長椅子に坐っていたボンメルル氏はビロアの財布を取り出して教会の入り口に立ち止まりにやって来た。そこには献金の集金人が柱に彫り込まれた女人像のように無感動にして立っていたが、その死んだような目は音もなくぼんやりした生地 of 服のポケットに一枚の銀貨を投げ入れたその友人が誰であるかにもう気付かなかった。

ボンメルル氏は聖器室に少し重い財布を返却し、自分の募金の額を帳簿に書き込み、鍵を門番に返してから出ていった。

それから淡いグレーの色調の敷石で出来た家々に縁取られたシャラント街の河岸に沿って歩いていった。その煤煙の無い小さな町ではその家々は何かに変質させられることはなく、風の一吹きや激しいにわか雨だけが一瞬打ち当たるのみだった。一つの鉄柵がボンメルル氏の酒蔵がある中庭を閉ざしていた。

彼は事務所の前を通り過ぎ、自分の家のなかに入っていく、回りのいくつかの広い部屋には目もくれずに横切つていった。その薄暗がりの中で、剥製にされた狐と狼が厚紙の口を開けていた。それは彼の青年時代の狩りの記念の品なのである。五年来やもめ暮らしをしていたポンメル氏は自分の過去を忘れてしまい、もう自分の妻のことも思い出さなかった。彼女はリモージュの陶器製造会社の創立者であるダヴィッド・バルヌリーの娘であつた。生涯を通じてポンメル氏は思いもよらないことであつたが、彼女はバルバザックのサロンで誰も迎えることは無く、そこでリモージュや、バルヌリー家の習慣等や、リムーザンの彼等の別荘のことを懐かしがつていたのだつた。

ポンメル氏の酒蔵は中庭の回りに並び、丸い瓦の屋根の下にあり、真新しい葡萄の木がその粗塗りの壁を覆つており、一軒の農家に似ていたが、それはさながら大地の恵みであるコニャックが、その街に至るまで、それを受け入れる建物を田舎風の印象で特長付けているかのようだった。

一つの仄かな光が、屋根の中に切り抜いて作られた小さな穴から落ち込んでいる。そしてそこでコニャックが木材と接触して熟成される古い大樽の列がやつと見分けられるほどである。そのゆるやかな熟成がそのほの暗さと沈黙を支配しているように思えるのである。しかし一日中酒樽作りの仕事場では奥のほうから響くような騒音が響きわたつていた。地面に立てられた酒樽の回りを回転しながら炎に覆われて、他方では削り屑の火が集められた樽板を暖め、樽作りの職人たちは拍子を取りながら鉄の輪を叩いていた。彼等は今もなお非常に古い道具一式を用いていたのである。長椅子の形をしたシャピユス(chapuis)、木と木を合わせて樽板を作る短くて低い熊手(outis)等がそれである。それに手で光沢の付いた柄と鉄製の大きな頭のある素朴な工具、鉋、それに鋼鉄の刀、そして樽作り達の誇りである手斧、そ

してその重い刃が巻きついた薄い木屑をも切り取ることができる大型の包丁などである。彼等は総勢二十人ばかりで、埃っぽいがらくたや、壁に掛けられた栗の樹の輪、そして高く積まれた未加工の樽板等に囲まれていた。歌を歌ったり、冗談を言ったりして、ひどく疲れるようなことはなく、規律もなく、穏やかではあるが熟練と趣味を要する労働に携わる樽作り達は昼間に樽を作るのである。夕方に仕事が終わる時刻には、何人かの者は彼等の仕事着の上に農夫の青色の服を身に付けるのである。

ボンメル氏は自分の宗教とコニャックの取引の間に矛盾を感じるということはなかった。彼はその取引の内にも多様な規制や神聖なる習慣、そして弁護されるものと許されるもの、更に善悪の厳密なる境界というものを見いだしていた。彼は自分のどんなに些細な行為も高級な観念に結び付けていた。そして彼が自分の手で望んだ日に、丁寧で真実の一通の手紙を書いた時、そして代金を支払った時、更に自分が約束していたものをきちんと渡した時、彼は神の掟に従うのだと信じていたのである。善を実践することには特別な努力を要することはなかった。彼は直ぐに自分の義務を察知し、それを自発的になし遂げたのである。最も些細な欺瞞も自分の天性に逆らうものとして彼を苦しめたかもしれないのである。一八八〇年にねあぶら虫病がシャラント地方の葡萄畑を台無しにした時には、彼の良心にとっては大いなる試練でもあった。

根こそぎ引き抜かれた葡萄の木が薪置き場にうずたかく積み上げられた。小さな農家のボイラーが消されてしまい、最も小さい地主の家でも満開の葡萄の花の香りを放つ澄んだ液体が蒸留器から流れ出るのもう見られなかったのである。何世代もの取引人達を養ってきた商社を救済する為に、穀物から取られたアルコールをワインのそれに混ぜるということに頼らなければならなかったのであった。ポ

ンメレル氏は全ての者がその事を黙っていたこのごまかしを甘受したのであった。やがてアメリカからの葡萄の木が純粋な製品に戻るのを可能にしてくれたのだ。その時まで持ちこたえなければならなかった。

ねあぶらむし病の災難の後に、そして田舎の廃墟の中で、その時まで知られていなかった諸々の財産がいくつかの町で築かれたのはその当時のことであつた。北部のアルコールを用いることは、一層数の多い顧客達にとつては高価でない製品を作るのを可能にしてくれるのである。コニヤックは壇詰めになれる。箱詰めして送られたが、その革新的なやり方は遙か遠くの市場を開いてくれたのである。そして専売を形成する商標が作られた。芳香はあまり持たないコニヤックは、ひどく着色され、気のきいたラベルの下でこれらの取引人達の富を作り上げたのであつた。

ボンメレル氏はこれらの慣習を排斥した。接ぎ木した葡萄の樹が使えるようになるや否や、彼は父祖伝来の伝統に帰つたのだつた。彼の酒蔵からは混ざりもののないシャラントのワインから作られた純粋なコニヤックしか、最早出されなかった。コニヤックを壇詰めにして売ったり、自分の名前が食料品店で見られるのに同意したのは彼ではないのである。彼は檜の樹の上に焼き印が押され、確固とした誠実さの原則を持ち、繊細な鑑識家でもある十二人ばかりの尊敬すべき商人たちに送られることになつて、ボンメレルという名前を持つどつしりした立派な樽のみしか認めなかった。彼は簡単に手に入る富を拒んだのである。彼は品質の良いコニヤックを売ることを選んだのであり、彼がロンドンに、クリスチャニアに、モスクワに行った時の、古くからの付き合ひのあつたターンブル、ラルセン、デュプレーズのところで歓待されたという喜びだけで十分に報われたと思うのだった。

∴

ボンメル氏は心というものを持っていないのだと言う人もあったかもしれない。しかし彼の場合は一つの衝動が合理的な考えに対立するということは決してなかったし、或いは彼は自分の判断を見越していたのである。精神が彼の行動を支配していたのだ。こうして父親の後継者になるように呼ばれた時、自分には別の天命が有るのではないかと、自分の個人的な好みを犠牲にすることになるのでは等と考えないで、この義務を受け入れたのである。それでも彼は自分の兄弟達が家族の世襲の財産からは除外されることは認めたのであったが、それは長男に商社を割り当てるという習慣に従つてのことであつた。

彼は弟のトーマを会計係に採用した。トーマは結婚して非常に金持ちになつたが、生涯を通じて彼はその職務を守つたのだつた。それはさながらあの商社の事務所で見られるように、金庫の側で、帳簿の山の向こうに白髪の間をして坐っている、安月給ではあるが、厳密で慎重で尊敬されている事務員の一人なのである。ボンメル氏の一番下の弟のリュシアンはバリーに落ち着いていた。彼はピアノを弾き、医学を志し、四十歳には一卷の詩集を出版した。ボンメル氏は彼が自分の落ち度で貧しい状態であつたのを知りながら、彼の結婚を認めず、年に一度だけ手紙を書くことに限定していた。リュシアンが自分の妻と娘のポーリーヌを捨てて、別の女とエジプトに向けて旅立つた時、ボンメル氏はその弟に手紙を書くのは止めてしまったが、その最初の妻にはささやかな年金を供することにしたのだつた。リュシアンが死んだとき、彼はポーリーヌに自分の家に来て一緒に住むようにと申し出た。彼の事業が下り坂

になった時に、そそかしい娘としてイギリスに住んでいた十七歳の若い娘を自宅に住まわせるということが彼を困らせることはなかったし、余計な出費が必要になるということは彼の精神の道徳的な義務感を揺るがせることはなかったのである。

ポーリーヌは四月のある夕方バルバザックに到着した。彼女は厚地のカーテンが付いていて、ナフタリンの臭いがする美しい部屋に入ることを拒否して、最上階の小さな屋根裏部屋に落ち着いたのだった。窓からは酒蔵の屋根や、花の咲いた栗の木の頂や、手を入れられていない葡萄の木の枝に嘴でしがみつきのながら、はい回っている自由で年老いた鸚鵡などが見えたのである。ここでは家のなかの弱まった騒音、その一つは門番が、そして三つ目はベルトメを呼び出す時の鐘の音、そして酒樽作りの工房のざわめき等が天空の自由な空間の下で立ちのぼっていくのだった。

ポーリーヌは自分の父について傷つけるような言葉を耳にするのを恐れていた。しかしバルバザックではリュシアン・ポンメレルのことが話題になることは無かったのである。彼女は父に対しては優しくはあるが、疑い深く、その不在と不安で一層強められたような感情を感じていたのである。

..

ポンメレル氏の息子のアルトゥールはマルグリット・ビュルゴー・デュペロンと結婚していた。彼等はこの街の西の、バルバザックで最も美しい家に住んでいた。

ポンメレル氏の事務所ではその息子の為にテーブルが一つ取っておかれていたが、アルトゥールは昼

食の前に、或いは朝の散歩からの帰りに一瞬しかそこに止まることはなかった。彼は、頭を高くしていた灰色の大きな馬の軽やかで力強い足取りで走らせながら河岸通りを通過して到着したのだった。それは血統もよく、浣刺とした目をしており、しなやかな足、真つ直ぐ立った背と剃られたたてがみを持っていた。父の家の前ではアルトゥールは馬から下りて、使用人を呼び、手綱を渡し、愛撫されると緊張する、汗に濡れた首筋を手で撫でてやりながら、その馬を眺めたのだった。それから少しばかり足が痺れたようにして、ソフト帽の縁を下げて、膨らんだ半ズボンをはいて、ステッキで彼の固い長靴を叩きながら事務所に入っていた。

ボンメルル氏は息子を認めると満足だった。そして頬髭に囲まれているその口もととはちらりと微笑すると右の眉と一緒に持ち上げられるのだったが、それは頭の片側の上で乱されたグレーでふんわりとした髪の間で伸ばされているかのようであった。彼とは全く異なっており、エレガントなこの騎士は若年寄であつたが、彼はボンメルル氏があれ程期待をかけ、上手く教育していたのに、絶えずちよつとした野心にも反省し、不出来の勉強や若者の愚かさに観念し、結局は自分のある種の凡庸さを認めたこの何とも言えない存在は、あれ程の失望と変容を通してその父親にとつては余りにかけ離れているか、余りに身近すぎる存在だったか、いつも彼の息子であることには変わりはない無かったのだ。

その父は彼に興味深い手紙を見せたり、クリスタルのグラスを差し出したりしたが、幅広の底には、絶妙で木材の上品な芳香を広がらせるコニャックが少し入れられていた。彼はもう一つのグラスを手に取り、少しテーブルから離れて足を前の方に伸ばし、一方の手を背中の上に上げて、体を少し屈めて深呼吸した。その目は、一つの神秘のなかに入り込もうとしているかの様に、集中した表情をして、グラス

の縁越しにアルトウールの目の上に固定されていた。

「お前はこれのお茶の香りを感じるかね、菩提樹の花の煎汁の香りだよ、そしてこの軽やかな芳香の中には果物のそれが混じっている、……例えば梅の香りや……そしてヴァニラの香りがするようにも思える。そして少し重々しいけれども、すっかり熟した林檎の香り、つまりわし達がランス(Rance)と呼んでいる繊細な香りも含まれている。それは少なくとも百年ものの細やかなシャンパンから立ちのぼる香りだよ。それはジロー家という蒸留用の地所を持つ古い家族のものなのだ。」

若い時にイギリスにいた間に身に付けられた少なからずこちなくて沈黙する習慣、そして他の人格を大いに尊重すること、人に影響力を行使することへの恐れ、自分の考えを上手く言うことの困難さ等が、ボンメル氏に、自分の息子に対してさえ一つの非難をする事さえも妨げさせたのであった。アルトウールは自分の馬への情熱、そして取引にはあまり興味を持たないことがボンメル氏の気持ちに損ねていることを知らなかった。彼は自分の父親はその家に対しては完全なる権威を保持することを願っており、彼に相談するのは単なるお愛想に過ぎないのだと思っていたのである。アルトウールがおそらくは自分では軽蔑していたその家族の行き方に無関心であり、ビュルゴー・デュペロン家の者たちに心酔し、贅沢な生活に引きずられて咎められるべき商売人的な風俗にそのかされているのを見て、ボンメル氏は、自分には息子はいないかのように、一人で働くことに甘んじていたのである。

しかし彼は自分が判断することを望まないことは自分の考えから遠ざけることは知っていたのである。彼はアルトウールの家族を、そしてその贅沢な家を、更に非常に理知的で独裁的な嫁を、自分の力の及ばない、そしてその点では何の意見も持っていないものとして受け入れていたのであった。

アルトウール・ボンメル夫人は自分が夫として結婚した人間の能力を疑つてはいなかった。それに自分の目からすればアルトウールの人物は、彼女が前もつて彼について描いていた栄光に満ちた道程と見間違えられていたのである。彼女は彼が代議士になり、それから大臣になると思い込んでいた。そしてバルバザックで見られたと思われる最も華やかな祝宴を開催することによって彼の未来の準備をしたのであった。

バルバザックと外国との間の行き来はよく行われた。男たちはアメリカやスエーデンやロシアを旅行した。彼等が帰ると自分の妻はバリにいたのだつた。そしてその小さな街に最新の流行や小説等が持つてこられたのであった。将来の商社の支配人になる若者たちはイギリスやスエーデン等に滞在していた。おとなしく、不器用で、窮屈な上着を着て出発した彼等は朗らかな顔をして、爽やかな顔色をして、今は自信に満ちて解放されたかのようになって帰ってきたのである。彼等がその美しいトランクで素晴らしい素材の衣服やエレガントな下着類を持ちかえた時にはそれは新しい雰囲気であり、全く一つの世界であつた。彼等は今や女達に愛想がよく、姉妹達のコートを手につけて、彼女達を自由に行かせる為に自分を目立たないようにしていた。そして朝食にはハム・エッグを、肉料理には味の濃いソースを求めた。もつともそれらの習慣は急速に消えてしまった。しかし旅行をする度に北部や大ホテルに出入りする男たちのやり方は少しずつ改められたのであった。そして彼等は自分の衣装戸棚には豹革を裏付けたアストラカンの襟付き外套を持っていたのである。

バルバザックには事務所の中にも外国人たちがいたが、それはワルツを踊るのが得意なイギリス人やスエーデン人達、そして話し方が荒っぽいオランダ人達だつた。全てが同じ先生と同じ才能を持ってい

た通常の付き合ひの常連と若い娘たちのグループの他に、アルトウール・ポンメレル夫人は、コメディーをして遊ぶ為に、呆氣に取られている役人を見つけることが出来たのだった。その男はある日、黒いモーニング・コートを着て、ゴブラン織りの絨毯が敷き詰められた大広間で、金の飾り付のひじ掛け椅子の縁に、帽子を膝の上に置いて坐っているのが見られたが、後になって夫人の青色に飾られた私室で長々と小言を言われてから、メイキャップをして、せむしの恰好で、クレモナのヴァイオリン作りとして舞台上に登場したが、彼は見事に詩を朗読するのである。或いは夫人は未知の若い娘をてなづけた。その驚のような歌声は一瞬多数の人の心を仰天させたが、彼女はその生活に息詰まらされて、永遠に無口のままだに、間もなく消えてしまった。しかしとりわけいくつかの舞踏会はその華やかな多数の踊り手と共に素晴らしかった。つまりリモージュの獵騎兵や竜騎兵、ロシユフォールの海軍士官、ボルドーとかアングレームからやって来たエレガントな若者達、偉大なワルツの名手とコティヨン踊りのリード役達であり、彼等は周辺の四つの県のいかなる舞踏会にも必ず顔を出していたのである。

いつも非常に高い襟で締めつけられたローブ・モンタントを身に付けた女たちはブラウスをピツタリ合わせて、足の先まで覆ってしまうロング・スカートを身に付け、きつく抑えたコルセットでぎこちなくなっていた。彼女たちは冬にはマフ無しで、そして夏には小型パラル無しで外出することはなかったが、或る宵は両肩に何も身に付けていない両腕を露出していたのだった。

その町のただ独りの髪結い女は家から家へと髪用の金具とピンを持って渡り歩いたのだった。彼女は、ベッドの上に細やかな下着類とレースの裾飾りが広げられた部屋に昇っていったが、そこにはアイロンをかけられたばかりの服や、バラ色の絹の靴下やスパンコールのチュールの扇子などもあった。彼女は顧客

から顧客へと走り回り、固く留められたあらゆる鬘を結んだり、両方のこめかみの上では小さい巻き毛を作ったり、頭の上には撫でつけられたり、ウェーブをかけられた髪をふんわりと盛り上げたりしたのであった。そして子供たちは魔術にかけられたように、自分たちの母親が、もう愛撫することが出来ないほかに、ビロードの衣装を飾り立てて鏡の前ではほんのりとお化粧をして、長い白の手袋を付け、少しばかりおそろいのおそろいハイヒールでゆっくりと歩いていくのを見るのである。その間、暗くて物音がしない町の通りでは珍しい自家用の馬車と賃貸の幌付四輪馬車が、二台行ったり来たりしていた。そしてその馬車が招待者全員を連れていき、朝になると、鎧戸から入り込む突然の光と共に彼等を連れ戻すのである。

「伯父様、私は舞踏会に行きたいのですが。」

「ポーリーヌ、お前は舞踏会に行きたいのかね。」

ボンメレル氏は決して慣例には逆らわなかった。

「お前の年齢では舞踏会に行ってもいいだろう。」

彼自身、アルトゥールの家でのソワレに顔を出さないことは無かった。彼は特に若い独りの娘を誘って、二、三回ワルツを踊ったのだったが、彼女はその余りに巧みな旋回で押し流されて驚いているのだ。彼は古い流儀で踊ったが何時も威厳があった。それでも自分のちよつとしたことでも、そして軽率に思える動きでも絶対的な率直さでにこやかであった。彼は自分のあらゆる行動に於いて、つまりダンスする時も、自分の四輪馬車の高い御者台の上で二等の馬に拍車をかける時でも、シャツ一枚になって、麦わら帽子の下にハンカチを一枚挟んで、シャラント河でボートを漕ぐときでも何時も良心的であったのだ。日曜日にはフロックコートを着て、無垢の首筋に白いネクタイを付けて彼は、牧師の前の説教壇に上り、ゆっくりと

大型の聖書を開き、董色の葉を取って、少し興奮してはいるが目立たない声で言った。「聞け、イスラエルの民よ、我は永遠なる汝の神なり……。」

∴

ポンメルル氏は馬を待たせるのは好きではなかった。

「準備は出来たかね、ポリーヌ。」

彼は喫煙部屋に戻った。顔は蒼白く、頭髮と頬髭はグレーで、肌着は輝くばかりであり、亜麻色のネクタイは、緑の笠を被ったガス灯で優しく照らされて、浮かび上がっていた様に見える。

「準備は出来たかね、ポリーヌ。」

彼女が女中たちの視線に見送られて階段を下りた時、彼は彼女の夜会用のケープを取って彼女の方に、ぎこちないやり方で優しく掛けてやったのだったが、それはあたかも彼が長い年月の後に、社交界に連れていかれる独りの女性に対する男性の気配りを一つずつ思い出そうとしているかのようなのであった。

四輪馬車の中でポリーヌは、ポンメルル氏の横に坐り、両足には毛布を掛け、マントで覆われていたが、そのサティンの裏地は裸の肩には心地よかった。

馬車のカンテラが馬の尻と御者の黒い背中光を投げかけていた。街灯は車道と、良くは舗装されていない四つ角を弱々しく照らしていて、深い闇の地帯に標識を与えていた。自分の白の手袋をゆつくりと手にはめたが、それは暗闇の中で明るい点となっていた。ポンメルル氏は言った。

「お前の従姉妹達がやって来ているし、お前が多くの者の真っ只中でどうしたらいいかが判らなくなってしまうようなことが無ければと思っているんだが……。」

彼はポーリーヌを勇気づけ、家族のなかにいるのだという印象を与えることを考えているが、自分ではぎこちなく感じるのである。

「お前は大いに踊れるだろう……そして十分に楽しむんだよ……。」

「私には判りません……。私は誰も知らないんですもの……。私は特に見つめることになると思いますわ……。」

「直ぐに判ると思うが、お前は自分の身内の中にいるんだ。お前は従姉妹や友達と一緒にいるんだよ。それで帰りたくなったら私に合図しなさい……。」

彼等は庭の開けられた鉄柵とイルミネーションに照らされた通路を認めた。階段の前で使用人達の視線を受けながら馬車から下りて、大きな玄関のホールを横切っていたが、そこは、綴れ織りの壁掛けや堂々とした家具や華やかな壁灯等で活気づけられていたのである。

婦人の更衣室の髪結い台の前でポーリーヌは友人や親族達の少し高揚した顔々を目にしたのだった。彼等は両方のこめかみに、非常に壊れやすく、大切でもあるカールした髪を整え、鏡の中で初めは厳しい視線を投げかけていたが、最後の手入れで和らいだのだった。その時彼女たちはベルトや髪に、もうぐったりしてしまっている花をさし、腕に高く手袋をはめ、ネックレスや装身具、そして七宝とカメオで飾られた腕輪等を調整した。そして腕を膨らませるのだった。

こんなに着飾ったり、花の飾りを付けたたり、生き生きとした明るさの中で奇妙に肌をさらしたりして、

取り澄ましたりバランスが取れたりしたその歩き方や取り乱したり誇らしげであったりするその様子で彼女たちは非常に新しく思えたので、ポーリーヌはこれが本当に自分の家族の雰囲気なのかと疑わしく思うほどであった。自分の裸の手首や、自分の肩の形を見せたがらなかった女達が突然神聖なる性格を失って、姿を現したのであった。そしてポーリーヌは一夜にして何かしら解放された、そして少しうっとりさせるようなものを感じ取ったが、それは既にこの光のなかで震えていたものなのだった。

自分のくすんだイメージを映し出す古風な鏡の前で、彼女は白のストライプのバラの服を着て、不安そうに重い気持ちで自分の姿を見たのであり、深刻で少し緊張した自分の風采を、そして自分が肩飾りの下に隠されたごく些細な傷痕のことを不安に思うのであった。彼女はそれからブラウスがすっかり両肩に合っているのを確信して、自分の伯父のところに戻り、カットされたクリスタルの大きなシャンデリアで照らされた大広間に入っていたが、それは電光で輝いており、小都会の弱い照明に慣れていた者達の目には驚きだった。まだ軽くて爽やかな雰囲気の中では、香料の香り、ミモザや石竹、束になった白いライラックの芳香が感じられた。アルトゥール・ボンメル夫人は真紅のビロードの服を着て、髪には黒いダチョウの三つの羽で出来た羽飾りを差し、首にはダイヤモンドの首飾りをして入り口の所に立っていた。トーマ・ボンメルルの娘のマルセルとアナは白いチュールをまとい、デコルテのドレスの回りにポンポン・バラの花輪を付け、体にはバラ色の絹のリボンを付けて、彼女たちが紹介した男の踊り手から、大広間の回りに坐っていた若い娘達や母親たちの方へ歩いていった。礼服の男たち、そして制服の士官達は入り口の側に集まっていた。そしてその姿が見えないオーケストラの音が聞こえたのであった。

もう踊ってはいなかった女達、そして第二帝政の時代には非常に慎み深かった若い娘たち、巻き毛を肩の上にして、頭の回りには編んだ髪を巻き、首には金のロケットを掛けていた彼女たちは優しいリズムの小刻みに踊るドイツ風のワルツしか知らなかったが、彼女たちは頭を少し下げて何の身振りも手振りも無しに踊ったのであり、乱雑であるだけだった新しい踊り方には眉をひそめるのだった。

最も物憂いアリアに合わせて、ポリーヌは、あらゆる方向に、迅速で大きな步調で滑らせたり、拍子をハッキリ取ってくるくと回っていた。彼女は大広間の一方の端から他方の端へと、二人のコースの熱のない興奮と共に連れ回されたのだった。そしてあまりに生き生きとしていたのもが言えない程であつた。テンポが速くて激しいアメリカのカドリールはもつれた踊り手達を右往左往させたのである。それから古めかしい間奏曲のように始まったのは、ランシエのカドリールであつたが、それは無言の体裁を持ち、尋ねあいと、非常に難しくて臆病にさせる大がかりな挨拶なのである。

最初のダンスで息切れしていたポリーヌは立ち止まって、従姉妹のマルセルが暖炉の側に立つているのに気が付いたが、彼女は自分の回り全体に垂れ下がっていた白い衣装に身を包んでいた。生き生きとはしていない目をして、頬は非常に赤らみ、髪はちじれたブロンドであり、率直な表情をした若いイギリス人が微笑んで彼女に話しかけていた。マルセルは自分がその香りをかいでいる振りをしている花を眺めながら頭を傾けて気を取り直し、突然非常に元気づいたのだった。一方の手で時折は自分を隠していた大きな扇子をゆつくりと動かしていたのだった。それから夢想から呼び覚まされたかのようにぎくしゃくした動きでその扇子を閉じて、少し両腕を挙げて、又踊りを始めるために立ち上がり、ワルツに引かれていくかのように、大勢のなかに入ってしまった。

ポーリーヌにとってこれら全てのしぐさは新しいものだった。彼女にとっては生まれて初めてマルセルの生き方を見にやつて来て、一つの秘密をかいま見たように思われたのである。彼女はこのイメージを忘れるためかのように、大広間を眺め、前の舞踏会の踊り手や、いつもの仲間、結婚した友達と再会した自分の友人たちの寛ぎに気が付いた。若い女性たちの宝石を身に付けて一層エレガントに、そして一層大胆になったこれらの人々は新たな自信で心が輝いているように思えたのだった。また別の者たちはおそらく失望したり、困難な役割に萎縮したり、最近のお産で疲れてしまっていて、最早征服するべきものを持っておらず、もう色褪せて惨めなものになっているように思えたのだ。

食堂の横手の二つの入り口が開かれた時、自分の座席や隣席の人からやつと解放された母親たちは立食用のテーブルの方へ進んでいき、一瞬若い人達と入り交じった。ポーリーヌは男たちの集まりの真ん中の、彼女にとっては風変わりに見える女達に気がついた。パリにアパルトマンを、そしてバルバザックに大邸宅を持っていて、お歴々の名前を口にしたシャルル・デュペロン夫人、いつも飾り気無い身繕いをしていたが、レースとダイヤと冷たい無関心と淫らな会話とで有名だったデュブラック夫人、南仏の厳しい新教徒の娘で、厚化粧で香水をふんぷんとさせ、しばしば大声で笑ったモニス夫人。この騒々しいグループは男たちを惹きつけ、あらゆる微笑を誘うのだった。

ポーリーヌは何となく堪らない気持ちになつて踊りの方に戻った。彼女は息切れしたり穏やかであったりする胸の上で固い胸当てに押しつけられたり、ほとんど腕の先まで、しっかりとした手や柔らかな手で支えられたりした。彼女は人が息をする音や、親しみのある声や他の見知らぬ人の声等を聞いた。彼女はサテンの靴やエナメルの舞踏靴が滑っていくのを、そしてモスリンや服のレースが、士官達の赤や

青のズボンが旋回するのを、そして黒い服の裾が風にはためくのを見た。又彼女は折悪しくタキシードを着た従兄弟の跳躍から田舎者の危うい足踏みに移ったりするが、痩せた軽騎兵と一緒にいくつかのグループに紛れ込みながら逃げ出すことになる。彼女は無言で少し醜いイギリス人達にしっかりと支えられ、ほとんど触れるほどになった。それからその広間を通じて、生彩に乏しいスカンジナビア人によって連れ回されたのだった。フアランドールでは両手を輪になるように結んで彼女はいくつかの広間や玄関を通って、立食テーブルの回りや冬の庭を、そして階段を引き回されたのだったが、その階段では一方の人の長い列が上りになっており、他方では別の列は激しい勢いで下っていった。

その動きと照明と芳香と音楽に依って疲れ、軽く酔わされてポーリーヌはいくつかの広間を歩き回る為に一人の踊り手の手を取った。青い絹の布が張られ、バラ色の笠で覆われたランプで優しく照らされたボンメレル夫人の閨房は影と沈黙の隠れ場所を形成していたが、そこでポーリーヌは軽騎兵の士官の側のソファアに坐っていたギッタ・ソヴエイトルに気が付いた。デュペロンの共同経営者と結婚して彼女はランスからやって来たのであったが、彼女がバルバザックに来たこと、その自由な振る舞い、その身繕い、落ち着かなくて、人をも落ち着かせない挙動は何人かの人達の心を動揺させていたのだ。しかしそれほどの魅力は最も厳しい人々さえも魅了したのだった。彼女はこの宵は黒いレースの服を、そして首の回りには五列の真珠でつながった首飾りを、そしてベルトには赤いバラを身につけていた。感嘆したポーリーヌは話しかけようとして近づいたが、突然ある種の気詰まりが彼女を引き止めた。ギッタも又その宵はいつもと違っていた。

彼女は寒気がしたように両肩を高くして、白てんの毛皮のストールで体を覆い、頭をポーリーヌの方

へ向けたのだった。彼女は助けを求めるかの様にポーリーヌを呼んで、一言二言意味の判らない言葉を発してから突然立ち上がって、少なからず強いられた様な微笑みを唇に浮かべて、たった一人で舞踏会の方へと戻っていった。

ポーリーヌは自分の踊り相手の手を取って、ホールの入り口の方へ進んでいった。若い娘や青年たちが、彫刻された柏の欄干がある大きな階段のステップの所に坐っていた。玄関では人が散歩していた。疲労した老人たちは今なおアルコールの専売について話し合っていたし、或いは低い声で、同じ意見であると確信して、ドレーフュース事件について二言三言言葉を交わしていた。更衣室の隣の小部屋ではコティヨン踊りの小道具がうずたかく積まれていた。つまり王冠にしたりベルトにしたりする花束などであり、結び目があったり、横断幕になったりしているリボンであり、そして綿布に覆われた手袋の箱などである。それに古い衣装の素材が認められた絹の袋、折れ曲がる長い棒につり下げられた支那風のカンテラ、それに胴着に付けられる白い羽の天使の翼などがそれである。

あるスエーデン人が踊りを申し込みに現れて、ポーリーヌをほとんど空を舞う様なダンスで引つ張っていったが、それはリズムの付いたある種の綱渡りのようなものだ。彼は誰かが彼女に軽く触れることも無いように回避して、彼女をゆつくりとした滑走で導いていき、突然情熱的な急旋回に於けるかのように持ち上げ、それから弱められた動きで物憂い散歩道に連れていき、彼女を大がかりな微笑みの挨拶と共に彼女の席に下ろしたのである。もつれ合ったカップルの間で、ポーリーヌは黒のレースの服とバラと制服の赤い染みを見たのである。低い声が震えながら次のように言った。「あなたは私を拒否することはできません。」彼女はそれを聞くのが恐ろしくなって本能的に目で従姉妹を探したのである。

『地獄のオルフェウス』のアリアに乗ってカドリールが踊られていた時にダーリアが現れた。ポーリーヌは直ぐに彼に気付いた。彼は大柄で、顔は髭が無く、髪はグレーになっていたが、ほんのりと体に合った礼服はほっそりした体つきを特長付けていた。襟やボタン・ホールに差した青いカーネーション、フアイエ地のジレ等を身に付けているが、彼の身繕いのどんな細かさが彼を全ての者達の中で際立たせているのかは誰にも判らなかつた。彼は退屈で不満そうな顔をして広間を眺めた。突然母親達の列が電流で目を覚まされたようになった。扇子が音を立て、顔は活気づき、又会話が弾んできた。何人かの女達は低い声で話しながら姿を消そうとしていた。

ポーリーヌはパリの劇場で栈敷のほの暗さの中で、羽飾りの後ろに認めた男たちのことを思い出した。しかし彼等はその芝居に参加していたが、その芝居が終わるといなくなつたのであつた。彼女は彼等の実在を確信することが出来ないのだった。その芝居があまりにくつきりと浮き上がつていたので、回りを囲んでいる聴衆はぱっとしない集団に変貌してゐたのだつた。

ダーリアは前に進んでいき、内気なままに出された手と握手し、躊躇いがちの指に接吻した。若い娘達のグループの側で彼は一瞬立ち止まつた。そして直ぐに母親達が立ち上がるのが見られたが、その顔は心配そうにして、広間のなかを横切つていった。それから彼は立食テーブルの方へ進んで行つた。そしてモニス夫人の笑い声が聞こえてきた。

男たちは意味ありげな風を装つて彼を軽蔑と少なからず羨望の念を持つて眺めながら微笑してゐたのだつた。或る者は彼が小間物店の小店員であつたのを知つていたと主張したがそれは信じられることのように思えなかつた。彼が修道院から連れ出された若い乙女と小説風の結婚をしたということも忘れ

られてしまっていた。ダーリア夫人はバルバザックに住んでいたが、この小さな町は極めて閉じ籠もつた、目に見えない人物たちを隠していたので、その痕跡は見失われたのであった。コニヤックの取引人としてダーリアは失敗したのであり、友人たちも破産させたのであった。そして彼はシャンパンの商人として旅行したのであったし、パリに落ち着いたのであるが、彼はそこで自分を画家と称していたが、非常に長いオーバーと非常に高い取り付け襟と、極めて金持ちの風采としかめ面と共にバルバザックに数日間戻ってきたのであった。そして男たちを苛立たせるこの軽蔑の仏頂面、この無感動の顔が極めて複雑な人生の倦怠と、いつも女を追求める疲労を特に現していたのであった。各々の者は彼の卑劣さを非難していたし、アルトゥール・ポンメル夫人が「ジャン・マリー又は詐欺師」の役を演じるのに彼を呼んだ時、彼はそれを非常に上手くこなしたので、回りの観客は皆泣きそうになりながら喝采したのだった。

全ての者はその夜彼を見つけて、彼の最後の恋の征服を夢見ていたが、バルヌリー・牧師夫人はどうなったのだろうかということが思われたのだった。

その牧師はアルトゥール・ポンメル夫人から招待されたほとんど全ての者には知られていなかった。カトリックのその小さな町では彼の存在はや々と気付かれるくらいであったのだ。長らく日曜日には年老いた牧師のクローヴが泥だらけの二輪馬車の奥に坐って瘦せ衰えた馬を駆り立てて通りすぎていくのが見られたのである。一人の若い牧師がその馬車のなかで交代していたのが知られることになった。しかし人の視線を逃れていた全ての人達の中で、最も隠れて、最も知られていなかったのは牧師夫人であったのである。それに人々はバルヌリー夫人が美しく、活発であったのを知ってびくびくしたのだった。彼

女はアルトゥール・ボンメルル夫人の家のパーティーに出かけて行ったし、町の通りを歩くときに、器用な手つきでスカートを持ち上げることを知っていたし、服の襷とペチコートとのタフタとの間にピタリと足に合った黒の靴下の先を覗かせるようにしたのだった。

バルヌリー牧師の妻は家を出ており、彼女の夫は二年來一人で生活していた。そしてその原因はダーリアなのだと言っていた。しかしこのヴェールに覆われたが、おそらく想像に基づくこのスキヤンダルについてのその噂は、多かれ少なかれダーリアに、或いは新教徒に対して敵意を持っていた人々の気質によって様々に異なっていた。バルヌリー牧師の妻は自殺したのだから、彼女はパリでダーリアと一緒に同棲していたのだとか、或いはやがて帰ってくるので何事も無かったのだという様なことが信じられたのだった。

オーケストラを遮断していた衝立の前でグループになった若い娘達が「春が来た、私達は花を手にして……」を歌うのである。そして皆が拍手喝采した。又ダンスが始まった。ポーリーヌは入り口の扉のところに寄り掛かって立っていたが、丁度その時自分の直ぐそばで聞いたことのない重々しい声が聞こえたのだった。

「あなたはボンメルルさんの姪ごさんですか。」

彼女は振り向いてダーリアであることを認めた。

「どうしてそれがお判りになるのですか。」

「あなたはあの人と踊っておられましたね。そしてあなたが伯父さんと言っておられるのを聞いたのです。」

「伯父さんを知っておられるのですか。」

「よく知っています。でもあなたはバルバザックの出身ではありませんね。」

「私は伯父の家に住んでいるのです。」

「今までお目に掛かることはありませんでしたね……。」

「これが私にとつては最初の舞踏会でしたの。」

「ああ、……あなたの最初の舞踏会ですか、そうではないかと考えるべきでしたね。あなたには何か新鮮なものがありますね……、その様な喜びが。」

「私は何よりも自分の不器用が怖いんですわ。……」

彼は深く考えているように思えたし、彼のこわばった特長のある沈んだ顔は、優しくて熱っぽく子供っぽい表情で輝いたのであった。

「その不器用さ、これから始まることになる全てのものに優柔不断であること……それは魅力を感じさせるのです……それであなたは誰とでも踊られるのですか。」

「私は踊るのが好きなんです。」

「でもあなたはえり好みをされますね……それには誰も気付きませんが……。私はあなたが向こうであなたを引き回そうとしている不器用な男の腕の中にいるのを見ましたよ。どうして彼等は図々しくもそんな事をするんでしょうね……でもあなたがあなたの伯父さんとワルツを踊られていた時には、一寸妬ましい気持ちになりましたよ。」

「妬ましいですって。」

「ええ、そうです。妬ましいんです。彼はもう若くはありません。あなたと踊っていたもう一人の男もそうです。あなたの伯父も昔のようにあなたを自分の体にびったりとくっつけて支えていましたね……。私は踊ることを止めたのをこれほど後悔したことはありませんでした……。私はあなたを不器用者からもぎ取ってしまいましたかっただんですよ。」

「私はあなたと踊ることは出来なかつたでしょう。あなたがやって来た時には、全ての約束は既にしてしまっていたのですから。」

ポーリーヌはこの言葉を口にしたことを悔やんだ。しかし彼の方は驚いてる様には見えなかつた。

「いいえ、あなたは私と踊ることになりますよ。」と彼は確信のあるほとんど激しい調子で言った。「それにあなたはきつとこの曲を私に下さるでしょう……。代わりに誰をあなたから取り上げるのですか。」
「私はこの曲で誰との約束も取り消すつもりはありません……。これはスコットランド舞曲ですからね。私はスコットランド舞曲は好きではありません。それで私は見ているでしょう……。でも今度は踊りましょう。」

「まだ踊ってはいけませんよ。」

彼女はその場所に縛りつけられたかのように自覚し、目に見えるようになった自分の呼吸を抑えようとしながら、身動きもしないままでいた。彼女はこの鼓動にダーリアの目が固定されているのを感じていた。そして彼女は扇子を胸に押つけたが、自分の手の震えを延長しながらも心は波立っていたのだった。彼女の内ではその命の動きが並外れたものになっていたのだ。息詰まらせるような沈黙が音楽を、床の上を滑るステップを、そして回りの会話の雑音を支配していたのである。彼女が見てはいなかった一

つの視線が彼女の上で彼女の視線以外のものを捜していた。遂に彼女が言った。

「伯父様はとてもいい方です。私は大好きなんです。世間では厳しい人だと思われていますが……。本当は伯父様ほど親切で優しい人はありません……。」

「本当ですね、……私はしばらくお会いすることがありませんでしたが、以前は彼はピューリタンではありませんでした。私はよくロンドンで彼に会ったのです……彼の若いときに。彼は陽気でした……。彼は人生を楽しんでくれました……。結局彼は良い生活というものを味わうことを知っておられると言えるでしょう。」

「良い生活……そうですね、伯父様は良い生活をしてられますわ。」

「それは全くそうではありません。ところで私はあなたを永い間立たせていますね……。坐りたくはありませんか、シャンパンでも飲みに行きましょう。」

「いいえ、結構ですわ。」

「それでは少し静かな所に行きましょう。そうすれば休めるでしょう……。一晩中を通しては若いお嬢さんには無理ですからね。」

「いいえ、私は静かな場所へは行きたくありません……。私は疲れてはおりませんもの……。私はこの光と騒がしさが好きなんです。」

「あちらの……青い広間はどうですか……。」

「いいえ、行きたくありません。」

「言うことを聞かないといけませんよ……。あなたは私の言うことを拒絶してはなりません。」

彼女は霧の中にいるように方向が判らなくなつて、ホールを通つて逃げていった。そして自分の内面の動揺が、自分の衣服や髪やしぐさの混乱で、誰の目にもハッキリ現れているように思つたのだつた。

大きな楕円形の鏡が照らしだされていた婦人更衣室に彼女は一つの避難場所を見いだした。使用人の女達は隣の部屋で居眠りしていた。ポーリーヌは手袋を外して髪結い台の前に腰を下ろし、自分の姿を見ることはしなかった。彼女は両肘を突いたまま、何も考えず、締めつけられた呼吸の息苦しさを感じることもなく、自分の両目を自分の冷たい手の中に隠したのであつた。女たちが入ってきたが、皆化粧直しに我を忘れて、鏡の中の自分の姿と、白粉の下に隠れた疲労の徴以外のものは見ることはなかったのだ。ポーリーヌは自分がまた独りぼちになつた時、自分を見つめたのだつた。そして全てがきちんと整っているように思えた。彼女は自分の動揺を閉じ込めていたのである。おそらくそんなものは存在しなかったのだろう。そして彼女がサロンに戻ってきた時、忘れられていた男の踊り手がダンスを申し込んできた。

「お嬢さん、私はあなたと約束がある訳ではありませんが……」とある海軍士官が言つた。「しかしあなたの約束は混乱している様ですね。どうか私にそれを利用してくれませんか……」

彼は用心深く彼女を引き寄せた、そしてクルージングや軍艦の船上舞踏会について話しながら静かに滑つていった。ポーリーヌは踊りながら、もう前のように同じ無思慮をしでかすことはなかった。彼女は自分を取り囲んでいる腕の温もりと形を、そして相手の手の接触を感じていたが、その両手を無視するべきか、押し返すべきかは判らなかつた。そして絶えず彼女は自分の両肩にチュールの肩掛けを引き寄せていたのだつた。

舞踏会が終わってからポーリーヌはその事を夢に見た。時折彼女は未だ自分が引き回されて回っているように感じていた。或いは彼女は乱された目や、緩められてから再びそつと締めつけられたりすると、うきうきさせるようなゆるやかなギャロップ等を見たのだった。それ以外は舞踏のアリアが、色々な色彩が、そしてやつと捉えられる様な言葉や笑い声が思い出されるのだった。

今彼女は町中で、少しばかり色の褪せた外套を着込んで、元氣のない顔をしている平凡な人々に出くわすが、彼らは一晩の幻影を思い起こさせるのである。それは小さくなってほとんど消されてしまっているもので、人生がおそらくその背後でその本当の尺度でもたらしただ様なものである。彼女は彼らをその現実において厳密に位置づけることはできないのだ。彼らは変容させられたものとしてもそれ以上には知られてはいないのだ。彼女を腕で抱いた男たちは彼女に挨拶するが、彼女は彼らにはもう話しかけることはしないのである。控えめな娘たちはウールの胴着の下に新鮮な両肩を隠して、帽子とヴェールの下には花のような彩りを持つ泡立つような髪を隠していたのだった。

彼女は踊り手の相手や新しい友人たちに再会するが、彼らは彼女を自分たちのグループに迎えて草原の向こうへの散歩に連れていってくれる。そしてそこでは草の上で衣服を引きずっていたが、手袋は外していた。テニスをするときは、男たちは彼女をその相手として求め、ラケットの上に載せたボールを差し出すのである。客間では彼女に話しかけ、笑わせようとしたし、お菓子で彼女を試そうとするのである。ギッタは彼女を自分の綺麗でモダンな家に誘い入れたが、その壁は誰も敢えて見ようとはしな

い絵やデッサンで飾られていた。

ギッタは短期間だけ滞在する為にバルバザックに戻ってきたが、無関心の夫の側で引きこもった生活をしているのである。彼女の度を過ぎたお化粧は不在の人達に向けられているように思えるのである。ポーリーヌは、子供たちや犬が遊んでいた公園をぼんやりとして眺めていたギッタを彼女の閨房に見いだしたのだった。突然ギッタは言葉を遮り、ひらひらした服と共に立ち上がり、花と本で囲まれたグランド・ピアノでいくつかの和音を叩いてから、また彼らのお喋りに戻ってくるのだ。彼女は外国語の打ち明け話の様に謎の言葉を口にした。「判るでしょう……。誰も知らないわ……。誰もいつも思い違いをしているのね。」

一つの知られない世界が最近までは静かだった外観を通じて浮かび上がってくる。ポーリーヌはパーティーの熱っぽさの下で、何事も透けて見えさせる透明な群衆の内に、威圧的でありながら直ぐに消えてしまう圧力としての世界というものを感知したのであるが、そこには夢想する顔や、自分を見えないと思ひ込んでいる慣れない素振りが現れているのである。彼女が暖炉の側の若いイギリス人の横で、扇子の揺れが一人の照らしだされた人物を隠したり現したりしているのは従姉妹のマルセルではないのだろうか。男たちがあれほどまでに近づき、嬉しくもないのに笑っている奔放なこの女たちは何で遊んでいるのだろうか。そしてあれ程の金髪のギッタはそのはっきりしない動きでどの様な贈り物を拒否したのだろうか。

しかし何よりもマルセルは今ポーリーヌを驚かせているのである。ポーリーヌがイギリスから着いた時、マルセルは自分の第一の友人であった。マルセルは自分自身のことは多くを話さず、彼女の人生は

自分がその家族の内に現れたその日付から始まったかのように、彼女の過去の人生についてはその従姉妹に決して尋ねたりはしないのだった。

けれども彼女は非常に生き生きとした黒い小さな目と、容易に微笑を浮かべる細やかな特長とで、ポーリーヌには気に入っていたのだ。ある特別なものが彼女に威光を与えていたのである。つまり公然と男たちにはお洒落だったのである。この無邪気さ、恋の戯れにおける気楽さがある意識的に限定された精神に結び付けられていたのであり、その精神はどんな問題を起こすこともなく、イギリス人を包括するようなその家族と宗教と同胞に対する大きな尊敬の念で結びついていたのである。

舞踏会以来、マルセルはもう同じではなかった。しかしこのポーリーヌの意見は、この出来事の後に彼女の人人々を見る流儀が少し変化したことに由来していたのだった。ポーリーヌは彼女の内に、その目の内に一層の優しさを、そしてその仕種の内には一層の慎み深さを見出していた。彼女はあまり喜んで人の訪問を受けないのだった。そして彼女はポーリーヌにイギリスでの生活について控えめに尋ねたのだった。そして時にはもっと自由な態度をしたが、それで彼女がイギリスであると判断していた全てのことに對する生まれつきの好みが表示されるのである。それはテニスや細い麦わらのボート漕ぎ、固いカラーの半袖のシャツなどである。

コニヤックの町に住んでいた若いイギリス人のピーター・ディードは日曜日にはやって来た。教会の出口のところではマルセルに先導された散歩の団が組織された。彼女はポーリーヌの腕を取って活発にお喋りし、誰か退屈する者がいないかどうかに気を配りながら、一方から他方へと歩き回ったのであった。野原や森林は各々の人にそれぞれに異なった興味を目覚めさせたのであった。ある者は化石を捜し

ていたし、別の者は昆虫を観察していたり、花を摘んだりした。或いは何も見ないでのもんぱりとした会話を続けた者もいた。マルセルは道の端で、歩く速度を遅らせ、躊躇いがちに、目に見えない稲に引き止められたかのようにしていたが、間もなくそこにデイドが近付いてきた。彼等は一瞬身をかがめていたが、それから森の小道の中に見えなくなったのだった。単純で友達のようにほとんど子供のような風をして彼等はそれだけで十分だった一つの満足な気持ちに魅了され合っている様に見えたのだった。

その時ポーリーヌは秘密のものではない一人の女友達を望んでいたのだった。

六

ポーリーヌは屋根裏部屋を引き払って三階の大きな部屋に移った。彼女はその家に、そしてその片隅や、勾配が急で螺旋的になっている階段、更に石で舗装された広々とした台所等にも次第に慣れていたのだった。彼女は、冷たくて流行遅れであり、何世代もの人達がこの非個性的な装飾を改めることなく生活してきたこれらの大きな部屋に至るまでを愛する様になっていたのである。

人生が止まっているように思えたバルバザックの家では、そして子供のいない老人の家庭や、女達だけの家では、その中産階級の生活では何も変化は無かったのである。しかし新しい世代の人達はその装飾を工夫して認められることを望んでいたのだった。何人かの愛好家の指導を受けて、彼女は巨大な物置や使用人たちの部屋に古い絹で覆われた安楽椅子やその切れ端、フィリップ・ドルレアン公の時代の様式を持ったひじ掛け椅子、雌鹿の足の様な先の曲がった脚を持ったテーブル等を見つけたので

あった。緑青に覆われ、虫に食われ、田舎に追いやられた全てのものは、モダン・スタイルの漆を塗ったり、華奢であったりする家具の隣に、客室や各部屋に選ばれた場所を見出していたのである。黄色色のペンキが古いバラ色の壁紙を張られた壁を縁取っていた。分厚いカーペットが床を覆っており、ランプは青白い縞瑪瑙の柱となっており、その上には水晶ガラスの球を載せていた。そしてそこではレースの裾飾りで飾られた電灯の笠の下で、パゴダの形をしていて、油が減っているのが見られたのだったが、それが石油の増減を感じするのだ。

ポーリーヌは自分は友人たちとは異なっていると思っていたが、自分は流行には逆らわなかった。彼女にとっては自分にピッタリするものを屋根裏部屋から下ろして、喫煙室には手を触れないという条件で、自分の趣味に合わせて客間や別の部屋を作ることが許されたのである。

ポーリーヌは自分の部屋では、重々しくて、物思いに耽り、バラバラにされた一家の早すぎる経験によつて大人になった人間であった。その壊された家族の繋がりは今や一層感知され、更に穏やかなものとなっている。彼女は自分が非常に早くから、他の者達はおそらくずっと知ることがない様な意味の一杯に詰まったような悲しみを実感して来た一種の特権階級の様に考えていたのだ。彼女は熱心な女子学生のようにイギリスの小説を読んだり、ドイツ語を学んだりした。やがて彼女はパリに行つて働きながら自分の生活をしていくだろう。そして決して結婚しないだろう。

彼女は自分の伯父の習慣に、そして彼の宗教的な感情に、それからその家族の慣習に穏やかに順応していた。晚餐の前には、ポンメルル氏は聖書の中の数行を大きな声で朗読し、続いてお祈りをした。その時にポーリーヌは体を曲げて、椅子の前にひざまずいていたが、心はうつろであり、この飛躍のない

しぐさに苛立たせられ、その後の食事の時のしぐさと同様に予め判っているものだった。彼女はポンメル氏の誠実さや、この規則正しい謙遜からやって来ていた心の安らかさというものを知らなかったのである。

前の駈者と交代したジュールはもうテーブルでは給仕しない。そして七時になって、「お嬢様、食事の準備が出来ました。」と言いに来たのは黒い服を着たアネットであつたが、彼女は上半身をピツタリと締めつけ、ボタンで留めた胴着で、モスリンの布帽子を被り、手には丸く巻かれたナプキンを持っていた。彼女はポンメル氏とポーリーヌの前を食堂まで歩いていった。それから広い部屋の微光の中に姿を消したが、そこで彼女はワゴンの側で身動きせず、注意したままでいるのだった。テーブルだけはどつしりして複雑な形のブロンズのシャンデリアに照らされていたが、その天蓋は、食卓布や、コバルトブルーの花の模様の陶器皿、そして非常にぴかぴか光っていて、少し使い古された銀食器の上に光を投げかけていた。ポンメル氏もポーリーヌも家事については命令することは全く無かつた。給仕は変わることなく機械的に行われていたが、その料理人は季節の変化に応じていたのである。三十年來彼女は、保存食を作るときになつたら、有能な助手を採用することが出来たのである。彼女は葡萄収穫の時期の終わりには葡萄のジャムを準備することを、そして家禽の肉のゼリーをジャム用の壺に集めることも忘れなかつた。そして最初の寒さがやって来ると、ペリゴールの農夫の物売りの声を耳にしたが、彼等は灰のなかで焼いて食べる黒いトリュッフで一杯になつた長くて重いリュックを肩の上に背負っているのだった。

言葉もなくこの家を支配し、各々の者には長い間の習慣が生み出すあの自由の幻影を与えているこの

目に見えない力で無意識のうちに支配されて、アネットは彫刻された食器棚の影に栗色の塗料や革製の椅子等が押し込められていた食堂の奥のほの暗い領域から前に出てきて、明るさの中に姿を現し、ボンメル氏の前に料理された牛肉を置いたのだったが、その肉は柔らかくバラ色で、中は赤くなっており、表面は褐色でざらざらしていた。

ボンメル氏は焼かれた肉を切るのが好きだった。それは彼が上手に出来る唯一のことであつた。彼は軽やかに自分の道具を使つて、何の苦もなく決まつた大きさに切り取つて皿の回りに並べたが、それを使用人のことを思いながらしたのである。彼の確かな技術、そして大きな金ボタンできらきら光るカフスから出た、十分に手入れされた優しい手、それにこの気配りに与えられたある種の気取りと言つたものが、その操作から彼のほとんど全ての物理的な側面を取り去つていたのでつた。

食事の後彼は自分のひじ掛け椅子に戻り、自分の前に「ル・タン」紙を、白い肉付きのよい手で持つて広げたのだつた。彼は頭を椅子の背もたれに載せて、顔は寛ぎ、顔の皺はやつと判つて影もないままになつていたが、何がニュースになつてゐるのかを穏やかな気持ちで讀んだのだつた。

きちんとされていて、ほとんど空っぽだつたマホガニーのテーブルの側で、ポリーヌ又は一冊の本の上に屈み込んでいた。彼女は自分が後になつて、家族とは離れたところで……作り上げようとしてゐる生活のことを夢見ているのである。自由で誠実な生活、しかしそれは正さと純粹さと自己防衛を持つてゐるだろう……。人は自分の思うことを決して口にすることはできない……。彼女が最も容易に話すことができるのはジャン・バルヌリーに対してのことであらう……。彼は牧師であるが、彼の声、彼の精神は一人の牧師のものではない……。彼がこの家で食事をする時、この家の雰囲気はあまり宗教的では

ない……、その夜会は一層軽やかになるのである……。確かに一人の人間の価値とその魅力は優れたものであると噂されている厳密な特質に基づいているのではなく、極めて秘密のもので、全体的には定義できないような不確かな神髄に基づいているのである。突然ポーリーヌは「ジャン・バルヌリーはどんな顔つきだったかしら。」と思うのである。彼は時々ここにやって来る。しかし彼が行ってしまうと彼女はもう彼の特長を正確には思い浮かべることが出来ないのだ。彼女はランプの下で自分の側で片足を揺り動かしていた一人の大柄の男を思い出している。しかしその姿は闇の中にあるのだ。彼が説教する時には、彼女は彼の方は決して見ないのである。彼女はそれに耳を傾けないでぼんやりして、瞑想に耽っているような風をして、伏目がちに聞いていたのだった。そして今彼女はその顔を思い出した。

彼女がジャンを初めて見たのはクリスマスMASの為の歌の稽古の時のことだった。彼女は教会の演壇に上ったが、そこでは若い娘たちがハルモニウムの前に坐っていた牧師の回りを取り囲んでいた。ランプが彼の不動の顔を照らしだしていた。両眼の高さのところの光が彼の目ざしの固さを現していた。彼は頭をポーリーヌの方へ向け、両手は鍵盤の上にあつた。彼女は彼が「あれがポンメレルの姪だな。」と考えていることが判った。それから彼は次のように言った。「皆さんがよく知っている子供の讚美歌『森の王である美しき樅の樹』から始めましょう。その時ベルタン嬢は酷く調子外れの声を出し、ポーリーヌの嘲笑的な目ざしはジャン・バルヌリーの微笑む目に遭遇したのだった。

ポーリーヌが自分の方に向けられたジャンの意地悪な目ざしを思い出した時にハッキリと彼の顔を見たのだったが、それが二人の友情の始まりとなったのであった。彼女がそれを再び正確に見出したのはその夜の教会で、ハルモニウムの前に置かれていたランプの前でのことに過ぎなかったのである。

貧しい者達の為にお裁縫の集いが、トーマ・ボンメルルの家で開かれた。しばしば耳にされたのは次のような言葉だった。「私は裸でした。それなのにあなたは私に何も着せてくれないのですね。」救いの手が差し伸べられなければならないと感じられていたのである。しかしバルバザックでは窮迫した人は少ししかいなかった。ともあれ痛ましい主張をしている数人の老婦人達、子だくさんの二、三の家族、そして何も求めてはいない身体障害者が一人見出されることになった。毎週トーマ・ボンメルル夫人の家のサロンは多数が訪れてごったがえし、テーブルは撤去され、絨毯は取り除かれ、脚台の上に何枚かの板が立てられ、仕事場が作られるのである。そして布地が山のように積み上げられる。褐色の針が通りにくい布地、丈夫で染料の臭いが強烈なヴィシー産の木綿布、遠からず何も拭えなくなると思われる固い地の雑巾等である。ご婦人方や若い娘たちは無償の仕事に熱中したのだったが、指は真つ黒になって痛んでいたが、心を鎮めてくれる慈善の気持ちに伴っていたのだった。

朝になると、地味な部屋着のトーマ・ボンメルル夫人は音も立てずに、果物貯蔵庫から下着置き場へ回って行った。夫は事務所に行ったし、息子達はアングレームの連隊やリセに行った。マルセルは家の中の細かな仕事の分担を果たし、自分の行動が役に立っているように見せかけるように専念するのである。彼女は書籍や小物の塵を払い、ピアノの上に置かれていたノートを書棚にしまい、花束を整え、喫煙室の窓の側に坐って、下着を繕っていたのだった。

妹のアンナは色褪せた手袋で両手を保護して、ランプを準備し、ていねいにランプの灯心を拭い、蠟

燭の受け皿の上の溜まった蠟を削り取り、夕方に皆が自分の部屋に上がっていく時に玄關のテーブルの上でそれを見つけたことが出来るようにしたのであった。それから彼女は大きな籠を腕に抱えて喫煙室のマルセルと一緒に上がったが、その籠には彼女が忍耐強く繕った家族の靴下や半靴下がうずたかく積み上げられていた。どんな事にも動じないピアノの先生、そして歌や絵の先生達が午後にはやって来る。夕方には若い娘達には読書することが許されているのである。

彼女たちが今後住むことになる場所も、これから持つことになる名前も、彼女たちの人生が受け入れる方向も判らず、未来については不確かでありながら、その若い娘たちは何の懸念も持たず、その仮の状態の内に生きているのである。彼女たちは自分の祖母たちが人に囲まれ、尊敬されながら、ほとんど動くこと無く、何年ものあいだレースで飾られた黒い絹の服を着て、窓の側の肘掛け椅子に坐って、余りに大き過ぎる指環をした痩せ細った指の内に一冊の本か細工物を持っているのを見てきたのだ。彼女たちは自分の母親たちが行動的でありながらも穏やかに家事を切り盛りしているのを見ていたのである。読むことが許されている小説は彼女たちに一つの未来を予告しているが、そこでは彼女たちは漠然とした男たちに愛されることになるが、その男たちは時にはよく知られてはいるが、やっと輪郭を描くことが出来るようであり、絶えず変化するような姿をしているのである。

特に様々な性格のつながりから作られた現実というものは、そこでは感情だけしか問題にはならないような書物ほど彼女たちを引き止めることはないのである。彼女たちは自分たちを物憂さで一杯にくれるフロマンタンやロティを読むのである。古典的な韻文、

……ある刹那以来、しかし私の全生涯を通じて

私は愛する、私は誰を愛すると言うべきだろうか、私はジュニーを熱愛する、

は「あなたの両眼を見つめて、跪いて我は我が生涯を過ごさん。」というロマンスの反響に混じり合っている。

このようにして彼女たちは一生涯愛されるのである。そして家庭の仕事、日々の出来事、集団の遊び等が、希望もなく不安もなく、この待機の日々から優しく照らしだされるのだ。

∴

ポーリーヌは火曜日に客を迎える。一年に一度はこの火曜日はほとんど荘厳な重要性を帯びるのである。ボンメル氏がロンドンから持ちかえったお茶の見本を味わう為に親戚の者達が招かれていたのである。ほんの軽い食事がブリオシュや塩味のビスケットと一緒に食堂のテーブルの上に準備されるのである。一人一人の客は真面目な顔をしていくつかのお茶のカップの前に坐っている。最もデリケートなお茶から始められるが、それは細やかな漆の香りを持つている支那のお茶、ほとんど無色の台湾のそれであり、花の風味を持つオレンジ・ペコーで少しオレンジの香りがする。次はロシアのお茶で非常に繊細であり、どんな比較も出来ないものである。お終いは、大きな葉のインドのお茶で、それはイギリス

が全世界に広めようとしているもので、その強い味と深い色合いが俗人にも受けているものである。それらはゆつくりと味あわれ、それも休みながらそうされる。鼻の穴を震わせながら、芳香のある蒸気が吸い込まれるのだ。軽くて、霊的であるようなものとしての陶醉は、躊躇いがちの意見が増える時、人々の会話を活気づけるのである。ポンメル氏は自分の選択を押しつけることなく、その議論に加わるのである。そして一年中家族全員と近親者にとつて同じものに思えた支那のお茶が最善であるということ、で皆の意見が一致するのである。

しかし通常は、火曜日の接待では、ポーリーヌは小型のパイとジャム入りのクレープを指示することだけにしていた。彼女は広間を木の葉で飾りつけ、隅っこにティー・テーブルを準備して、四時頃に自分の客や女の友人を待っていたのである。

何時ももの静かなアンナはその重々しくて美しい声で、少ししか話さなかったが、一人一人の好みを知っていたので、その支度を援けたのだった。

「あら、ポーリーヌ、レモンの一切れは？　それで微妙な感じに気を付けなければならないのよ。焼いたパン、赤いガレット、杏のジャム、それに焦げ茶色のスティック・シュガー迄、何というピツタリした取り合わせですこと。」

まだ幼い少女として扱われていたエリザベートは仲間たちの外で、自分の友達の世界に感嘆していたのだ。彼女は賞讃の気持ちでポーリーヌを眺めていたのである。

テレーズ・モニスは、パリ旅行から帰ってきていた。彼女は大きく波打ったウェーブの髪をしており、メデイチ家風の襟の新しい胴着を身に付け、大きな水玉模様のヴェールを被り、いかにも寛いだ態度で、見

た目に様々に変化するタフタの裾飾りを緑のスカートの下から覗かせていたのだった。

「パリではうつとりさせるような柔らかいビロードで作られた夜会服と消毒された花で飾った縁無し帽が流行しているのよ。」

「あなたはお芝居を見にいったの。」

「オペラ座とコメディ・フランセーズ座に行ったのよ。それにオラトワール教会ではロバーティーさんの素晴らしいお説教を聞いたの。」

「ボーマルシェ街のワグナーさんの教会に行ってきたの？」

「いいえ、行かなかったわ、人がたくさん来るので、とても早く行かなければならないのよ。それに私の両親はキリストの神聖さを信じない自由主義者を好かないのよ……。それは行き過ぎにさせてしまうわ。」

「私達は行き過ぎにならないように気を付けましょう。」とポーリーヌが言った。

「議論できないことを議論するのは止しましょう。」とマルセルが我慢できないような仕種で言った。というのは彼女は危険な話題を恐れていたからである……。「ちよつと音楽でも聞いたらどうかしら……。」

一台の馬車が家の前に止まった。

「立派な黒い馬とセシル伯母さんの二人馬車よ。」とアンナが窓の前で言った。「私、伯母さんがクロサックにいるのを知らなかったのよ……。」

「私はもしかしたら来ているんじゃないかと思ってたわ。マリーが別荘の窓が全部開いていたのを見

たのよ。」

「あの人がやって来るとは大事件ね。」

痩せて少し腰が曲がったヴェルヌイユ夫人が、銀の握りの付いた黒檀の杖に体を支えて入ってきた。白い目隠し布の上に被った紫色のビロードの夫人帽とファイユの結び目がキリツとした蒼白い顔を縁取りしていた。

「お前の部屋は暑くないんだね、ポーリーヌ、お前たちはまだ暖房を入れていないのかい。」

「そうです、伯母様、階段と廊下を暖めるのは陶器製のストーヴなんです。お茶をお飲みになりませんか、伯母様。」

「いただきますよ、少しクリームを入れていただきます。それと小型のタルトだけを。私はそれが一番美味しいのを知っていますからね……。暖炉の側の肘掛け椅子に坐らせてくれますか。」

絨毯の上に跪いてポーリーヌは火箸で火を掻き起こし、薪を入れて、赤い小さな箒で大理石の炉の上に落ちた小枝と炭火を掻き集めた。ヴェルヌイユ夫人は淡いグレーの手袋をした手で、自分を炎から守ってくれる衝立を抑えていたが、それから慎重なやり方で、すもも色の繻子のスカートをたくし上げて、ハーフ・ブーツとひどく抑えられていた踝を露にしたのだった。

ポンメレル氏の母の妹である彼女はパリに住んでいたが、ヴェルヌイユ家に様々な利害を持つており、シャラントには別荘を持っていたが、そこでは多くの使用人達が絶えず彼女を待っていたのである。「ここでは何も変わってはいないんだね。大体は五十年前と同じように思えるわ。」

「フリッツ叔父様は、自分の両親はここで非常に幸福に暮らしてきたということ、そしてそれを引つ

繰り返してしまふ理由は全くないと言っておられました。」

「本当にそうですよ、私の姉は美しくて陽気な女性だったけど、決して外出しなかったのよ。あの人はずっとこの部屋で暮らしていたのよ……。冬になると綴れ織りの縞模様のマホガニーの肘掛け椅子に坐つて、新聞を読んだり、刺繍に励んだりして、決して苛立つことなく、絶えず火を掻き立てたりしながら、そこに陣取っていたのよ。」

「私達も同じですわ。」

「しかし午後になると、あの人は赤いメルトンのペチコート（あなた方のお嬢様用のものとは違うのよ）が十分暖まると、肩掛けを掛けて、窓の側に移動し、低い椅子に坐つて足は足温器か、大きな木製の足炬燵に載せていました。あの人の側のテーブルの上には自分の細工物と聖書が置かれていたのよ。」

「何て寂しい生活でしょう。」

「いいえ、そうではありません。あの人は来客を迎えるのが好きでした……。あの人はあの我慢ができない連中である子供でさえも大目に見ていたのよ……。一寸の間であれば。私達は繻子の靴を履いて、栗鼠の毛皮の外套に身を包んで徒歩で舞踏会に行つたんですよ。一人の使用人が大きな提灯で私達の前の路を照らして歩いていったのよ。白状すれば私は二輪馬車の方が好きなんだけれど。でもそれが流行だったのよ。四十歳になつてあなたのお祖母さんは黒い髪の上にシャンティー産のボンネットを被つていたの。喪中でない時にはレースの間に赤いビロードの花飾りが見られたりすることもあったけど、喪が数年も続いたこの大家族ではそれも稀なことだったわ。」

「まあ、ぞつとのお話ですわ。」とポーリー又は言った。

「いいえ、そうではありません。全てはこの世の決まりなのです。その当時は今よりもずっと楽でした。私がパリから戻った時にはあの人は、何時も愛想がよく、変わってはいませんでした。そして時には羨ましいほどでした……。でもあなたたちはもっと機転が利きますね、私の若い人達は……。」

「いいえ、大したことはありませんよ。」

「その通りです。判っています……。幸福は動揺の内に有るものではありません……。私は帰らなければなりません。私は明後日にニースに向けて出発します。ポーリーヌ、私は挨拶をしたいので、伯父さん達を呼んできてくれませんか。急いでね。私の馬車の湯たんぽにお湯を入れさせておいてくれないかしら。」

ボンメル兄弟は大急ぎで到着した。

直立したままボンメル氏は暖炉に凭れながら炎に湿った靴底を当てていたが、そこからほんのりと水蒸気が立ちのぼっていた。

「雨が降り始めましたね。」と彼が言う。「寒さは弱まっていますね。これからは氷が張ったりすることはないでしょう。お宅の葡萄畑は豊作になっていますか、セシル伯母さん。」

「その様に言われています。更に二十ヘクタール程植え替えたのよ。」

「あなたは模範を示されていますね……。私は通りすぎる時にあなたの馬を見ましたよ。素晴らしい馬ですね。」

「あれは買ったばかりなのよ。ちよっとお前に試してもらうべきだったかもしれないね。私にとつては元氣すぎるの。私達は途中で自動車というものの一つに出会ったのよ、知っているわね、ゴードリー家

の人が一台持っているのを……それで馬たちがもう少しで暴れるところだったわ。パリでは馬も馴れているけど、この辺りではまだ危ないわね。」

「やがてあなたも一台持つことになるでしょう、伯母さんも。」

「多分ね、私は新しいものが好きですからね。」

若い娘たちは元気良く話し合っていた。そしてそして暖炉の側のグループが一層寄り添ったのだった。

「それであの娘は？」とヴェルヌイユ夫人が低い声で、一目見ただけでポーリーヌを指しながら言った。「相変わらずおとなしいのかい。」

「全くおとなしいのですよ……想像力は遅いのですが……少しばかり乱読気味なんです……そして独立心は旺盛なんですよ……。」

「そうだね、あの娘は縛られるのが好きではないんだよ。それは私にも気に入っているけど……。将来あの娘が何になるのかを思うと……。時には自分の両親のことを話すのかい。」

「いいえ、その点は私は決してあの娘には触れないようにしているんです。」

「尤もだね、そうだね、結局はお前は私の言うようにしているのに不平は無いんだね、フィリップ。私が引き取りたかったのだけれど、若い娘というものは厄介だからね。あの娘もここでは従姉妹たちと一緒にうまくいっているようだからね。それにお前が引き受けるのが当然なんだよ。」

「それは私のことでした。後悔はしていませんよ。伯母さん、私はあなたの言われるようにしたのを後悔はしていませんからね。」

「どういたしまして。さあ、私は行かなければならないわ。トーマ、杖を取っておくれ。さようなら、お嬢さん達、そして私の甥達、自分の仕事にお帰りなさい。夏には又会えるわね。」

ヴェルヌイユ夫人は立ち上がった。そして敬意に満ちた二人のボンメレルに付き添われて、彼女は絹擦れの音を残して遠ざかっていった。

「何と堂々としておられることでしょう。」

「七十歳以上にはとても見えないわね。」

「私はあの人の前では氣後れしてしまうわ。」

「あの方が素晴らしい時代を知っていたのが判るわね。帝政下のパリね。あの伯母様はバルバザックの通りでナポレオン三世に会ったんですって……。ところでこれから本でも読まない？ マルセル、あなたは本を持ってこなかったの。」

「私、マリー・バシユキルツエフの『日記』を持ってるわ。まだ明るい内は窓のところに坐りましょう。」

若い娘たちは豪華な絹紋織物の模様のある鞆から、細かな細工物や色の付いた木綿布や金モールや金糸等を取り出した。そしてアンナが大きな声で朗読しはじめたのだった。

不屈のマリー・バシユキルツエフ、その熱狂的な判断、彼の野望、彼の感情の激発はこの平穏な世界の上には遙か彼方の嵐のざわめきのように思えるのである。ポーリーヌは縫うのを止めて、傾けられた顔を、あたかも不安の告白をで不意打ちを与えるのを恐れるかのように、こっそりと眺めた。しかし針は寒冷紗の上を優しく流れていたのだった。指貫が一つ音もなく絨毯の上に落ちた。アンナの無邪気な声が若いロシア娘の燃えるような言葉を密かに移し替え続けていた。

「彼女は若くして死んでしまったのね……。」

「その方が良かったんだわ……。彼女を満足させるものは何もなかったのね。」

「彼女は若し死ななければ、きっと偉大な何かを書いていたのかもしれないわね。」

「いいえ、そうじゃないわ、風変わりな天性なのよ……。彼女たちは何よりも人を驚かせたいのよ。」

アンネットはランプの炎を調整する為に灯心を見た。彼女は暖炉の上の蠟燭に火を付け、鎧戸を閉じて、カーテンを引いた。

ポーリーヌは暖炉の前の床に坐っていた。

「あなたは何を考えているの、ポーリーヌ……。あなたの細工物はそこにあるけれど、すっかりバラバラになっているのね……。あなたも耳を傾けることもしなかったのだと思うわよ……。」

マルセルはポーリーヌの方に身を屈めてささやくように言った。

「あなたは夢想家なのね、ポーリーヌ。セシル伯母さんが仰る通りであることは判るわね、私達のお祖母様は幸福だったのよ……。」

「ああ、……この幸福！」

夕食後ポーリーヌは燭台を手にして、静かな家のなかを上にながっていった。彼女は夜の空気をもっと良く感じるためにちよつと窓を開けた。ある種の熱っぽさが自分の動きを無理にもゆっくりさせるのだった。彼女はブローチを外すときその針で指を刺してしまった。そして自分が首に付けていた金の首飾りをもつれさせてしまった。自分がその中を覗いてみることもしなかった洋服箆の鏡の前で落ちつ

いてはいたが固くなって、骨入りの襟を外し、胴着を締めていて、ビロードのヨークとベルトとスカートの開き部分を調整していたホックを外した。彼女はレースの下着の留め金を引き外し、羅紗製の袖口を脱いで、体を締めつけていたコルセットの固い張り骨を開いたのだった。やっと息ができるように思えたのだった。彼女はキルティングの部屋着で身を包んで、髪を留めていた針を一本ずつ抜いて、髪の毛を解いて髪をバラバラにする為に頭を後ろに振ったのだった。そして彼女の体を締めつけるものはいくつもなかった。そして自分の顔を生ぬるい水に浸した時には、彼女はホッとした解放感を感じたのだった。

彼女は机の側の肘掛け椅子に坐った。そして一冊の本を手にとった。しかし彼女はマリー・バシユキルツエフのことを考えていた。そうだ、自己を見失わないこと……抵抗すること……しかし何に抵抗するのか……？

∴

ボンメル氏は決算書を見る前に、ローズの顔に視線を投げかけた。その会計係は不安であるようには見えなかった。彼は欠損の理由を正確に説明した。売り上げの減少、ロシアでの巨大な損失、何時ものように在庫品は購入価格で評価されていたのだ。

「しかしあなたも知っているように、毎年倉庫の中のブランドーは四パーセントの割合で蒸発しますね。それは年毎に五十の樽が煙となって消えてしまうことを意味するのです。それに対してこのブラン

デーは年をとり価値を増していきます。それにあなたは自分に託された資本に対して支払う利子を考慮に入れておかなければなりません。いくつかの決まった負担を除外しても、余りに安価で売らなければならぬ危険に曝されている訳です。ブランドーの一定量に対しては確かな数字に基づいて値段を決めなければなりません。私は在庫の十パーセントを値上げすることを忠告したいのです。そうすると販売の価格の設定に対する計算が容易になるのです。そうすることによってあなたは今年は全く損失を受けることは無くなるでしょう。というのは在庫が重要であるからです。それに少しは利益が望まれることさえあるでしょう。」

黒の上着の上に長いグレーの髭を広げて、真面目な顔をしたローズは極めて控えめな調子で説明したので、誰も彼の賢明さを疑うことはなかった。

ポンメル氏はローズに耳を傾け、長らく考え込んでから、新たにその決算書を調べて、彼の会計係の言葉が正しいことを認識した。

この日はポンメル氏は食事の間中無言であった。デザートの際に彼は銀のスプーンで、ロンドンから毎年送られてくる布に覆われたスタイルトン・チーズを削りながら、ポーリーヌに言った。

「後で私はラクルジーユさんに会うことになっている。彼はアルテュールのところで食事をしているんだ。この地方で義援金を集める為にラ・ロシエルから来ておられるんだよ。」

ポンメル氏が自分の肘掛け椅子に坐った時、彼は非常に疲れているように見えたのでポーリーヌは彼がうとうとするのだらう思った。そして自分の部屋に上がっていったのだった。ポンメル氏は自分が待っている訪問者のことを考えていた。

寺院や布教団、教会に対しての彼の出費は相当の金額になっていた。何時もの寄附金を減額しラ・ロシエルの商人に、自分の事業は傾きかかっていると告白しようか。というのはローズの落ち着いた態度と彼の分別のある忠告にも拘わらず、ポンメル氏は自分の会社が直面している危険を理解していたからである。

今までは彼は一定の金額を、余剰金を計算に入れて、自分の必要の為に天引きしておいたのであった。その取引はその住居の直ぐ隣で行われていたが、彼の心労や成功は彼の私的な生活の中には入り込むことはなかったのであった。そして女たちは何の疑いも持っていないかった。ここでその取引の反響がその生活の基盤を揺るがし、神聖なる壁を破って平穩な喫煙室でも感じられるようになっていたのである。

彼が毎年受け取る総額が余りに高すぎるのか。確かに彼はまだ資本を持っている。しかしそれは使わなければならないだろう。銀行家ショッタールの死以来、彼は誰の後ろ楯も期待することはできないのだ。しかし極めて慎ましい生活の諸費用はどうして切り詰めることが出来るだろうか。彼は既に二頭の馬は売却していた。ほとんど空っぽの物置き場にはカバールの掛けられた四輪馬車、そして進んで売ってしまいたい大型馬車、そしてポリーヌのイギリス風の二輪馬車等が置かれていた。彼は上等の御馳走、長持ちのする衣服、三十年もつ立派な下着、多数の使用人、そして誰もが何とも思わないほどに広まっていた贅沢等も忘れていたのだった。ポンメル氏は禁欲者として生きているとも考えていた。確かに彼はポリーヌについての費用を削減することは出来ただろう。しかし彼は自分の姪の楽しみを自分に課せられた義務、ある種の道徳的な債務と考えていたのだ。

台所では使用人達はテーブルの周りに坐っていた。アンネットが大きなカップにコーヒーを注いでいた。彼等は呼び鈴が鳴るのを聴いた。しかしこんな時間にこの様な無遠慮な呼び出しは彼等には幻覚のように思えていたのだった。二回目に鳴った時にジュールが立ち上がった。彼は痺れたように、革の上靴で足を引きずりながら、ゆつくりと事務所を横切り、玄関のステップに上り、それからボンメル夫人の死以来少し鈍感になっていたが、自分の本能によって再び捉えられて、素早く入り口の扉を大きく開いた。そして自分はボンメル氏が寺院の門を叩く時のように厳しい顔をして、真っ直ぐに立っていた。

ガエタン・ド・ラクルジユは自分のグレーの帽子に手を掛けて、その使用人に目もくれずにその前を通りすぎ、帽子を脱いだ。それから階段を上がりながら、軽く指で自分の髪を叩いた。

彼は自分の教会の為に、社交界の人士の丁重さと、一人の商人の沈着さを持つて、寄附金を募っていたのである。彼は先ず家族や取引のことを尋ねてから、判らないうちに彼の訪問の目的に通じるような話題を見出したのだった。

話しながら彼はダヴィスの所で眺えていたボンメル氏の上着を観察した。そして自分のネクタイに手を置いたが、それはあたかも、新しくて非常に良い仕上がりなので、少しばかり弛んでいた顔の周りで、短くて尖ったブロンドの口髭を補うように思えた彼自身の服装を意識するかのようだった。

「私はまだバルヌリー牧師と会っていません。今晚私達は会うことになっています……。あなたは私が友人のフーコーに代わって長老会議委員になったのをご存じですね……。その為に何度か出歩かなければならなくなったのです。私は一昨日はボルドーに行つて来ました。私達はバルヌリーの話をしま

した……。彼の立場は牧師としては風変わりであるとは思われませんか。私は離婚した牧師のことを聴いたのは初めてなのです。」

「ジャンは離婚したわけではありません。妻と別居しているのです。」

「それは同じことです……。やはり嘆かわしい実例です。」

ガエタンはこれらの言葉を暗澹とした風にして発した。というのは彼は全ての家庭における破局というものを、それを維持するのが極めて困難な自分自身の夫婦の平穩への冒瀆であるように考えていたからである。しかし今彼は自分の口調がショックを与えている様に感じたのであった。彼は金の小鎖で留められた袖口から小さなハンカチを引っ張りだしてから、それを口に当てて息を吸い込んだ。突然熱っぽさもなく宥めるような声で言った。「あなたはバルヌリーを評価しておられる。それに彼はあなたの親戚ですからね……。彼は価値ある人物です……。非常に金持ちなんだそうですね……。」

「彼はリモージュの陶器製造業者の家族の一人です。」

「私はバルヌリー商会、いわゆるバルヌリー・アンド・カンパニーを知っています。私達はボルドーでアメリカ行きの陶器の彼等の樽が積み込まれるのを見ました……。それはワインの商人を羨ましがらせていましたよ。非常に古い会社なんですね。」

「それ程古くはありませんよ。しかし何よりも重要な会社なんです。ダヴィッド・バルヌリーがニューヨークからやって来たのは一八八〇年のことです。彼はそこにイギリス陶器の商会を持っていたのです。一八八〇年前の当時はアメリカではイギリスの陶器しか知りませんでした。ある日一人の顧客が見知らぬ材料で出来た一つのカップを彼に差し出しました。（それは硬質の陶器で出来たものでした。）そ

して彼にそれと同じようなお茶の道具のセットを求めたのです。このカップはフランス産でした。ダヴィッドは妻と二人の息子たちと船に乗り込みました。パリで彼はその有名なカップを作ることができる場所を調査しました。彼はヴィエルゾンのことを教えられました。しかし彼は何も見つけることができません。そしてリモージュに行きました。そこで彼はその源に辿り着いたのです。彼は製造業者に皿の従来の形と装飾を少し修正し、アメリカ全体が顧客になることを約束したのでした。しかしどの製造者も自分たちの習慣を変えることには同意しませんでした。その時ダヴィッドは装飾の小さな工房を設立しましたが、それは今日アメリカ人にとってはフランスのバカラ(Baccarat)に相当するものであるこのバルヌリー商会の始まりなのです……。カップの歴史は非常に魅力的なものです。その後に生じたことは遙かに美しい歴史ですが、それについて話すのはもっと難しいのです。」

「ジャン・バルヌリーはどんな人のですか。」

「私はあなたにダヴィッドには二人の息子がいたと言いましたね……。娘も一人いまして、それが私の妻なのです。」その二人の息子は彼等の父親の後を継ぎましたが、その最年少のロベールは実際その会社を彼のやり方で発展させたのです。彼の上の兄は一人の金持ちの女性と結婚しましたが、そのフランス女性の資本が最初は非常に役に立ったのでした。その女性はジャンを生んでから死んでしまいました。彼女の夫もその後しばらくしてから、極めてハッキリしないやり方で死んでしまいました……。彼は慰められることがなかったのです……。ジャンはこの商会の父方のただ一人の相続者なのです。そしてこの様にしてバルヌリー・アンド・カンパニーの半分の持ち主となっているのです。」

「私はバルヌリーの説教するのを聴きました……。彼は話は上手ですね。私は友人たちのところで彼と

一緒に食事もしました。彼は我が国の牧師たちとは全く異なつた外見によつて私を驚かせたのでした……。彼は少し固いけれど、寛いだ風を装っていました。今は私は判っているのですが、彼は我々の世界の人間ですね……。しかしヨーロッパの最も大きな製造会社の一つを指揮する為に呼ばれているこの相続人がどうして牧師になつたのかということとをどの様に説明したらよいでしょうか。」

「天職というものは説明できないものです。確認されるものなのです。その天職というものはジャンにあつては明白なものなのです。あなたが言われるように、彼は価値ある若者なのです……。本当を言えば、彼の天職の外で私はいくつかの理由を予言できるように思うのです。彼は決して自分の両親を知らなかつたということを考えてみてください。彼は特別の条件の下でこの世に生まれてきたのです……心の側面では失われている……。」

「彼は社会主義者ではありませんか。」

「その様に言われていますね。しかし私はそうは思いません。彼は自分の思想を持っています、それだけのことです。」

「彼の妻はリモージュ出身なのですか。」

「そうです……リモージュ生まれの娘です……それも非常に慎ましい家族の……バルヌリー商会の会計係の娘なのです。彼女はきれいな娘でした……。確かに彼女は牧師の妻には向いていなかったのでしょう。ある金持ちでバルヌリーという名前の牧師は、リモージュ生まれの小娘の場合は、上手くやつていくことは出来ないのです、そしてこの男については全く正当な判断を下すことは出来ません……。彼女は自分がどんな生活に向けられていたのかを理解できなかったのです。」

「彼女に大きな過失があるのですか。」

ポンメルル氏は一瞬黙った。他人についての判断を下すのにはどんなに良く考えなければならないかを知っていたからである。

「いいえ、彼女に大きな過失があつたわけではありません。彼女は少し移り気で、そそっかしく、子供だつたのです……。しかし彼女は非常に悪いことを何かしでかしたのではありません……。けれども私は彼女の場合のいくつかの欠点は直すことが出来ないのだと納得しているのです。」

「私は私の友人のボワジャンシエが、しばらくの間ジャン・バルヌリーのところにいた女の使用人を使っているのでこの様な質問をあなたにすることが許されるでしょう。この娘は彼が自分の妻を虐待したと主張しているのです……。」

「そんな馬鹿なことを。」

「確かにその言葉は少しきついものです。」とガエタンは言つた。

彼は重いけれども少し躊躇いがちの沈着な声で、ポンメルル氏を真似て続けた。

「しかしこの使用人がジャン・バルヌリーの家にいたのだということを考えてみてください……つまり密接な関係の中に……。彼女はバルヌリー夫人が惨めであると主張しているのです……。彼女はいつもバルヌリー夫人のことを同情の気持ちを持って話しています……。私も共鳴の気持ちさえもつて言いたいのです。」

「ナタリーは何人かの者には好意的です。彼女は意地の悪い妻ではありません。しかしその役割を取り違えることのないようにしましょう。ナタリーは自分の落ち度を知っていました。そして自分から出て

いくことを望んだのです。その欠点の証拠を……彼女の媚態だけでなく、破廉恥な身の軽さについても私は現実を目にしましたし、不幸にしてバルバザックでは私はそれを知っているただ一人の者ではありません。」

「ダーリアとかいう男の話は聴きましたよ……。」

「そうです。ダーリアがこのいざこざに関与しているのです。」

「夫人は今どうなっているのですか。」

「彼女はリモージュに戻り、そこで娘と一緒に暮らしています。」

「その娘は何歳なのですか。」

「四歳です。」

「ああ、悲しいことですね……。単に媚態だけが問題であるのなら……しかしそれにあなたはこの破局、この公然とした非難を認めておられるのですか。それは本当の醜聞と言えるのではありませんか。バルヌリーはその妻と一緒に出発して、彼の慈悲の心と忠告によって彼女を良い道に戻すように努力したほうが良かったとは思われませんか。」

「私はジャンが妻と別居したほうが良いと思っています。正確な事実や一時的な迷いよりも許すことができない傾向とか変わることをない気質というものが問題なのです。彼は自分の天職を放棄することが必要となっていたかもしれないのです。彼はそれを考えたのです。そして私はそれを引き止めたのです。私はナタリーが私達の教会からジャンを奪うことを許すことができないのです。それらの名前を忘れてこれらの事柄を考えてみてください。一人の牧師は二四歳で結婚しました。そして自分の誤りに気

が付きしました。彼の妻は浅はかです、そして無鉄砲です。彼女は自分の夫と教会を危険にさらしました。彼女は控えめさと威厳と云う役割の為に作られてはいないのです。彼は自分の職務を捨てなければならぬのでしょうか、この女の為に、自分の天職に従って神に使えることを辞めなければならぬのでしょうか。私は良く考えました。いいですか、彼はこの足枷を撥ねつけなければならぬのです。」

「確かにそうです。」と椅子の上に置かれた自分の帽子を見ていたガエタンが云った。

「あなたが今お話になった女の使用人は何という名前なのですか。」とポンメルル氏は言った。

「セレスティヌと言います。」

「セレスティヌ……そんな名前の使用人がいたとは思いませんよ。」

「ボアジャンシエ家はこの冬に非常に立派な舞踏会を開きました。私はコティヨン踊りをリードしたので……。」

ガエタンは今こそ自分の好み合った話題を取り上げることが出来ると考えた。彼は人を訪問するところが好きだった。というのとは自分の生活は、自分がその事を話せば羨ましいものに思えたからである。彼が一人の友人に、或いは未知の人に話した全てのことは彼にとつては、目を眩ませるようであり、話すことが楽しいものでなければならなかったからである。現実には異なっていた。しかしそれは自分が自分の家にいればやつとそれに気が付くようなものであったし、彼は非常にわずかしかそこに居なかった。そしてそれについては話さなかったのだ。

彼は立ち上がって椅子の上の帽子と手袋を手にとって言った。

「あなたはバルヌー牧師についての私の意見を完全に変えてしまいましたね……ありがとうございます」

ます……ご存じの通りラ・ロシエルの教会は……」

「そうです、判っています、ガエタンさん。」と広間のなかでガエタンの後を歩きながら、ボンメレル氏は言った。「私の弟はきつと到着しているでしょう。あなたにいつもの額をお渡しするように私に代わって彼に言っておいてくれますか。」

ガエタンの微笑みは彼が階段を下りていくに従って消えていった。そして細かく気を使って自分の頭に帽子を被ったが、それは彼を若返らせたのだった。

∴

黄色の水が泥だらけの道に沿った溝から溢れ出ていた。にわか雨の間に吹く風は春の香りを持っていた。そして巨大なえにしだの樹は荒れ果てた土地を金色に染めていた。

両側の扉が開かれたアーチ形の玄関の側で、農夫たちが待っている。集団となっている男達と、その黒い服を目立たせている壁の前で、靴との接触を避けるためにその服を注意してたくし上げて並んでいる女達である。

中庭は雑草がはびこり、荷車で混雑していたが、その家は人けが無いように見える。一つの扉が開けられている。人々は石が敷かれた廊下を進んで、何段かを上る。木綿の服を着た一人の女が、両手をお腹の上に乗せて、こわばった顔をして、隣人たちに自分の息子の最後の瞬間の時のことを語っている。彼女は大きな身振りをしたり、大声を出したりしている。というのは死というもののは嘆かれるものであ

るからである。この強いられた興奮にも拘わらず、その女が今はわたがえぐり取られたばかりであるような悲しみの内にあるのは直ぐ判るからである。そして分娩の苦しみの叫びが思われるのである。その夫はテーブルに凭れている。つまりほっそりした横顔、頭は弱々しく、物を見ているようには見えないう赤く充血した眼をしているのである。女が自分の話を止めると、彼は呻き、震えるのだ。あたかも学んだ単調な歌が繰り返されるようにされるのだ。そしてそれは機械的な習わしなのだ。

「わしの息子よ、わしの息子よ、ベルナルよ、わしはお前を十分に世話をしやったのに。」
そしてその父が今度は体を震わせながら呻くのだ。

「わしは馬を付けるように命令されて、厩まで行って戻ったら、もう全てが終わっていたのだ。」
嘆きが又始まった。突然男は黙った。そして友人達の方へ向いて静かな声で言う。

「それでは皆さん、気晴らしに庭に行きましょう。」
壁が風を遮っていた。

「林檎の樹は下手に刈り込みされている。これでは駄目だ。」と一人の農夫が言った。

廊下で足音が聞こえた。バルヌリー牧師が到着して、母親に町から持ってきた喪のシヨールとヴェールが手渡された。

棺はリラの新芽がばらまかれた白の布で覆われて、ガラスの部分はハンカチが掛けられていた。暖炉の上に置かれた蝋燭は胡桃製の大きな筆笥の彫刻の上に断続的に反射する光を投げかけていたが、それは壁のグレーで破れた紙とコントラストをなしていた。

バルヌリー牧師は入り口の側で自分の腕時計で時間を見た。小さな遺体安置室の上の部屋では人が歩

く音が聞こえる。母親が姿を現したが、ショールに覆われ、顔はクレープの布に隠されていた。彼女は何も言わずに大箒の影にあった棺の側に着席した。バルヌリーは父親が入ってくるのを望んで一瞬待ったが、自分が手に持っていた黒い革綴じの本を開いて読みはじめた。

「女より生まれた人間は短くて常に不安に満ちた生を持つ。彼は影の様に束の間に去って消えていく。その日々は駿馬よりも素早く過ぎて行く。その日々は幸福を見ることなく消えていく。我等の住処は羊飼いのテントの様に奪われて、我等よりも遠くに運ばれる。しかし永遠なるもの（神）の慈しみは永遠である。《我は生の復活である。》と救世主は言われた。従って希望を持たない他の者の様に悲しむことなかれ。神は死者にも生を与えたまうなり。」

ジャンが声をひそめたり、黙ったりすると天井を通して足音やうめく声が聞こえてきた。出席者の内では、打ち沈んだ顔は心を動かされているように思えなかった。聖書の中の恐ろしい言葉、つまり牧師の祈りは彼等を感じさせることはないのである。それはお決まりの儀式だったが、全ての人のとっては未知のものようだったのである。

ゆっくりと不器用に作業着を着た人達が棺を霊柩車に移した。部屋から下りてきたが干し草の納屋の後ろに隠れていた父親が呼ばれて、無理にも自分の妻の側に坐らされた。

道端では、自分の最も美しい服を着ていた人々がその行列を待っていた。彼等は頭を下げた他の人の後に並び互いにお喋りを始めた。

「水が種を蒔くのを妨げているのだ。土地を耕すことが出来ないのだ。まだ凍るような寒さがやって来るかもしれないのだよ……。」

一人一人は泥にはかまわず進んでいく。それは数時間の休息であり、共同生活であり、お互いが出会うチャンスであつて、後々のことについての話題を与えてくれるものであり、ほとんど皆が顔を出すことを望んでいるお祭りなのである。子供たちは全ての家の入り口の後ろにいる。悲しんでいる者達にとつてさえも、泣いたり嘆いたりした後では無理にも強いられた心の緊張の緩和があることが知られているのだ。そして自分が生きていることを感じ、自分の家に帰つてから、スープを見つけ、もう一杯のグラスを飲むことは嬉しいことであろう。そしてそれから家畜の世話をする時間となるのだ。

道は松の樹と葡萄畑の間を上つていく。そして広大な地平線が出現した。そして静かな平原が広がつており、大きな木陰と光の日溜まりとなつていく。人々は墓地に到着した。父親は入るのを拒否し、入り口の側に止まつた。その他の人は墓の周りにはびこつていた高く伸びた雑草の間の小径を進んでいった。そして墓穴の側に立つた。戸外では帽子を被つていない禿げ頭や薄いバラ色の頭は、壊れやすいもののように、出席者の地味な背景の上で際立つていたのであつた。バルヌリー牧師は一握りの砂を投げて言った。「汝は塵である。再び塵となつて戻らん。塵は大地に戻る。しかし精神はそれを与えたもうた神に戻つていく。」それから彼は黒革の本を開いた。「全ての肉体は雑草の如し。そして全ての優美さは原野の花の如し。草は枯れてしまい、花は落ちる。しかれども我等の神の言葉は永遠である。」

風が声をかき消した。ジャンはそれを知つていた。彼はその物言わぬ聴衆が、そして頑固な心の持ち主が自分自身の慰めと思ひも寄らない力と自分の徳義心と何とも言いようのない喜びを持つているのを知つていた。それは物事から生じるある種の永遠性と共に、それに対して彼は何も与えることができないが、それ自体で自足している閉じられた生活なのである。

ジャン・バルヌリーは車に乗りながら、好人物らしい風をしている一人の小男の方に向いて言った。

「ガローさん、あなたの農場は私の行く方向にありますね、私がお宅までお送りしましょう。」

「牧師さん、若し差し支えがなければ、お言葉に甘えさせていただきます。」

彼はジャンの隣に坐った。そして嬉しそうに微笑みながら、黒いフェルトの帽子を頭に深く被ったのであった。

「ガローさん、お宅では皆さんはお元気ですか。お変わりありませんか。そして葡萄はどうですか。」

「はい、牧師様、妻と子供たちは元気です。他のことでは良かったり、悪かったりですね。まだ汗を流して働かなければなりません。」

「子供たちがあなたを援けてくれるでしょう。皆大きくなられましたでしょう。以前彼等は日曜学校へ来ておられましたね。私はもう彼等に会ったことがあります。ガローさん、あなたの奥さんは新教徒ではありませんか。彼女は少しも教会に来られませんね。あなたは大百姓ですから、模範を示していただかないといけません。」

ガローは帽子を取って、指で回していた。

「仕事がありましてね。牧師さん。スープを作るといふものです。それに若者達は宗教心というものがありますからね。」

「私はあなたの奥さんがお洒落なのを知っていますよ。あなたは奥さんを非常に若いときに少なからず軽い世界から連れてこられたのでしたね……。彼女に自分の義務を思い出させるのはあなたですよ。彼女は、自分が自分自身の家族同様に愛することを約束したあなたの祖先のことも考えなければなりま

せんからね。」

ガローは、ジャンを見ないで、しかし鋭い眼をして、さも優しそうな声で答えた。

「仰るとおりです……。私は彼女を少し若いときに迎えました……。しかし私が畑から戻って、彼女が全ての自分の歯を見せて笑うのを目にすると、私は自分に言い聞かせるのです。「お前は全然きれいじゃない、お前は自分に相応しいこの妻を持っているのだ。」

ジャンは馬に鞭を当てた、そして走りだした。

..

ボンメレル家の鐘が鳴った。労働者たちは酒蔵を離れて物も言わずに庭を横切った。ボンメレル氏は新聞を待っている。小さなラッパを吹きながら、駅から戻ってくる新聞配達人は各家の前に止まり、ちりんちりんと音のする売店の扉を開くのである。そして人々は街灯の光のなかを彼が通りすぎていく時、びっこをひいて走っていくのを認めるのだ。

ジャンは中庭に入ってチュールのカーテンで覆われた窓に身を屈めて、ガス灯の下にいたボンメレル氏の白い頭を見つめたのだった。

事務所では彼はあたかも間違つてそこに入り込んだかのように驚いたような顔をして直立していた。「モヌローがここから出ていったところだ。彼はお前とベーニユで会ったのだそうだね。」とボンメレル氏は言った。

「私は埋葬の為にベニーニョに行っていたのです……。私はガローを車に乗せて来たのです。」

「ああ、ガローか、……。私はガローの見本をもらった、しかし買いたいとは思わない、いいものは売られていない……。誰も何が良いいのかをもう判断することが出来ないのだよ。やがてウイスキーが我々に取って代わるだろう……。お前は発送品の数字を見てみる事が出来るだろう。私は樽のことを言っているんだ……。ああ、箱詰めだよ、箱詰めがどんどん出ていくんだ。」

「どうしてあなたは箱詰めを、瓶詰のコニャックを軽蔑されるのですか。ダヴィドの箱詰めは牝の驢馬の背中に乗せられてアンデス山脈を越えて運ばれているんだそうですよ。あなたの競争相手は自分の発送品を小さな商人のように細かく分割することを恐れてはいませんよ。彼等はあなたのターンブルやワトソン、そして今日ではエネシーと言った無名の納入業者である代わりに、広告で自分の名前を無理に広めたのですよ……。」

「そうだよ、エネシーはお金を儲けている。しかし私はといえば瓶詰のコニャックは売りたくないのだ。」

それはその点で信用問題なのであり、ジャンが理解出来ない伝来ののれんの問題であった。

「エネシーは全世界で知られています。」と彼は言う。「それが売れるものは上等なものです。」

ポンメレル氏は壁に寄せられた狭いテーブルに近付いて、その栓が農民達のポケットで擦られて黒くなった小瓶を手を取った。それからコニャックの一滴を、半分開かれたチューリップの形の大きなクリスタル・グラスに注いだ。その金色の液体の発散する香りは狭い縁の高さに集められるのである。

「これは一八二〇年製の絶妙なシャンパンだ。味わってみてごらん……。これは繊細ですっきりしてい

て軽い。ベルトメの言う通りだ。これらの驚異の時代は過ぎたのだ。偉大な時代を信じさせる、お前の言うフオーマルな瓶詰め、の重くて色の付いたブランドーで味覚が損なわれているんだよ。」

ポンメルル氏はジャンの手からグラスを受け取って、細やかに二本の指のあいだに挟んで、揺らさずにそれを持ち上げたが、あたかもゆっくりとしていて音もない香りによるかのように落ち着いて吸い込みながら、その全ての芳香を吸収したのであった。それから真面目な顔をして彼はそれをテーブルの上に置いた。

「あの律儀なガロー……。彼はお前に何を話したのかね。彼は何時も若い妻に夢中なのかね。」

テーブルの周りを歩いていたジャンは急いで行かなければならないので、突然坐って言った。

「この農民たちは私がやったことを決して理解しないでしょう。私は彼等の意地の悪い仄めかしでそれを感じるのです。あの思い出は私を苦しめるのです。」

「お前はまだあのことを考えているのかね。」

「そうです。」

「お前は考えすぎだ。お前はもうこれ以上あのことを考えてはいけないよ。あれは終わったことなのだ、それに十分考えたじゃないか。お前には別の義務というものがある。」

「本当にそう思われますか。」

「どうしてかね、本当に私はそう思っている。私はお前にルターの言葉『一人の牧師にとっては一つの罪しかない。それは神の言葉を誤って教えることである。』という言葉の思い出させたいのだよ。」

「私は何よりも自分を一人の人間と感じているのです。私はナタリーを別居させたことで過失を犯し

たという考えに我慢できないのです。」

「彼女は自分から出ていくことを欲したのだ。実際お前は一つの過失を犯したのだ。お前は自分の精神世界とは異なつたところにいた女と結婚するという間違いをしでかしたのだ……。あれは子供だ……。軽薄な幼い存在なのだ……。」

ジャンは額に皺をよせて、苦しい表現で低い声で言った。

「そうです、彼女は陽気でした、以前は……。」

「私はどうしてあの女がお前の氣に入つたのかを自問しているのだ。彼女はお前の名前と財産の威光の犠牲者なのだよ。彼女はお前と、自分自身について思い違ひをしたのだよ……。」

ボンメル氏はテーブルの前の肘掛け椅子を離れて、暖炉の側のジャンの前に坐りに行つた。彼は燃え残りの上に一握りの木屑を投げ入れた。そして良く磨かれた高級なハーフブーツを履いた彼の小さな足を炎の方へ伸ばしたのだった。一条の光が彼の暗緑色の目の中で輝いた。彼の右の眉は、あたかも彼が独り言を言っていたかのように、驚いた様な、そして躊躇うような表情と共に持ち上げられた。そして彼は言つた。

「暫くの間はナタリーはお前の趣味や仕種や思想さえをも模倣していたのだ。彼女はお前の反映であつたのだ。愛は偽りの調和を生み出すことがあり得るのだ。そして当然彼女は後になつて彼が彼女の本当の人格を修正したと言つて非難したのだ。それはどんな人格なのか。軽薄さとずうずうしい媚態なのだ……。」

「本当にナタリーはそんなに色づつたのでしょうか。」

「お前は私にそれを尋ねるのかね……？　しかし、ねえ、彼女は自分を化粧していた……。お前は別居してから別人になったね……。私は以前よりもっとしばしばお前と会うことができて嬉しいだけではなく、お前は精神がこの世の本当の心配事から解放されて、良い顔になっているのだ。お前が罪があると受け取られていた状況や口論はお前の内面的な生活を包み隠してしまつたが、それはそれでもお前の心に刻印を与え、その思想を変化させ、歪曲してしまつていたのだ……。お前は私達がそれを隠すのにあれ程の苦痛を感じていたスキヤンダルを忘れてしまつたのかね。あれらの手紙は……。」

「ええ、判っていますよ……。あなたの言われる通りです。」

「しばしばお前について私はこう考えたのだ。『若しお前の右手がお前を罪に陥れるのなら、それを切り取つて、遠くに投げ飛ばしてしまえ。』……。私を一番心配させたことは、ナタリーが犯す可能性があつた悪ではないのだ……。我が教会の恥……。スキヤンダルでもない、……。彼女がお前の内に創り出した悪、彼女の接触が創り出す微妙な悪、本当の墮落というもののだよ……。というのは私達は自分の側に我々の破壊を望んでいる敵を囲つておく程強くはないからだ……。私はお前に自分の考えを全て言つてしまおう……。私は余りにしばしば私達の間ではこの問題を遠ざけてきたことを後悔しているのだよ。それについて話すことを恐れることはない。少なくとも一度は。二度とこの問題に帰ることが無いようにするために……。私はナタリーの軽はずみさは私を決してひどく不安にさせたのではないとお前に言いたいのだ。彼女の軽率なやり方、逢い引き、恋文、そして我々が知っている全てのことに拘わらず、私は彼女がもう一人の男のことを考えていたのでは決してないということを納得させられていたのだ。彼女の軽薄さの中には思わせぶりがあつたのだ。彼女はお前に対する刺々しさ、憎しみを表したのだ。お

前だけが問題であつたのだ。彼女の全ての行為の内に私は自分の求めるものを受け取りたい永遠の要求書を感じるのだよ……。」

「どんな要求でしょうか。」ジャンはこの証人、自分の振る舞いを承認してくれていたこの判事が本当に公平で鋭いのかどうかを認識する為に極度の注意と共に一語一語に耳を傾けて言った。

「彼女はあなたが彼女の大切な個性を変えたと言つて非難しただけではないのだ。何よりも彼女はあなたが牧師であることを許せなかつたのだ。お前の身分状態が彼女からお前が持っている財産や、彼女が夢見ることが出来た人生の楽しみを奪つていたのだ……。そうだ、彼女を多くの故意で、考え抜かれた、滑稽な行き過ぎに導いたのはその怒りなのだ……。悔しさから彼女はお前の信仰を……そして誠実さを疑つたのだ……。彼女はあなたが信仰を持っていなかつたとさえ主張している。そこにこそ彼女の絶え間ない不平やうんざりさせるようなお喋りから出てきたものがあるのだ……。そして私が彼女の身繕いやおしろいの内に見たものもそれなのだ。」

「その通りですね……！」ジャンはすかさず言つたが、その顔は一層自由に息ができたかのようにホツとしていた。

彼がそれについて予見し、そうではないかと疑つていたほとんど知覚されないようなニュアンスをボンメル氏は指摘したのである。それらのニュアンスは実際に実在していたのだ。彼のしつこい心配事は一瞬にして消えてしまった。彼は無罪放免されて自由になつたのである。ジャンはそれ以上に弁明して、今度はボンメル氏を安心させる為かのように、言つた。

「彼女が行つてしまう前に私は、あなたの介入によつて、彼女を許すことを望んだのです。私は、後悔

の最も弱い徴をさえ窺っていたのです。そして私はその閉ざされた顔、最も頑固な自尊心にぶつかったのです……その憎しみに。それで私は別居は決定的なものであることを理解したのです。」

「そうだ、別居は決定的なのだ。」ポンメル氏はジャンに、決然としているが優しさに満ちた視線を向けながら言った。「お前はもうその事を考えてはいけないのだよ。」

「私は五年間は非常に不幸な人間でした。あなたもそれは知ってはおられなかったでしょう。私は恐るべき試験を絶えてきたのです。そして十分な忍耐力があれば私は……思うのです。」

「お前は自分を責めるべきものは何もないのだ……。私は彼女がお前の一言でどうしてあんなに容易に別居に同意したのかと思ったのだ……。おそらく虚栄心と偉大なことや破局を好む気持ちではないかと思うのだ……。彼女は媚態の役割を成し遂げたのだ。そして全く別の人物の中に入ってしまったのだ。」

「あなたは彼女の最近の消息を知っておられますか。」

「私はジュリー・デッカから様々な情報を得ているんだ。彼女はスツカリ引きこもり、非常に威厳を持って生きている。それは回りの全ての人を驚かせている。ただ一つの点では彼女は変わっていない。つまり彼女の憎しみということだ。お前には一通も書いてこないのかね。」

「私は二度ほど昨年には書きましたが、彼女は返事をくれませんでした。私はバルヌリー商会から扶助料を送らせています。」

ジャンはナタリーの消息については何時も聞きたいと思っていた。そして彼は、新聞に目を落としていて、テーブルの前に坐るために立ち上がったポンメル氏に尋ねることを今なお望んでいた。

「失礼ですがお暇します。」

「ジャン、お前はセレスティーヌという女の使用人をおいていたかね。」

「ええ、雇っていましたよ。」

「ラクルジーユが私にその事を話してくれたのだがね、私はお前の家でそんな使用人を見た覚えが無いんだよ。」

「彼女は永い間いたではありませんからね……。あなたは覚えてはおられませんか。小柄の病身の女でした……。彼女はアルコール中毒の娘でしたね……。その後メラニーが代わったのです。」

「それは恐ろしいことだ。人は誰構わずに、自分の家に引き入れる、泥棒でも狂人でも飲んだくれでも。そしてこの人々は別のところへ行つて、家族の真ん中に入り込み、自分たちの頭をよぎったことを全てまくしたてるのだ。このセレスティーヌという女はラクルジーユの友人の所で雇われている、ラ・ロシエルで……。彼女はお前が悪い夫であり、ナタリーを愛しておらず、彼女が犠牲者だと主張しているのだ。」

「彼女が、私がナタリーを愛さなかったと言っているのですか。」

「彼女はおそらくいくつかの幻想を持っているのだ、アル中の女なのだから。彼女はナタリーに対して大した同情心を持っているように思えるのだ。」

「彼女たちは実際非常に理解し合っていましたからね。私達は彼女が時折発作を起こすのですと雇っておくことは出来ませんでした。夜には彼女は私達を呼んだのです……。彼女は一人の男が見えたといつて……。この幻惑は極めて不快なものでした。年取ったメラニーと一緒に私は癪癪を起こすことはありませんでしたからね。それではさようなら。」

ジャンは事務所の扉を閉めて、中庭に向いている廊下のガラス入りの小さな扉を引つ張った。すると

夜の闇の中に、窓の側に立っているポーリーヌに気が付いたのだった。

「私あなたたちを見ていたんです。」と彼女は言った。「私マルセルの所からの帰りで、この窓の横に立っていたのですわ。こちらの姿を見られないで、話し込んでいる人々を目にするのは魅惑的ですわ……それにとっても明るく照らされてた所を。」

彼はガラス窓の方に向いた。

「私は自分たちがこんなにあなたの近くにいて、よく見えていたことも思いも寄らないことです。壁があるで閉じ込められていると思ひ込んでしまふのです。」

「外から私はあなた達の姿を奇妙な昼間の明るさの中で、非常にハッキリと見ていたのです……。人は話すときに相手の方を見ないものですね……。」

彼はポーリーヌが窓からの反射に照らされているのを見たが、顔は白くて真面目そうであり、その小さな目は輝いていた。そしてビロードの帽子の様に色濃く見えたのだった。しかし彼女は夜の闇の中で後ずさりしたのだった。

「私はあなたの伯父さんが新聞を読むのを邪魔してしまいました……。帰ろうと思った時は遅くなっていました、そして私は長居して……。」

「私もあなたたちをずっと見ていました、そして行つてしまいたいと思ひました……。私は礼儀に叶つたことではないと感じたのです……。そして別の意志が私を引き止めました……。私達の最善の意志はどの様にして知ることができるのでしょうか……。私はそれを一人の牧師に尋ねているのではありません……。そうではなくてジャン・バルヌリーに尋ねているのです……。私はあなたが牧師であると考え

ことは望みません……。それは私を退屈させるのですわ。私達と一緒に食事をされませんか。」

彼は家のボーチの方へ進んでいったボーリーヌの後に随いて行つた。彼は彼女の姿は区別できなかったが、彼女の声が彼を導いてくれた。が、それは少し意地悪で大胆な声であり、何時も彼のなかの人間を、その真実の根底を狙っているように思えたのだつた。

「いいえ、私は自宅で食事することは出来ません、私は招待されてはいませんから。」

「私があなたを招待しますわ。」

「それだけでは十分ではありません。あなたの招待は遅すぎるのです。私にはもつと正式なものが必要です……。例えば来週ならば……。今晚は駄目です。私は行きます……。」彼は闇の中でボーリーヌの手を捜し求めながら言つた。

ジャンはこの暗闇から無理にも離れて、非常に急いで遠ざかったが、彼が寒さで震えていたかのように大股で歩きながら、明るく照らされた窓の前を通りすぎる時には、ボンメル氏の事務所の方へ頭を向けることはなかった。

∴

「旦那様の帰りは遅いですね。」とメラニーが、自分の青い仕事着を、その汚れを隠す為に、その青い仕事着を肘までまくり上げて、蠟引きされたテーブル・クロスの上にお皿を置きながら言つた。

「そうだね、メラニー、すまなかつた。私はボンメル氏に引き止められたのだ。」

ジャンはその使用人の名前を、感謝の気持ちを示す為に、力を込めた、丁寧で親切な調子で言った。彼はそうすることで食事の間は彼女に話しかけることなく済ませると思っていたのだった。

「ではポンメルルさんにお会いになったのですか。」

「そうだよ、メラニー。」

ジャンはその好奇心を見抜いていたが、彼女は黙っているのに慣れていたのだった。彼女はナタリーにも仕え、その出発の時にも居合わせたのだった。それ以来ジャンは自分の妻のことは決して口にしなかった。メラニーはその孤独の中で何を考えていたのだろうか。自分の主人に対する尊敬の気持ちから、パン屋や郵便配達夫の前では無言であったが、ジャンがポンメルル氏から一通の手紙を受け取ったり、彼に会ったりした時には不安げであった。家の中の事柄や、この使用人の沈黙で、ジャンは何時もナタリーの回想にぶつかるのだった。この女はおそらくナタリーをセレスティヌと同じような想像力で見ていたのだろうか。その点では彼女は何も理解しているはずがないのだ。その場に不在である女をなんじることなしに、この女をどの様にして安心させることが出来るだろうか。おそらく正当である様な一つの考えをどんな権利で変えることが出来るのだろうか。どうしてこの単純な人々が誤っていて、ポンメルル氏が正しいのだろうか。

「いや、メラニー、今夜は煎薬は飲まないのだよ。」

彼は壁と壁の間の狭い小階段から自分の仕事部屋に上がっていった。昼間はこの部屋は庭とシャンジー街に向いていた窓のお蔭で非常に明るかった。夜にはランプがテーブルや、製本されていないで、しばしば開かれたままの本や、背中がはげ落ちたり、裂けたりした本を照らしたのであった。ジャンは決して

シャッターを締めなかった。そして時折遅くなって帰っていく荷車引きが楡の樹の枝の間からその窓が照らされているのを目にするのだった。

彼は長いフロックコートを脱いで、褐色の上着を着て聖書を開き、自分が説教の時に選んだ文句を再読するのだった。『我未だ燵っている蠟燭の燃えかすを消さず。』それから彼は聖書を又閉じて生物学の本を読み始めたのだった。

ジャンの考えは予言者の言葉『我未だ燵っている蠟燭の燃えかすを消さず。』に依然として結び付けられていた。この偶然に選ばれた言葉は今や非難の言葉の様に心に触れたのだった。

神に仕えること、それは自己を放棄することである。しかしジャンの考えは何時も自分自身の上に返ってくるのだった。つまり彼は自己という觀念に、そして人間的な条件、更に大地に立ち帰るのである。人間が消去できる過ちは人間に関与するのみなのである。いかなる神の恩恵も神の許しも、その過失が償うことが出来るときでも、それを消去することは出来ないのだ。

彼は引き出しを開けて、一つの封書から、ナタリーが出ていった時の様子を書き留めておいた紙片を取り出したのであった。彼がその文書を読んだのはこれが初めてのことであつた。

「ナタリーは今日、一八九八年六月三〇日、四時の汽車で出発した。二時に（私はタトルで夕食を済ませておいた）私は彼女に私の書斎に来てくれるように頼んだ。その部屋の真ん中にはトランクが開かれていた。メラニーは彼女に着物を着せていた。（確かにその使用人はまだその事情が飲み込めてはいなかった。そしてその使用人は不安そうに、《冬のものまでも！》と言っていた。）私はナタリーに、自分

は彼女と幼い娘のアリーヌと別れるのは残念だと言った。私は彼女に、ダールリアとの手紙の交換について思い出させた。彼女は肩をすくめた。私は、これらの手紙は重大なことは何も含んでいないが、ボンメル氏は破廉恥であると判断したのも当然であるような軽率さを示すものだと言った。私は彼女に、アルトゥールの家での彼女の態度と身繕いと、牧師の妻としての相応しくないそのやり方などを思い出させた。彼女は憤慨した風をして押し黙っていた。一瞬私はかっとなったが、自分の怒りを抑えた。そして私は穏やかに言った。《私はダールリアに対してはどんな嫉妬も感じてはいない、私はそんな詰まらないことからは心は遠くにあるのだ。そして私は晴々とした気持ちでお前を判断しているということを、そしてお前は許されないことをやったと言うけれども、若しお前が少しでも後悔の気持ちを表明するならば、私のところに止まるように頼むだろう。》彼女は部屋の方に頭を背けて、自分のハンドバッグの中を調べに行くために私のところを遠ざかった。それからアリーヌを呼んだ。やがて戻ってくると、彼女は言った。《あなたが仰りたいことはそれだけです。》それが彼女が口にした最初の言葉であった。《そうだよ、その他の点では君は私達の約束のことを知っているだろう。君は、若し自分に気に入るなら、リモージュのラルマンディーの家に住むとよい。君は何の不足もなくやっていけるだろう。君は、私達の生活が慎まし過ぎると思っていた。リモージュではもっと良い生活が出来るだろう。メラニーが駅まで送っていく。私は彼女に言っておこう。》私は二人の病人（クラウジとペルソヌ）を見舞うために出掛けた。私は六時に戻ってきた。メラニーは泣いていた。私は彼女に、自分は夕食はボンメル氏の所です、今後はこの家ではもうナタリーのことは口にしてはならないと言った。十時に帰ってきて私はこの文章を書いた。」

ジャンは、自分のノート・ブックから引き裂いた一片の紙に、正にこのテールで書いた利那のことを思い出していた。彼は遠くの犬の遠吠えのような声で、涙をしゃくりあげながら、頭の上にエブロンをかけてメラニーが泣いているのがまだ聞こえてくるようだった。

しかし二年後の今日では、非常に厳密で誠実であったこの手記を読みながら彼は不正確さを感じたのであった。今では書き漏れが明らかなのだった。彼は「私は彼女が別れていくことに満足している。私是我慢ができないのだった。そして私は五年間妻を嫌っていたのだった。」と書いていなかったのだ。

彼はこの偽りの証言を取り除くことを欲した。それから思い直した。そして椅子の上が上がって彼は本棚の上からダンボールの箱を取った。その封筒をその中に保管する為にそれを開いてから、彼はその中に証書類や古い紙挟みの間にナタリーの昔の写真を見つけた。彼女が十七歳の時のものである。彼は褐色の巻き毛に明るい眼を持って、期待で一杯であるかのように、微笑まずには話すことができない若い娘を非常にハッキリと思い出したのであった。

この眩しいような小さな娘、この陽気な娘が、ナタリーについて彼に残されていた唯一のイメージだった。彼はここで生活した女をもう思い出すことが出来なかったが、それはあまりに震えるような若さと笑う眼をして、あまりに食欲で、あまりに近くにいて耐えがたいようなものとして遠ざける為の厳肅な仮面である宗教的な威厳の虚偽の内に沈んでしまっ、まるで見たことが無かったようなものなのである。彼は幸福への意志、人生への希望を押し殺してしまっていたのだった。そこには聖書に依って罰せられているのではない彼の過失が在るのであるが、それは彼が良くは理解していないのに、確かなもの

であり、おそらくナタリーだけが全部を知っているものなのである。

II

ジャンは自分がどうして牧師になったのかを自問した時、彼が若いときに取った自分の決心を思い出すのであるが、確固としたもので、彼の生活に非常に深い影響を与えた一つの決断の動機については厳密には納得していないのである。

子供の時には彼はリモージュのガリバルディー街の祖母の家に住んでいた。この家は彼が自分の家にいるように思わなかったので、何時も冷たくて美しいものであるように思えたのだった。彼に対してその家の人々の同情するような態度は彼を慰めてくれるというよりは驚かせるものだった。彼は自分の両親を知らなかった。彼はその点で、自分が人生の奇妙さの犠牲者になったかのように、社会との関係を誤らせた窮屈さを感じていたのだった。

彼がリセから戻ると、鉄の扉の前に止まって、中に入れてもらう為に数回呼び鈴を鳴らしたのである。彼は花崗岩と鉄格子の壁に囲まれた中庭を横切ってガラスが張られた玄関に入っていた。この家の全ての扉は重く高かった。そしてジャンはそれを開きながら、それらと共に壁の一部を運ぶような感じがしたのだった。壁紙、ブラインドのヴェールで覆われた裏箔の無い鏡、絨毯、その赤くてガーネットの

色調にも拘わらず、その家は親密で本当に心地よいものは何も示していなかった。ただ単に沈黙と偉大さと強固さ、そして不動で長持ちして気後れさせるような家具があるばかりなのだ。

冬には夜明け前にジャンは静かな群衆のざわめきや、目に見えない通りの上の木靴の足音で目覚めさせられるのだった。何千という労働者達は、道路を連隊が行軍するように、近所の工場に入っていくたが、そこはテラスの上の家のように高い塀で隠されていた。この騒音は鎧戸を通して入り込む昼の光がマホガニーの机で部屋のなかに届く迄長い間続くのであった。そして彼のベッドではジャンは果てしない行列の響きによってぞっとさせられるのであったが、それは今まで決して見たことがなかったし、しかし階段の中で聞こえる不思議な言葉「子供たちをヴィエンヌ河の岸边に連れていつては行けない、失業者達がいるから。」に結びついていたのだった。

彼が客間に入るとき、一つの声が言った。

「入ってきたのは誰なの。(Who's there?)」

それは祖母であったが、彼女は入り口の方へ背を向けて四角い安楽椅子に坐り、白い大理石の暖炉に向いていた。そこではセントラル・ヒーティングの暖かさにも拘わらず薪が燃やされていた。夏には戸外の入り口の庇の前のフランス窓の戸口にその肘掛け椅子が移動されたのだった。ダヴィッド・バルヌリー夫人は朝は非常に早く起きて聖書を読んだ。それから彼女は夕方まで、編み針で規則正しくウールの布のカヴァーを作るのを止めなかったのである。彼女は手足は不自由であったし、極めて丈夫であったが、杖につかまったり、孫の一人の手につかまったりして何とか部屋から部屋へと行ったり来たりしたのだった。太っていて色の良くない両頬にも拘わらず、その顔は美しい卵形をしており、鼻はほっそ

りして、大きくてびくびく動く鼻孔があった。一瞬自分の繕い物を膝の上に置いて、彼女は大きな眼鏡の後ろで、あたかもその考えを詮索することを欲しているかのように、白内障を手術した自分の眼でジャンを見つめたのだった。

「お前は自分がお祖母さんの可愛い子供なのだということが判らないのかね。」(Don't thee know, that thee is thy grandma's little child ?)

ただ両手だけは太くはなく、活発で細やかで、何時も広い袖口から出ているレースの下で忙しそうだった。彼女はリモージュに落ち着いてから、クエーカー派の制服を身に付けるのを止めたのだった。彼女の黒い絹の服の内では一つの痕跡が残っていたが、それは一枚だけの布で、前がボタンで留められた服や、彼女の非常に美しいが装飾の無い下着、目立たない宝石、そして仕事への趣味、事業への感覚、物事に動じない信仰、自由への愛、そして何時も夫の不忠や子供たちの小競り合いやこの世の醜さ等を見しようとする意志の内に在ったのである。

一八四〇年にダヴィッド・バルヌリーと共に幼いロベールを連れてニューヨークからやって来たのが彼女であったが、その時彼女はロベールをヴィエルゾンからリモージュ迄の乗合馬車では膝の上に乘せていたのだった。ロベールと言えば現在の家長であるが、彼は彼女がダヴィッドの回想から切り離すことが最早出来ないものであり、このロベール、今は不在者の彼は様々な会話の唯一の主題であり、全ての決定は永い間注釈を付けられはしたが、議論されることは決してなかった目に見えない支配者で、「ガリバルディー街」と呼ばれた群衆と建物の権力の全体の管理人であった。

客間でジャンは子供の本が並べられた小さな回転書棚や、尻尾の先に房を付けていたがライオンのよ

うに丸刈りにされたブードル犬を見出したが、それは投げたボールを追つ掛け回つたテラスでは人の後ろを付けて回つたのだった。その工場は庭の木々の葉のために煙を抑えていたのだった。しかしジャンが時折入り込んだ仕事場では労働者達は白い光と石灰の塵埃の中で働いていたのだ。何人かの者は、頭と両方の手の上に陶器を乗せた長い板を支えて機敏に階段を登つていく時にはパン屋の小僧に似ているのである。また別の者たちは練り粉のボールの前で、両手を、何かを差し出すような素振りで広げて一つの形を創り出すのだ。

しかしジャンは花崗岩の階段の下の中庭からは離れずにいたが、そこは干し草の匂いをする発送用の部屋と煉瓦で囲まれた入り口を持つ家の様に大きな窯の間にあつた。陶器の一杯に詰まつた樽が馬車に積み込まれる為に絶えず転がされていたが、その馬車は大きな答の音と共に石畳の舗装道路の上を出発していくのである。

ジャンはリモージュの近くのジョンシュロールの別荘でヴァカンスを過ごしたのだったが、そこはロベール・バルヌリーが、娘のジュリーがポール・デッカに嫁いだ時に彼女に与えたものであつた。ロベールの先妻のものであつたその古い家は、増築工事で圧縮されたかのように、今もなおタイルの屋根根を持っていた。ヴェニススの宮殿を真似た二つの館は、非常に長いヴェランダで繋がれていた。ロベール・バルヌリーはその別荘と庭園の見取り図を、自分が工場を建設したように、建築家やエンジニアの援助無しに設計したのである。

彼はパリでゴティック風の小さな屋敷に、出来る限り少数の使用人と共に、お供も友人も無く、自分が本当に好む唯一の贅沢品に囲まれて住んでいたが、その品々は日本の版画、支那の陶器、そして古代

のブロンズ像等である。美しい素材、革装のきめの細かさ、漆の繊細さ、水晶等、彼が長くて少し反り返っていて女性的な細やかさをもつ指で愛情を込めて撫でたりしたそれらのものが、その形と同様に彼を魅了していたのである。それらの物に対する彼の関係には彼の如何なる他のものには現れていないような極端な感受性を感じられたのである。彼のタナグラ産の陶器の像は決して完全なものではなかったけれども、ギリシャ芸術の最も直接的な表現を表していた。彼の『鏡の中のアフロディット』は足の部分が少し破損しており、背中が傷んでいたが、絶対的な調和の感情を表していたのだった。

彼は赤い壁紙が張られた寝室の小さなベッドの側で、彼が陶器の為に彼が採用した装飾の企画を検討しながら、仕事をしていた。彼は在庫品の一覽表を調べて、陶器の備蓄を増やしたり、減らしたりする必要がある場合を判断し、非常に複雑な感覚で一つの工場の基本的な呼吸を規制していたのだった。そしてそれが絶えず過剰によって息苦しくなる危険があったり、或いは商取引の知識不足によって抑圧させられたりすることがあったりするのだ。それから彼はムードンの仕事場に行ったりして、着色された石版の焼き付けを監督したりするのである。

彼はめつたにリモージュには行かなかった。そして遠くからその工場を指揮していたが、彼は一度限りのものとして、最小の詳細に至るまでその機構を確立してあったのだ。彼は決して説明することなく書面で指示を与えたが、彼の厳密で短い命令はそのあらゆる意味と共に課せられたのである。

夏に彼がジョンシェロールで数日を過ごした時、その裁ち方は月並みなものであったが、その素晴らしい体躯にピツタリと合っていて彼に品位を失わせることのないマリン・ブルーの上着で、もじやもじやになった非常に細やかな白い髭のままで、スリッパでそのサロンに入ってくると、各々の者は彼独自の

態度に気が付いたのだった。彼は優しくゆつくりとした声をしており、彼の簡潔な言葉は、そのフレイズの終わりがハッキリと発音されたが、応答は無かったのである。彼が沈黙している時には、彼の無言は尊重されたのだった。彼が少し狡く笑いながら自分の小さいが鋭い目で見ながら話しかけた時には誰も彼に反論することはなかった。

ジャンは自分の伯父の側で品質を尊重することを学んだのであった。バルヌリーは言った。

「この世では何時も我々のものよりも安いものが売られている。というのは彼等は石灰を手軽に得られるし、労働者に高くは支払わないからだ。しかし美というものが我々の専売特許なのだ。」

ジャンが従兄弟のフレデリックの指導の下に、自分の職業的な教育を始めた時、最も美しく最も高価な素材、良い趣味、配慮と言ったものが、この工場の至る所で見出された合言葉であったのである。それはまた通俗的であるが良く売れていたドイツの陶器に取って代わることを可能にしてくれる唯一の商業的な方策でもあったのである。

ジャンがこの工場に入る十年前はドイツ陶器は、リモージュ陶器の良い市場であるアメリカで支配権を持つようになつていたのである。ロベール・バルヌリーは自分の父がフランスに与えていた顧客を再び征服しなければならなかった訳である。彼は新しい窯を建設させて、製造と装飾の為に機械的な方法を取り入れたのである。今まで手で描かれていた模様は慣れでなされ、何の能力も無しに行われたのだった。機械のお蔭でバルヌリーは模型の制作を本当の芸術家に任せることが出来たし、それらを絶えず刷新することが出来たのだった。

彼が絶えず形や装飾を変化させて、アメリカに一つの流行を生み出させ、それは女性が服を取り替え

るように、食事の際の装飾品を取り替えるという伝染していく要求、そしてそれが可愛らしくて新しく、フランス製であるのでバルヌリーの陶器を一セット買い求めたいという欲望などがそれなのである。それでドイツ陶器は一掃され、一万五千人のリモージュの労働者は再び仕事を見出すことになったのである。

その労働者はその後、機械に結び付けられた正確で迅速なやり方を仕込まれたが、その工場は以前よりも美しい品物を生産したし、少しばかりのものを奪われたこれらの人々は、自分たちの周囲で、彼等がそれに連帯している偉大な職人芸の存在としてのそれを感じたのであった。つまり本能的に機械と窯のバラバラの動きを感じ取り、それを結び付け、自分の内で集中した職人のバルヌリーなのだ。従って彼のやり方が非常に見事であったので、彼がその模型の制作者と一緒に新しいセットを作った時には、その陶器は全面的に彼の手から出てきたように思われたのであった。彼等はバルヌリーのところで働いていることに誇りを持っていたのである。というのはそこには最も大きな建物が在ったし、多くの人を雇用していたし、最も美しい陶器を作っていたからである。素早く撫で回したり、爪で弾いて音を出させて、傷のないお皿をえり分ける黒い仕事着を着た男、そして轆轤の周りで回転している石膏の固まりの前に直立して、両手の間でピラミッド型の流動体を立てて、指の圧力でカップの模型を作り上げている白い仕事着の男、そしてその陶器に装飾を塗り付ける女、そして小さな穴から窯のバラ色の口を見守って、火にその陶器を当てている竈係の男、更にその誤ることのない手に絵筆をしっかりと持って、回転しているコップに円を描いている画家、瑪瑙で金線を磨いている研磨係の女、石膏を砕く人、鑿を用いる人、七宝焼の陶工、雑役夫、その全てがその静かな仕事場で一つの大きな冒険に参加するのである。

それはジャンがその意味を知っていた成功への冒険であつた。それは売られることが出来なければ、一つのものを作ることは無価値のことなのだ。ドイツでよりも高い費用を要するリモーージュで陶器を作り、それがより美しいという理由でアメリカ人に売るということは自然なことではない。この産業、自負心の強い多数の人々で一杯になつた花崗岩とガラスのこの建物、一日中鉄の格子を通過していく陶器のこれらの積荷は奇跡で存在しているのである。つまり美への不安定な趣味、流行、名前の威光、この壊れやすい奇跡、その環境の気まぐれな流れは抜け目のない一人の人間がある刹那、味方に付けることとなつたものなのである。

ジャンはその支配人達の言葉もその苦さも知っていた。彼等はいふ言つたのである。「労働者達が下らないことでストライキをする間に、ドイツは決して失われることのない地歩を南米に築き上げるのだ。要求する者達は何時をもっと多く支払われている者なのだ。リモーージュの労働者はドイツの者達の二倍を獲得しているのだ。」確かに彼等は失業、病氣、老衰等を考慮しなければ、自分の生計を立てることが出来る。しかしジャンは支配者達のもっと秘密のいくつかの理由を聴いていたのだつた。「我々は極めて正確な計算をすることは出来ない。労働者のことを考えたり、彼等を理解してその利害に入り込むことはまだ早すぎるのだ。我々は大きなお金の蓄えを求めるもう一つの闘いに従事しているのだ。そしてその際には絶えず工夫し、毎日闘いに勝ち抜き、負傷者のことを考えずに、全ての者を救わなければならないのだ。ここには広くて明るく暖房が施された建物がある。これ以上のことをすることは出来ないのだ。」

労働者達が人生の唯一の慰めを見出したのがこれらの美しい建物なのである。彼等は長い列を作つた

り、立ったり坐ったりして、似たような仕事着を着て良い顔をしていたのだ。しかし彼等は耐えがたい埃や、自分を殺してしまうような有害な蒸気を吸い込んでいた。ジャンはヴィエンヌ河の岸辺に行つて、ゴティックの橋の側で田園情緒を捜し求めた時、彼等の貧しさを目にしたのである。その貧しさは鉛色で煤けた荒壁の家の上に現れていたのだ。そこでは一部屋に五人も押し込められていたのである。しかし夜が明けると妻はその家を出て工場へ行き、そこにはもう誰もいないのだ。

石で舗装された道で通行人の足音しか聞こえない静かな山の手地区では、ジャンは狭い通りと隣り合つた黒ずんだモルタルの同じ不格好な正面を貧民窟の奈落のように認識していたのだ。しかしこれらの通りの端に何時も現れていたのは周囲の丘から切り取られた草原の小さな風景であり、原野の呼び声の様に、路地の地平線の向こうのあばら家の間にぶら下がった遠くの爽やかな遠景であつた。

牧場の人を迷わせるような展望。そこには別の不幸も隠されているのだ。ジャンは古い記憶からの次の様な文句を思い出していた。「大司教様、毎年のように私達の教区から、パンが欠乏している自分の生まれ故郷を捨てて、おびただしい数の人達が出て行きます。」その逃亡者達がこの町を建設したのだが、その荒々しい古色はその昔の起源の古い貧しさを思い出させたのであり、しかし自然よりも寛大なる社会を作ろうとしての事だつた。

この社会は依然として非常に残酷であるのに変わりはなく、困難な道、即ち不正や力によつてのみ育てられるのである。社会はその本質において悪であり、改革不可能であるのだ。しかしジャンにとつては、もう一つの慈善と愛の世界が存在していた。報いや遅れた約束ではなく、確かで現実の世界なのだ。彼は眞実の世界に生き、人を苦しめたり圧迫したりせず、人間の精神的な運命と、社会の悲劇的な必然

から離れたところで大切にしなければならぬものの自覚を見つけ出す為に牧師になることを欲したのだった。

ロベール・バルヌリーは一人の人間をその才能、仕事、成功に従って評価したのであり、感受性に結びついた著名なメリットというものが存在しており、実証的なものの何も明らかにされることはないということ疑わなかった。彼は自分の甥が生きるに最も値すると判断していたその生き方を軽蔑していた。ジャンは、自分の伯父にあつては、行動に於けるある種の厳しさと、様々なものに適応する鋭い知性を賞讃していた。しかしその片意地には閉口していた。彼等の意見の不一致は社会問題には向けられず、人間を評価するその流儀にのみ触れられるのだ。ジャンが自分たち同志のこの意見対立に気づいたのは、彼がバルヌリーの息子ギイに対する不当さを知ったときのことだった。ジャンは自分の従兄弟でバルヌリーの末っ子のギイを、のんびりしていて細やかで非常に優れた天性の故に愛していたのである。子供の時からジャンは自分がガリバルディー街では部外者であるように感じていたのだった。彼はこの家族の一員となるのに年貢を支払わなければならなかった。そして彼は親切心とか母親の密かに味方してくれるような優しさ、そして怠けたりする自由というものを全く知らなかったのだった。彼はいつも厳しく判断され、自分が何時も優秀な生徒であることが期待されていたのである。そして彼は求められた通りの生徒であり、孤独な勉強家であり、一度でも叱責されることは耐えることができなかった。ろう。十八歳で彼は文学士の称号を獲得した。彼は工場で三年を、そしてアメリカで二年を過ごした。それから彼は自分の真価を示さなければならなかった決定的な日に、自分の良き手段を行使するのを拒否した。そして彼は伯父に、自分は大学の神学部に入ったと書いたのだったが、自分の決心では理想の追

求なのか、或いは恨みからのそれなのかは解決できていなかった。

ロベール・バルヌリーは特に選ばれた熟練工や、特に模型製作者に対しては極めて高い評価を持っていた。そしてこの芸術を知るためには一つの人生だけでは十分ではないと言ったのだった。つまり模型製作者の息子でなければならないのである。しかし彼は指導部の協力者には警戒しており、実行出来ない計画しか提案することはない技師たちを嘲笑していたのだった。ただ彼だけが指導部の統一された感覚を、そして細部と全体についての直観的な観点をリモージュとニューヨークについて持っていたのだった。彼はタイムリーな技術的完成を取り入れたり、税関を手玉にとつて代表者を選んだり、労働者にはストライキを停止させるために思慮深いメッセージを向け、模範品を発売し、一つの設計図を修正すること等が出来たのであり、そうすることによって大胆な方策を実行し、彼の後に従っていたリモージュの二十人ばかりの同業者に、彼らが彼の優先権を尊重するという条件で、アメリカでの分け前を残しておいたのだった。

そして人々は彼がジョンシユロルにしようが、パリ、或いはカンヌにしようが、彼の存在は何時も感じられていたのだった。彼は冬にはグランド・ホテルの一室で朝七時には海に向いていたテーブルに坐っていたが、彼の横にはお皿の山積みが置かれており、在庫帳に眼を通すのである。彼は儲けの機会より以上に、取引では、人生の接触、現実と理念の関係、そして神の承認を遙かに重視していたのである。彼が自分の悦楽と考えていた諸芸術の内では、その特徴、細部の完成、欺くことのない素材を愛していたので、冒険はやらないで空虚さの内を考え、安楽さを選ぶ者、自分の立場に安住する官吏、何でも構わずに書くことができる作家などを軽蔑していた。彼は独立心と伝統の入り交じったものによって当惑さ

せたのである。その行動は予見することが出来なかったのである。ゆつくりとして少し嘲笑的であり、女性的なしなやかな手をしており、自分の意志しか知らず、愛と憎しみに於いては激しやすく、衝動的に二度も結婚し、自分の利益は顧慮しないこの非妥協的な人間は自分の息子たちには厳しい規律を押しつけ、先ず第一にその工場に入る義務を課していたのだ。

しかし彼は子供たちを厳格に判断し、彼らには取るに足らない仕事しか取っておかなかった。二五年來フレデリックはその工場では取るに足らないポストを占めていただけであり、今なお原価などは知らなかったのだった。ギイは画家になり、思うがままに生き、自分の好みに従って結婚すると宣言したのである。彼が死ぬまで、バルヌリーはギイに会うことを拒否したのだった。

ロベールはジャンの手紙を受け取った時、カンヌにいた。彼は甥の強情な性格を恐れていて、この余りに一杯に詰まった頭の中にはたくさんの間違った考えが住んでいるのではないかと疑っていた。彼はその甥が厄介払いされることに腹を立てたのではなかったが、この独立心は彼を苛立たせたのである。そして彼は方眼紙に、規則的で紋切り型で、横線が勢い良く引かれ、の字以外は、自分の会計係のカペーのそれとは異なることがない様な密かで繊細な彼の書体で、ジャンに返事を書いたのだった。「親愛なる甥よ、私はお前の計画を承認する。この世では牧師は静かであり、将来も良い地位だろう。お前は蓄えがたっぷりあるのだから、あまり辛いこともないだろう。」

ジャンはこの文句「お前は蓄えがたっぷりある。」を思い出した。彼がバルバザックで、ポンメルル氏の提案で牧師に任命された時、リモーージュに帰って、会計係のカペーに言った。

「私はその工場からお金を受け取りたくない。その配当は私の口座に入金しておいてください。」

「私は、ジャンさん、あなたの計算書の利子をお送りします。」

「いいえ、送ってはいけません。私は自分の計算書を知りたくはありません。私は誰からも手紙は貰いたくはないのです、十分な給料を受け取っているのだから。」

「ロベール様にその様に申し上げておきましょう。別に不都合なことは無いだろうと思いますよ。」

平然として実直でもあったカペーはガラス張りの小部屋で自分の金庫を預かり、労働者に給与を支払い、土曜日には金貨銀貨の棒包みを受け取りにフランス銀行に行つて、それをシャルトゥー(Charretou)と呼ばれていた小さな手押しぐるまで運んだ。彼はまた家族の一人一人の口座も管理していた。お金が欲しい時には誰もが彼に愛想のよい顔をして対座したのだ。そしてその年の希望については彼に慎重に質問されるのである。ほとんど死にかかつていた年老いたダヴィッド・バルヌリー夫人は自分の寝台の側に彼を呼んで、相談するのだったが、彼女は自分が英語で話しており、彼がそれを理解できないことに気付かないのだった。

カペーは年に三千フランを稼いでいたが、彼の妻は五人の娘を育てることは出来ないとこぼしていたのだ。彼は間もなく昇給されると確言していたが、実際は自分はわずかの恩恵をも願うことが出来ない程高い立場を占めていたのだ。上役たちの側にいて彼には彼らの精神がしみ込んでいたのである。つい最近の危機が備蓄された資金を吸収してしまつたのである。職工達の経費が原価の半分にも達していた工場では賃金を上げることは出来なかつたのだ。人間たちに対してのこのつましさは物事には適応されないのだ。その疵がほんのわずかでも、その皿はお払い箱にされるのだ。擦り切れることのない金がい用いられる。大した費用をかけて設備が刷新される。他に模倣品が出ると直ぐに新しいセットは投げ売

りに出される。ニューヨークには支店のビルが建設される。製造過程でのこの贅沢はライヴアルのドイツ人と闘い、生き残る為に必要なのである。カペーはバルヌリー自身と同様にこの原則を知っていたのである。

それに職業上の必要から何百万というお金を動かすことを考え、小さな会計の窓口からあれ程多くの金貨を通過させ、優雅な訪問者達を迎え入れ、終日ガラス戸の後ろで微妙な喜びを感じていた一人の人間にとつて昇給の考えなどは何の意味もなかったのである。カペー夫人が不平を漏らしていた昇給をカペーは獲得することが出来るのだろうか。

カペー夫人は夫に、彼が全く理解できないような計算書を示して絶えず話しつつづけていた。彼女は悪評しか見なかったのである。自分の健康、物価動向、気温等が彼女に大きな苦痛をもたらすのではなくれば、彼女は工場を非難するのだ。カペーは善意の気持ちを持つて妻の嘆きに耳を傾けるのだったが、本当の共感を持つてのことではない。彼は苦しみも悲しみも憤りももうこれ以上は信じないようになっていたのだ。

カペー夫人は六番目の娘を生んだ時、阿片の丸薬を飲んで危うく死んでしまうところだった。しかし何時もの時間にはカペーは自分の事務所に入ってきたのであり、誰もこの出来事を疑うものは無かったのである。彼はバルヌリーに次のように書いた。「私はあなたに私達の可愛いナタリーの誕生をお知らせしたいと思います。赤ん坊は昨夜三時に生まれました。母親は不安を感じさせることもありましたが、今は大丈夫です。」

彼はこれを書きながら非常に感動していたので、個人的な感慨を抑えることができなかった。つまり

「子供たちは大きな幸福を与えてくれる。」ということなのだ。彼にとってこの刹那には、「子供たち」は鳴き声でも、ふくれ面でも、そして三人の娘たちが眠っている小さな部屋でもなかった。彼女たちは大きくなるに従って、一人一人がこちらとしては拒否しなければならぬことをいつも要求する。彼にとつてはそれらは眼を潤ませる一つの感情であつたのである。

数年後になつて、外部からやつて来た一つの噂がカペーに届いた。学校の女の先生が或る隣人に「幼いナタリーは魅力的だ。」と言つたのである。カペーは自分の娘を見た。彼は彼女が美しいということを知らなかつた。しかし全ての者がそういつているのだ。婦人たちは彼女を見るために彼等のところへわざわざやつて来た。「この娘はお化粧をするべきです。」カペー夫人はもつと優しく話していた。彼女たちの間では決して意見が一致していた訳ではないが、年の上の娘たちはその娘に同じように優しい視線を投げかけたのである。ナタリーにとつては服に刺繍をもらつたり、新しい髪形を考えたりしてもらつたし、エナメルの靴も買つてもらつた。至るところで彼女が褒められることが望まれたのだった。

カペーは敢えて昇給を要求した。直ちにその増額分は秘かに慎重なやり方で与えられたが、それは口にするのも不都合なことであつた。

ナタリーは全ての人に奇跡的な希望をもたらしただつた。その奇跡はクリスマススの日に、バルヌリー会社が労働者の子供たちの為に、見本陳列室で行つた祝宴の際に成就されたのだった。その部屋の壁には蟬が塗られた床を囲んでいる黒い木で作られたガラス窓が据えつけられていたのだった。ナタリーはジュリー・デツカに気に入られたので、バルヌリー家に招かれていたのである。

早くからナタリーは、自分をカペーの家に生まれさせたその人生への軽蔑の気持ちを予見していた。彼

女は自分の本当の運命は間もなく明らかになることを知っていたのだ。彼女にとってこの世ではバルヌリー家とガリバルディー街以上に堂々としたものは存在しなかった。けれども彼女がバルヌリー家に近付くと、驚かされたのであり、その富は自分の夢想を遙かに凌駕するものだったのである。

リムーザンの最も山がちの地域に、バルヌリーは娘のカトリーヌの為に、エリザベス朝様式のボーバトウーの別荘を建設していた。彼は別荘や庭園を設計してプレゼントするのが好きだった。誰もが彼の全ての意志と同様にその善意も受け入れなければならなかったのである。そしてその第二の妻は自分が望んだことを決してやらなかった。彼女はあれ程深い愛情に支配されていたので、バルヌリーがその幸福の為に与えてくれたものを受け入れて、自分の趣味をも忘れてしまったのだ。

ロベール・バルヌリーとその夫人はボーバトウーで過ごした。この時期にはその別荘は若者で一杯になった。カトリーヌの子供たちに、フレデリックの子供たちが合流した。そして時にはジュリーの一人か二人の娘が加わることもあった。

ヴァカンスの為にジャンはバルバザックから到着した。今はリムーザン州もジョンシュロールも、ボーバトウーもジャンの氣に入った。色の褪せたヒースや黄色になった羊歯類が古い綴れ織りの色調を帯びて、秋の湿った草原が緑色を刷新する時には様々な思ひ出の香りを伴うのだ。

花模様のクレトン布が張られた甘味な部屋部屋で、小さな娘たちはバラ色や白のウールの毛布で、フックの付いた掛け布団を掛けて眠るのである。彼女たちはたくさんさんの衣装が入った箆笥を持っているが、一日中木綿のスモックを着て山の中を駆け回るのである。そしてトウモロコシを生で、さらにクリームをかけた茸や凝乳等を食べるのだ。雨が降ると大きな地平線が霧に覆われ、樹下の下草類は芳香を発散す

るのだ。その時若い娘たちは客間にやって来て、暖炉の周りに集まる。そして火を眺めるのである。

ジャンは書斎に坐りに行つてヴィニーの本を開くか、ベルナル・ド・ヴァンタドウールの詩集を再読した。『風と共に雨は私の幸福を大きくしてくれた。そんな訳で私の価値は高まるのであり、私の歌は改良されるのだ。私は心に多くの愛と喜びと霜が花の様に思える様な……優しさを持っている。使者として最も美しい女性に、自分は彼女の為に耐えている苦痛のことを告げることになる。私は彼女を、私の淑女よ、大変大きな愛で以て愛しているので、しばしば涙するほどなのだ。というのはそれらの溜め息は私にとつては味わい深いものを持っているからなのだ。』

彼はリムーザンに、その貧しい土地に、その目立たない日々に、愛の英雄的な最初の歌として生まれたのであった。彼は藁葺きの家とお城から生まれたのである。ジャンはその本を閉じた。そしてこの中世のリムーザンを想像しようとするのだが、それは時には非常に近いものに見えるのにせよ、栗の木の下でその閉じ込められた悲惨さと、カブラの原野と略奪する諸侯たち、その金銀細工師、そして人生よりもっと美しい女性を創り出した詩人たちの大胆な声と共に想像するのは一層難しい様に思えるのだ。

ジャンは馬車の音を聴いて本を暖炉の上に置いた。そして長い金具で飾られ、花崗岩の支柱の間にあつた檜の樹製の窓ガラス越しに外を眺めたのだ。雨は止んでいた。木々の上には山々の青く悲しい稜線がまた現れていた。彼はホールを横切り、香料のケースに似た板張りで全体が覆われた廊下に入っていく、子供たち専用の食堂の前を通つて、ロベール・バルヌリー夫人の私的な台所を通り抜けたが、そこはエナメル塗られた壁の白くて爽やかな小部屋で、ブラインドは何時も下ろされている。そして大

理石の棚板があり、そこには陶器製の大きな碗が載せられており、その中にはクリームの表面に覆われたミルクが一杯になっていて、子供たちが、その眠っている様なミルクを揺らさずに碗の縁に慎重に触つて、濾過器でそれを味見するために忍び足でやって来るのである。それから彼は花崗岩が敷かれ、使用人たちの入り口になっているガラス張りの玄関の扉を開いたのだった。そして外ではステップの上から坂を登ってきた馬の頭と、馬車の中の若い娘たちの帽子を見た。彼女たちは微笑みながら到着したが、驚いた若者の風をしており、白い麦わら帽子の下ではそのブロンドの髪がバラバラになっていた。

下男がナプキンに包んだパンを手にとった。子供たちは笑いながら食料品を馬車から下ろした。人のよい御者が髭をきれいに剃った太った顔に微笑みを浮かべて振り返ったのだった。

ジャンは玄関に一人の見知らぬ女に気が付いた。彼女はブロンズの洋服掛けに外套を掛けた。この単純な仕種から他の家族の者の様に思われたが、あまり陽気ではなく恐ろしい程の慎ましさがあつた。彼はその上に上げた腕、彼女の両手、フェルトの小さな帽子、艶やかで黒い髪を見つめた。そして彼はその隠れた顔が彼にとつては非常に重要なものであるかのように振り向くのを待っていたのだった。

「私の外套をここに掛けても良いでしょうか。迷惑ではありませんか。」

彼女はジャンの方へフロレンス派の彫刻の様な顔を向けたが、それはデッサンの完璧さ、成熟した肉付きと子供らしい表情、そして視線を持たないかの様なグレーの目等で驚かせたのだった。

「あら、知らないの、こちらはナタリーよ。カペーの娘さんよ。」

「ポップ、ナタリーのトランクを持ってあげなさい。」

金色で撫でつけた髪をした大柄のポップは良く躡けられた下男のやり方を真似て、その質素な鞆を肩

に取り上げた。

「お嬢様のトランクは何処へお持ちしましょうか。」

「王室の部屋よ。」と若い娘達が一斉に答えた。

それは別荘の最上階のルイ十三世風の部屋だった。曲線になった柱の付いた寝台とこわばった装付のカーテンのある部屋である。そしてジャンはナタリーが朝になって小さなガラスの枠の窓から眺めるかもしれないバラ色の丘の方への美しい見晴らしのことを考えていた。

夕方には明かりの下で白い衣装に身を包んで、彼女はもっと輝かしく思われた。その明るい目は琥珀色の色調を帯び、それでも清純な顔で冷やかに見えたのだった。常に場所を移動しながら、あたかもその視線から眼を逸らしたいかのようにして、ジャンは彼女を見つめるのを止めなかった。彼は美しさの重力に驚かされ、突然子供の殻から抜け出して、偉大な人物の流儀で坐ることを当然とと思っているこの若い娘に好奇心で一杯になっていたのだ。

彼はクロツケーの遊び方を覚え込んでいた。誰かが訪ねてきた時にはその若い娘たちと姿を消した。彼は客人たちを騙すために彼女達と一緒に乞食に変装したのだった。彼は彼女たちが最新の紫陽花を摘みに行ったり、駅に郵便を受け取りに行ったりするときにはお供をしたのだった。そしていろんな謎々を考え出したのだった。

彼はこれらの子供っぽい遊びや、あたかもナタリーが何時も微笑んでいなければならないかのように、自分が言った滑稽な言葉を恥ずかしく思っていたのだった。彼女の側では彼は倦怠を、そして空虚感を感じたが、彼は何時も彼女の傍らに居たのだった。その時彼はその生命の力を思い知ったのであるが、そ

れは非常に恐ろしいもので、或る愚かな役割や風変わりな声、そして不自然な欲望を押しつけるものだったのである。

彼は自分の学友のフリュジエの結婚のことを思っていた。神学校を出るとブラドーの美しい娘と結婚したが、自分は禁欲者であつた男である。ジャンは今になってその用心深さを理解した。即ち人生はいつとも墮落させるようなものであるが、おそらく逆らうことは出来ない誘惑を差し出すということである。人は一度限り、結婚によつて純化してこの毒液を同化しなければならぬのだ。

ジャンはナタリーと結婚することを考えていたのではなかったが、彼の彼女に対する気配りが目立つものだった。彼等と一緒に残されたり、観察されたりした。若い娘たちはナタリーから遠ざかるように思われたし、彼女に冷たく話しかけられたのである。カトリーヌの娘の内の最年長で二十歳のルイズはその娘たちと同じ遊びをしたが、彼女が馬上での散歩から帰ると、たくさんのイギリスの小説を、いかがわしい箇所は飛ばしながら読んだのだった。そして彼女が夜の部屋着で廊下を渡るときには、ヴァカンスでやつて来ていた従兄弟たちに見られるように立ち回ったりした。彼女はナタリーを腹立たしい素振りで眺めたのだった。

ジャンは若い娘を巻き添えにし、自分の牧師の立場に不信任を投ずることになったのである。一つの頼れる手段が彼に残っていた。つまり伯父のロベールにナタリーと結婚する意志があることを表明することだ。確かに伯父はそれに反対するだろう。ジャンはその翌日に出ていくことになる。少なくとも彼はきちんとした意志を明らかにしたことになるだろう。

バルヌリーがボーバトゥーにいた時は誰も朝のうちは書斎に入る者はいなかったが、そこでは彼が、

ルーベンスの紅殻チョークで描かれた絵画が上に載せられた巻き込み蓋の付けられたシリンドラー・デスクに向かつて坐っていたのである。

非常に重要な会見の為にジャンはこの取って置き時間を選んだ。書斎の扉を閉じてから彼はマリヌブルーの上着を着たバルヌリーの逞しい背中しか見えなかったが、バラバラになった白くて絹のようにしなやかな彼の髪はバラ色の襟首に垂れ下がっていた。

「伯父さん、失礼します。あなたに相談したいことがあるんです。」

バルヌリーは自分の美しい手を帳簿の上に置いて耳を傾けていた。それから鼈甲の鼻眼鏡を外して、いつも話し相手に対して微笑んでいるように見えた小さくてきらきら輝く眼をジャンの方へ向けたのである。そして優しくゆつくりとはしているが鋭い声で言ったのだった。

「お前はナタリーと結婚したいというんだね。それは良い考えだ。私がカペーに話してあげよう。」

バルヌリーはジャンは馬鹿な結婚しかできないだろうと、そしてその選択は様々な利点もあるだろうと考えていた。カペーの為に勤続四十年を祝って報奨を与えることが考えられていた。バルヌリー夫人はネクタイ・ピンを考えていたが色々な対象の間で決めかねていたのだ。この結婚はカペーにとつては十分な名譽となるだろう。それにこの家族の中に入り込んで、バルヌリーにとつてはポーバトウへの滞在を台無しにしていたこの若い品をつくろう娘をバルバザックへ送り返すことになるだろう。

ジャンはその言葉でこの会見は終わったことを、そして伯父はつまらぬ問題でくどくどと述べ立てることが出来ないのだということを理解した。けれども彼はこんなに短い会話の為に彼の邪魔をしたことを後悔して、敢えて立ち上がることはしなかった。ジャンは机の上にクリスタルの水飲み用のグラスに

気が付いたが、それは葉の中に二つの果物が結び付けられたものを表していた。

「きれいな物ですね。最近求められたものですか。」

バルヌリーは注意深いが重々しい表情を浮かべた。

「そうだ。これは支那の乾隆帝の時代の茶碗だ。」（作者は *un godet japonais, de l'époque Kienlong* と書いているが、*japonais* は *chinois* の誤りであろう。訳注）

「旅行中にこんな掘り出し物を見つけられるのですか。」

「これは掘り出し物と言えるものではない。太したものではないのだ。しかしお前がパリに来た時には、私が今年見つけたイタリア・ルネサンスのブロンズ像を見せてやろう。」

「イタリアで見つけたのですか。」

「いや、そうではない。古美術にとつてはロンドンとパリという二つのマーケットがあるだけなのだ。」
ジャンは立ち上がった。そしてこの会見を喜ばしい言葉で締めくくるために、或る仕種で金属の小さな灰皿を指さした。

「あなたがいつも側に置いておられるこれも掘り出し物なんですか。」

「これは思い出の品で……。この灰皿を見てもお前は何か思うこともあるまいし、四スーの価値もあるまい。しかしその縁の花綱模様から、自分が非常に満足している或る着想を得たのだよ。」

「鳥の模様のある最近のセットは確か或る籠から思いつかれたのでしたね……。」

「そうだ、あれも悪くはない。しかし私としては新しい方を選びたい……。お前の結婚式にはあれを贈り物にしたいのだ。」

ナタリーはいつも自分に富と幸福をもたらしてくれる様な愛を夢見ていたのだった。彼女は自分がバルヌリー家で、その家族の者と同様に美しい両手を持ち、背が高く、ほっそりして髪が褐色の一人の男に出会ったことを知っていた。その二人は結婚し、彼女はルイズの様に馬で自分の地所を散歩するのだ。彼女の父親がジャンの意志を伝えた時、彼女はその男が例えブロンドの髪をしているにせよ、ジャンこそは自分の夢の中の男であることを知ったのだった。彼女は深く考えるつもりであつたが、自分をバルヌリー家の一員に変えてしまうその素晴らしい宿命に征服されたのである。

ナタリーにとって、妻としての生活は苦い驚きだった。小都市での牧師の慎ましい生活は自分が貧しさを知っており、それを嫌悪していたが故に彼女を苛立たせるのだった。しかしジャンは彼女を気後れさせたのだ。彼女は沈黙して退屈な使命に我が身を委ねようと努力していたのだった。ジャンは彼女の不満や苦痛、その思いを知らなかった。彼女は彼が自分を多くの点で失望させた最も未知の存在であり、話しかけることが出来ない唯一の者であるということに気が付いたのだった。

彼女はアルトゥール・ポンメルル家では陽気だった。そこでは彼の優雅さとその衣装が注目されていたし、彼は感嘆されていたのだ。ジャンは彼女にこの軽薄な客間に出入りするのを禁じていた。この出入り禁止は彼女を動転させた。彼女は精神を爆発させて自分を表面に出すこと知った。そして思い切つて不満をぶちまけた。彼女は最早ジャンの頑迷さや偽善、そしてその無関心さを非難するのを止めなかった。彼はそこから逃亡した。そして彼女はその家族に挑戦を始め、ボタンと扉を閉め、使用人を怖がらせ、まるで集会のように踊り場でまくし立てたのだった。アルトゥール・ポンメルル家では彼女は愛

撫するような声と聖母の様な態度を取り戻した。ボンメル夫人は彼女にヴェールを付けさせて、トルバドゥール（吟遊詩人）に扮したダーリアの相手として中世の女の城主の役を演じさせることを欲していたのだ。ダーリアは全てが判っている風を装って、自分の眼を彼女の顔に近づけて、ナタリーに質問するのだった。不幸で見捨てられた妻によつてダーリアが変なことだと思わせられたのは全く当然のことだったのである。それはいつも見られることなのである。それは夫の過失なのだ。ダーリアが彼女に迫れば迫る程、彼女は自分の夫のことを考えたのである。

III

マルセルはポーリーヌに、イギリス風の二輪馬車で、リニエールの近くに住んでいるペリゴーの家まで運んでくれるように頼んだ。その家の人々は、嘗て砂漠の集会が行なわれていたサン・ブルイユの彼等の森の中でプロテスタントの若者の集会を催していたのである。マルセルはボンメレル氏の家で昼食を取った。馬車は家の前で待っていた。そして馭者は苛立つ馬の側で優しく鼻面を手で撫でてやり、ブロンドのたてがみを梳いてやり、馬具を確かめていた。ポーリーヌに特別に愛された犬がクツションの上で丸くなり、他の犬は馬車の周りを飛んだり跳ねたりしながら吠え立てていた。広口で高い襟の胸着に温かくくるまり、銀のピンの先で留められた帽子を被り、首の周りには厚いベールを巻いて、その若い娘たちはイギリス風の二輪馬車に乗り込んだ。そして彼女たちの脚の上に使用人たちが毛布を広げたが、そこで彼女たちはそれで胴まで巻き付けた。ポーリーヌは手綱と答を手に持った。

「娘たちよ、急ぎなさい。」ボンメレル氏は窓を開けながら言った。「大気は突き刺す様であなただ方の馬も苛立っている。もう三時だ。直ぐに夜になる。気を付けなさい、ポーリーヌ。ペリゴーの人々に宜しく。」

町を通り抜けてポーリー又は、不安な眼をして、大樽や酒蔵に沿って積まれた箱を眺めていた馬を抑えていたが、田舎道ではその軽い馬車は迅速に走った。

ペリゴの農場を見つけて、ポーリー又は言った。

「私はあなた達と一緒に行きたくないわ。私はその人たちをほとんど知らないし、退屈するかもしれないでしょう。」

「あなたは当てにされているのよ、あの方達は魅力的だし、私達の仕事にとっても献身的なのよ。」

「私がいなくても会は出来るわよ。それに馬を待たせるわけにはいかないわ。厩に入れば良いのでしようけれど、馬車に繋ぐのは大変なのよ。私その辺をゆっくり走らせているわ。そしてお迎えに来ますからね。」

「あなたは一人では街道を走っては行けないでしょう……！ それに失礼だわ。」

「街道には誰もいないわ……。」

「あなたは分からず屋なのね、ポーリー又は。」

「でもそれは何でもないことだわ……。一時間後には迎えにくるわよ。」

彼女は、黄色に塗られて、グレーの壁の上で際立っている正面玄関の前に馬車を止めた。マルセルは扉たたきでその小さな扉を叩き、それを開けた。馬はまた走りだした。しかしポーリー又は井戸の屋根と、中庭の奥にいくつかのステップが破られている長いテラスを縁取っている葉の落ちた菩提樹に気付いていた。

これらの秘密めいた農場は全てが似ているように思えるのだった。そこには裕福さ、苦しみ、幸福が

ほとんど動かしがたい水準に迄達している。誰もこれ以上のものを期待することはないのだ。おそらく何世紀も前からと思われるがその土地は家に結びついていなのだ……。そして時には日曜日に往來にはぎこちないやり方の金持ちの田舎の人や帽子を被り、聖書を手に持ち、少しばかり厳めしい顔をした女たちが、月に一度だけペリゴール家で開催される宗教的な儀式に、勿体ぶった態度の子供を連れてきているのが見られるのである。

ポーリーヌは泥の轍でやつと見分けが付くような道を進んでいた。人の声が聞こえた。鉄線と葡萄の絡まった若い枝の間でほとんど目に見えない人達が葡萄の木を刈り取っていた。ポーリーヌはどこもかしこも似たようで、目印の無いこの田畑の中で道に迷うことを恐れていた。彼女は手綱を引いて、轍の中を走り回っていた自分の犬を呼び寄せたのだった。

その同じ日にジャンは、十二月に彼に教会の為のクリスマス・ツリーを寄付してくれたジロー家に徒歩で出掛けていったが、その家族はつい最近には雉を提供してくれていたのだ。洗礼式や結婚式の際にはジャンはしばしば数々の贈り物を受け取ったのである。その時に彼は以前に従兄弟のデツカが言った言葉を思い出したのである。「君は牧師になって自分の財産を放棄したいと思っている。しかし人間は自分が望むからといって貧しくなれるものではない。必要な場合には君は単に自分が遠ざけていた自分のお金を使うこともあるだろう。それに貧乏と金持ちの差異はある決まった金額に基づくのではなく、次のことに基づくのだ。『つまり君が安定しており、社会に適合することが出来るか、そして君には一つの仕事任せられるか。』貧しい者は、慢性的な反抗の、そして卑屈さの精神を、そして気紛れの気質、少

しばかり度の過ぎた軽率さを持つて生まれてきた者なのだ。そしてそういう者には、如何なる種類の社会でも一つのポストも与えられないのだ。ところで君は生まれもよく、容易に一つのポストを見出すことができるだろう。そしてバルヌリー株式会社の社長にさえも就くことができるのだ。君は自分の特権階級から逃れることは出来ないのだ。」それに対してジャンは次の様に返答したのだった。「私は、生まれの良い者達に、そして当然の不公平を増大させる者達に余りに多くの利点を当てる社会で自分の財産を享受することを望まないのだ。私は一つの精神的でこの地上の財宝には全く対立するような世界を信じているのだ。私をそれに準備させ、それに近づける為に、私は有効な物質的な条件下で生きることが望んでいるのだ。私がカトリック教徒であつたなら、修道僧になるだろう。」しかし彼はこれらの慎ましい贈り物を受け取つた時に、自分としては恵まれた者の立場をしつかりと感じたのである。彼はそれを喜びと慎みの気持ちで受け取つたものではなかつた。少なくとも彼は、ポンメレル家に行つた時には使用人の手を少なからず準備された仕種で握りしめながら、几帳面に自分の感謝の気持ちを示そうと努めていたのであつた。

坂の下、綿状の芽を持った柳の樹の側でジャンは斧の音を耳にした。前に進んでいくと彼は道の横で木の枝を拾っている一人の男に気が付いた。

「散歩には良い日和ですね、バルヌリー様。」心からの調子で発せられたこの言葉は次のことを意味しているのだ。

「この町の紳士方は自分の楽しみの為に散歩する時間がある。」その農夫は自分の上着を溝の縁に置いた。彼は自分の義母の手で紡がれた毛糸を細い針で編んだ白くて色のくすんだチョッキを身に着けてい

た。その義母はこの刹那には牧場で牝羊の紐を引っ張っていた。彼女は立ち止まり、近づかないで、彼等の会話を理解しようと努力しながら好奇心に溢れた眼をしてその二人の男たちを見たのだったが、その前掛けは草を一杯に詰めて四隅を結んで自分の背中に背負われていた。

「私はジローのところへ行くのだが、道が確かでないんだ。」とジャンが言った。

「あの樅の森に沿って坂を登ってください。村を過ぎると左に曲がり、それから森の小道を右へ行ってください。そうすれば赤くて全く新しい屋根を持っているブランドーの醸造所のある大きな農場が見えてきます。そうすれば誰でもジロー爺さんを知っていますよ。」

ジャンは窪んだ道を通して、一つの農場と赤い屋根を見つけた。そして滑りやすい土壌の上を、二列になった葡萄の木の間を通していき、遠くから、鉄線から上に覗いたジローの頭を見つけた。ジローは立ち上がって考え込んでいるようであつたが、また低くなつた。そして刈り込みの用の植木鉢の音と、葡萄の株の枯れた枝の上での小さな鋸の軋る音が聞こえてきた。

「おや、バルヌリー様ですね。あなたにこんなところでお会いできるとは思いませんでした。枝の刈り込みは体を温めてくれる仕事ではないので手袋を付けたままで失礼します。」

「こんなにぬかるんだ土の上では容易にあなたには近づけませんね、ジローさん。」

「短靴では泥だらけになりますよ。しかし樹液がまだ残っている間は刈り取るのに最適の時なんです。コニヤック村の先生は二つの貫板のように切ることを求めています、二つの貫板なんて無意味なことなんです。」

彼は葡萄の株の前にいて、鉄線に巻きついたいくつかの若木を切って引き抜いたが、その鉄線は枯れ

た巻き髭が折つて取られると振動していた。

「私はこの株は残しておくのですが、短く切っておくのです。これが貫板なんです。それから三つの芽がある剪定済の枝を残しておくのです。これは未来のことを考えてのことです。」

「ジローさん、あなたからいただいたクリスマス・ツリーに対してお礼を言いたいです。全ての者が褒めていましたし、子供たちは心を奪われていましたよ。」

「あれはシツカリと選んだものですからね……。我が家の樫は家の後ろの小さな丘の上にあるのです。後になればお屋敷の場合の様に林道が作られるでしょう。しかしバルスリー様、お金が無いんです、本当にお金が……。何もかもが売れないんですよ。私の娘はサントの寄宿舎に行っていました。彼女はピアノを勉強していました。そしてそしてサントの収税吏の息子が娘に秋波を送ったのです。それで私は自分に言い聞かせたんですよ。《おい、ジロー、万一のことに気を付けよ、お前は結婚するべき娘がいるんだ。》私は夜に釜を準備する時にそんな事を思うんですよ……。私に付いてきてください、ブランドー蒸留器に戻る時間なんです。」

煉瓦の土台の上で、タンクと球形に膨れて、白鳥の頸の様に曲線を描いた赤い銅製の器具が黒くなった壁の間で緋色の内臓の様な豊かさを持っている。ジローは日夜、ワインの香りがしみ込んだこの大気の中で見張っているが、そこは煉瓦の中に隠れた炉と液体のチョロチョロと静かに流れる音と共に瞑想するように穏やかであった。

「そこで眠られるのですか。」とジャンは汚れたカーテンの後ろの角にあるベッドを指さして言った。「そうです。そして私は蒸留を止める為に四時に起きます。丁度良い蒸留が成されるのが四時頃なので

す。私は蒸留された酒を入れた樽を転がして、その残りを入れる別の樽とそれを取り替えるのです。目を開けていて、丁度良い時にそれを止めなければなりません。そうしないとブランデーが無くなってしまうのです……。でも私は、バルヌリー様、もう以前のようにには出来ません。私は発作を起こしました。私は横になっていました。そして立ち上がったのです。そして自分に言い聞かせましたよ。《おい、ご老体、お前の順番になったな。》と。」

彼は炉の扉を開いて練炭を投げ入れた。「それが私を捉えてしまつたんですよ。」彼は両腕をそれから遠ざけながら言った。

それから愛撫するような素振りで、彼はいつも同じような熱を持っているに違いないその蒸留器の内側を撫でた。

ジャンは死の近づいた時には靈魂の必要を説かなければならないと感じていた。しかしこの様な非常に経験豊富で強靱な人々の前では好都合とは思えないような決まり文句や子供っぽい約束ごとしか見いだすことは出来なかった。彼は彼等を眺めているほうが良かったのである。

「奇妙な人間であると同時に、全ての人間と同じだ、」……ジャンは村へ戻りながら考えた。「何人かの者達は、原始林の痕跡である小石の中に根を下ろしたこの草むらに似ているのだ。彼らは非常に古くはあるが普遍的である言葉を話している。他の者達はずっと気が利いており、彼らの息子たちは我々の支配人になるのだ。秘かにお金を持っている者たち、（公証人のファイエはそれを知っている。）或いは貧しい者達、彼らはほとんど同じなのである……。十軒の家で成り立っているこの村では五つの家系が交じっている……。けれども色々な物に対して、自分の土地に対して、様々な人間に対して何という愛情

を持つてゐることか……！ 狡くて疑い深く、欲張りなのか。いや、そうではない。反対の意味に解釈しているのは我々なのだ。むしろ測ることもできず、理解できないような何という偉大さであろうか。偉大さというものは全て漠然としたものだ……。彼らが意識しているヒロイズムというものは嘲笑に、そして予めの計算になるのだ……。彼らは人間のヒロイズムというものを知らないのだ……。彼らが示すものが彼らを裏切り、彼らが言うこと全ては彼らの価値を減じるのだ……。」

これらの思想はジャンの内面から出てきたものであるようにには思えなかった。それらは風に運ばれた様であつたし、ジャン自身の上に、彼が今まで自分のものであると思つてきた理念とは異なつたものとして置かれるのであつた。そして彼はそれと不安になるということは無かつた。彼は細密画の丸い丘の様に、地平線の上にバルバザックを認めたのであつた。もつと輝かしく柔らかくされた雲がその光によつて、牧場の目覚めの前に春を告げていたのだ。

《美しい小さな町》とジャンは独り言を言つたが、一方では自分の前に立ちはだかつていた丘が少しづつバルバザックを隠していったのである。

《美しい小さな町》しかしこれはポーリーヌの言葉なのである。彼は自分が愛してゐるこの声を聴いていたのだ。彼がバルバザックやモンヌロー医師を、モーリツセ夫人たちを、そしてクロージとその葡萄園を賞讃するのはポーリーヌの所為なのだ。ポーリーヌが全てのものを、自分の人生の単純で純粹な愛において見ることを知つてゐたように、その事を彼は理解したいのだ。ポーリーヌの美しさはその顔に在るのではなく、彼女の声のなかに閉じ込められたものとしてであり、その肉体の内にあるのだ。それは全く近づいてからしか見分けることは出来ないのだ。彼が彼女のことを考える時、ジャンは身震い

する。それは彼が彼女をしつかりと抱きしめたかのように思えるのだ。

スゴンザツクの小丘の上で彼は振り返り、ゆつくりと進んでくる小さな馬車に気が付いた。その周りには何匹かの犬が走っていた。馭者台上に坐っている女性には区別が出来なかったが、その馬車の形は彼には親しいものであった。間もなく彼は瘦せた栗色の馬と漆塗りの木製のイギリス風の二輪馬車、そしてその若い少女の少し右に傾いた頭を見た。そして自分の方に走ってくる犬を認めた。

ポーリーヌは馬を止めた。

「私、マルセルのお供をしてペリゴアの所へ行ってきました。あの方たちはサン・プルの森での巡礼の準備をしているのです。私は入りたいとは思わなかったので、田舎道を彷徨っていたんです。こんなに小さな二輪馬車でもどんな所でも行けるんです……。あなたに席を作りますわ、乗ってくださいな……。」

彼女は片方の手でグレーのビロードのクッションを叩いた。

「さあ、どうぞお乗りください……。私達はマルセルを迎えに行きます。それであなたを町までお送りしますわ。」

ポーリーヌは微笑んだ。そしてジャンは躊躇っていた。それからステップで体を支えて一飛びで馬車に乗った。馬車は少し傾き、彼がポーリーヌの横に身を落ちつける間にその平衡を取り戻した。馬は後脚の飛節をに力を入れてこの新しい重みを際立たせた。そしてお尻を低くして速歩で走り出した。

「私はクリスマス・ツリーのお礼を言うために、ジローに会ってきたところです……。私は徒歩の散歩が気に入りました。人は毎日少なくとも十キロは歩かなければなりません。自然を忘れてしまうことは

大きな過失と言えるでしょう。本当に必要なものに代えられるものは無いのです……。私があなたに氣付いた時、私は道の途中で何を考えていたか判りますか。私はあなたが、マルセルの様に日曜学校であるグループにどうして入らないのだろうかということを考えていたのです。」

「いいえ、ジャン・バルヌリーさん、私については指導者とは考えないでください。」

彼らはほとんど従兄弟の様なものであつたが家族も非常に異なつていたし、ポーリーヌが敢えて彼の洗礼名で呼ぼうとはしなかつたほど漠然とした親戚關係であつたのだ。彼女はジャン・バルヌリーと言つたのである。

「どうしてですか、あなたは立派な宗教教育を受けておられるではありませんか。」

「私はパリで尊敬すべき牧師で、天才的な農夫でもあるシャルル・ワグネルさんからそれを学びました。けれども私はあなたにハッキリ言いたいのですが、子供の時でも、一日たりとも、宗教的な感情が私の心の中に流れ込んだことはありませんでした。」

「信仰を失われたということですか。」

「ごめんなさい、私は信仰を失つたものではありません。信仰を持ったことがないのです。私はそれに近いものを感じたことが一度も無かつたのです。自分が信じていないことを子供たちに教えることは出来ません。」

「あなたは私達が文字にこだわっているのではないことをご存じですね……。」

「聖書は成熟した大人にとつて良いものです……。私も子供たちに教えるのが好きになるかもしれません。しかし私は彼等に非常に厳密なことしか言えないでしょう……。例えばこの地上のこととか……そこ

から始めなければならぬと私は思うのです……絶対的に真実である様な物事のある種の教訓、それはそれを話す人への信頼感を与えるものです、つまり生への信頼感ですね。私は美しい日曜学校を想像していますが、それはあなたの眉を顰めさせるものであるかもしれません……。あなたはご存じだと思いますが子供たちは多くの判断力を持っているものだからね。直ぐに彼らは自分が欺かれているかどうかを感じ取るのです。」

「子供たちは欺かれていると思われるのですか。」

ポーリーヌは馬の手綱を強く握りしめた。帰りの道では馬は速歩を緩めていた。村に入ると犬たちはその音に目を覚まして、その馬車の後ろで吠え立てたのだった。女たちは地味なハンカチで頭を包み、エプロンには草を一杯に詰めて自分たちの牝牛を連れ戻してきたのだった。

「失礼ですが、……」とポーリーヌは言った。「もしかしたら気を悪くされているではありませんか。でもあなたが私を攻撃的にしておられるんです。そしてあなたは私のことを非常に思い違いをされています。どうか私の考えていることをお尋ねにはならないで下さい……。それは余りに微妙な問題です……。私が自分で自分に尋ねてみても、私はそれに答えられないのです……。」

馬は不安になっているように思われた。手綱が緩められるとそれが感じやすいお尻に触った。馬は騒々しく鼻をくくんく鳴らした。そして耳を立てて、方角がハッキリしないのを感じていた。それから馬は蹠いて、一目散にギャロップで走ろうとした。その時ポーリーヌは我に返って激しい答の一叩きを与え、再び速歩に帰らせた。

長い登り道になった。ポーリーヌは頭を道の方に下げて、自分が雑草の生い茂った道端の上で振り回

してバランスをとっていた答の動きを見つめていた。そしてそれが落ち葉を巻き上げ、苔を撫でたり、木の枝に巻きついたりした。馬は首を挙げてその馬車を引っ張った。その汗の一層濃い染みがその横腹に現れていた。そしてその苛立った歯の上で轡の金属的な音が聞こえた。

「ジャン・バルヌリーさん、私はずっと前からあなたに自分の一つの秘密を申し上げたいと思っていたのです。あなたは私の父が話すのを聴かれましたことがありますでしょう……。きっと伯父がリュシアン・ボンメルルのことを話したことでしょう。伯父の言ったことは本当ではありません。私の父に就いて言われていることの全ては偽りなのです。父が私の母と別れ、彼が私達を何の財産もなく捨てた時、彼はお金を持っていなかったのです……。彼はもう何も持っていなかったのです。彼は自分を助けてくれることを拒否した自分の兄弟が私達のこととは面倒を見てくれるだろうと思っていたのです……。実際私の伯父は私達を救ってくれました……。私は私の父がその為に姿を消したのだとは申せません……。父は自分が一人の女を愛していたからこそ出発したのです……。一人の女を愛することはあなたが考えておられる程悪いことではありません……。それは時として非常に素晴らしい……非常に困難なことです……。私はそれは非常に珍しいことであると考えています。父はいくつかの口実を持っておりまして……。私はそれを知っています……。父は私のことを忘れてはいませんでした……。彼は私に手紙をくれました……。ジャン・バルヌリーさん、若しあなたがリュシアン・ボンメルルのことを耳にしたら、どうか耳を傾けないでください。そして彼の娘はその父を非常に愛しており、彼女は父のことを非難してはいないということだけは覚えておいてください……。そして他の人達には自分が好きなように考えさせておきましょう……。」

ジャンはその告白の調子によって心を動かされて黙っていた。それから彼は囁くような声で言った。「あなたのお母様は不幸だったんですね……。あなたは今こそ彼女のことを懐かしく思っておられるのに違いありません。」

「私はそうは思っていないのです。」

少しの沈黙の後、重大な感情に貫かれたかのように同じく優しい声で言った。

「私はここであなたとお別れして歩いて帰りましょう。」

「どうしてですか。私はあなたをお送りできますわ。この座席は動かせるのです。それを横に滑らせることが出来るのです。そうするとあなたの為の座席が出来るのです。」

「ペリゴー家に立ち寄らなければならぬでしょう……。いいえ……。私は近道を通るつもりです。」

馬車から下りた時、ジャンはポーリーヌを見つめた。

「私はあなたが言われたことを忘れないでしょう、ポーリーヌ。」

彼は彼女の手を力強く握りしめた。「どうもありがとうございました。」

馬車は見えなくなつた。彼はもう街道は進まなかつた。魅力的な散歩は終わった。突然彼はナタリーのことを考えた。その思い出はいつも反作用のように反射した感覚として浮かんできくのだ。そしてそれは彼の内に突き刺すような考えを、つまり人生によって撥ねつけられ、孤立化され、埋没させられた女と、この神秘の間で大きくなっていく子供の個性の無いイメージを呼び起こすのである。

若い娘たちの集まりはバラバラに散つていった。舞踏会では若い見知らぬ者達は影で秘かに味方する母親に自分を紹介してもらうのである。教会では時折余りに立派すぎる男たちが見られたのだったが、彼等は帽子で顔を隠して祈禱に夢中になつてゐるよう装い、それから注意深く説教に耳を傾けた。それからその目を讚美歌集に落としていた時には、彼等はゆつくりと後ろの方に振り向いて、集まつた人達を点検するのである。出口では彼等は無関心の風をしながら、ぐずぐずしていたが、その時階段のステツプにすでに集まつて笑つてゐる若い娘たちが到着した。その何人かは困惑してゐるよう思われたが、だしぬけにパラソルを開くのだつた。自分たちの家を決して離れることのなかつた母親たちは、パリへの旅行を口実にして娘と一緒に消えてしまつた。エリザベートはこの様にしてエストの医者と婚約をしたのである。永い間夢想家であつたアンナは何度も繰り返してゐなくなつては、結局は解放されたかのようにして戻つてきたのが見られたのである。秘かにピーター・デイドに付きまとわれていたマルセルはあらゆる讃辞を受け入れたのだったが、彼女はそれを友人としての關係に変形することを知つてゐたのだ。

ポーリーヌはこれほど庭を愛したことはなかつた。最近の春の子供の遊びは彼女には理解できないように思われたし、四月の美しい日々への冒涇のように思われたのだつた。マルセルの存在は彼女には再び気持ちのよいものになつてゐたし、彼女達のお喋りは彼女にとつてはもつと内密な言い回しを取つてゐたのだつた。彼女たちが茂みに沿つて、或いは小川の辺を散歩した時には、彼女たちの考えは自分

たちの内で独立したものとして進展した。それから説明を要しなかったような調和の内で再び出会うのだ。堤防の上に坐って彼女たちは水の規則的な流れや、日光の輝き、蘭草の揺らぐのにうつとりするがままになっていた。軽やかな逆流は川面の上で消えてはまた同じ場所に帰ってくる正確で動く渦巻きを描いていた。

「反対する流れになっているのね。」とマルセルは言った。「それとも深いところに障害物があるんだわ。私達にはさざ波しか見えないわね……それも目立つということはないし……。」

ポーリーヌは微笑もうと努めていたマルセルを見た。その相対する特徴が彼女の表情を曇らせていた。その眉の変わる皺み、そして口元の束の間の皺と両眼の変わることのない優しさのそれである。

「全部が静かな水中に沈んでいるわね……。」

「あなたは本当に利口だわ。」とマルセルが言った。

「それは怠惰なのよ……。私は最初はあなたたち全ての所で少しは逆らったけれど、その気楽さに負けちゃったのよ。もう私議論はしないわ。私今は自分にも良くは判らない漠然としたものに混じり合っていくことに穏やかな感情を感じるのよ。」

「その漠然としたものが一つの形を持つようになるわよ。あなたは私達がいつも誰かに依存しているのに気付いているでしょう。」

「あなたは直ぐ諦めるのね……。」ポーリーヌは言った。

「そんなに直ぐではないわよ。」

「私は人のことを考えなかったのよ……。それは確かに何か漠然としたものだったわ……。」

「誰もそこに帰ってくるのね。実在するものに戻らなければならないのよ……難しいのは選択することだわ。」

「人は短気なものなのね……。」

マルセルは輝いたような、そしてほとんど痛ましそうな表情をしていたが、その時ポーリーヌは舞踏会の時に驚かされた顔を再び見いだしたように思った。

その最初の舞踏会、宵闇に隠された祝宴はいつもポーリーヌの思い出の内では際立ったものであった。ダーリアの今は長らく忘れられていたイメージが今彼女を一つの恥じらいとして苦しめるのだった。彼女は一瞬にして完全なる才能に対して取っておかれた感情を自分の為に処分してしまっていた。彼女はそれを間近になっっている幸福への障害と見なしていたのだった。

ジャンはしばしば昼食後にポンメル氏と話にやって来た。ポーリーヌは庭に残っていた。しかし戸外では彼女はあまり物静かではなく、暑さが辛いと思っていたのだ。そして庭に下りていくにはお茶の時間を持った方がいいのだと独り言を言ったのだった。

「どこにいるの」と彼女を探して通りすぎたマルセルは言った。「あなたはいつも変わるのね。以前は緑の東屋からあなたを引き離すことが出来なかったわね。そして今はあなたは階段の所に坐っていたいのだと言われているわ。」

ポンメル氏は自分の事務所に下りた。閉まった鎧戸の後ろでは、開いた窓がその部屋の闇を金色にしていた一条の光を入り込ませていた。時折思い出したように干し草の香りが水面の反対側の草原から

やつて来ていたのだった。下着置き場では女たちがアイロンかけの作業をしてる。炉の鑄鉄に当たるアイロンの音やメルトンの布地を叩く鈍い音、そして「私は捨てられた女、昼も夜も泣いている……。」と歌っている最年少の女の使用人の悩ましげな声等が聞こえてくる。苛立っていたボーリーヌは自分の本を置いて手仕事の細工物を手に取った。扉が荒々しく開いてマルセルが入ってきた。

「あなたは知らないの、もう決まったのよ、私は八月にイギリスに行くのよ。両親も遂に折れたのよ。私、友達やピーター・デイドさんのお宅へ行くの。若い娘さんもいるし、あの人も来るわ。そして直ぐにいいことを思いついたのよ。いいこと、あなたも一緒に来るのよ。」

「私が？……それは出来ないわ。」

「どうしてなの。」

「出来ないわよ、だって考えてごらんなさい……。」

「私あなたを引き止めるものが何なのか全然判らないわ。」

「私は準備が出来ていないの、ただそれだけよ。」

「まだ時間はあるわ、あなたはよく私に、イギリスに行きたいと言っていたじゃないの……。私この変化がきつとあなたの体にはいいと思うわ。」

マルセルはしばらく前からおそらくは宗教的な厄介事で、つまり告白されてはいない内面に引きずられるような苦しみを体験しているように自分には思えた従姉妹の情緒の不安定さをしばらく前から不安に思っていたのであった。

「私は病気ではないし……それに私の伯父様が……。」

「伯父様はあなたが二、三週間いなくても大丈夫だわ。私の父は一カ月しかここを留守にはしないでしょうし、ジャン・バルヌリーさんもバルバザックを去ることはないの、伯父様に会いに来られるわよ。」

「伯父様は私を九月にピレネーに連れていきたいと思つていらつしやるのよ、だからあの方はがっかりなさると思つわ。」

「あら、本当にそう思つているの。」

「私としては恩知らずということになつてしまふのよ。」

「きつと伯父様はよく判つてくださると思つわ。私からその事をお話ししてみるわ……。」

「お願い、どうか何も言わないで。伯父様がその事をお知りになる必要はないわ……私を引き止めているのはその費用なのよ、判るわね、私は伯父様にこんな時にその様な費用をお掛けしたくないのよ……。それはいけないことだわ……そんな事は駄目なの。」

恐怖の表情がポーリーヌの目の中を通過した。しかしマルセルは自分の喜びの興奮ですつかり我を忘れていて、それに気付かなかつた。そして彼女はそこから出ていくために立ち上がったのだった。

「あなたは氣をつかいすぎるわよ……。それはあなたには似合わない臆病さよ、もつと考えてみてよ……きつとこの変化はあなたにとつていいことだと思つわ。それじゃあまたね。」

「ポーリーヌは大きな恐怖を感じた後の様にぐったりして、自分の肘掛け椅子に倒れるように坐つた。彼女は長い間動かないでいた。それから下着置き場の窓の前に止まつた自転車の鈴の音を通りで聞いたのだった。若い女の使用人のうるさい笑い声には一人の男の聲が混じつていたが、彼女は後でお茶を運んでくれた時には、その体全体で高揚し、丸い髷の付いた帽子の下の泡立つたような髪、笑っている両

眼、その明るい顔色等が全てとても新鮮であるように見えたので、ポーリーヌはある種の不作法さで邪魔されたかのように、敢えて彼女を見ようとはしなかった。しかし彼女が出ていってからポーリーヌは今まで以上に独りぼっちになったように感じて、どうしてかは判らないがままに、泣きはじめたのだ。た。

..

ある朝、洋服タンスの鏡で自分のサージのスーツをまとった姿を見てポーリーヌは軽やかな服が着てみたくなった。彼女は白い麦わら帽子を被り、大きな不透明の模様のあるレースのヴェイルを掛け、長い柄の付いた濃い色の日傘を手を取った。彼女は裁縫師のコルドー夫人に会うことを望んだ。そしてお金を求めるために事務所の前で立ち止まった。彼女は音を立てないで扉を開けた。鉄格子の後ろでうずたかく積まれた帳簿に半ば隠れていたトマ・ポンメルは、自分の鼻眼鏡越しに彼女を認め、手を休めることなく「今日は」と言った。彼女はポンメル氏の事務所のドアをノックし、罪人の様に畏まって中に入っていた。彼女は緑色で端っこが黄ばんでいたカーテンの間で閉じられていたその窓と共に、厳肅であるこの小さな部屋ではいつも気後れさせられるのであった。この部屋の家具は一世紀来変わっていないだったのである。ここでは一人一人はよそよそしい態度を取っていたが、それはある種の職業的な冷たさであると言えるだろう。

ポンメル氏は一つの手紙に頭を傾けて言った。「よろしい、お前の望むものはあげるよ。判ったね

……。私は今忙しいんだよ。」

彼女は自分の馬の鼻面と絹の様に柔らかな首筋を指でちよつと撫でてやつた後で、厩から外に出て、河岸に沿って歩いていった。

薄紅色の樅の木で作った箱がシャラント河の辺に積み重ねられていた。そして新しい樽が木製のレールを通つて解の方へ転がつていく。葦の間に跪いた洗濯女達を下着を叩いている。河は日光で輝き、青空の下で、今も海岸の反映を担っている細くて琥珀色の小さな雲に横切られて草原の間に滑り込み、その姿が判らなくなっている。一列になつて続いている榆の樹の前には、デリケートな灰色の家がその全ての窓を太陽に向かつて開いているが、その家はザラザラの石で出来ており、簡素で堅牢で、何の秘密もなく白い鍍戸と鳥籠の様な鉄製のバルコニーを持っている。

眩しい地面を避ける為に、ポリーリ又は黒い壁の間にあつて影の多い路地を通つて、酒蔵のある区域を横切つたのだつたが、その壁にはいつも開けられていた幅広の扉で穴が空けられていたのであり、それが彼女の顔に地下室の涼しい風を吹き込んだ。樽作りのハンマーの音が響きの良い樽の上で響きわたつていた。誰もが酒臭く豊かで温かく、微妙な香りを吸い込んだのである。

石で舗装された大通りでポリーリ又は雪の様に白いヘヤ・ピンを買うために美容師の所に、それから黄色の糸で編んだ靴下を広げてみせてくれた小間物屋へそれぞれ立ち寄つた。そして彼女は裁縫師の所に入った。

「私はこのバラ色のモスリンの胴着をカラーと白い袖口を付けてお仕立てできますよ。それに襷のある胸飾りと目新しいボタンをお付けになるのです。それは素晴らしいですよ。近頃は革のベルトをとて

高いところに付けています……。コルセットは形を変えてしまします。そして体型が判らなくなるのです。これは困ったことです……。」

コルドー夫人のところに彼女は長居した。そして彼女は様々な見本の前で躊躇し、「モニトウール・ド・モード」や「プチ・サン・トマ」のカタログをめくっていた。結局黒い木製の姿見の前で彼女は麦わら帽子を直し、ヴェールを被り直し、自分のスカートをみる為に少し頭を逸らして、両眼を下げて左手でスカートを持ち上げた。敷居の上ではコルドー夫人が彼女に日傘を開いてくれた。

彼女は少し興奮して、透かし模様の施された寒冷紗の服のことを考えていた。絹の下着とレースの裾飾りの付いたペチコートが要るだろう……。バラ色の日傘……。多分柄が短いもの……。レース編みの手袋。

ポリーヌはマーケットを通過する為に回り道をした。まだ数人の農夫の女たちが籠の横に腰を下ろしていたが、その籠には無気力になった若鶏、足を縛られて動揺しているものもある。そして木の葉の上には苺が、そして潮やチーズの香りのする板片が入っているのである。

彼女は厚地のヴェールで頬を紅潮させながら家に急いだ。彼女は活発に薄暗い階段を上り、ほとんど走るようにして、あたかも誰かが待っているかのようにサロンの扉を開けたのだった。

「ジャン・バルヌリーさん、あなたがそこにいらつしやるのですか。」

「あなたの伯父さんを訪ねてきたのです……。事務所には居られないのです……。教会の連合についての記事を持ってきたのです。」

「きつと直ぐに来られると思います。私は今朝お会いしたんですもの……。何て素晴らしいことでしょ

う。」彼女は息切れしながら言った。それから帽子と上着を脱いで、幸福そうに、呑気者の様に自由な素振りですれを肘掛け椅子に投げたのだった。「私町を歩いてきたのです……。私はバルバザックが大好きなんです。ご存じだと思いますが私は非常に幼いときにここに来たことがありました。でもすっかり忘れていたのです……。近頃少しづつ思い出しているのです……。私は父と来たのでした……。五歳位だったに違いありません……。エキゾティック(exotique)という言葉の厳密な意味を知っておられますね……。お待ちになって、あそこに辞書がありますわ、喫煙室に参りましょう。」

喫煙室の本棚にはこの家のあらゆる書籍が並べられていた。金箔が消えてしまつて黄ばんだ子牛の皮で製本された古典作家たちのもの、『カミサール戦争史』(ナントの勅令廃止後、武器を取つて立ち上がったセヴェンヌ地方の新教徒達の反乱、上着の上にシャツ「方言でカミソーと言う」を着て闘つたのでこの名前がある。首領はジャン・シュヴァリエ、一八六五年にヴラールに鎮圧される。：訳注) 説教集、イギリスの小説、それに『アカデミー辞典』の分厚くて赤い大冊等である。

『Exotique』とは我が国の天候の自然の所産ではない。』「私がつかりだわ。私、この町は自分にとつてはとてもエキゾティックだと思つていましたのよ。でもそれを私はもつと別の意味で考えていました。遠く離れたものというか……。それでも近い……。過去の様なものと、つまりバルバザックでは他の土地よりももつと暑いのですから。まるで南仏の端です……。魚の商いは大西洋以上ですし……。それにこの人々……。でも私は、この氣候がまるで自分自身の内面での一つの発見の様に私を驚かせているのが判るのです。私はいつもあなたにはバルバザックのことを牧歌的な町の様に話していますね……。でもそこには不幸な人々がいますのです。……私には人々には何が欠けているのかが判りません、でもほとんど

全ての人々には何かが欠けています……。」

「慈しみの気持ちです。」

「いいえ、慈しみの気持ちでは正確ではありません……。もっとありのままの気持ちです……。あなたはその言葉を「ご存じありませんか……」おそらくそれをいう正確な言葉は無いのでしょうか……ある種の人生の受け止め方なのです……。あなたはお答えにはなりませんね、ジャン・バルヌリーさん……。私の言うことに耳を傾けては下さらないのですか。」

「いいえ、ポーリーヌ、私は聞いています。あの人達に欠けているものはこの地上では無いのです。」

「いいえ、地上にはきつとあります。人間は苦しむために生まれてくるのでしょうか。いいえ、彼等は思い違いをしているのです。」

「彼等はいつも思い違いをしているのです。」

「ギッタがそれを既に私に言ったことがありました。私は自分を苦しめたその言葉を今も覚えていますが、私も私はいつも若かったのです。それは『あなたは今に判るでしょう、人間には判らないことなのです、人はいつも思い違いをしているのです。』というのでしたわ。」

「あなたはソーヴェートル夫人を知っていますか。」

「ちよつとお目に掛かったことはあります。特に去年のことでした。今彼女はビアリッツ、ボルドー、そして他は何処か分かりません……。それはあなたの気を悪くさせますか。彼女は非常に善良な方ですわ、でも少し無分別なところがありますが。」

「私はあなたがソーヴェートル夫人を知っておられるのが残念ですね。」

「それではもう会わないようにしますわ。」

ジャンはポリーヌから遠ざかる為かのように喫煙室の中を歩いたのだった。彼は耳を傾けないで彼女の言うことを聞いていた。彼は彼女を、そのぼんやりした服にすっかり包まれて見え隠れするのを、そして繊細で赤い色の本の上で生き生きと動いていた手を見ないようにして見ていたのだった。彼は彼女に話すこと、そして尋ねることを望んでいたのかもしれない、頭の中ではその思念が大きく泡立っていたのである。彼は本棚にその辞典を戻すと突然ポリーヌの側に坐って彼女を見つめたのだった。

ボンメルル氏がその部屋に入ってきた。彼は自分がその顔の上を感じていた余りに強烈な感情を消してしまふかのように目を伏せたのだった。彼はボンメルル氏と一緒に部屋を出た。そしてポリーヌは喫煙室に独りで残った。

長い時間の後で彼女は、自分がまだテーブルの側の同じ場所に坐って、何もせず、何の考えも無しに、退屈もせずに坐っているのに気が付いた。その時彼女はジャンとの会話はいつも中断されると思ったのだった。彼女は自分が言いたいと思うこと全てを言うためには、もつともつと長く話し合う必要があるだろう。というのは言葉というものは人間を引っ張っていくものであるから……。でもジャンは戻ってくる事が出来るのだから案ずることはない……。彼女はその部屋の静けさを嬉しく思っていた。「喫煙室では何にも触れてはいけない。」と伯父が言っていた。伯父の言うことは尤もである。この変化していないこれらの物の内には何という安全さがあることだろうか。

この動かないものへの、そして現在との共鳴、更に自分の回りの全てのものが自分の周囲では同じであるという願望、これはポリーヌにとっては全く新しい感情だった。

..

ポーリーヌは招待というものは、船上パーティーであれ、テニスの会、庭での軽食の会、草原での昼食会であれ全てを受け入れたのだった。しかし彼女はしばしば時間を忘れ、遅く着き過ぎたり、自分の家に帰ったりした。或いは一種の恥じらいから、宴会の中に入っていくのを思い止まったりしたのである。彼女は外からその中の賑やかさを耳にして、それが最近彼女の心を引き留めたりしたのであった。彼女はヴァカンスの孤立を望んでいた。しかしシャラント河の辺でのおやつのに合対しては熱っぽい気持ちを持っていた。多数の人が集まった。ボート、大型の馬車、自転車等が何組もの友人を連れてきた。彼女はマリー・アントワネット風のネッカチーフで少しばかりデコルテになったバラ色の寒冷紗のドレスを身に付け、しなやかで大きな帽子と、首筋の回りに巻き付け、後ろになびく垂れが付いたチュールのヴェイルを被るのだ……。そして彼女は他の人の顔を見ることになるだろう……。おそらく彼女に、この冬以来、自分の印象の数々を苦しみになるほどに多数のものにする或る軽い熱の様に心を震わせる優柔不断さと自分がそこで見失われてしまうような夢想で一杯になった無気力さを与えるのは余りにも過剰な瞑想というものだろうか。

午後の河岸ではサクランボで一杯になった籠やケーキの入った箱、シロップの瓶、毛布や外套の置かれた中で彼等は再会するのだ。土手に繋がれたボートは舳の作る波でバランスを取りながら、突然新しい重みでぐらっと傾いたのだったが、岸から離れるとまた平衡を取り戻したのであった。船のオールが

交差されきらめく水しぶきを挙げて、水面を軽かすめた。ポーリー又は船尾の舵の紐の間に腰を下ろして日傘を開いた。紫がかった花の茂みや黄色い花のそれ、曲がったり折れたりした蒲等が凸凹になった河岸から覗いていた。ボートははんの木の曲がった枝に触れた。そして木の根にぶつかったりした。穏やかな冷気が水面や雑草から立ちのぼった。ポーリー又は揺られて、少し目が眩み、半ば両眼を閉じて、蜃気楼のように過ぎていき、草原やボブラの並木、葦の繁った小島等が大きくなつては消えていくのを眺めていた。

すらつとしたボートが彼等に迫いつき、間もなく追い越していったが、それはゆつくりと大きくなつていく狭い船跡を残していたのだった。マルセルとピーター・デイドはオールを返したり、それをまた一緒に投げ込んだりしながら、何の苦もなく体を傾けたり起こしたりする活発な動きで漕いでいた。船尾ではアルトウールが水流を見張つていて、その舵を操作していた。

一瞬ポーリー又はマルセルの生き生きとした顔やピーター・デイドの帽子を被らない頭を、そして太陽に映えたブロンドの髪の毛の輝きや彼等の仕種の寛いだ様子とその共鳴、更に彼等を引っ張っていたその確かなリズムに気が付いたのだった。

夕方、食事のときポーリー又はその日の様子をボンメレル氏に話した。

「多くの人がいろんな所から来てたのよ……。私達は各々が自分の荷物を持つて蟻のように小径を登つていきました……。」

「そんなに大勢が来ていたのかね。」

「ここにいる私達は皆行っていましたし、それからランボー家やクーデール家からは船や大型馬車で来ていました。それにロバン家からは全員と彼等の全ての友人たちも来ていました。」

ボンメルル氏は注意深く耳を傾けていた。

「この間ロバン家の者が私に紹介してくれた若い青年で、彼等の従兄弟だと思ふのだがその青年もそこに居たのかね。」

「ええ。」

「お前は彼を知っているのかね。」

「少しだけ知っています。この冬に私はその人と踊ったのです。」

「私は以前にあの男の父親を知っていたのだ。数年前にこの地方から出ていったプロテスタントの旧家だ。あの男は非常に良い青年ではないかね。」

「彼は優しくて聡明です……。私達は散歩の間お話ししました……。彼はこの地方を愛しています。あの高台から眺めた風景はとても素晴らしいものでした。でも六時ごろに変な婦人たちが自分の崇拜者を連れて入ってきたのです。彼等は水辺で食事をしていました。彼等は非常に興奮していました。そして全ての人を狂乱させ、私達の石榴シロップを嘲笑い、自分たちのシャンパンの残りを分けさせたのです。それから夕立になりました。そして風が水面を波立たせ始めたのです……。」

ボンメルル氏とポーリーヌはしばらくバルコニーに立ったが、それから書斎に戻ってきた。

「もう暗くなってきたな。」とボンメルル氏は言った。「食事が遅かったからね。それじゃあ窓を閉めて明かりを点けなさい。」

彼はその部屋の中を苛立ったように歩いた。それから坐った。そして少し口を震わせながら言った。

「ポーリーヌ……、お前が知っているその青年のことだがね、彼はお前に興味を持っているらしい……。

お前が特に気に入ったのだ……。それに彼はお前にも気に入っている……そうではないかね……そうだと……私は予感がしていたのだ……。」

「予感ですって、どうしてですか。」

「トウルーズの牧師が私に手紙を書いてきたんだ……。世間ではお前が私の家族の一員であり、一緒に暮らしていることは知られている。それで私に宛てて話が向けられることとなったのだがそれは全く当然のことだよ……。勿論全く正式のものではないんだ……。しかしあの青年はもう一度お前に会いたがっているんだ……。」

「いいえ、私は会いたくありません……。」

「良く聴きなさい、ポーリーヌ、お前はまるで人にぶたれたかのようにびっくりしているじゃないかね……。どうしてなのだ。」

「私には判りません。」

「私はお前の気持ちが理解できない、ポーリーヌ、私はとても良いことだと思っていたんだ……。お前はいつも断ることが出来るのではないんだ……。私は調べてもらったのだ……。彼は将来が有望である……。今まではお前の拒絶は尤もらしかった……。しかし今度は……。私に理由を言いなさい……。あの男が気に入らないということなのかね……。」

「いいえ。」

「それでは……。ジャンは彼のことを知っている。彼を非常に高く評価している。」

「ジャンにその事を話されたのですか……。この事を知っているのですか。」

「彼は何も知ってはいない……。たまたま我々はこの若い青年のことを話したんだ。それにジャンはお前の親戚だ。ジャンはお前に興味を持っている。」

「あら、あの方ですか。」

「どうしてそんなに辛辣な言い方をするのかね……。あの青年は日曜日にはまたやって来るそうだ。つまりセシル伯母が彼をクロサックに招いたんだよ。我々も出掛けることになっている……。」

「それじゃあ皆がそれを知っているんですね。それ考えることは私をむかつかせます……。いいえ、私はクロサックには参りません。」

ポンメル氏は重々しい不安そうな風をして黙っていた。彼は説得できないのだ。

「伯父様、聴いてください。」ポリーヌは軟らかな口調で言った。「私、伯父様には申し訳ないと思いますわ、でもそのことをもうこれ以上考えないように、そしてその事を私にはこれ以上言わないように、そしてその事を誰にも言わないようにしてくださいさるようお願いします。それは私を苦しめるのです……。私には出来ません。私はあの方にもう会いたくないのです。」

「好し、好し、判った。しかし私にはその訳が判らないのだ……。」

「私にも良く判らないのです。」

一週間中ポリーヌは身を隠していたかのように自分の家に居たのだった。書斎の開いた窓からは草原が夏の雨の下ですっと遠く無限の彼方にあるように思われた。水の音が彼女を世界から引き離してい

るのだった。次の日曜日にはその田舎は日光を浴びてきらきら輝いていた。ポンメル氏は一人でクロサックに出掛けていった。彼女は誰も決して愛さないのだろうか。しかし正に彼女が我が身を慎んでゐるのは愛の故なのだ。彼女は多くの他の人がやったように無邪気な心の便宜に従つて身を処することが出来ないのだ。しかし彼女はかといって未来に何かを待つてゐるのではない。彼女にとつては現在と今の家と書斎の静けさだけで十分なのだ。

..

若者たちはアルトウールの家の庭の芝生を通つて集団になつて到着し、樹々の下を、石で舗装された只一つの大きな広間からなる東屋の方へ急いだ。そこではテニスをする準備がされたのである。若い娘たちは鏡の前でヴェールを外し、ベルトの下の白のウールの幅広のスカートを着て、戸棚からラケットを取り出し、靴を履き替えた。そして軽やかな歩調でテニス・コートに出ていった。

アンナはお茶を準備した。彼女は赤い格子縞のナプキンやカップ、そしてビールやオレンジエードの壺等を用意して、ビスケットの包みを開き、薄切りのパンにバターを塗ったりした。心配そうな様子で彼女は時折窓に近づいたり、戸口から外に出て眼でマルセルを探したのだった。

トーマ・ポンメルは自分の娘とデイドとの結婚を、新たにその家族を調査した後で反対してゐたのであった。アンナはマルセルが自分の両親の意向に傾いており、全てを自分の義務の為に犠牲にしてゐることを知つてゐた。しかし彼女はマルセルのその若い男への愛についても知つてゐた。

一瞬アンナは、激しくテニスをしているマルセルとディードを反対側のコートに認めた。彼女は一層落ちついて戻ってくると、銅製の湯沸かしの下のアルコール・ランプに火をつけて、他の者達の中に合流した。別になつていたグループの者たちがおやつを食べに来ていたが、それからまたテニスに戻った。ベスト・プレーヤー達同志の数試合の間は見物人が引き止められていたので、行ったり来たりは途切れていた。

ポリーヌはマルセルを探しながらゆっくりと東家の方へ歩いていったがその時彼女は開いた窓からディードを見つけた。彼は坐つて、早口で話しながら、テーブルに凭れていた。彼の目の前では窓に背を向けてマルセルが彼の言うことに耳を傾けていた。彼等の間では湯沸かしが時折彼等を分離してしまう蒸気を発射していたが、ディードは苛立ったような仕種でその重々しくて熱っぽい目をして、気を散らしたりするのだった。ポリーヌはそこから遠ざかりたいと思つたが、砂利の上での自分の足音が気になった。そして彼女は倒れかかった枝で身を隠して身動きせずに居たのである。ディードは黙り、マルセルは硬化した態度で絶望的な力を振り絞つて話しているように思えたが、それは空を叩く握り拳で自分の言葉の特徴付けていたのだった。ディードは懇願するようで、威圧的であるようで、それから横柄であるように思えたのだ。そして彼は皮肉な笑いを浮かべていた。マルセルの肩がくず折れた。彼女は両手で目を覆い、深い動揺で体を震わせていた。彼女の上半身は折れ曲がり、それでも頭を傾けながらも、執拗な拒絶の動きで抵抗していた。一瞬ディードが彼女の方に進んできたので、彼女は両手を広げて顔を上げ、引きつったその指を絡ませてディードの方へ差し出したが、それから折り曲げた肘の上にくず折れた頭と同じ動きで、テーブルの上に倒れかかったのだった。

感動で息苦しくなつて、ポーリーヌは東家の後ろに引つ込み、壁に沿つていき、庭のなかをさまよい歩き、無意識に花を摘んだりした。そして彼女は再び窓の側にいたのだつた。マルセルは静かにすすり泣き、体は悲しみに穏やかになり、ちじこまっていた。自分の友達の援助の為にポーリーヌは一步飛躍させられたが、その秘密をそのままにしておかなければならないのが判つていたので、それを抑えたのだつた。

テニス・コートからは呼び声が聞こえた。そして子供たちは芝生の上でクロッケーで遊んで居り、玉を打つ乾燥した音や、笑い、そして議論などが聞こえてきた。そして誰かが「デイドはどこにいるの。」と尋ねたのだつた。或る声が答えた。「私は彼が狂つたように走つていくのを見たわよ。汽車に乗り遅れる、と叫んでいたわ。ほら、彼は帽子を忘れてるわ。」マルセルは頭を上げた。そしてケープで身を包みながら立ち上がったが、それは彼女が、自分の周りを見回して、他の何も壊れてはいないということに驚きながらも、自分が迷い込んでいたぼんやりした世界からやつとのことで解放されたかのようなであつた。彼女はその部屋が相変わらず散らかつてゐるのを、そして外は穏やかであるのを目にして、この見捨てられた状態の内で身震ひしたのだつた。それから彼女は水に浸したハンカチで両眼を拭き、不器用な仕種で帽子を整え、自分の顔にその特徴がハッキリとは判らないようにする白いヴェールを押しつけ、扉を開き、少し後退してから結局躊躇いがちの足取りで出ていったが、それはその周りの状況にはおおよそそぐわなないものだつた。それから彼女は頭を垂れて、重い足取りでくままでの並木道を歩いていった。テニス・コートに戻つて、他の者達に合流しなければならぬのだつた。

ポーリーヌはマルセルに近づき、彼女の方を見ないで、黙つて随いていったが、その時木の枝を引き

ちぎっては自分の花束に加えたのだった。それから彼女は自分の花束の一部をマルセルの無気力な手のなかに滑り込ませたが、それはまた下に落ちてしまった。彼女はマルセルを体には触れないで引つ張っていった。

彼等と呼び声がかかった。

「あなたたちは来ないの。マルセル、あなたはテニスをするの？ あなたの番だよ。」

「するわよ。」とポーリーヌが言った。「直ぐ行くわ。」

そして花束を見せながら彼女は静かな声で続けた。

「私達は花を摘みに行つてたの。でもバラはほとんどお終いね。」

∴

古い樽作りで、手仕事に慣れており、果樹の剪定の仕方を知っている上手な庭師でもあるベルトメは、自分が酒蔵長に昇進したときカフスと糊の付いた胸当てを身に付けた。しかし彼は自分の事務所ではないつも頭には黒のフェルトの帽子を被っていた。そして天窓から自分の部下たちを見張っていた。外向きの大きなステンドグラスがその小さな部屋を明るく照らしていたが、そこは隔壁で酒蔵とは隔てられており、飾り棚が備えられていた。そしてその上にはガラス管やアルコール計、ラベルの貼られた壺、一番新しい輸出品の見本などが置かれていた。

毎月トーマ・ボンメレルは、腕の下には一冊の帳簿を抱えて、手には紙幣の入った財布と硬貨で一杯

になった小さな布製のバッグを持つて職人たちの給料を彼の所に持つてくるのである。

彼は事務所のガラス付き扉を自分の後ろで閉めた。それから庇を縁取っている葡萄棚の下を通つて酒蔵に沿つてやつて来たのだった。トーマに気付くとベルトメは帽子を持ち上げて会釈した。

「今月の計算は正しいよ、ベルトメ。これが全額だ、計算してみてくれ、しかしもしかすると……人はいつも思い違いをするものだからね、計算してみてくれ、それが一番規則にかなつてゐる。」

ベルトメは言う通りにした、それから鍵の掛かった机の引き出しを開けてお金をそこにしまった。

彼は酒蔵を通つて踏み固められた地面の上を静かな足取りで自分の事務所に戻つて行くトーマの後に随いていった。小さなガラスの入った入り口から太陽が、長細く暗い建物の中に入つて、樽の丸くなつた表面にチョークで書き込まれた文字や薄明かりの中で光っている赤色の銅で出来た十リットル缶を照らしていたのだった。窓の側で二人の従業員が急ぐこともなく働いていたが、そこには彼らの影が浮かび上がっていた。一人はポンプの車輪を回し、もう一人は醸造用の桶に屈み込んで、規則正しい間隔で持ち上げられた銅の器にコニャックを満たし、樽の上に置かれた漏斗に、大声で単純な声で、十八、十八……十九、十九と最後の数字を繰り返しながら注いでいた。

「相変わらず元気かね、レヴェック。」とトーマは一人の頑丈な男の前に立ち止まつて言つた。それはコニャックが人体に有害だと言われていたからである。

「仰るとおり元気ですよ、旦那、私は四十年もこれを吸い込んでいますからね。しかしこれは体には良いものですよ。」

「その通りだ。これは見事なストックだ。」とトーマは灰色の列になった樽の間を進みながら言つたの

だったが、それらの樽は暗闇で少しぼんやりしていた。

一人の男が樽を一方の酒蔵から他方の酒蔵へ転がしていく時に大きく開かれる低い扉からトーマは古い樽が長い列になって並んでいる同じような建物の続いているところを通り抜けた。それらの樽の中ではコニヤックがフランス産の櫟の樹との接触に依つてそのエーテルを発育させ、その芳香を凝集させ、そのアルコールのきつさを和らげるのである。

「確かに……これは見事なストックです。」ベルトメが続けた。「しかし取引がやりにくくなると持ちこたえるのは重荷になります……。ここに眠っている全てのお金のことを考えてみてください……。四十年以上もの間豊かにする為に寝かしておくことが必要なコニヤックなのです……。ところがそれはもう認められてはいないのだ……。つまり余りに特殊なのです。人々は普通のあまり高くないコニヤックを望んでいる。若しあなたがモーランの一组を求められますならば、私は誰もが直ぐに売ることが出来る柔らかい味のコニヤックを作つて適度に樽詰めする事は出来ますよ。そうすれば他に流れてしまう取引を取り戻すことが出来るというものです。只現代的な壇詰めにする倉庫と、箱に入れて輸出すること、そして商標を作ること等が必要となります。」

「そのコニヤックは純粋なものかね。」

「利き酒をしたところでは何の問題ありません。モーランはビュルゴー・デュペロン、ダヴィオー、そしてその他のものを供給しています。この半月以来、ビュルゴー・デュペロン社では真夜中まで仕事をしています。ブラジル向けに千箱の急ぎの注文を受けたのです……。いいですか、旦那、私は自分たちが大きな取引するのに必要な全てのもの、資本も酒蔵も労働力も持っているのだと考える時、そして他の者

達が仕事をしている時に私達が手を拱いていると思うとき、私は情けなくなってしまうんですよ。」

夕方最後の労働者が帰ってから、黒い上っ張りを身に付けて、酒蔵に鍵を掛けるときに、ベルトメは時々、事務所から出てきたローズに出会ったのだった。そして彼はシャンジー街までローズと一緒に歩くのである。

「確かに私はその事をポンメレルさんに話しましたよ。」とベルトメはローズを自分の前を通らせる為に小さな格子戸の前に立ち止まって言った。「私は書面での報告書も手渡しました。そして良く考えてみるもおつしやいました。あなたも私と同じ意見なら、彼に話すことは出来ますね。彼の考えは時代後れですからね。彼が若い酒の欠点を永い間保持している純粋なコニャックを望むのは間違っていますよ、この酒の粗暴さは寝かしておかなければなりませんからね。人はその製品を結果で判断します。私は支配人に、若しこの工場が近代化されないのなら、辞めてしまおうことを隠しませんでした……。私にはダヴィオーから、こちらに来ないかという申し出が何度かありました。ここでは私がやることは何もないのです。私はうんざりしているんですよ。私の才能を生かして使ってもらわなければなりません。私はモーランの品を買ってみることを提案したんです。百五十万フランというのは大きな支出でしょう。しかし商標を作って、箱詰めにしてメキシコやオーストラリア、ブラジルに輸出してみるんですよ。そうすれば代理店で我が社の評判が良くなって、急速に売れてしまうでしょう。」

ポンメレル氏はその性分から、自分ではベルトメの計画が実際的で有利であると判断しながらも、それに反対したのだった。そして彼はそれを撥ねつけることに決めていたのだったが、実際には自分に知らされている現実の出来事については、その歴史的な由来を理解せずに無知であるかのように、それを

知らないで採用していたのであった。

ボンメレル氏は今でもベルトメの提案を退けたいと思っていたが、突然その時考えを変えてそれを受け入れた。そして精神のこの逆転の理由や成熟していく段階での感知できないそのニュアンスも判別出来てはいなかった。彼は公証人のファイエの家から出て来て、嘗てはボンメレル商会の樽を積み込んだ沢山の解がそこから出ていった河岸の側を歩いていった。突然彼は歩みを早め、路地裏の近道を通って行った。そして中庭で鐘を三回鳴らしたのだった。

「私はお前の考えを良く考えてみたのでお前を呼んだんだよ、ベルトメ君。私はそれが面白いと思ったんだ。この計画は良く考えられている。箱詰めの輸送や瓶詰の為に大きな変革が必要だ……。その組織化をお前に任せよう……。モーランの製品も買わなければなるまい。これは相当の出費だよ。」

「あなたなら容易に資本を見つけるでしょう。」

「お前が思っている程簡単ではない。以前私の隣人であり、友人でもあった銀行家のラドヴェーズがいたが、彼はほとんど毎日のように我々に会いにやってきたし、私の父を知っていた。そして我が商会に好意を持っていたので、良い買い物をするには苦もなくお金を融通できたのだ。今日ではこの地方の最後の銀行家であったショタールも居なくなっている。確かに大銀行の代理店は我々に当座貸越を提供してくれるだろうが、それは決まった短期間の運用なのだ。」

「私は銀行のことまでは思っていないでした……。」

「お前は私の息子のことを考えているんだろう。彼の妻のものであるその財産はビュルゴー・デュペロン社に投資されていて、息子はその配当金を受け取っているだけのことだ。私はビュルゴー・デュペロ

ンに何も頼んだりはしたくないのだ。特に彼とは競争相手になるのだから。」

ベルトメが考えていたのはトーマ・ポンメルルのことだったが、ポンメルル氏は自分の弟が会社に資本を投資して、自分の子供たちの為にその様にしてその会社への権利を持つようになることを決して承知しなかっただろう。

「私が相談する事が出来て、それを受諾してくれる唯一の人間は、私の義弟のロベール・バルヌリーであると思うのだ。私は彼に利益の半分を提供するだろう……。私は彼に会いにリモージュ迄行ってくる。」彼はいつも自分に良い忠告を与えてくれたロベール・バルヌリーに相談することを望んでいたのだった。

∴

ポンメルル氏はクリスチアニアやロンドンから戻ってきて、そのトランクに何度も鍵が掛けられていた時でもまた出発する準備が出来ていたのだ。しかし彼はバルバザックに長らく滞在していた時には、汽車に乗り込むのにある種の気だるさを感じていた。彼はジュリー・デッカに再会し、十五年間帰ったことが無かったリムーザン地方の様々な別荘を見るのは嬉しいことだろうと思ったのである。

今はシャラントの田舎にブロンドの斑点が散在する季節なのである。黄色くなった唯一の塊になった熟した小麦の四角い畑、オート麦の畑、蒼白いモスリンの表面がバラ色と緑色の裏側を透かせて見せており、その上には麦の穂の中に浸っている一本の丸くて美しい樹が聳えているのである。それから牧場の端にはポプラの樹、葡萄畑と上手く整えられた葉の長い絡み合い、そして家々と同じように白くなっ

た道がある。更に丘の上には青みがかった隙間の見晴らしの調和ある動きを浮かび上がらせる多様で波打った平原がある。

アングレームを過ぎて汽車は上りになってから喘いでいるように思われた。ボンメル氏は二等車の車室の座席を離れて、立ったままでおり、手袋をした手を入り口の扉の格子に乗せていたが、風が色あせたカーテンをなびかせていた。彼はそこで山の多いその田園を眺めていた。そこは生け垣と枝斬りされた木々に囲まれた草原にすっかり覆われており、ネジ曲がった木の幹や、そこでは病気になるような葉がまた出てきているボロボロになった羽飾りのある片隅なのである。彼は一瞬、牧場の間できらきら光ったりほの暗くなったりしている狭い小川を眼で追ったのだった。

リモージュの駅ではジュリー・デツカがボンメル氏を待っていた。彼は車に乗った。そして彼女が言った。

「ジョンシユロール迄お送りしますわ。今日は私の父にはお会いできないでしょう。少し調子が良くないのです。明日私達は父のところに参加しましょう。あなたは父が変わったと思われるでしょう。」

「私はジョンシユロールで日中を過ごすのに満足だ、お前を邪魔することが無ければ。お前のご主人はどうしておられるかね。」

「私達は皆元気です。今はカトリーヌの一番小さい子供たちが来ていますが、そのおかげで夏になると増加する近所の人達と共に家の中は大所帯になるんです。そして父は私達のことをいつも心配していてくれるのです。」

けれども彼女の生き生きとしていて、終始自分のお客に気を配っている目には心配そうな表情は全く

現れてはいなかった。背の高い自動車の窓から、ポンメルル氏は道端にグレーのあばら家や、草むらの囲いの中の険しい草原、枝がなく一斉射撃を受けた様にギザギザになった節だらけの樫の樹等を認めたのだった。

角を曲がってから車は絹のように柔らかい霧囲気の中に入ってしまったが、そこはその枝と共に揺れている樫の木の樹林やその特権的な空間で自然な形になっていた庭園の太木等が在った。

その車は庇の下に止まった。ポンメルル氏はバルヌリー家に移る前に、バルバザックで彼の青年時代に仕えてくれた年老いた使用人を認めたが、彼は無関心の様子で玄関の扉を開けたのであった。

「ああ、ここは変わったね。」ポンメルル氏はホールの大きな階段を、トランクをゆっくりと上に持って上がる使用人の方へ視線を滑らせながら言った。そこは一階の上に載せて作られた広大な部屋で、四つの部屋をたつた一つの部屋に作り替えたものなのだ。

「間の仕切り板を取ってしまったんです。あなたは古い家のこの部屋部屋を覚えておられるでしょう。窓は天井から直ぐに開くようになっていて、余りに低くなっているので私達は花崗岩の敷居の上に坐つたものでしたね……。ギャラリーに来てくださらない……。直ぐにお茶にいたしましょう……。アングレームではしっかりと食事をされましたか……。ポールもお茶の時間には戻ってくると約束してくれました。今朝農場の一つに呼び出されたのです。新しい小作人達が、別の小作人たちの住んでいる家の前に住むのを拒否しているのです……。何ともおかしい話です……。彼等は自分の同類達を見ることを望まないのです。」

ポンメルル氏はジュリーの後を客間を通っていった。彼女はフランス窓を開いて、細長い敷石が敷かれた長いギャラリーの中に入ってしまった。鉄の柱の間に砂が敷かれたテラスとベンガルバラの茂み、そ

して花崗岩の欄干、樹木、そして斜めに草原に繋がり、近くの地平線に対して對抗している芝生などが見えたのだったが、夕方にはそこを牝牛に引つ張られた非常に低い干し草用の車が小さな車輪を回して下りてくるのである。

「ここなら静かだろうね。」

ポンメルル氏は藤の肘掛け椅子に坐り、帽子を脱いだが、風が吹き込んでくるのでまた被ったのだった。ジュリーは長椅子に横になったが、突然起き上がって、急ぎ足で遠ざかっていったが、それが石畳の上で乾燥した音を立てた。それからギャラリーに向いたたくさんのフランス窓の一つに再び姿を現した。そしてそこからピアノの音と合唱で繰り返されたシャンソンのアリアが聞こえてきた。

「さあ、ジュリー、お父さんの話を聞かせてくれないか。」

「パパは私達のことを気遣ってくれてるの。でもパパの健康状態は良くないのよ。それに事業も調子が悪いの。あなたはアメリカで金の危機が起きているのを聞かれたでしょう。私達はそれで苦しんでいるのよ。」

「お前たちは相変わらずアメリカに苦しめられているんだね。だけどアメリカはいつも陶器を買ってくれているんだろう。」

「今度はもっと深刻なんです。でも何よりも家族を動揺させているのはパパの遺言書なのよ。噂ではパパは大部分の株をフレデリックに保証しているらしいの。つまり自分の後の管理者になる権利がそれなのよ。私はフレデリックを愛しているわ。でもあの人にはバルヌリー商會を導く力はありません。」

「私は彼がお前のお父さんと一緒に管理しているものだと思うっていったんだが。」

「いいえ、フレデリックは何でもないのです。あの人はずっと前から工場の使用人でしたからね。でも全てを導いてきたのはパパなのよ。」

「それで若しフレデリックにそれが出来ないとすれば、誰がこの先バルヌリー商会をリードするのかね。」

「ええ、そこなのよ、誰もいないのよ。ギイは画家志望で自分勝手に結婚したためにパパとは不仲になつていてでしょう。でもギイだけがバルヌリー家の本当の者なの。彼は優れた画家です。三五歳で彼は南仏の人はワインは持つているけれどもミルクは持つていないということに気が付いたのです。彼は母の死後、ペルピニヤンの近郊に土地を買いました。彼はその地方では牝牛を持つてゐる只一人の地主なのよ。哀れにも家畜たちは家畜小屋に閉じ込められて、日の目を見ることがありません。それは北国の原則です。牝牛たちにとっては大気だけが乳牛としての役割から気を紛らわしてくれるように思えるの。彼は成功したのね。」

「ギイは卓れた会計係を持つてゐるのかね。」

「お判りだと思つのですが、農業経営では全てを計算するわけには行きません。出費の半分は忘れられます。それで何回か後悔することは免れさせてくれるということです。幸いにして土地を愛する人々がありますね……。時には私は人間がする事は何事も愛によつてであると思つのです……。それは利益の為であると言われますが、それは自惚れているから、そう言われるのです。結局ギイはペルピニヤンで幸せにしているのです。彼はリモージュを嫌つていますし、陶器については何も知りません。家族の内では皆ジャンならばバルヌリー商会を救ふことが出来るのではと言つています……。しかしジャンは常軌

を逸した人間ではないでしょうか。」

彼女はいつもの様に、少し舌が回りにくくはあったにも拘わらず、早口で話した。そして秘密を、それも時には残酷さを伴って話したが、全てを別の言葉で脚色することを確信した言葉を漏らしたりする無思慮ですてばちの精神を伴うこともあった。

「ジャンは常軌を逸した人間ではない。それに私には判っているのだ……。しかしお前がバルヌリー商會を救おうと思っているとは面白い……。お前はフランス銀行に対しても様々な気掛かりを持っているのかね。」

「それは可笑しいこと等ではありません、いいですか……。ポールが説明してくれるでしょう。」

「時にナタリーの評判はどうなっているのかね。」

「その意見は様々ですわ。でも一年前からは遺言書のことだけが問題なんです……。ナタリーは帰ってきて私達を驚かせました。私達は彼女の魅力的であった娘時代の思い出を忘れてはいませんからね……。私達は悲しみに沈み、厳めしそうで、苦しみにやつれて到着したのを見たのです。彼女はさながら自分の母親そのままでした。あなたはカペー夫人と五人の娘たちをご存じではありませんでしたね。彼女は文句ばかり言ってその夫を殺したのです。そして自分は菓の飲み過ぎで死んだのです。ナタリーが《媚態と身持ちの悪さの故に送り返される》という報告書と共に帰ってきた時、はつきり言って私は何のことも全く判りませんでした。彼女は決して外出することがありません。そして何か書いているのです。誰かが彼女に会いに行くことはあります、少なくともカトリーヌやフレデリックの妻がそうです。そしていつも同じように胸を切り裂くような調子で同じ非難や不平が繰り返されるのを聞かなければなら

ないのです。二年後、三年後には聞き飽きてしまうでしょう。この苦しみの機械的な形……非常に單調な凝り固まりは極めて奇妙なものです。その苦しみはその心の内に有るようには思えません……。その苦しみは何物の上にあるのでもなく、生きているものの上に、そしてすり減らされているものの上に有るではありません……。それは一つの夢想の内に固定されているのです。この様な苦しみの中では人は無防備なものです。怖くなります。確かにナタリーは軽い女ではありません。あなた方は思い違いをしていたのに違いありません。彼女は夫婦生活に対する幻想さえも持っていたのです。彼女が《私はジャン・バルヌリーの妻です》と言う時、恐ろしい気持ちになるのです。」

「お前は時々彼女に会うのかね。」

「滅多に会いません。しかし彼女は私に手紙をくれます。私は週に二通か三通を受け取ります。それも二十ページにもなるもので、私はもう読みません。それを私は暗唱している程ですから。」

「その手紙の中では何と言っているのかね。」

「彼女はあなたのことを言っています。あなたのことをたくさん話すのです。そして言うことは全く変わらないのです。あなたは恐ろしい人、悪魔のような人だと言うのです。バルヌリー家の者がカペー家の者と結婚するのを見て怒ったあなたはこの結婚を壊そうとしたと言うのです。あなたはジャンに対する影響力によって、そしてその偽善によって、悪魔的な策略によって彼女の幸福を破壊したと言うのです……。しかしその他の点では彼女は聖女なのです。」

「あの女は気が狂っているのではないかね。」眉を顰めながら重々しい口調で言った。

「その様に言えるところはあります。彼女の姉妹たちはそう考えています。でも私は確信は出来ないでい

ますわ。それには判らない別の説明もあるのです……。おそらくこの種の狂気は、あの女の場合は、虚栄心を傷つけられたりしたことと、ある役割を演じるという必要性の故に生じたものであると……。」

「お前の言う通りだろう、ジュリー、誰もが自分について持つている自惚れ程狂気に似ているものは無いからね。」

「この迷いは許せるものですわ。それが私達の至らなさや自然の恐るべき不平等を償ってくれし、生きることを助けてくれるのですから……。それに憎しみから生まれてくる（おそらくそれは同じものであるでしょう）この様な狂気も在るのですね……。つまり私達を苦しめた者に対する憎しみですね……。私は今ジャンに対するナタリーの感情というものを思っているのです……。」

「ジャンは私程ひどくは扱われていないのかね……。」

「そうです、彼女は彼に対しては慎重で濃縮されて、愛に包まれた様な憎しみを持つているのです……。私が今し方お話したものがこの種の憎しみですが、それは圧迫された心の喘ぎのようなものです。つまり私達を苦しめた者達に対する憎しみですね。」

「ジャンはナタリーを苦しめたのではないと……。」

「あなたはその点では何もご存じないのです。人は単に自分の弱さを感じさせられるだけで非常に繊細な苦痛を与えられるということがあり得るのですね……。そして抵抗する為には狂気という代償に訴える必要がありますから……。あら、雨が降りそうですね……。ナタリーの最新の手紙をお読みにになりますか……。それじゃあ客間でお茶でも飲みましょうか……。農場から犬の鳴き声が聞こえますね。ポールが帰ってきたのですわ。」

灰色のヴェールが空を覆っていた。牧場はほの暗い木々の間でもっと明るく緑によって高揚させられたように思えた。それから辺りの景色は大きな雲の下に消えて、もう別荘の前の薔薇の花しか見えなかった。

「中にお入りになりませんか。」とジュリーは一通の手紙をボンメル氏の横の小さなテーブルに置きながら言った。

「私は寒くはない。それに雨と雨で香る苔の香りが好きなんだ。」

彼はケースから鼻眼鏡を取り出して、ゆつくりと真面目な視線で一語も飛ばさずに顔には何の動きも現さずにナタリーの手紙を読んだのだったが、テーブルの上の一枚一枚を取り上げては自分の膝の上に置いた。

突然客間は若い娘たちで一杯になったが、背の高い娘や華奢な娘、そして見事な金髪の娘、色白でバラ色の顔、そして黒い目と艶のない色合いでクレオルの娘とは好い対照をなしているように思えた娘たちがいた。ジュリーが坐った時、一三人の娘が彼女の周りにやって来て、彼女の足元に横になったり、肘掛け椅子の肘掛けにぶら下がったり、その母親に絡みついたりした。そして彼等は一言も喋らなかった。

ポール・デツカはジレーを引っ張りながら入ってきたが、彼は小柄の声が明確な北フランス人で、バルヌリー家に招かれた人のように思われたのであった。その会話を切ってしまうその短いフレーズ、大きな口髭、田舎者らしいその顔つき、慎み深き等は、その妻を別にすれば、彼をその真価以上に思わせた。若くして彼は劇場の栈敷の中で父の隣にいるジュリーを見初めたのであり、彼女を良く知ること無しに自分の妻にすることを決心したのである。この小説染みた物語はよく噂となったのだった。彼女は

面白がった。というのは自分がボールの容姿には相応しくないように思えたからであつた。そして結局はボール自身も笑いだしたのだつた。しかし彼はこの極めて瞬間的な感情が二十年来全く衰えることなしに続いたということを口では言わなかつた。彼の知識や読書と同様に彼の内面的な生活も知られてはいなかつたし、費用を要する土地の管理に彼が向けた勤勉さについても同様であつた。

若い娘たちは出ていった。そして彼女達はゴムの外套を着てベレー帽を被り杖を持ち、毛の長い何匹かのスコットランド犬を従えて砂が敷かれた階段を下りていくのが見られたが、その犬は尖った鼻先で地面をくんくんいわせながら嗅いでいた。そして尻尾は雨の下に低く垂らしていた。そして呼ばれると遠ざかつていった。

「あれは食用の茸を探しに行くのです。」

「七月に茸なのかね。」客間に入りながらナタリーの手紙をポケットに滑り込ませていたボンメル氏は言った。

「今のものが一番いいんですよ。」とデツカは言った。

ボンメル氏はジュリーに近づいて、低い声で言った。

「ナタリーの手紙を私に預けてはもらえないだろうか、ジャンに見せてやりたいんだよ」

「いいですね、お預けします、フィリップ伯父さん。私は別のものも持っていますからね。」

彼女は夫の方に向いた。

「ポール、私は伯父さんに工場の未来が心配の種になっていることをお話したのよ。伯父さんはそれに納得はなさらないのよ。」

「工場はずっと心配の種であつたからね。」とポール・デッカは言った。

「今日ではそれはもつと不安を増していますわね……。ポール、あなたならそれを私よりもつと上手く説明できるわね。」

デッカは周りの者が自分の話にあまり注意してくれないので、話すことに恐怖を感じていた。見知らぬ人の前では彼は、言葉少なく、聞き取れないような声で話したのだった。しかし彼はこの内気さに打ち勝つことが出来たのだった。彼は絶対的に決まった才能も、如何なる個人的で断固とした趣味も持っていないかつた。彼はジュリーが望むことを自分も望んだ。彼は彼女の希望に基づいてやつと公式のものとなつてから、彼は別荘の一部を飲み込んだ巨大なホールを建設させたのである。若しジュリーが求めるなら、彼は他人のように話すこともできたとし、議論することさえ出来たのだ。

彼の赤い頬は喉を詰まらせたかの様に膨らんだ。そして食堂に入り、手にはコーヒ・カップを持つて戻つてきて、それをボンメル氏に見せたのだった。

「このカップを見てください。この輝く温かみのある白さ、この非常に軽くて決して変質することがないのが感じられるような半透明の繊細な素材、このくすんだ金の線を。一つの宝石ではありませんか……。これは単純なカップ、そこでは芸術が結びついた有用な品物なのです。このカップは単に国王の為に作られたものではありません。多くのものは普通のアメリカ人の為に作られているのです。この美しい陶器はリモージュで生産されたのですが、高陵土、その芸術家、非常に熟練した労働者達の形成、そして長い歴史を持つ技術的な完全さ等のお蔭で創られているのです。しかしいいですか、ロベール・バルヌリーがいなかったら、このカップは存在しなかったでしょう、少なくともこの様な形では存在しな

かったのです。これは美術館に在ってもよいものです。そしてリモージュでは一万五千人の労働者の代わりに嘗つての様に数百人の者が教えられるだけなのです。そしてアメリカ人ははるかに安価であるドイツの粗末な陶器を買っていたのです。バルヌリーはアメリカにリモージュの陶器の流行を作り上げたのです。そしてリモージュのものはその様な魅力的なものとして生きているのです。彼が自分としては質というものを信じて、この流行をどの様にして生ぜしめたか、どの様な配慮によって、そしてどの様な絶えざる発明によつて創ったかを私はあなたに説明することは出来ません。私はその全ては一人の人間に依存しているということだけを言いたいのです。」

「私もそう思っている。」

「あなたは判つておられると思いますが、私程ではないでしょう。というのは私は今まで疑問に思つていたからです。様々な出来事や仕事の共有に於いて一人の人間の役割を認識することは容易なことではありません。私は最早疑いを持つてはいませんが、リモージュの陶器の歴史は、五十年來バルヌリー家が成し遂げたことなのです。現在では私の義父は非常に年老いており、病んでいます。誰も義父に代わることが出来る者は居りませんからね。」

「彼は伝統と機構と職人を残している……。」

「人物というものが居なければそんなものは何でもありません。フレデリックは善良な雇われ人なのです。彼は自分の父親の生き写しの人間です。しかし私の義父は機械ではありません。彼は模写すること出来ません。少なくとも彼の最近の年月における姿はそういうものです。彼は毎日のように発明しているのです。今や今まで以上に革新しなければなりません。風習は変化します。それは私のやることで

はありません。私は農夫です。しかし私はフレデリックには何が欠けているかが判っています。そして事業というものが拡大すればするほど、脆いものになっていきます……。いいですか、私達は社会主義者からは完全に逃げてしまうような一つの真実を知っているのです。」

「社会主義者は言うでしょう、『それは止むを得ぬことだ。』と。」ジュリーが言った。「リモージュの労働者達がまだあばら家に住んでいる時にアメリカ人が宝石の様なカップでコーヒーを飲み、バルヌリー氏がその薔薇園に腰を下ろしているのを見ることはショッキングなことです。」

デッカは沈黙した。というのは彼は自分の妻の言葉の一つ一つ注意して聞いていたからであり、例えば気紛れな言葉を発した時でもそうだった。彼は考え込み、赤面し、自分のジレーを引っ張っていた。そして言った。

「アメリカ人達がこの宝石の様なカップでコーヒーをもう飲まなくなれば、リモージュの労働者達は今日よりも遙に貧しくなるでしょう……例えばその利益を全て分配されたにせよ。」

「そしてドイツの労働者は仕事を手に入れるようになるでしょう……。」

「ポール、フィリップ伯父さんにパパが一八八四年にセーヴルの社長宛に書いた手紙をお見せしなければならぬわ。」

デッカは自分の書斎に入って日本和紙に印刷された三十ページを含んでいて、綴じられた薄い一巻の本を持ってきた。

「私が好きなページだけを読んであげて下さらないかしら……。いいえ、私に本を渡して！　ここですよ。」

少しばかり軽くなまったアクセントの付けられた高い声で、少し震える口調でジュリーは読みはじめた。『我々は或る外国、特にドイツと低価格で競争することは出来ない。その様な競争はあらゆる点で反対される。それに更に付け加えなければならぬことは、一つの国にとって余りに安価で生産することは良くないということである。というのはそれは労働者に支払われる賃金之余りに低いということを想定させるからである。従ってフランスの産業はその質、形、その生産物の装飾によつてあらゆる外国の産業よりも優れているということが必要なのである。若しその産業がその優秀さを保持できないならば、そしてそれが外国の顧客を失つてしまふならば、輸出するときにその代価をどの様にして支払い、どの様にしてその予算をさがなうことが出来るだろうか。この非常に見すばらしい外観の問題は、つまり我々が金属や木材や毛織物、陶器に与える形と装飾以外の如何なるテーマも全フランス人に利害関係を持つものは何も無いのである。それが単に一人の慎ましい陶器の製造家である私の心を活発に専有している問題なのである。』

「フレデリックは本当に彼の父親の代わりをすることは出来ないのかね。」ポンメル氏は立ち上がりながら言った。

「私は出来ないのではないかと思つてゐるのよ。でも私は確信を持つてゐるわけではありません。今に判ることでしょう。私が嘆息しているのは、一つの遺言書の力で彼は不動の立場を得ることなのです。」

「そんな事は出来ません。」ジュリーは言った。「私、パパに話しますわ。若し遺言書というものがあるのなら、彼はそれを破棄しなければなりません。」

「お前ならお父さんを説得することが出来るだろう。お前はお父さんが耳を傾けてくれる唯一の人間だから。」

「そんな事は断じて出来ないわ。」ジュリーは安楽椅子にそっくりかえりながら繰り返したが、それはあたかも独り言でも言うように、突然ジョンシユロル、ボーパトウー、ペルピニャン、そしてフレデリックやその遺言書が話題とされる所で、バルヌリー家の人々の眼を光らせたこの火によって勢い付けられたかのようにあつた。バルヌリー家の人々をそれ程迄に情熱的にさせるものは金銭や遺産への渴望ではなく、祖先の創造物、バルヌリーの陶器であるその家族の精神的な財産が没落するのを目にするということの恐れなのである。

ボンメル氏は自分の部屋に上がつていき、手を洗うために陶器の薔薇の模様で飾られた大きな水差しを持ち上げてみた。食堂では、食卓が整えられる間に、ペルシャ製のビロードの二重になったカーテンが下げられて出入口を塞いでいる。子供たちは夕方風呂に入ってから台所でミルク入りのスープを飲むために下りてきた時に壁布の襖の中に身を隠すのである。ジュリーはテーブルを最後に一目見にやつて来てから、テーブル・クロスの上に花を並べてから、カーテンの間を滑るように通り抜けて客間に入っていくが、そこでは若い娘たちが軽やかな衣装を身に付け、モスリンのネツカチーフを肩に掛けていた。今度は昼間には見られなかった青年たちを伴っている。彼等は別の世界の人種のように見えるが、彼等の姉妹や従姉妹が遙かに秘密の存在の様でありながら、中身は透き通って見えたのに比べると緻密な頭を持っていたのである。

ポンメルル氏はジュリーの子供とカトリーヌの子供を見分けようと努力する。最も小さかった者も突然成長していた。そして彼はその子供たちに会ったことは無かったのである。しかしその子供たちは全くバルヌリー家の調子を持つ集団を形成しているのであり、それはクリスタル・グラスや繊細な陶器、パイン用のお皿、取り扱いで当惑させられる様な大きな銀器、そしてそこでやつとのことと未知の料理が味あわれる非常に短時間の食事等では毎日が宴会であった花で飾られたテーブルの様だったのである。その全てはイギリス風ではないのである。つまり男たちは昼間の服装のままであるのに、女たちは夜会服を身に付けていたのであった。それはアメリカ風なのでもない。楽しい談笑の間に通人のように芸術や料理についてしか話されることはないのである。ポンメルル氏にとってはそれはユニークで、親しみがああり、風変わりなバルヌリー式の混合物であり、彼の青春、結婚、誇りでもあったのである。このテーブルに向かつては彼は自分自身の天性をも奪われてしまったかのようなのである。彼は饒舌になつたし、お世辞も言うし、微笑みを忘れず、どんな意見も受け入れた。彼は嬉しそうに見境もなく食べた。自分の旅行の動機も忘れていた。そして満足していたのである。

夕食後若い男女はビリヤードの方へ引き寄せられる。ぼんやりした手つきで球がフェルトの縁に沿つて突かれる。デッカは試飲用の大きなグラスに色が濃くて上等ではないビュルゴー・デュペロンのコニャックを少し注いで、恭しい仕種で、この自分では良質のものであると思つていたこのリキュールをポンメルル氏に差し出した。そしてポンメルル氏は習慣的にこの芳香の無いコニャックを一心に嗅いでから、低い声で言つた。

「私はしばらくの間お前たちがフレデリックを今のままにしておくのが良いと思うんだよ。今まであの

男は目立たない仕事をしてきた。彼の父親が居なくなれば彼も変わることもあり得るだろう。」

「それをやらせてみることにしましょう。しかしその結果は判っています。工場を閉鎖しなければならぬでしょう。私は少なくともその前に彼を交代させる権利を持つことを希望しているのです……。ところであなたはビリヤードをされませんか。ジュリーも相手をしますよ。」

「喜んでさせてもらうよ。しかし私は上手くは出来ない……。ジュリーは私に、フレデリックに代わる者が見つからないと言っていたが……。」

「全く誰も居ません。未知の人に、例えば我が社の重役の中で最も頭の切れる人間であるバブウゼに話向けることも出来ます。しかし結果はあまり違わないでしょう……。リモージュの社会主義者の市長はバルヌリー商會を導くことが出来る人間をどこに求め、彼がどの様にしてそれが出来る人間であると承認出来るかを私に言ってくれるに違いありません。」

「その市長はバルヌリー家はいつもこの神から召された人間を与えてはくれないと答えるだろう。お前にも良く判っていると思うが、天与の才能を所有する為には、その役割を引き継ぐだけでは十分ではないのだ。」

「しかし私は血統の相続人は他の者よりは才能を天から授かっていると考えています。何よりも本能が重要であるということです。若しジャンが工場に止まってくれたなら、私達は今日もとおとなしくしているでしょう。」

「あなたはジャンを知ってはいらつしやらないのです。」ジュリーは語気を強めて言った。「私は家族の内での意見はどうして出てきたのだろうかと自問しているのです。ジャンは哲学者であり、詩人で神

秘主義者でもあるのだから……。」

鈍いが明確な一撃の音が聞こえた。それからぶつかり合って、緑の布の上を影と一緒に転がっていく球のもっと明るい音が聞こえてきた。デツカは狩人が獲物を狙うように顔を傾けて、眼を定めて、しなやかな腕を伸ばしたが、猫のような厳密な動きで、上半身は伸びている腕に随いていくのである。ジュリーは前かがみになって踝の上まで裾飾りをまくり上げた時に片足を後ろに上げた。そして彼女の指環はシャンデリアの光できらきら光ったのだった。ポンメルル氏は静かに、少し短くてむっくりした片手を球の上に置いたが、目標をはずして、それから身を起こしてから、甲冑に身を包んだ騎士の様に黄色の木の棒の長い胴に凭れたようにしているのである。

デツカは上手く行っている間は黙っていた。得点を計算しながら彼はゼンマイのチック・タックという音の様な調子で言った。

「ジャンは工場で数年過ごしましたし、アメリカに行ったこともあります。私達の意見は彼を非常に良く知っているバブウゼから出ているのでしよう……。一つの企業の指導者にはほとんど定義することが出来ないような多数の特質を必要とします。しかし特に精神力が必要ですからね。」

「お前達は労働者たちの間に心配事は無いのかね。」

「彼等は法律を作りたいことを望んでいて絶えず要求をしているのです。それは全く当然のことです。彼等は工場の窮迫というものは理解してくれませんが。労使が理解し合うことは出来ないのです。そして闘争ということになるのです。」

デツカは球の方に手を伸ばし、玉突き台の上に身をかがめてゆっくりと片腕を後ろに回しながらささ

やき声で言った。

「若し出来るなら、イエスと言えることが出来なければなりませんし、ノーとも言えなければなりません。それだけのことです。双方は互いに理解し合うことは出来ないのですから。」

使用人たちは客間のテーブルの上にグラスと水差しを載せた銀製のお盆を置いていた。それは空気の花の様にランプの下で玉虫色に輝く円形のものであった。ジュリーは勝負するのを止めた。デツカだけが一人で頑張っていた。

「伯父様、若しお望みでしたら明日の午後にパパに会いに行きましょう。」ジュリーはボンメレル氏に水の入ったグラスを差し出しながら言った。

「お前は私がお父さんの邪魔になることはないと本当に思っているのかね。若し苦しいようであるなら、秋にまた出直してくることもできるんだ。」

「パパは明日あなたに会って喜ぶことと思いますわ。パパは自分の薔薇の木をお見せするのが好きなんです。でも前もって知らせておかなければなりません。彼は突然の訪問は好きではありませんから。ジョルジュが学校からの帰りに知らせてくれるでしょう。息子たちはリモージュのリセに通っていて、昼食を伯父のフレデリックの所で取っていますの。夕方にはこちらに連れてきてもらうのです。リモージュとジョンシュロルの間にはいつも車が行き来しているのです。大きな息子がいる時には、田舎に住むのは好都合ではないのです。」

ボンメレル氏は非常に装飾の多いルイ十四世時代風の振り子時計で時間を見ようとして、暖炉の方へ目を向けた。しかし彩色された文字盤の上では青みがかった金の針は、その影と丸く膨らんだガラスを

取り囲んでいる花飾りとでやっと区別できるだけだった。彼は竹の一節から切り取られた小さな人形に魅惑されたかのようにガラス戸棚の方に向いた。そして秘かに自分の時計を見たのだった。その時計は本当であるとは思えない様な時刻を示していた。時間はバルバザックとジョンシユロルでは同じようなリズムで流れていくのではないのである。ここに居ると十時になっているのに、ポンメレル氏はまだ澁刺としていたのだった。

ロベール・バルヌリーは自分の妻の死と長い病氣の後でリモージュ郊外の簡素な家に落ち着いていたのであった。そこで彼は絵画や陳列用ケースや日本の版画の紙挟み等を積み上げていたが、それらはその小さな部屋部屋を塞いでおり、贅沢な物置部屋の様な感じを与えていたのである。彼は朝早くから客間の机の前で上にクッションの付いた高い肘掛け椅子に坐っていたのだ。そしてそこでは彼は立つたままに思えたのである。以前の様に彼はこの場所から穏やかに自分の工場を指導し、様々な装飾を考えたり、デッサンを手直ししたり、在庫帳を検査したり、その装飾に従って販売価格を決定したりしたのだったが、いまだに工場で初めからのポストに就いていた息子のフレデリックの意見等には頓着することは無かったのだ。アメリカでの売り上げは落ち込んでいたが、バルヌリーは嘗て多くの障害を乗り越えてきていたので、彼の平静な気持ちを乱すものは何も無かった。彼は自分の工場が自分の抱いていた永遠の観念に結びついていたかの様に、たった一人で後継者が居なくても何の不安も持つては居なかった。彼は情熱を、闘争を、美しい形式を、そしてそれほどまでに愛撫された稀な素材を非常にしっかりと味わっていたので、この体が動かない、無気力な老人にとっては、例え縮小されていたに

せよ、その人生は最小のものの中にも全体的なものとして残っていたのである。それは版画とか花が咲いている薔薇の木の柱塔とか、彼が自分の窓から眺めるものがそうであった。昼食の時間には肘掛け椅子が極小の食堂に運ばれた。そしてテーブルの前の非常に高い所に坐って、ほとんど全てのものは彼には禁じられていたにせよ、食通のメニューに興味を持っていたのである。

ジュリーの息子が帽子を手にとって、少し息切れしながら、顔を赤らめてはいたが、眼を輝かせて部屋の中に入ってきた。

「ママが今日の午後ボンメルさんと来てもよいかどうかを尋ねておいてくれないかと言ってるよ。」
「お母さんに喜んで待っていると伝えなさい。」

「バラを見るのには良い日和ですね。」とこの若者は言ったが、それはあたかも子供に話しかけるかのような尊敬の気持ちと少し強められて努めて機嫌を取るような調子であった。

「そうだな。良い日和だ……。それにヴィエンヌ河ではまだ良い魚がたくさんいるんだ。」とこの老人は人の良さそうな調子で言った。

その声は辛辣さを失っていたが、その目は理解しがたい哲学者の様に気後れさせるような微笑を湛えていた。

その若者にとってその祖父はこのちよこつと坐っている食道楽の小柄の老人ではなく、堂々とした過去を身にまとった比類なき人物なのだった。けれども彼はその両眼の先に固定された不思議と頑強なバルヌリーの微笑に当惑させられていたが、それは悪意の素振りと共に二人ともが考えていた人間はもうそこにはいなかったのだと言っている様に思われたのだった。

メラニーは誰が呼び鈴を鳴らしたのかを見る為に庭の鉄格子に近付いた。そして彼女は家に入って入り口の扉を開けた。

「ジャンさんに話したいのだが……邪魔じゃないだろうか。私は客間で待っています……。」とボンメル氏は言った。

その貧しさにも拘わらず、この狭い部屋は全ての客間の少しばかり荘重でほの暗い外観を持っている。壁の褐色になった壁紙の上には三つの額に入れられた大きな版画が浮かび上がっていた。「橄欖山上のキリスト」、「最後の晚餐」、毛皮の襟と尖った髭とそして聖書の上に伸ばした長い指を置いているカルヴァンの肖像画であった。ボンメル氏は綴れ織りを真似た布地で覆われた長椅子に坐った。

彼は自宅であれば進んで訪問客を受け入れたが、見知らぬ部屋にいるときは、例えば友人の家の客間であっても居心地わるく感じるのだった。彼は坐ると直ぐに息苦しくなったかのように、行ってしまうような気持ちになった。ジャンが入り口の扉を開いた時には彼は立ち上がった。そして立ったまま言った。「お前の家の前を通りかかったのだよ……。ここにナタリーの手紙が在るが、私がリモージュから持ちかえたものだ。この手紙はジュリーに宛てたものだ。私は昨年お前に言ったことがあったね、ナタリーは極めて閉じこもっているが非常に勿体ぶったやり方で生活していると。それは本当だ。それでも私がそれについて後悔していたこの言葉はお前にナタリーについて間違ったイメージを与える可能性がある

なのだ。お前は直ぐにこの手紙を読んでも良い……。非常に長いものだ。この手紙ではナタリーはその全体が……。お前は自分がこうしなければならぬように行動したということは当然であつたと……。さあ、これだ。もうお前の食事の時間だろう……。私はお前を引き止めるつもりはない……。いや、そこに坐りたくないのだ。私は帰らなければならない。」

「直ぐに食事をするのではありませんよ、ちよつとお供しましょう。」

ポンメルル氏が通りに出るともう急いではいないように見えた。顔は穏やかで落ちついた歩調で歩きながら言つた。

「そうだ、気持ちのよい旅行をしてきたんだ。それでジュリーに会つたよ。私の大好きな女性だ。ロベールは疲れている……。非常に変つたし……。彼はバラで一杯の……。柱やドームや花環の形の薔薇の並木道がいくつもある……。庭を持っているんだ。彼は自分の庭のことしか話さなかつた。コニヤックを購入することへの参加協力を求める時とはならなかつた。」

「あなたは自分が望む時にバルバザックでお金を見つけることが出来るでしょう……。あなたはリモージュに行く必要はないのではありませんか……。お金だけが問題なのでしたら、あなたに必要なものは私が御用立てしますよ。私はベルトメの計画はあなたの重大な困惑を取り除いてくれるだろうと思つてゐるのです。あなたはその計画を本当に受け入れられたのですか。あなたは自分で正当であると感じた一つの議論の力に屈伏されましたね。しかし実際はこの計画はあなたの氣に入つてはいないのですね。」

ポンメルル氏は小道の真ん中に立ち止まつた。そして後ろを見てから低い声で言つた。

「私の会社で全ての者が望んでおり、お前も必要と思つてゐる私の会社の改革を、それが私の破滅には

ならないとお前も確信しているのかね。私は巨大な試みとか経営の変化が予想させるあらゆる困難さの前でも決して尻込みはしない……。唯経営の変革することは許されるのかどうかだけを自問しているのだ……。例えば一生涯、いや、数世代前から卓越した生産品を売っていた時には、それが望まれるからと言って、月並みなものの商人に急に変わる事が出来るだろうか。私は何か自分には判らぬもの、ある種の有機的な通俗性、一つの感覚、そして望むならばこのやり方で成功した人達の財産を形成している天与の才と言えるものが私には欠如しているように思うのだ。生涯を通じて真実を言つて来た人間は嘘をつくことは出来ないのだ……。嘘をつくことを知らないのだ。」

「今は嘘をつくとか、通俗性ということが問題なのではなく、新しい状態に適應することが重要なのです。余りに特殊な質の良い古酒を提供する代わりに、ベルトメが言うように、あなたは十五年経過した自然であり、ちょうど頃合いであり、健康的でもあり、まともなものであるがあまり高価ではないコニャックを瓶詰にして売るべきなのです。それらはあなたのように特別の教育を受けているが故に最も基本的と思われる様な色合いにはあまり敏感ではない人々を満足させるでしょう。誰しもその人格はその様な教育が無くても品位が下がるということではなく通用するものです。そして俗人たちも良い点はありますから。」

「余にも特殊だ、確かに本当だ。我々は思想と教育と気質の自分流の特殊性を持って生まれてきているのだ。今場所を変えるのは賢明なのか、無思慮なのか。私はもっと考えることにする。私はベルトメの考えを撥ねつけるのではない、それでリモージュに行っていたのだ。又リモージュに戻ってみよう……。」

ジャンはボンメルル氏と別れてから、ナタリーの手紙に目を通したが、自分で何を読んでいるのかは判らなかつた。家に帰つて、彼はこの手紙をポケットにしまつてから食卓に就いたのだつた。彼は習慣に反して食事の間メラニーと話したりした。しかし彼女が近寄つてくると、あたかもその手紙の一枚がポケットから滑り落ちるのを恐れているように、その手紙に手が触れるようにポケットに片手を滑り込ませたのだつた。メラニーは彼にコーヒー・カップを持ってきた。そして彼は何度かぐくりぐくりと飲み込んだ。彼はコーヒーの粒の絶妙なる芳香がどうしてこの苦い飲み物に変わり得るのかが説明がつかなかつた。そして彼はいつも自分のカップに、ボンメルルのコーヒーの素晴らしい香りを見出すことを望んでいたのである。

ジャンは書齋に上がつていき、扉に鍵を掛け、ポケットからナタリーの手紙を取り出した。そして彼はゆつくりと十二枚の手紙を再読した。その馴染みの筆跡は確かにナタリーのものだったが、硬くて明瞭で、念入りに書かれていた。一つの強迫観念のように変わらない文句や強調された言葉がいつも繰り返されている。彼はボンメルル氏を驚愕させたことを理解した。つまり憎しみの狡賢さと嘘である。けれどもあれだけ多くの偽りの中で何かが嘘を言つてはいないのである。一つの訴え、押しつぶされた嘆きが聞こえてきたし、本当の苦悩が感じられたのである。

ボンメルル氏はナタリーの手紙の強く胸を刺すような調子をどうして感じないのだろうか。確かに理解しがたい苦悩や常軌を逸した嘆きは人の心に訴えはしない。しかしジャンはこの馬鹿げていて解説できない数ページの意味を知っていたのだ。彼はその鍵を握つていたのだ。ナタリーの手紙の中に入つていく為には、その起源まで遡らなければならない。そこには彼だけが到達できるのだ。そこでは全ての

者にとつては雑然としたものである深淵を照らしたす確かな展望が発見されるのである。一人の人間を理解できる只一人の者、自分の過去の唯一の証人は恐ろしい絆によつて結ばれているのである。つまり彼は恐るべき利点を持っているわけである。ジャンが言えることをナタリー自身は忘れてしまつていたのである。彼女は一貫性がなく、作り話で一杯になつた言葉で自分を表現しているのだ。彼女はもう自分の精神を曇らせた歴史を知つてはいないのだ。

二

ジャンはバイリー夫人をしばしば訪れていたが、彼女は自分の一人息子を亡くし、その直ぐ後で夫を亡くしていた。その庭師は鳶の広がつた樹々の下の砂利を掻き集め続けていた。週に一度その部屋の使用人は食堂のテーブルの上に広げられた銀器を磨いていた。朝早く日の当たる側の鎧戸は閉められた。使用人達の活動は、意気消沈してもう自分の部屋から下りてこなかつた女性の周りで次々と続けられたのだつた。

ジャンは容易に迷わされ、自分自身によつて騙されて、自分たちが息詰まつている幻想の世界を作り上げてゐる女性たちにだけ非常に親切だつた。リニエールに住んでいたアルヌー夫人にも、そしてポンス夫人や体育教師の未亡人に対してもほとんど毎日と言つてもよい訪問を決して怠ることはなかつたのである。

しかしこれらの献身的な行為はナタリーへの厳密なる義務とは何の関係も無いままであつた……。如

何なる慈善的な行為も彼が自分を責めていた過失を償うものにはならないのだ。どんな時にも彼の無私の行動は、彼が善行によつて忘れることを欲していた個人的な過ちを思い出させたのである。聖書は彼を尋問し、直接ねらい打つのである。彼が説教したり、日曜学校で子供たちに話しかけたり、或いは新たな夫婦に祝福を与える時には、自分の説教で非常にしばしば繰り返されて帰ってくる愛という言葉が自分はナタリーに対する慈しみの気持ちに欠いているということを告げるのである。

彼は別の慈善的な行為で償いが得られるのだろうか。一つの存在に結びついたこの特権、この回想はどうして容赦されないのだろうか。

彼は自分の人生の中にあれ程深く入り込んだ一人の女を孤独と狂気に至るまで断罪したという考えは受け入れなかった。彼はこの良心の咎めを基本的なものと考えていたのだった。彼がその責任の感情に結び付けていた代償は社会的な偏見や、結婚というものに対する迷信的な尊敬の心にも基づいているのではなかった。それは理解力を越えたものなのだった。

..

ジャンはナタリーがバルバザックに戻ってきてまた自分と共に生活するだろうということを知っていた。彼がその決心をした時、ポンメレル氏にそれを告げる前に自分に猶予を与えたのだった。彼は自分の伯父が向けてくる見事な反対意見を知っていた。しかし伯父を説き伏せる積もりはなかった。彼はそれらの事をポーリーヌと話し合いたい気持ちだった。彼女はそれらのことを彼と同じようには判断しな

いだろうが、その理由はボンメル氏のものとは違ってもっと人間的で、もっと不安にさせ、その上にもっと盲目的なものであつたらう。

ジャンはしばしばアングレームの街道に散歩に出掛けたのだったが、それはあたかも今彼の思想が固定した立場やその椅子や本やテーブルとは順応することが出来ないかのようであつた。彼は動くことや街道での漠然とした気晴らしが必要だつたのである。

彼は非常に速く歩いたが鉄道の線路を越えて行くことはなかつた。時折はその少し前で突然向きを変えて、木々の間にあるボンメルルの酒蔵の屋根を眺めながら、引き止められたかのように静かな歩調で帰ってくるのだつた。酒蔵を見下ろす瓦とスレートの屋根、つまりポリーヌの家が、彼が静かに町に近付いている間、彼の目の前にいつもあるのである。

彼はポリーヌを愛している。彼はいまそれに気付いている。一軒の家がその町にはある。生きている人の間には只一人の若い娘がいるだけなのである。彼がその顔について持っている記憶、彼がその最小の言葉にさえも与えている重要性、そこに彼女がいる自分自身とのこの対話、この溜め息、それは正に愛である。けれどもそれはやつと知覚できる感情であり、それについては人は誤解しやすいのであり、彼はそれを、自分がナタリーを呼び戻そうと決心した日までは、自分の考えから遠ざけてほとんど気がつかずにいたのだつた。

この愛はハッキリとは定義できないものである。それは悪にも誤りにも似ていない。空想的なものは何も持っていない。それはこの地上の全く新しい局面の様なものなのだ。この発見は恐ろしいものではない。ポリーヌは手ごわいことはない。黙っているだけで十分なのである。二人を護っているのは沈

黙なのだ。一言、最も仄かな心配、一つの疑わしい眼差しがその二人を、抗うことの出来ないこの力の中に突進させるであろうが、それは彼が極めて身近に感じているものなのだ。それはしかし沈黙の障害によって抑えられているが耳元でこうこうと唸っている様なもので、支配できない大洋を堰き止めている不確かでか弱くても抵抗する砂丘の様なものである。一つの仕種で彼等を滅ぼしてしまう可能性がある。しかし非常に注意深い素振りが彼等を護ってくれているのだ。人間の心を支配する身振り、外観というものが存在する。ポーリーヌの前でのある種の慎み深さ、無関心の素振り、少し冷たい言葉等は彼の自分自身の感情を和らげるのである。彼は自分の慈善的な演技に騙されるのだ。そして彼は彼女をひどくは愛していないとか、自分が思い止まろうとする容易な傾向について思い違いをしており、それは弱まっている等と思うことが出来るのだ。彼はどんな驚きも、衝動も、臆病さも恐れてはいない。彼は自己のコントロールは、人が屈伏するかもしれないが、愛情に依存している或る闘いの中の意志の不確かな勝利なのではないのだ。彼がポーリーヌの側で無関心を装っているのは、不幸に対して彼女を護る為の甘味な飛躍である情熱を持つてのことなのである。

もっと強くもあり、本当に威圧的で支配的なもう一つの感情が彼を支えているのだ。つまり自分の妻に対する過失を修復し、彼が失望させた一つの存在に幸福を返そうという願望である。

彼は不安もなくナタリーの帰りを思い描いていた。二人の過去は彼が今修正することが出来る一つの過ちによって損なわれていたのだ。以前彼の態度は個人的で偽善者的で盲目の防衛の思いによって偽りのものとされていた。今日では彼は愛というものを知っている。つまり無限の寛容であり、些細なものへの陶醉、意図しない善意、自分自身の完全な忘却である。彼はナタリーとの共同生活を再び始めるこ

とが出来たのだ。彼はもっぱら彼女を幸福にすることを思っているのだ。彼はもう自分自身のことを考えることはないだろう。彼は苛立たせる話題、子供じみた軽薄さ、虚栄心、気まぐれ等、恐らく別の女の場合には優雅に思える様な全てのことを許すであろう。

彼は将来のことを考えながら、その犠牲は強制でもなく、困難で一つの剝奪を意味する選択でもなく、心の自然な傾き、つまりそこでは満ち足りた感情で自己放棄をする傾向であると自分に言い聞かせるのである……。どうしてこれ以上待つことがあるだろうか……。彼はボンメル氏に、日曜日の説教の後かその翌日に告げるだろう……。

∴

彼は説教の引用に『幸なるかな、正義に飢え、渴望する者は。』を選んだ。

彼が説教の準備をしていた時、表現というものの純粹に感覚的な効果を恐れて、やつと読めるような書体で単にいくつかの考えを書き留めていたのであった。つまり思想というものは言葉の躊躇いがちで複雑な進りの内で一層心を打つようになるということである。彼が注釈を与えたテキストはしばしば個人的な諸問題に結びついていて、彼はその主題と聴衆とは無関係でありながら、自然なものである悲壮さというものに屈服してしまったのであった。そして少し誇張が過ぎると非難されたのである。

モーリッセの夫人方の側に坐ってポーリーヌは注意深く耳を傾けていたかのように、説教の間は頭を垂れていたが、実際は自分の中に閉じ籠もって、目立たないようにして、聞かないようにし、不在にな

ろうとしていた。彼はあまりに震えるようなアクセントで、正義と犠牲について話していたが、それはこの繊細な人間にはびつたりしない、説明出来ないような調子の様に思えて彼女の感情を害するのだった。しかしそれで彼女は心を動かされるのだったが、自分の感動で自分を責めるのだった。

二つの家族は二つの長椅子を一杯にしている。蒼白い襟首は黒っぽい上着のカラーの上に現れていた。夫人とその娘たちは帽子と外套の下に身を隠していた。トーマ・ポンメルルの椅子の後ろには二人のスエーデン人と一人のイギリス人が坐っていた。金髪の頭は良く櫛で梳かれており、真つ直ぐになっており、取り付けられたカラーと美しいネクタイの締めつけた結び目によって支えられたかのように不動であった。

人けのない空間、そしていくつかの空いた椅子がある。只一人、顔を響めて、ブラシを掛けた黒髪のパジエース氏はアーチ型になった窓の一つに眼を上げた。彼はバルヌリーの政治的な見解は嫌っていた。正義への祈願、この芝居がかった身振りは、今はもう話題にされることのないドレフュース事件への不適当な言及であるように彼には思われたのだった。そして彼は無理に強いられて、宗教への当然の尊敬の気持ちと牧師への嫌悪感を宥和させようとしているのである。先日にはグレーの大きな仕事着を着て梯子の上にながっているのが認められた画家のベッソンは黒い背広を着ていた。日曜日には彼は食事の後でパイプは吹かさなかった。彼は煙草に火をつけて直ちに教会に出発する。説教の最初の言葉から彼はうとうとする。それからハルモニウムの音で目を覚ます。そして自分が聖歌の為の美しい言葉を持っていることを思い出して大声を投げかけるが、それは女たちのか細い聖歌をかき消してしまうのだった。

四十年来ポンメル氏は雄弁であつたり、月並みだつたりする説教を同じような穏やかな顔をして聞

くのである。年をとつてきて彼は年齢というものは不安のみをもたらすものだということに気付いている。事業はますます困難になっているし、子供たちは面食らわせるし、新しい風俗は古い経験を空虚でおそらく有害なものにし、全ては不安定で陰悪である。しかしここで自分がそのお歴々の一員である古い宗教的な社会のメンバーとして副執事の席に坐つて彼は永遠の声、不変の真実を聞くのである。そんな訳で彼は礼拝の間は極めて落ちついた表情をしているのである。むき出しの壁の上に際立っている胡桃の木の背の高い説教壇の中で、ジャンは最後の聖歌が歌われている間、眼を伏せて坐っていた。彼は小卓からハンカチを取ると、口を拭つてから立ち上がった。それから黒の衣装に包まれた両腕を差し出して言った。「心を安らかにして進みなさい。そして貧しい人達のことを思いなさい……。」

∴

「ジャンは直ぐやつて来る。」とポンメルル氏はポリーヌに言った。「コーヒ―を二杯程持つてこさせなさい……。」

「緑の東屋の下に来られませんか、もつと気持ち良いと思いますよ。葡萄の房を持つてきましょう……。ジャンは葡萄が大好きなんです。暑くはありません。今は直ぐに過ぎてしまう良い時候です。」

「いや、すずめばかりがいるよ。それに我々は真剣に話さなければならぬと思うんだが……。ほら、彼がやつて来た。」

ポリーヌは台所に入つていった。それから客間に戻つて来て、籠を差し出してジャンを引き止めた。

「これをお取りになりませんか。」

「では一粒。見事なものです。一粒で十分です。いいえ、今はいいです……どうもありがとう。」

「一寸麝香の香りがするこの黒い実は……。」

「知っています。ありがとう、ではまた後で……。」

「では、ごゆっくり……。コーヒーを喫煙室に持っていかせましょう。」

ポーリーヌは庭に下りた。彼女は刺繍に熱中していた。しかし糸が結び目を作ってしまった、針の動きが上手く行かないのだ。

ジャンはマホガニーの机の側に坐っていたが、それから立ち上がった。

「窓を閉めてもいいですか。」

ジャンはボンメルル氏がコーヒーを注ぐのを待つてから窓を閉めた。そして振り返ることなく突然言った。

「私はナタリーに戻ってくるように頼みたいのです……。私はそれに対してあなたが何と答えられるか全てが判っています……。私は永い間この問題と議論を重ねてきました……。私にとってはこの問題は決定しているのです。」

ジャンはボンメルル氏の側でのもつと大きな驚きを予想していたが、彼は単純に次のように答えただけだった。

「私はその決心を残念に思うのだ。お前は、尊敬すべきであるかもしれないが、穏やかではない良心の呵責の為に自分の経歴を危うくするのだ。お前の精神的な使命は私にはお前の第一の義務であるように

思えるのだ。ナタリーはここに帰ってきてはならないのだ。」

「あなたは私が自分の妻を自分の家に迎えることは出来ない、そしてバルバザックで牧師であり続けることは出来ない、と仰るのですね。」

「そうだ、十分に話題となった第一級のスキヤンダルというものがあるのだ。ナタリーが一人の牧師の妻であるには値しないと、そしてそれでお前が彼女を遠ざけたのは当然であると考えられているからだ。それはもう公認のことなのだ……。それにもっと良いことはそれは忘れられている。若しお前が今二人の共同生活を始めたならば、前の解決には誤りが在ったということになる……。ナタリーはそれを口にするだろう……。お前は大いに非難の余地があるということになる……。特にお前は悪意の批判を、そして過去を呼び起こすことになるだろう……。そしてスキヤンダルが再び始まる。そんな事は全く出来ない。そして不幸にしてお前が自分の社会的なポストを変えらるることになれば、そしてそれは当然のことであるだろうが、そうすればお前は別の場所と同じ心配事をまた見いだすことになるのだ。」

「しかしだからこそ私は過失を犯したという悔恨の気持ちと共に牧師であることを続けることは出来ないのです。私は先ず第一に自分の咎を償いたいのです。」

「それは何という咎かね。」

「自分で感じている咎です……。一つの罪です。」

「私には判らないね……。私は全然判らない……。」ポンメルル氏は生涯で初めて動揺させられたようになって言った。「それは信じれないことだ！ お前は全ての者を困らせることになるのだ……。大都市ではその様な被害はもつと少なからう。バルバザックでは、それが女から由来するものであれ、牧師の職

と醜聞は宥和させることは出来ないのだ。カトリック教徒は五千人いるのだ。我々は注目されることになる。お前は良い決心をしたのだ。私は離婚ならば認めてはいなかったであろう。しかしナタリーは立ち去らなければならなかったのだ。既に確定しており、ほとんど満足できるものである立場をどうして修正して、自分が生涯を捧げており、お前の信念が問題ともなっているその天職を行使することを禁じようとするのかね。自分は信者達に対しての義務があるとは感じていないのかね。」

「あなたはどんなに不名誉で、ぐれた者であれ、一人の息子に対して門を閉ざすことが出来るのです。うか、おそろく出来ないでしょう。この世には様々な責任や、超人間的な因縁というものがあります。私はそれを感じています。私の妻は私の血です……それ以上のものです……。」

「ナタリーがお前の家の門を叩いているのかね。彼女が帰ってきたいと思っていることが判っているのかね。お前はあの女がどこにしようと、どんな性格であれ、全てお前次第であると言っているかのように話している……。あの女は単純にどうにでもする事が出来る女であると言うのかね……。お前はあの女が気が狂ってはいないと確信できるのかね。」

「そうであるとすれば、私の責任はもっと重いものになるでしょう……。いいですが、そこには私がある。我慢が出来ない偽善があるのです……。そうです、それは私次第なのです……。それはいつも男の側に依存しているのです……。あらゆる男はどうすることもできない女を持っているのです……。そしてあなたがあの手紙を読まれてから、私は自分の娘を彼女の支配下に置いたままにしておくことが出来ると思われるのですか。」

「ポーリーヌ、何の用だね。お前はいつもじっとはしていないんだね。」

「私には構わないでください、『ルヴュー・ブルー』（政治文学評論のこと……訳者注）を探しているのです……。シュレー（Schure）の記事が読みたいのよ。」

「そのランプの側だ……。直ぐ判るね。」

再び入り口の扉が閉められるとジャンは声を落として又話しはじめた。

「私はナタリーにまた私の元に、バルバザックに戻ってきてほしいのです……。そしてこの満足、この僅かな償いが彼女に向けられることを……望んでいるのです。私が自分の妻を迎え入れるからといって免職されることはないでしょう。いいえ、私はあなたの意向に逆らってまでここに止まっている積もりはありません。私はもう長くは止まっていけないでしょう。私は今年の終わりにはここから出ていくことを約束します。しかし私はそれに対しては一つの条件があります。或いは私はあなたに最後の奉仕をお願いしたいのです。あなたがリモージュに行かれる時には、ナタリーに会いに行つて、私に代わつて、彼女が戻つてきたいのかどうかを尋ねていただきたいのです。」

「私はすぐにはリモージュには行かない……。」

「あなたは近い内に行くと言つておられましたね……。私はあなたに、あなたの言葉に、あなたの友情にお任せしたいのです……。」

緑の青葉棚の下で、ポリーヌは本を読もうと努めた。シュレーの記事は自分にはどうでもよいものになった。彼女は自分の部屋に上つていった。そして明るい色の服を着た。そして少し急いで外出するための準備をした。踊り場の上から彼女は二人の男が自分の方を振り返ることもなく階段を下りていくのを認めたのであつた。彼女が外に出て門の前の廊下の上に立つた時、自分が突然当惑しているのを感じ

じた。彼女は自分がどこへ行こうとしているのかがもう判らなかつた。そして彼女は上手く合っていない小石の間に日傘の先を突き刺したのだった。

IV

毎週ブラシエール夫人はナタリーを訪問した。四時頃に彼女は自分の到着を知らせる為に正面玄関の呼び鈴を鳴らし、自分の雨傘を閉じて、狭い鉄格子を押して、庭と道を分離している樫の並木に沿って小道を辿っていった。嘗ってダヴィッド・バルヌリーによつて建てられたこの家は四十年来、ラルマンディー家のものになつていたが、それはある大佐に、そしてそれからナタリーに貸されていた。外部からは葡萄の若木に覆われていたが、その家はイギリス風の小別荘の陽気な局面を持つていた。しかし玄関に入ると、打ち捨てられた雰囲気と無秩序の外見は物事の反乱の様子に似ていたのだつた。

ブラシエール夫人のナタリーに対する共鳴は先ず第一に荒廢した家庭への好奇心が交じり混んでいたが、それはもう秘密を持つてはいなかったのだ。そして彼女はまた一人の犠牲者に自分の信仰に基づく慰めを与えることを、そして少なくとも彼女に何らかの氣晴らしをもたらすことを望んでいたのだつた。しかし何もナタリーの関心を惹いたり、彼女自身を他のものに逸らすことは出来なかつた。四年前から彼女は同じ苦しみに浸透されていたのであり、顔はこわばつており、その目は曇つていて厳しかった。

ブラシエール夫人はそれ程鋭く生活にしみ通っていない苦しみというものが自分には説明が付かず、それは習慣の効果から逃れてしまい、それ程の苦悩の強度を弱めることなく耐えていて、少しばかり潤いを欠き、華奢な局面もあるこの肉体の法則というものも判らなかつたのであつた。

先づ第一にブラシエール夫人は大きな愛情に破れたのだと思つていたが、彼女はそれにしては通常は恥じらいを伴う心の苦痛を、ナタリーのそれ程の激しさと自己への絶えざる関心というものを一致させることが出来ないのだつた。ブラシエール夫人は自分が、人がその目を伏せるように他方に逸らすように努めていた自分の批判的な精神を一つの罪であるかの様に責めたのだつたが、善意の気持ちから人々に近づいて、彼等の苦しみ以上に彼等の欠点を見て、それに同情するのを抑えることが出来なかつた。彼女はナタリーの絶望はむしろジャンに対する極めて当然の憎しみに対応するものであると考へていた。しかしナタリーの感情は、自分の夫に関するかぎり漠然としているように思へたのである。その点だけではナタリーの意見は変化するのである。結局ブラシエール夫人は全ての不幸を引き起こしたと思われる忌まわしいボンメレルの話を信じていたのであつた。毎週の様子に人を動転させる様な口調で繰り返される変わらない話の中で、ブラシエール夫人は自分には逃れてしまつて判らないある感情が公言されること無く置き換へられていたのではないかと思つていたのであつた。

彼女は注意深く、同情の気持ちを持つてはいたが少し意氣阻喪した風をしてナタリーの言うことに耳を傾けたのだつた。そして彼女は直ぐに自分の抑えた気持ち、そして稀にしか口を差し挟むことのない思慮深さ、そしてナタリーの熱っぽさ、そして乾燥した雰囲気からやつて来た大きな疲れを感じたのであつたが、それは非人間的で二人の存在の間には本当の接触はないようなものであつた。彼女はその苦

しみの中にあれ程の生命力を持っていた一人の女を一人だけにするのを恐れて、自分の訪問を長引かせるように努力していた。幸いにしてセレスティーヌがお茶を持ってきてくれた。日常の品々や通常の身振りの為の余地は残されていたのである。時折その使用人の後に付いて、アリーヌが客間に入ってきたが、それは健康な命の突然の出現であつた。彼女は既に大きくなつており、まだむっちりしており、まん丸の両腕がその服から出ていた。ブラシエール夫人と判るとその子供は直ぐに自分の母親の方へ目を向けたが、それは、静かで分別くさい視線で観察しながら、彼女の状態を判断する為であるかの様であつた。しかしその子供がビスケットを手にとつて微笑むときには、全くの赤ん坊であつた。彼女はその人を圧迫するような環境には無関係であるように思われていた。彼女はその独立していて、不思議と失われることの無かつた力で、自分では訂正することは出来ないとして理解していた大人たちの奇妙な世界で成長していたのであつた。

ブラシエール夫人は夫の死以来一人で生活してきており、彼女は、外部への出口も無く、自己の内に閉じ籠もり、自分自身の人格の単調な泡立ちによつて息詰まらされていたナタリーの孤独にしか同情することはなかつた。彼女がナタリーと別れてからは、いつも早く帰り過ぎたことを後悔するのであつた。しかしナタリーは最も献身的な人々でさえも、永い間一緒にいることは、彼等が自分の言うことを良くは聞いてくれなかつたり、何も理解してくれなかつたり、こちらを貶したりするときには、我慢がならなかつたのである。彼女は一通の手紙を書きおえる為に一人になることを望んだ。彼女はいつも一つの過ちを予見したり、自分の絶えざる苦しみ、そして自分には残酷であると同時に感嘆すべきでもある様に思える自分の運命に興味を持たせる為に未知の人にも投げかけるべき訴えを説明する為の一言を持つ

ていたのである。彼女はとりわけポンメルという人物の内に具現された人間の恥辱に苦しんでいたのであつた。しかし追い出されて、独りぼっちになり、非難されることのない立場になつて彼女は永遠に自分をジャン・バルヌリーの妻であると考えていたのだ。ポンメル策謀も、夫の弱さも、そして悪者たちの共謀も、この永遠の事実、彼女が神聖なる守護者となつてゐるこの破壊できない結びつきの前では挫折させられるのである。ジャンは彼女にとつてはハッキリしない形での、非難に値し、残酷でひ弱な夫の象徴であるように思われたのであり、そこから彼女は、盲目の者達に對して、神聖な結びつきの純粹なる觀念を保持することによつてその魂を救済したのである。この感情は、彼女が他の者たちに自分の苦しみと高貴さを説得することさえ出来れば自分を慰めることが出来ただろうと思えるのだ。」

しかし彼女を熱愛していたドラルマンディー卿だけは本当に彼女を理解してゐる様に思えたのであつた。彼は少年時代に人を愛したことがあつた。しかし後になつてからは内気さと良い教育と余りに繊細な理想が彼を女達から遠ざけたのであつた。しかし人間の心に対する好奇心、自分がそれから逃亡してゐた情熱へのノスタルジー、そして情熱について論じようとする趣味、この世界への恐怖と魅惑から作られた夢想家的なある種の哲学等が彼を悩んでゐる人々へ、そして特に欺かれて少し興奮しており、その燃え上がるような心痛の故に告白したくて堪らなくなつてゐる様な女達に心を傾けさせたのだつた。

彼は年に二、三度ナタリーを訪問したが、その時は長居した。彼女は自分の眩しいばかりの青春時代やジャンの愛、そしてバルバザックでの二人の愛について話したのだつた。彼女はラルマンディー卿に無意識の内に不自然な声で話したのであつたが、その際にもっと自由な身振りや善良な心、そして機知さえも自分の本当の天性であるようなものとして再発見したのだつた。彼女は繊細で深みがあり、感動的

でもあるものを話したのであったが、それらの事は極めて正当であるように思われたのである。ラルマンディー卿は帰っていくときに、彼の白髪まじりの長い口髭を付けて、あたかも最も美しい感情のイメージに対してひれ伏すかのように、彼女の手に接吻したのだった。

ナタリーは自分の若い娘としての成功、自分の支配していた時代、ジャンがボーバトウで自分の上に投げかけた感嘆の眼差しだけを忘れないでいたのだ。彼は彼女を今でも愛している、彼女はそれを疑っては居なかった。彼女もまた、その思い出が自分の頭の中に固定されてつきまとい、ほとんど耐えられない程になっていた存在を愛していたのだ。彼らは人間の意地悪さえ無ければ幸福になっていただろう。この考えは彼女が一通の手紙を書いている間に浮かんでくるので、彼女は息が詰まって立ち止まるのである。そして彼女はもうそれ以上は書くことが出来ないのだ。彼女は生きた人間の前で話し、弁明する必要があるのだ。彼女は自分が一度でも話しさえすれば、その精神を解放し、静けさ取り戻すことが出来るのである。彼女の全ての病氣は沈黙からやって来るのだ。彼女のところに最初にやって来た者が彼女に耳を傾けて安らぎをもたらしてくれるのだ。しかし人は真実を聴くことを恐れるものである。彼女が話す前に遮られる。それにこの家には誰も居ないのだ。

彼女は立ち上がる。そして部屋部屋を歩き回り、賛美歌を歌いながら扉を荒々しく締め、自分の書いた手紙を引き裂き、品物の位置を変える。今はセレスティヌが幼いアリーヌを寝かせる時間なのだ。アリーヌは彼女に無関心である。まだ若すぎて彼女を理解することは出来ない。もっと後になって彼女は教えるだろう。彼女はその噂で娘を不安にさせるのを恐れてはいない。その子供は自分が大人達の過失によって地獄のような家に住んでいるということを余りに早くから知るようには決してならないだろう。

これらの歌とか扉がガタンと閉まる音、廊下中に響く激怒した足音などには全くお構いなしに、セレスティーンはアリーヌの髪を優しくブラシを掛け、椅子の上に小さな衣装を並べ、しかも面をして反対の頬を向けるその子供の顔をスポンジでこすってやるのだが、その時子供はこの身繕いには何の関心もないかのように放心状態なのだ。それから彼女の頭は長い寝巻の下に隠れてしまったが、その袖はいつも笑いながら探されるのだった。

変わっていることと怒りやすいことなどで、方々から追い出されたことのあるセレスティーンはある病的で無意識の親和力からナタリーに愛着を持っていた。その家ではセレスティーンは秩序と行儀良さと静けさを示していた。チュールの帽子の下の滑らかで二つに分けた髪をして、白い前掛けを付け、堂々とした風をして彼女はアリーヌに気を配り、自分の女主人に説教をしたのだったが、その主人の激しさや、それ程の親密さによつて高貴なものにされた悲劇の聞き手として静かに耐え忍んだのである。

セレスティーンが部屋の中でぐずぐずしているのはナタリーが最も話したくなる時だったのだ。この受け身的な女はナタリーを憤慨させる。その人間性は残酷でない時には耳が遠くなる。その時数時間前から集められていた怒りは台所の中に避難していたセレスティーンの上に襲いかかるのだ。彼女は泣きながら自分の二つに分けた髪と前掛けを手入れしているのだ。そしてナタリーは自分の部屋に鍵を掛けて閉じ籠もり、エーテルの小瓶を自分の鼻の穴に押し当ててゐるのだった。

力を取り戻して世間の人々の前で良き立場を守るためには眠る必要があるのだ。彼女は非常に遅くなって目を覚ました。そして直ぐに郵便を持ってこさせた。ある朝のこと、その日の午後の来訪を告げたポンメルル氏の手紙が手渡された時、彼女は驚かなかった。待っていた日がやって来たのだ。

ポンメルル氏は車を下りて呼び鈴を鳴らすことなく鉄格子を押した。そしてゆつくりと通路を歩いていった。芝生の周りの樹木は彼の青年時代以来大きくなっていったが、その家は手入れのされていない葡萄の木の下で変わっていないかった。玄關で彼は壁の上に、バルヌリー家の人々のいたことを示す消えることのない印として残っていた古い赤い布に気がついた。

薄明かりの内に冷えきった部屋部屋を通って行った。そして客間の絨毯も家具も、そして突風に吹き飛ばされたかのように奇妙に配置された品々も目には入らなかった。坐ろうとしなかった。只大理石の暖炉が輝くばかりの色調と共に相変わらざるままだった。彼はナタリーが入ってきた時、元のままの名残に触れるために前に進んだ。

直立して黒の衣装に身を包み、こわばった仕種で、微笑もせずに彼を眺めているこの女は、顔は元氣そうであるが、化石のようで、ナタリーに良く似ていることで身震いさせる蠟人形の様な彼女を思わせたのだった。

彼女はこの生きたポンメルルの前で狼狽して、押し黙っていたが、ポンメルル氏は白いチョッキを着て髪の毛は乱れていたが、頬髭はきれいに剃られており、彼女が呪いの気持ちで追跡していた想像上の人物とは何の関係もなかった。そして彼女の無意識の戸惑いは優しそうな素振りと慣れない遠慮がちの態度の内に現れていた。

ボンメレル氏は目を逸らして坐りながら、あたかも在りし日の機嫌がいいときにはとてもいい子だった幼いナタリーに話しかけるように、氣立ての良い人物のように話しかけたのだった。

「私の手紙を受け取っていただけましたか……お知らせするのが非常に遅くなってしまいました……お許しください……私はリモージュに行つてきました。一昨日に帰つてきました。ジャンは……そうです……彼はあなたがバルバザックに戻つてくることを望んでいます……彼が私にあなたにその様に伝えてくれるように頼みました……」

重々しいが消え入るような声でナタリーは答えた……。

「私はジャン・バルヌリーの妻です。彼の望むことは何でもする積もりです。彼がバルバザックを立ち去るように言つたので、私は出発したのです。彼が私に戻ることを望むのでしたら、戻りましょう。」

「彼は忘れたいと言っていますよ……そしてあなたを許しています。」

「彼が私を許しているですつて。」彼女は傲慢ではあるが囁くような声で、しかし誇張した身振りで言つた。「彼が私の何を許すのでしょうか。」

「言葉は正確ではありません。失礼しました。私は彼の代理としてあなたがバルバザックに帰つてくることに同意されるのかどうかをお尋ねする任務を持っていますのです。」

「私はジャン・バルヌリーの妻です。私はいつとも彼の言うことに従う積もりです。」

「それは結構です、私は今晚彼に手紙を書きましょう。そしてここでその返事を待つ時間はあるでしょう。それからあなたの引越しに必要な方策と一緒にいきましょう。それはしかし簡単なことです。この家はラルマンディー家から借りているので、家具はあちらのものです。あなたは私と一緒に戻ることに

が出来るでしょう。私はあなたをお連れすることをジャンと約束したのです。」

「私はセレスティーンと一緒に連れていきます。」

「セレスティーンとは？」

「非常に良く働いてくれる使用人です。」とナタリーは言ったがその声は優しいがやっと聞き取れる位だった。「彼女はアリーヌのことに専念してくれています。私は非常に疲れているので子供を育てることが出来ないのです。」

ポンメルル氏は對話に我慢できない程に衰えた女に話しかけるかのように声を潜めたのだった。

「その人はあなたがしばらくバルバザックで雇っていて、その後ラ・ロシエルに行っていた使用人のことですか。」

「そうです。」

「あなたはどうしてもその女性を手元に置いておきたいのですか。」

「私はあれがいなければやっていけないのです。」彼女は呟くように言った。

「私がそれをジャンに言っておきましょう。それは言っておかなければなりません。ジャンはあなたが望むことは全てかなえるように思っているようでした。しかしそれは前もって言うておく必要があるでしょう。彼の所にはメラニーという非常に誠実な女がいるのです……。」

「セレスティーンはどうしても一緒に行くことを求めたいと思います。あなたはそのことをジャンに相談する必要があります。私は自分がしなければならぬことは判っています。」

「私はそのセレスティーンという女性について非常に良い情報は持っています。しかしあなたはそ

女性については私よりもっと良く知っておられるのではありませんか。」

「それは中傷なのです。セレスティー又は素晴らしい女性です。」

ポンメレル氏は頭を動かして承諾した。この亡霊のような人物との低い声での対話で彼を驚かせるものは何もなくあった。彼はナタリーがバルバザックに帰ること、そしてジャンがそれを望んでいることを認めたのである。最も奇妙なことは彼が自分のフィアンセに会いにきたことがあったこの客間に、そしてこの暖炉の側に、この場所に坐っていたことではないだろうか。彼がその二つの時を取り違えてしまいうか。そのようなその刹那に、過ぎ去ってしまった人生の無限の間隙というものを感じていたことではないだろうか。

∴

ジャンは駅に行つてナタリーを待つことをしないことに決心した。丁度木曜日には午後宗教の講演をする事になつていた。その後はクロージの所に行かなければならないのである。彼は五時には帰ってくる。彼はナタリーをまるで出ていったことがなかったかのように自宅で見いだすことになるのである。彼は許しを与えたり、自分を責めたりする寛大な人間のような態度を取るのを止めようと思う。複雑な過去は忘れるものだ。彼は突然不意打ちのように彼女に再会することになるだろう。

食事を取りながら彼は子供たちに尋ねながら後で直ぐに講義しなければならぬ聖書のパッセージに目を投げかけた。その本を捲りながら彼は間もなくナタリーに再会することを忘れてしまった。彼が自

分の妻に幸福を返してやるための犠牲のことを思つて最近感じた精神の高揚は差し迫つた現実接触到消えてしまつたのである。しかし彼は自分の娘のことを全く新しい感情を持つて夢見ていたが、それは突然ヴェールを剥がされた待ちきれない気持ちであり、鋭くて活き活きとした愛情でもあつた。

木曜日の学校は聖器室で行われた。ジャンは窓を背にしてテーブルの前に坐つたり、その足を燻つてゐる薪の方に向けて暖炉の方に向いていたりした。彼は子供たちの前で少し氣後れしていたし、彼等の心に厳密に届くような言うべき言葉が見つからないのだった。彼はその子供たちが自分の説教に対しては余りに年をとつてゐるか、また若すぎるかのようにいつも感じたのである。

「奥様がお着きになりました……。奥様は客間におられます……。」

ジャンは父親の頭を小さな腕で押さえて支えていたアリーヌの上に身を屈めていた。

「私はもつと早く帰つてきたかつたのだけど、」とジャンはまた立ち上がりながら言った。「長く待つたのではないかね。今日は木曜学校の日なのだ。それにクロージーの家に立ち寄らなければならなかつたんだ。彼の妻は病氣なんだよ。お前は帽子を取りたくないのかい。」

彼はナタリーを見ないで話しかけたけれども、客間の真ん中に直立していたこの妻の非常にはつきりした存在に妨げられたのだった。彼女は丸テーブルの上に片手を支えて、黒いタフタの風変わりな帽子を被つていたがそれは紐で耳まで深く下げられており、それは慈善を行うある宗派の制服を思わせた。それでもそれはふさふさした羽飾りの抗いがたい圧力でそぐわないもののように思えたのだった。

「帽子を被つていたいのか？……病氣だつたのだね、……旅行で疲れただろう……君の部屋に上がつて

いきたくはないのかね。」

「どのお部屋ですの。」ナタリーが言った。

「庭向きの部屋を準備させておいたよ……その方がいいだろうと思ったんだ。」

「セレスティヌの部屋は？」

「彼女は隣の部屋を取れるよ、アリーヌと一緒にね……。部屋の中は好きなようにしたらよい……。私はメラニーに知らせておこう……。」

彼は玄関と台所の扉を開けて、大きな声でメラニーと話してから、客間に帰ってきて、アリーヌを庭に連れ出し、それは動き回ること自分の気詰まりを克服しようと努めてのことだった。しかしナタリーは娘を呼んだ。

ジャンは自分の事務所に上がっていったが、そこは嘗て自分の妻の怒りに対しての避難所としてしばしば彼が搜し求めた所なのである。今は彼は妻の沈黙から逃れたのであった。彼は妻が本当に帰ってくるとは思っていなかったし、破局の後でどんな言葉で妻に近づくかも考えてはいなかった。彼はその不在を消してしまうような言葉を考え出したり、一つの仕種を発見することを信じていたのだ。その心が全てを容易なものにするのに違いない。年月や苦しみにぶちのめされた哀れむべき女を望みつつも、在りし日のお喋りで軽率で化粧好きで、いつも直ぐ笑ったり、大声を出したりするナタリーを迎える積もりだったジャンは、彼女を目にして彼が感じたこれほどに気詰まりな気持ちになるとは思いも寄らなかつたが、身動きもせず無言で傲慢で、奇妙な服装で、じっと一点を見ている目、生気がない顔、それに美しい特徴は持っているがナタリーには全く似ていないその女性に戸惑わされて、敢えて彼女に近付こう

とはしないのである。

彼はこの様な変化は共同生活ではよくあることであるのは誰も疑うことはあるまいと考えるのだ。その不在は移り変わりを禁じたのであった。その明るさは余りにもどぎついのだ。その家が彼らの周りで、壊れた絆を結びなおし、間隙を埋めて、ナタリーに昔なじみの人格を取り戻させることになるだろう。

∴

今までジャンにとつては家というものが存在しなかった。今彼は食事の恐るべき時を知ったのだ。彼は静かに閉まる扉の音やささやく声、沈黙などに聞き耳を立てた。

口を固く結んで、地味なウールの服を着たナタリーは昼食や夕食の時間には食堂に入ってきてジャンの正面に坐った。彼女は彼の質問に上の空であるが従順な態度で返答したのであったが、自分が食卓での作法を教えていたアリーヌにその眼を固定していた。それからまた自分の部屋に上がっていった。

「ナタリー、君はどうしたのかね」ジャンはある晩、彼女の腕を取って言った。「私に話しておくれよ、私は帰つてきて喜んでいるのだと思つていたのだ。それは思い違いだった……。どうして君は不幸なのか、それは私の過失なのか、私に説明してくれないかね。」

客間の長椅子に彼女と並んで坐つて彼は初めて情愛を込めて話しかけ、その手に触れたのだった。しかし彼はこの愛撫に当惑させられたし、突然立ち上がった。彼は彼女自身の抵抗にぶつかつたのである。優しさの身振りは自由ではない、その心は抑えることが出来ない率直さを持つている。ある種の見せ

掛けは肉体の内の非常にぼんやりしている激しい精神的な意識というものを傷つけるのである。しかしジャンはこの本能的で執拗である反感というものを定義できなかったし、それが何に基づいているのかも理解することが出来なかった。以前には彼はナタリーの性格のどんな特殊性が彼を苛立たせるのかを知っていたが、今日ではそれらの特殊性は消えてしまい、昔の妻から残っているものは、全ての変化を通じて残っており、彼が我慢することが出来なかった彼女の体から発せられる不思議な精気を別にすれば何も無かったのだった。

「返事をしたくないのかね。」彼は同じ優しさで言った。というのは彼は自分の声を自由に操ることができたからである。

彼は自分をナタリーから遠ざけていた行動を正当化したいと思っていたが、自分では話す為にはその動きが必要だったかのように客間の中を大股で歩きはじめた。

「君がその訳を説明してくれないのは間違っているよ。沈黙を疑い、話すように努めなければいけないのではないだろうか。沈黙は人を欺くし、先ず第一にそれを誤解する他人が居るのだ。そしてそれが物事をややこしくする混乱の始まりなのだ。原始時代にはおそらく人々は言葉無しでも意思の疎通をすることは出来た。その本能は失われたのだ。若し君が私に言うべき非難があるのなら、そしてここに君を不快にさせる何かがあるのなら、はっきりとそれを言ってくれないか、そうすれば私は理解するように努めるだろう。私は君を苦しめるために帰ってきてくれるように頼んだのではない。私は君が幸せであることを望んでいるのだ。私を助けてくれないかね。君はいずれきつと話してくれるね……。」

ジャンは眼を伏せながらナタリーに近付いた。そして毎晩のように玄関で自分の事務所に上がって

く前に、罪深く感じながら、彼女の頬に軽く接吻をした。

ナタリーはセレスティーヌと低い声で話すのを別にすれば家では決して口を開かなかった。しかし彼女は自分の意志を押し通したのである。ジャンは娘を学校へ行かせることを望んでいた。

「私は女教師を知っている。彼女は物静かでとても良い人だ。子供好きで子供たちに興味を持たせることが出来るのだ。子供が他人の指導下で集団で教育されるのは良いことだよ……。」

ナタリーは夫に当然の尊敬を向けることが出来る妻として、道理に合わないときでも、ジャンの道理に耳を傾けたのだった。しかしアリーヌの教育については自分が全面的に引き受けて、娘を悪い影響から護ることを望んでいた。

ジャンはアリーヌに近づくチャンスが全くなかった。家ではナタリーが娘の横で編み物をしたり、娘をピアノの前に坐らせて、自分の動揺した熱い手で子供の指を冷たい鍵盤の上に押さえつけたりした。或いは我慢ができない動揺の下で震える自分の長い編み物の針で単語を指して読み方を教えた。彼女たちは一緒に外出した。そしてどんなことでもナタリーは道徳的な教育の主題を見出したのだった。朝はナタリーはアリーヌが起きるときに飲まなければならなかったコップ一杯の水を持っていき、子供のベッドの横のテーブルに置いたのだったが、それは物憂げな仕種であり、勿体ぶった風であり、自分の義務の偉大さが心にしみ込んでいるその義務感で参ってしまったかのような風をしていたのだった。

ナタリーはメラニーを送り返してしまっただが、ジャンは、その習慣を知っており、彼の希望を見抜いていたように思われたセレスティーヌに何の問題もなく給仕されたのである。彼女は台所の仕事をこな

し、家中のメンテナンスを確かなものとし、彼の事務所を整理する時間を見つけ、ゆつくりと彼にいつも完全なコーヒーを準備し、音を立てることなく戸口の所には非常にぴかぴかと輝く靴を置いておいたのである。それらの気配りはその家の主人であるナタリーの夫に向けられたものであったが、それは彼の存在に敬意が払われたからであり、かといって彼は命令をしたり、自分の意志を表明することはない。只それに礼を言うだけに止めておかなければならなかった。

セレスティーンがジャンに、刺繍のされたナプキンで覆われたお盆にのせて、最も美しいバルヌリー会社製のティー・カップと焼いたパンと蜂蜜と一緒に作った朝食を運んできた時に言った。

「私の為に余りに気をつかい過ぎるよ、セレスティーン。」ジャンは言った。「私は焼いたパンは要らないんだ。」

時折彼はナタリーのことを尋ねた。するとセレスティーンは顔は忽ち厳しくて、取り乱したようで、あたかもその質問が場違いであったかのような表情になったのだった。

「セレスティーン、お前は奥様のことは良く知っているね。彼女はどのようにして悲しいのだろうか。」

彼女は素早くトレイをテーブルの上に置いて、ジャンがその原因となっているが、彼がそれを理解できなかった自分の女主人の不幸のことを考えてむかつかせられたかのように頭を背けて両手を上げたのだった。

土曜日にはナタリーは厳めしいほどに体の線が出た黒の羅紗の衣装を身に付けたが、半ば開いたその上着からは漆黒のボタンで留めたウールのジャージーを覗かせていた。それから彼女は顎紐の付いた帽子を被り、黒の手袋をして、シャンジー街の下手にあった濃緑色の鎧戸付きの狭い家に住んでいたモリ

セー夫人を訪問したのである。

ステップを下りる。ノックをしないで扉を開ける。夏でも冬のように冷たい廊下に入っていく。足音を聞いて二人の姉妹が、もう歓迎の微笑みを浮かべて頭を上げる。

彼女たちは、向かい合つて坐り、足は足温器に乗せて、テーブル・クロスに覆われた小卓を挟んで一日中お喋りをしたり訪問客を受け入れたりしながら過ごすのである。お互いに非常に低い二つの窓口の一つを占領しているが、水玉模様のチュールのカーテンはいつも上げられていた。姉の方は小柄の老嬢で、とても痩せており、影が薄いのでスカートの黒地の下に節くれだった指だけが目立つのだった。彼女はほとんど目が見えず、縫い目の大きな繕い物をしていた。そして自分の前のテーブル・クロスの上には全て糸が通された針が何本かが突き刺されていた。彼女は妹によつて生きているので、同時に同じ言葉を繰り返したり、頷いた徴で頭を上下に動かしたりして相槌を打つたりしたのである。

モリセー夫人も非常に高齢であるが、今もその活力は失わず、その生き生きした目は直截で少し狡猾そうな表情をしている丸い顔には農民風の若々しさがあつた。彼女は若者の流行に従つた服装をしており、ゆつたりとしたブリーツのスカートをはき、白髪まじりの髪はきれいに分けられていた。そしてそこからはウールのレースの先でカールした髪のはみ出しており、そこから垂れ毛が肩の上に落ちて、両方の頬を囲んでいた。彼女は多くの不幸の後で、外からやつて来る全てのもの、訪問客、打ち明け話、新聞、共和国の悪事など、それに加えて刺繍をしながら素早い一瞥で窓越しに捉える全てのことを自分の姉に話すことに喜びを見出すのである。そして駅の芝生の回りを走り回る自転車に乗つた若者たちは彼女の眉を顰めさせるのだった。

「姉さん、若い人は困ったものなのね。若い娘たちはノースリーブの下着さえも着ていないんですってよ。」彼女たちは誰よりも先に恋の物語や婚約などを知っていた。各々の者が彼らの所に、注意して聞いてもらえる耳と夢中になりやすい心を見出すと思つて、町の噂や自分自身の心配事などを持つて来るのである。訪問者を待つ籐の椅子の上には農夫の女たちやビュルゴー・デュペロン夫人、エネシー夫人、アルトゥール・ボンメル夫人、モヌロー博士たちが坐りにやつて来たのだったが、モリセー夫人は彼等とほんのり気取った口調で話しながらフランソワ・コッペを引用したりするのだ。婚約者たちも二人を訪ねてきて、式の後で新婚の服装のままで二人を抱擁しにやつて来るのを忘れなかった。若い娘たちの為には書斎のカーテンの後ろにりんごや小作地から届いたサ克蘭ボの籠があつたが、それらは決して開けられることがなく、固い長椅子と可愛いキューピッドで飾られた繻子のクッションなどで全く気取つた風になった客間の側の暗い部屋に彼等がそれを探しにやつて来るのだ。

「姉さん、私、バルヌリー夫人が私達のところに来るのを見たような気がするのよ。」

モリセー夫人たちはこれ以上興味深い訪問を受けたことがなかったが、恐ろしい気持ちもあつた。ナタリーが体を真つ直ぐにして、黒のスカートの引き裾を自分の足の回りで前に手繰り寄せ、動くごとに袖の裏の金属の環の音をさせながら籐椅子に坐つた時、モリセー夫人は秘密を見つけるのにとても慣れていたので、敢えて尋ねることはしないで彼女の言うことに耳を傾けていたのだった。その老嬢はナタリーに気付かれずに彼女を見ようとしながらも、いつもよりはいつそう控えめであるように思われた。この妻は夫の過失によつて不幸になったということは彼女の苦情からハッキリと察することは出来たが、その牧師に関係している不思議な悲しみを理解することは恐ろしかったのである。

ナタリーが帰った後で、平素は長々とどんなに些細なことまでも論評していたその二人姉妹は沈黙し、各々は大胆な解釈によって相手方に厄介事を投げつけるのを恐れていたのだった。

..

ポンメルル氏はジャンに言った。

「私はナタリーが未亡人の姿をしているのに気が付いたよ。彼女はモリセー夫人のところへ堂々として出掛けていったが、私の姿を認めることは望まなかったのだ。彼女は控えめにするために黒の小さい帽子のおかしなものを被っていた。そしてそれを誇りを持って被っていた……。自分が神聖であり、お前が罪人であるという感情こそは彼女にあれ程気位の高いの態度を取らせ、自分の地味でおかしな身なり以上に真実なものである苦悩の風をしていたと思うのだ。あの女を不幸であると見るのは断念しなければならぬ。それは根深い虚栄心の一つの形であり、それはもう変わることがない思想の体系の中でナタリーの内に入り込んでいるものだ。満足したナタリーは根絶させられているのだ。しかしそれは恐れるには及ばない……。総じて私は新しい化身における彼女の方が好きなのだ。少なくとも彼女は有害ではない。忍耐強くそれを耐えなさい。お前は自分自身の生活、自分の義務、自分の思想、自分の携わることがある。私はお前を苦しめているものが何であるのかを判らないのだ。」

「私は他人の様にして自分の側で生きていくためにナタリーを呼び戻したものではありません。私は彼女を幸福にすることを望んだのです。それは妄想であつたということは判っています。あなたの言われる

通りでした。しかし若し私が、私を無視し、相手を眺め、別のことを考えようとしながら、冷やかな証人として彼女の横にいなければならなかったとすれば、彼女は帰ってくる必要はなかったのです。」

実際ジャンはボンメル氏に勧めているこの解脱には我慢がならなかったのである。彼は自分自身の為にはどんな幸福も求めたのではなかった。彼はあらゆる幻滅も受け入れていたし、この地上では何も期待してはいなかった。只ナタリーの側では彼女に無関心では居れなかったのである。彼女を無視することが出来なかったのだ。彼女は彼の絶えざる瞑想の対象であり、問題でもあったし、恋愛のようにうるさく付きまとう悔恨であった。彼は絶えず彼女の顔色を読み取り、その沈黙を窺うことを続けた。そして彼を憤慨させたその顔の特徴は決して十分には捉えられなかった。彼は自分が嫌っていたものをせんさくすることをやり通すことが出来なかった。彼女の場合の彼が愚かであると判断したことは許すことができない性格を帯びているのである。

「確かに私には忍耐力が欠けているのかもしれませんが。私を怒らせるのは彼女の誇らしさ、彼女の高潔であるという意識なのです。彼女は道理であり、正義、慈善、悲哀、憐憫なのです。そこにこそ彼女の頑固な沈黙の根底があるのです。」

「それは判っている。それを私はお前に今言つたばかりではないか。しかし面白いもんだね。」

「あなたはこの腐敗した雰囲気の中で、しかも私の眼下で私の主義に反対して育てられているアリーヌに対する彼女の神経質さを面白いと思われるのですか。」

「娘は心配することはない。彼女は陽気であり、生き生きとしておとなしい。彼女はこの女教師の欠点で害を受けているようには思えない。しかしお前はそれで悩んでいるのかね……。」

「私はあなたに言いましたね、彼女の高潔であるという意識が私を憤慨させるのだということを。この言葉は正確ではありません。私の心をぞつとさせるのはむしろ結婚というものについての破壊できない繋がりという観念、彼女の永遠の妻というイメージです……。以前に私のものであった一つの観念、そして私にとって非常に親しみが有り、私が非常に重要であると判断していた理念、それを私は正に自分の妻の内に一つのあてこすり、嫌悪の念を起こさせるものとして再発見しているのです……。」

ジャンはボンメル氏と話し合った時、自分のナタリーに対する不満は余りに個人的であり説明が出来ないものである。欠点の無い女性というものは居ない。男たちはあらゆる女たちに順応するのであり、困った子供も愛するのである。つまりそれが家庭なのだ。一人の人間があなたを苛立たせるとすれば、それはあなたの過失なのだ。ジャンはナタリーに対してその欠点ではなく、その天性、その存在を責めているのだ。以前彼はナタリーが自分の行為や思想をいつも低級な意味で解釈すると不平を言っていたことがあった。彼は自分の妻に自分自身のデフォルメされた反映を見たのである。今や彼は自分が、ナタリーが知っていると主張しているこの悪い人間になったのではないかと自問しているのである。

「私は我慢強くなります。全てを耐えるでしょう。若し彼女が教会に来ることを続けるなら、私はもうこれ以上は説教することは出来ないでしょう。彼女はそれを知っているのです。彼女はそれでわざとやってくるのです。私は彼女が一列目に坐り、絶望と威厳と非難の態度で、両目は私に固定して坐っているのを目にすると、私の考えは乱れてしまい、声は消えてしまいそうになり、忌まわしい気持ちに陥ってしまうのです……。私が車から下りてくるのを見た一人の小さな少女、ポーバトゥーの客間で私が余りに長く見つめてしまうという間違いをしでかしてしまった娘が私にとっては、自分を追求する恐ろしい

化け物になるといふようなことがあり得るのでしょうか……。」

「お前は大げさに考えすぎている。お前は道理には適っていない。お前は彼女が教会に来るのを妨げることは出来ない。以前私は彼女の非常識を非難する第一の者であつた。しかし今は言うべきことは何もない。彼女は非常にうまくやつている。人は彼女が敬虔で献身的であるならば、過ぎ去つた過ちは忘れることさえあるのだ……。お前は彼女が戻つてきたことで動揺しているのだ。お前は順応しなければならぬ……。そして自分の平静さを取り戻すだろう。お前が彼女の帰宅を願つた時の優しい気持ちを思い出すのだ。お前は彼女に対して同情心を持つていたし、私には判らないがその過失を償うつもりだつたのだらう……。その様な勇氣は私には不可欠のようには思えない。私はその様な勇氣と格闘さえたのだ。確かに私は今の様なナタリーを待つていたのではない……。今は勇氣が重要なのではない、必要なのは良識であり、非常にありきたりな冷静さ、ちよつとした努力、少しの寛大さなのだ……。」

しかし今日ジャンは精神を途方に暮れさせる生命の不思議な力を知つていた。人間の根本的な法則としての高貴で威圧的な感情を要求する良心の咎めは跡形もなく消え去つており、現実がジャンに対してその抑えることが出来ない力を取り入れさせる為に消散させた贖罪の夢となつてゐる。自分の最善の思想、彼の最も崇高な意志に従いながら、彼は衝動と不寛容の原始的な泡立つた世界の中に飛び込んでいったのだつた。

ジャンはよくボンメル氏の事務室に坐りにやって来た。彼は自分の伯父が変わったのに気が付いたのだ。もっと短く切られ、もっと白くなった頬髭、更に蒼白くなった目は彼の容貌に、若返ったかのような洗練されてさっぱりした感じを与えたのであった。一人の友人の言葉も彼には同じ反響を引き起こしたのではなかった。アルトゥールは自分の義父がビュルゴー・デュペロン家で提供された地位を受け入れた時、その一人息子の離反はボンメル氏を悲しめたようには見えなかった。それは滅びるべく運命付けられ、その後継者も見捨ててしまった商会への情熱を目覚めさせたのだった。前よりももっと働き、様々な復興の計画を考え、また旅行しはじめたのだった。彼の事業について話すこと以外には誰ももう彼の興味を惹くことはできなかったのだ。

「あなたは、ある種の力の平衡は結局は、不和になった夫婦の間に確立されることになってしまふと考えて居られますね。」とジャンは言った。「いいえ、そうではありません。両者の一方は絶えず譲歩しています。そしてそれはいつも同じなのです。彼は一つの抵抗にぶつかり、一つの争いを誘発すること、即ち一つの接触、忌まわしい親密さを招来することを恐れているのです。夫婦の間の深い疎遠はほとんど遮るものはありません。夫は限らない敬意の気持ちを持っています。非常に確かな知覚によって相手の秘密の意思が判っています。私は自分の娘に話しかけることを避けなければならぬことも判っているのです。私は自分が控えめにしなければならぬその限界が判らないのです……。私は今年の終わりに自分の立場を去ることをあなたに約束しましたね。ナタリーは私達があなたの命令によって去っていくことは受け入れないでしょう。それに本当のことを言うと、彼女に去っていくように頼むことは敢えてやる積もりはありません。」

「私はナタリーが戻ってくるのを恐れていたのだ。それは私の間違いだった。しかし私は今、その反対にお前にここに止まるように頼みたいのだ。」

「私はここに停まりたくありません……。」

ジャンは立ち上がり、窓の外を見た。それから安楽椅子を引き寄せてからボンメル氏に近づいてから深刻な風を言った。

「私は出発します。」

「どこに行くというのかね。」

「判りません……。」

ボンメル氏は眼を空ろにして顔を背けた。彼は唾になったように見えた。

長い沈黙の後でジャンは強い声で言った。

「あなたは今度の新しい酒蔵長に満足しておられますか。」

「私はギルボンにはすっかり満足しているのだ。ベルトメを惜しかったとは思っていない。私は他の者たちのように十五年物のコニャックを売る為に商標を作ること望まなかったのだ。そのためにベルトメは去っていったのだからね。止むを得ないことだ……。私はジローが申し込んでくれている一ストックを買うことにした。そして一八四〇年の上等のシャンパンという銘柄で瓶詰にして送り出すのだ。酒の通人用のコニャックだよ。」

「二瓶をいくらで売る積もりですか。」

「それはかなり高価なものになる、しかしそれは良いものだ……。私はガラス細工品から生じる粉状の

贗の鍔を付けて古く見せかけたような瓶は要らない。形としてはコニャックの瓶を選んだのだよ。あれはエレガントだし、その肩は盛り上がり過ぎてはいない、そして頸はほっそりしており、ガラスはとも澄んでいる……。この見本を見てごらん。蒼白くてやつと鹿毛色になった古いコニャックの自然の色がガラスによって不自然なものになっていない……。」

彼は貴重品のようにデリケートに扱った瓶をジャンに差し出した。

「ラベルとしては私は革命時代の紙幣の活字からヒントを得たのだよ……。クリーム色の線入りの紙の上の黒い枠がある……。会社名とコニャックという言葉の下に古い朱色で単に一八四〇年と書いてある。私は黒い口金のことをずっと考えていたのだ。しかし古色を帯びた赤の蠟に決めたらいいのかどうかを考えているんだ。その方が壊れやすいかもしれないが上品だ。それに瓶の頭を通して醸造年月日を書かれた栓が見えるんだ。」

ボンメル氏は瓶の上の肩の少し下のちょうど良い高さのところに二本の親指で押さえながらそのラベルをあてがってみたのだった。それから彼は少し後ろにさがってどんなものかを判断するために両腕を伸ばした。

「お前はこの間コニャックを買うためにお金を融通してくれると言ってくれたね。私は三十万フランが必要なんだ。息子に頼むこともできる。それは何とかする事は出来るが、若しお前がそれを貸してくれるなら、面倒なことが省けるのだ。数年の内に返済するということは出来まいが、返済の期日は決定しておこう。その方が正確であるし、一九一五年の一月一日としたいのだ。勿論利子は付けてのことだ。」

「それはたやすいことです。利子を付けるには及びませんよ。あなたがお望みの時に返してください。」

いいのですから。直ぐにバルヌリー商会に手紙を書きましょう。」

ジャンはアルトウールの前の机に向かって坐った。

「あなたの紙を一枚いただきます……。フレデリックに二言ばかり……。クロード・ラフォンテーヌの所の口座を……。全く簡単です……。親愛なるフレデリック……。」

ジャンは目で吸取紙を探した、そしてポンメルル氏を見ないで言った。

「ポリーヌから便りがありますか。」

「いや、お前は彼女が勤め口を見つけたのは知っているだろう……。」

「パリに滞在しに行ったのですか。」

「それは知らない。」

「彼女はあなたに出発のことを全く説明しなかったんですか。」

「そうではない、あれには何が入らないのか判らないんだよ……。あれは少し空想的だからな……。それでいつもパリに行くことを考えていたんだ、働きに、自分一人で生活しに行くという……。」

「彼女はそのことは一言も私には言いませんでしたよ。」

「どんな事があってもあれはここに来たときからその様に考えていたんだ。」

「彼女は多分お母さんの所にいるんでしょうね。」

「いや、そうではない。一人で部屋を借りて住んでいるんだ。私には住所を教えてくれたよ。彼女のお母さんはパリ近郊の小さな町にいる……。彼女たちは決して一緒に暮らしたことはないんだ。互いに理解し合えないんだよ。気の毒なその母は幸運を持ったことがないのだ。先ずはその夫だが……私の弟の

リュシアンは気狂いだ……。」

「そうですね、知っています。失礼ですが……私は行かなければなりません。長い間お引き止めしました、私を待っている者が居るのです。私の手紙は机の上に置いておきますからね……。」

ジャンは次のようなことを聞いていたのだった。「ジャン・バルヌリーさん、リュシアン・ポンメレルのことを耳にしても、聞かないでください。」彼は往来の上に小さな馬車と自分の方に走ってくる犬を見た。その声、そのイメージは相変わらず生き生きとして、目の前にあり、変わることがなかった。彼はその時、自分はここに思い出を吸い込み、今は打ち捨てられ、以前には人が住んでいたこの中庭を横切り、窓に視線を投げかける為にやって来たのだということに気が付いたのだった。

彼は速やかに通りすぎると、自分が出くわした最初の通りを曲がったのだったが、それはあたかも敵の眼をくらまして、禁じられた場所を回避するためであるかの様だった。彼は無理にもポンメレル氏のことを考えようとしていたのだ。

ポンメレル氏は今日では成功することが出来ないこの事業で自分の財産の残りを失うことになるだろう。しかし彼は自分の方針に、質を重んじる自分の趣味に忠実であるが、それはどんな事があっても貫きたいと思っているのだ。あんなに年をとり、あんなに死に近づいても一つのラベルをあれ程の愛情を持って眺め、その細かな事柄のことを思っているのは何とも痛ましいことではないだろうか。しかしかといって、子供じみた行為の価値を、そして空虚な事柄の意味を誰が知っているのだろうか。ポンメレル氏の晴々とした態度、彼の長所、彼の本当の偉大さはその習慣、非常に厳密なその挙動に基づいているのだ。そしてそれは無益であるように思えるのだ。

「私は瞑想するように定められている。そして最も悲惨な拷問も私の心を占領してしまうのだ。大地への結びつきもなく、自然の基盤も、無益さもなく、魂というものは様々な変化や無秩序に余りにも曝され過ぎていて。一人の嫌われた女は私につきまとい、私を高みに投げ挙げて、自分自身の最も低いところに投げ下ろし、私に犠牲の熱狂を吹き込み、それから私を憎しみで一杯にするということがあり得たのだ。私が彼女を救うことを望めば、彼女は私を滅ぼすのだ……。」

くだらない女ともつれ合っている男は、自分が進歩しようと望むときに落ちてしまふ程弱いものであるにせよ、彼は大地から身を退けて、超人的な愛や、罪のない人間たちを含める純粹に精神的な一致を自分に確保しておくべきではないのだろうか。ジャンはこの手段を利己的で、敬虔でなく、余りに安易に過ぎると言って拒否したのだった。人は空虚なものの内の近道によって下らない女たちから逃れた脱走兵として不快な心で神の元に引き上げられるのではないのだ。人はそれを人間への愛着によつて、万物への繋がりの中に地上の道と人間的な試練の果てに見いだすのである。

ジャンは自分が離反した信仰を償うために一つの宗教を発案した。彼は自分の過失を、人生に対する罪に似た非常に古いもの、方針の誤りと感じていた。

肉体の力によつて打ち負かされて彼はもう説教壇に上がることも、ナタリーを目前にして話すことも出来なかった。彼はこの道をそのまま逃げてしまいたかった……。しかし自分の家に戻ることになるだろう。沈黙のうちに冷たい気持ちで嘘の生活を続けることもできる。それは難しいことではないのだ。

選挙の結果は予見することが出来た。二十年来、キュネオ・ドルナノが選ばれた。しかしアルトゥール・ボンメルが現れてきた。村の木々の下には彼の立派な四輪馬車が見られた。彼の妻は馬車のなかにいて、農民たちに微笑みかけたのであった。アルトゥールは握手をし、飲み物を提供したが、演説するのは拒否した。各選挙毎に共和主義者たちはパリから見知らぬ候補者を連れてきた。今年は進歩的な意見を代表しているのは元のマダガスカル島の長官であったラ・ロッシュ氏であった。しばらくの間は人々の間では混乱した理想が沸き立っていた。反感や主義がぶつかり合うのであったが、それらは確かに年月を通じて似たものであった。しかしその時代に応じて、様々な名前や特徴を以て現れたのだった。壁には木炭で中傷が書かれたり、ビラが破られたりした。それからキュネオ・ドルナノが選ばれたのであり、それからこの地方からは居なくなってしまった。そして各々の人は相変わず共通のもので永遠のものでもある敵である国家政府との争いを続けているのだ。つまり人々が堂々と欺いている国税庁と税務署の代理人達である。

最もさっぱりした服を着て人々は教会から帰ってきて、市場や役場に行ったりした。既に酔っぱらっていたゴットは投票用紙を差し出したり、往来にそれをばらまいたりした。ジャンは見知らぬ人からの紙片を受け取り、それをたんで町役場に入っていた。彼は出てくるとき公証人のファイエに気付いたが、彼は頭を横に傾け、鼻眼鏡の下で物思いに耽った風をして、誰も目に入らないようにして、家々を軽く触れながら歩いていったのだった。

ジャンがその腕に手を触れて言った。

「明日の朝私に会っていただけますか。あなたに教えていただきたいことが有るのです。」

「明日の朝は空いていないのです。明日の夕方はどうですか。」

「それでは遅すぎるのです……余りにも……。」

「それでは今直ぐではどうですか。」

「今日職業の問題であなたを煩わせたくはありません。少し長くお話したいと思うものですから……。」

「それは構いませんよ……。今は静かですから……。私の家には誰もいないのです。」

ファイエはポケットから鍵を取り出して扉を開けた。そしてジャンを書斎に招き入れたのだった。

「ファイエさん、一つお尋ねしたいことがあるのです。私は妻に財産贈与をしたいのです。あなたはリモージュのバルヌリー商会のことをご存じですね。それは全ての株式が家族の数人のものとなっている合資会社です。私の伯父のロベール・バルヌリーが経営者です。私は共同経営者であつた私の父から資本の半분을相続しました。資本金はその初めから、即ちもつと正確に言えば今の会社が、その大部分は私の母のお金で形成されてきた時以来増えてはいないので、私の持ち株はあまり多くはありません。しかしその株は重要な部分を、つまりこの会社の半分を形成しているのです。この株を妻に与えたいのです。」

「あなたはきつと子供さんの相続人のことを考えておられるのですね。しかし遺言書なら同じ効力を持つと思います。記名の証券が重要である以上は、その配当は……。」

「いいえ、私は今この株券を私の妻に与えることを望んでいるのです。私はそれらの株券が妻の名前に移したいのです。私はそのための理由があるのです……。ある理由……道徳的で……重要な。」

ジャンは解放されたような声で話し始めていた。つまりその口調は感慨深げであるように躊躇いがちのものとなった。

「私はこの気持ちをわかっていただくために一つ打ち明け話をせざるを得なくなりました。つまりその方がよくわかってもらえるでしょう……。何しろいますぐあなたの援助を必要としているのですからね……。しかしここ数日間秘密にしておくようにお願いしたいのです。私は伯父のボンメルル氏があなたからこの事について話を聴くことになるかと困るのです。私はあの人には自分で話すことを考えているのです。そしていずれは手紙を書く積もりなのです……。私は実は離婚する積もりなのです。」

ファイエ氏は手で自分の髭をなでた。その頭をいつも少し傾けていたが、鼻眼鏡から垂れた金の紐で肩の方に引つ張られたようになっていた。そしてそれが彼を悲しそうにしているように思わせた。そして彼は非常に注意深い表情をして、自分の興味と友情と尊敬の気持ちを示していた。

「もちろん色々な動機がおりでしょうね。」と彼は優しく言った。

「私は離婚を望んでいるのです。それはやむを得ないことなのです。私は牧師の職業も辞めることを申し上げておきたいと思います……。ここには少し矛盾していた私の青年時代の二つの試みがあるのですが、それが遂に暗礁に乗り上げてしまったということなのです。」

「バルヌリー夫人は同意されているのですか……。」

「私には判りません。人は非常に若いときに知り合った女性と結婚して十年も経過すると本当に彼女が何を思っているのが判らなくなってしまうのです。私は彼女がこの決定をどの様にして受け入れるのかは私には想像することは出来ないのです。私には何も予想できないのです……。しかし彼女に手紙を

書くでしょう……。そして説明するでしょう……。彼女は私の考えを判ってくれるでしょう。」

「それで十分ではありません。あなたは奥さんの過失を非難しておられますね。あなたはその証拠を持つておられますか。法律のことを考えなければなりません。」

「私は彼女のことを何も非難してはいません。あらゆる過失は私のせいであると考えているのです。そんな訳で私の財産を彼女に与えるのです。」

フアイエ氏は軽くそのひじ掛け椅子を前に出して耳を傾けた。ジャンの声はハッキリしていたが遠くから聞こえるように弱められていた。突然精気のないものになったその顔は言葉を明るいものにし、人々を結び付ける様々な印をもう伝えていないのだ。苦悩の気が彼の内の全ての生命を吸い込んでしまっていた。

「あなたの奥さんが拒否されますと、そしてその取り決めに同意されませんと、あなたは離婚をするとは出来ません。この点では頑固な女性がいるのです。」

「私はさっき、自分では私の妻が何を考えているのかが想像できないと言いましたね。妻について私が知っている全てが彼女の将来を予想させてくれる訳ではないということはお確かです。けれどもおそらく想像上のことではあります。彼女の近親者たちについて作られる図式によると、彼女は受け入れるだろうと思われるのです。妻は高貴なところを持つている女性です。彼女は理性に反するような態度を持つこともできるでしょう。しかしそれは内面での態度でしょう……。例えば偉大さというものについての固定した観念のような……。彼女は私の理由が判れば、卑しい心で、手続きの詳細について、私の意志にさからうことに固執することはないと思います……。彼女は自分には無関係であつて私に強いられた

ものとして、事実を受け入れるでしょう……。私はその様に感じるので……。その様に確信できます。妻にあなたに会いに行くように言いましょう。私は妻がランドリーを弁護士にすることを望んでいます。あなたはランドリーと妻の利益のことを考えてやってください。私があなたにお任せするのは妻の利益なのです。しかし私が発する前にこの贈与が……どんな事があってもその原則においてなされることを望んでいるのです。でもどうかそれをすぐには私の妻には言わないでいただきたいのです。」

「では子供さんは？」

「彼女が子供は引き取るでしょう。私は子供と全財産を妻のために放棄するのです。」

「あなたは結婚生活を送った住居を去るのですね。それはあなたに反対する側からすれば十分な動機といえるでしょう……。しかし今友人として心からの忠告をさせてください。あなたは牧師としての地位を棄てられるのです。そしてあなたはまだ若い。あなたを未来に待っているのはどんな地位なのかは判つておられませんね……。あなたには未来が判らない、十年後に自分がどういう人間になるのか……二十年後には……自分の意志は……そして自分はどんな必要が出てくるかが判つてはおられない。未知の将来を拘束するような取り返しのない行動をしないようにお気を付けください。あなたがバルヌリー夫人に大きな安樂さを保証することを望んでおられるのは判ります。しかしどうかあなたの全ての財産を彼女に与えるのはお止めください。」

「ファイエさん、私は離婚することを決心したので……。私は明日か明後日には出発します……。私が良いことであり、必要であると思って率先してやり、成就することを願っていることは私にとつては非常に辛いことです。あなたには是非言っておきたいことですが、それは私を苦しめているのです。私

はいつかそれを克服できるのかどうか、いつかはそれを認めるのかどうか、そして私はその行為の後ま
で生き残るのは判りません。それは奇妙な矛盾です。そうですね、私は自分の苦悶の内に、私の内に
あるある種の死（私が牧師であることを止め、同時に離婚することを考えてみてください）の内に私が
見ている唯一の救い、私を感じるただ一つの慰め、それを私はこの十分でも莫大でもないが全面的であ
るこの物質的である贈与の内に見出すのです。そして私は、ナタリーにとつても相当の金持ちになつた
とは言えまいが、ジャン・バルヌリーの妻でなくとも、少なくとも自分がバルヌリー商会の主要な株主
であると考えerことは一つの償いになるとも考えるのです。私が彼女のことを知っている限りでは、こ
の考えに彼女は無関心ではないだろうと想像しているのです。それから私の全財産は私の娘に返ること
を望んでいるのです。それが私の贈与の一つの条件なのです。私の娘は成年に達したらその半分を受け
取らなければなりません。そして後の残りはもつと後で受け取るのです。私は娘が大きくなったら、今
日私が彼女のためにこの様な考えを持っていたということを知っていて欲しいのです……。それもまた
私にとつては重要なのです。いいですね、私を今元気づけてくれることができる全てのことは私に向け
てもらわなければならないのです……。私はまたナタリーを自分の姉妹たちが住んでいるパリに住まわ
せてやりたいということもあなたに言っておきたいのです。私はパリが非常に遠くにあるように思える
ので、これからパリへ行くのです。しかし私はそこに長くはいないでしょう……。また手紙を書きましよ
う。私が無一文で出発するとは思わないでください。私は十年来自分の配当から一文たりとも天引きし
たことはありません。私にはいくらが残っています。私がこれから生きていく生活にはそれで十分な
のです。それに私はナタリーのためのお金を送ります……。その全ての点を細かく、もつとはつきりし

たやり方で取り決めしなおしておくことを望まれますか……。しかし先ず第一に私にコップ一杯の水を
いただけませんか。飲みません……。喉が乾いているのです……。」

第二部



ポーリーヌ

I

パリに着くとポーリーヌはモンパルナスの民宿に案内してもらった。

走って馬車の後ろについてきた男がトランクを肩に担いで、照明の良くない階段を上がっていったが、その男の履いていたズック靴がステップの上で重そうにぶつかったのだった。

「ここならあなたは満足されますよ。」と髪から着ているものに至るまで全てがグレーずくめの女主人が言った。「あなたの部屋は大通りに向いています。バルコニーも付いています……。さあ、食事にしましょう。」

ポーリーヌは夜のために準備されたベッドと鏡の光沢を目にして心の内で繰り返した。「ここなら満足されます。」彼女は何も見ないでおり、その目は書き直したイニシャルやイギリスのホテルの生々しいラベルが貼られた自分の唯一の馴染みのものであるトランクを見つめていたのだった。彼女はそれを開けたり、帽子と外套を脱ぐのを躊躇っていた。そして突然この決定的な仕種の前で怖じ気づいて、無意識の内に自分の最後の身を守るものであり、自分の肉体にとっては親しくて温かみを感じさせてくれるものを体の上にとどめておこうとしているのだった。

食堂ではテーブルの周りはグレーの服の女主人にきりもりされていたが、興奮したロシア人たちが議論していた。バイエルン生まれの二人の学生は深刻そうに話し合っていた。ポリーヌの横に坐っていた悲しそうな若い娘は彼女に短くてハッキリと区切りの付いた言葉で話しかけた。

「あなたはフランスの方ですか。ここではお一人なんですか。私はルーマニア人で芸術家よ。アトリエに通っているの、あなたは？」

ポリーヌは興奮のせいか、疲れからか、その仕種はこわばっていて周りの面々の顔を見なかった。「いつも革命の話ばかりなのよ。」そのルーマニア人の娘は低い声で言った。「あの人達は革命を待っているのよ。それは近いうちに始まるわ、私は判っているの。」

様々なアクセントのフランス語でベルクソンやデュルケムのことが話題となった。ポリーヌはその精神的な熱情に心が乱されるように感じていたが、あたかも自分はそれらの思想から身を守らなければならぬかのよう、自分の好奇心を抑えていたのであり、自分が耳にしていた言葉に至るまで拒否して、緊張するというよりはこれ以上はそれでは生きていけないかの様だった。

彼女はタイプピストの学校のコースに従った。学校の教室の机の前で色々な年齢の娘たちが眩き会っていたが、一方ではその間に一段高いところのテーブルに坐っていた一人の女が高い声で、最初はゆっくりと、それからだんだん速く文章を読み上げたのだった。ポリーヌは自分の体と心が従属するのに腹を立てながらも、先生と同じ文字を打ち込むことに没頭していたが、自然の動きを減少させる機械的な労力によって指は引きつっていたし、手首は痛くなっていた。

しかし彼女は気晴らしは自分には許さなかった。彼女は音楽を聴くのを恐れていたし、演劇や読書も

恐れたのだった。彼女はソルボンヌとコレージュ・ド・フランスの公開講義に出席しようと努力した。つまりベルクソンとデュルケームは自分の宿でいつも話題になっていたからである。そして聞き手がそれに参加できるように感じるフアゲの省略が多くてピチピチしたお喋りや、ジョルジュ・デュマが抑えられたような広間の人を引っ張って行った精神心理学的な微妙な言葉等に耳を傾けた。そこでは女たちはエーテルを吸い込んで、卒倒しそうになって居なくなってしまったのだった。

しかし座席を得るためには待ったり、争ったりしなければならなかった。そして時間はなかったのである。通りでは彼女は知っている顔に出会ったり、人の哀れみを誘ったり、非難されたりするのを恐れていた。彼女は誰かに自分の気持ちを説明したり、自分を打ち明けたりすることも望まなかったし、自分では愛情の前では気弱であり、批判されるのではないかという疑いを持つと苛立たせられるのだった。そして彼女はワグナー牧師の説教を聞きに行こうと努力した。《神の家に入りなさい。あなたたち全ての者は永遠なるものに祝福された者です。》その開かれた両腕、優しさのこもった声の響き、希望と愛のこめられたそれらの言葉は彼女の内に、自分を和らげて、それから寛いだ気持ちにさせてくれる様な感情を呼び起こしたのだった。出席者たちの中で孤立していた彼女は身内の者や在りし日の友人、真紅の花の付いた夫人帽を被ったセシル叔母の微妙に際立った横顔、アンナの青白い額などに気が付いたのだった。そして彼女は日曜日の朝毎の集まりの穏やかさと苦しさを自ら断念したのだ。

彼女は学校から帰ってから自分の部屋に閉じこもり、自分の仕事に熱中した。ロシア人たちは隣の部屋で議論し、煙草を吹かし、缶詰の缶を開けたりした。ポーリーヌは肩掛けを身に付けてバルコニーに出た。日本の漆の樹の乾燥した枝が霧の中で霞み、雨の下で光っていた。大きな帽子を被った男たちは

袖無しマントを着て、微かに照らされたカフェーから出てきた。それから空っぽの電車のゴーゴーいう音が止まった。そしてガス灯が消された。帽子を被らない娘たちは家々に沿って歩き、最後の通行人たちにからんだりした。もう少し後では手をポケットに入れた無気力な男たちがやって来た。ポーリーヌは窓とカーテンを閉めた。長い間、男たちの囁れた声や女たちの叫び声、犬の唸り声などが掛け布団の下で彼女を目覚めたままにさせていたのだった。翌日は彼女は学校のクラスの生徒たちの間に喜ばしい気持ちで戻ったのだったし、指はますますすらすら動き、心は穏やかで、数時間は自由だった。

その年の終わりにはグルネル街のブロッシャールの店にポストが見つかった。彼女は家具付きの部屋を探したが、そこでは読書や、縫い物ができ、秘かな感情と共に自分の苦悩や反抗心を再び見出し、希望も弱さも無い新しい人間を自分のために作り上げることが出来るのである。彼女は数日を裏側の階段から上って過ごしたのだった。そして彼女は見すばらしい身なりの使用人たちとすれ違ったり、明かり取りの窓が天井に冬の空の四角い枠を描いているマンサール風の屋根裏部屋を訪問したり、がらくたの家具で囲まれた部屋を横切ったりしたが、その廊下では得体の知れない人たちとぶつかって、そのとたんには街中の人間とその家族の人間との間の自然さに驚かされるのだった。

彼女はサン・ペール街の古いホテルの中の狭くて、見すばらしい家具しか付いていない部屋に決めた。彼女は内壁や良質の木材による床の隙間ができた薄板、灰色の大理石の暖炉、そして鏡の素朴な額縁が気に入っていたが、それは非難されることはあつたにせよ、何ものももうそれ以上はその値打ちを減じることができないような豊かさの威厳というものがあつた。

クリスマスが近づいた。根から引き抜かれた樅の樹が河岸を縁取っていた。柵や宿り木の房が長い棒

の上に乘せられて出荷された。バルバザックでは家族の集まりの準備がなされた。テーブルの回りではマルセルやアンナ、そして彼らの友人たちが銀紙の鎖を作り、胡桃や松ぼっくりを金色に塗った。そしてハルモニウムの横では子供たちが歌を歌わされたのである。

ボンメレル氏がポーリーヌに祝日の日々を家族と共に過ごすように求めるために手紙を書いてきた。彼女はこの手紙の一語一語を推し量って、そこに自分が皆に反対して飛び込んだ道から逸らせようとする計略しか見なかった。

昨年の夏はポーリーヌはバルバザックで非常にのんびりした気持ちでいたので、夕方にはよく、白のアルパカの服を着る決心をするのに、門の前にイギリス風の馬車がやって来るのを待っていたのだった。その時マルセルに襲いかかったのと同じ危険が彼女を脅かしていたのだったが、ポーリーヌは幻覚に襲われたように、マルセルの頭が曲がった肘の上で揺れていて、机の上にすっかり押しつぶされているのと、それからくましの並木道の端で昏睡状態になっているシルエットをまざまざと思い出したのであった。葡萄の収穫期は終わろうとしていた。彼女は自分の不可能で罪深い愛に気付いたとき、秋の最初の爽やかさを吸い込みながら、甘い葡萄の房を噛んだのだった。

..

ジャン・バルヌリーはパリでは学生や牧師たちがよく出入りする小さなホテルに投宿した。そしてそこで彼は兵役を終えてから嘗って一年を過ごしたことがあった。そこをまた見つけるのにちよつと苦勞

した。というのはその通りの思い出を忘れてしまっていたからである。しかし彼は一本の木が砂利を敷かれた中庭に閉じ込められているのをハッキリと覚えていたが、自分ではそれを見るだけで十分だったのである。彼は屋根の下にあり、中庭に向いていた極めて小さな部屋を選んだ。それから直ぐに彼はその部屋を塗り替えさせたのである。新しい壁紙と新鮮な塗料が彼を取り囲んでいるみじめさから隔離してくれたのだった。

彼は弁護士に会いに行き、離婚の手続きをするためにファイエに手紙を書いた時、自分は他人の意志に従い、辛いかれども差し迫っている義務に順応しているように思えたが、彼はむしろ自分を後戻りさせないようにする種々の障害を積み重ねて、事柄を急がせようとしていたのである。

彼にとってナタリーの側で生きることが不可能であること、彼女が隣にいたことの恐怖、この苦しみの低劣さと無益さ、バルバザックであれば強く感じた本能的な反抗の気持ち、そのすべては遠ざかることで和らげられたように思えたのであった。彼は最も生々しい印象は忘れていたが、その反対にあまり鋭くない感情や思い出は心のうちに蘇ってくるのだった。結婚によって自分の運命にその生活が結び付けられていた一人の人間に対する自分の責任という観念、自分の首にすがり付いた娘のイメージ、彼女がリモージュに戻ってきた日のことなどがそれであった。

ジャンがあればどのエネルギーで押し通した離婚という考えに我慢ができないとすれば、それは彼が自分を分別があると同時に恵まれた人間であると思いつつながら、弱い者を追い払うのにその力を行使したということであるからだ。そして彼がはねつけたその女を彼は自分が創造したように思っていたが、その彼女はもっと異なった面を持っており、耐えがたく、無実であり、欠点がありながら、高貴で、永遠

に現存し、生きており、反乱を起こしている者でもあるのだ。

一人でその様な他人の中に長く住んだことはジャンの感じやすさを作り上げ、彼の最も無意識の行動を特徴付けていた。彼は通りの上で一人の子供や、ホテルのテーブルで一人でいる女を認めると心が締めつけられるように感じた。彼にとって孤独とか不正という言葉はもっぱら男女の関係が描きだす人生に特有の不公平や失敗や心神喪失を呼び起こすものであった。

彼はそれほどまでに心に付きまとったナタリーのことは、既にその顔を忘れていたのだった。彼は自分の苦しみにについての考えしかなかったのだ。それほどまでに多様であるその人間の内面の生活、この苦しみに満ちた感情を彼は彼女を自分の人生から遠ざけても追い払うことは出来ないだろう。

けれども離婚の期日は決まった。そして彼はナタリーの同意も取り付けた。彼は彼女のためにいつも彼女が助言されたり、人に囲まれているという印象を与えるために、その家に家具を備えるように申し出て、一軒のアパルトマンを探したのであった。

彼はメツシーヌ街に、高い窓からはバルコニーに扉が開く三つの大きな部屋を選んだ。彼はナタリーが外見をどれほど重視するかを知っていたし、豪華な土地柄や厳かな正面玄関、絨毯で飾られた玄関の内部、鏡や青々とした樹木などを注意して見たのだった。家の前では二人乗りの箱馬車や自家用車が音もなく通りすぎた。歩道では青色のヴェールを被った乳母たちが漆塗りの乳母車でレースの服を着せられた赤ん坊を乗せて歩いていたり、手には輪まわしの輪を持った手袋をした子供たちの後に付き添っていたりした。唯疲れた二頭の馬に引つ張られたパンテオン・クルーセル間の乗合馬車だけが、おなじみのがたがた揺れる音でその通りの穏やかな秩序を破っていた。

彼は室内装飾の職人たちに相談したり、そのアトリエを訪れて、結局ウエアリングとジローに頼むことにした。客間は帝政時代の様式の家具が取り付けられた。閨房は斑点があり螺鈿の象眼細工を施された明るい色の木製の近代的な家具が備えつけられた。そして色彩を施した絹製のカーテンは柔らかく虹色に輝き、隙間から差し込む日の光によって卵形のカーペットの生き生きとした花を、そしてモロッコ革の装丁のモウヴ色や、低いテーブルの上の硝子絵の具で出来たコップを和らげていたのだった。ナタリーの部屋には薄いグレーのビロードが壁に貼られており、エメラルド色の緑の絹のカーテンが少し重い感じの全体を活気づけていた。小型の鏡台の上では金文字が彫られたブラシのブロンド色の鼈甲と朱色の栓の付いた小瓶のクリスタルがささやかな輝きを投げかけていた。アリーの部屋は陽気な感じで、食堂は厳しい感じだった。長方形のテーブル、象牙を彫り込んだ紫檀の小テーブル、パステルの青色の革製の椅子数脚などであった。暖炉の上のカップの中にはクリスタル製の果物が中側からいくつかの電球で照らされて、夕方の様に色づいていたのだった。

ジャンは自分がバルヌリー商会で自由にできる資本は自分が思っていたよりはるかに少ないということにはわかっていた。しかし事柄がナタリーに関することになるや、すべての天引きは必要であると思われるのであり、計算は何も意味せず、思慮も理性も最早存在しなかった。

ジャンによって課せられた離婚が自分にとって耐えがたいものと思われたとするならば、それは彼が弱いものでありながら、自分の人生に合体した一つの存在に打撃を与えたからだけではなかった。ジャンは明らかに利己主義的で、自分自身の防衛によってのみ正当化される目的を追い求めたことで苦しんでいたからであった。かつて彼は自分がバルヌリー商会の自分の地位を拒否した時、善行や正当な考え

方についての近親者たちの意見や感情とぶつかることを恐れなかった。その時には自分の家族にとつてはとんでもないことであつたが、彼は、自分の立派な身分保証と英雄と極めて古い記録を持つてゐる精神界にある彼を認めて、擁護しようとしてゐる人々を見出したのである。彼らは世界に対しては善と真実の番人なのだ。しかし今日では誰も彼の決心を理解することができなかった。それは彼の意志から出てきたものであり、全く私的な利害を指すものだった。それは彼を冷酷な孤独の中に突き落としたのである。

けれどもホテルの部屋では研究と瞑想が彼には許されていた。今まで彼は精神的なエネルギー、すなわち瞑想を、地上的なものから独立した思想の自由な動きであると考えていた。そして彼はその向上は、自分が上手く定義することは出来ないが、その破綻を感じてゐた様々な支え、指標、すでに獲得されてゐるが安定したものである或る形態などを想定させるものであることに気付いたのである。その墜落の内での魂の呼吸作用は彼には欠けてゐたのだ。

かつて彼が墜落した世界を断罪した時には、それは自分の無邪気さによつてのことだった。この地上は彼にとつては不思議な避難所であり、それはあまり気難しくない無謀な人々をも満足させることが出来るのだ。今日では直接の知覚、ある種の即座のもので普遍的である経験によつて彼は全てを測り、汲み尽くしたのである。彼は人間的な事柄の空しさを知つてゐた。そして彼が全く別のものであり、本質的なものがあると信じてゐた精神的な世界の空虚なることも知つてゐたのである。

彼を孤立させるはずであつた彼の小さな部屋の新しい壁紙や塗り立てのペンキも隣人たちの立てる騒音に対して彼を守つてはくれなかつた。誰にも話しかけず、彼は魔法のような不思議な力による情報で、

すべての人を知っているのである。彼が食堂や、その部屋の扉がいつも開いていて、そこからがらくたの小さな山が引つ張つてこられる夜の階段の踊り場で出会う人々は、そのすべてが老いも若きも、或いはむしろ年齢が判らないすべての者は、彼に対していつも変わらず悲しい人生のイメージを呼び起こすのだった。しかし彼は考えるのを一時止めて、目を伏せるのである。彼は自分の辛さが恥ずかしいのである。それは彼の体調の不良から由来しているのだ。それは血液を変質させるし、悪酔いのように魂を変えてしまい、頭脳に指令を出し、様々な理念や女の興奮した笑い以上に下らない反感を吹き込むのである。

すべての娯楽は彼をあらかじめ疲れさせる。演劇も美術館もまだ自分自身に興味を持つことが出来る健康な人々のためのものである。彼はポリーヌに会いにパリに出てきたのである。その住所を見失うのを恐れて、彼は自分の机を覆っている吸い取り紙のバラ色の大きな紙に鉛筆でそれを書き込んだ。彼女は極めて近所に住んでいるのである。

しかし彼はもう彼女に会いたくないのだ。彼女との会話は大変な努力を必要とさせるだろう。

彼は生まれて初めて春の息吹に触れた。中庭を縁取っている屋根と屋根の間で切り取られた一本の樹の上の霧がかかった青空の四角形、床の上の太陽光線などがそれである。この日の光、この展望は依然としてこの狭い枠が高く掲げられているのに変わりはないが、彼が階段の塵の中を下りていくや否や消滅してしまうのだ。

ポーリーヌは非常に朝早く、クロワ・ルージュの四つ角で一頭だけの馬に引かれた乗合鉄道馬車に乗り込んだ。ボン・マルシェ・デパートの店員の正確な人々の一群が荷下ろし場の方に溢れ出て、通用門の方に犇めき合つて詰めかけた。そして通りは急に空っぽになった。セーヴル街の向こうで一瞬、真つ白の建築物の足場と、ほとんど人が住んでいない広大な通りが見られたのだった。陸橋の鉄柱の下では地下鉄の震動が耳をつんざくばかりの強さにまで達していたが、それは嵐のうるさいほどの轟きを伴つて、定期的に低くなつたり大きくなつたりしていた。ポーリーヌはルールメル通りを徒歩で辿つていった。彼女のぎこちない足取りは、彼女が硝子窓の中で雑然としたものに横切られた透明の自分の姿が通過するのを見たとき、そして突然側面パネルの鏡板の上に、高いカラーと白のバチストの袖が付いた地味な布の衣装や少し前にそりだした両方の肩、体にくっつけた両肘などが本能的に自分の胸やきつく締めつけられた腰を押さえつけている姿が現れた時には自分を驚かせたのだった。彼女は髪形を変えていたし、バルバザック時代の巻き毛はこめかみから外して、艶やかな編み毛をうなじの上で束ねていたのだった。彼女の身体中に生きていたものは無頓着の外見の下で秘かに燃えていたのだ。彼女は近づいてくるあらゆるものに逆らっている確固としたその態度の中から自分のエネルギーを汲み尽くしているように思ったのだった。

彼女は「鋼鉄とスチール」のブロシャールの店に、両壁には外套や帽子などが並んで掛けられていた小さな廊下を通つて入つていった。それから倉庫の下ガラス張りの小部屋の電話の前に坐つた。彼女

は特別の用語を覚え込んでいたし、それぞれのステイルの名前や重量や直径などを知っていた。そして電話で顧客の住所を書き留めたり、カードを調べて直ちに返事をするのが出来た。そして頭を使うことは全くないが、いかなる間違ひも許されないような単純な仕事に熟達したのだった。彼女の横では突然二人の若い娘が互いに体を寄せ合つてあるニュースを尋ねたり、ちよつと打ち明け話をしたりする。そして急に真つ直ぐになつてタイプを打ち始めるのである。隣の部屋では、窓口から蒼白くて骨ばつた男たちが見えたが、その頸からは低いカラーの外にゴツゴツした筋が飛び出していた。彼らは休みのない仕事に縛りつけられ、体をびくびく動かして疲れを取り、紙の上に花で飾つた大文字や跳ねた渦巻き型の文字、奇妙な装飾文字を殴り書きしていた。そして別のもつと若い者は自分の姿態に取りつかれているようであり、自分の爪を見たり、ネクタイに触つたり、髭を撫でたりしていたのだった。

彼女はスナックで食事をして、しばらく散歩してから、悪臭はするが温かい自分の片隅の持ち場に戻ってきた。彼女が自分の家に戻ると、通りはすでに暗くなつており、店は閉まつており、家のなかは静まり返つていた。彼女はカーテンを引いて炉の火床に火を点けて、飲物無しの食事を準備し、直ぐに平らげてしまった。それから動きやすい部屋着に着替えてから円型小テーブルに明かりと本と裁縫道具の籠を置いてから、暖炉の側にクッションと縋り房が付いた古い安楽椅子を近づけて、両肩を伸ばして頭をのけぞらせて寛ぐのである。彼女は外部への関心からは解き放されて、身動きせずになっていたが、突然自分の愛情の抑えがたい気持ちにまつたく触れずにいたことに気が付いて、心の中で疲れ果ててしまふほどの議論をするのだった。彼女は膝の上に落ちていた本を取り上げて、靴下を修繕しはじめると、針が行つたり来たりするので少しずつ心が鎮まるのだった。

彼女の直ぐ隣の極めてうすい壁で仕切られた部屋には、いつも自分の部屋に一人でいる女が厚紙の上で見本として作られたボタンを縫い付けていた。ポーリーヌは箱の中の螺鈿がちりんちりと鳴る音や蹄の滑るような音を耳にした。ボタンが床の上を転がったのだ。時折その女は悲しげな声で独り言を言った。夕方にはその女はその厚紙の箱を開けたり閉じたりして、荷造り用の包み紙を切つて、新聞を切り裂いたり畳んだりしながら、朝になるとある店に手渡す自分の制作品を包装したのである。この表には目立たない騒音や自分の部屋の中に入ってきた象虫の引つ掻くような音はポーリーヌをひどく苛立たせた。しかし日曜日には夜遅くなつて彼女は絹のような薄紙の軽くこすれる音を、そして破れやすい紙の擦れ合う音を聞いた。隣の女が小箱から自分の宝石を取り出して、過ぎ去つた日のある奇蹟的な刹那に歸っているのだった。

..

朝、ポーリーヌが自分の部屋を出るとき、一階の鳥屋は歩道の上にその鳥籠を移し始めるのである。少し離れた所では荷造りの仕事が始まっている。木屑が大きく開かれた包みから溢れだしていた。そして開いた箱は、バラバラになつた筆筒や引出しのない整理筆筒の間で、地面の上で藁の中に入れられたガラス細工を待っているのだった。骨董品店のショー・ウィンドウではアジアからやつて来た商品が積み重ねられたり、お馴染みの大混乱の内に散らばっていたりした。ある破壊の力が容赦なくすべての調和とか安定の試みを攻撃し、破片を転がし、家々を汚してしまい、仕事でわが身をすり減らしている

人々を突き飛ばしたりしているように思えるのだ。

ポーリー又は自分の仕事の中に、与えたり理解したりするという必要で十分事足りることが出来る一つの平衡というものを見いだしていた。今や彼女は事務員や労働者に話しかけることが出来る。彼女はその生活が窮乏であるに過ぎないような人々を賞讃するのである、彼らはこの地上で何も味わうことなく、それでも特別の必要性に無関心で過ごし、何よりも仕事を愛しているのだ。彼女はこの集団的な自尊心の内に一つの力を見いだしている。彼女は単に機械的な労働では十分ではなく、各々の人から情熱と少しばかりの魂を要求する一つの機構に自分が統合されているのを感じているのである。

ブロシヤールはいやいやながらポーリーヌを雇い入れたのだった。《坐ったままでいることができず、いろんなやり方で様々な失敗をしてしまう社交界向きの女》というのだ。しかし二ヵ月後には彼は彼女に自分の事務所の椅子を与えて秘書のポストに据えた。彼は結局、記憶力が良くて自分の手紙も書くことが出来る一人の女を見つけたのである。

彼は五十歳の若々しい風采の男であつたし、喪服を着てもエレガントなのだが、いつも苛立ちやすく、小言を言ったり怒鳴ったりで、赤ら顔で目はきらきら輝いていた。誰もが彼の事務所からは圧倒されて出てきたし、彼の声は回りに反響して心を貫くのだった。そして彼はあまり眠らず、水しか飲まず、米だけを食べて、あらゆるやり過ぎで憔悴してしまっていた。家庭でも、事務所でも誰もが彼の側では震えているのである。ただポーリーヌだけが鉛筆を指に挟んで、このお洒落でいつも怒鳴っている禁欲主義者の隣で穏やかに坐ったままでいたが、彼女は彼が怒鳴るのを止めるや否や、少しもつれて訳が判らなくなっている彼の考えを直ちに翻訳する術を学びとつたのだった。それどころか彼女は敢えて使用人

たちのために介入したりしたし、自分の上司にその厳しさを非難したし、皮肉ったりしたのだった。その思い切った言葉はプロシヤールを狼狽させたのである。彼は自分の仕事の中にまったく新しい本質を持った人間を迎え入れたのである。彼は彼女の影響を受けたのだ。ポーリーヌはプロシヤールの厳しさやむしろその人間性の欠如を彼の生まれの所為にしたのだ。労働者の息子として彼は幸いにして自分一人で大きくなった。ポーリーヌは彼の若いときの悲惨な生活との接触がその想像力を干上がつたものとしたのだと考えたのである。そこから彼の完全なる無感覚、他人に対しての盲目、苛立ちやすい神経で何も聞き入れない素質などが出てきたというわけなのだ。二十年の内に金持ちになり、プロシヤール商会の頭目となって彼は自分の思いがけない成功の不安しか感じなかったのである。

「俺は滑り落ちるかもしれないのだ。」と彼は言っていたのだ。

そこには彼のすべての思想があつた。彼が働く理由、儲けに対する彼の真剣さ、そして彼の怒りの理由もそこにあるのだ。彼は人間というものは汚れた建物や自分のような者がいるこの界限ではどこまで滑り落ちていくか知れたものではないということを知っていたのである。

彼はポーリーヌを自分の家に招待した。彼女はプロシヤール夫人の内に困難であつた最初の伴侶をつまみネクタイをシャルヴェの店で買っていたこの変容した男の横で愛らしくはあるが軽蔑されていた使用人を認めたのだつた。プロシヤール夫人は自分の子供たちのためにのみ生きていたのだが、少なくともまるで復讐心からのように子供たちには愛されることを望んでいた。彼女は彼らの過失をその父親に隠し、秘かに小遣いを与え、彼らの悪戯には不安に思いつながらもその共犯者になっていたのであり、自分が彼らの破滅を引き起こしたということに気が付いたのは相当後になってのことだった。

ポリーヌは自分の部屋に非常に慣れていたので、そこだけは何の強制も無かったし、自分の気まぐれに身を任せるのだった。彼女は自分が見ると不快になるものは取り除き、クッションや絹の布を広げ、本を集めた。日曜日の朝には彼女は入念な拭き掃除に時間をさいて、銅製の器をびかびかに光るまで磨き、反射がよみがえるように木をこすり、はげ落ちた瀬戸物の植木鉢の中のきんせんかとアネモネの茂みを手入れた。彼女は身振りもゆつくりと休息した。しかし夕方頃には、お茶の後でメランコリーが彼女を捉え、彼女は引き出しを開けて、バルバザックの写真やどうでもよい手紙を眺めていたのだった。

翌日の朝は鉄道馬車の同じ場所と同じ人たちが待つており、心配そうに自分の座席を捜すのだった。男たちは新聞を広げ、グルネル街の市場に行ってきた女たちは買い物籠や空っぽのバスケットを自分の足に押さえつけていた。セーヴル街駅ではブロンドの髪の若い娘が乗ってきたが、その娘はどんな時でも、寒さで凍えながらもプラットフォームで待つていた。彼女は不安そうに見え、ステップの方にもたれ掛かり、突然頭を下げて内壁に背中を寄せたのだった。ある若い男が乗ってきて彼女の前に直立したままだった。彼女はその男を見るのを避けていたが、彼の頬は微笑で微かに膨らまされて丸くなっていた。その若い男が下車すると、彼女は安心して座席に坐りに戻ってきたが、その両眼はぼんやりして、唇は瑞々しく、顔は真珠色に輝いていた。

やがて大気に生暖かさが感じられる様になった。男たちは黄色の水仙の花束や、グレーの尾状花序の付いた榛の木の枝を差し出しながら街中をねり歩いた。女たちは毛皮のコートからは解放され、頸の回りにはチュールの襟巻が付けられはじめた。プラットフォームでその若い娘は秘かに自分の裸の手

を押しつけさせて、鈴蘭の一本を受け取ったのである。

ポーリーヌは自由な時間を恐れていた。彼女は公園に行ったり、パリの周辺にピクニックに出掛けたりした。その出発、自転車、疾走、汽車の汽笛、別荘を隠している季節の初めの葉の茂った様子など、うっとりするのだった。それに森や孤独、埃まみれになっての帰宅、女たちの腕の中の萎んだ花束、鉄道馬車の到着を待っている一団の散歩客などで悲しい気持ちにさせられたのだった。

彼女は春のショーウインドウの前に立ち止まり、両手をモスリンの中に投げ入れたり、羽飾りを広げたり、帽子を試着したりした。夕方にはリュクサンブール公園の人影が疎らな小道では二人連れのカッブルが抱きしめ合っていた。彼女はキスをする音を耳にしたし、低い声で話しかけられたりした。彼女は自分の部屋に戻り、開いた窓の前に坐り長い間催眠術にかけられたかのように身動きせずにいた。

..

ボーイがジャンの部屋の扉を強く叩いた。

「バルヌリーさんにお会いしたいというご婦人がお見えです。」

「ご婦人だつて。」ジャンは寝台の上で起き上がって不安そうに言った。

「その方はポーリーヌ・ポンメルと名乗っておられます。そして上がってきててもよいからお尋ねです。」

「ああ……いいとも……」ジャンはホッとして言った。「待ってください……そのグラスを片づけてくれ……」

椅子の上もだ……椅子を寝台に近づけてくれ……」

「ポーリーヌ……よく来てくれたね……こんなに早く……ありがとう。」彼は弱々しく、彼女を認めてから囁れた声で言った。彼の瘦せた手は彼女の方へ差し出されたが、シーツの上に凭れて開かれたままだった。

彼女は気難しい顔の中に引つ込んだきらきら輝く目をしたその見慣れない男の前で狼狽して立ち止まった。

「お座りなさい……ご覧のようにひどい病気をしたばかりなのです。」

柔らかな髪が汗で湿った額の上に垂れていたが、その額は静かに枕の上に仰向けになっていた。

「誰があなたの世話をしているの、ジャン。」

「看護婦です……しばらく……私は病院に入院していたのです……私は彼らがどの様にしたのかは知らないのです……ご覧なさい……私は死のうとしていたのかもしれませんが……人間は無の生に向けられているのです……彼の中には生きるのに値するものは何もないのです……どんな思想も……どんな感情も……すべては欺瞞なのです……残酷な欺瞞です……私はそれをあまりにもはっきりと感じました……私がどうしてよいのか判らなかつたある刹那のことです。その時皮膚の下にはしばみの実のような小さな瘤ができたのです……それは彼らが結核と呼んでいました……でもそれは確かではありません……だんだんと良くなっているのですから……。」

「どうして私をもっと早く呼んでは下さらなかったのですか……私は直ぐにでもやって来ましたのに……。」

「長い間私は誰にも会うことができませんでした……。私は自分ではいつかあなたに手紙を書くだろう

ということとは判っていました……。そして私が病氣になった時、医者たちはまるで私を愛していたかのように非常に注意深く私を診断してくれました……。一人の人間がこの大都会で倒れると、彼の回りには人々が駆けつけて、バネの付いた車で運んでくれます……。長い間その病氣について考えた人々が、極めて完備した器具の真ん中で彼を待っていますね……。私がここに戻ってきたその時に私は、自分に対して親切にしてくれた人間社会に感謝するためにあなたに会いたくてたまらなくなったのです……。私は自分の孤独が恥ずかしくなりました……。どうしてあなたはバルバザックを離れたのですか……。若しあなたが残っておられたならば、私に忠告を与えてくださったでしょう……。人間は忠告が必要なものです。そしてすべての人々も必要です……。誰かが必要なのです。どうしてあなたは行ってしまったのですか。あなたの従姉妹たちそれは理解できないと……。」

「私は自分の生活費を稼がなくてはなりませんでした……。」

「そんな理由は従姉妹たちには認めてはもらえないでしょう。あなたは家族の感受性を傷つけたことになるのです……。そこではすべては体面という観点から考えられているのです……。それは一つの考え方です。」

「狭い考えですわ。」

「狭いのですが、そのメリットもあります。それはあの人たちに慎み深さ、落ち着きを与えているのです……。その奥さんたちは自分の立場を持っています……。若い娘たちは待っています……。」

「あなたも私を非難されるのですか……。」

彼女はジャンの不安げな視線に気付いて微笑しながら言った。

「あなたもマルセルのようにお説教をしたいのね。」

彼はゆっくりと言った。

「私はあなたがどうして出発したのかを知っています。」

彼女はヴェールを取り、手袋を外して薄紫色のリンネルのブラウスを開いた。それから部屋の薄暗がりに戸惑ったように突然彼女は立ち上がった。

「この部屋は暑いわね。」

彼女は窓に近づいて錠戸を押し開けたが、中庭の眩しさに目が眩んで後ずさりした。

「嵐にはならないでしょうね……。」

「ええ、ならないでしょう……。ここに戻って私の言うことを聞いてください……。」

彼女は暖炉の前に止まって、涼しさを求める両手を大理石の上に置いた。それから彼女は身を守るかのように体を真っ直ぐにして腰を掛けた。

「私は冬のある日のことを思い出しました……。あなたの小さな馬車の中で私に言われましたね。《私の父について言われていることはすべて間違いです。誰かが彼のことを話しても耳を傾けないでください。》その時からあなたと私の間には一つの了解が生まれたのでしたね。それは先ずは一つの訴えでした。すなわちあなたが何をしなければならないにしても、あなたはそれを自由な気持ちで判断してくれるように私に頼まりましたね……。それで十分だったのですね……。でも他のことも……。」

彼は低い声で話し、ポリーヌはカーペットの図柄を靴の先で辿りながら目を逸らしたのだった。

「その時私の心では恐ろしい葛藤がありました……。あなたはその目に見える結果を知っておられます

ね……。いつか私はあなたに言うでしょう……。その葛藤はあなたのためにもっと厳しいものになっていったということだけは知っておいてください……。」

ポーリーヌは膝が震えるように感じた。彼女は自分の指の回りでハンドバッグの紐を結んだり解いたりしていたが、彼女はそれを外すことが出来なくなっていたのだった。そして彼女はジャンに絶望的な視線を投げかけた。

誰かがドアをノックした。ポーリーヌはブラウスを整えてヴェールを下に下げた。女の使用人がトレーを持って入ってきた。

「ミルクがありません。」と彼女は言った。「いたんでしまったのです。冷たい飲み物とビスケットをお持ちしました。」

ポーリーヌは枕元のテーブルに近づき、レモンを切って押しつぶし、グラスのきれいさを確かめてから砂糖とレモンのジュースを注いだのだったが、自分を一つの決まった役割に戻らせたこの気配りでホツとしているかのようだった。

「あなたのためにお茶をたのみましょう。」ジャンは枕元で起き上がりながら言った。

「いいえ、結構ですわ。あなたはもつと体のためになる栄養のあるものが必要です。食欲はありますか。」彼女は言ったのだったが、恥ずかしさですっかり緊張して、今まで決して口に出したことがなく隠されていた感情が二人の間に動揺を引き起こすのではないかと恐れていたのだった。

「私には判りませんわ。自分で自分を世話することほど氣力を失わせることはありませんもの。」

彼は痩せ細った自分の指を見て、重々しい声で続けた。

「病気は私たちからすべてを遠ざけてしまっています。想像力も分別を失わせますし……。そして建築するのです……。」

「孤独と同じように……。」

「人は夢を見ます……。私の慰めはすべてあなたからやって来ました……。」

彼の和らげられた視線は晴れやかなイメージを見出したように思えた。安楽椅子のひじ掛けに凭れたポーリー又は自分の額を手のなかに落とした。彼女は自分の全身から力が抜けてしまうのを感じた。

「人間は恐るべき明敏さも持っています……。それはすべてのものを破壊してしまうのです……。私はもう二十歳ではありません……。一人の人間を自分の運命に引き込むには、……他人の運命の中に導き入れるためには狂人にならなければなりません……。」

「それらの運命は望まなくても混じり合いますわ。」ポーリー又は低い声で言った。

「それらはすれ違うかもしれませんが、そしてそれは危険なことです。」

「ジャン、あなたは良くなければなりません。このホテルにいては良くはならないでしょう。このホテルは惨めです。あなたは屋根裏部屋にいるのですよ。私は階段を上がりながら息が詰まりそうになりました。」

「私はとても貧しいのです……。」

「相変わらずその癖が直っていませんね……。」

「私は本当に貧しいのです。私はリモージュにはたくさんのお金が残っていると思っていました。私は浪費してしまったのです……。私は非常に巨大な配当を受け取ったという思い出がありました……。そ

して私はその計算書を調べなかったのです……。五年前からバルヌリー商会の配当は慎ましいものになっています……。」

「あなたはすべてをナタリーに譲ってしまったのですか。」

「私は彼女にすべての株券とその他すべてのものを与えました。」

「あなたは何とあの不幸な女性に愛着を持っていたのでしょうか。」

「ああ、いいえ、全くそんなことはありません。あなたが訪ねてくれたことは私を恐れさせました。いいえ、むしろ一人の婦人の到着を私に知らせた時の使用人を恐れたのかもしれませんが。私はそれはナタリーだと思ったのです。ナタリーは今パリにいるのです……。私は怖いのです……。私はここから立ち去るためにも良くなりたいのです。私はパリを離れなければなりません。」

「あなたはどうかやって生活しておられるのですか。」

「私は幸いにも伯父のポンメルル氏に三十万フランを貸していました……。そして私は利子などは受け取らないつもりでおりました……とりわけ今は。彼の事業は困難な状態にあります……。伯父は私を非難しています……。でも全くエレガントでいることが許されるのは金持ちだけです……。」

「あなたはちよつとお金が無くなると自分が貧しいと考えられますが、それは金持ちの人と同じです……。あの人たちは貧しさというものを知らないのです……。貧しさというものがあの人たちにいつも変わらぬ不安を与えているのです……。あなたはもつと健康的なホテルに住めるのですからね……。スイスに行かなければなりません……。ジュネーヴ湖の近くのペルラン山の麓のレンスという魅力的な村があるのです……。私の後見人のプロシヤール氏のお嬢さんが私にそれを教えてくれたのです。彼女は

非常に良いホテルを知っています。あなたにその住所をお教えしますわ。高くはないと思います。私の言うことを聞いてくださいますか、私が言うことを何でもしてくださいますか……。」

「あなたは何と精力的なのでしょう。あなたは人生への好みを与えてくださるのですね……。」

「私は以前と同じように話しているんですわ……私、ここでは自分が判らなくなってしまう……。私は自分の家や事務所にいるときにはまったく別人なんですもの……。疲れているか、冷やかであるか、しかめっ面をしていて……。仕事の身振りをしていますし……。何かを待っています……。とても年取った感じなのです。というのはそれこそは老いた姿と言えるものだと思うのです、すなわち何も考えず、身振りだけで……。何かを待ちつつ……。ずっと待たなければならぬ……。……。」

「あなたは苦しめたのですね……。」

「その様に見えますか……。そうなのです……。まず第一に乗り越えなければならなかったのです……。でもそれについては後でお話しますわ……。そして私は思ったのです、労働は……。しかし人間たちが労働を汚してしまったのです……。彼らはあまりにも頑迷なのです……。私は自分の労働のみを愛しているさやかな事務員たちに属しています……。それは思いも寄らないことでしょう……。プロシヤールはあれほどにおおらかな人たちの中で、自分はどんなに神聖に、そしてどんなに美しく生きることができのかが判らないのです……。彼は苛酷です……。何かを恐れています……。人生を損なってしまうものはその恐れなのです……。ジャン、あなたも恐れていますね……。あなたは人生に十分な信頼感を持つてはおられませんね……。心の中で……。あなたは屈託のなさを欠いています……。あなたは拒絶しています……。私は自分が言おうとしていることが良く判りません。ごめんなさい。長い間誰にも話しかけたことがなかっ

たものですか……。それが私を茫然とさせるのです。もしかしたらあなたを疲れさせてはいませんか。あなたが私に元気と若さを取り戻させてくれたのです……。私は良い忠告を与えられるような気がするのです……。私に導いてもらうことを望まれますか……。まずはレンズに行かなければなりません……。」

彼は眼を下げて、内気な風をして言った。

「私に手を貸してください、ポーリーヌ。ちょっとあなたを守らせてください……。以前には私はよくこの様な誘惑を持ちました。今では私は自由な人間です……。私はどんな仕度も許すことができますし、その結果を受け入れることができます。」

「本当に自由な人間なのですか。」彼女はその痩せているが燃えるような手に触れながら言った。

「絶対に自由です。」

ポーリーヌは喉を詰まらせたような声で言った。

「私はあなたの生活を知っていました……。私はあなたが若しそれを忘れることが出来ますならば、もっと慎ましい他の側面での人生を再開されることを望むのですわ。私はもう小娘ではありません……。私は人間は、そして愛は何に基づいているのかを知っています……。それは先ずは一つの存在なのですから……。それでは今日はこれで失礼します、熱が出ますよ。」

「また来てくれますね。」

「はい、日曜日にまいります。」

「そうですか、日曜日ですね。それではその時にレンスのことを相談しましょう。私は秋にはここを出発できるでしょう。」

ポーリーヌは言いようのない時を過ごした後の様な気持ちで、柔らかなアスファルトの通りにいる自分に気付いたのだった。茫然自失の気持ちに眩しい光の反射に重く伸しかかっていた。前に飛び出たブラインドと閉じられた鍍戸に沿って数人の通行人がゆっくりと歩いていったが、彼らは黒い鼻眼鏡の上にパナマ帽を深く被っていた。セーヴル街の角でポーリーヌは鉄道馬車での若い娘に気付いたが、彼女の夫がその腕を持っていた。彼女はモスリンの服とライ麦の穂を付けた帽子を身に付け、ブラウスには庭いばらの花束を付けていた。そして軽やかな歩調でハイヒールで歩いていった。ポーリーヌは彼女の体全体の確かさに気付いた。そしてその笑い声を聞いて、この幸せな女が大好きになったのであった。

∴

ブロシヤールは繰り返した。

「私には判らない……。」

彼は突然立ち上がり、それから坐った。そして自分の腕をテーブルの上に置いてポーリーヌの眼を見ようとしながら彼女の方へ頭を突き出した。

「私は出発しなければなりません。」彼女は言った。

「あなたはおそらく給与が少ないというだね。それならあなたの望むだけ出しましょう。」

「私は今以上はいただかなくて良いのです。私は申し上げましたように、来月にはお暇をいただかなければならないのです。」

「何かわけがありますね……。」

「若い娘は容易に見つかるものではありませんか。」

「いいえ、私は誰も見つけることは出来ません。只通信の問題ではありません……。私には判らない……あなたとならずべてが容易だったのに……。」

「私は行かなければならないのです。フランスを離れなければならないのです。スイスへ行くのです。」
「スイスへ？ いけません、あなたはスイスには行けません、あなたは自分の母の許を去ることは出来ません。彼女は今重病なんです、そしてあなたを必要としているのですよ。」

「あなたは私の母をご存じですか。」

「私はあなたの母がトリエに住んでいるのを知っているのです。あなたは彼女に会いに頻繁には行っておられませんね。彼女は重病なんです。癌ではないかと言われています。私はあなたがもういなくなるのなら、もっと早くそれを言うべきであつたかもしれません……。あなたは気難しい人ですからね……。私は時々あなたに忠告を与えるかもしれませんが……。私はあなたに対してとても大きな親愛の気持ちを持っているのですからね……。」

「あなたは何処からそのニュースを得られたのですか。」

「私の女友だちからです……。」

彼は「それは妻の女友だちです。」と言うところだったが、プロシャール夫人の存在を思い出したくは

なかった。

「それはトリエに住んでいるある女友だちです。あなたのお母さんはあなたに手紙を書いてはくれなかったのですね……。親族というものは遠慮がありますからね……。それを信じてはいけません。彼女はあなたを必要としています。トリエに行ってみなさい、そうすれば判るでしょう。それで私はあなたにそれを提案したいのです、あなたはトリエに住むのです、そしてあなたの母の世話をします。そしてあなたは同じ給与を受け取ることになるのです、そしてあなたは週に二度ほどここに帰ってくるのです。」

ポーリー又は額を腕で支えていた。そして頭を下げて身動きせずについていた。

「私があなたに提案したことはとても良いものではありませんか……。あなたがお母さんに会ったらそれはもつと良く判るでしょう。直ぐに会いにいかなければなりません……。トリエ行きの汽車はあまり便利ではありません。私が連れていくことを望みますか……。直ぐに車を持ってこさせましょう……。」

彼は喜びに満ちて、元氣そうに話した。

「電話をかけておきましょう……。先ずあなたの家に行きましょう、トランクを持っていかなければなりませんからね。」

「それには及びませんわ。」ポーリー又は夢から覚めたように言った。「私は明日行ってきます。」

..

客車の乗降口からポーリー又は田畑や土色の小さな林を眺めていた。平野の青白い窪地には一瞬河が出

現した。

駅から出て彼女はその両側に樹々や別荘に縁取られた大きくて真つ直ぐの通りを辿っていった。そして一つの路地へ曲がった。彼女は中庭を横切った。そして少し迷いながら、片隅を通り抜けて壊れた階段や窓のない壁を、そして風通しが良くなくてますます暗くなっている廊下から、真つ暗な踊り場で立ち止まった。そして自分の後に人の声を耳にして振り返った。

「よく来てくれましたね。彼女は調子が良くありません。あなたがお帰りのときお話があります。私はお母様のことでとても困っているのです。ご存じのように彼女はいつも気さくな人ではありません。私は同じ条件では続けることはできません。私には夫と子供と自分の家があるのです。」

「判っています。」ポーリーヌは言った。「後でお会いしましょう。」

ポーリーヌは長い時間を掛けて泥だらけの靴用のマットで自分の短靴を拭ってからちよつと躊躇ってから、入り口の扉を開けた。彼女の母は庭用の長椅子の上に横になっていたが、木綿のクッションに支えられ、グレーの毛布にくるまっていた。ポーリーヌは静かに近づいて、そのやつれた顔と、白いマンテラの下の色褪せた髪を眺めたが、その弱々しい声は母の声とは思えなかった。

「ポーリーヌ、お前なのかね……。私はお前が何時来てくれるのかと思っていたんだよ。」

「私は病氣だとは知らなかったのよ、お母さん、どうして手紙で知らせてくれなかったの。」

「ああ、そうだね、とても疲れていたんだよ……。それにお前を当てにしてもいいのかい……。」

「どうしてそんなことを考えたの、お母さん……。」

「そんな積もりで言ったんじゃないんだよ……。今私は昔のことをたくさん思い出しているんだよ……。」

お前は自分の家族から奪われたんだからね……私はそれが出来たから別の場所で生活してきたんだよ。」
「お母さん、そんな事はもう考えなくてもいいのよ……。あなたは病氣なんだから……私はこれからたびたび来るわよ、毎日でも……。」

ポーリー又は自分の手のなかに黄色くなつた手を握っていた。そして絶えず、自分の青年時代のはるか彼方の子供時代の感情を再発見するためかの様に《お母さん》という言葉を繰り返したのだった。

風がカーテンを押し戻した。ポーリー又は埃だらけの床、灰に覆われた暖炉の中の二つの練炭、重そうな毛布の下のベッドなどを見た。

「判るだろう……ここはきれいではない……寒いし……。私がもう少し良くなつたら転宅するだろう……。お前はその時には助けしてくれるね。」

「もちろん助けるわ、お母さん、でもまず第一に養生しなければいけないわ。辛いでしよう。」

「少しだけは……それも時々のことだよ。私は吐き氣があるし、氣分が悪いときがあるんだよ。お医者様は胃病だと言っている……。でも自分が望むものは何でも食べることは許されているから大したことはないんだよ。でも私は空腹感がないんだよ。私は肉を見るとむかつくし、この季節には野菜や果物は高いのよ。」

「私が今度持つてきてあげるわ……。そしてお母さんの世話をしてくれるあの人はどうかしら。」

「あの人は何でもやつてくれるのよ。しかしこれは無料奉仕ではないということは判るね。だからいつもお金が要るんだよ。ところが私にはいつもお金がない。私は何も彼女に頼むことができないんだよ。」
ポーリー又は孤独の惨めさというものを知っていた。そして彼女はおそらく母親に残っている最後の

数週間を母親の世話に捧げる積もりなのだ。夕方には少なくとも自分の部屋で落ち着くためにバリへ戻り、プロシヤールの所で数時間を過ごし、午後三時には母のところに到着し、部屋を掃除して火をおこし、シチューを準備し、痩せ細って気難しくなっている病人の周りに湯たんぽを置いた。

「私をお前の家に連れていってくれ、そうすればもっと良くなるだろう。これからは一緒に生活しよう。お前は誰とも一緒ではないんだろう。」

時折ポーリーヌは母がエレガントな古着を身に付け、まがいものの宝石で飾り、吐き気を催させるような香水をぶんぶんさせているのに気が付いた。

「ほら、私は錦織のガウンを着てみたんだよ。これはすっかり着古されているものだよ。私はずっと貧しかったわけではないんだよ。ああ、若し伯父さんが私に送ってくれた年金をさえ持っていたらねえ。」

「働くことも出来たでしょう。」

「働くだったって？ お前も本当にポンメル家の女だね。そして真面目な女だね、お前のお父さんのようではない。」

「ああ、お母さん、お願いですから……。」

「私がリュシアンと過ごした惨めな生活や、その家族から受けた待遇の後で私はその埋め合わせが必要だったんだよ。私は可愛かった……。立派なアパートマンも持っていた……。そうだよ、リスボン街では私たちは楽しく社交的な生活を送っていたんだよ。長い間ではなかったけれど、それは結局うつとりさせてくれるものだったんだよ。」

「お母さん、もうその時のことは問題ではないわ。私たちは今は二人っきりよ。そんな事を考えてはい

けないわ。あなたに本を読んであげましょう。」

「そうだね、でも私にレモネードの代わりにシャンパンを少しくれないかね。あれはいつも私を陽気にさせてくれるんだよ。」

「今度持ってきてあげるわ。」

母は厄介なお洒落の癖を持っていた。

「私の髪を結ってくれないかい、今夜お医者様が来るんだよ。」

苛立ちを抑えてポリーヌは、端の方が緑になったブロンドの色褪せた髪に櫛を入れて、最後に待ち焦がれていた鏡を差し出した。

「顔色が良くないね、少し白粉を付けなければならないね。後で付けよう……。私は疲れたよ……。ちよつと前までは私は注目されていたんだけどね、本当だよ、数年前だったか、ダーリアが私にぞつこんだったんだよ。お前、バルバザックでダーリアを知らなかったかね……。いい男だったよ……。噂ではバルヌリー牧師の奥さんの恋人だったんだそうだね……。」

「あら、私は知らないわよ。」

ポリーヌは過去の生活を知らないままでいるために、母がもたらした言葉やイメージを自分の心から追い払ったのだったが、その過去は彼女が本能的に遠ざかっていたし、それが自分の青春時代を台無しにしたのだった。彼女がジャンの看病をなげうって入手したこの最後の日々は昔の回想から切り離されて、死の淵である種の母子の和合を呼び戻すことができなかっただろうか。彼女の努力と一層注意深い配慮にも拘わらず心に残っていたその嫌悪の感情はおそらく彼女の出発への障害を引き起こした心の

なかの苛立ちから由来したものであったろう。ジャンは彼女を必要としていた。彼がレンスから書いて寄越した控えめの手紙の中に彼女は隠された焦燥を感じ取っていたのだ。

あまり思慮深くなく内気でもない彼女の母は色々な混乱した思い出を打ち明けた。彼女は様々な恨みや怒りを持っていて、そこからは何人かの知らない名前や秘密であった愛情などが迸り出るのだった。ポーリーヌはどんなにかその囁れた声を逃れて、ジャンの側に保護を求めたかったことだろう。

彼女はトリエのホテルに一室を借りた。彼女の母はもう起き上がらなかった。痛々しい痙攣で筋が付き、時折はグツタリした、締めつけられた顔の特徴、汗で湿った額の下の窪んだ目、困難になった呼吸で持ち上げられた硬直した体で、母は呻きながら言った。

「お前さえいつもここにいてくれたなら……、誰もいなくていい……みんな通りすぎていくんだから……。人は一人だけでは居られないんだよ……。行かないでくれ……。」

ポーリーヌはベッドの側で哀れみの気持ちと新たな重い気持ちで自分の抵抗と悲しみを忘れて優しく安心させ、彼女に自分がいつまでもそこにいるという安堵感を与えようとしていたのだった。

..

ジャンはポーリーヌにあまり手紙をくれなかった。彼は彼女がそこにいなければならない彼女の母の枕辺からあまりに早く彼女を遠ざけてしまうのを恐れて、数日の間隔において彼女の手紙に返事をくれるだけだったのである。それに彼は自分がポーリーヌの運命に影響を与えて彼女を自分の方に引き寄せ

るように彼の側からあらゆる圧力をかけることを恐れていた。彼は自分が愛したバルバザックの若い娘の前では相変わらず内気なままであり、一つの言葉、一つの視線も彼の感情を洩らすことはなかったのだ。今日では彼女が自分のところにやって来るのを受け入れることが出来たが、彼女を呼び寄せることは自らに禁じていたのである。彼の年齢、離婚、彼の経験、ポリーヌの家族や友人たちに対して、彼女のジャンとの結婚が生ぜしめると思われる悪評などを思つて彼に求婚のあらゆる申し出を拒ませていたのだ。

それに彼の手紙は短かった。彼は風景や雪の上の太陽や夜の美しい明るさ、白く雪化粧した山々の盆地の中のあの暗い湖水などを描写するに止めたのだ。ポリーヌはこの少し気取った描写の意味を見抜いたのであった。つまりそれが恥じらいとためらいと愛情である。それらの手紙の描写は次のことを言おうとしていたのだ。《ここには私たちがやがて共に住むことになる国があり、私はすでにそこにあなが見えるのでそれを眺めるのが好きなのだ。》この慎み深さはポリーヌには気に入った。長い間彼女の愛は自分の対象からは異なつたものとして彼女の心の中に生きていた。しかし厳密で様々な出来事には近づけないような存在への物理的なつながりはなかったのだ。彼女はまだまだあまりにも個人的である事を理解することは出来なかつたかもしれないのである。

ジャンは音が良く響く吹き抜けとなつた全く白い駅の中に入っていく、時計が十時を示した時には突然ポリーヌを見つけるだろうということなどは理解せずに線路を眺めていた。心は肉体的な苦しみで締めつけられていたが、精神は空虚であり、《自分はポリーヌを待っているのだ。》と考えて、ポスターを眺めていた。彼はポリーヌが見分けられないだろう。彼女は黒い服を着ているだろう……。もうそ

の顔が見えない。彼女は可愛らしくはない……。彼女は大きな口ときらきら輝く歯を持っている……。彼女は背が高いのだろうか……。小柄だったろうか……。

列車は音もなく到着した。すでに大勢の人とトランクと鞆が一杯だ。丸い帽子を被って、小さなクレールのヴェールを付け、黒いコートを着ているのが彼女なのだ。トランクを地面に置いて彼女はバッグのなかを探し物をしている……。

「あら、ジャン……。」

疲れた顔のなかで美しい明るい目は微笑んでおり、ユニークで魅力的で憂いを持ったその女を輝かせていたのだった。

「あの男があなたのトランクを二輪馬車で運んでくれます……。私たちは彼に随いていきましょう。ケーブルカーの所までは歩いていきます……。彼方には湖があります、でもまだ見えません……。ペラン山が見えますね……。あの高いところ、葡萄の木の中の屋根の列、あれがこれから私があなたを連れていく村なのです。ヴェヴェイよりも三百メートルも高い所にあるのです。ケーブルカーに乗ればそこには十分で行けるんです……。」

彼女は何も言わない。自分が看護することになっていた病人のことを考えていたのである。彼女は会っていなかったあらゆる時間の間隔がまったく理解できなかった。彼女は自分に優しく話しかける大柄で強い男を期待していたのでもなく、自分を茫然とさせるこの気持ち、そして母の死後にこれほどの生命力を期待していたのでもなかったのだ。二人の間には無意識の、そして押し戻されたりした溢れんばかりの愛情と障害物と、禁じられたもの、遅延したものなどがあつた……。突然汽車を下りて、二人は並

んで線路に沿って歩いていたが、二人きりで自由であり、互いに自分自身に身を任せていた……。彼女は何年ものあいだ一人の男を見たことはなかったし、彼女がその人のために熱烈で新鮮であることを望んだ人を別にすれば、すべては取るに足らず、空虚で、退屈であると感じていたし、何も逸らしたりせず、何も許さず、すべては不可能な目的のために取っておかれていたのだった。

今は彼女にその世界を閉ざした男が葡萄の木の間を上っていく木製の箱のなかの自分の目の前に坐っている。そして彼女は非常に長い間自分の心を集中していたのであえて彼を見つめることが出来ないほどなのである。

「あなたは湖や景色に背中を向けていますね、こっちの席の方が良く見えますよ……。レンスまでは葡萄の木ばかりです。暑くはないですか。今までは冬でした……。それが突然暑くなり夏になったのです……。さあ、着きましたよ……。私に随いてきてください。荷物はすべて置いておいてください。ボーイが受け取りに来ます。ホテルはあの木々の木立の中にあります。私は今すぐにあなたに墓地の横の景色を見せてあげたいのです。それからあなたは休息に行かれたらと思います……。後二、三步のところですよ……。そこでは湖とローヌの溪谷が見えます……。ダン・デュ・ミディも見分けられます……。あの白い頂です……。この湖はジュネーヴの方に広がっています……。夕方にはこちら側からジュラ山脈が望まれるのです。」

彼女は緊張した面持ちで眺めたが、その様子はぼんやりしており、少し取り乱した感じだった。

「私たちはヴェヴェイの真上にいるのです……。《緑の林檎の樹の下のヴェヴェイ》です。そこには道を知っていれば徒歩で小道を通って二十分で下りることが出来ます……。」

「その小道はどこにあるのかしら。」

「葡萄酒の間です……。小さな砂利道です……。それは見えません。車はきれいなつづら折りの道を走ります。それでは帰りましょう。あなたの部屋をお見せしましょう。あなたは休まなければなりませんよ。」

「いいえ、休みたくはありませんわ。」彼女は息を切らしているようで、少し息詰まったような声で言った。そしてホテルから遠ざかっていくかのように道を進んでいった。「ジュラ山はどこですか。」

「それは見えないのです、霧に包まれていますから。今日の夕暮れ時には見えるでしょう。ホテルに帰って休んだほうがいいと思いますよ。あなたは昨夜は眠ってはい居られないでしょう……。前もって言っておきますがあなたの部屋は小さいですよ……。このホテルのすべての部屋は非常に狭いのですが細長なのです……。そして少し暗いのです……。でもあなたの部屋は隣がないので雑音は聞こえません。それも最も静かで最善の部屋です。一カ月前から取っておいてくれたのです。」

彼女は慎ましい歩調でジャンの後に随いて行つた。彼女はホテルに近づくのを恐れているように思えた。それからキツパリとした態度でうつむきながら物も言わずに階段を登っていった。

「外から入るとこれらの部屋は真つ暗です。」ジャンは言った。

彼女は深呼吸するために元氣そうに窓の方に歩み寄つたが、目を庭の上に止めて身動きせずじまつた。

「風が流れ込むので窓を閉めましょう。」ジャンは言った。

彼は窓の前にずっと立っていたポーリーヌに近づいて口調を変えた躊躇いがちの声で言った。

「湖は見えませんか、山々も木々に遮られてやっと見えるだけです……。しかしそれを見分けることは

出来ます……。ここでは山々は霧に包まれているに過ぎません……。私たちは高いところにいるのです……。でも大気のなかには大いなる柔らかさがあります……。それは海の柔らかさのようなものですね……。波のない海です。」

彼は景色を指さして片手をボーリーヌの肩の上に置いた。彼女はあたかもこの愛撫に気づかないかのように外を眺めながら身動きしなかった。それから彼女はジャンの腕の中に一歩よろめきかけて、突然彼の体に身を預けてぐったりしたようにしてベッドの縁に腰掛けたのだった。

∴

二人の間には沈黙と少しの気詰まりがあったが、それはまるで二人が余りに強すぎる感動を追い払って、一息つき、一瞬の間親しみがより自由な仕種に戻り、とりとめのないことを話すことを望んでいるかのようにであった。そして一方ではすでに彼らの身柄を自由に行っていた急激な魅惑への変化や一つの未来への服従が成就されることになるのである。

彼は彼女がそれを見ることが出来なかったかのようにそのホテルを描写しているのだ。それは極めて古いホテルである。昔の領主の館であるとのことである。至るところに田舎風の家具が置かれている。壁には風がわりの版画が掛けられている。主人のボナベル氏は今日は留守である。彼はコンゴでの伝道師となっている自分の弟と同じく大きな髭を生やしている。普段は彼は堂々とした歩調で行ったり来たりしているが、客たちとはいっても話すし、歌うような声で単純ではあるが完全である食物、比類ない天候、

世界で最も美しい景色などを自慢するのだ。彼はお喋りしたり、何か細かな仕事で気を紛らせる他は何もしない。苺の籠を運んだり、馬草の車の後についていくのだが、その時は肩の上に熊手を担いでおり、少しばかりはだけたシャツからはローマ法王の様な美しい頭を覗かせている。復活祭にはたくさんのお客が訪れた。そして誰も何も食べない。明るいヴェールを被ったあの非常に年取ったイギリス女は通りがかりにやって来た、三十年前のことである。そして彼女は居ついてしまった。このホテルの最も興味深い人物はピアニストのミルコフである。彼は神経症のためにピアノが弾けないのである。彼がピアノに手を触れると指が凍りついてしまうのだ。今では彼は貧しく無名になっている。彼はジュネーヴの学校で迎えられ、そこでソルフエージュを教えている。庭では木々があまりに茂っているので景色を見るためには外に出てみなければならぬ。その村では湖水も山々も忘れられている。墓地のなかの糸杉と柳の間の青みがかった陰影は空なのか、湖なのか、山々なのか。目の前にはグリザール牧師の家がある。石作りの美しい家だが非常に薄暗い。村の背後にはまた葡萄畑が始まり、道はローザンヌの方へ繋がっている。葡萄畑の真ん中の台地に孤立している大きな建物は学校だ。

ジャンはポーリーヌの腕に手を触れた。

「ここに住みたいではありませんか。」

..

ジャンは部屋の仕切りを通じてミルコフが起き上がり、直ぐに服を着て部屋の外の自分の生徒と一緒に

になるのを耳にしたが、それはおそらく彼の恋人であつたアルメニアの女なのである。一人の可愛いアルメニア人の女がどうして染められた山羊髭をして自分の体を洗わない小柄でずんぐりした老人の愛人になるということがあり得るのだろうか。どんな悲惨さが、どんな混乱が彼らを近づけ、二人の間に愛の無数の絆の一つを形成させたのだろうか。各々の人間によつて愛というものはその本質が異なるとジャンは考えたが、その様に考えながら彼は心配そうな風をしてテラスの上を歩いて行き、葡萄の原木とクレマチスに囲まれたボーリーヌの部屋の窓の方に眼を投げかけたのである。

彼女は窓を開けた。そして部屋のほの暗い奥のほうに退いて、乱れた髪を露にされた肩の上に落として裸の片腕を挙げた。

「後十五分待つてくださる……？」

「いい天気ですよ。」ジャンはある身振りで空を、そして樹々や湖の茫漠とした水面などを指して言った。

白い服を着て厚化粧した痩せぎすのオーストリア人の女が金縁の鼻眼鏡を掛けてピアノに向かつて坐つた。彼女はいくつかの指環を外して黒檀の蓋の縁にそれを積み上げていた。そしてバランスのとれた動きとともにシヨパンのパラードを弾いた。有名なピアノリストが側にいるということが彼女にある種の音楽的な興奮をさせていたが、ミルコフはそれを聴くやいなや散歩に出掛けていった。

庭の外れの、避難所であると同時にそこから湖を見渡せる物見台になっている小屋の前で三人の男と一人の女が円陣を組むように坐っていた。彼らは大声でお喋りしていたが、自分たちだけが話しているのだから自分たちだけであると思ひ込んでいる人々の自由闊達さがあつた。ジャンは木の葉越しにちら

りと視線を滑らすと、その話し手の中に、作家と呼ばれていた半ズボン姿のホテルの部屋の隣人がいるのに気が付いた。それから彼はベンチに腰を下ろして、ポケットからポンメル氏からの手紙を取り出したのだったが、彼はポンメル氏に先週、ポーリーヌと近いうちに結婚することとレンズに落ち着く積もりである旨を知らせてあったのである。

少し前にはポンメル氏はジャンの離婚を反対していたのだった。しかし今彼は自分が判断を下したくない身内の一員に対しての好意から彼の結婚を祝福すると言ってきたのだ。短くて熱のこもっていない手紙である。《彼には理解できないのだ。私は自分がやってことが判っている。》とジャンは自分に言い聞かせた。

ジャンはあまり様子が判っていない人間の意見は軽蔑していた。けれどもポンメル氏に打撃を与えたいという考えは依然として気詰まりなものであるのに変わりなかった。一瞬死んでしまいたいと思うほどであったのだ。

ポンメル氏の手紙を読み返しながらジャンは遠くから聞こえてくるピアノの音に耳を傾けていた。そのオーストリア人の女は弾きつづけていたが、彼は突然それを聞くのを止めた。方向を換えた彼の耳はその灌木の茂みを通じてお喋りしているグループの真ん中に飛び込んだばかりであつたし、彼がはつきりと聞き取った一語一語を捉えたからであるかもしれないのだ。

「あの男は最初の妻に我慢がならなかったのです。彼がコンサートをした時には彼女が聴衆の第一列目に来て坐ったのです。その時には彼は彼は弾くのを止めたのです。こうして彼の指の麻痺は慢性のものになったのです……。彼が演奏しているときの姿を見ると、彼の指はこわばって痺れてくるのです……。そし

て目眩がするのです……。最初の結婚の前には彼もパデレフスキーと同じくらい有名だったのです。彼はリストの弟子でした。」

「彼が演奏しなくなってから長いのですか。」

「彼の最初の障害は三十年前の日付を持っています。彼の離婚の後で彼は自分が愛した女に遭遇しました……。彼は彼女と異常な環境の中で出会ったのです。」

「人が愛し合うときには環境はいつも異常なものです。驚くべきであるのは恋愛なのです……。」

「仰るとおりです。それは一つの奇蹟です……。愛し合うように運命付けられている二人が出会うこと、それは想像力を越えたものですからね。」

「大抵愛情は一人のもののみで満足します。それが出会いを容易にするのですね。一人の男は大いなる勤勉さで受け入れられるようになります。その時彼は自分の愛を押しつけることができるのです。しばしば女は愛されることで満足します。それは男が愛していない時には耐えがたいものです。」

「しかし愛情が共有されるということにもなります。」

「そこに神秘がありますね。」

「そんな場合は非常に稀なことなので話題にする必要もないかもしれませんが。けれどもすべてはこの社会ではあたかも例外がありふれているかのように生起するのです。共有されて永続する愛というものは結婚が前提としているものですね……。すべては素晴らしい例外のために作られているのです。」

「ところでミルクフの話をもっと続けてくれませんか。あなたは彼が一人の女性と出会ったと言われましたね。彼は幸福だったのでしょうか。」

「非常に美しかったこの女性は、ミルコフのある種の麻痺は最初の妻の怪しい魅力に由来するものと主張して、彼を自分の愛の力で大衆に知らせることを決心しました……。実際ミルコフはウィーンやロンドンで見られたのです……。私が彼のピアノを聞いたのはその時のことです。彼は回復していました……。少なくともこの女性が彼を愛していると信じていた間はそうでした。」

「その女は彼を愛してはいなかったのですか。」

「その点では私は何も知りません。彼は彼女が単に野心家であり、彼の成功と利益にしか興味がなかったことに気が付いたのです。彼女はコンサートを開くことにあまりに熱心すぎました。彼はまたあの恐怖……。指の病気に……。聴衆に対する恐怖心に襲われたのです。彼は再びあなたが今見ているような状態に陥ってしまったのです。二十年来彼の演奏を聞いた人はいないのです。」

「彼はこの失望をでっぴ上げたということはないのですか……。でもあなたの話はこういう事なのか。それがあまりに上手く始められたので私は一つの教訓を、少なくとも一つのシンボルを期待していたのですが……。」

「それはあらゆる話と同様に何の意味もありません。私は人から聞いた話を繰り返したただけなのです。あなたはそこから、ミルコフが何か悪い性格か肝臓の病気でも持っていたのではないかと推測することは出来るでしょう。これ以上のことを知るためにはいくつかの逸話を忘れて二人の存在の中に入り込み彼ら自身になる必要があるでしょう……。それですべてのことははっきりしてはいないのです。しかし若し私が、《彼らは互いに愛し合い、幸福だった》と言うなら、私の話はあなたには気に入ったものと言えるでしょう。実際それこそがどんな時でも真実の意味を持っているし、誰もが受け入れる唯一の話で

もあるのですね。」

II

二人はその近郊の使える家をすべて訪ねて回った。そしてジャンはその村から少し離れたところにあつた、ボナベルのものである山小屋を借りることに決めた。しかしその家はまだ塞がつており、彼らはそこに入るために十一月まで待たなければならないのだ。

「これは素敵だわ。」とポーリーヌは言った。

褐色になつた縦の木の古い仕切り、瀬戸物のストーヴで暖められたほとんど何の装飾もされていない四つの部屋、その部屋一杯になるほど大きなベッド、彼らにはそれだけで充分だったのである。彼女はろくに見もしないで直ぐに「素敵だわ。」と言つたのだ。そしてかつてはあれほどまでに重要性を与えていた物事に超然として、それからは装飾などにも無関心に感じる事が幸福だったのだ、すなわち家具の配置や絹の布の色や親しみ深いものの枠組みは実は何の意味も持っていないのだということである。しかしジャンは直ぐそばから隅々まで吟味し、部屋からの景色に感心したり、庭に下りて行き、台所を点検し、こっちの部屋に坐つたりあっちの部屋に坐つたりしたのだ。

「見てごらん、ポーリーヌ。」

「そうだわ、素晴らしいわね。」

泉の音はボーリースを不安にさせたのだった。「二、三週間もすればもう耳に入らなくなりますよ。」とボナベル氏が彼女に言った。

彼らの使用人のローズはある憲兵のフィアンセであった。彼女はとても優しく内気であつたが働くのにはあまりにも繊細すぎるように思えたのである。薪束をほごいたり、薪を割り、泉にバケツを持つて水を汲みに行くのはジャンの役割だった。朝になるとローズは台所のステップを上がつたりして二人を目覚めさせるのである。毎晩、夕食の前に両親の家に帰るのである。

長い間ローズの家は散歩の目的地であつた。テラスの中のきれいに熊手で掻き集められた葡萄の畑は小さな壁に支えられて、巨大な谷の底の氷結した湖水まで下つていた。昼間や時間や風に応じて湖は湯気で曇つたガラスや緑と黒の色の大理石に似ていたが、それは自由でひそやかで流動的で生き生きとしており、鉱物質の山々の麓に在つた。

「私はここにずっと住んできた人々は自分たちが一つの壮大な眺めの面前に住んでいるんだということを実感していたのかどうかを自問しているんだよ。」ジャンが言った。

「あの人たちはそれを知ってるわ。それにローズは別のところではきつと生きてはいけなと思うわ。その景色はあの子には単に美しいだけではないと思えるのよ。この眺めは彼女にとっては一種の魂の肉体的必要性なんだわ。彼女は呼吸するためにそれが必要なのよ。」

「ああ、そうかもしれない。」ジャンは微笑みながら言った。「それで私も安心した。ボナベルが私を動

揺させていたんだ。若し本当に私が泉の音をもう聞けなくなったら、そして若しその習慣が私の感覚に対してその様な力を持っているとするなら、自分の周囲のすべてのものは消えてしまうのではないかと恐ろしくなってしまうんだよ。」

彼はポーリーヌに快活な調子で、大きな生き生きとした身振りで話した。彼は家や風景や今まで見たこともなかった物に興味を持ったし、お使いに行くために嬉しそうに村まで行ったのだった。彼のユーモア、外部との接触、すなわち彼の表皮が修正されていたのだ。彼は初めて自分が子供のように思えたのだった。ポーリーヌは彼の内面の苦悩の感覚を、そして人生から受けた傷を和らげたのだった。彼女は彼が生きていくことを可能にさせたのである。彼はある種の従順な気持ちになつて彼女のそばに絶えず戻ってきたのだ。彼はいつもポーリーヌの声を聞き、それに頷き、うっとりして眺めていなければならなかったのだ。

彼の策謀の活動、際限のないお喋り、睡眠の長い安らぎ、これらの休息時間は一つの口実を持っていたのだ。つまり彼はスイスに休息するためにやつて来たのだ。時には彼は読書をしようとしたが、この習慣は失われていた。彼は怠惰というものの漠然とした科学を発見していたのである。

彼は悔恨に捉えられて、冬に二度ほどローザンヌのマルモンティユ医師の診断を受けに行ってきた。彼は自分が回復期にある患者であると考える権利があるということを確認したかったのである。

「本当に……マルモンティユは言った……若し私が私の友人のランドウジーの意見を知らなかったら、あなたは決して病気ではなかったと断言したと思いますよ。」

「あなたは断言することはできないのですか……。」

「私はあなたにいくつかの節制をお勧めします、それだけでいいのではないのでしょうか。あなたがレンスに止まっておられるのは良かったと思います。ちょうど健康的な高度ですからね。都会は何の価値もありません。夜更かしはいけません。窓を開けて眠りなさい。自宅には庭がありますか。少し庭の手入れをしたらどうですか。素晴らしいことですよ。しかしやり過ぎはいけません。気を付けてください。食事はゆつくりと取ることですね。そして食後は休むのです。」

「もし子供が出来たなら、遺伝するという危険はないのでしょうか……。」

「そんな考えは棄ててしまうことです……。あなたは病気ではないのですから……。でも子供はできる可能性はありますからね。」

ジャンは健康なのだと言得することは簡単であつただろう。というのは彼は自分が精力に溢れていると感じていたからだ。しかし《気を付けてください》という疑わしい言葉は彼を臆病にしていた。何も気に掛けず何をしてしまかまわないうような完全な健康というものは彼には禁じられたもののなのである。

ポリーヌは彼を無為のままにしておくためかのように、医者《気を付けてください》という大変不愉快な言葉を、それとは知らないで思い出していた。どんな努力をするにせよ、彼は行き過ぎを恐れていたのだ。しかし彼は食欲を持つて食べることができるので安心していた。

春になると朝九時にはポリーヌは、小さな袖付きの青と白の模様のあるブラウスを着て庭に下りてゆき、鉄の円テーブルの上に蜂蜜の一杯入ったガラスのコップや、薄切りした黒パンを置いて、主婦らしい重々しさでカフェ・オーレを注いだのだった。輝かしい空では軽やかな大気が薔がバラ色に鳴りはじめている満開のサクランボの大木と発育不良の林檎の木あいだに漂っており、垂れ込めた雲や遠く

の山々が作る穏やかなにわか雨の様になった暗青色の影の裾になっていた。

『少しばかりの庭仕事はいいものだ』という医者言葉はジャンにその小さな囲いの中に花を植えるという考えを思いつかせた。それにそこにはいくつかの小道の輪郭や花壇の場所が区別できたが、それは今なお雑草の下に土壌を膨らませていた旧い棄てられた庭の骨組みの様なものだった。

グリザール牧師の忠告に従って彼はその花壇を深く鋤で耕し、そこに肥料を運んだ。そして彼はカタログを研究し、柵越しに色々な家の庭を見るためにヴェヴェイまで下りていったし、えぞぎくやグラジオラスに感嘆したのだった。しかしそれらの植物は高価であつたので彼は種まきで満足したが、良い結果は出てこなかった。確かに土壌は欠点だらけであつた。土壌を改良するためには詳しい知識が必要である。彼は自分の欠点を理解し、最初の年の失敗をあまり感じなかった。希望は挫折の中にもあつただ。

彼を活気づけたのは花の栽培に対する突然の情熱ではなく、土地を耕す喜び、ポーリーヌが眺めるものを自分の手で作り、それを自分の計画に合わせるといふ喜びなのであり、単純な仕種や慎ましい期待にも多くの趣味を持つことが幸福なのであり、自分の祖母が言つた言葉『非常にわずかなものを深くエンジョイしなさい』、それは今でも彼には非常に正常なものに思われたが、それを彼は繰り返してゐたのである。

しかし種まきのために良く準備された鉢や小さな四角のプランターの中では覆いを掛けたり、水を撒いたりしたのだったが、質の善くない芝しか出てこなかった。その時無くなつてゐた種が小石の間で奇跡的に芽を出したのだった。秋に注意して植えた植物は春には姿を消してゐたのだった。

年によつては木の根や芽をかじる虫や寒さ、雨、日の光などあらゆる自然がその土地の隅に呪いを集中しているように思われ、雑草を抜いたり、あれほど手入れしても無駄だった。そして不毛のまま、花の咲いた牧場の中では黒い汚点になっていた。というのはどんなに厳しい冬でも、春が近づいてくると、雪が融けて、蒼白い草や泥だらけの道、とねりこの雑木林やグレーの葉っぱのカーペットが現れてくる時には、花が咲くのを妨げることはなかったからである。

緑の板になった新しい草が湿った坂道の上に広がっており短い茎の花々が咲き乱れている。それからそれらは急速に牧場の中を、黄色やバラ色や青色のシートの様になって上っていく。背の高い花々は小さく軽い草の中にはたくさんあった。一羽の蝶が羽を休めるためにその上に止まっている。突然コオロギの鳴き声が始まる。リンゴの樹はすべて満開である。ただ湖の蒼白い水面が、紫がかつた金属的な色に雪の割れ目を示している霧に包まれた山々の陰で、その光の突発から逃れているのである。

ジャンとポーリーヌが一緒に外出したときには彼らは前日に辿ったのと同じ小道を通って、しばらくの間は散歩の唯一の目的であつたように思われた同じ風景の方に向いていたが、それはいつも彼らに気に入っていたのに違いないのである。彼らはこうして毎日午後にはローズの両親の家まで出掛けたのだつた。それから彼らは別の道を取って、もう決してそこには戻らなかつた。彼らはそこからグリュイエールの平野が見渡せる森の方まで登って行つたのである。ある夏には彼らは毎夕、夕食後に外出して、村に通じている道を辿って、ピクテーのお城の前で立ち止まったのだつた。

道は、鉄柵が開かれたままになつており、捨てられたように思える庭園とお城を分離していた。そこには散歩者も庭師も見られなかつた。ただ巨大な樹木に縁取られた広くて真っ直ぐの唯一の道に貫かれ

た草原があるだけである。夕方には夜の闇よりも廣大で黒く、高く聳えていると同時に押しつけるような木の葉のアーチ、その巨大な幹、蜂蜜の香り、輝く雲の切れ間、直ぐ近くの湖の大いなる空洞などが沈黙と慎重な歩調を課しているのだ。そして時にはポーリーヌはジャンから遠ざかり、ただ一人で前に進んでいった。そして物思いに耽つていたり、放心状態になつたりして、漠然とした形や孤独や愛の夢想のためにのみ作られているように思われた小道の夜の様な闇のなかに姿を消したのだった。

..

グリザール牧師が、足を踏ん張り、瘦せて毛むくじやらの頸を出し、赤褐色の手を見せながら庭を耕していた時、そこには大地に慣れていて、農夫たちの悪徳を良く知っており、農夫たちの馴染みの者である男が認められたのだったが、彼はその霧がかかった大部分は湖の対岸の上で、純粋な白色の極めてはつきりした繊細なタッチでその稜線に嵌め込まれていたすべての頂を登っていたのだった。黒のモーニングを着て聴衆に囲まれているときでも、彼は荒っぽい調子で話し、聖書を道具のようにいじつていたのだ。彼にとつては宗教はどんな問題をも提出するものではなかった。宗教は絶対的な真実を、そして実際ので不可欠の規則を課するもののなのだ。

朝、太陽がその牧師の家に光を投げかける時にすべての窓が開けられた。街を通りすぎるときジャンはそこで光がガラス窓の上で輝いている誰もいない部屋の列を眺めたのだった。以前には子供がたくさんいたが今は廃用になっているこの大きな家には、グリザール夫人がいるのかどうかやと判る程だつ

た。彼女は非常に蒼白く、直ぐ息切れし、心臓病を患っていて、あまり動き回らず、今は不在であったり、遠くで身を固めていたり死んだりしていた子供たちへの思いに付きまとわれていた。しかし彼女は愛らしい微笑と眼鏡の下には美しい視線を持っており、すべての人には絶えることのない母親としての不安を隠していた。このようにして彼女は生涯を通して貧しさによる困難を包み隠していたし、決してお金のことは口にせず、あたかもどんな出費も彼女を困らせてはいないかの様だった。グリザール牧師はいつも活気で一杯のような風をして、彼女の病気のことを考えているように思われることなしに自分の妻に近づいたのである。その病はグリザール夫人が夜中に目を覚まし、枕に体を凭れかけさせて息を切らし、蒼白になってベッドの上に起き上がった時にはしばしば彼を苦悶の中に投げ込んだのだった。

ボナベルは頭を高くして、髭は伸ばしたままで、その少し疎らになった赤い葉が碧空に浮かび上がってみえた一本の桜の樹の側に直立して小さなケーブルカーの駅を見ていた。

「ボナベルさん、あなたはお客さんを守っておられるのですか。」ジャンは言った。

「そうです。三人を待っているのです。」

「私はグリザールさんに葡萄の実を分けてくれるのかどうか尋ねたんです。私はお宅のワインはどうも苦手なのです。しかし葡萄の実は好きなんです。グリザールさんが心配そうにしていました……。ええ、そうです。昔はたくさんの子供がいて、皆幸せで善良で正しい人たちだったのですがある日その家は空っぽになりました。今はもう二人しかおりませんし、やがて一人になるでしょう。そして時が少なからず判りにくくしてしまった未知の世界で絶望して死ぬことになるのです……。あなたは牧師さんの子

供たちを知っておられたのですか。」

「確かに知っていました……。美男子の男の子供たちは健康で、利口でした。その内の二人は亡くなっていますし、他の者は成功しました。彼らはドイツに……。そしてイギリスにいます……。その父親が立派に育てたのだと言わなければならぬでしょう……。彼は、すなわちグリサールさんは厳格でした……。娘さんは色々心配をかけたのです……。」

「娘さんが色々心配をかけたのですって？」ジャンは心配そうな面持ちでボナベルに近づいて言った。
「娘さんは子供だった時に体が丈夫ではなかったんですね……。そして高山に住むように言われたのです……。下ではいつも雨が降っていましたからね。彼女がすっかり良くなったのはここに來てからなのです。非常に若い時に彼女は一カ月ほど私たちのところに過ごしにやっ来ていたあるイギリス人の医者を知り合いになったのです。そして二人は結婚しました。彼女はアデンに出發したのです。」

ジャンはケーブルカーの車両の方に顔を向けたが、それは駅のプラットフォームと同じ高さの所に喘ぐような動きで止まった。

「さようなら、ボナベルさん。私は食料品店に行ってきます。」

《彼らは立派に自分の子供を育てた……！ 彼らは自分たちの運については疑っていない……彼らは安らかに死んでいくことができるのだ。》ジャンは考えた。自分の娘の思い出、不安、ある苦痛が彼の心に一杯になった。しかしこの悲しみを意識しながらも、彼はそれを抑制し、自分の肉体から追い払うことを思つて、自分の熟慮の下にそれを薄めたのだ。《アリーヌは自分の居ないことで苦しんでいるのだろうか。一人の子供を育てることは本当に可能なか。ポーリーヌは養育されたのではなかった。模範

的な家族の元で非常に注意して育てられたほどの子供が自分の両親を悲しませるということがあるのか。誰しも過ちを避けて未来に対して賢明さを吹き込むことを欲しているのだ……。まったく当然のこととして教育者を丸め込んでしまう空虚な言葉！ すべての子供は同じように育てられているのだ。彼らは同じ教訓を、同じ激励を受け取るのだ。そして一人一人は予期されない、独創的な人間に、そして一種の無政府主義者になるのだ……。時には社会から逃亡した独身者が生殖やあらゆる義務を拒否しているのだ！ けれども独身者に出会うことは全く自然なことだと誰もが思っている。それに彼らも両親があるのだ……。》

クギで掛けられた袋を取って、用心して大きなブリキの箱を開いている女の店主の動きを眼で追っていたジャンは口をすぼめて唇に湧いてきた微笑を抑えたのだったが、それは彼が、彼の目にとつてはピエール・セギュール氏がそこに具現されていた独身者というものを考えた時のことなのである。

セギュールは村の広場に向いて傾斜していた大きな瓦の屋根の下の二つの部屋をパン屋の家の中に借りて住んでいたのである。その店の入口のところでジャンは自分の買うものを読み返し、片手でコートの膨れたポケットを触ってみてから、買い物の包みを腕で持つてセギュールの所に上がっていった。

真つ暗な踊り場の後ろでは窓の前に投げ出されるように出くわしたが、そこからは視界を独占していた湖水が広がっており、それは一瞬沈黙と瞑想を強いるようなものだった。もはや木々の頂きと地面の襞の間から見える景色ではなく、その湖は完全なむき出しと形で少し目を眩ませるような空間の底部に広がっていた。

「バルヌリーさん、少しホット・ワインを飲みませんか。」

「喜んでいただきますよ。」とジャンは支那風の戸棚の横の安楽椅子に坐るために窓から目を逸らして言ったが、ピエール・セギュールは彩色されたクリスタル・ガラス製のグラスをその戸棚の上に置いていた。

ピエール・セギュールは自分の健康の為にレンスにやつて来ていて、体が良くなってもそこに止まっていたのだ。彼はその沈黙と軽率さと、目立たないが誇らしいその風采によって『作家』と呼ばれていたのだった。しかし彼は何も公にはしていなかったし、実際何も書いてはいなかった。ジャンが現代作家の名前を挙げると、セギュールは次の様に答えたのだった。

「私はそれを知りません……。いいですが、私は今日の人間を形成している全てのものの無というものを深いところで感じているのです。今の人間の関心事は明日にはその対象を、そして老いていくことになる極めて個人的なスタイルをも持つことはなくなるだろうし、その学問も忽ちのうちに凌駕されてしまうでしょう……。」

「現在というものはそれほど空虚なものでしょうか、私は例えば電気の発見というものだけではなく、それから延長された諸結果を持つている精神の傾向のことも考えているのですよ……。いいですが、私は今テーヌやルナンやドイツの学問が君臨していた時代のこと、そして人間のすべての感情や行動、生命などが軽蔑されていた時代のことを思い出しています……。その懷疑主義者たちは純粹な理知や学問、あるいはある種の自己陶醉の内のみ避難所を見出していたわけですね……。今日では若者は人生は一つの弁証法でなく、思想というものはその具象化の内においてのみ価値があるということに気付いています。そのちよつとした急激な変化は私の何と云つてよいのか判らない精力的なものによって翻訳されるので

すが……それはおそらくスポーツであり……国民的な感覚かもしれない……それを私は今世紀の初めてのころに位置づけたのです。そしてそれは非常に長らくこの地上に残る可能性があり、あなたが想像することが出来るあらゆる変動以上に重要なものであり得るというふうに考えているのです。」

「この活力の刷新、あるいは実際的な感覚のそれは本当にフランスにおける指標が感知されていますが、それはモロッコにおける我々の不安や労働組合の発達より以上に重要であり、この五十年間の間には人間性を少し変えてしまうということがあるかもしれません。しかし二世紀も後になればもう誰も理解できないような新しい語彙が出てくるかもしれません。」

「あなたは労働組合のことを軽々しく話されますね。それは無視できない新しさではありませんよ。」
「どの点で私がそれを無視できると考えているか、あなたはそれが判らないのではありませんか。」

ジャンは尊敬を込めた微笑を浮かべて同意した。というのはその誠実な無関心というものが判っていたからだ。ピエール・セギュールに興味を持たせるものは何もなかったからである。彼の心を動かしたり、単に悲しませることも出来なかった。彼は他の者たちの心を動かす苦しみや欲望や好奇心には無感であり、永遠なるものと繋がっているのだった。病気さえも冷たい東洋人の肉体を持つこのフランス人から遠ざかったのだと理解されたのだ。彼は一人の女とも、そして友人たちとも繋がりがすることは知られていなかった。彼は自分が想像から作り上げた友情しか感じるものがなく、突然二度しか会って居ない人物に熱烈で魅惑をそその手紙を書いたのだったが、それも束の間のものであった。その会話もしばしば中断されたが、互いに困らされることはなかった。というのは湖の反映に浸されたこの小さな部屋では沈黙は非常に満たされて大きなものとなったので自分のことも忘れてしまうほどだったからで

ある。

入り口の扉が音もなく開いて、若い安南人が忍び足で戸棚のところに滑り込んで来て、それから直ぐに姿を消した。

「あなたは自分の使用人に満足していますか。」

「彼は台所にいる時間が長すぎるんですよ。あまりに探究しすぎた食事を作ります。私が彼をその聖域から引き離して用足しにヴェヴェイまで行かせようとする、と彼は当惑して断るのですからね。彼は私に給仕するのは台所においてのことだと理解しており、彼が準備してくれて供されるものは私にとってはうまいものであったことはないのです。」

「彼はおそらく非常に考えた料理によつて自分が讚美したいと思つて、神に仕えているという感情を持つてゐるのでしょう。ただ一人だけの人間は比類ない威厳を帯びてゐるものです。若しあなたが、あなたに抵抗してゐる大きくなつた子供たちや一人の女によつて半ば影が薄くされた家族の主人であるとするれば、あなたはあの男の目には独自のもので壮大なる全能の局面を直ぐに失つてしまふでしょう。」

《孤独の者は神である。》と前日と同様に荷物の一つをセギール氏の所に忘れてしまふのを恐れて、ポケットを探つていたジャンが言つた。

人間の本性は抽象的である。人間は形而上学や絶対的なもの内では寛いである。人間は法律を作り、未来を予告し、樂園を創造するために作られてゐる。しかし彼は自分自身の身振りを自覚してはいない。彼は形式や色を、そして自分が置かれてゐる場所を、さらに自分が遭遇する人々を見ない。彼は

幻想の中に生きており、彼の感覚でさえも不確かなのだ。というのは大部分は習慣から来ているからだ。この様な反省は、《自分が愛していて、自分と家を共有する女性は生活のなかに現実的なものを導入する。ポーリーヌは自分が知ることが出来ない独立した個人として私に与えられているのだ。彼女は私に生きる者の複雑さを教えてくれた。》ということを言おうとしているのである。

彼はいつもポーリーヌの内に、透き通って見えるかのように、彼が自分の心から追い払い、敢えて見ようとはしなかったバルバザックの若い娘を見ているが、その追い出されたイメージは彼の心のなかに感動させるような、そして優美なものとして永遠に挿入されていたのである。けれども彼がポーリーヌと呼ぶ女性とは彼にとっては今日でも、見せかけで真実で、漠然としていて、矛盾に満ちたものであると同時に長続きするものであるのに変わりないような最初のイメージとは異なったものであるように思えるのである。彼はこの少しばかり沈黙気味で時には不安そうな顔をする現実のポーリーヌを予見できなかったのだ。しかしその新しい特徴は厳密な存在を形作っているのではない、それらは内面的な照明に従って変化するし、不確定の現実、生と愛の永遠の創造物を構成しているものなのである。

そして路上で、彼が自分の家に、そして極めて必要な次の刹那に、彼がいつも再会したいと願っているその女の方へ急いでいる時には、彼は急いでいる様子に気が付くのであるが、その限られていると同時に脆くて決して達成されない目的、そして一つの不完全な人間から自分の偶像を作った男の大胆さというものに感心するのである。

ローズは皿の上で玉葱を準備していた。ポーリーヌはオープン・レンジの前で腕をまくり上げて、使用人の前掛けを自分の服の上に掛けて、木製のスプーンで鍋の中でパチパチ音を立てていた肉のかたまりを裏返していた。彼女は窓から郵便配達夫をみとめて扉を開いた。そして鍋を火から離し、両手を拭いながらテーブルの上の四角い封筒を眺めた。彼女はマルセルの紫色のインクと気取った書体を認めた。彼女がバルバザックを出発してからまったく喜ばしい便りは何も来ていなかったのだ。彼女の理性に訴える手紙が初めは愛情のこもったものが、そしてその次はもつと簡単にされたものが届けられた。彼女を礼儀にかなった感情に引き戻すことが、そして風変わりの生活から引き離すことが望まれたのである。そして彼女がジャンと結婚したことは眉を顰められていたのであった。《私は許せない……とマルセルは書いていた……私は認められない……。あなたは似たような実例を私たちの間で見出したのですか。》

ポーリーヌは返事を出さず、もう手紙を待つということもなかった。今日マルセルは自分が近いうちに結婚することを伝えてきた。長い間躊躇つてから彼女は自分がその人に対しては確かな伴侶になれるラナタ氏と結婚することを決心したのであった。ポーリーヌはそれを知っていた。そして《私は決心しました。》という言葉が意味する全てのことを理解したのであった……。

長らく会わず、感情のズレもあり、無理解であったにも拘わらず、マルセルは彼女には親しい間柄であるのに変わりはない。ポーリーヌは、従姉妹のマルセルのデイドに対する恋愛の最中に、自身自身のジャンに対する感情の無意識の段階を辿っていた時のことをいつも思い出していた。

「郵便配達が来たのかい。」

「そうよ、マルセルから手紙が来たのよ。彼女はラナタさんとの婚約を知らせてきたわ。ひどい人だわ。」

「彼女は嫌なことは言っていないのだろうね。」

「でも私は判っているわ。」

「彼女はその人に愛せられるようになるよ……それに人生への興味も出てくるだろう……子供も出来るだろう。」

「確かにそれが彼女の希望のすべてでしょう。そして口実になるわ。マルセルは自分で色々な口実を探しているのよ。そして自分のために一つの義務を作っているわ……それは彼女の弱さなんだわ。彼女は自分の幸福を得るための勇気がなかったのよ……自分の苦痛を持つ勇氣も無かったのよ。」

「彼女の人生は自分の主義とは一致するのだろう……それは卑怯さだろうか……彼女はそこに静けさを見出すのだろう。」

「その通りだわ……静けさが多すぎるし……安易さも多すぎる……契約は忠実に守られるでしょう……彼女は生きてはならないものは押し殺してしまおうでしょう。」

「彼女のお父さんがデイドとの結婚に反対したのは間違いではなかった……。」

「お父さんは間違っていないかったわ……でも私だったらマルセルの立場ならば、自分の理由を主張したでしょう……もつと別の、もつと強硬な理由を……マルセルの諦め、私が目にした彼女の心の落ち込み、私が心を傷めた彼女の絶望、私の同情、それに私の反抗、その全ては今では私は以前よりもつと良く

判っているわ。彼女は困難な生活を恐れていたんだわ……自分の気持ちと一致させようとした生活が……。」

「困難な生活だって？」

「確かにそうだわ……義務の生活なのよ……それとも絶えざる予期しなかった束縛の生活だわ……ほとんど考え出された……今まで辿ってきた道とは反対の生活よ。」

ローズが丸い小さなテーブルに色模様のテーブル・クロスを広げた。ポーリーヌは袖を下げて前掛けを取った。手紙を読んだ興奮と暖炉の熱で活気づけられた顔をして彼女は大声で言った。

「食事しましょう。」

「しかしジャンは外にいた。彼女は大きなウールのケープを身にまとい外に出た。」

「食事しましょう。」

ジャンは風で冷たくなった両方の頬にキスをしてから、ケープの上から腕で彼女を抱きしめてから家のなかに入った。

ポーリーヌは炒りすぎた米に水を注いでから、それを乾かし、ローズを呼んでから、鏡のなかで自分の髪を整えた。

「私ね、あなたがブランケット酒にフランスの味を見つけてほしいのよ。」

「判った……とても美味しいよ……私はラナタという男が思い出せないんだよ。彼は確かに舞踏会に来ていたんだろう。」

「いいえ、あの人はまったく踊れなかったわ。あの人はバルバザックに親戚がいるのよ。そしてナン

の出身なの。目立たなくて不器用だけど利口な人だと思うわ。二人はリモージュに住むことになるのでしょうかね。」

「君はリモージュまでマルセルに会いに行くんだろう。」

「私は行きたくないのよ。あの狂人的な古文書の探りやさんに嫁いだ人、不自然なことをして偽装している彼女に再会するなんて……。」

「その男は古文書が好きなのかね。」

「彼は役人なのよ、そして古文書係なの。」

「ああ、そう。役人なのか。」

ジャンは「役人」という言葉をバルヌリー家やポンメル家に特有の調子で発音したのあったが、それは彼らが他の種族に属していると判断した者のカテゴリの前での階級的で反射的な行動なのだ。

食事の後でローズは太急ぎで後片付けをした。ジャンはストーブに近づき、両手を開いて陶器の熱くなった表面に押し当てて、狭くなった火口に薪を一本差し込んで、窓から外を見ていたが、それから腰を下ろして新聞を広げた。ストーブの横の敷物の上にうずくまっていたポリーヌは、ジャンの膝に頭を乗せて言った。

「新聞を読むのを止めてくだらないかしら。大したことは何も起きていませんわ。今日のコーヒーは上手く入れられたわ。」

ジャンは指先でポリーヌの首筋を愛撫していた。

「大したことは何も起こっていない……。これはピエール・セギュールの言葉だね。そうだ、コーヒー

は美しい……。気の毒なラナタ！ まったくお役人の生活は考えるだけで身震いしてしまうよ……。あの頻繁な転任は！……他人の生活はいつも痛ましいものだ……。しかし一人一人は自分の生活に満足している……。つまり各々は自分に満足しており、それですべてが上手く行くんだよ。それに誰もが自分が選んだのではないものに非常に上手く順応するんだね……。それが好きだと思い込むんだ。私たちがこの土地を選んだのではない、私たちは偶然ここにいるんだ。強いられることは良いことだ……。それで人は発見する……。そしてひきつけ合うのだ……。その選択が許されると、躊躇ったり、自分から拒否したりする……。若し私たちのために一つの国を選んだとするならば、スイスには来なかったかもしれない……。むしろ私はコルシカを選んでいただろう。」

「私はいま私たちが住んでいるこの土地を選んだわ……。少しありふれているけど気に入ってるのよ。若し私が一人の外国人にこの景色は美しい。」と言ったとすれば、彼は「この女は美しいものが好きなんだ。」と思うでしょう。ところがそうじゃないのよ、私がこの静かで不動で中庸のあるものの内に感じるのは、真実であるけれども、控えめで説明しがたい偉大さなのよ……。」

「その偉大さというのは非常に良く判るよ。この土地は幸福と同様に人工的なんだ。でもそれは壮大な人工性なのだ……。」

ジャンは黙って自分自身のためにその思想を補っていた。幸福の人工性とは、ポーリーヌに耳を傾け、彼女を見つめ、彼女を愛するある種のやり方なのである。もっと若くて過去がなければ、彼は彼女に別のやり方で近づいたであろう。もしかしたら愛情が彼を憔悴させてしまったかもしれない。彼は排他的な感情と愛撫の息苦しさを感じていたかも知れないのだ。

「それでも私はコルシカを選んでいたことと思うよ。」

「コルシカですって。」

「コルシカでは人々が偽名で暮らしているということを聞いたことがある。彼らはすべての人が知らない過去というものを棄ててしまったのだよ。彼らは自分の人生を別の署名でやり直しているんだよ……。」

「あなたは隠さなければならぬものは何もないわよ。」

「女たちは幸運だよ、彼女たちは結婚するとき、名前を変えるね。ここでは皆が私の名前を知っている。私は自分から逃れ出ることとは出来ないのだから。」

「あなたはあまり親戚を持っておられないわね、それにその人たちはあなたのことを気に入っていない様には思えないわ。あなたはあの作家のところへホット・ワインを飲みに行かずに朝この村を通りすぎることはないでしょう。そしてあなたがベニジェ教授とお喋りするとき、誰もあなたの話を止めたりはしないわ。」

「私はベニジェと議論するのは古くて自分にも良く判らない影響力、おそらくバルヌリー家の血が自分を逆上させるからなんだよ……私は自分でも驚くような激しい考えを持っているんだよ……人は自分が考えていることが何であるかを知らないんだ……。時にはそれに腹が立つことがあるだろう。いや、私を困らせるのはベニジェ教授でもセギールでもないのだ。私を当惑させるのはグリザール牧師なんだ。彼は私の過去を知っている。そしてこの点での彼の慎重さ、それを知らないような素振り、それに彼が《バルヌリー夫人によりしく。》と言うそのやり方、自然にしようとするその奇妙で、あまりに押しつけがましいその口調……。」

「若しあなたがその口調に気が付くとすれば、その口調は決して自然なものではないわね……。それにあの人はどうして他の皆と同じような口調で、『バルヌリー夫人によろしく』と言わないのかしら。」

「男には離婚することが許されている。結婚を壊してしまう様な重大な動機があったのだということが認められる……。しかしそれからその男が別の女と幸せになるとすればそれは面食らわせることなのだよ……。それは困ったことなのだ……。重大なことでもある……。この時にはそれは危険な実例となるし、無秩序へとけしかけるものとなる……。私を困らせるのは過去ではないんだ。現在なんだ。私たちはとても幸せであり、それは明らかなことだね。それで私はグリサール牧師の前では恥ずかしいんだ……。この気持ちには君には少しわざとらしく思えるかもしれない……。しかしいくつかの非常に微妙な印象というものが存在するんだよ。それらは田舎者たちにも影響を与えるが、彼らはそれが判っていない。それに気付くためには注意するか偶然が必要なんだ。若しグリザールが、あの奇妙な口調で『バルヌリー夫人にどうぞよろしく』と私に言わなければね……。」

「あなたはそれに今朝気が付いたの。」

「今朝のことなんだ、その発見が僕の注意を惹いたのは。それで話しているんだよ。おそらくそれはもつと古いものだろう……。ところで……私が村から遠く離れており、丘や日本の大きな桜の樹に隠されたこの山小屋を選んだ時に……。」

「私、マルセルに返事を書くわ。」とだしぬけにポーリーヌが言った。

ポーリーヌは吸取紙を捜してテーブルの前に坐り、ペン軸を噛んでから少し待って数行を書き、一枚を破り取ってから、突然早い調子で書きはじめた。彼女はその手紙をジャンに差し出した。そして相手

を傷つけるかもしれない一語を指摘した。彼女は四ページを書き直した。

「ポーリーヌ、今私が言ったことで気を悪くしなかったかね……。嫌な気持ちにならなかったかね。家族に心配させるのを恐れて自分を隠そうとするほど幸福に感じることは……。」

「私たちは愛し合っている人々を邪魔したりはしないわよ。」

黄昏時になって空は灰色の雲に覆われ、山々は青色の混じったバラ色のヴェールを被つてもつと近づいたように思われ、少し皺になった絹の布に似た湖にまで下っていたのだった。ローズはお茶をお盆に乘せて持つてきた。そしてポーリーヌは柄の長いフォークを取つてストーブの炭火の前で薄切りにしたパンを焼いたのだった。

「それを食べたら村に行つてこよう。君の手紙はもう出来ているね。ポーリーヌ、君は私が何も後悔してはいないことを良く判っているね……。私はまだ驚いているんだ、それだけのことなんだけどね……。私は幸福であることに慣れていないんだよ……。それは私には許されていない様に思えるんだ……。それが少し複雑であるけれど、それでも自分では忘れてしまふかもしれないその考えの意味なんだ……。」

「あまりに微妙すぎる考えには用心しなければならぬわよ。」

「あまり考える必要は無いのかね？」

「まあそうかもしれない……。」

「君の隣にしていると私はどんな考えも怖くないんだ……。何も恐れない……。自分の考えていることを言うことだつて怖くない……。」

ポーリーヌはカップを並べ、ストーブの周りのパン屑を取り除いてから、コートとウールの帽子と厚

みのある靴を身に着けた。

外に出ると冷たい空気に驚いて二人は頭を下げた。薄明かりの灰色の色調が原野を曇らせ、夜が足早にやつて来た。途中のハッキリしない道では人間の形をした黒い小さな塊が二人の方に進んできては絶えず様々なシルエットに変化した。自転車を押してくる男、籠を手にした小柄の女、郵便配達夫、グリサール牧師の大柄の姿などである。それは最後には二人に挨拶した隣の農夫のハッキリした特徴の下に現れたのだった。ジャンはポーリーヌの腕を取って、二人は物も言わずに歩いていったが、その確かな歩調と、互いに寄り添っている体の打ち解けて汲み尽くされることのない親密さによって結び付けられていたのである。

..

「ジャン、あなたは私と一緒に来ては下さらないの。」

「うん、一人で行ってくれないか、私は本を探しにヴェヴェイまで下りていくんだよ。それによくグリザール夫妻に会うんだよ。君も一度グリザール夫人を訪問しなければいけないよ。」

「私はもう人と話すことが出来ないわ。」

「バルバザックでは君はそんなに臆病ではなかったのに。いろんな訪問をしていたじゃないか。」

「今は違うのよ、私はあなたと一緒にいる時には、あなたを見つめているわね……。そして自分が言わなければならないことが判るのよ……。あなたは私を判ってくれるし……。ところが他の人は私を困ら

せるのよ。」

「さあ、行きなさい……。」

彼女は毛皮の縁無し帽と体にピッタリとしたコートを身に着けた。

「私を抱いて、そして勇気を与えて。」

彼女は階段を下りるためにスカートをたくし上げた。それから窓の後ろに立って彼女を見つめていたジャンの方に向いた。そしてマフ（両側から手を入れて寒さを防ぐもの）で合図した。彼女は小石にけつまずいた。《私はあの人の腕が無いともう歩けないわ。》

村に近づくにつれて彼女の戸惑いは増大した。若い娘の時には彼女は一人で大胆に何処へでも行ったのに、どうして今はこんなに臆病なのだろうか。彼女の歩調を遅くしているのはこの理解しがたい臆病さであり、別の女の前で一人でいたり、未知の視線や当惑させるような質問をする人に対して自分を曝したりすることの恐れであり、それはまるで彼女が通常の言葉や社会の諸習慣を忘れたり、突然余りに傷つきやすくなったように感じていたかのようだった。

牧師の家の戸は開いていたが、ポーリーヌは呼び鈴を見つけることが出来なかった。そして石畳の狭い回廊で彼女は足を踏みならして気付かれるように努めたのだった。

客間には多くのカーテンと肘掛け椅子の前には小さなカーペット、椅子の背にアププリケがほどこされたレースの四角いクッション、二重窓の傍らの緑の植木鉢などがあった。テーブルの上には花が描かれた装飾ガラスの額縁には写真があった。それは顎を取り付け襟の先で支えている善良で厳めしそうな男たちと裾飾りの付いた絹の服を着た女たちと驚いたような赤ん坊たちが写っていた。

厳しそうな素振りでグリザール夫人はポーリーヌに安樂椅子をすすめた。それから今度は少し息苦しうに体を真つ直ぐにして坐りながら彼女は凍傷で赤くなつた手を膝の間に窪みを作つていたタフタの黒の前掛けの上に置いたのだつた。

彼女はポーリーヌをじつと観察した。そして微笑が彼女の蒼白い顔と眼鏡に覆われた非常に優しそうな眼を明るくし、その上に過ぎ去つた魅力の反映を蘇らせていたのだつた。

ポーリーヌは視線を壁の方に逸らし、黒くて金の額の中に巻き毛の中のみずみずしい顔をしたすらつとした若い女を認めたのであつた。

「そうです、それは私ですよ。私があなたの様に若かつたときのものです。私の夫は私の隣にいます。……。そして五人の子供が生まれたのです。」

「子供たちからは良いお便りがありますか、奥様。」

「あまり度々はありません……。時々ぞんざいに書かれた短いものですよ……。」

「お子さんたちは別の心配事や繋がりがありますね。でも皆が幸せであることを考えなくてはいいけません。私には、母親としてはそれだけで十分であるように思えますが。」

「あの子たちが幸せであるのかどうかも確かではないのですからね。子供たちは何でも隠してしまうんです。あなたは私たちの長男がアフリカで伝導しながら死んでしまったことは知っておられますね。あの子はあちらで結婚し、私はその嫁も孫のことも全く知ってはいないのです……。あの子たちの手紙は箱のなかにしまつてあるのですが……。神は自分に奉仕させるためにあの子たちを呼び寄せられたのです。そして呼び戻されたのです。」

「娘さんはお元気なですか。」

「今はあの子は元気です、今アデンにいるのです。」

「天候は良くないのですか。」

「あなたもご存じのように良い気候の所などそうそうあるものではありません。ここは空気が美味しいですね……。あなたの顔色も……。」

「レンスは私には非常に気に入っているのです。」

「あなたは静かな幸福そうな表情をしておられますね……。あなたは幸せなんですね……。あなたの夫はあなたを愛していらつしやる……。あなたの旦那様があなたのことを話したり、あなたを見つめている時にそれが感じられるのです。……よく私はこの窓からあなたたちお二人が揃って通りすぎて行かれるのを拝見いたしますわ……。あなたの中には、何と言ったらよいのか、何か人の眼を止めてしまい、人の心を動かす光のようなものが……。在るんですね……。」

「幸福はむしろ不安にさせますわ……。そして嬉しい力を感じさせます。そして永遠であると同時に非常に脆いものであるような何かの前での心の苦悶のようなものを感じさせますが、それはあまりに脆いので敢えて口にするのも憚られるようなものなのですよ……。それらの言葉は人を恐れさせるのです……。それらの言葉を発音してはならないのです……。」

ポーリーヌは自分から思わず漏れたこの告白、そして自分が今までまったく意識したことがなかったけれど、突然この未知の女の前で現れたものだったこの考えで驚かされて顔を赤らめながら素早くこれらの言葉を口にしたのだった。

以前は彼女のすべての考えはジャンに導かれていた。今ではそれは彼からやって来る。彼がそれらの原因であり、彼女はそのことをいつもその唯一の伴侶には言うことが出来ないのである。彼女はしばしば自分自身の心の中に入っていくことも恐れているのである。彼女は自分の喜びや苦しみを口にしないでした。そして自分の思いを押し殺しているのである。情熱や第一の確信も、外部のものや様々な出来事、そして特に過去に対するちよつとした戦いから出来ている現実の中で次第に消えてしまったのである。しかしいつも彼女は最初の信念の内に、その力を再び見出している。彼女は自分たちの愛情を疑ってはいない。彼女はジャンが決してナタリーを愛したことが無かったことを知っている。しかしだからこそ彼女は彼の心のなかの苦しみの思い出を恐れていたし、憐れみや、おそらく最も持続すると思われる愛着やひどく抵抗する感情の世界を形成する良心の咎めなどを恐れている。というのはそれらはその人自身の肉体から引き出されたものであるからであり、それはその人の作品であり、その精神の肉面的な創造であるからであり、それに比べれば愛情の魅惑や喜ばしい現存はぼんやりと、断続的にのみ感じられるものであり、心を捉えることはあまりないものであるからである。

..

偶然ヴェヴェイの書店でジャンは体育についてのマッソンの論文をめぐってそれを買った。彼は過度の運動や疲労、息切れなどが毒素を排斥させ、血液を豊かにすることを学んだ。つまりあらゆる病気は筋肉の緩みから出てくるのだ。ジャンはその衛生学者の概論によって征服されたのだった。彼は速

く歩いたり、一瞬走ったりした。そして心臓をどきどきさせ、息を切らせながら、激しく吐き出した呼吸の中に、自分の体内の毒素を吐き出す喜びというものを味わったのである。しかしポーリーヌが彼の信じるものを共有することが、そして彼女が彼と同じように最悪の疲労の内で真実を所有する幸福と喜びを感じるということが必要なのだった。彼女が床の上に裸で横になった時、彼は彼女が胴体を真っ直ぐにしている間、片手でそのお腹に押さえつけ、柔らかくて丈夫なその美しい体を見守っていた。

「立派な筋肉の腰、それが基本だね。」

その冬は二人は毎朝ヴェヴェイまで下りて行き、河岸の縁に集められた小舟の中から一つのボートを運び、湖水の上で一緒に漕いだり、凍った水のなかに飛び込んだりしてから、敏捷な足取りで山を登ったのだった。

「何て体が浄化されて軽やかなんだろう。そうは思わないかね、ポーリーヌ。とても快適だよ。それなのに風邪をひいている不幸な者たちもいるんだね。」

彼らは大いなる食欲があった。しかし野菜しか食べなかった。山への長い散歩のためには彼らは干し葡萄といくらかの巴旦杏を持っていた。

ある朝、白くて濃くて動かない霧煙がガラス窓を覆って、雪明かりが部屋部屋を明るくしていた。家の周りではウサギ小屋の屋根や霧氷で覆われた桜の樹などが区別できたが、直ぐ近くの山々は濃い霧に隠れていた。

「この霧ではヴェヴェイまでは行けないでしょうね。」ポーリーヌが言った。

「美しい霧だね。綿のような……。勇氣を出そう。一度でも負けたら……それに悪天候の内でこそ努力

が味わい深いんだよ……。帰りには私たちは元気になっているのが判ると思うよ……。」

「そうね。」とポーリーヌが元氣良く言った。「行きましょう。」

二人は暗くなつた足元の小道を下りていったが、そこはきらきら光る水晶の様な苔で飾られた小枝と氷の綿毛で覆われた葡萄の株の間にあつた。彼らの周囲では、白い霧の帳の壁が、樹々の木立を包み隠してしまふ時に暗くなつてしまふように思われた。あるいは水蒸氣の丸天井が大空で細くなつており、そこで太陽が丸い月の様になつて現れているきらきら光る輝きで明るく光つていた。

湖水の縁のプールの前でポーリーヌが言つた。

「今日は水浴を止めておくわ。この氣持ちの悪い水は私を震え上がらせるのよ。私、霧でびしょ濡れになつたんだから。」

「それは短期間の苦しみだよ。その後では人は逆境を克服してきたし、あらゆる麻痺を征服し、体は暑くなるんだ。今朝は誰も水浴びをしていない。この辺りの人たちは生き方を知らないのだよ。」

「私は水浴びはしないわ。」

「君は後悔するよ。今に何かが足りないようになる……。私たちはケープブルカーを待つことは出来ないだろう。良識が私たちに与えてくれた心の弾み無しに道を登つていかなければならないだろう。」

「あなたは水浴びが出来ますわ。私はここで待っています。私は公園の木の下を散歩していますわ……。あの陶器の様な枝を見てご覧なさい……。」

「若し君が水浴びをしないのなら、私もそれに固執はしないよ……。残念だけどね……。」

彼は自分がこの水浴を望んでいるのかどうか、あるいは彼の楽しみはポーリーヌがそれに満足してい

るということから来ているのかどうか、そして自分は彼女によつてここに連れてこられたのかどうか、それとも自分が彼女を引つ張つてきたのがもう判らなかつたので躊躇つたのだつた。そして一つの疑念が彼の過去の喜びの上に襲いかかつて来たのである。」

「君は後で後悔するよ。」とジャンは言つた。「水浴びは君に山を登るための力を与えてくれたんだよ。」

「私たちはゆつくり帰りましょう……。」

二人は小道をよじ登つた。そして時々立ち止まつては淀んでいた霧に包まれたり、黒い小石の方へ眼を落したりしたのだつた。

「私たちは何処にいるんだろうか。」ジャンが言つた。

「判らないわね。おそらく半分くらいは来ているわよ。目的地が判らないと途中の道のりがもつと長いように思えるのね。」

ジャンは唇を結んで疑い深い眼で彼女を見た。それから黙つてまた歩きはじめた。

突然彼は言つた。

「私たちはもうヴェヴェイへは行かないことにしよう。行きたくないんだ。君が疲れてしまふしね。」

その突然で、ほとんど辛辣とも言えるような調子と、変化した顔色に驚いてポーリーヌは一言も言わないでいたが前よりも速く歩きだした。

家に帰るとジャンは氣詰まりな印象を感じた。彼は外に出て、薪を破りはじめたが、それはまるで自分の体の中の有り余る力を、そして怒りになるほどに集められた興奮をすり減らしてしまうためかのだつた。彼はポーリーヌに關しての最も軽い憤懣でさえも、ほとんど不当なもので感じられないもので

あつても、急速にある種の許しがたい幻滅になり、自分の内面に破壊的で残酷で攻撃的で際限の無い批判精神を生ぜしめているのに気がついたが、それはまるで愛の力が突然向きを換えて、同じような激しさで反対方向に破壊の仕事を追求しているかのようだった。

ポーリーヌはケープを身に着けてジャンに近づき言った。

「もうその位にしておいて下さらない、家に入りましょう。」

陰鬱そうではあったが従順で分からず屋の子供のようにして彼はポーリーヌの言うようにした。

「あなたは休まなければならぬわ。それは必要だわ。」

彼はその断固とした言葉に従い、ベッドの上で横になった。彼女は彼の上に毛布を掛けて頭の下には枕を置いて、手をジャンの両眼の上に置いた。

「そこに動かないで何も考えずに十五分ほどじっとしてるのよ。それから本を一冊持ってきてあげます。あなたは運動しすぎなのよ。散歩も息切れも水泳もお預けよ。そして今朝はカツレツを食べるのよ。」

彼女がジャンの側に戻ってきた時、ジャンは愛を込めて彼女を眺めたのだった。

「あなたはもう顔色が良くなってるわ。」ポーリーヌは言った。「すべては馬鹿馬鹿しいことなんだわ。」

「そうだね。」

「ほんとにそうよ。この夏はたまに湖の側に行くことにしましょう。そして適度な運動をすればいいのよ。」

「そうしよう。」

「ここに本を持ってきたわ。まだ起き上がっては駄目よ。直ぐに呼びますからね。」

ポーリーヌは台所に戻った。そしてピクテの城の鐘の音が聞こえた時、彼女は部屋の中に入ってきた。「お食事の準備が出来ましたよ。」

テーブルではジャンはカツレツがどんなに気に入っているかを口にするにはしないで黙っていた。

「これは程よく揚げられているね……。今日は少しワインを飲もう。何か物足りないからね。」

「ローズのワインがあるわよ。」

「それはとてもいい。ローズのワインにしよう。グラスに半分でいい……。バルバザックからは何も手紙は来ていないのかい。」

「ええ。」

「消息などはないでもいいんだ。別に変わったこともないんだよ……。マルセルは結婚したのに違いないけど……。」

ポーリーヌは林檎を切った。

「人間は愛し合っている時には、その訳がはっきりと判っているのかしらと思うのよ。」

「ハッキリとかね、そんなことはないだろう。君にその様な考えを吹き込んだのはマルセルなのかね。」

「それは本当に私が自分で考えたのよ。誰もそれは知らないわ。若しそれを知っているとしても、それはもう感情でもないし、好みでもないわ。」

「感情というものは非常にハッキリしているというのではないよ。かといってそれは全く盲目なのでもない……。一つの好みは正当化することは出来る。コニヤックを味わいながらフィリップ伯父さんは自分の特に好きなものを非常に上手く定義しているし、ハッキリとその特質を認識していたんだよ。」

「コニヤックについてはそれは確かね。それにいろんな法則があるのね。感情が問題となると全く別だわ。人はその長所があるから自分の子供を愛するのではないのね。自分の子供であるから愛しているのね。自分の妻であるからその妻を愛するのね。」

「いや、違うよ……絶対にそうじゃないよ。」

ポーリーヌは立ち上がった。

「私が言いたいのは以前に彼女を愛したから、そして彼女を選んだからだということなのよ。自分の選択というものは何かにつけて証明されてはいないのだから。」

「どうしてそんなに興奮しているの。君は何が言いたいの。」

彼女は唾のように口を噤んだ。

「私、自分が言っていることがよく判らないわ。他のことも……。しばらく前にあなたはグリザールのことについても私を心配させたわ……。私はその時、私たちの生活は一つの選択の上に基づいていることを感じたのよ……。おそらく無思慮な選択の……すべての選択は無思慮なのね……人は必要なものだけを受け入れるのね……。」

「その受け入れ、つまり諦めは美徳ではあるが、土壇場の時のものだよ。それまでは自分にとって、そして他人にとっても高貴であるのはその要求なんだよ。つまり例えば愛情の根底にあるあの永遠の要求の様なもの、幸福を求める人間の競争心、我々からあらゆる満足の可能性を取ってしまう人生への厳しさ……こう言った要求なんだよ……。」

「怖いことを言うのね。人生とか幸福、これらの言葉のうちで私は狙われているように思えるわ……。」

私はあなたが余りに要求が多いということが怖いのよ。」

「心変わりしないこと、それが私の愛における第一の要求なのだ。そして現実満足することを知ることなんだよ。君は判ってくれるね、私の要求は君にとって好都合のものなんだよ。」

「それは本当なのかしら……。私を身震いさせているのは以前の人なのかしら。今日の人間でしょうか。彼らはとても違っているわ。今あなたは私以上に人生を信じているのね。」

「私はもう在りし日の人間のことは考えていないんだよ。おそらくその様な人間は存在しているだろう。私はそれを上手く解決するよ。どんな人間の内にも少しの混乱は在るんだよ。私も様々な主義を持つていたがそれを忘れてしまったんだ。それにいろんな苦痛を感じていたが、それも今は感じないんだよ。その全てのものが私の知らないうちに多少は生き残っていて今日の自分を形成している。そしてその全てのものが無ければおそらくこれほどまでに君を愛することもないだろうと……。」

「若い人たちはお互いに選びあったりはしません。互いに捉え合うのよ。その外は人生がやってくれるのよ。あなたには意志に基づく行為、一つの判断の後に続いて、おそらくそれを後に引きずっている一つの判断があるわね……。私たちはその決定を絶えず正当化しなければならぬわ……。そしてそれはいくつもの犠牲を作り、痛ましくて……。最も執拗な思い出によって生き残る一つの過去をひとまとめするのね。そしていつかあなたはこんなに苦勞するには及ばなかった、……。女というものは皆同じなのだ。」と考えるようになるんだわ。それは本当だわ、いつかは女は皆同じようになるのよ。私は自分の足元ではこのしっかりした土地を感じていたいよ、その上で他の人たちはいつも諦めに身を任せながら、自分がどうしてそこにいるのかをハッキリは知らないで立っていたのね。でも私は生まれつきの過失に對

するかのように、《あなたがそれを望んだのです。》というあの考えにぶつかってしまふのよ……。あなたが私を愛さなくなれば、私が誤ったことになるのよ。」

「その選択は実際重い行為なんだよ。そしてそれは極めて稀なことだけれどね。しかし本当の選択の内にはその人間全体を引き込んで仕舞う大きな力がある……。私は安心している……。今では君の上には君の力を凌駕しているいろんな責任が懸かっているんだよ……。君の敗北は私のそれでもあるんだ……。世界のそれでもあるし……。私はそれを愛情の敗北と言いたいのだよ。」

「それはいつかは死ぬことになる人間にとつてはあまりにも大きな負担だわ。」

「敗北になるのは君の死ではない、私の選択を拒否することなんだよ。」

まったく動くことのない霧が、その部屋が暗くなつていくのに従つて一層明るくなつた分厚いモスリンのカーテンのように窓ガラスを覆つていた。ポーリーヌは坐つて、編み物を始めていたが、心はジャンの言葉によつてではなく、彼女が今までそれが出来るとは思いもしなかつた自分自身の打ち明け話によつて穏やかな気持ちになつていたし、内面的に元気づけられていたのだった。

彼女は編み物を置いて言つた。

「ローズが直ぐに帰るのよ。食事の前にあの子と一緒に下着用戸棚を片づけておきたいわ。それに三日前からめちやくちやになつてゐる私の筆筒もね……。あなたはフィリップ伯父さんの家の三階の廊下に置いてあつたダイヤモンドの留め金の付いた戸棚のことを覚えていらつしやるかしら。いいえ、あなたは見たことがないわね。アンネットがそれを開けた時私は目が眩むようだったのよ。積み重ねられたシート、それに一ダースずつ赤い飾り紐で結ばれたテーブル・クロスが入つていたの。毎日のために、そし

て内密の晩餐のために、更に豪華な大宴会のためのもののね。そのテーブル・クロスにアイロンをかけるのには二人がかりだったのよ。フィリップ伯父さんが私に下さったテーブル・クロスがアンネットが言っていた様にきれいに積み重ねられているのを見るのが好きなのよ。」

彼女は大きな前掛けをして、その中に洗濯女が台所に置いて行つたテーブル・クロスを詰め込んで、シーツを手に持ったローズがその後についていった。ジャンは彼女が部屋と廊下を行ったり来たりするのを聞いていた。彼はコートを着るために部屋を出た時、彼女が髪の毛が目に入ったりして、椅子の上に立つて、両手を上げたり体を曲げたりして甲斐甲斐しく働いているのを目にしたのだった。

「ジャン、ベッドの上にあるシーツを取ってくれない。」

彼は真面目な顔をして忙しそうに髪の毛を遠ざけて屈み込んでいるポーリーヌにシーツを差し出した。彼女が一番上の棚に手が届いた時には腕がピンと伸びて乳房が盛り上がったのだった。ジャンは彼女を見るために目を上げた。安心感とか人を魅了するような精神的な安らぎの感情が彼女の仕種から立ちのぼっていた。《彼女は女としての役割というものを弁えているな。》と彼は考えたのだった。

ポーリーヌは両手をジャンの肩で押さえて椅子から飛び下りた。

「これで済んだわ……さあ、今度は私の筆筒を片づけなければならぬわ。」

「私はモンタンベールの農場に玉子を買に行つてくるよ。六つほどくれることになっているんだ。あそこにはワインを飲む驚くようなめんどりがいるんだよ。」

「こんな霧の夜に外出するのは止めてくださらない、それは考えがないことよ。」

彼は扉を開けて庭へ一歩出た。

「私は三十分ほど急がずに街道に沿って行く積もりだよ。ほら、ごらん、不思議だよ、確かに少し月明かりがある。夜なのに白い霧のなかに人が出ている。」

ポーリーヌは部屋に戻って筆筒の引き出しを引き抜いてそれを引っ繰り返した。そして彼女は先ず手袋を整理し、横には彼女がヴェールとハンカチとの間に取っておいていたアイリスの根の芳香のする紙袋を置いた……。

ジャンは道端のほとんど消えた明かり、窓辺の黄色くてぼんやりした光の方へ進んでいった。彼は扉をノックしてそれを開き、小娘が渡してくれた籠を手にとった。その台所に繋がった家畜小屋では農夫たちのぶつぶつ呟くのが聞こえた。ジャンはその道を進んでいき、家に帰るための近道を通った。

彼はちよつと進んで立ち止まった。そして道を嗅ぎつけるのである。彼はもう灌木の茂みも、白っぽい闇のなかの鈍く輝く水晶の樹氷を帯びた樹木も見分けることができなかった。その小道は黒くて正確な痕跡として見えたが、あまりにも短すぎるその見通しは彼を不安にさせたのであった。彼はその道が上りなのか下りなのかが判らなかつた。方向感覚はもつと高いところから来るものである。それは遠くの指標や水平線の標識など、航空管制のシステムを想定する観念なのである。彼は雰囲気感覚を再発見すること、空間の指標を、周囲に秩序を確立している印を捉えなおそうとして、湖水や溪谷に決まつた場所を与えるのである。しかし彼は綿の壁や枝の幻影にぶつかるのだったが、それらは彼を現実の直接的で解読できない狭い空間に閉じ込めたのである。彼が探していた家は混乱した世界の中に浮遊していた。それは直ぐ近くにあつた。そして可能などの道を通つても逃げてしまうのだった。

白の珊瑚の茂みが霧のなかから浮かび上がっていた。彼は凍りついたこの明るい、反射の中で時間を見るために時計を取り出した。おそらく彼は家を通りすぎてしまったのだろう。もうかなり永い間歩いたのだ。しかし彼は自分の後ろに行き止まりになっていて知らない道を感じて後戻りをするのが怖かった。多分この道はどこにも行けないのだろう。けれどもじきに夜は終わるだろう。最悪の場合にも待っているだけでよいのだ。しかしポーリーヌはどうするだろうか。耐えられないのは自分の周りに霧に閉ざされた空間を感じて身動きせずに待つという諦めの気持ちなのだ。歩いて前進して、自分がそこでもがいている蜘蛛の巣から自分を解放しなければならぬ、それはその白い糸の中で自分を盲目にして息詰まらせているのだ。

その小道は下りになった。ジャンは走るようにしてその斜面を下った。一つの明かりが見える。突然明るくなった空間の中で様々な物が自分の場所を取り戻している。彼はシエクスブルに来ていたのだ。街道を通れば彼は九時には我が家にたどり着くだろう。直ぐに彼は大きな疲労を感じた。霧が晴れた道を歩くこの時は最も長いものに思えるだろう。

彼は見るともなく、彼は我が家の庭の小扉を認めた。しかし彼の家は霧の中でしかめ面をした影の大きな塊の様になって街道からはいともよりも離れているように思えたのだ。直ちに入り口の扉を開けて彼は家のなかが空っぽであるのを感じた。ポーリーヌは慰めを求めてグリザール牧師のところ避難しているのに違いなかった。彼は自分たち二人の食事の皿が置かれていたテーブルの上から果物を一つ手に取ってから、家中の入り口の扉を開けた。部屋にはベッドの上にポーリーヌのブラウス、部屋の中央に投げ出された彼女の靴、彼女の髪の毛の絡まった櫛などが目に入った。アイリスの香りと瀬戸物

のストープの中の燃える薪の匂いのする暑苦しさを感じられ、活気づけられ愛撫する沈黙の様に空中に女性の漂うような存在が感じられた。彼は《自分は一人の女の側に住んでいるのだ。自分はここでは自分の家にいるのではない。彼女が家全体なのだ。》と自分に言い聞かせた。

彼はまた町に出ていき、グリザールの家の呼び鈴を鳴らした時、ポーリーヌが敷居のところに走り寄ってきた。

「あら、……ジャン……。」

「馬鹿なことをした。……彼は言った……私は霧のなかで道に迷ってしまったのだ。道を間違つてシエクスブルに行つてしまったんだ。」

恐怖と幻影は一言で消えてしまった。そしてグリザール老夫妻の前でポーリーヌは自分の感動を抑えたのだ。彼女は静かな調子で言った。

「私、グリザール御夫妻をお邪魔してたの。悲しかったのよ。それでもう家には居られなかったの。」

「奥さん、私たちのことを考えてくださったのはいいことでした。話し合っていれば不安はなくなるものですからね。私は言つたでしょう。あなたの御主人はシエクスブルに通じるベルリュッシュへの道を行つてしまったのだと。そこから帰るのは九時になるだろうと。」

「君は長い間ここにお邪魔しているのかい。」ジャンは静かな声で言った。

「今来たばかりよ。」

「それじゃこれから帰ろうか。私はお腹がすいているんだ。」

通りでは元氣そうに彼はポーリーヌを腕で抱いた。

「何という悪夢だ……とうとう君に会えたね。」

あれほどに望まれていた目的は、達成されたにしてもその価値が無くなるわけではないのだ。希望を持つていた時と同じように今も望ましいものであるのに変わりはないのだ。

..

「二人の女を愛すること、それは幸福なことである。♫ジャンは思った。一人の女によってのみ人は生に執着する。そして一つの現実の対象を捉え、美を知り、存在理由を持つのである。しかしこの愛は、女性がその優しさ自体によって支配するためには、それを受け入れるのに適した心と完全な服従を予想しているのである。ポーリーヌは決して誤ることはないだろう。そして決して老いることはないだろう、彼女はいつも最も魅力的で、最も賢明で、最も高貴であるだろう。彼女は何も強制することはない。その力はジャンからやって来る。彼女はジャンによってのみ存在する。その自己放棄、その創造、それが愛なのである。」

彼女は家の中で君臨し、全権を持ち、予言者なのだ。しかし男は完全に消えるのではない。自分が盲目にされ、縮小され、満足させられたように思えるこの愛において彼は存在するのを止めるのではない。彼はなおも捜し求め、自分が愛しているのか愛されているのかは確かではないのである。彼は自分が幸せであるのかどうかを疑っているのだ。出口のない対話が始まるが、そこでは各々は自分のために語り、他方の内に自分の弱さを、人間の恐るべき複雑さ、様々な存在の深淵、恐るべき要求無しに愛すること

の不可能を認めるのである。

ジャンはたちまちこれらの反省から解放された。そして諸々の感情と思想の深化は無益な旋風を誘発している。愛情の危険、それは自分自身についての瞑想、そして精神の興奮へと導くことであるが、それは我が身を汲み尽くしてしまうような洗練への道程を開くことになるのだ。

モンタンベールの農場の傍らでは石切り場が山の横腹を剥き出しにして見せていた。そして腐食土の薄い層と岩石の測り知れない不毛の深さが認められる。それは死んでいる地球の表面にあらゆる生命を生み出す微細な大地の薄い膜なのだ。《生命は表面だけのものなのだ。》とジャンは考えた。この言葉の戯れは彼にとつては余りにも鋭い思想の必然的な迷いを呼び起こしたのであるが、その思想は現実の狭いが肥沃な領域を凌駕しているのである。そこでは凱旋する生が……執拗な生が、忘れっぽく軽率ではあるが、反対し合うものとして二つに別れたり、軽く触れたり、消去したりして、すべてを宙ぶらりんにして残すのだ。

一瞬ポーリーヌから身を反らして気持ちのいい無頓着を再発見するために彼は歴史の本を読みはじめた。編み物をする女たちの知恵。彼はその知恵が自分を撥ねつけるが故に、この研究仕事を選ぶのだ。彼は広大で無味乾燥の労苦によって気を紛らせることを意図したのである。彼はフランスが東洋やイタリヤ、スペイン、イギリスから借りてきた習慣や事物の目録を作成しはじめた。しかしそれらの記録の中に彼は人間や一つの証言、声の調子しか求めることはなかった。彼はフランスの歴史の初めの数世紀以来ほとんど変わることが無かったお馴染みの典型に気が付いたのだった。最も暗黒の時代に、それが自分の苦しみにならないかぎり、この世の快楽から逃亡した隠者……それはあらゆる時代の禁欲主義者

たちの秘密なのだ。その誇り高い男爵は極めて子供っぽく、騒々しく、略奪品で生計を立て、一層良く聞うために名譽心を案出したのだ。彼にはロマネスクな奥方がある。そして嚴肅なるモデルから好色の韻文を作成し、それを後世のためにラテン語で書いた人文学者、そしてジャン・ル・クーロンの日記の中で初めて自分の言葉を聞かせたいいつも変わらない農夫なのだ。ジャン・ル・クーロンは不便な交通手段や不景氣、收穫が無いときの極端な悲惨さなどについてこぼしているのである。ジャン・ル・クーロンは生涯を通じて自分の畑の上を国王の兵士たちが、更にドイツ人の傭兵たち、スイス人、イギリス人、バルム公のエジプト人の兵士、金の首輪の身に着け、自分たちの軍隊の後ろには五千人の女たちを引き連れているスペイン人の兵士たちが通りすぎるのを見たのであった。

中世の職人たちの群れの中で、浮浪人たちに囲まれて対照的に目立っており、どんどん大きくなっていくこのブルジュワの風変わりな姿が現れてくるのが見られるのだ。この人物は非常に興味深いのである。彼は人々がいつも主人を持っている封建的な土壌からは逃れて、隠し持つことが出来るお金と、人に知れないで過ごすことが出来る町への自由というものを要求するのである。独立した存在として、慎重で、本心を見せない彼は安全さを愛するが、危険を冒して人生を生きるのである。出無精でありながら、現実では様々な危険を冒しており、その世界を自分の企てで覆っているのだ。そして最後に自分の安楽と静けさを愛する者として、自分の最良の避難所で、隠れ家である自分の家庭と子孫を強化した彼はそこに愛情を導き入れたのであった。

∴

あるタベのこと、黄色とバラ色で彩られた夕日の面前で、黄色とバラ色ではあるが刺激的な炎がまるで生き物の様に、一種の血の进りの様にその大きなホテルを包んだのだったが、それは村の上手に建設されたものである。その屋根は猛火の中でじゅうじゅうという音を立てており、炎の噴射が鎧戸を突き破って窓から飛び出していた。ただ不動で冷然とした壁だけが建物の形を保っていた。

翌日になってジャンはポーリーヌに言った。

「焼け跡を見にいつてみよう。」

ホテルは全部が残っていたが、一夜の騒ぎの後はずっと空っぽになっていた。群衆さえも居なくなっていた。

「私は先月あそこを訪問したんだよ……ジャンは言った……支配人が部屋を見せてくれたんだ。浴室付きのツイン・ルームは美しいものだった。フランス人の夫婦のためにはベッドが一つの部屋が三つあると言っていたんだ……ジャンは言った……それじゃあ帰ろうか。」

「私、この小道を通って牧場まで行ってみたいわ、水仙が見つかるかもしれないわ……」

「そうだね、フランスの夫婦のためにはたった一つのベッドが必要なんだね……」ジャンが繰り返した……。「フランス人のやり方は正しいのだろうか。私は一人一人が数時間自分自身に帰ることが出来る夜の避難所として別々の部屋を持ったほうがいいんじゃないかと思うんだけど。判ってくれるかね。別々の部屋はもう愛し合わなくなった時には無用のものだし、苛立たせるものだよ……。問題は愛し合って

いるときのことなんだ。」

「いいえ、私は別々の部屋は嫌よ。」

「それじゃあもう少し弱めた言い方に見よう。私は二つの点で様々な良い意見を持っているんだ……。尤も疑っているんだけど……私は自問しているんだ……君にも質問しているんだよ……。」

「私は確かだわ、そんなことは望まないわよ。」

「どうしてだね。」

「私には判らないの。」

「君は明らかに判っているよ。」

「いいえ……でも私は何の疑いも持っていないのよ。」

「君には言いたくないような理由があるんだね。しかしその理由は私に興味を起こさせるんだ……私はどんなことでも認めるだろう……。そして容易に納得させることが出来るよ……。だから言ってみてよ。」

「本当に判らないのよ……私はただ一晩でも別れてはならないように感じるの……。どうしてかって。私は判らないの……。私は別れたら眠れないわ、ただそれだけよ。」

「ああ、……。ジャンは立ち止まって言った。「君は眠れないのか。」

「それとも、あなたが直ぐそばの壁の反対側にいる時、私が眠れるようになったにしても何か根本的なものは私の内で変えられてしまうでしょう……。どうしてかは判らないけれど壊されてしまうのよ……。」

「君はもう眠れないのか……。ジャンは自分自身に対するかのように繰り返した。

彼はすでに自分がその力を感じていた肉体の繋がりは肉体の直接的な関係だけでなく、恒常的で快樂

からは独立した接触にも基づいており、それはゆっくりとした侵入によつて人を包んでしまう思想や、眠りと同じくぼんやりしている道筋のようなものだと考えていたのだった。

「もしかしたらそうかもしれない……あそこの霧氷は君の水仙の草原だよ。離れているけどね。何処かに坐りたくない？」

草原が斜面に広がっており、太陽の下で銀色に光る新緑となっていた。そして樹々はもつと色が濃い輪郭を持っており、白っぽい灰色の斑点で区切られていたのだった。

「ここから見ると村は魅力的だね……。私たちの家が見えるだろう……。あの屋根だよ……もつと下の……君は教授の家を見ているね……。」

「この地方ではすべての家が幸福そうな見かけを持っているのね。美しい庭園ばかりだわ。」ポーリーヌが言った。

「そしてあらゆる考えられる不幸、病氣、孤独、死などが静かな屋根の下の家の中に集中しているんだよ、節度があり、微笑んでおり、花瓶の置かれたその窓の後ろの……。偽りの微笑みや……時には真実であることもあるが……どんな時でも謎めいたその微笑み……私はこの曖昧な微笑みに感心しているんだよ……。」

「私たちの山小屋は偽りではないわね……。」

「そうだよ。」

「でも私たちが持っているもの、それが存在しているということを誰も確信していないのね。」ポーリーヌは大きな石の上に坐つて言った。「それは一つの伝説だと言われるでしょう……。山の斜面の上の小さ

な家で何も待つことなく幸せであること……。それは真実の見かけは何も持っていないのね。」

「それを言わないといけないのだろうが、私は作家ではないのだ。」

「あなたはそれを言うことはできないと思うわ……。私たちはそれを感じるのにすでにあんなに苦労したの……。何と何もかもが私たちからすり抜けていくことでしよう……。そうじゃありませんか。愛情、それは愛情以上のものなのね。人はまったく単純な感情を見抜くこともできないのね……。そこにはいつも別のものが入り込んでいるんですもの、感覚の背後には魂が、年齢が、苦しみが……。」

「若し私が作家であつたなら、私はそれを断言していたかもしれない。それは私の怠惰への口実になるんだよ。」

「愛情を生きることのほうが価値があるのね。大切なのはその肯定だけなのね。以前私はこう考えていたのよ、つまり自分の理想を一人の人間の内に具現すること、彼のために生きること、自分自身よりもその与えられたものの内に自分を感じるのだと……。ほとんど無であるものに満足することが出来ること……。そこなのよ……。そこに真実があるのね……。」

「そして私はそれをわずかなものに満足することと呼んでいたんだ。」

「確かにそれは重要なことだわね。でも結局は私たちは、お金もなく、娯楽もなくて人里を離れた私たちの山小屋で哀れに思えるんじゃないかしら。」

「お金は無いが、まったく無い訳ではないよ。私たちの小額の年金は一つの特権だよ……。当然のこととして私を苦しめている特権なんだよ。それが私たちに安楽な生活と自分たちを認めさせる余暇というものを与えてくれているのだから。私たちは多くのもので社会のお蔭を受けている。この甘い時間、この

穏やかな街道、多数の人々を養うように作られてはいない荒々しい地域に生活することの恩恵などがそれだよ……。私たちの周囲のこの平和は昔の人々には思いも寄らないものだっただよ。人生を邪魔されないで味わったり罵ったりするための少しの平和、これはそれでも進歩なんだよ。私たちは多くのもので他の者たちの労苦のお蔭を受けているんだよ……。単なるお皿も多数の人の手を通して……。……お皿がどの様にして作られるかを君は私から聞きたくないかね。」

「別にありませんわ。」

「しかし他人の本当の苦しみは労働ではないんだ、それは貧しさなんだね。人々は貧しさというものが判らないんだ。もう働くことが出来ない人は姿を隠してしまう……。私はリモージュで恐るべき貧しさに驚かされたことがあるんだ……。私はそれが忘れられないんだ……。そしてあの社会の傷口というものに苦しんでいる……。すべての満足している人間はそれに責任があるのだ……。彼はそれを許したのだから。」

リモージュという言葉を発音するとナタリーの面影が彼の頭に浮かんできた。そしてもう一つの避けがたいぞつとするような連帯責任の気持ちもその女の苦しみと一緒に浮かんだのである。そして彼は低い声で言った。

「人は幸福である権利は持っていないのだ。」

「それらの貧しさは社会の過失であり、社会の忘却なんだわ……。あなたが祝福していたその社会の。あなたはそれを除去することは出来ないでしょう。そしてあなたがそれをする力があるにせよ、すべての人にとってはこの地上の価値あるすべてのものは残酷な原則に、そして一種の慈悲深い不正に基づいて

いるのかどうかを決定しなければならぬでしょうね……。」

「そうだね、それは解決することは出来ない……。」

「ええ、ですから私はささやかな自分たちの年金で少しも苦しんだりはしないわ……。私はそれが若し私の思い違いでなければ、そして来年に私たちの子供が生まれたら余りに見すばらしいものになると思うのよ……。それで私は他の人たちが働いたり苦しんだりすることが私を苦しめることはないでしょう……。私もいつかそのうちにあの人たちの仲間の一人になるかもしれないんですもの。以前私がバリで一人でまったく希望もなく働いていた時には、一つの考えが慰めてくれたのよ。つまりこの世には互いに愛し合い、幸福である二人が存在しているということを知ることなのよ……。でも私はそれをほとんど疑っていたのよ。それにそれは私の最も大きな苦痛だったわ。」

ジャンは山の後ろに太陽が沈んでいくのを眺めていた。ローヌの谷間の方ではその頂の雪に覆われた背景が月の明かりのように冷たい白さを示していた。目の前では山々の塊がもう曇った蒸気に過ぎなくなっていた。そして東の方ではジュラ山脈が青みがかった色で縁が削られた狭い帯のようになっていた。しかしぼんやりして氷に覆われた大地の上には小さくて輝く雲が天上に形成されていたが、それは黒い地平線に隠された窪地に長らく残存していた黄昏時の白熱の反映のようになっていた。

「水仙を摘みにいくのには時間が遅すぎるよ。」ジャンは言った。「もう帰ろうよ、……若し人が無償の富の気難しい愛好家であると自任するのなら、森のなかで枝の屋根の避難所に生活し、木の根を食べて生きていかなければならないね……。セギュールは一年間ここに暮らしていた夫婦を知っていたそうだよ。その人たちは本当に木の根を食べて生きていたとのことだ。玄人だったら、雪の下や苔の下に私た

ちが知らないような食べ物を見つけられるようだね……。」

∴

ポーリーヌは二度ほど起き上がろうとしたが、横になったままでいた。ジャンがベッドの縁に坐つて、その手を取っていた。彼女はベッドの上に坐っている男の重みが彼女の体の不調を増大させているのだと言うことを口にしないで微笑んでいるのだ。

「私にリンゴを持ってきてくれないかしら。」と彼女は言った。「一番赤いものを良くこすってね。それから村へ行つて、片栗粉を買ってきてくれない。」

ジャンは換気窓から日に照らされて柵の上にじゃがいもが並べられている地下室に下りていって、一番大きくて赤いものを選んだ。

「思っていたより良くないわ。」ポーリーヌが言った。

ジャンはその林檎を手にとって、長くて白い歯で齧つてからそれをポーリーヌに渡したのだった。

彼女は小階段と砂利道の上のジャンの足音に耳を傾けている。彼女は頭を枕の上で動かさないで、腕を広げて、片手には林檎を持って休んでいるのである。太陽の光が開いた扉から差し込み、ベッドの足を回つて、床のごきの上で消えていた。身動きせずに彼女はバルコニーの柵や空の一角を、そして牧場の端を見つめている。彼女はまだほとんど存在しては居らず、そこからはただ一つの苦痛がやつて来る遙か彼方の子供のことを夢見ていた。その待望の赤ん坊はまだ一つの観念に過ぎないのだ。彼女はこ

の觀念がジャンと分かち合つたものであることを望んでいる。しばしば彼女は彼に話しかけることなく、彼の体の中のこの可能性を見張つていたのだつた。その可能性は男の場合には非常に感動的なものであると言われることがある父親という感情の啓示を彼にもたらすことはあるまい。この考えはおそらく彼には彼女と同じような期待と、苦しみに満ちたイメージを呼び起こすのだろう。

彼女はジャンの齒の跡が残っている林檎を持ち上げた。彼女は彼が林檎を噛んでいるのを見て、彼の青みがかったグレーの目の微笑みを思い出しているが、その目は非常に冷たくて、ほとんどこわばつたものになることもあつたが、彼女だけがそのあるゆる激しさと優しさを知っているのだ。

∴

「散歩に行かないかい。」ジャンが言った。

「私ね、卒倒した時から疲れているのよ、でもあなたはいつてらっしゃいよ。まだ明るいし。私、長椅子で横になつてゐるわ。ランプをテーブルの上に置いておいて下さらない。私に本と編み物を取つてちょうだい。」

ジャンが出ていってから彼女はクッションに凭れて編み物を手に取つた。そして編み目を落としたがそれを直すこともせず、目を閉じた。そして白のウールは彼女の手に絡まつていた。

突然彼女は体のなかにむず痒さを、ちよつとちくちくするのを感じた。それから小さな振動、自分の存在からは切り離されて、自分の内に現れた一つの命の感覚を持った。彼女にはそれは、自分が愛する

男が自分を包んでくると同時に、自分の肉体の中に湧き出たように思われるのだった。《あの人が帰ってきたら私はこの何とも言えない感じを説明しよう……私は一人ではないのだ……私はもう一人であることは出来ないのだ……あの人は私の中にも、外にも居るんだ……》

ランプは灯されなかった。ポーリーヌが眠り込んでいる部屋はもうほとんど夜になっている。暗闇のなかをジャンは長椅子にそって進み、その手の手さぐりとなって彼女を目覚めさせるのだ。

突然重い眠りから覚めてポーリーヌはさっきの素晴らしい知らせのことを思い出した。彼女は言葉が見つからず、口に出すのが難しすぎるのだ。しかし彼女はもうその事は言われており、理解されていて、彼がそこに居ることによって、彼の身振りで、その心遣いによって答えてくれていることを感じるのである。

III

フランスではボンメルル氏は二等で旅行する。しかし彼はブローニュを通つてロンドンに行くときは一等の切符を買うのである。というのは英仏海峡の横断は値段が高くないからである。一九一一年の新しいコニャックは繊細で、味が柔らかく、果物の風味を持っているのだ。それはイギリスの商人に気に入られるだろう、彼らはロンドンの倉庫の中で二十年間保存されていた榿の木の樽の中の年月がその風味を醸成させた若いコニャックの特質を良く判別できる優れた酒の鑑識家なのである。

ロンドンではボンメルル氏はノーフォーク通りの小さなホテルに投宿する。彼は地下鉄で簡単に中心街に出ることができるのだ。マーク・レーン駅では彼は自分の代理店の事務所の直ぐ側にいるのだ。

徒歩での短い道程の間に彼はチームズ河に至る通りや魚で一杯になった箱を革の帽子の上に乗せて運んでいる白い仕事着を着た男たちを再び見いだして嬉しくなるのである。建物の入り口、銅製の表示板、大きな艶消しガラスの上に黒い文字で書かれている企業名、その見かけがアダム式の玉縁が無くて田舎風のものになっている木製の正面の扉で閉じられている中庭などは一歩毎に得意先の者や古いカーペットが敷かれている十八世紀式の食堂や五十年祭を迎えるポルト酒、それにその真心は少し荒っぽく、も

てなしの流儀は非常に友好的である人々のことなどを思い出させたのだった。

彼は帽子の方に指を一本上げたり、年毎に彼のことに気付いてくれるエレベーター・ボーイの微笑みに感じ入るのだった。しかし彼の代理店であるトムソン・アンド・グローヴァーの事務所は二階にあつたので彼は階段を登っていった。入り口の扉のガラスの上にはポルト酒やボルドーとブルゴーニュとクセレスのワインなどで知られている商会の名前が読み取れるのである。ポンメルル氏の視線は一瞬『ボンメルル』という文字の所で止まった。

彼は今までいつも会っていた体格がよくて赤ら顔で、短すぎる仕事着を身に着けていた年取った事務員に出迎えられた。

「ドーヴァー海峡の横断は良かったですか、ポンメルルさん。皆さんが待つておられます、どうぞお入りください。」

彼はトムソン・アンド・グローヴァーの事務所扉に面した暖炉の中で燃えている石炭の火と、壁の上にはオポルトの葡萄の収穫の情景やボルドーとその大きな河、ランスとその大聖堂、前景には乾燥した石の古壁を持つ大きな街であり写真に出てくることはあまりないコニヤックなどを描いている彫刻などを再び見いだしたのだった。代理人たちと握手を交わしながら、ポンメルル氏は金庫の上に置かれた白いボール紙で作られた箱の方をちらつと見た。その中には彼が訪問したときに受け取り、そこから帰るときにそこに戻すシルクハットが入れられているのである。

すらっとした体つきをしており、きれいに髭を剃った顔、頭の真ん中で髪を分け、七十歳にしては立派な身だしなみをしていたグローヴァーは口の周りには、厳しい感じを与えていた深い皺があったが、両眼は大きな優しさを示していたのだった。トムソンは二十五歳の青年で、髪はちじれた金髪で、鹿狩りの時に落馬して死んだ自分の父親の代わりになったばかりだった。

ポンメレル氏は破れた褐色の革が張られたマホガニー製の椅子に坐り、グローヴァーが彼に向かって言った。

「トムソンと私はあなたの友だちでもある私たちの友人の所まであなたにお供いたしました。私はあなたが幻滅でも味あわれるのではないかと恐れているのです。結局私たちはいつもの訪問はしましょう。というのは私たちの友人はあなたと握手できないとがっかりしてしまからです。今朝は私はあなたが訪問されることを伝えておいた私たちの上得意のレンヴィック・アンド・ステッドマンを訪ねてシティーまでお供しましょう。彼らは私たちを昼食に招待してくれています。とりあえず二三箇所を訪問することにししましょう。今日の午後は私の若い協力者のトムソンがウエスト・エンドのダンビー・ブラザーズの所までお供するでしょう。ところで私たちは見本は確かに受け取りました。」

ポンメレル氏は黒のコートのボタンを留めて、少し押さえた仕種でシルクハットを被り、天気はいいのに自分の雨傘を手を持った。というのはステッキはあまりに軽薄すぎると思われるのを知っていたからだ。

彼は入り口の扉を開き、それから立ち止まった。

「私は見本を忘れてしまった。」

「新しいコニヤックの見本はすべての顧客に送付してあります。」とグローヴァーは言った。「ただ澄んだコニヤックと古い上質のシャンパンだけを持っていきましよう。」

ポンメル氏はコートポケットに三本のガラス瓶を滑り込ませて外にでた。

マーク・レーンの歩道沿いに歩きながら彼は人気がなく、陰気な小麦の取引所を見た。開いた地下室の入り口はいつも無理にも車道に下りることを余儀なくさせたが、そこでは箱を積み込んだ重そうなトラックや、馬の首に吊り下げられた太い紐で作られた布カバンなどに体が軽く触れたりした。時折通過する者を見分けてはグローヴァーは親しそうに挨拶を交わしたのだった。それは頭を少しだけ横に傾けるだけなのである。そしてポンメル氏は何とかフランス風の挨拶の本能的な仕種を抑えたのだった。

煙で黒くなったり、雨のために表面が白い細長の溝が刻まれた古い墓石のあるところや、プラタナスの老木の下の新鮮な芝生の間に休らっているこれらの路地、そして狭いセント・メアリー・アックス通りと花崗岩の教会、黒い正面の間にある非常に慎ましいロンバード街、そこはグローヴァーが直ぐに《この通りは世界の金融を支配しています》と言うのを忘れなかつた所なのだが、他にロンドン市長官邸の広大な交差点の絶えざる交通などの見晴らしはいつもポンメル氏に青春時代を思い出させたのである。父の代理店の見習いとなつて彼は朝にはリヴァプール街に降り立ったが、毎夕そこからまた汽車に乗つたのである。

グローヴァーの後に随いて、ポンメル氏はレンウィック・アンド・ステッドマン商会の事務所に入つ

ていった。彼は帽子を被ったまま使用人たちの部屋を通り抜けた。そして廊下の突き当たりの事務所で二人の従兄弟同士のステッドマンを見つけたのだったが、彼らはその商会の長として、腕を広げて彼を迎えて、愛想よく彼らの談笑に加わるように招き入れたのだった。

「ポンメルルさん、またお会いできて嬉しく思います。私たちはあなたが昼食を共にするためにやって来られたのを喜んでいのです。まずはシェリーを一杯やられるのでしたね。これは甘くはありませんが鋭いものでもありません。」

ポンメルル氏はちよつとしり込みしたが、この例外的な申し出を、歓迎のまったく特別の徴と考えて、受け入れた。そしてその会話は新しいコニャックに関してのものとして始められた。

「我々は今年は何を買い入れるかはまだ決定しておりません……と二人のステッドマンの年長の方の者がグロウヴァーに話しかけて言った……しかしご承知の様に我々の友人であるポンメルル氏のことは忘れられてはおりません。ポンメルルさんには見本をいただくようお願いしたいと思ひます。」

ポンメルル氏はコートと帽子を事務所の安楽椅子に置いてから、非常に狭い階段の方へ歩いていったステッドマン従兄弟の後に付いていった。彼らは箱が並べられた廊下を通つて、小さな貯蔵庫に入ったが、そこは地下の墓地に似た、石灰で塗られた煉瓦の壁を持ち、アーチ型の天井を持つ小さな客間だった。その部屋の中央には丸いテーブルの上に一式の食器が置かれてあり、ガラスのグラスがその丸天井の中心の掛け金に吊るされた電灯の控えめの光の下でキラキラ輝いていた。数世紀以来その壁にしみ込んでいたジンの新鮮で澄んだ香りとワインの芳香が小さなストーブで温められた空気を香らせていた。

「ポンメルルさん、あなたは私たちの習慣をご存じだと思いますが、ここではすべては非常に簡単です。」

どうぞお坐りください。」二人の従兄弟の兄の方が言った。「舌びらめと羊の鞍下肉の献立なのですが、気に入っていただけますでしょうか。全てのものが完全であるわけではないということをお詫びしなければなりません。この料理は隣のレストランから取り寄せたものなんですよ。しかし私たちはそれが冷めることが無いように努力しています。」

革の前掛けをした酒蔵の使用人が厚みがあつて大きな舌びらめを持ってきた。従兄弟の兄がそのヒレ肉を切り取り、弟がストープから適度に離れた床の上に置かれていたシャブリ・ムートンヌの瓶を取りに行くために立ち上がった。

「私はあなたの国のこのブルゴーニュの白はあなたの気に入るだろうと思いますが、ボンメレルさん。モーゼルにしたほうが良かったのかもしれませんが、涼しい日にはもっと強いワインのほうがいいのではと思うわけです。」

会話は困難な話題に移つていった。アルコール飲料に対する税の引き上げの脅威、ウイルヘルム二世、組合の煽動などがそれである。しかしステッドマン従兄弟は長々と自分たちのスコットランド旅行のことを話したが、彼らはウイスキーの在庫を視察に行ってきたのであった。彼らはディー河の鮭釣りに数日の快適な日々を過ごしていたのだった。

従兄弟の弟が食後の後片付けをした。一八七八年のシャトー・レオヴィル・ラカーズの瓶が羊の肉に続いて出され、それから南米クックバーン産のポルト酒が、そしてナプキンに包まれたスティルトン・チーズが出された。

「コーヒーと一緒に、私はあなたに、あなたが私たちに手に入れさせて下さった一八五八年の素晴らし

いシャンパンをあなたに味わっていただきたいんですよ、ポンメルルさん。私たちはこれらのものをまだ数本は持つておりますが、これ売るのは私たちを苦しい気持ちにさせるんですよ。」

ポンメルル氏は指の間にチューリップの形になって花開いていたグラスの足を持つていたが、そこに若い日々の新鮮さがその完全なる成熟の内に残っていた芳香の蒼白いが豊かな色彩を呈している色合いを誇らしさと共に認めていたのだった。

彼らが再び街に出た時、グローヴァー氏はポンメルル氏に言った。

「幻想は持たないでくださいよ、親しき友よ。ステッドマン従兄弟はあなたからは何も買わないでしょう。物事はありのままに見なければなりません。この取引人の立場になって考えてみてください。そして彼らが倉庫に保管してある新しいコニャックを引き受ける場合に曝されることになる危険や費用のことを考えてみてごらんなさい。古い良質のシャンパンについてはもう問題外ですからね。時代が変わったんですね。人々は今は流行の良質のものと、良く知られた商標を求めているんですよ。」

しかしポンメルル氏はその昼食に満足しており、使用人の事務所を通り抜けるのを許可されないのに名刺を差し出す彼の競争者たちのことを考えていたのだった。

彼らはトリニティー広場を通ってグローヴァーの所へ行った。トムソンはポンメルル氏をウエスト・エンドまで案内しなければならなかったが、彼はマンチェスターの一商社からの見本の請求によって忙しくされていたので、ダンビー兄弟商会への訪問は翌日に延期することを決定したのだった。

ポンメルル氏は自分のホテルに戻り、徒歩でロンドン市長官邸に出掛けていき、そこで彼はセント・

ポール寺院の境内を一周する乗合馬車に乗ったのだった。乗合馬車の屋上席からは夕方の光の中に冬の間は破風の軒蛇腹をすみかとする棕鳥の群れを眺めていた。少し遠くにはチャンセリー・レーンを見たが、それは明るいグレーの塗装の裁判所の大きな建物に護られ、黒い細長い線で琥珀色になって、ストランド街に目立たぬように不意に現れるのである。

彼は自分のマントをホテルのクロークに預けて、喫煙室に入り、書き物用の小さなテーブルの前に腰を下ろした。先ず玄関のホールで、次は喫煙室の入り口で大声でボーイが次の様に言った。「三、七、五」ボンメル氏は自分の部屋の番号であるに気付いて、そのボーイに指を挙げて合図した。赤褐色の紙の封筒が手渡された。そして彼は中から電報を引き出した。《ロベール・バルヌリー、昨日死去。明日十時に埋葬式。》彼はその勅書の一葉の日付を見た。そしてその式の日付までに着くことが出来ないことに気付いた。しかし夜行列車に乗れば、おそらくリモージュで、ガリバルディ街にあるフレデリックの家にまだ集まっているその家族には会えるだろう。

..

白い大理石の暖炉の前に立っていたフレデリックは、フランス窓を覆っていたレースのカーテンを通して、ヒマラヤ杉の枝をじっと見つめていた。驚つ鼻で、祖母の様に少し上に向いた鼻の穴を持ち、それは髭を剃った彼の顔の中では唯一の表情のある特徴となっていた。そして大柄で肩幅が広く、フロツクコートを着て窮屈そうな体つきをしていたフレデリックは肩幅やエレガントな身のこなしなどでロベ

ル・バルヌリーを思い出させたが、首筋のぎこちなさは彼特有のものであった。ジュリーはお茶の準備をするのに義姉妹の手助けをして両手にカップとビスケットのお皿を持っていた。彼女がフレデリックの前に立ち止まった時、彼はポケットから中が高くなった爪をした長くて骨ばった手をゆつくりと出して、自分の妹には目もくれずに放心状態でビスケットを一つ手に取った。ガーネット色の高い扉の一つが開いてルイズが腰をゆつくりと振りながら少し厳かに入ってきたが、狭いスカートの上で広がっていた黒い布の上着を着て体を直立させていた。彼女は誰も見ないで腰を掛け、家族の者たちの中で身動きせずにしており、大きな帽子の下で首を傾けていた。そして彼女は自分をすべての者から分離していたハッキリしない感情に引き込まれているように思えたのであり、やつと判るような何の目的も無さそうな微笑みを浮かべていて、大きな両眼は空ろに開かれており、優しさや人の受け入れと内面の表に出ない激しさから成る目立たぬ思いを抑えていたのだった。ピアノに肘を突いていたギイはある芸術の雑誌をめくっていた。少し傾いた彼の長い体軀、華奢な頭、その間がひどく近づいた青い目をして彼はページをめくるのを止めて、指の間に一葉を持ち上げたままで、自分の優しく歌うような声で、その版画に注釈を付けた。

「ピカソ……。」

彼はポール・デッカに話しかけたのだったが、彼女は簡単に答えるだけで、二人とも静かなふうをしており、誰もその内容を知っておらず、それは確実に無口の兄にバルヌリー商会の支配権を決めていたと思われる遺言書のことを考えていた。

数年前からフレデリックは父がパリのある公証人に、自分をバルヌリー商会の唯一の後継者に指名し

た遺言書を預けていたことを知っていた。彼はしばしばロベール・バルヌリーに、ポール・デッカとその兄弟たちには気を付けるように言っていたのだった。彼は権力の穏やかな譲渡の保証を確かなものにするために自分の父の側で何事も怠ることはなかったのである。その様にして自分の兄弟姉妹を失望させようと努力しながら、その家族の代々の利害のみを考えていたのだった。彼以外の誰もその企業を指揮することは出来ないだろう。そして彼は無知の者や気取り屋たちの気紛れが、その資本に自分の側から思いのままにするのではないかと恐れていたのである。フレデリックは決して話をしなかった。この沈黙は彼の場合は実際の彼を凌駕したボンヤリした個性を構成させていたのである。

「フィリップ伯父さん、思い違いをしてはいけませんよ。彼は良い会計士です。それだけのことで。そして遺言書が彼に全権力を与えたとすれば、バルヌリー商会は滅びるでしょう。」とジュリーは小声ではあるが力強く言ったが、彼女の黒い目は輝いており、ボンメルル氏を庭へ引っ張っていったのだった。「彼は自分の欲することを知っている男のを風采を持っている。」

「それは彼が何も言わないからよ、彼はパパに似ているからよ、そうだわ、彼は自分の素振りを持っていきます。そしてパパと同じく絵を買ったりします。彼はルイ十六世様式と紅色の絹の壁紙が好きですよ。彼はキツパリしたやり方で人を気後れさせるのよ、でも心の底では……。」

「良く聞きなさい、ジュリー。フレデリックは三十年もあの工場に居たんだよ。若し彼の父親が彼にすべてを相続させたとすれば、それだけの理由があつたんだよ。だからそれを良いことであると考えなければならぬ。」

ジュリーは咳き込みに捉えられて、煤の刷り込まれたベンチに坐った。

「私はその様には考えておりませんわ。」彼女は呼吸を取り戻した時、弱い声で言った。「寒くなつたわ……。戻りましょう。」

時折客間のドアが開いて、友人たちのグループが気の毒そうな、同情のこもった風をして前に進んできたが、彼らにとつては滅多に人がやつて来ることのないこの家では彼女だけが親しみのある人間であるジュリーを目で捜していたのだった。

「あなたのお父さまは……非常に傑出した方で……私は思い出します。私たちが若かつた時のことを……。」

ジャンは朝から席を外していた。お茶の時間に戻つてくると、彼はボンメル氏がその家族の者からは離れた所に居て、金時計をポケットから取り出していたのを認めた。

「伯父さん、リモージュに来ておられるとは知りませんでした。」

「私は今日ロンドンから到着したんだよ。埋葬式に出席するのには遅すぎる時に電報を受け取つたんだ。多数の人がやつて来ていたかね。」

「いいえ、祖母の埋葬式とは比べものになりませんでした。工場の労働者全員が花々で覆われた棺の後ろに続き、尊敬と落胆の気持ちを感じられた群衆も居たあの時とは。今朝は労働者は一人も居ませんでした。」

「この十年、人の考え方も変わったもんだ。君たちはもう愛されてはいないんだよ。」

「確かにそうですね。」

「ポーリーヌは一緒じゃあなかつたのかね。」

「いいえ、彼女は小さな子供を一人で残しておきたくなかったんです。結婚したばかりでのぼせ上がっている使用人の女とだけには。それで彼女はレンズに止まっているのですよ。」

「子供は元気かね？」

「ええ、元気な子供です……。ロンドン行きは満足出来るものでしたか。」

「商売の方は静かなものだよ。」

「あなたが売り出された一八四〇年の上等のシャンパンは上手く行きましたか。」

「まったく変化は無い。」

一人の親族に対しても彼はこれ以上のことは言えなかったが、それは彼が自分では気付かない内に自分を孤立させる根本的な慎重深さに余りに永い間慣れてしまっていたからであつたし、自分の心配事は誰にも漏らさないのが当然であると思っていたからでもあつたのだ。

「私は今晚パリ行きの列車に乗る積もりだ。したがってマルセルに会う時間があるかどうかは判らないんだ。」

「私もさつき彼女の所に行きましたが、居ませんでした。」ジャンは言った。ギイはピアノを離れて、フレデリックの方へ明るい目を向けて、優しくフルートの様な声で言った。

「父は大切な書類を自分の部屋に残しておかれたのに違いありません。私たちはそれを見にいつでもよいでしょうか。」

「重要な書類はパリの公証人の所にあるんだ。」とフレデリックは言った。

ギイは無造作であるが執拗な風をして続けた。

「それじゃあ、公証人の所に行かなければなりませんね、ポール。」

「確かにそうだ。」

「明日集まりましょう。フレデリックもやって来るでしょう、あなたもやって来ますね、ポール。」

..

ジャンは窯のある建物の方に向かっていく。その間に退役軍人の守衛が遅刻者たちの前で鉄柵を閉じる。いくつかの窯は空であり、その内側は黄土色であり炎のためにワニスを塗られた洞窟の様になっているのが判るのだった。あるいは頭は頭巾で保護し、両手には手袋を付けて男たちがバラ色の粘土で出来た柱で作られた窯を解体しているが、そこでは煉瓦の囲いの中で象牙色の陶器がアーモンドのように熟している。時々古い塔のように褐色で丸い閉じられた窯は閃光を放っている小さな小窓から内部の真っ赤な輝きを垣間見せてくれている。

彼は湿らせた練り粉を磨り潰す裁断機のベルトとシリンダーの音に耳を傾けている。それから物音がしない大きな仕事場を横切る。白い足場の枠の中で職工たちは灰色がかった脆い製品をデリケートではあるが非常に素早い仕種で、ほとんど女性的なタッチで扱っている。ガラス張りの壁に沿って彼らは自分の仕事を続けているが、自分の会社の創立者がいなくなったことも、ロベール・バルヌリーの生涯と彼らの指の間に生まれ出ているおびただしい品物の間に存在し得る関係についてもまるで何も知らないかのようなのである。

ジャンは小さな階段から事務所のある階に上がっていく。その廊下を通過する事務員はいつもフレデリックの事務室の方におどおどした視線を投げかけるのだが、そこから時折その支配人が顔を凍りつかせ、無言で重々しい風をして出ていくのが見られるのである。すべての者にとってフレデリックの事務室は権力の聖域を示しているのである。今までは諸々の命令はその広大な多数の人がいる建物を活気づける生氣と同様に、他からやって来ていたのである。

ジャンは会計課の窓口に身を屈めて言った。

「バブウゼさんにお会いしたいのですが……ああ、今日は、バブウゼ……。今話す時間はあるかね……可なり長くなると思うけど……少し込み入った話なんだ……君の帳簿も必要となるだろう。」

「私の事務室にお入りください、ジャンさん。」……バブウゼはリムーザンの訛りとともに言った……彼は髪が赤い小柄の男であるが、親切で愛想のよい風をしており、狡そうではあるが微笑を浮かべた眼をしていたし、細長く小さな手、そしてブロンドの細やかな髭を持ち、控えめな模様の明るいジレを着ており、少し女性的な外観の下には強靱な意志を秘めていた。

「少なくとも一時間くらいは誰にも邪魔されたくないんだ。バブウゼ、私に言ってくれ、私たちがこの様な会談を行ったということを誰にも知られたくないんだよ。忌憚のない質問をいくつかさせてくれな
いかね。」

「私はあなたに対しては何の秘密もありませんよ、ジャンさん。」

「それはいいことだ、事務所には誰もいないんだね。」

「フレデリックさんはちょっとお出かけになったところです。これからロベール様のお宅で集まりがあ

るのです。」

「それは非常にいいことだ。」

六

ロベール・バルヌリーの料理を受け持った老女のアドリエンヌは、来客たちの到着を告げられて客間に上がった。シャッターは下ろされていたし、黒い木綿のブラインドはチュールのカーテンの下までおろされていた。

弱い光が扉の隙間から部屋のなかに入り込んでいた。暖炉の前の青白い四角い光が、ビロードのように毛が短くて柔らかいペルシャ絨毯の上で和らげられていた。アドリエンヌはテーブルの前の安楽椅子の背にぶつかり、その椅子の上に、その場所に何年も坐っていた人の跡を残して、その真ん中が少し凹んだクッションを見つけて後ずさりしたのだった。彼女はその人が帰ってきて時々品のない冗談を交えながら、ていねいで堂々としたやり方で命令を与えるかのような気がしていたのだった。

彼女は紐をもつれさせながらシャッターを上げて、風が自分の指の上で引き下ろそうとした窓の鍍戸を押した。日光がからっぽで雑然とした客間やマホガニーのテーブル、赤い壁紙、ガラスの戸棚、様々な絵画、その二つの小部屋には大きすぎるとしりとした絨毯などを照らしたのだった。

彼女は暖炉の前に散乱した灰を掃き清め、二つの薪置き台を互いに近づけた。それから他方の手に薪の重い籠を持って、前掛けの中には小さい木を入れて運んできた。彼女は煙にむせられて咳き込んでか

ら立ち上がって、前掛けの端で花瓶の周りの暖炉の大理石を拭き、安楽椅子の前に立った。そして彼女は、男たちが泥を落とすために階段のステップの上で靴底を叩く音を聞いた時、こんな恥ずかしい行動のことは意識せずに、そのクツションを持ち去ったのだった。

彼らは傘を置くための場所を捜して、コートを取らずに入ってきた。フレデリックは一つの絵の前に立ち止まって、永い間、身繕いをするために坐っている一人の女を見ていたが、半ば裸になって、膝を青色の布で覆っており、悲しそうな素振りでプロンドの髪の塊を引っ繰り返したのだった。それから黙ってその集まりには無関心のままに暖炉に近づいた。

「客間から始めましょう。……ギイが言った……すべての書類は確かにテーブルの引き出しの中にあります……金庫はありません……フレデリック、金庫は家には無いのですか……？」

「そうだ。」フレデリックは頭で頷いて言った。

「ここに手紙の束がある……。一通はあなたのものだ、ポール、取っておきなさい。私たちの一人一人が自分に関するものは取り戻すことにしよう。フレデリック、あなたはそれに賛成するね……？ 特に私たちに何の利害も無い手紙は……そんな物がたくさんある……。ここには計算書が……納入業者の手紙も……それらはフレデリックに渡すことにしよう、彼は長男だから……。机の上にあなたのものを置いておくよ、フレデリック……さあ、それじゃあその書類を読んでくれ、ポール。」

デッカは手に持っていた帽子をテーブルに置いてから、手袋を外し、鼻眼鏡を掛けて、大声で読み始めた。

「私は一万フランを私の料理女のアドリエンヌ・エスティヴィーに寄贈する。この遺言書は前のものを

無効とする。》

フレデリックはデッカに近づいて、碁盤縞の用紙を受け取った。

「これは鉛筆で書かれている……下書きだろう……。」

「日付はある……署名もハッキリしているね。」

フレデリックは蒼白になって、突然共犯者の様に優しく愛想良くなって、低い声で言った。

「これは料理女だけに關するものだ……焼却してしまえば……。」

ギイは一歩前に進み出て彼の腕をつかんだ。

「いいえ、それはいいません……いいですか……これは非常に重要なことですよ。」

IV

村の屋根という屋根の端には、そして小さな団地の中の木の枝や、さらに家の側にきちんと並べられた薪の積み重ねられた山の上には雪が眩しいばかりの衣を着せかけていた。壁は黒くなっているように思えたし、家のポーチの下には奇妙な埃だらけの空間が残されていた。鋸の音と、ピクテの城の高台からの険しい道を小型の轎で駆け下りる子供たちの叫び声が聞こえてきた。

「マックス、もう帰らなければいけないよ。おやつの時間だからね。帽子を被りなさい、風をひいてしまふよ。」とジャンは息子の頭を手で撫でてやりながら言ったのだったが、彼はレンスの男の子たちのように髪を短くカットさせようと思っていた。

轎遊びに対してもマックスは父の家の側の処女雪に覆われた美しい谷間を軽蔑していたのだった。彼はその道を通って村まで行きたいと言い張っていたし、その道を轎の中で仰向けになって、両足を開いてその子供たちのように、《気を付けろよ。》と叫びながら、彼らの一団の中に加わって下りていったのだった。

赤い頬をして、丸刈りされて大きな頭やセーター、その地方の訛りなどが彼にヴォー地方の農民の面

影を与えていた。ジャンは自分がこの子の父親であることをもつと感じたかった。しかしマックスはその村の悪戯好きの少年のモデルを描いていたスイスの田舎の息子であり、彼はその引きずるような歩調や喉にかかるような抑揚や古い靴などに憧れていたのである。

「さあ行こう、帰ろう。」

マックスは鼻唄を歌いながらその櫓を引っ張っていきながら、家路についた。

「おやつを食べたら勉強だよ。お母さんにはお父さんはグリユイエールまで散歩を続けると言っておいてくれ。明日はクリスマスだ。お前はびっくりすることがあるぞ。」

マックスは家を見つけるや、母親を見つけたかのように風のなかに大声で自分の勇敢さの話を吹聴しはじめたが、それは庭を横切ってかき消されてしまったのだった。

雪はグリユイエールの平原とヴェヴェイの家々の屋根を白一色にして覆っていた。落日が黄色がかつたグレーの湖水の上で、雪がやと降り積もったいつまでも黒っぽくなっていた山々の麓で赤銅色の反映を投げかけていた。ジャンが帰途についた時には、夜になっていた。月のぼんやりした明かりで照らされた雲の下で、雪の覆いがほとんど眩いばかりの冷たい白さで大地を覆っていた。

「ジャン、マックスにお休みの接吻をしてやって。もう寝かせてきたのよ。私たちはなんて平和なんですよ。」

ポーリーヌはジャンについて寝室に上がり、子供に近寄って最後の口づけをしてやったのだった。

「ぐっすり眠るのよ、今夜はサンタさんがやって来るからね。」

「私の靴下を置いておこう。」ジャンが言った。「スूपが待ってるよ。」

食事中彼らはまた見いだした静けさに幸を感じて、黙っていた。けれども何かしら空虚なものを感じたのだった。

食事の後に食卓が片づけられてから、ジャンは安楽椅子に坐って、部屋の仕切りを通して、ポーリーヌが引出しをあげたり閉めたりしている音を聞いていた。彼女が片手に靴を持ち、籠を一つ腕に抱えて入ってきた。

「君は子供と同じくらい賑やかだね。」

「グリスを塗っていない靴を見つけるのに大変だったのよ。」

「そうだね、君はバルバザックの様に靴を置くんだね。リモージュでは靴下をぶら下げていたんだよ。その中にはたくさんのお物が入っていたよ。」

「靴下を置いたほうがいいと思っていच्छやるの。」

「それは君が思うようにすればいい。ただ明日の朝、この靴が私たちのベッドの上に持ってこられるのに違いないということになると、靴下の方がいいね。その方が楽しいよ。」

ポーリーヌは出ていって、準備しておいた包みを詰めた白い靴下を持って戻ってきた。それはボンボンと機関車とボールと色鉛筆とオレンジなどだった。

「これを加えておこう。」ジャンが言った。

彼はストーブの側に落ちていた、火の消えた石炭を拾い集めて、何枚かの紙に包んだ。

「あの子をからかってやらないとね。」

彼は机の上の砂岩で出来た水差しの投げ込まれていた花束から柊の新芽を摘み取った。

「種はいけない、食べてしまうからね。」

ポリーヌは椅子の上に靴下を置いて、紙の残りを焼いてから、また編み物を始めた。そしてもうストーブの中の火が燃え盛る音しか聞こえなかった。

「ジャン、あなたは今何を考えてらっしゃるの。」

「私はガリバルディー通りのことを考えていたんだ……。クリスマスにはあの大きな家は神秘的な風になつていた。あらゆる扉の後ろには良いものがあると言われていた。私たちは工場の塀で暗くなつた台所に下りていった。ただ白木のテーブルとマリエットの髪飾りが明るい調子を作っていた。私には今でもマリエットが、その平たい胸が、そして彼女の黒い仕事着が見えるのだ、それには彼女の四角い大きな前掛けがピンで留められていた。私の祖母は彼女にアメリカ流のやり方を教えていた……。戸棚の中にはいつもクリームの容器が見つけれられたんだ。彼女はクリスマスのために美味しいお菓子を作ったのだ。私たちはテーブルの横で、ローラーの下で練り粉が押さえられるのを見るために居残っていたんだよ。すり鉢の中では多くの卵が小麦粉と砂糖の縁の間を泳いでいたもんだよ。私たちは皆がその混ざり合ったものを叩くことを望んだもんだ……。そして大人たちが残してくれるのを当てにして、七面鳥やトリュッフを眺めていたのだ。夕方には私たちは靴下をぶら下げたし、あるいは子供たちはむしろ母親の靴下を手にして、暖炉の横に引っかけたものだよ、両親の部屋の中の暖炉の火挟みの柄にね……。私にも靴下を準備してくれたんだよ……。」

「ポール・デッカはもうあなたに手紙をくれないのかしら。」

「そうだね、不思議だね。」

「彼らは今は落ちついていると思うのよ。」

「むしろ厄介なことが始まったのかもしれないね。」

「どんな厄介事かしら。」

「それはあらゆるものだよ。彼らは遺産も絵画も株式も分配した。しかし経営者は必要なんだよ。」

「それでフレデリックでは駄目なの？」

「彼は目下のところはその名義は持っている。しかしそれは仮のものだよ。彼は早くもデッカを大いに不安にさせるような馬鹿なことをしてかしてしまっただ、そしてそれもデッカにすれば尤もなことだろう。彼はバルヌリー商会の有力なものであったニューヨークの代理店であるブラウンから分離してしまったんだ。ものを支配することが出来ない人間は様々な革命的なことをやらなければならない。彼らは混沌の中に救いを捜し求めるのだ……。確かに革新というものは必要なものだ。しかしブラウンを見捨てることから始めることはないんだ……。私の話すことは面白くないかね。」

「ええ、そうよ。」

「私は君は聞いていないと思っていたんだ。」

「あら、鐘の音が……。」

∴

マックスは絵本を捲っていた。

「ベニジエ先生がいらしたわ。おいていくわよ、いらつしやい、マックス。」ポーリーヌは言った。

「君は家に残っていてもいいよ、私が先生と一緒に行くから。」

「それじゃあ奥さん、ごきげんよう。ああ、坊や。おとなしいんだね……。いい顔をしているし……。」

マックスはベニジエ先生に機関車を持ってきて、そのメカニズムを説明した。

「マックス、先生がお困りよ。ローズを捜してきてちょうだい。」

子供は自分の小さな太った手がやつと覆い隠す程の扉の把手に手が届くために背伸びして片腕を伸ばした。

ベニジエは玩具を置くために机に近づいて開かれていた本を見た。

「いつもあなたは中世に興味を持っていますね、バルヌリーさん。」

「今は特に中世の前の二つの世紀に興味を持っているのです。」

「中世は様々な側面を持っています。一人一人が自分の望むものを手に入れています。中世には硝子や馬の鞍、暖炉、手押し車、蠟燭などが発明されたのです……。」

「その他の多くのものの発明されました……。私たちが興味を持っているほとんど全てのものも同様です。」

「多くの発明の後ではまだ抑圧された人々がいました。」

「進歩というものはゆっくりしています。」

「結局あなたは進歩を認めるのですね。」

「進歩はゆっくりしたもののなんですね。それは感知されないものです。それはどうなっていくのでしょうか。」

うか。すべての新しいものはたとえ有益なものであっても危険や袋小路のみを創り出すのです。それから止まってしまい、後退することになります。人は決して自分がどこにいるのかを知らないのです。しかし私たちは人間の営みが有益であるかの様に行動します。あなたは労働者たちは今なお給与は悪く住居も良くないと言っていると思います。私もその点であなたと同じ意見です。けれども一九一二年にリモージュで型作り職人は日給六フランを受け取っていたということをあなたに言いたいのです。彼は一八三〇年には日給は四フランでした。しかしフランスでは一般に一世紀の間に給料は二倍になったのです。」

「生活費の方はどうですか。」

「生活費は増大しましたが給料よりは低いのです。それに労働は以前ほど厳しいものではありませんし、危険でもありません。そして一日の労働もいつそう短くなっています。そのすべては大したものではないことは私も認めます。結局それは評価できるものです。そしてそれはあなたの考えによればその大きな部分を自分のために取っておいた何人かの企業家たちのお蔭であるのですね。企業家はそれ程多くの富を蓄積したわけではありません。そして現在のリモージュで、数年にわたる危機に対して抵抗するような者は一人も知りません。私を驚かせるのはかえって、これらの企業家が今でも現存しているということなのです。その点が私たちの意見が異なるところです。あなたは陶器を作るだけで十分であると思っておられますね。そうではないのです。それでは何にもならないのです。アメリカ人が買ってくれる陶器を作らなければならないのです。それはロベール・バルヌリーのお蔭なのです。彼の前にはリモージュには高陵土と職工たちがおりました。しかし陶器産業は眠っていました。労働者たちがそれで生活

しているほとんどすべての産業は良くても悪くても、人工的な力、その存在を空気の精と関係しているある種の霊媒のお蔭を受けている亡霊なのです。それらは労働者たちがいつかは共有することが出来る確実で耐久力のある財を表しているものではありません。少なくとも彼らにとつての根本的な問題はそこには無いのです……。重要であるのは企業が存在するということです。正義というものはこれらのものとは何の関係もありません。絶えず正義について語る者は大部分は山師たちなのです。」

「彼らは労働者たちがあなたの言われているようなわずかな利益を得ることが出来るように援助したのです。労働者たちがその霊媒を信じていたのなら、今でも十二時間は働いていたでしょう。」

「それは確かですね、その霊媒たちは全てのことを考えたのではないのですね。」

「彼らは人間のことを忘れていたのです……。」

「私は労働者の役割を知っています。それは必要です。そして私はその指導者が労働者たちに自分の仕事を嫌にならせたことだけを非難しているのです。不幸な人々にもっと良い世界があるということを信じさせることは非常に簡単なことです。しかしそれは真実ではありません。もっと良い世界など存在しないからです。あなたたちは自分の外観以外のものを変えることにはないでしょう。これから何世紀の間もこの地上には他人のために働く惨めな人々だけしかいないでしょう。彼らの名前で、集団のために命令する人々はいつも同じ人々なのですからね。貧しい人々のみをもっと貧しくなるかもしれないのです。それは彼らの指導者次第なんですね。」

「あなたはペッシミストですね……。私は決してあなたが本当にペッシミストであるのか、反逆者なのか、或いは保守主義者なのか、唯物主義者なのか、それとも精神主義者なのか、貴族主義者なのかは見

分けることは出来ませんでした……。」

「私は物理的なものと他のものを区別しないのです。科学は物理的なものです。それは一つの道徳も樹立することは出来ません。それは科学の目的ではありませんからね。しかしそれは何人かの聖人を作りしました。私は純粹に精神的なものとして私たちに提出されているものを信用してはいないのです。つまりそこには最悪の唯物主義、内面的な偶像崇拜が滑り込んでいるのです。私はまた素早い救済策も信じていません。あらゆる人の条件は非常にゆっくりとした、荒々しくて不当なやり方で改善されるでしょう。それが人生の様々な道なのです。人間の行為は見すばらしいもので、ほとんど何の希望もありません。私は行為の謙虚さを尊敬しています。それは真実である唯一のもので、ということです。人間は考えるや否や自惚れるからなのです。私は実在するものに、そして物理的な仕事に対する趣味を持つとするならば、それは私が愛する謙虚さなのです。」

「指導者たちの謙虚さ。」

「正しくその通りです。彼らは沈黙していなければなりません。」

ポーリーヌは勢いよく扉を開いた。

「ジャン、電報が来てるわよ、ギイからだわ。」

「ギイ？」

「悪い知らせではないでしょうね。」とベニジエが言った。

「明日彼が来るんだ。」

「私はお暇しましょう、バルヌリーさん。またこの興味深い会話を続けましょう……。よろしいですか、

私たちが最善の人々のために良いと判断するものはすべての人にとって良いですね。これがすべてなんです。」

「そうです……そうなんですよ……さようなら……ベニジエさん。近いうちにまた会いましょう。」

「何の用なんでしょう……ポリーヌが言った……どうして電報なんかを。」

「あの男は決して手紙は書かないからね。この電報を手紙と考えなければならぬ。それは単に彼が私たちに会いたいということなんだよ。彼はスイスは知らないからね。」

「電報はリモージュからのものだわ。」

「あの男は時々リモージュまで行くんだよ。ペルピニャンに帰るのにここを経由しようと思ったんだよ。」

「私はそれは変だと思うわ……。彼はどこに寝てもらおうの。」

「ボナベルの所だね。彼のために一部屋を予約しておこう。」

∴

ギイの痩せた背の高い体が、汽車から降りてきた群衆の上に高く目立っていた。

「トランクはポーターに渡しました……ギイが言った……重くはないけど、話をするのには邪魔になりますからね。」

「何か重要な話があるのかね。」

「そうです、私は手紙は書きたくなかったんですよ……。人は手紙というものがどうなってしまうかを知りませんからね……。あなたは最初の遺言書を無効にする第二のものがあるのに、つまり相続財産の分配もされたにも拘わらず、フレデリックが相変わらず自分を指導者と、全権を持つお父さんの後継者であると考えていることは知っておられますね。彼はどんな批判も認めないし、私たちを闖入者、愚か者と考えているんですよ……。彼はその立場にいるためには私たちの同意が必要であるということなどは思いも寄らないように思えるんですよ。」

「彼は二年間支配人をしているからね。」

「待つてください、先ず私にあなたの知っておられないことを言わせてください。彼はバブウゼを解雇したんですよ。それは馬鹿なことだとは思われませんか。」

「ああ、そうだね……。」

「あなたは私の不安がお判りでしょう。私たちはバルヌリー商會が目の前で壊されているのを見ているんですからね。彼がニューヨークに対してやったことは愚かなことですよ。その事はポールがあなたに話したでしょう。それは今まで高級な陶器であつたバルヌリーのものを貶めることですからね。それが存在理由なんですから。」

「そうだね。」

「ポールは二年間フレデリックに会社の経営を任せて一つの経験をさせたんです。私たちの考えはすでに決まっています。別の経営者が必要でしょう。私たちはあなたがリモージュにやって来て、バルヌリー商會の指揮をしてくれることをお願いしたいのです。あなたは過去の経験を持つておられるし、その他

の理由でもそれが出来る人ですからね。工場の存続こそが問題なのです。あなたは拒否することは出来ませんよ。」

「二、三時間考えさせてくれないかね。」

「時間はほどとありません。決定は愁眉の急に迫っています。フレデリックはその自惚れにも拘わらず、自分の立場が脅かされていることを感じています。彼は誰かある者の無思慮な話から、あなたのことを警戒しています。彼はナタリーに会いに行つて、事業が上手く行つておらず、ごくわずかな金額でも確かな利益になると言つて、彼女からその株券を買い上げることが申し出ました。彼はその馬鹿げた金額を正当化するために彼女に総決算書と財産目録を手渡したのです。私はその事をバブウゼを通じて知りました。そして誰がその偽りに満ちた財産目録を作ったかということも知っています。その金額はナタリーを誘惑するにはあまりに少なすぎるものです。しかしフレデリックはもう一つの武器を持っています。彼は大部分の株を確かなものにしようとするのはあなたの道を塞ぐためだと言っています。彼はナタリーの恨みを利用して、あなたとの対抗するために同盟を結ぶことを提案しているのです。それは成功するかもしれないのです。そしてフレデリックがナタリーの株券を自由にするならば、私たちは彼の権力に従わなければなりません。私はどうすればフレデリックとナタリーが手を結び合うのを妨げることができるのかが判りません。彼女がこの出来事の鍵を握っているのですからね。あなたはどうか彼女にこんなに大きな権利を与えてしまったのですか。」

「明らかに私はこんなことになるとは予見していなかったのだ……。私はそのすべてをしばらく考えてみなければならぬよ……。」

ケーブルカーを出ると彼はギイをゆつくりした歩調で引き止めて、村はずれまで連れていった。

「ポーリーヌには何も言わないでくれ。私は事柄の前で彼女を不安にさせたくはないんだよ……。君が私たちに会いにきたことは判っている……。明日の朝私は君に返事をするよ……。私はおそらく受諾することになるだろう。ナタリーに対してなさねばならないことを君に言うだろう……。明朝君のホテルに会いに行く積もりだ……。それまでは一言も口にしてはいけないよ、いいかね……。？ デッカ夫妻はどこにいるのかね。」

「彼らはパリにいますよ。ジュリーが医者診断を受けに行っただけです。ご存じのことだと思いますが、彼女は今病気で。」

「彼女は外出できるだろうか。」

「ええ。」

「それはいい、……ジュリーはパリにいるのか……。」

ついにポーリーヌは往来でジャンとギイを認めた。彼らはゆつくり歩いていたし、ギイはジャンよりも大柄だったし、頭を横に傾けて猛烈に話していた。ポーリーヌの内気さは彼女の自然な態度が同じような単純さで通じ合う人々と接触するやいなや消え去った。彼女はジャンの物思いに耽った顔に気が付いた。それは彼女が最も知らなかった顔なのである。

「何か心配事でもあるの、ジャン。」彼女は低い声でいった。

「いや、ギイはこの国がとてもきれいだと言ってるよ。」

ポーリーヌは振り返って、大柄のギイが足取りも軽く部屋に入ってきたのを目にして驚いたのだった。それはまるで斜めになって、少しだけ開かれた入り口から物も言わずに忍び込んだかのようだった。「あなたは少し早く来すぎたわ、ギイ。もう半月もすれば水仙が見られたでしょうけれど。でもここではいつもきれいだわよ……。あなたは秋のいろんな色彩などは想像できないでしょう……。私たちは夕食後にグリユイエールまで散歩に行ってみましょうか、ねえ、ジャン。そして村の宿屋でおやつをいただきますよ。あなたは白のワインが飲めるし、グリユイエール・チーズが食べられるわ。もちろん本当のチーズよ。偽物と本物はまるで違うのよ……。それから帰ってくればいいし……。あなたは私に随いてくるのよ……。私、あなたが私たちがこんなに幸せに暮らしているスイスのこの地方を好きになっ
ていただきたいのよ。」

散歩の間、ポーリーヌは熱心に話しながら、他の地域や他の季節、そして他の楽しみなど、この国がこの家の回りで変わっていく一年の移り変わりなどを語りながらギイと並んで歩いたのだった。ジャンは次のようなことを夢見ていた。《自分たちはここでは幸福だった。他ではそれは不可能だろうか……。自分が未練を持っているのはこの風景ではない……。自分はこの風景を大いに見つめただろうか。自分がここで愛しているものは上手く定義が出来ないのだ……。自分が家の前で呼吸した自由で、広々としていて、永遠に新鮮なもの……。確かにそれが幸福というものだろう……。人が呼吸する何か静かで非常に微妙で何といったらよいのか判らないもの、少しぼんやりしていて、見分けは出来ないが、それを失うと心が締めつけられるようなものだ。》

夕方ランブの横で安楽椅子に背を凭れたギイの頭は蒼白く華奢で灰色がかった金髪の豊かな髪と奇妙

に明るい眼を浮かび上がらせていた。彼はしばしばポーリーヌを、直接視線を向けることなく眺めたのだった。彼の音楽的な声は優しい抑揚を持っていた。彼は南仏への出発のことや自分の農場のこと、それから青年時代のことや画家としてのデビューのことなどを話したのだった。

「ピカソ……」

時には彼は開いていた膝の上で両手を広げて、休息している農民のやり方で身を屈めた。マックスの衣服を整えていたポーリーヌはその言葉に耳を傾けるために立ち止まった。彼女はランプの方に向いて、針を光の方に差し出して、糸を近づけたが、その一点に固定された視線は彼の眉の弓形とその顔の無邪気で悪戯っぽい表情を際立たせていた。彼女はギイの目に出会って微笑みかけ、それから暗闇で沈黙を守っていたジャンを見た。そして何故とは判らなかったが、もう一度喜びの感情が消えていくのを感じたのだった。

「私の言うことを良く聞いてくれ。」ジャンは翌朝ギイの部屋に入りながら言った。「君はパリに行くんだ。そしてジュリーに、ナタリーのところに付いていくように頼むんだ。君はナタリーに、私の代わりにやって来たこと、そして私がフレデリックの申し出を拒否するように言っていること、そして私が十年間だけ私が彼女に与えた株式を返却するように求めていることなどを言っておきたいのだ。私は勿論この株券を取り戻すのではない。彼女はすべての所有権を保持し、その配当は受け取るのだ。しかし私は何人も私の意に反してこれらの株券を用いるということはないという確信を持ちたいのだ。若し私が多数を持っておれば、バルヌリー商会の指揮を取ることができるだろう。それはナタリーとアリーヌ

の利益でもあるのだ。私はこの様にしてそれらの株券の価値を守り、自分としては俸給を要求し、その一部はナタリーに与えるのだ。これから数年の間は配当を分配することは出来ないだろう。彼女は収入の減少を考えておかなければならないだろう。というのは私の俸給は慎ましいものであるからだ。彼女がそれを受諾してくれるなら、ここに戻ってきてくれ。その時私は君に私の計画を話そう。君は明日ジュリーに会えるだろう。そして木曜の朝には帰ってこれる。私は駅で君を待っている。私たちはヴェヴェイで話そう。私はすべてをポーリーヌには隠しておきたいのだ。ヴェヴェイのパイヨの所に電報をくれないか。そこは私のお馴染みの本屋なのだ。私は明後日にそこへ行くだろう。」

∴

ギイの訪問以来ポーリーヌはジャンに、その声の調子やその沈黙、動作、そして彼の眠りの内に表されたような一つの変化を感じていた。《それは君の思い過ぎだよ。》とジャンは言ったが、彼女は納得してはいなかった。ポーリーヌは考えた。《人間というものは何と良く透けて見えることだろうか。ただ説明が無いために明白なことや暗闇にぶつかったりするんだわ……。彼はその秘密を黙っていることは出来る。しかしそれを消すことは出来ないのだ。》彼女はそれを苛立ちと共に注目した。《私はその事をもう考えたくない……。彼女は考えた……。時には愛する人から解放されて、その人を自由に呼吸させ、数日はまるで彼が居ないかのように彼の外で生きることを学ばなければならないわ。》子供はそこにいる。家も本もある。しかし子供が話しはじめるや否や、彼はあなた方を自分の世界に無理にも呼びつけるの

であるがそこへ誰もが入りづらく、心は重いのだ。おそらく彼女は自分の息子がまだ自分の乳房にすがったり、あるいはゆりかごの中で眠っている時の方がもっと多くの慰めを見出していただろう。

「いい天気だね、私はヴェヴェイまで雑誌を探しに行つてくるよ。」とジャンがある朝髭を剃りながら言った。

彼は急ぐこともなく服を着おわるとしばらく、自分が花のことしか考えてはいなかったかのように庭の中に止まっていたが、それからゆつくりと道を辿つて行つた。彼はケープブルカーに乗り遅れてヴェヴェイまで走つていった。彼が駅に着いた時、ギイは四方を見回しながら広場を歩き回っていた。彼はジャンを認めると手を挙げて直ぐに言った。

「上手く行きましたよ。彼女が受け入れてくれました。すべては落着です。」

「ナタリーに会つたのかい。」

「はい。」

「ジュリーと一緒にかね。」

「そうです。」

「アパルトマンは立派なものだったんじやあないかね。アリーヌの部屋は見事なものだろう……。広場を横切つて、公園で話そう、ベンチもあるし……。アリーヌは今は大きな娘になっているだろう……。ほとんど若い娘というところだろう、君は彼女に会つたのかね？」

「ジュリーが会いたいと言つたんですが、眠っていましたからね。」

「彼女は病気だったのかね？」

「いいえ、まだ起きていなかったんですよ。」

「ナタリーを君はどんな風に思ったかね。」

「会ったのが初めてですからね……。私には判りません。」

「ジュリーは何と言っていたかね。」

「彼女は私に、『ナタリーは変わっていないわね、まったく同じままの人間だわ。』と言っていました。」

「それはどんな人間ということなのかね。」

「彼女がリモージュで知っていたのと同じ女、同じ顔、同じ言葉、同じ仕種という……。」

「彼女は悲しそうなのかね。」

「そうですね……。彼女は風変わりな人ですね……。」

「君の印象はどうだったのかね。」

「辛そうな感じですね……。あなたは私に一生涯忘れられないような使命を託されたんですよ……。」

「君が部屋のなかに入った時、君はどう思ったのかね、そして何を見たのかね。君は何でも言ってくれていいんだよ。それは不幸な人の家の様だったかね。」

「その客間は正にリモージュのものと同じように思えましたよ。」

「あの素晴らしい客間かね。」

「誰もあそこでは寛ぐことが出来ないような……。」

「ジュリーは君にアリーヌのことを話したかね。」

「あなたはジュリーとリモージュで会えるでしょう……。自分でお尋ねになったらどうですか……。私

にとつてはそのすべてはあまりに新しすぎることでした……。」

「君は判ってくれると思うけど、私はアリーヌのためには何もしてやることが出来なかった、側からもそして離れてからも。子供を争いの真つ只中で育てることはいいことなのだろうか。私は姿を消すことを選んだのだ、彼女を全面的にその母に委ねることを……。その小さな頭を私の存在の思い出でかき乱したりしないことだよ……。母親というものはいつても完全に自分の娘を育てるものなんだよ……。若し私が死んでいれば……。父が死んでも良く育っている子供は何人もいる……。彼女のために私は死んでいようと思つたんだ……。特に彼女を乱さないことを……。何も思い出させず……。私を消してしまうことを……。」

ジャンはベンチの上にくずおれた。そして長い沈黙の後でまるで自分の頭痛を訴えるようにして額を腕で支えながら言つた。

「それは恐ろしいことだ……。」

彼は虚ろな目をして身動きしないでいた。それからギイのことを思い出して、同じようなぼんやりしてはいるが重々しい表情をして言つた。

「それで……ナタリーは受け入れてくれたということだね。」

「彼女は受諾しました、しかし彼女が理解してくれたのかどうかは私には判りません。彼女はずっと喋っていました。そして彼女はこう言いました。《私はジャン・バルヌリーの妻です。私は彼が望むことは何でもやりましょう。》」

「君は彼女が株券の所有権を保持しており、配当金を受け取り、私は彼女にお金を送ることを上手く説

明してくれたんだね……。」

「彼女は何も耳を傾けてくれません。しかし彼女は同意しているのです……。私は思い違いをしているわけではありません。フレデリックは確かに彼女に会いに来たのです。そして彼女に私の持ってきた財産目録を渡していました。それは役に立つでしょう……。」

「確かにそれは役立つだろう。」ジャンは膝の上の書類を広げながら言った。「私はそれを調べてみよう……ほら……もう判った……石版印刷の道具は三十万フランと評価されている。あれは二百万フランに相当するものだよ……。そうだ、フレデリックは危険な目にあっている……。彼は自分の保有株をポールに売らなければならないだろう……。ヴェウエイに食事に行こう。私は戻らないとポールに電報を打っておこう。」

「ポールが心配しているでしょうね。」

「おそろくね、しかし今夜遂に説明することにしよう……。君は私と一緒に弁護士の所まで随いてきてくれるね……。彼ならフランスの法律を知っているし、私たちに忠告を与えてくれるだろう。今日の午後は君とよく相談しよう。私はまだいくつか君に頼みたいことがあるんだよ。それが済んだら君の農場に帰っていいよ。私は今週リモージュに行く……。君は今晚はヴェウエイに泊まったほうがいいよ。今は君が私の家に来るのはまずいんだよ。私はポールに話すつもりだ。それは彼女にとっては辛いこととなるだろう。しかし彼女は勇気はあるからね。」

食卓が整えられサラダが準備された。それは今年の初物のレタスだった。しかしポーリーヌは楽しくない気持ちで引き抜いたのだった。ジャンが戻って来なかったからである。彼女は玄関のステップの所に腰掛けて、長い間満開の梨の花を眺めていたが、それはまるで晴れた日と鳥たちのさえずりと穏やかな草原が、この世界に対する避難所を守っていたかのようなようだった。一人の女が電報を持って庭の階段を上がってきた。《私はヴェヴェイで食事する。委細は夕刻説明する。》

彼女はマックスを呼んだ。

「私たちは二人だけで食事をしましょう。お父さんはヴェヴェイにいるのよ。それから後で森のなかにおやつを食べに行きましょう。」

彼女はパイ包みの小牛肉の壺の中に刺して、子供のお皿にそれを盛りつけ、自分がかぶりついた金色のパテの一切れを指の端でつまみ、サラダ菜の一枚を味わった。

「マックス、ゆっくり食べるのよ……。いいえ、今日直ぐには出掛けないのよ、私ちよつとお休みしたいの。二時に出掛けましょう。その時は呼んであげるわ。」

彼女は布貼りの長椅子に横になり、本を開いた。それから外出するためにマックスを探した。

「母さんはおやつを持っていくと約束したじゃないの。」と子供が言った。

「おやつは帰ってからいただくことにしましょう。」

「さつき森へ行くと言ったじゃないの。」

「森は遠すぎるのよ……牧場にいつてらっしゃい……。」

子供はひな菊を集めて、束ねてあつたが湿っていたそれらを母に差し出した。彼はいろんな質問をしてから、ポーリーヌの服を引っ張った。そして彼女は込み入っていて伸しかかる思いから永遠に逸られる様に感じた。それから動くことと孤独を必要としたのだった。

「いいえ、今日はお茶は要らないわ。」彼女はカーテンにアイロン掛けをしていたローズに言った。彼女は空腹であつたのでマックスと一緒に台所で立つたままでサンドイッチを食べた。

彼女はアイロン掛けの済んだ二つのカーテンを取り上げて、それをベッドの上に置き、椅子の上に上がった。それからカーテン・レールを外すためにまた下りて不器用な手つきでカーテン・リングを滑り込ませた。

「ローズ、マックスと一緒に居てやってちょうだい……。」

テーブルの上に立つて彼女がカーテンを取り付ける間に彼女は往来にジャンを認めた。彼女が窓を開けると彼は頭を上げた。

「ジャン、私……よ。」

「ちよつと待っていてくれ。」

彼はポーリーヌを見ないで部屋のなかに入り、その部屋に春の感じを与えていた爽やかなモスリンにも気付かないでいた。

「こつちにおいて、ポーリーヌ。私は重大な問題で君に話さなければならぬんだよ。その問題がこの数日間私の頭を離れなかったんだ……。君もそれを感じていただろう。ギイが家族を代表してバルヌリー

商会の指揮を私に頼んできたんだ。フレデリックはあまりに多くの失敗を重ねてきたんだ……。ちよつと待ってくれ……。この立場は今私に必要な俸給を確実に得させてくれるんだ。私たちはボンメレル商会の送金で生活している。しかしその方面にも色々な心配事が生じているんだよ。」

「私たちはスイスで職を探さなければならぬわ。私たちは引きこもってしましよう……。リモージュに行つて、そこに住み、恐るべき事業の中に入つて工場の奴隷になるなんて……。あなたの人生は全部がそれに吸い込まれ、失われるのよ。この素晴らしい生活を捨ててしまふなんて……。ああ、嫌だわ、いいこと、私真つ平よ。」

「私は確かに給料のことを考えている。しかしどんな仕事も私にピッタリしているということはない……。どうか君に説明させてくれ、私が考えていることを自分にも納得させてくれ、私が感じていることも。それは吟味してみる価値のあることだよ。それから後で判るだろう……。私はここで何もしないで素晴らしい年月を過ごしてきた。そして活動したいという抗いがたい欲求を感じたことは無かつた。確かに私はつづがなく過ごしてきた。しかしここで自分の能力、非常に深い関心事、ある種の家族的で本能的な責任に対して直接に訴えられたのだ……。それに私は何もしないでいることにもうこれ以上耐えられなくなつたんだよ。私はバルヌリー商會が消えてしまふことは受け入れたくないのだ。バルヌリー商會は何千という職工たちを養っている。そして間接的にはこの偉大な商品の取引の動きで生活している多数の関連企業を食わせているんだ。私はバルヌリー商會を信頼し、その存続を信じてきた人々が砂漠と化した町の真ん中に捨て去られてしまふのは望まないのだよ。」

「バルヌリー商會は無くなつてしまふの？」

「そうだ。一つの非常に大きな事業は脆いものなんだよ。フレデリックはアメリカのことがまったく判っていない。彼は決してリモージュを離れたことがなかった。」

「あなたはリモージュを出てからとても長いわね。」

「私は必要だと思われるんだ。ともあれ私は一つの計画があるんだ。」

「どんな計画なの。」

「それは今は君にも言えないんだ。それは私が思いついたものではないからね。私は単にバブウゼの考えを採用しただけなんだよ。彼は非常に頭のいい男だ。ただバブウゼだけでは皆に愉快ではない彼の考えを押しつけることは出来ない。それで私がそれを押しつけることになる、それだけのことだよ。間もなく私を呼びつけた人々は後悔するようになるだろう。私はすべての者の敵になるだろう。しかしバルヌリー商会は救われるのだ。」

「あなたはまるでもう決まったことのように話すのね……。でも、ジャン、良く考えてはいないんじゃないの……？」

「いや、そんなことはない。」

「あなたは幸福な人間であることを受け入れることが出来ないのね、……自由で、……無為の生活を……。他の人々のように闘いの中に入っていかなければならないのね……。人間というものは途中で止まることが出来ないわ……。私も反抗する本能は持っているわ……。私は陶器以上に大切な何かが壊されるのが判るのよ……。私たちの愛は終わったのね。それはどこであれ地獄のなか……煙のなか……敵たちの中で生きることが出来ないんだわ……。」

突然静かではあるが素早い声で彼女は言った。

「あなたが私に言いたくないそのプラン、それをあなたは どうして押しつけることがお出来になるのよ。あなたは経営者になるんですよ。でもあなたは一株も持っていないのよ。」

「ナタリーが私にそれを与えてくれるんだよ、すると私は大部分を保有することになるんだよ。」

「ナタリーですって、……あなたはナタリーにお会いになったの……私はもうぜんぜん判らないわ……。でもそれはどういう意味なのかしら。」

「ギイがパリで彼女に会ったんだよ。彼女は私にその株券を預けてくれた。その名義は彼女に属するものであるし、その配当も彼女が入手するのだ。しかし株主総会の投票権は私が持つのだよ。非常に複雑であると同時に単純なことでもある話だよ。私は今日弁護士に相談してきたんだ。」

「それじゃあそのすべてはナタリーに配当を与えるためのね。」

「その理由だけで十分ではないかね。君は私がなぜあの株券をナタリーに与えたかを知ってるね。あの立派なやり方で私が彼女に無価値の株券を与えたことになることを君は望んでいるのかね……？　すぐに彼女が惨めな状態に陥ってしまうのを。判つてくれないのかね。」

窒息しそうな声で彼女は言った。

「私は良く判っているわよ。」

「いいかい、私には受け入れる理由がたくさんあったんだよ……。込み入ってはいるが非常にのつびきならない理由が。そしてそれは私を衝動的にさせたが、君に相談せずに直ぐに承諾してしまったんだよ。君も僕と同じように感じると思うけれど、その必要性には極めて素早い決心で答えなければならなかつ

たからなんだ……。私は君が認めてくれることを確信していた。そして私はただ君が私の内面が自分にもっとはつきり見えるように手助けしてくれて、私を励ましてくれるだろうと期待していたんだよ。」

これらの言葉はポーリーヌには届かなかった。彼女は少しばかり取り乱してぼんやりしているように思われた。それから決然として部屋のなかに入り、ベッドの上の最後のカーテンを手を取った。それからカーテン・レールを探して、機械的にリングを滑らせたのだった。

ジャンはコートを着ないで、頭には何もかぶらずに家の外に出た。そしてにおいあらせいとうの方に屈み込んだ。彼は氣を使つて雑草に一撃を与えた。そしてそれは土のなかの足場を投げ出すことはなかったが折れてしまった。風が冷たかったので彼はまた家に入った。

彼は部屋の側から聞き耳を立てた。そして間を隔てたところからかすかな泣き声を聞いた。そしてポーリーヌが顔を両肘の間に埋めて、テーブルの上にくず折れて体を鳴咽で震わせながら、氣が狂つたように涙で息をつまらせているのを見たのだった。

「どうしたんだ、ポーリーヌ。」

彼は意表を突かれて、呆然として立ち止まったが、それは誰もその治療法を知らない事故か病氣の前に出くわしたように、意氣粗相したこの肉体の中に起こつた非常に内面的な苦しみによつて当惑させられているかのようなだった。

「もう泣かないでよ、ポーリーヌ。君の望むようにするから……。まだ何も決まっては居ないんだから……。」

彼女は彼がそこに居るのに氣付かなかった。どんな言葉もこの何も聞こえず盲目で近づくことが出来

ないこの人間の心を動かすことは無く、孤独の苦しみと、絶えずその肉体の底から、両手に埋まり、激しく揺さぶられたその頭に昇ってくる絶望の奔流で身を震わせていたのだった。

敢えて近づくこともなく、沈黙して彼は自分が慰めることは出来ないが、徐々に汲み尽くされてきたその悲しみを眺めていたのであった。

愛情のこもった素振りでも彼を遠ざけながら、彼女は遂に、彼が自分の苦しみには無縁であったかのように優しく言った。

「私をほつといてくれない、ジャン、外に出ていてよ……お願いだから一人にしてちょうだい。」

彼は古い冬用のコートを着て、街道をモンタンベールの農場まで登っていた。そしてその絶望に心を傷つけられはしたが、その告白は謎めいていて、心を動かすものではあった。しかし彼の心に訴えるものはなかったのである。

突然次の様な考えが彼の心を打った。《ポーリーヌは私がナタリーのことを話したときに押し黙ってまるで心臓が撃ち抜かれたようによろめいたのだ。その涙の原因はこれなのだ。》

彼は彼女が自分と同じくナタリーに対する自分の義務を理解しており、彼女はそれを認めていると、そして彼女がその犠牲を受け入れるだろうと思っていた。彼は彼女をいつも自分よりは優れていると考えている。彼は彼女が分別があり、気高く、勇気があり、非の打ち所がないとのみ見ているのだ。ここでは彼女はすべての他の女たちと同じように、最も卑しい感情に屈伏しているのだ。

しかし彼が愛する女はその様な女ではない。突然彼女は彼の目にはその顔を変えたのだ。彼女はまるで色褪せたかのように、その同じ肉体の内で別人になっているのだ。

彼女を尊敬しないで愛することは可能なだろうか。別のイメージを再構築し、様々な卑小さを持っている彼女を愛し、諦め、それに自分を合わせる必要があるだろう……。彼女の弱さ故にますます彼女を愛し、人間らしい彼女をよりいっそう愛さねば……。

《ありのままの彼女を受け入れること、……この受け入れから本当に愛というものが始まるのだ……。彼女は自分以上にある種の人生の形に執着しているのだ。彼女は自分以上に深い根を持っているし、自然さも同様だ。自分が自分の欲望の彼方からの様に頭のなかで自分が同意している犠牲、彼女はそれを心では感じているのだ。苦しむのは彼女なのである。犠牲を引き受けるのは彼女だけなのである。彼女の涙にはいっそうの真実があるのだ……。》

「ポーリーヌ、私はどうしても君に話したいのだ……。」

彼女はエプロンを付けて台所の棚から箱を一つ取った。

「私は君が悲しんでいるのは良く判っている……。君の気持ちは判るんだよ。」

「若しあなたがそれを理解してくれるにしても、私をここに結び付けていたものは私の心をあまり引き止めなくなっているのよ。」

「若し君が私と同じように精神的な必要を感じることが無ければ、……私はリモージュに行くのを断念するよ。私は君を愛情のない困難な道へ引く張つていくことは望んでいないのだ。」

「若しあなたが私のように、私たちがここで大切であるもので、他の地に移すことが出来ないものを放棄しようとしているとは感じていないのでしたら、それはもうあまり大切なものではなくなってるわ。」

「私もそれを感じているさ。私だって……。でも若し君があれ程悲しんだのは、それは住居が変わると

いうことだけからなのかね。率直に私に言つてほしいんだよ。」

「私はお食事の準備をしなければならないの。ローズは行つてしまうのよ。」

「彼女は待つてくれるよ。」彼はポーリーヌが開けたばかりのドアを閉めながら言つた。「まだそんなに遅くはないよ。」

彼女は坐つて早口で言つた。

「ねえ、いいこと、ジャン、私はあなたが私たちを待つている生活を正確に想像できているのかどうかを考えたのよ。私は又も少し軽率に、手遅れになればあなたが後悔することになるかもしれないような無私の動きに譲歩しているのではないかと心配なのよ。」

「リモージュで私を待つているものは何であるかは判つてゐるよ。私はリモージュは知つてゐる。私はそこではとても苦しい思い出を持つてゐるのだ。工場の仕事、それも毎日のそれ、休むこともなく一つの大事業のごく些細な事にも身を傾け、手には舵を持ち、暗礁に乗り上げはしないかと注意しながら、いつも冷静な想像力を働かせながら、不屈の注意力を持つて働く毎日の仕事を。しかしそんなことは大したことではない。自分と闘ひ、フレデリックを追ひ出さなければならぬまい。それは新しい生活の始まりなのだ。そこでは一つのテキストを参照せず、弁護士に相談しないで、反抗や訴訟に出くわすことなしには誰も動くことは出来ないのだ。私はと言へば吐き気を催さずに法廷の青色の紙の書類を見ることは出来ない人間なのだ……。それに失つた時間を取り戻さなければならぬ。ドイツ人たちは進歩した。原価を下げるために新しい工場を建設し、アメリカで変化した好みというものを満足させなければならぬのだ。そのためには誰も貸してはくれないだろうが、数百万フランが必要になる。私はその工場が完

成しないかぎりには労働者の賃金アップと家族への配当は拒否することになるだろう。おそらく騒ぎやストライキが起きるだろう。私はリモージュで最も嫌われる人間になるだろう……。成功するにしろ失敗するにしろすべてのことはやってみるが、それは私にとってはほとんど同じようなものなのだ。

ポーリーヌは注意深く、しかし困ったような顔をして聞いていた。

「ジャン、私たちはリモージュに行きましょう……。」

「本当にそう思うのかい。よく判らないな……。」

「それは必要よ……。私は確信するわ……。あなたはそれを断念することはないわね……。」

彼は坐った。

「私には判らない……。それは大変なことになるだろう。」

∴

靴下を履かないでサンダルで、ジャンは牧場の縁に坐った。大空の輝きが霧の中で銀色の粉末になって空中に残っていた。ジャンは微風の中で少しばかり苦い香りを吸い込んだのであったが、それは西洋山査子の海草のような臭いで、彼にとつてはいつもひそやかな芳香を、つまり五月の晴れた朝の煽情的な後味である大洋の感じを持つものであった。

彼は何通かの手紙を書くために家に戻った。太陽はまだ部屋の中には入り込んではいなかったが、そこではその蔭は陰鬱だった。彼は開いたノートに視線を投げかけて、一カ月前に書いた章句を読み直し

た。《大聖堂の芸術に対する火事の影響、それは新しい装飾を可能にした、……余りに高いところにあるので視線から逃れてしまう彫像や細やかな装飾……燕たちのための美。》彼は自分がそれらの言葉に結び付けていた感覚をもう思い出さなかった。ここでは数年来、彼の思想は何の繋がりもないやつと感じ取られる感覚の未完の注釈から出来上がっていた。

そのノートを閉じる前に彼は次のように書いた。《私は離れていくことになるこの国は何と定義したらよいのか判らない。

一つの風景ではなく、空間、地平線の目立たないカバーなのだ。裕福さ、生活の自由さ、本当の生活の測り知れない微妙な組織。》この言葉は一つの対照によつてのみ説明することが出来るのだ。彼はすでに精神全体を独占し、人を壊滅させてしまう細かな事実という厳密な関心事を知っていた。

彼は自分の弁護士とバブウゼとデッカに手紙を書いた。それからポーリーヌと外出した。彼女は最早彼にとっては少しボンヤリして快適な生活と混同されるような女ではなく、一つの隠れ家であり、束のものから後まで生き残る魂なのだ。ポーリーヌはそれを自分がまったく理解せず、認めることさえ無くても、夫の運命が彼を呼び寄せる所まで彼に随っていくために自分のものではないあらゆるものから離脱して、自分の弱さや恨みや好みなどを克服することが出来たのである。この散歩の間に彼らはすでにこの国から心が離れていた自分の周囲の何も見ず、しかし優しく寄り添いながら、黙って歩いて行つたが、それは人をよりいっそう深刻であり、孤独にさせるものであり、お互いにもっと必要なものにさせる一つの不幸に見舞われたかのようなだった。

ポーリーヌは自分の生活全体に影響を与えている決定を受け入れて、直ぐに極端な諦念に到達したの

だった。しかし彼女は自分には許せないと思えるような小さな苦痛や細かな不自由に感じやすいのは変わりはない。彼女はジャンがちよつとでも席空きになるのは我慢がならなかったのである。何度か彼はリモージュとパリに出掛けていった。彼が戻ってくると、ポーリーヌは彼に言った。

「私たちは出発しましょう。私はリモージュに住んだ方がいいわ。」

「形式的な手続きはまだ終わっていないのだ。フレデリックはまだしばらくは自分のポストを守る権利があるんだよ。私はその期間を縮めるようにしなければならない。おそらくこの夏はまだここで過ごすようになるだろう。それは仕方がないことなんだよ。」

リモージュではジャンはホテルに泊まった。そして彼が朝早くからバブウゼの所へ行った時、彼は食堂で迎えられた。ジャンは木々の植えられた庭に面した窓の側の帝政時代風の机の前や安楽椅子に坐った。食堂の角では七宝で飾られた小さなガラスの戸棚がバブウゼの唯一の贅沢を示すものであった。彼は自分が解雇されたことを議論しても無駄である災難として受け入れていたのだった。彼はそれで不当であるとか会社にとつての損害であるとは思っていなかった。しばしば彼はロベール・バルヌリーがちよつとした過失で一人の社員の首切りをするのを、真面目に勤めた二十年後にも見ていたのだった。献身的な生涯の終わりのこの転落は自分には致命的で死のように神秘的なものの様に思えたのだ。

「あなたは間もなく工場へ戻ることになるでしょう。」とジャンは彼が仕事に就く前に励ますために言った。

そして直ちに書類を広げて、ジャンはシャトネーを待ちながら細かな質問を始めた。新しい工場の配置をどの様に決定するかが問題だった。そのプランはジャンが支配権を握るようになる日には出来上が

るだろう。

青空色の大きな紙の上に眼を固定して、仕事場を示している四角い白い紙を移動させながらバブウゼはジャンの質問に、愛想はいいが忙しそうで良く考えたような風をして答えたのであった。彼はまだブルンドの髭と明るい色のヴェストと、どんな不名誉も修正することが出来ない少しばかり気取りすぎた態度を今も失わずにいた。ジャンが「あなたは間もなく工場へ戻ることになるでしょう。」と言った時、彼はちよつと感謝の気持ちで頭を下げたのだったが、彼の微笑は二本の折れた歯を覗かせたのだった。しかし彼はそんなことが起こるとは夢にも思わなかったし、何ものも既存の権限やフレデリックの主権を揺るがせることがあり得ると思わなかった。そしてジャンの訪問、彼の計画、この新しい工場など、あれ程の真剣さでその詳細が議論されたものは彼にとつては一月に二度か三度彼の家の食堂に集合した空想家たちの気を紛らせるために行われた遊びのように思われたのであった。

ジャンはポール・デツカを通じてフレデリックの株を買わせて、フレデリックに無理にも譲歩させることを考えていた。それらの株券は長らくポールに何の収入ももたらすことはあるまい。一人ジャンだけがそれを知っていた。そして自分の従兄弟がいつかその事で自分を非難するのではないかと思っていた。しかし医者にとつての全快のようにその目的と成功の必要こそがもつぱら重要なのだった。彼は自分の考えや言葉において差し迫った目的以外の手段のことは考えてはいなかった。彼は自分が使ったこともない言葉や、非常事態が求める機知や頓智を身に付けたのだった。しかしこの休みのない、そしてしばしば粗っぽい活動の内、しかも極めて卑小で束の間のもので、直ぐに忘れられる努力の連鎖において彼は最も純粋な公正さを感じていた。そして彼は自分の仕事を忘れてしまうのだった。

一人の社員がフレデリックの事務室の扉をノックした。

「ジャンさんが会ってくれるかどうかを尋ねておられます。」

フレデリックは立ち上がって、隣の部屋に入り、ジャンの片手を握り、それから何も言わずに自分の従兄弟を従えて自分の事務室に戻った。

「フレデリック君、君は自分の経営が君の兄弟や義弟たちに承認されてはいないということは判っていますね。彼らは君のような経験は無い。しかし君は事実の前では退かなければなりません。誰しも君の権限を刷新することは望んでいません。そして私がバルヌリー商会の指揮をとることを求められたのです。私はそれを受諾しました。ナタリーの株は私のものです。ポールは君の株を買い取ることを望んでいます。彼はそれに対して良い価格を、それも君がナタリーに申し出た価格の五倍を支払うでしょう。そして君は私が指揮することになる事業に利害関係を持つことは望まないでしょう。従って私は君に、ポールの提案を直ぐに受諾することを忠告したいのです。直ぐ気が変わることもあり得ますからね。」

フレデリックの無言は人間の本能的な防衛の手段であった。そしてそれは彼が種々の厄介事を遠ざけて、ショックを和らげることを許してくれるのである。彼の黒い目はある一点に固定されていたのでますます黒く見えたとし、大きくなるように思われた。彼の褐色で神経質で骨ばった手は紙切りナイフを握りしめていた。

彼は忍耐強く、細かな手練手管で、父の会社を破壊してきた無知の者や気違いたちの侵入に対して父を防衛してきたのである。彼が恐れていたことの全てが今やなし遂げられたのだ。

この沈黙に気詰まりになってジャンは立ち上がった。

「話はそれだけのことです。良く考えてみてください。すべてが上手く落着くことを望んでいますよ。」

フレデリックは扉のところまでジャンの後に付いていき、一人の事務員に言った。

「今日は誰にも邪魔されたくないんだ。」

彼はテーブルの前に坐つて目録を取り、自分の家の庭のために注文しようと思つていた葎の木をノートにメモし、それから工場の階段を、ステップだけを見ながら小刻みに降りていった。

彼は自分の家に着くと、皆が机に向かつて坐つていた。美しい食卓、非常に白い繻子のテーブル・クロス、白くて繊細で装飾のない陶器。妻と子供たちがその間で話している。彼は何も言わないが、自分の肩の上に登つてきて、彼に頭を擦り付ける大きな黒猫を愛撫する。食後彼は庭に出て、花壇を調べてみる。使用人が閉める重い鉄の扉の音が聞こえてくる。子供たちは就寝するところなのだ。彼らは客間で行われる夜会から逃れるために眠ると言っている。そこは高い天井のある美しすぎるもので、暗赤色の壁紙、並外れた入り口の扉、陳列ケース、金縁の額などで飾られている。彼らは自分たちの明るい部屋でお喋りすることになる。フレデリックは椅子の上に足を伸ばす。その足にはワニスの塗られた古い靴を履いている。それからまた立ち上がつて、腕時計の金具から極少の鍵を外す。彼はガラス戸棚を開けて黒人芸術のオブジェを取り出す。それは小さな立像や醜惡な仮面などで、彼はそれを撫でたり机の上に置いて、愛情を込めてじっくり眺めるのである。

ジャンは売買契約によつて、ポワチエ街に十ヘクタールの土地を確保しており、そこに新工場を建設するのである。この界限にはナタリーが五年間住んでいたラルマンデイーの家がある。

ジャンはリモージュに滞在中は至る所でナタリーの面影に出くわすのだった。この忘れられない女は自分と他人との繋がりを感じさせるがその不幸は自分の過失なのだ。

しかし直ぐにジャンの考えはアリーヌの方へ移っていく。ジャンの知らないその娘は彼の心の中で彼の夢に従つて大きくなっている。

パリでは二日しか余裕がないときでも、彼はメッシヌ街を通るのを忘れることはない。彼は遠慮がちに歩道を進んでいき、あるレストランの窓の後ろに坐り、通りを観察するためにカーテンを少しばかり遠ざけるのだ。おそらく彼は娘を認めるだろう。しかし沈黙の契約を破るのにはまだ余りに早すぎるのだ。彼女が二十歳にでもなれば、奇妙な出会いをと想像しているのだ。突然彼女は彼の娘になる。そして彼は彼女に言う。《私は遠く離れていた、しかし私はお前のために働いていたのだ。》

彼は自分が思っていたような娘を見たかのように幸福な気持ちになつてそこから立ち去るのである。

白のヴェスト、晒してない絹のジャケット、カンカン帽といういでたちで、ポール・デッカはジュン

シュロルの隣の駅でジャンを待つていた。彼の馬は木陰にあつた軽二輪馬車につながれていた。ジャンは駅から出てくると自動車の方に歩いてきて、振り向いてその従兄弟を見つけた。

「これはシュルピエル家の車ですよ。……デッカは言った……私は軽二輪馬車に乗ってきました。ちよつとした散歩には車よりもこの方がいいんですよ。私は近頃はあまり外出することはありませんしね。」

いつもよりも引き締まつた様子であり、少し冷やかであつたが、デッカはジャンがトランクを小さな車に乗せるのに重さが均等になるように手助けして、彼の後から乗り込み、手綱を手に取つて馬の横腹に鞭で軽く触れた。そして馬は首に付けられた鈴を鳴らして速足で走りだした。

「ジュリーは元気ですか。」

「彼女はあなたに会えば喜ぶでしょう。暑さが妻にはこたえるんですよ。」ほとんど素っ気ない思い切つた口調でポールが言つたが、ちよつと引きつって顔色が変わつたのだった。

彼は続けた。

「フレデリックには会いましたか。」

「私はあなたの申し出を伝えました。若しあれが会話と言えるのであれば、それは心のこもつたものでした。彼は何も言いませんでした。」

「何も言わなかつたのですね、しかし彼は最後には受け入れるでしょう。」

デッカは他のことを考えているのか、無理に話をさせられているかのようにこれらの言葉を発した。それから鞭の先で公園の赤ブナと樅の木を指して付け加えた。

「これは私の義父が植えた樹です。大きくなりました……。十年前に私は駅にそれを取りにいったのでした。その後世の中は何と変貌したことでしょうか。」

すいかす。
忍冬は玄関を取り囲んでいた。広間には同じ絵が同じ場所にさげられていた。しかし悲しみが伸しかかっていた。ジャンは以前にここに來た時のことを思い出したのだったが、その時は木々の間の入口の庇のところから、汽車が通過したり、馬車が往來を離れて大通りの中に消えていくのが見えたし、ジュリーが明るい衣装で笑いながら迎えてくれたのだった。

彼らは客間を横切った。そしてジャンはジュリーが青いフランネルの部屋着を着て、風を遮ったひじ掛け椅子の一角に横になっているのを認めたが、彼女は暑さにもかかわらず両足の上には刺繍のされた白いウールの覆いを掛けていたのだった。彼は彼女の顔の蒼白さに驚かされた。彼女は両頬の小さな赤いしみを厚化粧の白粉で隠していたのである。そしてその目はそれと反対に鋭い黒さできらきら輝いていた。

「ここでああなたにお会いできて嬉しいわ、ジャン。」彼女は両手を彼の方に差し出して低い声で言ったのだったが、デツカは彼女の後ろに身を屈めて彼女の額にキスをした。

「興奮してはいけないよ、ジュリー。」

「ジャン、あなたはジョンシュロールで過ごしたヴァカンスのことを覚えているかしら。私がチュールのお城で、シュルピエール家のリリーやその女の双子の子供たちとコメディーをやったわね。」

「リリーか……。彼女はもうなっているんだろうね。」

「彼女には大尉の息子が居るのよ。」

「大尉のかね。」

「あなたが子供の時にはよくお芝居をやったわね。私、あなたが厳密な俳優ではなくても、作家になるものと思っていたわ。そしてあなたはお父さんが言っておられたように、ささやかな陶器の製造者になろうとしているのよ。それは私にすれば思いも寄らないことなのよ。確かにギイがミルクの商人になるとは思わなかったわ。バルヌリー家の人は皆変わっているのね。私はあなたに私の部屋のギイの絵を見せたいと思うの。彼は才能があるのね。父は彼を非難していたけどね。それはどうしようもないことなんだわ。」

「ジュリー、あまり話し過ぎてはいけないよ、興奮しないようにしなければ。」デツカが言った。

「私は今日は気分がいいのよ……。本当よ、ジャン、私はあなたは作家になると思っていたのよ、というのあなたは十二歳で小説を一つ書いたでしょう。」

「小説を？」

「小説の最初のページよ、『エレヌ』という題名だったわ。そのヒロインがリリーだったのよ。今だったらあの人の生涯は作家の創作欲を刺激するかもしれないわ……。それにあらゆる人の生活が……。私たちの周りにはなんて変わった人ばかりが居ることかしら、そう思いませんか。でも驚くべきなのはあの人の母親の人生ではないかしら。シュルピエール夫人は誠実なリモージュ生まれの人でしたわね、一人の聖女ね。すべての聖女と同じく彼女は自分が愛していない男と結婚し、自分には気に入っていない場所、自分が我慢できないような人々に囲まれて生きていたのね。それから彼女は反乱したのね、でもそれは内密のことだったのよ。彼女は自分の娘には自分のとはまったく別の人生を、恋と自由の人

生を送らせようと誓ったのよ。そしてリリーは恐ろしい教育を受けたのよ。でもその素晴らしい教訓は何の効果も無かったの。リリーはラルマンディー夫人が仕組んだ政略結婚をしてしまったんだわ。彼女の母はこの彼女の裏切りを決して許さなかったのよ……。私は、彼女たちはリリーが何人かの恋人を持った時に仲直りをしたんだと思うのよ。」

「本当に母親が自分の娘を墮落させることなど出来るんだらうか。母性愛というのは……。」

「墮落が問題ではないのよ、そうじゃなくて良い忠告というものが大切なんだわ。ただ忠告するには個々の人間にとってそれぞれの流儀があるでしょう……。ああ、母性愛というものは測り知れない感情なのね……。最も利己的であると同時に最も寛大であり、最も卑しいのに最も崇高で、盲目で、しかも聡明なのよ……。」

「ちよつとワインを見てくるよ、……ポールが言った……白と赤のどちらがいいですか。」

「そちらの良いようにしてくれますか。」ぼんやりした風をしてジャンが言った。

彼はジュリーの方へ向いて、蔓バラが金色の飾りを隠している肘掛け椅子の手すりを眺めながら、低い声で言った。

「母性愛というものは人に疎んじられている者にとっては優しさだ……そこには神聖なものがある……。」

彼は口を噤んだ。そしてデッカが遠ざかると、突然言った。

「君はナタリーに会ったんだってね。彼女の何をどう思ったの。」

「彼女は変わっていなかったわよ。彼女についてはどんな特徴も古くなってはいなかったわ、……その

目鼻だちだつて。その固定觀念が身動きできないようにさせてるのよ……。その人生は外を流れてるのね……。ある種の精神の緊張は永遠の若さを保っているんだわ……。ナタリーは私には彫像のように思えるのよ。忠実さの彫像の様に。」

彼女は微笑んでいる。ジャンは彼女を深刻そうに眺めたのだった。

「それからアリーヌはどうだった？　彼女は私が望んでいるように育っているのだろうか。」

「あなたは要求が多いのね。ナタリーは自分を犠牲者のように考えているのよ、特に聖女のように……。それはかなり気難しさや復讐欲を意味するものだわ。アリーヌは若し母親の言うことを聞いていたら、男について非常に尊敬した考えを持つというとはなくなるんじゃないかしら。でも私は彼女が母親の言うことに耳を傾けるかどうかを疑っているのよ。ともかくアリーヌは元気よ。」

「彼女の母親が悪い影響を与えているかもしれないと……。私を不安にさせるなどとは考えないでもらいたいんだ。私はもつと知りたいんだよ。」

「判りはしませんよ……。噂はあるけれど……。しかし本当なのかしら。でもそれは大したことではないわ。最も良く育てられた子供でも憎むべき環境には反抗するように育てられるものよ……。あなたは友だちのピエールの父で、ある種の色黒のアラビヤ人のフェルディナン・ヴーゼルを知っていたわね。彼は決してワインも嗜まず、アニス酒のグラスにも触ったことさえ無い人だったわ。というのはあの人は飲んだくれの父親のことが忘れられなかったからよ。」

「君は恐ろしい比較をするんだね。君がさつきシュルピエール夫人と、彼女が自分の娘に施した風がわりの教育のことを話した時、それは似ているからということではなかったのかね……。」

「あら、とんでもないわよ、ジャン、なんてことを考えるのよ、決してそんなことはないわよ、確かにあなたの娘さんは環境は良くはないけど、でもそれは本当に大したことではないわよ……幸いなことかもしれないわ。というのとはほとんどすべての子供は無思慮な母親に育てられているからだわ。抵抗とか再生の最善の力が共通の運命である悪い遺伝や悪い教育を乗り越えさせてくれるのよ。」

「アリーヌはブロンドだったかね。」

この質問、この好奇心の戦きは、《アリーヌは自分に似てるだろうか。》と言いたいのである。

ジュリーはそれを判っていたので躊躇った。それから彼の舌足らずの癖を強めたような気詰まりな口調で、

「そうよ、……彼女は見事なブロンドよ……カールした髪で……。」

それから早口で、

「それからあなたの息子さんは？ 間もなくリモージュに来られるのでしょうか。それは息子さんにとっては一つの変化だね。おとなしい子供さんなんでしょう。」

「非常におとなしい子だ……農民の様な。」

「なんですって。」

「スイスの農民の子供ということだよ、しかし自分でそれは判っていて、傲慢さえしているよ。彼は農民の真似をしているんだ。そこには違いがあるけれどね。」

「大きな違いだね。一年もすればリモージュ訛りになるわよ。」

「君も良く知っているように環境こそが重要なんだね。」

「それは大切であり、大切でもないのよ。」「私たちの子供は……。」
ジャンは敷石の上にデッキの足音を聞いて振り向いた。そして微笑みながら眺めたのだった。

∴

戸棚は開かれ、筆筒は大きく全開されている。そして散乱したベッドには下着類が積み上げられている。ポーリーヌはトランクの前に跪いて注意深く、最小のスペースを利用しながら、ジャンの下着を積み上げている。マックスはその混乱を利用してベッドの後ろの箱を開けたりしている。

「ジャン、マックスを向こうに連れてって。」

「僕は箱に紐を掛けるんだよ。」

「マックスを連れてってよ。」

彼女はトランクの方に身を屈めて、その叫び声は聞いてもいないように思われた。

「奥様、何か用がありますか。お米が焦げつきそうなんですよ。」

ローズが扉を開けた。そして煙が部屋のなかに立ち込めたのだった。

「しよがないわね、……私はまだお腹は空いてないわ。」

ポーリーヌはまだ閉められていないトランクの蓋を押さえている。彼女は苛立ってその中の仕切りを一つ外し、それをベッドの上にひっくり返した。それから頭を散らかった様々なものの上に乗せて横になるとすすり泣きを始めた。

もつと気が静まってから彼女はトランクの前に戻り、戸棚を点検し、引き出しを押し戻す。すべては空っぽになっている。シャツだけがベッドの上に残っている。窓から彼女は、砂利の敷かれたテラスなどには構わずに、萎れた花を投げ出す。マックスが先だつての散歩から持ちかえったひなげしの束と金ボタンがナイト・テーブルに載っているのを別にすれば、部屋にはもう花は無かった。

彼女はまた髪を結び直し、ブラウスを着替えて、マックスが食事をしていた台所に入った。

「あら、お坊っちゃま。」ローズが言った。「私が結婚していなかったら、リモージュまであなたに随いて行くんですけれど。」

沈んだ面持ちで、紙の積み上げられた上に足を載せて、ジャンは手紙類を選別している。ポーリーヌに気付いて彼は微笑み、片手で彼女を抱きしめる。

彼女は震えながらジャンの肩の下に頭を埋めたが、その涙は涸れていた。

「私は怖いよ。」

彼女は粗い布地に触れて心が和らぐのだったが、そこでは自分の愛する夫の温もりと骨格が感じられるのである。

「ポーリーヌ……泣いてはいけないよ……人生は長いんだから……。」

「ちよつと放して……、待っててね……私、力を取り戻すわ。」

第三部



リモージュの陶器

I

フレデリックの古い事務所の中のテーブルの前で、ジャンは眼鏡を掛けて、鋭い紙切りナイフを取って、アメリカからの郵便の入った大きな封筒を開いた。ニューヨークの店からリモージュに顧客たちの注文を伝えてきたのだったが、それらはかつてロベール・バルヌリーが自分の手で書いた六十ページにもなる規定に倣ってなされたやり方に従っていたのだった。《バブウゼはアメリカからの注文の処理を受け持っている。そして彼は発送の帳簿の社長室への引き渡しに至る全ての業務を指揮する。郵便の受領の後に続く期間には原簿に、白物（彩色を施されていない未完の陶器）の注文に対しての白物の需要が記入され始めることになる。その白物の需要の記入は最も遅れた時でも、注文の受け付けに続く日の夕方には行われなければならない。その需要の書き込みを終えないうちに、その晩事務所を離れてはならない。白物の需要を記入させると同時に、バブウゼはシャトネーの注文の引き渡しを遅らせることのないように、その期間中に色物の需要を記入させる。毎週色物の需要はロベール氏に送られる……》

一八九〇年、バブウゼにこの規約を送ってから、ロベール・バルヌリーは次の様に書いた。

《親愛なるバブウゼ君、私は君に新しい規約を送ります。どうか君に関係するページを書き写して、そ

の写しを私に送り返してくれませんか。君が実行するのが困難であると思う箇所を私に知らせてください。そうすれば私はあらゆる規定は実行するのが容易であることを示すでしょう。私は君がその最も些細な部分も厳密に遵守してくれるように求めたいのです。私がリモージュに出向く度事に、その規定を手にして詳細に至るまで検閲を行うでしょう。違反と思われるものを見逃すことが無い様に努めるつもりです。私は自分がそれを見出すことが無いように君が努めてくれることを確信しています。それこそが君が私に与えてくれる最大の喜びです。》

バブウゼがジャンにくれたこの古い手紙の内に、彼はロベール・バルヌリーの魅力を、物を手に入れるためには要求する必要はなく、傲慢な態度は弱さの印であると考えていたこの人間の優しくて非常に鋭い調子というものを認めたのだ。あらゆる人に有力な力を持つ彼の影響力は彼の決定の賢明さからやって来たのである。その鋭くて考え抜かれた思想は今日でも、常に道理を持ち、人々が喜ばせようと思っていたその人に対して、献身的な人々の仲介を通じて、そのあらゆる行動を規制していたのだった。

しかし上手く整えられていたその工場で、そこでは一人一人が自分が親しみを持っている仕事を見事に果たしている場所ではあったが、そこにも絶えず予期できない諸問題が起ころのである。二十年来、バブウゼは時間どおりに白物の需要を記入する。しかし製造する工場に注文を伝えるにせよ、彼はどの位のストックを保持しておくべきかは知らないのである。そしてそれはどんな規則が規制しているのでもなく、指導者の才覚を必要とする複雑な見積もりなのである。ニューヨークからその装飾や形について個人的な考えを持っている顧客の注文が伝えられると、バブウゼはその手紙を理解する。しかしその外国人の本当の意図を把握するためには、ジャンの直観を必要とするのである。

彼は特に装飾に専念し、窯への責任はジュベールに任せているのだ。しかし彼はリモージュの古い窯は一焼き毎にあまりに多くの廃棄物を出しているのには気付いていた。彼はジュベールの意見を受け入れて、絵の具の作成のために、雇ったばかりの化学者に相談し、様々な技師たちに尋ねたのだった。しかし様々な失敗や改革による心労、困難の増加にも拘わらず、不良品の高額な部分を減少させるという間断なき意志はジャンから出てきたのである。若しお皿の縁に金の線を書きながら、その縁の七宝が十分に焼き付けられていないと言えば、ジャンはその批評に耳を傾けて、焼き付け係に警告を与えた。彼は仕事場を横切って、突然一人の職工に近づいて言った。「君の石膏は気孔が十分ではないよ。」彼は他人よりも感じやすい肉体と、活動的な知覚能力、全体との接触における受容の能力をより多く授けられているように思われた。そしてそれが全体の指導的なエネルギーを集中しているのである。

時には彼はまるで眠っているかのように、大きな革の安楽椅子の中で数時間を過ごしたのであった。会計課のある事務員がその朝彼にこう言った。

「ピエール・ヴウゼルさんがお会いできるかどうかをお尋ねです。」

「今は駄目だ、十一時半にしてくれるかね。」ジャンは安楽椅子で身動きせずと言ったのだった。

..

ピエール・ヴウゼルの来訪が告げられた時、ジャンは父親と傘をさしてジュルダン広場を横切っている小さな少年のことを考えていた。そして彼はフェルディナン・ヴウゼル氏の中近東人の様な顔を思い

出したが、彼は髭は白く、しかし目の奥には黒いものを持っており、褐色の皮膚をしており、モーニング・コートのボタンを留めていた。その父と息子はいつも一緒に散歩していた。青年のピエールは絵を描いていたのである。そして社会主義の思想家たちの著書を読んでいた。しかし彼の才能や意見は誰も信用してはいなかった。彼の内のすべては、彼が父親と共に形成していた不可分の一对のものであるが故に、奇妙なものに思えた。

ピエールは漆黒の髭の中に囲まれた艶のない顔をしていたが、ジャンはそれで同時に息子と父親を認めた。それは正に老いることは出来ないが、フェルナン・ヴウゼル氏の黒っぽい肉体の内で教育された子供なのである。ピエールは完全に自分の父に似ているということとはなかった。ジャンの目には彼はフェルナン・ヴウゼル氏の絶対的な成熟には決して達していなかったのである。

ジャンは彼と握手し、椅子をすすめ、君僕でやり取りするべきかが判らず、遠回しの言葉で尋ねたりしたのだった。彼はフェルナン・ヴウゼル氏は死んでしまっているのかと思っていた。ピエールがこんなに悲しそうな顔をしているのは、彼が後に残されていたのだとどうして想像できるだろうか。

「私は時々雑誌に書いています。」と自分の手で髭を触って言った。「ちようど今ここに『社会主義評論』を持ってきました。そこには私の論文が載っています。若しあなたがそれに目を通されたならば、私の訪問の意味を理解してください。私はあなたがこの工場の経営を引き受けられたことを知りました。私は直ぐにもお祝いをしようとは思いませんでした。あなたはお忙しくてとても私と再会することとは出来なかったでしょう。今日も私はあなたを長くお引き留めするつもりはありません。ただ私は、この工場では労働者はもう忘れられなくなるだろうと思うと嬉しくなる旨を申し上げたいのです。」

ジャンは立ち上がって、隣の部屋に入っていき、手に二つの皿を持って戻ってきて、それらをテーブルの上に置いた。

「この皿を見てください。一つはドイツで作られたもので、その価格ははるかに安価です。その上にはローゼンタールはもうバルヌリー社の形も図柄も模倣してはおりません。それは重大なことです。私たちは生産のコストを下げることを余儀なくされているのです。さもないければアメリカでの市場を失ってしまうでしょう。私たちはもつと設備の良い新しい工場を建設する積もりです。その後で労働者のことが考えられることになるでしょう。」

「今は彼らのことを考える時ではありません。あなたは一八四〇年来のバルヌリー商会の発展を見積もることが出来ますね。昔と比べて労働者の境遇は十分改善されているではありませんか。」

「それは少しは改善されています。しかし労働者の住居はまだひどいものです。それで若し私がまずまずの家を作ってやって、工場が閉鎖されたならば、彼らは家で何をするのでしょうか。私は工場が存続するためにここにいます。」

「私はあなたに二十年来会うことがありませんでしたが、あなたが何処から来られたかは判っています。私はロベール・バルヌリーだったら訪ねようとは思わなかったでしょう。しかしあなたもあの人のように理屈を言われるのが判りました。何も変わってはいないのですね。」

「この事務所の中では何も変わってはいけませんよ。この場所からあるゆる地平線の彼方が見渡されるのですから。誰も自由に動き回ることとは出来ないのです。ある種の方策が必要なのです。そして若し私の代わりに、国家やある集団を代表とした一人の官吏がいたとしても、彼は別のことを考えることは出

来ないでしょう。しかしロベール・バルヌリーの後継者とこの官吏の間には一つの違いがあります。すなわち一人の代理人はこの団体の構成員の現実の利益を図ることを求められるのです。四八年にはリモージュの労働者は陶器の製造工場を作り上げるためにいくつかの組合を作り上げました。それらの試みは、その頭に精力的で有能な人物のリクロックを持っていた組合を別にすれば直ぐに挫折してしまいました。ただリクロックの組合は労働者に嫌われてしまい、ある無能な男が彼に取っ手代わりしました。翌年にはその事業は衰退して、五年間存続したのです。私は社会主義に対して反対意見を持つている訳ではありません。それはその自己満足の故に失敗を余儀なくされている制度です。それはその主義に依存しているメンバーに直ちに利益を与えることに縛られているのです……。私がこの事務所で執る決断は人に嫌われるものです。それは全ての人に対立していますし、理解されてもおりません。人々の幸福というのは何時も非常に苦いものですからね。しかし人々は私が気に入らないにしても、追い払ったりはしないでしよう。私は私の失敗によってのみ断罪されるのです。」

「工場の利益は私にとつて親しいものである利益と融和できるということは無いのでしょうか。ここで働いている人々が、そして人類がそれから何の利益も得られないのであれば、そして労働者たちがいつも生きるのに必要なものを当然として持つているならば、バルヌリー商会の繁栄などはどうでもよいのです。贅沢な品々、七十年來のバルヌリー商会の発展、機械の進歩、そしてそれらの人々の地位などの間には大きな隔たりがあり、私はそこに、私があなたや彼らのために恐れている様な矛盾を感じています。私はそこに破局に通じる異常さを感じています。そしてあなたはそういう人々からどの様な反論を期待しておられるのでしょうか。彼らは集団の精神に基づいた反抗をあなたに向けてくるでしょう。彼

らは一人一人の個人的な考えを持つという手段を持っているのでしょうか。」

「私は彼らの反抗を予感しています。彼らは新しい機械や私がつろうと思っている専門学校などに抵抗するでしょう……。」

「彼らは常に給与の上昇を妨げることが問題なのだということを良く知っていますからね。」

「私は繰り返しますが、新しい工場が建設されるまでは何ものにも、譲歩しませんし、与えることもありません。」

「その工場は不可欠なものですか。」

「そうです。それが救いなんですから。競争を抑え、競争が必要ではなくなれば、私はここではもう無用なのです。しかしフランスで競争を抑えるだけでは十分ではありません、それは結局考えられることです。それを世界全体で、アメリカで、そして中国でそうしなければなりません。それを夢見ることは一つの論文や演説を人々に吹き込む可能性があります。私のする事はアメリカでリモージュの陶器を売ること続けることなのです。」

「どうしてフランスでは売らないのですか。」

「それは不可能だからです、あなたも良く知っているでしょう。フランス人はリモージュの陶器を知らないのです。最も美しいフランスの産物が外国でしか売れないのです。私たちの最も良いワインはリュベックで見いだされますし、本当のコニャックはロンドンの陸揚げ貨物倉庫の中に、そしてリモージュの陶器はニューヨークにあるんですよ。」

「新しい工場を建てるためにあなたはあらゆる人から搾取しているでしょう。しかしあなたの給料は

……。私はあなたの俸給を非難しているわけではありません。あなたは有能な人ですからね。あなたが安楽な生活を確保するのは当たり前でしょう。しかしあなたの従業員と事務員の全体は同じ動機のために同じように重要なのです。」

「私はあなたの質問には答えませんが、あなたの心の最も密やかな思想には答えましょう。あなたは陶器は高陵土と機械と労働者によって作られると思っていますでしょう。しかし私はリモージュの陶器をドイツで作ることも出来るでしょう。しかしここではバルヌリー商會が無ければ最も完全な機械があつても、リモージュの陶器は作れません、少なくともアメリカ人が望むような美しい陶器は出来ないのです。私は一人の労働者を別の者に、あるいは一つの機械と取り替えることは、そして技術者のグループを変えることは出来るでしょう。しかし私が同じ源から得られた一人の後継者を作り上げる前には、すべての者に対して障害を引き起こすこと無しに私を交代させることは出来ません。それは神秘であり、真実であります、信じる事が出来ることではありません。そしてそれは口にするのも困難なことなのです。私はもつと別のことを話したいですね……。さあ、この工場の設計図を見てごらんさい。」

彼は紙挟みを開いて、その中から青写真を引き出した。

「あなたはポワチエ街の敷地を知っていますね。ここに二百五十メートルにも及ぶ長さの製造の工場が出来るのです。その横には窯がいくつかあります。二十ほどです。白物の倉庫。そして装飾の作業場です……。」

ほんのりと大地に潤いを与える雨が町の煙を吸い込んだ様になって細かな水滴となつて優しく降つて
いる。ジャンは砂利の小道を登つてきて、薔薇の木を眺め、それから家の門を開けた。そしてマックス
が短いマントの下に紙挟みを持つて走つて入つてきて、背中で扉を押しながら閉める。一方ジャンはゴ
ム合羽をコート掛けに掛ける。ポリーヌ又は階段に現れ、マックスの頭巾を取つて、その手を点検する。
「手を洗つていらつしやい、お昼の準備は出来ているのよ、お前は遅いのね。」

短い上着と白のエプロンを付けた、髭を剃つたばかりの使用人が言つた。

「奥様、食事の準備ができました。」

赤い壁紙が貼られた食堂では、食卓はバルヌリー家風に整えられるのだ。色の付いたテーブル・クロ
ス、白い布製の花瓶敷、水差し代わりの陶器の壺などがそれである。しかしポリーヌは食事の間は使
用人が側にいることは我慢ができなかつた。その使用人はお皿を彼女の前に置いた。彼女は両側のワゴ
ンから席を立たずにパンを取るのである。

マックスは椅子の上にそつと上がつて、子犬のように唐突な動きでナプキンを引っ張る。ジャンは丘
の上のハーブの香りを付けられた美味しいリモージュの羊のもも肉の一つを切り取る。彼はその一片を
お皿に置きながら次のように言つた。

「ところで私はアメリカに行かなければならないんだ。」

その朝はバブウゼがジャンに自分が発明した一つの箱を見せてくれたのだったが、それはいくつもの

仕切りで分けられており、その一つ一つの区画が一つの仕事場に対応しているのである。ボール紙を動かして、工場の中を注文の商品の移動を追跡することが出来、その遅れを見つけることが出来るのだ。「これはいい考えたね。」とブラウンの手紙を手にとっていたジャンが言った。それから彼は埃だらけの部屋に入ったが、そこはその装飾がすべてその工場で作られたものである二万点ばかりの皿が展示されていたのである。彼は一九一二年のモデルを見た。そしてブラウンの手紙を再読した。彼がアメリカ行を決心したのはその時のことである。彼はバブウゼが提案した新しい管理の体系を細かいところまで吟味していたのである。それから大きな結果を引き起こす諸問題へとその同じ注意力を移したのであるが、彼は自分が求められた所にはすべてそこに外向いたのである。同様にして彼は自分の考えにおいて、外部からの命令や工場の必要に対して逆らうことなく、アメリカへ行くことも承知したのであった。それも個人的な都合は顧慮せずに、まるで感じやすい個性は最早彼には無くなってしまったかのように自分自身の趣味も無視していたのである。

「あなたはアメリカにいらつしやるのね。」

「来月か十月に出発するするつもりだよ。夏にはリモージュを離れていることは出来ないからね。新しいモデルと原価を決める時期だから。」

ポーリーヌはマックスの皿を取ってジャンに手渡した。

「マックスには良く焼いた肉をやってくださらないかしら、そうしないとお皿に残してしまうのよ。」

ジャンは彼女の声が少し変化しているのに気が付かなかった。彼女は窓から細い雨が降っているのをじっと見つめていたのだった。

「あなたは長くお留守になさるの。」

「ニューヨークに六週間位いることになるだろう。大西洋の横断を考慮すれば、リオには行かないにせよ、二カ月半はかかると考えておかねければならないよ。君と一緒に連れていきたいが、あまりに費用が高くなるんだ。それにマックスがいるし、……。」

「マックス、お前はゆっくり食べるのね、それにお皿の上にまったく屈み込んでいるじゃないの、ちゃんと背筋を伸ばしなさい。」ポリーリヌは言った。

子供は自分の姿勢を変えないで、片方の肩を持ち上げた。ポリーリヌは怒って子供の頬をぶった。すると彼は激しく泣きだした。ジャンは子供を黙らせてポリーリヌの方に非難の視線を投げかけるのだ。しかしポリーリヌはマックスの方へ、あるいは窓の方へ頭を向けるだけだった。

客間のテーブルの上のニースのカーネーションの花束の側に使用人が二脚のコーヒー・カップとアルコール・ランプと小さな湯沸かしの載せられたトレイを置いた。

「マックス、お前は自分の日課が判っているの。それを取つてきなさい。」

「いつもこの子を甘やかしている君がさつきはとてもひどかったね。」

「あの子は調子に乗ってるのよ。」

マックスはカーペットの上に坐って、両耳を塞いでいる。そして頭を下げて、膝の上に本を置いてぼんやりと唇を動かしている。

「出掛ける時間だわよ、坊や。」

マックスは狂おしい目を上げて、両手を耳から話して欠伸する。ポリーリヌがその肩を引っ張って、玄

関まで押して行き、彼に短いマントを渡す。彼女は戻ってきて、ジャンの側にコーヒー・カップを置いた。それから両目をテラスに固定して、フランス窓の前に立ったままでいる。

「どうしたんだい、ポーリーヌ。」

彼女は驚いて答える。

「マックスが行くのを見てるのよ。」

「マックスはずっと前に出掛けたよ、鉄の扉の音が聞こえたよ。」

「そうね、私は薔薇の木がしなだれているのを見てたのよ。秋に植えた時にはとても大きかったわ。もつと若い木を注文したほうがいいかもしれないわね。私、枯れてるんじゃないかと思ってるのよ。」

ジャンは立ち上がって自分の妻のほうへ近づいて、その肩を腕で抱きしめた。

「私はあの薔薇をさつき登ってきたときに見たんだ。するとまったく小さな芽が出ていたよ……。雨が止んだね。四月の気候は安定しないね。私は出掛けるよ、もう時間なんだ。」

彼はシャン・ド・ジュイエの広場に沿って工場の方へ歩きながら、自分がレンスにいる時に、最近考えたことをいくつか書き留めることにしていたノートに書いた言葉を思い出していたのであった。《感情、瞑想、考察というものは人間をいつそう意識的にするし、排他的で、自己陶醉にさせるものである。最も高尚な思想は自己の消去、特別なものと普遍的なもの、人間と死の間にある必要な調和に対立するものである。》

思想が拒否する自己の消去は当然行為の中で行われるのである。《工場では自分は……とジャンは考えている……基本的な反応を起こすことも奪われている。》しかし彼はその服従というものは意識している。

若し彼が一つの未知の有機体のなかで、自分自身を忘れて埋没し、彼の実質が変形させられたにしても、何物も沈めてしまうことが出来ない一つの自由な声は、あらゆる変遷から保護されている存在の中心として、彼の内面で呟くことを続けるのである。

小さな娘たちが広い四角い広場を縁取っている樹々の下で縄跳びをしている。一人の女の使用人がエプロンに毛糸の玉を入れて編み物をしているが、泣いたり、彼女のスカートにつかまってよちよち歩きをしている太った赤ん坊などには目もくれないでいる。グレーの髭の二人の紳士が少しばかり女性的な声で、遠くまで届くような、まるで歌うような口調で政治を論じ合っている。ジャンはある若いカップルに挨拶した。男仕立ての夫人の服は控えめながら最新の流行に従っている。彼女はある将校の娘だ。男は将校である。それは彼の新しい衣装を身につけているその流儀でそれと判るのである。

ジャンはほとんど人影のない、ゆったりしているが狭いガリバルディ街に入り込んだ。それから彼は灰色で、何の装飾もない家々に沿って、狭い歩道を歩いていく。そこにはすでにむき出しの工場の建設が始められているように思えるし、その高いぼんやりした塀には黒いガラス窓で穴があけられている。

..

規律の習慣によって、そして以前にボンメル家で教えられた仕事に対する尊敬の気持ちによって、ポーリーヌは直ぐに生活の変化に慣れていた。若いときと同じように一日中独りぼっちで、ジャンから離れて、彼が夢想したり、疲れたりしているのを見ながら、彼女はそれでもお互いの間に地下の水脈の

様な絶えざる接触を感じていたのだ。

しかしまったくの不在という長旅という未知のものの中で基本的な繋がりの方は壊されるだろう。ジャンはいなくなるだろう。彼女にとつてはまったく別の想像できない人生が始まるのだ。

彼女はそれを恐れていたが、何も言わなかった。若し彼女がジャンにその臆病さを告白したならば、彼女は自分の上に冷たく、瞑想的で、あれ程しばしば自分の息子に向けられる傷つけられるような視線が伸しかかるのを感じるだろう。マックスは今年は非常に大きくなった。彼はもうレンスの遅い農民の子供ではない。ジャンは彼を華奢で怠惰でぼんやりしていると思つてゐる。彼が自分の息子に認められると思つてゐる特徴を、成年迄引き延ばして、そこに心配になる様な人間を見ているのだ。けれどもポリーヌはジャンにマックスの怠惰癖と怒りつばさを隠しているのだ。彼女は宿題を短くしてやつたり、日課を説明してやつて、子供に田舎の様々な印象を教えるためにヴィエンヌ河の辺まで連れていくのだ。

ジャンは自分の愛している身近な者たちの欠点に、強い人間の一徹さからではなく、反対にその弱さから耐えることが出来ないのだった。ポリーヌはそれを知つてゐるし、自分の夫のあらゆる欠点を知つてゐたが、それを自分が全面的に愛した人間の特異な性格と見做してゐたのである。

ジャンは彼女にその様な自由を拒否してゐた。彼女は自分自身と、そして彼と策を弄すること、それに自分の影の部分を包み隠す必要があつた。というのは彼は心の中で、自分の愛する者のあらゆる幻滅を自分の感情の減少のように感じてゐたからである。

ポリーヌはこれらの事について女の友だちと話したいと思つた。彼女は小説や雑誌を読み、愛情の複雑さに興味を持たされ、幸福な心でさえも暗い部分を持つてゐることに気付いてゐた。

彼女はその人たちが結婚する前から知っていた若い妻たちに出会ったのだったが、彼女たちは率直で自由で、愛の芽生えに呼び覚まされて結婚したのだった。が、今は子供たちに押しつぶされていたし、何か判らないものを秘めていたのだった。呻くような神経衰弱症に襲われたある夫人たちは込み入った打ち明け話によって自分たちの苦悶を軽減し、長椅子に横になって小説を読んだりしながら、果てしない子宮炎を引きずっていたのである。男たちは無言のブリッジ遊びに夢中であったり、子供たちが眠ってしまうと、新聞を足元に落として自宅で深い安楽椅子でまどろんでいたのだった。もっと自由な将校たちは馬に乗って大通りを走り回り、それからゆっくりとした散歩で痺れた足を揉みほぐすのである。女たちは日々の仕事に忠実であり、少し取り澄ました伊達者の男たちはティー・テーブルの周りや、ピアノの側に立って楽譜のページを捲ったりしているのが見られるのだ。

夕食会、ダンス・パーティー、慈善コンサートなどが時折、穏やかな愛情に戻ってきた年老いた夫婦や愛が覚めたカップルや独身者たち、そしていつも周りを眺め回しているモスリンの衣装を身にまとった若い娘たちなどを一堂に合流させたのだった。

ポーリーヌは自分の中に新しい知覚のようなものを目覚めさせたことがあったバルバザックでのダンス・パーティーのことを思い出していた。今日でもその時の様に他人の生活についてはほとんど何も知らないが、彼女自身はその唯一の愛の長い夜の内に長年捉えられて以来、自分の周囲に隠れた流れがあるのかどうかを疑っていたが、家庭の秘密や、すべてを手に入れて、最早希望もない家庭生活の息詰まらせるような幻滅を見いだすのではないかと恐れていたのだった。

春になるとボオバトウーからルイズが彼女を迎えにやって来た。ポーリーヌが木々の間の山を曲が

りくねっている小道に近づいた時、彼女は窓ガラスを下げて食べるように蕎麦の畑や湿って苔むした盛土や、波うった地平線を眺めていた。それから庭園の芝生が植えられた斜面や活気のない枝を持つ大木、そして灰緑色の西洋杉、楓、白樺、さらにその構造が芽生えつつあった葉の中で透けて見えたとなりこなどを見た。それらは最初のバラ色の芽の中に秋の趣を偲ばせるのだった。彼女は鋭くて少しばかり刺激的な空気を吸い込んだ。それは彼女がこの山がちの地方で何の強制も無しに吸い込んだレンズや幸福の思い出だけではなかった。彼女はボオバトウで何とも説明できない快活さの感情を感じ取っていたのだが、それは自分の生活や過去とは何の関係も無く、それに対してはジャンが関与してはいなかったもので、彼女が少しばかり彼のこともさへも忘れる程の非常に生き生きとした喜びを感じるということにいつも驚かせられるようなものだったのである。

「大奥様は部屋に居られますが、ルイズ大奥様はテラスに出ておられます。」と使用人は言った。

ルイズは読書をしており、自動車の音がしても頭を動かすことは無かった。身動きもせず、魅力的な歓迎の微笑みを浮かべて、肘掛け椅子の腕置きの上にぼつたり太った小さな手を延ばして、足は花崗岩の手すりの上に乗せて彼女はポーリーヌがやって来るのを眺めていた。庭の向こうは青や紫色のリムザンの山々が丸くなった形で地平線の限界を形成していた。ルイズは歓迎の言葉を見つけようとせずには微笑みつづけていた。

ポーリーヌは石の縁に置かれた本を手を取った。

「これ面白い？」

「素晴らしいわよ。」ルイズが今までのあれ程の静けさの後でびっくりさせるような熱っぽい調子で

言った。

彼女は景色を眺めているだけで十分であつたかのようにこれ以上は何も言わなかつた。けれどポーリー又はルイーズの隣で何とも言えない内面の印象を感じ取つたのであつた。

「大奥様が、皆さんに部屋のなかに入るようにとのことです。」

ルイーズは庭の安楽椅子から無頓着に立ち上がった。そしてポーリー又は自分が坐っていた花崗岩の小さな壁の下に飛び下りたのだった。

ルイーズの母は客間の真ん中で立つて彼らを待っていたが、非常に簡素な服を着ており、胸の下の方には大きなカメラオをピンで留めていたし、鼻は鉤の様に曲がつており、目は突き刺すように鋭く、太つた手はロベール・バルヌリーのそれに似てほっそりした指をしていたがもつと赤かつた。

彼女は英語でルイーズに、台所へ行つて、アメリカの伯母さんのやり方で、ビスケットを作るように言つたのだが、そのやり方では女の料理人は上手くやることは出来ないのだった。そしてその奥義は母から娘へと伝えられていたのである。少し後で使用人がテーブルの上の深いお皿に積み重ねられた熟々の小さなブリオシュと、ボオバトウで作つたバター、それにうすくて軽やかでいい香りのするお茶を持ってきたが、そのお茶はポーリー又はボンメレル家のお茶を思い出させたとし、リモージュの夫人たちはそれを飲むと顔を顰めるのだった。

その夜ポーリー又はジャンに言つた。

「今になって私はルイーズの子供たちが少しも話題にならなかつたこと、それに私は子供たちを見な

かつたのを思い出すのよ。ちよつとだけ彼女のお父さんが出てきたわ。あの人は青い目をして、眠そうな表情で私を見てたわ。私はいつも何か話が始まるのを待っているのよ。でもあの人は何も言わないのよ……。ルイズも黙っているのよ、でもそれには何か説明されてないことが……。その無関心の表情が人を惹きつけるのよ。彼女は自分の好みに従って行動しているように、そしてあらゆる影響から免れているように思われるけれど、それはまるで自分が心の中に夢で一杯になった青春や無傷の信念を失わずにいたように見えるの。彼女の側にいると全てのものがいつそう偉大で、充実しているのよ。私が彼女の側を離れると、一人の人物に遭遇したという感じを持つし、何か自分には判らないものに心を動かされているのよ。彼女は夫と自分の子供たちを愛しているけれども、彼らがまったく別人であつたにしても、ルイズは同じ人間であると思うわ。時々彼女は溜め息をつくのよ。それは非常に控えめなさやかなものなのに、人の心を突き通すのよ。彼女は人に見られると幸福そうに微笑んでいるの。彼女は何かを秘めていると言われるわ。私は彼女の内には一つの秘密があるんじゃないかと思うのよ。」

「秘密があるんだよ。」

「秘密ですって？」

「その秘密とは魂なんだよ。」

ポーリーヌは庭に向かって開けられた扉から外の方を眺めた。それからジャンの方に向いて言った。

「レンスであなたは時々ノートに短い言葉を書き留めていたわね。私それを読んだのよ。その中には美しい言葉があつたわ。あなたはもう書かないのね、それに読書もなさらないのね……。」

「私は時間がないんだよ。」

「残念だわ。」

「君は私が自分の魂を失うんじゃないかと恐れているんだね。そんな事はないよ。自分の魂はそれらの言葉の中には無かったんだよ。」

「陶器の中に自分の魂をこめることは出来るのかしら。」

「少しは出来ると思うよ。男は自分の魂を色々なもののなかに少しずつ入れている。だからこその世には多くの美があるんだ。生命を超越した無用の美というものが。」

「それじゃあ女の人たちは？」

「私は女の人たちに同情しているんだ。彼女たちはすべてを愛に求めるだろう。」

「愛、分かち合われた愛は魂を満たすために作られているのではないのかしら。」

「いや、違うよ……時には愛は魂を息詰まらせることもあるんだ。」

「なんてひどいことを言うのよ、愛は命全体ではないの。」

「生命のすべて、確かにそうだ。でも魂は命を越えている。そして正に本当に愛という命の最大の贈り物を知っている女の人だけがそれを感じることが出来るのだよ。彼女はそれを感じる……。一人の男は一人の女にとつては十分ではない、あるいはそれ以上のこともある。結局一人の男は彼女にとつては余りに荒々しくて突き刺すように鋭くて、疲れさせ、単調な一つの声なのだ。しかしその声は捕らえられたものののだよ。彼女は愛に満たされる時にいつかそれを知ることになるんだよ。」

「女は自分の外に何を見出すのかしら。」

「若し彼女が一度本当に愛したならば、そして苦しんだのなら、更に幸せであつたのなら、彼女はも

う何も見つけることはないだろう。この世は空っぽになるからだよ。」

「彼女はもう何も持っていないのかしら。」

「彼女は自分の魂を持っている。」

「あなたは、男は一人の女にとっては十分でないか、それとも十分すぎるかだと言ったわね。この言葉はあなたが考えたもののなの？」

「そうだよ。」

「その言葉はあなたには相応しいものではないわ……。それは私を驚かせるのよ……。それはどこからやって来たのかしら……。あなたはどこでそれを思いついたの？」

ジャンは後ろを向いた。そして顔をそれで覆い隠すかのようにハンカチを取り出して長い間湊を كان
ていた。

∴

ポーリーヌは女の友だちが欲しいと新たに思う気持ちにそれが程強く感じられて驚いていたのだったが、特に自分の青春時代を知っており、本能的に心を伝え合うことが出来る様な友だちが欲しかったのだ。彼女は以前にあれ程近い間柄であったマルセルのことを思っていた。彼女はマルセルの秘密を知っていたが、マルセルは彼女のことをあまり理解してはくれなかった。そしてそのマルセルは今自分が愛してはいなかった男に熱中していたのだ。喪に服すために彼女は冬のもてなしからは遠ざかったままでいた

のである。そしてポーリーヌはマルセルを訪れるという考えに心を乱されていたが、絶えず引き延ばしていたのである。そしてある日彼女は決心した。

彼女は郊外の町に沿って行くと、庭の真ん中に半ば開かれたシャッター付きの小さな家がぼつんと孤立しているのを認めたのだった。鉄柵の後ろで、黒の麦わら帽子を被った痩せた女が、部分的には胸当ての付いたエプロンで覆われた濃いグレーの服を着て、花壇の雑草を抜いていた。彼女はポーリーヌの方へ色のない華奢な顔を向けた。そして悲しげな両眼には恐れのような表情が現れたが、それから生き生きとした光と微笑みが浮かんだ。ポーリーヌは自分を優しく抱き寄せてくれたそのマルセルの腕のなかに身を投げかけた。しかし彼女はその上半身が真っ直ぐになり、体の部分がこわばるのを感じた。力強い片手が自分の背中を神経質で小さな動きで叩いたのである。

「さあ、……いらつしやい……中に入つてよ。」

「ちよつと待つて、……私、あなたに会いたかったのよ……。」

ポーリーヌはその家の中の親密さの中でマルセルと二人だけであることが突然怖くなったのだった。

「坐りましょう、木の椅子があるわ。」

マルセルは二、三步ぎくしゃくして歩いた。ポーリーヌはその気取った動きや体全体のぎこちなさに気付いたのだった。

「私たちは町から少し離れたこの家を見つけたのよ。私の夫は静けさが必要な。」

「判るわ……。」

「この家は実用的なのよ。家政婦と一緒に私は上手く片づけたの。」

「そうね……。」

ポーリーヌは二人の間に内面的な交感を探して、無用な言葉をぽつりぽつりと口にする未知で鈍い声をあまり聞いてはいなかった。

「家をご覧になりたい？」

ポーリーヌは立ち上がって、遠慮がちに自分の腕をマルセルの腕に通した。そして彼女たちは物も言わずに階段の低いステップを登っていった。

「ここには主人の書斎があるの。」マルセルは澁刺として少し気取った風をして言った。「夫は探究家のよ……。ここにある全てのものは記録文書なのよ。」

テーブルの上には重そうなルーペが開かれたアルバムや古地図、様々な書類の上にとっしりと置かれている。

「ここでは何も触ってはいけないのよ。」

マルセルは扉のカーテンを持ち上げた。

「客間よ。」

ポーリーヌは視線を迷わせながら、半ば閉められた鎧戸の薄明かりの中に固定されている家具や英国風の刺繍が施された黄土色のストールに覆われた窓、テーブル、窓際のコンソール、肖像画や装飾品、額に入れられた扇、可愛い鏡などで飾られた壁などを見回したのだった。薔薇の木で作った小さなテーブルの側の一角で彼女の目は半ば開かれた仕事机の上に長い間釘付けにされていたが、それは並べられた糸巻とつづれ織り、読み返された手紙、しわくちゃのハンカチ、孤独の気取りの無い乱雑さなどを見せ

ていたのだ。

おそらくマルセルはそこで我を忘れてしまうのだろう。

マルセルは咄嗟に蓋を下げて、薫を詰めた安楽椅子を押して、慣れた仕種で、ジューイ産の布製のクッションを振るった。そして長椅子を指さして言った。

「お掛けにならない？」

彼女は立ったままでおり、シャッターを引き上げ、それからまた半分だけ下に下げた。

「光は疲れさせるわ。私の目は感じやすいのよ。」

突然彼女は言った。

「私はあなたがしばらく前からリモージュにいるのを知ってたのよ。そして教会で会えるかもしれない
と思ってたわ。」

「私はあまり行かないのよ。」

「あなたは変わってないわね、でもこのカトリックの町ではそこに顔を出さなければいけないわよ。」

「何を見せに行くのよ、自分がそうではないものを見せに行くの？」

「人は自分が望むものであるのよ。」

「うわべはね……。」

「いいえ、ちゃんとなれるわ。人は変わるものだわ。私たちの内には限りない可能性が在るんですもの
……。」

「あなたはそう思っているのね。」

「私はそれを知ってるのよ、莫大な力があるのよ。」

マルセルはカーペットの上から白い糸を拾うために身を屈めた。そしてそれを自分の指に巻き付けた。それから彼女は自分のエプロンを取って、畳んでそれをクッションの下に入れて、帽子を脱いだ。そして横で分けられたカールしてない髪と切り傷のように真つ直ぐで繊細な皺が痛々しく境を接している額とを露にしたのだった。その角張った顔は切れ長で活き活きとした両眼によつて、そして良く動く黒い瞳、更に鋭い視線によつて、その固さが乱されているように思われたが、その視線は突然消えてしまい、何かを探りながら、何も委ねることは望まずに逃げてしまったのだった。ポリーヌはこの狭められてはいたが少しだけやつれていたが親しみのあつたその特徴の上に、それにはあまりそぐわないが、深い現実を仮面の下に秘めている新しい表情を認めたのだった。はるか彼方のイメージを呼び起こすためかのように自分の視線を逸らして彼女は言つた。

「あなたにはもう一度会いたかつたのよ……。もつと早く来るべきだつたかもしれないわね……。」

「私は判つてゐるわ、あなたは家の整理で忙しかつたんでしよう。」マルセルは無愛想で少し冷たい声で言つた。

「ううん、そうじゃないのよ……。私もあなたに会いたかつたの、マルセル。私、あなたからの手紙を貰つたことがあつたわね。」

「あら、ずっと前のことね……！」

「私、忘れてはいなかつたのよ。あなたもそうでしょう。あの手紙は私を悲しくさせたのよ。」
「たまにはそれが必要なのよ、ポリーヌ。」

「私はその時ひどい一年を過ごしていたのよ……。私はあなたの愛情を信じていたわ……。」

マルセルは長椅子に坐った。そして熱っぽい光が彼女の両眼に輝いた。しかし彼女は冷たく答えた。

「あなたは私の愛情を持っていたのよ。」

「厳しい愛情を？」

「多分ね。私たちは自分の愛する人々を批判するんだわ。私はあなたの心を引く張っていたものを推測していたわ。そして私はそれを認められなかったし、あなたに私がそれに賛成していることを信じさせることも出来なかったのよ。」

「でもあなたには判っていたでしょう……。あなたは理解できる人だから……。」

マルセルの唇が苛立ちでびくつと動いた。そしてハッキリとした声で言った。

「私は本当は判らなかったのよ……。あなたの行動が理解できなかったのよ……。」

「マルセル、あなたは私を捨てたのね……。私の友情を必要であるとは思わなかったのね。」

彼女はマルセルの手を探した、そしてその氷のような手に触った。

「あなたはそんなに苦しんだのね。」彼女はまったく低い声で言った。

マルセルの喉が襟の下で膨らんだ。そして一瞬両目を閉じた。それから立ち上がって、暖炉の上で震えていた小さい彫像に触れた。そして散っていく花束の花びらを硬い手のひらで握りつぶして、その萎れてしまった花を屑籠の中に投げ入れた。彼女はしばらくの間身動きせずにいたが、それからシリンドー・デスクの蓋を音も立てずに持ち上げて、手紙や写真などを取り出したのだった。

「私はバルバザックのニュースをいくつか知ってるわよ。アンナは……。」

その簡潔な言葉は確信を取り戻していた。ただ窪んで困らされたその目の上では、不規則に動かされていた瞼がパチパチと瞬いていた。そして彼女の手は彼女が封筒の中から畳んだ紙を引き出す時には短く振動していたのだった。

ポーリーヌはその家族や最近の結婚や子供たちの性格についての詳細には耳を傾けてはいなかった。彼女は手袋を付けて立ち上がった。ポーリーヌが帽子を調整し、ヴェールを掛けていた時にマルセルは彼女の後ろに直立していて、鏡の中に現れたのであったが、鏡に映った二人の顔は、何とも言えないような空間によって近くもあり、離れても居たのだった。突然ポーリーヌは急いで家を出た。彼女が鉄柵を通過した時、マルセルがおずおずとしたやり方で腕を持って彼女を引き留めた。

「私、あなたに言いたいことがあったわ、ポーリーヌ……。私、あなたに会いに行きたいわ……。」「それは嬉しいわ。」

「あなたは私にあなたの可愛い坊やを見せてくれるわね……。坊やをここに連れていらっしやいよ。」
「ええ、私連れてくるわよ。」

「彼は庭で遊べるわよ。家にはバケツや鋤や汽車があるのよ……。」

彼女は早口で呟いた。

「私には子供が居なかったのよ、私だけは欲しかったのに……。」

彼女はポーリーヌの目を見つめながら、ハッキリした声で付け加えた。

「それが私のたった一つの心残りなのよ。」

ジャンがパリに行っている間、ポリーヌはマックスと一緒にポートウーで数日を過ごしたのだった。朝には自分の部屋のテラスから彼女は子供たちが草原の上を走り回り、ルイズが頭に大きな日除け帽を被って籠に花を入れるのを見ていたのだったが、彼女はその後でその花を束ねて背の高い花瓶に差し込むのだった。あるいはまた彼女は遠くで馬がギャロップする音を耳にした。そしてルイズが地味な乗馬服を着ているのを見たが、彼女は麦わら帽子の下で髪を振り乱していたのであり、それから犬をけしかけ、馬を急ぎ立て、別荘の玄関前にピタリと止まった。

「私、馬を耕地に連れていったのよ。」と彼女は言った。「その馬を疲れさせなければならぬのよ、そうしないと私は馬を自由に扱うことが出来ないの。」

ポリーヌは息を切らしているこの元気な女を眺めていたが、手袋をした女の小さな手は確固として神経を使いながらその汗だくになって息切れした馬を支えていた。そしてポリーヌは馬と彼女の内の何方が、互いに彼らに興奮させ、くたくたにさせて家に連れ帰ったその激しい運動を必要としているのかと思っていたのである。

午後にはリモージュや近くの別荘から女ともだちがやって来た。何人かのグループは小道をぶらつきたり、白樺の下に腰を下ろしたり、池でボート漕ぎをしたりした。ルイズは自由な青春や安易な交際を愛していた。ポリーヌは新しい服としなやかな縁の帽子を身に着けたりした。彼女はそんな服装で、襟首を露にし、腕は半ば剥き出しで、踵を越えないスカートを履き、白い靴を履いて軽やかに歩く

ときには若返ったように感じたのである。解放されたマックスは利かん坊で彼女から離れ、遊びに我を忘れ、その精神は危なっかしい計画で一杯になっていた。そして夕方彼のベッドに屈み込むとき、彼女は、もう愛撫を求めなくなったこの逞しい肉体の充実を感じたのである。パリにいるジャンも逃げ出した子供も、留守になった家も皆彼女なしでもやっていけるのだ。そして空虚感が彼女の心を乱れさせた。時にはそれは彼女に何とも言えない陶酔感を与えたのだったが、彼女はそこから逃亡することは無かった。

笑い声が池のほうから聞こえてきた。白鳥たちが後を追ってくる小舟から若い娘や男たちはパンのかけらを投げてやっていた。その白鳥たちは硬い嘴と頸を硬化させて争ったが、突然羽を大きく曲げて水を叩いて羽ばたきながら逃げていった。それからまた堂々として水の上を浮遊するのである。

ポリーヌは雑草を引き抜いて、その蒼白い先端をかじりながら、芝生の生えた斜面の小道を下っていった。そして立ち止まって、赤い薔薇を選ぶとそれを自分のベルトに付けたのだった。

「ポリーヌ、どこへ行くの。」ルイズが言った。「ちょっと待ってて、そんなに速く行かないでよ……こちらはバルステイエ大佐よ、あなたについていきたいと言っておられるわよ……彼はあなたが自分のところから逃げていると思っておられるわ。おやつには戻って来るのを忘れないでよ、そしてあの若い人たちを連れ戻してくるのよ。」

その大佐はお辞儀して、ポリーヌの手にキスをして言った。

「私はあなたが私に気付かれたのかどうかが判りませんでした、奥さん。もうずっと以前のことですね！……あの頃は髪も白くなつてはいませんでした。」

「私はあなたのことを良く判っていましたわ。そして逃げるつもりもありませんわ。あなたが私に話しかけたいと思っていらいしやるのを、そしてこの時が来るのを判っていましたの。けれどもあなたが捜しておられるのは私ではありませんでしょう。」

「あなたも捜していましたよ、奥さん……。でも私は思い切って近づくことはしなかったんですよ。しばしば遠くからあなたを見ていたんですよ……。私は、あのダンス・パーティーの夜、青い色の客間に入ってこられた、バラ色の衣装に包まれた少しどぎまぎしておられたあのお嬢さんを再び見つけ出して深い感動を覚えるのです……。」

「本当にあなたはその時私をご覧になったのですか……。私は怖かったんですよ。私は逃げ出したくなつたのです。」

「私はあの一瞬のことは今も忘れてはいません。」

「あの一瞬ですか。」

「しかしあの一瞬はあなたを私の心に固定してしまつたのです。私はいつもあなたにお会いしたいと思つておりました。ギッタはあなたを大変愛しておりました。」

「お気の毒なギッタだわ……。あなたは罪深い方でしたのね……。」

「あなたはご存じないんですよ、奥さん。ギッタは衰えていったんですよ……。彼女の中のすべてが救いを求めていました……。彼女の様な女性があんなに打ち捨てられてしまつて。私が彼女を救つたんですよ……。私の愛が彼女を救済したんですよ……。」

「救つたですって！」

「そうです……私は判るんです……あなたは幸福で満足しておられます。」

声を振るわせてバルステイエは続けた。

「奥さん、私はお願いがあります……。私はすべてをお話したいのです。ここで一休みしましょうか。遠くまでは行かないようにしましょう。ここでは私たちだけです。私はずっと前から私を自由にしてくれるこの時を待っていました……。あなたは私を自由にしてくれるのです……。」

ポーリーヌは背の高い雑草を遠ざけて、木の下に腰を下ろした。池は日の光で輝いており、オールが水を打ってさざ波が出来た。叫び声が聞こえてきたが、それは彼女を呼んでいるのだった。

「バルヌリーの奥さん、私たちと一緒に来てください。」

彼女は走りたかった。そしてますます自分を惹き付けている子供らしい無頓着さをまた見出したかった。しかし彼女は帽子を取って、自分の髪を風で膨らませた。一方ではバルステイエは彼女の側で黙って、自分の杖の規則的な動きで雑草を折り曲げたりしていた。

「私は長年そのすべてを忘れずにいたのです。あなたはたった一人の人です……。すべては秘密にされていきましたからね、そして突然顔の上に現れたあの表情……胴着に付けられた赤い薔薇だけで十分なんです……。私には判るでしょうか……それまで無言で進展してきたものが叫びはじめたのです……。私と言うことを聞いてください……。」

彼は深い抑揚を持つて長々と話した。そしてポーリーヌはるか以前の情熱の斜に心を乱されて、道を横切る蟻の列を目で追っていたのだった。愛情にこれほど豊かな調子を保つためにはこんなに抑えられた苦悩というものが必要だったのだろうか。

「それから狩りの事件です……あの奇妙な死の……。」

「あなたはその場にいらしたのですか。」

「いいえ、別の者が……失礼しました、奥さん。このようにして妻と私のことを話すためにはあなたにお会いしなければならなかったのです……。」

「あなたは良く話してくれましたね。有り難うございます……。人々はとても厳格でした……。それ以上のことは知りませんでした……。」

牧場は雲に覆われていた。

「大分遅くなりましたね……。人は何でも忘れるんですね……。帰りましょうか、池にはもう誰もいませんね。」

テラスの上でルイズがたった一人で彼らを待っていた。

「私たちがおやつを食べたのはずっと前よ。あなたたちを呼びたかったのよ。若い人たちがあなたたちを邪魔することはないと言っていたわ。お茶を飲むかしら、それともオレンジエードがいいかしら。私はアイスクリームを頼むつもりよ。まだ苺があるのね……。それじゃああなたたちはそんなに遠くまで行っていたの。」

「過去のずっと遠くまで行っていましたよ。」バルステイエは言った。

「気を付けてよ。」ルイズが安楽椅子に振り返って言った。

プラタナスや紫陽花の青い花が常夜灯の明るさを持っていた。

「疲れてしまいましたわ。大勢が訪ねてきましたね。すべての人が同時に話しました。あの訴訟のこと

が議論されたんです。」

「情熱に狂った女殺人者ですか。」

「オーストリア大公の恋と死についてです。」

「それはもつと重要なことです。」とバルステイエが言った。

「どうしてでしょうか。」ルイズが言った。「あの王家にはたくさんのお自殺や行方不明者や暗殺事件がありますね。」

ルイズは自分の手仕事を取り上げて、太い針の上で編み物の編み目を数えた。彼女は黙っていたし、その顔には微妙な赤みが、そして謎のような微笑が通過した。あるいは瞼の瞬きの瞬きが自分の露骨な視線の明快さを断ち切ったのだった。

突然ポーリーヌは忘れていた現実に戻ってきたかのように言った。

「子供たちはどこにいるの。」

「奥さん、あなたは確かお子さんを一人お持ちでしたね。何人かの女性の方々はいつも若い娘のような風をしていますね。そして彼女たちが何かを待っているのではないということが忘れられていますね。決定的なものが彼女たちを困らせるわけはありませんからね。」

「その決定的なものが新しい形を取っているのですわ。」

「それはおそらく決定的なものがないということだわ。」とルイズが言った。

「ジャンが電話してこなかったかしら。」ポーリーヌは言った。

「彼は来ないと思うわ。」

「ジャンはパリに引き留められていたのよ……でも今夜は帰ってくるでしょう……。」

「それは当てにはならないわ。」

「そんなことどうでもいいでしょう。私は夕食の後に直ぐお暇するわ。ジャンが誰もいない家に帰ってくるのは嫌なのよ。」

「善良な夫というものは許せないような怠惰の心を持っていますよ。」バルステイエは言った。

「彼らは特に重要な仕事を持っていますから。」

「あなたを待っている一人の女性以上に大切なものがあるのでしょいか。」

バルステイエはポーリーヌの顔に仄かな苛立ちに気がついた。そしてルイズの方に向いて言った。

「この夏はあなたは海辺に行かれますか。」

「いつものようにベル・アンスに二カ月程……ポーリーヌ、あなたもベル・アンスに来てくれればどんなに嬉しいことでしょう。」

「あなたは私たちが夏にはリモージュを離れることができないのを知っているでしょう。」

「それはサントンジュの浜辺ですか。」バルステイエが言った。

「スードル河の河口のやつと浜辺と呼べる所です。」

「ああ、そうですか……私はいつかそこへ行つたことがあります……トランブラードの町の側の……。泥が多くある……それは海とは言えませんがね。」

「私には判りません。でも私の好きな場所なんですよ。」

午前中二度ほど州知事は自分のアパートマンの廊下に沿って横切つて、足早に客間や食堂、三つの部屋を通りすぎて行つた。そしてその建物の右側にある自分の事務所に戻つた。官房長はその二重の扉を通して知事の足音を耳にした。そして押し殺されたようながらう音がテーブルの上で振動した。そして彼は知事の事務所に工場主の組合の代表者たちを招き入れたのだつた。ジャンはラルマンディー氏の後ろに離れて坐つたが、自分のバラ色の首筋までその白髪を頭の真ん中で分けている分け目を眺めていた。リモージュの最も小さい工場の一つの所有者であるジューリ氏は気持ちのよい声の持ち主だったが、彼が相変わらず代表者会議や委員会の司会をしていた。彼は陶器の製造業者の意見を述べた。

知事は木曜の午前中に自分が監督していた息子のラテン語の宿題を直してやろうと思つていた。そして新たに会合を持つことを提案した。それから彼は頭を横に傾けて、その顔がラルマンディー氏の影に隠れていたジャンを認めて微笑みかけた。その配慮に答えてジャンは言つた。

「あなたは政治的な出来事を心配しておられるのですか、知事さん。」

「どうして心配しないでいられるでしょうか。私たちはこれほど戦争に近づいたことはありませんでしたからね……。脅迫があるのは良く判つています。最後の刹那には知恵のある反省が……。」

「戦争とはどんなものなのでしょうか。私にはまったく見当が付かないんですよ。」と思わず無邪気な態度でジャンが言つた。「汽車は動くのでしょうか、店は開いているんですかね。都会では生活できるのでしょうか。」

「すべては前もって判っているんですよ。」知事が言った。「生活は過去と同じく国の内部ではゆっくりと続けられますよ。前線では別ですが。」

知事は災害などに留保された地帯は認めていた。しかしそこにはいつも知事と官房長と尊敬されている政府というものがあるのだ。知事は冷静な風をして立ち上がり、訪問者たちを励ます言葉で、暇を告げた。

「脅迫が多くなりましたね。」

ラルマンディー氏は片手に手袋を持ち、入り口に立つて、話すことを求めるためかのように腕を伸ばし、少し震えてはいるが精力的な声で力を入れて言った。

「私は、枢機卿たちにピオ十世が言った言葉に驚いていたんですよ、しばらく前のことですが。《フランスは罰せられるだろう、しかしまた立ち上がるだろう。》」

ジャンは県庁から燃えるような空の下に出た。彼は工場に帰ろうと思っていた。しかしこの光に、そして暇な散歩者として朝十時に広場を横切るといふ奇妙な感じに驚かされて、ぶらぶら歩きながら、クロシエ街の方へ向かっていった。

太陽の元で、煙で汚された粗壁の建物の正面や破損した背の高い鎧戸はいつそう暗く見えたし、狭い通りは大空の敵であるかのように、明るさを拒否して、汚れたボール紙の様な家々と共に、中の暗闇に大きく開かれた小さな回廊に貫かれていた。ある書店のショー・ウィンドウの前に立ち止まって、ジャンは考えた。《この黒くて気難しく、極めてひどく貧しいこの町、それは住民に捨てられているように見えるが、それは実際には細やかで恥ずかしがり屋の人々を隠している。が、彼らは最も微妙な幸福とい

うものの好みを持っているのだ。木材と乾いた泥の不格好な家の中には、裕福な陶器の製作者であるアドルフ・ジラールは贅沢な学者の生活を送っている。自分の工場の労働者たちはお金よりも釣りのほうを好んでいる。」と。

彼は店の中の本を見て、非常に薄く、彼がその作者を知らなかった小説に注目した。彼はそれを開いてみた。各ページのぎつしり詰まった見かけは彼に不思議だと思わせたし、優しそうな調子を持つ複雑そうな長い文章が彼の氣に入った。そして彼はそれを買ひ求めて自分の家に持ちかえったのだった。

彼は鉄の門を押して芝生を横断した。虫がぶんぶん飛び回る中で、雑草に足を埋めて、桜の樹の下の緑色の安楽椅子に腰掛けたが、サクランボは赤くなっていた。そしてリラの小枝でその小説の最初のページを切った。彼は講義に間に合わなかった学生の氣持ちを感じていたのだ。彼が青空に眼を上げてから、それから満開の薔薇と自分の本の上にその目を下ろした時、彼の視線はその間、壁の上に聳える工場の高い煙突と真つ黒な煙に出会ったのだった。

その作者は色々な子供時代の印象を述べていた。そして間違つた遠近法で、誇張された詳細と肉欲的な陶酔や、その印象が我々には過去の色彩の下で現れた時に、その最小の物さえもが我々に吹き込む歌などが描写されているのである。

その読書、その太陽、こつそりと手に入れた休息の刹那などはジャンにリモージュでの少年時代の様々なイメージを思い出させた。ガリバルディー街、ヴィエンヌ河、彼が毎日のように見ていた工場などはその在りし日の同じ対象には似ていなかった。工場では今と違っているのは白物の倉庫と装飾の作業場の間の距離、彼が今ではそそくさと横切ってしまうその距離ではなかった。物自体はほとんど抽象

的でまったく別様に人が増えている世界では手直しされている。少年時代の世界と現在のそれは同じ性格のものではないし、ジャンがリモージュで過ごしにやつて来た迅速な年月や、レンズでの短い日々が適用される時間の観念は遠い昔の日々には最早通用しないものだ。

砂利の上での足取りが彼の頭を上げさせた。ポリーヌは手に籠を持って家から出てきた。彼女の後ろの遠くのほうで庭師が二重梯子を抱えていた。ポリーヌはその眼をじつと桜の樹に止めていた。ジャンは薔薇の木に隠れて身動きせずに、彼女が彼に気付かないで彼の方へやつて来るのを眺めていた。彼女はバラ色の格子縞の金巾の衣装で、まだ若々しくその目は活き活きとしていたが、少し深刻そうで、サクランボを摘み取るという考えに我を忘れていた。

ジャンは自分のポリーヌに対する愛の内にある種の魔術的な本質という実質、ある種の永遠なるものに合体されていると感じていた。そんな訳で彼女が彼にかわりあう束の間の時も彼に永遠性の奇妙な感じを与えたのだった。

ポリーヌは桜の木を見ていた。それから家の方に目を向けた。

「駄目だわ、ファルディスー、まだ十分熟れてはいないわね。」

彼女は桜の木に近づいて、サクランボを一つ取ろうと手を伸ばした時、突然ジャンに気が付いた。彼はその時彼女の顔の変化に、驚きの輝きに心を動かされたのだった。いつもはポリーヌは彼を陽気に、しかし習慣的な笑みを浮かべて、つまり控えめの態度で出迎えたのだったが、子供っぽい外観を持つ些細なものによってその愛を現すのだったが、それはジャンにとつては彼女の側での生活の魅力ともなっていたのだ。つまりそれは整頓とか美しい服とかいつも変わらない機嫌のよさなどなのだ。

「君は私に会ってそんなに嬉しいのかい、ポーリーヌ？」

「あなた……こんなに早くお帰りになるとは思わなかったわ……！」

彼は両腕を開いた。そして彼女は跪くように座り込み、自分の肩にその喜びを隠したのだった。

「うん、私は今日は怠けているんだよ。私は道草をしてしまったんだ。さっき知事のところに行っていた、そこから出るとこのいい天気が私を誘惑したんだよ。私は大通りをぶらぶらしてきたんだよ。小説を一冊買ったよ。ここには木陰でそれを読むために来たんだよ。」

「知事さんはお元気でしたの？」

「私たちは関税の問題で知事室に集まったんだ。それは単純なことなんだけど、ジューリの美しい声を聞かされたんだよ。知事は特に私に笑顔を見せてくれて、特別に話したよ。戦争のことを話したんだけれどね……。」

雑草の中に体を滑り込ませていたポーリーヌはまた頭を上げた。

「戦争ですって？ ……あなたは行くんじゃないんでしょうね。」

「私はアングレームの部隊に配属されることになるだろう。軍曹として。私は年取った軍曹だよ、それでも行くんだよ。」

「工場はどうなるの？」

「バブウゼがいるからね。」

「あなたは戦ったりはしないんでしょうね。それは若い人のすることだね……。」

「私には何も判らないことだよ。私は知事さんに、『戦争とはどんなものですか。』と尋ねたんだよ。知

事は私の質問をおかしなものと考えたんだ、彼は戦争の正体については良く判っていると思っていられないんだ。しかし人間には何も判らない。誰も近い将来に何が起こるか想像できる者はいないんだ。」

「そんなことはあり得ないわ。」

「私は自分は少しも戦いたいとは思わないことを確約するよ。それに世界の現状では、私には社会的な反目しか見えないんだよ……。私は十分な義務を背負わされている……。私は多くのことで必要とされている。人生はすでに私を縛りつけたのだ……。いや、私はフランス人として、私と同じ言葉を話し、他に似たものはまったく無いような私たちの共通の慣用語においてははっきりと感じさせるフランス人のために戦うことにこだわるつもりはないんだよ……。私は自分が一人の友をも持っていないフランスのために死にたくはないのだ。」

..

この七月という月はリモージュでは大変暑く、埃っぽいので、ポーリーヌはマックスをヴァカンス前にデッカの家に送り込んでいた。日曜日には彼らはジョンシュロールに行ったし、時には週日の間にヴィエンヌ河岸や山に弁当を持って出掛けて行った。

ある朝彼らは満開のヒースに覆われた丸い丘に登ったが、そこは花崗岩の塊に縁取られた小川に沿っていた。その途中で彼らは山毛櫸の下で横になった。突然丘の麓の街道を大声で歌を歌っている兵士の一連隊が不意に現れた。

ポーリーヌは立ち上がって、じつと長い間ジャンを見つめていたのだった。

「心配しないでいいよ、……ジャンが言った……大したことは起こらないよ。」

二人はいつもよりも早くジョンシュロール行きの汽車に乗った。二人だけの差し向かいのあんな日々を愛していた彼らは自分たちだけで居ることは出来なかったのだった。

ジャンは新聞に目を固定して、ポーリーヌと向かい合って食事をした。彼は朝早く工場に出掛けていたのである。ポーリーヌは大きな麦わら帽子を被って植木挟みを手に取った。手には籠を持ち、彼女は庭で色の褪せた薔薇を切り取った。彼女はいろんな計画を作成するのを止めなかった。九月になるとジャンは二、三日の休暇を取れるだろう、すると彼らは何処に行くんだろうか。安心するために彼女は未来に確固とした対象を感じなければならないのである。ああ、美しい薔薇。地面の直ぐ側でそれらは葉に隠されていたのだ。ポーリーヌはそれを取ろうと身を屈めた。そしてぎくつとして止まった。町のすべての鐘が間を置いて鳴っている、全部の鐘だ、今までにこんな事はなかった。彼女はその悲痛な知らせの意味を理解している。彼女の周りの何もいっそう現実的であるようにには思えないのだ。ただ耳のなかの振動と恐ろしいほどに心を締めつけられるように感じるものがあるだけなのだ。

パン運びの少年が丸い大きなパンを抱えて走って登ってくる。彼は顔を真っ赤にして元気そうに、通りがかりに「奥さん、戦争ですよ。」と叫んだ。

小さな道に面した庭の同じ扉が開かれて、大柄の青年が真っ青な顔をして、目を輝かせて進んでくる。それは料理女の息子である。彼はバルヌリー商会の職工である。そして腕の下と片手には仕事着といろんな道具を持っている。たちまち台所から泣き声が聞こえたのだった。

ポーリーヌは帽子を脱いだ。そしてやつとそれと判るような鉄の扉の音を聞いた。何時もはジャンは大きな音と共にそれをそのままほっておくのである。彼はそれを静かに閉めたところだった。

..

ジャンはしばしば自分には自分の内面的な生活に依存しているものであるように思われていた世界の現実性というもので絶対的に一杯になった感情を持ったことは決してなかったのである。軍事動員のポスターの前で彼は自分が自分を否定するものの前に立っているのを見たのである。

彼は別の生活、別の場合を知ろうと努めたのだった。細心の自動作用が彼の良心に取って代わることになるだろう。先ず始めに彼の軍隊手帳とポスターがある。第九十四国土防衛軍大隊の軍曹として彼は六日後にアングレームのサン・ロシュ兵営に、八時半までに出向いて行かなければならないのだ。

学校と軍隊の教練を越えたところで彼は自分の周囲に二千年来の歴史の神秘的な動きを感じたのである。《我々は自分たちが新しい人間であると考えたのは間違っていた。》と彼は思ったのである。常にそれ自体が継続的な更新の形で動員のポスターは半世紀前から市役所の特別な紙挟みの中に仕舞われていたのだった。革命のフランス、愛国心の共通の祖国、その文明としての使命、素っ気なく行動的に目覚めて、数世紀以来の人間の知識によって代々の国王の下で形成された様式で示されている政府が再び出現するためにはポスターを出すだけで十分だったのであった。たちまちにして治安、調査、登録、管理の全体的な機構が動き出すのである。最近まで分裂していて、無頓着で反抗的である人々は自主的にそ

の命令に従い、進んでその枠組みに入っていくのである。

けれども家庭的な繋がりは依然として優しいものであるのに変わりはない。様々な思想を微妙にしみ込ませた愛情はそれぞれの感情を置き換えられないものとしてしているのである。どんな愛情も余すところが無いように取っておかれている。すべては尊いものなのだ。

しかし義務は自己犠牲に至るまで受け入れられる。様々な障害は奇跡的に無くなるのだ。そして階級の差別ももはや無いのだ。至る所で人は自分が結局は同胞の中にいるという熱い印象を感じるのである。ジャンはフランスが国家としてではなく、それ自体としてそこに女たちを含めた共鳴の気持ちにおいて愛されているのだということに気付いたのだった。彼はそれをも自分の内面において感じていた。そして彼の夢想は彼を歴史へと誘うのだ。

彼はもう十九世紀を理解していない。フランスの本質は彼にとつては、二度ほど国王と革命によってすでに永久に言い表された様に思われたのであった。つまり二つの互いに相いれないイメージと、その融合だけがすべてを説明することが出来るということなのだ。その一つはおそらく生きる幸福をしめすのであろう。即ち地方、荘園、城、宮廷のフランス、肉体を持ち個性的なフランス、王政のフランスである。もう一方は闘争と思想のためのものであり、貧しくてジャコバンので、次の恐ろしい言葉《公安委員会》によって呼び起こされるものだ。今はその後者が活動を始めたのである。

開かれた大きな鉄柵から動員兵が到着して、見張りの隊員たちの前を通過し、指示を求めて止まった。中庭の奥の建物と、黒いタールを塗った土台の上の石灰が剥けたアーケードの前ではいくつかのグループが掲示板を見つめていた。現役の下士官がジャンの軍隊手帳を点検して、自分が手にしていたリストに徴を付けた。

農民たちは自分たちが収穫したものを束にして畑に捨ててきたと話していた。ある哲学教授は戦争の様々な精神的結果について論じていた。タローは一瞬はそれに耳を傾けたが、それから肩をすくめてその一団を離れたのだった。

五十人ほどの男たちが、今ジャンの属していた第十二中隊の掲示板の前に立っていた。下士官がルーモアの学校に最初の分遣隊を連れていかなければならない伍長を呼んだ。四列になって自分のトランクを背負いながらその男たちは郊外の方へ下っていったが、そこでは古い学校が運動場の真ん中にあった。ある軍曹で最近退役した男が大きな部屋のなかに立っていたが、彼の周りには赤いズボンや青い大外套が積み重ねられていた。太っていて少し狡そうな眼をしたその男はこれからやり遂げるべき仕事についてのはっきりした考えを持っている唯一の者であるように思えた。動員された二人の民間人の仕立屋が片隅で襟章や金モール、或いは赤いウールの腕章を縫い付けていた。ジャンは自分の外套の襟をもっとピタリするように直してもらった。背囊、飯盒、幕営用の皿などが分配された。校庭では一人の大尉が散歩していた。彼は誰でも簡単に握手するのだった。到着した者たちは田舎風の外套を着て、あまり軍人らしくないその姿を見るのが好きだった。ここの部隊長であり、退役した将校であるシュルピエール少

佐が校庭に入ってきた。軍服を腰で締め、白い髭を持ち、その無邪気な青い目は彼に内気さと少し幻想的な意志を同時に思わせる奇妙な表情を与えているのだった。

..

ある夕方、アングレームの南方の城砦でジャンは、顎紐を付けた見張り番の男がグループ毎に歩いて行って、兵士に兵營に戻るように命令を与えているのを見たのだった。

「国防軍の兵士もかね。」

「命令は全体に対してです。」

それぞれの中隊は報告のためかのように校庭に集合した。第九十四国防軍は、翌日に現役の連隊と予備連隊に対して二つの方向での重要な出発が行われることが知らされた。志願兵としてそれに参加することを望む国防軍の兵士は名乗り出るのである。司令官はその訴えに答える勇敢な者たちを誇りに思うであろうなどが通告された。

翌日八時に学校の玄関の階段の一つの前に、十六名の兵士が並んで、その上官に披露された。

司令官は志願兵を祝福し、彼らに正午までに装備を完了し、その後で本隊の兵營に出頭して、出発していく分遣隊に合流するようにという命令である。それから彼は解散し、自分の側に軍曹を残した。

「私は前線まで志願兵に付き添っていく下士官が必要だ。自分の部隊に戻ってその同僚たちにそれを伝えてくれ。バルヌリー君、君は名簿を私の部屋に持ってきたまえ。」

ジャンは持ち場の兵に、日直の下士官を呼び出させてその命令を伝達した。三十分後に彼らは戻ってきた。しかし志願する者は居なかった。

ジャンもまた現役に登録されたくはなかった。彼はあの十六名の男たちのことを思ったがそれに引き付けられるようには感じなかった。めいめいの者はこの模範的な行為のために秘密の個人的な動機を持っていたのではないだろうか。ジャンは同意の意思表示の素振りをしようかと考えていた。しかし体の麻痺のせいでそれを手足に伝えることが出来なかったのだ。それに恥ずかしさの気持ちさえもが彼を引き止めたのであった。そして一種の反抗の気持ちもあったのだ。彼は奉仕の気持ちや自己犠牲の精神を自制したのである。それは民衆の闘いの基礎となるものではなかっただろうか。

..

ジャンの前に立っていた司令官は教室の中で言った。

「わしは自分のやり方をまったく当てにはしていなかった……。下士官というものは兵営では軍隊の小市民なのだ。彼は献身的ではあるうが、指名されなければならないのだ……。戦場では事情はまったく違う、責任感が鼓舞するのだ。しかしお前はわしの十六名の遅い連中を見ただろう。彼らは素晴らしいのだ。彼らには一人の軍曹が必要だ。私はそれでお前のことを考えていたのだ、バルヌリー君。私はそれを無理にというつもりはない。わしは君を指名する権限を持っているのではない……。わしは君の伯父や、デルレード、ドラマン、ブローなど、ブルバキ（訳注：フランスの将軍）の機動兵と一緒に

に闘ったのだ。わしは若い男である君を見ながら彼らのことを思っている。若しそれで十分でなければ、君は自分がジャン・バルヌリーであることを考えてみたまえ。君は模範でなければならぬのだ。我が国は君に多くのものを与えてきた。そして国は君を必要としているのだ。」

白い髭を生やし、茂みのようなグレーの眉をしたその老将校はお決まりのタイプで、ほとんど漫画的な人だった。突然ジャンは彼が偉大さに達したのを見たのだった。彼は、無信仰の時代の僧侶の様に、大衆の無関心の中で、平和な四十年間に追求してきた使命というものに気付いたのだった。

「司令官殿、私はあなたのために参りましょう。」彼は目を伏せながら言った。

《自分の命とは一体何だろうか。》ジャンは校庭を横切りながら、肩をそびやかして考えた。《人生それ自体は目的ではないのだ。》

彼は自分の後ろでリモージュ訛りの声を聞いた。

「司令官殿、ご存じかと思いますが、彼は同国の者です。私は彼を良く知っています。信心家ですよ。彼は毎朝ミサに出掛けるんですよ。」

ジャンは自分の立場が完全に変わってしまったことに対してほとんど無関心で静かな気持ちになっ外に出た。あるカフェーで、非常に素早く、内面では大きく震えながら、ゆったりとした筆致でポーリーヌに手紙を書いた。それから装備のひどく興奮した準備と食料や武器の受領、そして兵営所の庭での最後の集合となり、ヴウゼル分遣隊の二百五十人は、銃や胸の上に花を付け、日中の下に整列し、大変大がかりな引越騒ぎの中でやっと達せられた不動の状態にあったのだった。十六名の志願者の国防兵は目立っていたが、彼ら周到な配慮とつや出しの入念な仕上げや背囊と決然とした態度の堂々とした恰

好などで際立っていたのだった。

今や汽車はパリに向かつて走っていた。前線への途中で分遣隊の指揮をしていたビエール・ヴウゼル少尉はジャンにリモージュを通過することを打ち明けていた。しかしその道程は線路の混雑であらゆる迂回路を通ることを余儀なくさせていた。ジャンは自分が指揮していた男たちを少ししか知らなかった。そして彼は車両を見渡した時、半分の高さまで遮られた仕切りの上で、自分の権限はどの椅子まで及んでいるのかは判らなかった。しかし彼が駅のプラットフォームで手を挙げれば、未知のこの人たちの間で選別が行われるのだ。そして彼は直ぐに自分の顔を抑えていたかもしれない男たちに囲まれるのである。彼はその男たちの集合の中心であり、拠り所であった。彼の分隊は十六名の国防軍の志願兵から成っており、軍帽には非常に判りやすく白い大きな数字が書かれていたし、それと少し若い予備兵たちがいた。

ジャンの夢想の中では、戦争の観念や出発の時に彼に襲いかかったフランスについての不安などはそれが一瞬現れてから自然に遠ざかっていった。兵士で一杯になつていたこの車両の現実が大いに気を紛らせてくれた。それらの声は、自分の家族や仕事から引き離された男たちの間で直ぐに形成される快活さと憂いを知らない子供たちの社会でやり取りされるのだった。

黄昏時には周りの景色が変化した。斜面の牧場、小川が黒い石の間を勢い良く流れている断崖に縁取られた谷間などがそうだった。月明かりではそれらは高架橋を通過したときの様に突然ロマンティックな風景となつたのである。リモージュに近づいていたのだ。

列車は駅に停車した。車両の中では食事が行われた。停車は長引いた。すべての兵士は一人ずつプラッ

トフォームで横になり、眠ったのである。

駅から駅へと汽車は途中の道程で長時間停車しながら少しずつパリに進んでいった。そして壮大なガラス天井のある中央駅に到着した時、平服や軍服の人々の行き交うのが見られた。その時国防軍の志願兵の一人は、今まで一言も言わなかったのに、汽車から降りて尋ねた。

「どうか教えてください、どうしてこんなに多くの兵士がいるのですか。」

時折ジャンは忙しくしているヴウゼルに出会ったが、彼は分遣隊の仕事に専念していた。しかしジャンに対しては友情に満ちた元氣な言葉をかけてくれたし、時にはニュースも伝えてくれた。シャトルーでは《コンピエーニュが占領されたよ》と早口で言ったのだった。

ジャンは今自分の車室の男たちは知っていた。戦争や祖国の危険については何の問題も無かった。しかし一人一人の者についてはその職業とその家族のことを知ったのだった。陽気な者、お喋り、謙遜家、臆病者の区別もついた。

北部からの避難民の輸送車と行き違い始めた。九月六日、夜の十一時に汽車はオーステルリッツ駅に到着した。分遣隊の兵士はプラットフォームに整列し、それからいくつかの線路を一跨ぎして、コンコースを通り抜けた。小さな入り口の横の左手の奥で、ヴウゼルが手に紙切れを持って立っていた。彼はジャンに親しげな合図をして言った。

「ドイツ軍がパリの手前まで来ている。」

ジャンは思った。《アリーヌはどうなるのだろうか……？ 彼女は何処にいるのか……？ 我々の生活

は我々からはみ出している。それは我々に余りに多くの不安を与えている。我々は自分が呼ばれたどんな所にも駆けつけることは出来ないし、あらゆる自分の感情に答えることもできない。忘れなければならないのだ。」

二つの運搬車に背囊や鞆が積み込まれる間に分遣隊は又銃をした。一昨夜、満月だった月はすでに駅の高いところに昇っていた。月だけが街路を照らしており、短くピラミッドの形をなした小銃はどぎつい閃光を放っていた。

ヴウゼルがジャンに近づいた。

「お前はパリを知っているのか。」

「どこへ行かれるのですか。」

「サン・ラザール駅だ。」

その一隊は背負い革で武器を背負って行軍を始めた。そして無言でセーヌ河の河岸に沿って行った。ジャンとヴウゼルは並んで歩いていった。

ノートル・ダム寺院が月の光の下でゆっくりと回転しながら大きくなっていく様に思えた。彼らは裁判所に沿って進み、ポン・ヌフ橋を通ってルーヴル宮殿に着いた。ジャンとヴウゼルにとつてこの行程は余りに豊かで忘れることは出来ないが、消えることはあり得ない音楽のようなものだった。

オペラ座通りは誰もいなかった。そこには偽りの眠りが、無言で心配顔の徹夜が感じられたのだ。エッフェル塔のサーチライトは高所から空間を一掃し、通りの家々をかすめた。別の光の線は水蒸気の白い中心の中で大空の方に姿を消した。

サン・ラザール駅のローマ広場で分遣隊は一休みした。そして男たちは又銃をして周りの地面に横になった。

..

彼らはルーアン行きの列車に乗って、何にも言わないでベンチの上で居眠りを始めた。彼らはパリ行きの別の列車に乗り換えた。ある駅では彼らは敵方の飛行機がゆつくりと大空を通過し、紺碧の前線に黒、白、赤の巨大な三色旗を広げたが、それは壮麗さと共に膨らんで半ばそれ自体が絡まつたりしていた。

彼らはベコン・レ・ブリュイエールで下車し、それからオーベルヴィリエに到着した。その夜はドイツ軍の灯火がいつそう近くなったり、重くのしかかったり、不安を感じさせるオーロラの様になったりした。ヴウゼルの分遣隊は第七歩兵連隊に一つの単位として統合され、一中隊となった。そして北に向かつて行軍を始めたのである。

その部隊は掘り返された道を行軍していったが、奪還された村々を横切った。しかしそこには人つ子一人おらず、陰鬱であり、ドイツ軍の宿営を示すチョークの書き込みが残されていた。切斷された木々の間の石畳の大通りを昼間は休息もせず、ほとんど食料も無しで、宿舎もなく行軍するのである。それは誰もがそれと判らない勝利の日々であるが、誰も思いも寄らないことで、苦難に満ちたものだった。そして兵士たちは機械的に火の様な前線に向かつて、何の懸念も好奇心も無く、北上して来る本隊が通過

するのを眺めながら、道路の横に止まっていた交代の兵士たちに尋ねることさえしないのだ。予備兵たちは指で志願した国防軍を示し合った。そして国防軍の兵士は嘲りの気持ちで向き直ったのである。

ジャンが目にした最初の死体は道端に置かれていた。その軍服からはボタンが全部はぎ取られており、足は裸足だった。もつと進むと溝は死体で一杯になっていた。彼らは工兵橋の所でエーヌ河を渡った。トラシー・ル・モン、トラシー・ル・ヴァル、カルポンの間で彼らは木の下でパンと拾い集めたジャガイモを食べた。

ジャンはお決まりの行軍の単調さの内で行進していったが、足踏みの停止やへとへとにさせる奪還、簡潔な命令と罵り言葉のそれ、呪われた心、凶暴性のある不動性というものがあつた。彼は自分が殺されてしまうのではないかという可能性を全身で感じていた。その危険は彼にとっては数学的な考えではなく、内臓の中の毒素のようなものだった。頭か腹のどちらかを撃たれるのだろうか。彼はボーリーヌがその知らせを受け取るその光景を思い描いた……。正確さをきするために絶えずその光景に立ち戻りながら彼は真つ昼間に夢遊病者の様にして行軍していたが、汗が額から流れて、武器や道具類が揺れて、だんだんと厄介な位置にずれてしまった。彼は両肩を揺すって背囊を押し上げた。そしてもう一度肩掛け鞆を後ろに戻した。これらの仕種の一つ一つは悪夢の耐えられない刹那と一致しているのだった。一匹の蠅が自分の周りをぶんぶん唸りながら彼の頬や首に止まった。彼はそれを追い払い、まるでそれが不幸自体であるかの様に握りつぶそうとしたのだった。

休息地や宿営地に着いた時、威勢のよい男が「さあ、コーヒーを。」と親しげに肩を叩いたり、日直の命令などがジャンを苦しみから救い出してくれた。彼は突然自分の周囲に陽気さと慰めを、つまり冗談

や煙草やワインの数杯が急いで広めてくれたその存在で、再び喜びを取り戻した。原則的には死んだも同然だったが、一命を取り戻すささやかなチャンスを持った人間として、彼はまた太陽の元で生き活きとした兵士に立ち戻り、すべての生き物と同じく、死ぬことが出来る兵士になったのである。彼の夢は彼が兵士であることを感じるほど、その回数は減っていった。

彼は努力して自分の戦友のために、そして彼らによって生きたのだった。その男たちの名前はファイルされて、自分の精神に浮かんできたのであった。クレルジオー、ダスト、ドービーニー、エルーテール、グールドン、フロワン、ゴット、エルグレ、ラティー、トンヂュー、ヴァンストラエたちである。クレルジオーはリュエルの労働者であったが、彼は音楽の話をした。クレルジオーはピアノを弾いた自分の妻を熱愛していた。ダストと彼は休息の時に学問や弾道学について話したのだった。そして彼は二人の子分である小柄の優しいリモージュ出身のエルーテールと忠実なシャラント人のグールドンを持っていた。主人の周りの犬の様にジャンは彼らが彼の目と彼の言葉によって生きているのを感じていた。

彼は自分の魂が自分の肉体のようになるのを、そしてその柔らかない部分は軍服と装備と分離できない重荷から成る硬い甲冑の中に閉じ込められればいいと思っていた。時折小川の辺に停止するときは体を引き締めてくれる冷水浴が出来た。彼は自分の両足を清水の中に投げ入れた。水は泥を洗い流してくれたが、足の裏の非常に大切な保護をしてくれるタコはそのままにしておいてくれるのだ。

中隊は小さな溪谷や起伏していた土地の窪みの中に留まっていた。そして何時間も合図を待っていたのである。突然砲弾が炸裂した。そして各セクションの者は背囊という硬い殻で覆われた一種の丸い玉のようになったが、それは様々な心が榴霰弾の爆発音で跳び上がる生きた動物さながらだった。ジャン

はしばしば地上に伏せているグループの先頭に、立ったままで自分の髭を撫でているヴウゼルのシルエツトを見たのだった。

..

攻撃が予想されていた。その師団は地平線の彼方に認められる要塞と化した農場を占領しなければならなかったが、それは甜菜畑の向こうに極めて平たくなって見えたのだった。それから次々と規則正しく援護の砲兵隊の射撃音が連続して聞こえてきた。ジャンの部隊は蒸溜所の納屋と部屋を占領していた。馬草小屋が火事になった。兵士たちは煙の渦と焰の動きを目で追っていた。焰が近づいてきた時には、彼らは少しづつ場所を譲った。それから彼らは空になった家畜小屋に別の避難場所を探したのだった。兵士たちは攻撃の前に飲んだり食べたりしはじめた。外に置かれていた農機具や積み上げられた犁の上に砲弾が霰のように降ってくる音が聞こえた。干し草で一杯になった秣桶の中には、青色の外套を着てボタンを付け、帽子を被った死体があった。誰もそれに注意する者はいなかった。その男は、一度銃弾を受けてから、溝のなかから立ち上がり、あらゆる新たな危険には構わずに、銃弾の降り注ぐ中を立って行軍していく多くの他の者たちの様に腹と横腹を押さえながらそこにやって来たのだと、ジャンは思ったのである。彼はベッドに似ていた秣桶に横になったのだった。彼は自分の家族や神の許しや、最後の瞬間に彼を苦しめた上手く片づいていない仕事のことを考えただろうか、あるいは乾草の中の幼子を感じ出したのだろうか。人は生きている時には自分の生を与える、しかし自分のために自分の死を大切に

するものだ。病人以上に自分が死するのを見つめていたこの負傷者の最後の考えの内には何が見いだされるのだろうか。おそらくは男よりは女の、それも若い人よりは年老いた人の優しい姿なのではないのだろうか。あるいはただ言われる必要のない「遂に」という思いだけなのだろうか。

ジャンの中隊の番になった。一人ずつ最初の分隊が入り口を過ぎて行き、犁の後ろに整列する。それから最も困難な場所を横切るのが待ちきれないかのように、彼らは畑の中に突撃する。穴の空いた厚い葉っぱのパチパチという音が聞こえてくる。素早く数回跳んでから、土の上に重そうに体を倒し、ひれ伏して、ジャンと部下たちは決められていた高台に達したが、そこは危険はもつと少ないのだった。そこまで来ればもう全滅ということはある得ないが、一人や二人にはやられるだろう。広大な甜菜畑には誰もいないように思える。雨のように弾丸の降り注ぐ下で、兵士たちは銃弾を避けるために場所を変えなければならぬということ、そして同じ地点がずっと長く重視されることは無いだろうという印象を持った。それから彼らはそれに慣れるのだ。《そうすることが何の意味があるというのだ……銃弾はお前と同じように抜け目ないものでもあるのだ。》彼らは地上に横になり、背囊を頭の前に置いてから、話しはじめた。《この攻撃はどうなるのだろうか……？》

砲撃が止まった。

《弾薬が底を突いたらしい。》ジャンは十六名の志願兵の内の最年長の国防軍の兵士のドービーニーと隣り合わせになっている。彼は赤痢ですっかりやつれて、声はかすれて年老いている、その顔はその青い目によってのみ衰退に抵抗しているのだ。

「いうことを聞いてくれないのは両足なんですよ、胸はしっかりしているんですがね、わっしはそれが見たいと思っていたんですが……それは何といつても奇妙ですからね！」彼はしゃつくりをしながら言った。

それから彼は自分の職業の話をする。彼は時計職人なのだ。ジャンは自分の懷中時計を彼に見せた。ドービニーは自分の彈藥帯からやつとのことで鼻眼鏡を取り出して、時計の裏を開いた。

畑の真ん中で榴霰彈が破裂した。直ちに前に寝ていた男たちは木の葉の上に立ち上がり、走りながら退却してきた。ジャンは自分の後ろに声を聞いた。

「皆逆上しているんだ！」

「動くな！」ジャンは叫んだ。

逃亡兵が走りながら団体になつて近づいてくる。

「彼らは眠っていたんだ！」ジャンは言った。「あいつらは氣違いだ。」

また彈丸が葉っぱを撃ち抜いた。

「軍曹殿、軍曹殿、ここに居てはいけません。」

「動くな。」

II

春夏秋冬、そして何年かの年月が過ぎた。ポーリーヌは時にはいつも心に付きまとう不安を忘れるのだったが、それは様々なことを思いめぐらす苦悶の界限のない眠れぬ夜を過ごす間の奇妙な休息の時だった。彼女はもう自分の心のどこにジャンを位置づけたらいいのか判らなかった。そして彼女は物事は永遠に今のままであることを認めていたし、駅は時々ジャンが現れて、消えてしまう地獄のような場所であり、閉ざされた未来はあらゆる幻影の存在であるということなのだ。絶えざる恐怖心は和らげられ、人々は働き、微笑み、そして忍耐力もすり減らされるのだ。

使用人がシャッターを開けた。そしてマックスが腕に紙挟みを持って部屋を横切り、自分のベレー帽を捜して階段を降りて、また上がってくる。

ポーリーヌは服を着替えて病院に出掛けた。毎朝クロロホルムの蒸気の中で、病人たちの頭の側の背の高いスツールに坐って、彼女は疲れ切った人々を眠らせるのだったが、彼らは眠りの内で我を忘れたり、あるいは自分と繋がったものと格闘し、打ち負かされても秘かな言葉で叫ぶのだ。

彼女は運び込まれたばかりの一人の負傷者のレントゲン写真の方に光を上げて、その臨床記録を見た。

《ファイエ、ルネ、陸軍少尉、一九一七年四月二十三日負傷、左眼に砲弾の破片あり。》

ポリーリ又は横になっている若い男に近づいたが、彼は顔の一部に包帯が巻かれて居た、そして微笑んで言った。

「あなたを眠らせてあげるのは私ですよ……安心してらっしゃい……怖くはありませんからね……」

「私が恐れているのはそんな事ではありません……私は教えてもらいたいことがあるんです……破片だけを除去するということが出来るんでしょうか。」

「確かに出来ますわ……手術すれば判ることですからね。」

「頭が痛むんです、おそらく片眼は駄目になるでしょう。」

「安心なさい……後で楽になりますからね。」

「あなたはずっと僕の側に居てくださるのですか。」

彼女はまだ子供の成年の恐怖を見た、そして優しく眺めていた。

「ええ、そこに居ますわ、私はずっとあなたの側から離れたりはしませんからね。」

外科医とその助手が時間をかけて喋りながら手を洗っており、看護士がトレーを温めて、そこにいろんな器具を載せている間に、ポリーリ又はクロロホルムの筒先をルネ・ファイエの顔の上に持ち上げて居たのだった。

「しっかりと息をするのよ、お坊ちゃん。」彼女は、左右に向きを変えるその頭を両腕の間に支えて言った。

彼は微かにもがいたが、それからぐったりした。ポリーリ又は自分の胸に身を任せている若くて蒼白

なその顔だけを見ているのだった。

外科医はゴムの手袋を脱ぎながら言った。

「バルヌリーさん、ご主人から連絡はありますか。」

「もう長い間無いんですよ、……ポリーヌは低い声で言った……でもこの攻勢下では当然のことですわ。」

「かなり前進していますね、今朝の公式の声明は興味を持たせますね。」

ルネ・ファイエは目覚めてから呻いていたが、その大きな綿でくるまれた頭で、ポリーヌを見ないで、彼女の手を自分の両手で握っていた。

「僕は喉が乾きました……ああ、奥さんはそこにおられるんですね……。僕は何も感じないのです……どこにも行かないでください……。」

彼女は彼の乾いた唇を湿した。それから彼がうとうとしている間に黙って、身動きもせず、彼の側の席にまた腰掛けた。彼の質問を恐れて、彼女はその麻酔がもっと長く続くことを願っていた。

ポリーヌは、戦争が終わってから空っぽの家の方へ一人で歩いていきながら、この同じ道にいる自分の姿を思い浮かべていた。確かにそれは悪い夢だった。彼女は家に着いたら一通の手紙を見いだすことになるだろう。すでに彼女は玄関のほの暗い電球の下にトレイに乗せられた封筒を眼に見るように思ったが、その直線的な書体と封印などあらゆる細かな点で非常に正確にそのものであったのである。

彼女は庭を横切ったが、その眼は入り口の扉の上の方の小さな四角いガラス窓に固定されていたし、そ

こには玄関の明かりが現れているのだった。彼女は中に入って、素早く空のトレイの前を通りすぎたが、自分では何も待つてはならないと前もって判っていたのだった。

夕食後ポーリーヌはジャンの肘掛け椅子に腰を下ろした。丸テーブルの上では葉巻の代わりに一對の靴下にさされた金属の針が光っていた。ポーリーヌは喉を詰まらせて、マックスの質問に答えていたが、それから彼と一緒に二階に上がった。そして自分の身の回りのものを畳むのに手間取っていたが、非常に眠くなったかのように直ぐに寢床に就いたのだった。しかし彼女は電気は点けっぱなしにしていたし、寢台の木の部分に頭をくっつけて、無意識の内にこつこつと叩いていた。

翌日には彼女は家の前に郵便配達夫を認めて思ったのだ。《若し私が急げば、そして若し私が彼に尋ねたならば、私は欺かれるだろう。》しかしその待ちきれない気持ちには迷信の気持ちで彼女を連れ去ってしまった。息切れしながら、両眼は大きく開き、爪は握り拳に食い込ませて、彼女はゆっくりと鞆の中を探っていた節くれだった老人の手を眺めていた。

マックスがベレー帽を横に被って、半分開いた紙挟みを腕に抱えて、リセから帰ってきた。

「マックス、お父さんから手紙が来てるわよ。」

彼女は前線から届いたのではない、切手が貼ってあるその封筒を敢えて開こうとはしないで自分の部屋に上がっていった。そして心地よく安楽椅子に坐った。しかし彼女は自分が読んでいる内容の意味が判らず、《あの人は生きているんだわ。》と繰り返した。

ジャンはこの手紙を休暇をもらった兵士に託すことを考えて、手紙を書かなかったんだと言っていたのだ。彼は自分の連隊を離れて、サン・ディエの近くのユールフォンに移動していた。そしてそこで

情報将校になるために講義を受けることになっていた。それから彼はアメリカの師団に配属されることになるだろう。ポーリーヌは二日間ユールフォンにやつて来る事が出来るというのだ。

彼女はその手紙をハンドバッグに入れて階段を下りて、鉄の扉を閉じるがままにして、ルーズのところに急いだ。自分としてはこの手紙の意味を説明してもらいたいのだ。

「それじゃ終わったのね。」

「そうだが、あなたにとって戦争は終わったんだと思うのよ。」ルーズは彼女を抱きしめながら言った。

ポーリーヌは直ぐに旅行のことで頭が一杯になり、必要な書類を集めて、サン・ディエに住んでいた親族に会いに行くという口実の下に、軍隊の駐屯地区への通行許可証を手に入れた。

彼女は最も色褪せていない服を吟味し、ショー・ウインドウを眺め、店のなかに入って行った。そしてある服を試着し、目立つたものになりはしないかと疑って気後れして、自分の若い娘時代の個人的で少しばかり神秘的な気配りへの好みを取り戻したのだった。

交通機関の困難さと自分が他の女たちの前で守っていた慎みの故に、パリに出掛けて最後の買い物をすることを決心した。旅行のためには古いグレーのスーツを身に着けた。

ベッドの中で眠れずにいるのを今度は嬉しく思いながら、彼女はジャンの指示を思い浮かべていた。彼女はユールフォンまでは列車の中に止まっていなければならないだろう。若し駅にジャンが居なければ、彼女は橋を横切って、往来に沿って行くだろう。彼は町の西部の労働者がいるアルベール街に住んでいるのだ。

彼女は今こそその意味をすべて把握しなければならぬように、その手紙を読みなおすためにまたランプを灯した。《彼は自分は満足だと書き加えること出来ただろう。》と思った。《しかしバルヌリー家の人々はあまり外交的ではないのだ。》

彼女は両眼を開けた。そしてカーテンに日が当たっているのに驚いて、急いで服を着て、眠っているマックスを抱きしめた。

長時間客車の窓の横で身動きもしないで、ポーリーヌは以前は親しいものだった田舎を眺めていたが、それは彼女には、その柔らかな緑と春の花々で新しく感動的なものに思われたのだった。そしてそこからは人けのないいくつかの小さな駅や、村々や都会の混雑した駅などに少し妨げられはしたが、忘れていた平穏さの感情がやって来るのだった。

夕方には通路に立っていたポーリーヌは夜の中にパリの明かりを探していた。しかしすでに高層ビルが多数の線路に沿って立ち並んでおり、彼女は自分が陰鬱で耳をつんざく様な大都市に近いのを感じた。彼女はオルセー河岸のホテルの一室を選んだ。窓から彼女は闇の中に黒い流れを、街灯のシェードの微かな明るさ、そしてヴェールのかかった標識灯の行ったり来たりなどを認めたのだった。非常に高いところでは飛行機のエンジン音が町々の押し殺された様な騒音を支配していた。

しかし翌日には彼女はパリでの五月の朝の爽やかさと自分の若い日の元気な歩調を再び見いだしたのだった。光輝く大通りでは派手に飾りたてた将校たちや高いブーツを履いた飛行士たちが明るい服を着た女たちと散歩していた。そしてポーリーヌは若返って陽気で彼女のことしか考えていないジャンを見

たように思った。ショー・ウインドウではモスリンレースの開花と羽毛の束、絹で作られた花で一杯だった。少し陶醉したようになってポーリー又はショー・ウインドウの前で立ち止まった。誘惑を感じて、決めかねて彼女は新作に近づいたが、気が変わってしまった。それからホテルに戻ってフィアンセの様な興奮と共に小トランクの中のリボン飾りの付いた下着や繊細な靴下、スエードの手袋、支那のクレープの朝着などを畳んだりした。

群衆が東駅の階段を上がったり下りたりした。ヘルメットを被った兵士たちが別の駅に走っていったり、食事のためにグループになって坐っていた。突き飛ばされたりしながらポーリー又は自分が乗る汽車にたどり着いたのだった。そして一日中絶えず入れ代わるお喋りの旅客たちのために自分の席に釘付けにされたままで、彼女は爆撃や火事の話聞いていたのだった。彼女はショーモンで夜を過ごした。朝になると、数時間するとジャンに再会するという考えがあらゆる他の感情を消してしまった。彼女は自分の皮膚で新しい寒冷紗の肌触りを感じて心地よかった。気を付けて彼女はパリで買った黒のタフタの服と襷の付いたボレロを身に着けたのだった……。

もう一度汽車の中に腰を下ろしたポーリー又は細やかに気を使つて自分のハンドバッグに香水を付けたハンカチ、その口が十字形にリボンが付けられたモアレの模様の布製財布、そして自分が到着した時につける清潔な手袋などを入れた。

彼女は想像できないような様々な話によつてそれほどに思いめぐらそうとしていたこの地域に近づいたが、その田舎は穏やかなものだった。時折国道では、空っぽであるように思われたが、毛虫のようにゆつくりと前進していくトラックの長い列を認めたのだった。彼女は時計を見てまたこう考えた。《ジャ

ンが駅にいないければ、橋を横切つていこうと……。彼女が目を閉じた、そして非常にわずかしい時間、手紙には書けない様なもので、しかも正に肝心なことであるそんなにかくさんのことを言うことで心が震える程だった……。

突然彼女は到着した。目には霧がかかったようになっており、心は高鳴り、まるで恐れていたように、そして息をするのを抑えていた彼女はホームにジャンを見つけた。彼は合図した。しかし帰還兵を運ぶ列車で見えなくなってしまった。兵士には《列車がでるぞ、降りるな》という大声が聞こえた。すべての者は降りて、軽食堂へ走つていった。汽車はゆっくりと動きだした、その後ろを兵士たちが追いつけて、客車にしがみついた。そして彼らの体の周りには一塊の背囊と水筒がぶら下がっていた。

ジャンは頬が膨れて、赤ら顔で、カーキ色の軍服を着た士官に話しかけていた。それから振り向いてポーリーヌを抱きしめたのだった。

「旅行は良かったかね、長かったのかね……。私は今朝君のパリからの手紙を受け取ったんだよ。」

「私は七時にショーマンに着くはずだったのよ、でもいろんな所で止まったの。それで遅くなつてしまったという訳なのよ。」

「どこで夕食を食べたの？」

「私は十時に食べたわ。途中では何にも見つからなかったわ。」

「ホテルに自分の部屋を予約しておいたのかい。」

「ううん、探したのよ……。人にも尋ねたし……。」

彼はポーリーヌのトランクを持って、駅の中に入つていった。

「マックスは元気かね……。ちよつと行つてくるよ。この部屋で待つていてくれ。」

彼女は自分を警戒の気持ちで観察していた憲兵の前の長椅子に坐つた。突然沈黙が熱っぽい興奮のざわめきと入れ代わつた。他のどの駅とも同じ小さな駅だ。本当に前線の側にいるのだろうか。すべてが本当に見えるには余りにも現実的過ぎるのだ。

「済んだよ……ジャンが言つた……あの士官に話しておきたかつたんだよ……。その方が安心できるからね。彼はバリ行きの許可をもらつており、汽車の時間を調べにやつて来たんだよ……。」

「あなたが困ることは無いのかしら……それは不謹慎ということはないんでしょね。」

「そんなことはない。今は決まつてゐることなんだ。これから私が宿泊している人の家に食事に行こう。ジュリアン夫人が私たちの部屋で食事の準備をしてくれるよ……君もジュリアン夫人とうまくやつてくれるね。」

彼女は一瞬ジャンの腕に寄り掛かつたが、それは頑丈で力強く感じた。そして青みがかった灰色の目を見た。その目は以前は時折明敏でほとんど厳しいと言えるような表情を示したことがあつたが、今は判つていて優しくなつたようだった。

「あなたはお太りになつたのね……。」

彼女は、多くの危険を逃れてきた人間の元で感じた新たな安堵の思いを言い表すことを望んでいた。しかしあれほどに打ち碎かれた多くの肉体を見てきた彼女は壊れ易い肉体と脆い骨というものを知つていたのだ。

「体の下には詰め物が……編んだものがある……。」

その家の敷居の上に立って、

「うちの中尉さんの奥さんがお見えだよ。」台所の中に坐っていた男に話しかけて、ジュリアン夫人が言った。

兎の肉の固まりが鍋でとろ火で煮られていた。フライパンがテーブルの端に置かれており、その横には空のお碗と、窪んだお皿には卵が載っていた。

工場へ働きに行くために仕事を急いですることに慣れていた女のように、確かな仕種でジュリアン夫人はポリーヌの荷物をしっかりと掴んで部屋に運ぶと直ぐに出ていったのだった。赤と白の基盤模様の蠟引きの布で覆われたテーブルが部屋の真ん中に持つてこられ、ジャンの本と書類は地面に置かれ、パンは椅子の上に置かれた。入口からは卵をかき混ぜる音が聞こえた。

「この家には新鮮な卵があるんだ。……ジャンが言った……それは素晴らしいんだよ。ほら、この家は小さい……ああ、有り難う、ジュリアンさん、素晴らしいオムレツだ……！」

ポリーヌはジャンがむしやむしやと食べるのを眺めていた。少し動物的な食欲、その唐突なやり方の内に彼女は彼の内面的な疲れの徴を見た。そして突然心配になって彼女は重々しく言った。

「私、最近は何カ月もあなたからの手紙をもらってないわ、書くことが出来なかったの、……第一線にいらしたからなのかしら。」

彼はこの質問を遮るためかのように突然言った。

「多くの死者が在ったんだよ。それで連隊は解散になったんだ。」

彼は自分がまるで何も見なかったかのように、人から聞いた言葉で答えたのだった。

「あなたは昇進なさったの？」

「そうだよ……私には良くは判らないんだけど……場所が変わったし。君のほうが私より良く知っているんじゃないかね、新聞を読んでいるから。」

「あなたはエドアールの息子のポール・ジューリを覚えていらっしやるかしら。あの人の奥さんが私の病院で看護婦をなさってるわ、そしてあの人は亡くなったのよ。」

ジャンは呆然として無言でいた。三キロメートル前進しても大したことはないし、人間の死自体が無用であるという考えは彼には説明できないような無関心の状態を作りだしていた。しかしポーリーヌは漠然と予感しており、ジャンの心をそこから逸らせようとして、家のことや家族のことを話し、さらに強い調子でこう言った。

「ジャン、私、あなたに聞いてみたいことがあるの。あなたはマチルドを解雇したことは知っているわね。私は食堂を締切りにしたのよ。私たちは客間で生活してるのよ。でも寄せ木細工のテーブルを保護するために蠟を引いた布の下に厚い毛布を敷いているの。」

今度は彼女がジャンの目のなかに認めた不機嫌の表情に当惑して押し黙った。彼は次のように言いたげなのである。《私に意見などを求めるな、私は決定することは出来ないのだから。君は私が居なくても今まで上手くやって来ることが出来たじゃないか。》

ぼんやりした考えに結びついた優しくてほんのりとやり切れなくなったような奇妙な視線を彼女は後になってまた見いだしたが、それには驚きと皮肉の色が混じり合っているのだった。そしてそれは彼女

が鏡の前に立つて自分の髪を整え、額にその曲がった縁飾りを付け、それからボレロを脱いでいた時のことで、ジャンが彼女の透き通った絹のブラウスに目を釘付けにして見つめていた時のことであつた。

枕を軽く叩いて、寝台に白い木綿のカヴァーを引き寄せながらポーリーヌが言った。

「私はあなたがここで何をしていたのかが判らなかつたのよ。」

「私はアメリカ士官の学校に通っているんだよ。そして通訳に任命されるのを待っているんだ。五時までは君の側を離れていなければならぬ。タルマン・デ・レオ公園の横の川の辺に散歩に行つてきたまゑ。公園に入つてもいいんだよ。五時にそこで会おう。部屋鍵は渡しておくからね。」

ポーリーヌはトランクを整えてから、ジャンの本を取つて、ベッドに坐り、横になつてから眠り込んだ。彼女が目覚めたときには四時になつていた。彼女は外に出て、遠くの嵐のような音が絶えず続いているのに耳を傾け、橋を渡つてスレート葺きの屋根の下のように互いに並んでいた家々に沿つて歩いて行つた。女たちが一階のあらゆる窓で食料を売つていた。そして兵士たちが布の袍を一杯にして、自転車を出発するのが見られたが、彼らはワインで一杯になつた水筒をさげ、革紐で体を締めつけていた。彼女は鉄の柵で閉じられている何も植えられていないスペースやいくつかの仮の宿舎、そして至る所に死体のように地面に横たわっている不潔な灰色の人間の体などを見つけたのだった。鉄工所の支配人の家が芝生とヒマラヤ杉の真ん中に出現した。もつと下の方には灌木に縁取られた小川が明るい牧場を横切つていた。ほの暗い水面が白い小さな泡立ちと油の様な流れと共に黒い岩の上を滑るように流れていた。

「私は幸せであることに慣れてはいないのだ、……とジャンはスイスで言つていた……あの人はどうし

てあんなに苦しむことに慣れているのだろうか……ポーリー又は考えた……でもジャンがどろどろしたきついワインを飲むときには彼の苦しみは疑わしく思えてくるのだ。彼が舌打ちをするのではないにせよ、それはまったく正当なことである、あの感情の細やかな人が！……以前あの人はいつも考え事をしてるように見えた。それともあの人は微妙なことに苦しめられているように思えるんだわ。そして今は本当に物思いに耽っている……何を考えているんだろうか。》

悩みも無く、どうにもならないものとして、彼女はジャンの無意識の放心状態を、そして非常に少なく直ぐに満たされてしまう食欲、その沈黙、その仕種や判断における荒つばさ、どぎつい言葉、すべてを支配していた睡眠欲などを考えてみたのだった。

恋人同志の悩みとなるちよつとした利己的な幻滅、その口論の際限の無い主題はもう彼女の心を動かすことはなかった。ジャンは生きるだろう、他のことはどうでも良かったのだ。彼女は数年来初めて何も考えないで、河の辺の草むらに腰を下ろすことが出来たのだ。それは大きな幸せだった。

III

戦争の後の夏、ルイーズはベル・アンスに帰った。その別荘の庭は海岸の石垣に接していた。そこは生け垣に囲まれた砂と雑草の四角い土地であり、二本の木の間にはレース糸の様な漁網が張りめぐらされていた。そしてスードル河の河口、マレンヌの鐘楼、そしてオレロン島によつて閉じられた静かな海などが認められたのである。

松の樹の森を通つてガロン・ドールの方へ一時間ほど歩いていくと突然激しいほどの明るさの中に大洋と緩やかに曲がつた大きな波が現れるのである。ベル・アンスでは砂丘にぶつかる波の音は聞こえないが、時折モーミュッソンの水門の遠くの轟きが聞こえるのだ。そしてグレーの真珠色に繋がった海、その目立たない緑と薄い蒼白な琥珀の色の反映だけが見えるのである。

海の波が砂と泥の広大なスペース、牡蠣の養殖場とその黒い枝の柵などを露出させながら退いていく。そしてまた波もたてずに、急速に海岸の石垣にぶつかりに帰ってくる。その時、トランブラードとマレンヌの周辺の沼地には秘かに細い運河を通じて海の水が忍び寄り、牧草地に切り取られた小さな窪地を水に浸すのだ。スードル河の両縁にあったひっくり返っていた何隻かのボートが起こされて、帆を張ら

れて大洋へと漕ぎだされていく。

生け垣に隠れた庭の中で、見たところは非常に静かであるが、じっと見つめる視線で、ルイーズは一日中その最も美しい光を、そしてその豊かさにおいても穏やかで海岸に退いては押し寄せるだけのその海を、さらにグレーの色調の物言わぬ豊かさ、絶妙で、オパールのようにやっと認められるようなそのニュアンスを眺めていたのだった。

別荘はいつも人で一杯だった。夫の友人や従兄弟たち、フレデリックの長男のテオドル、ポール・デッカの娘たち、ルイーズが喧嘩になるのを考えないで呼び集めた仲が良くない親族の子供たち、そして彼女がリモージュで回復期の時に看病したことがあったルネ・ファイエたちが集まっていたのである。

彼女はその驚くべき種族との接触無しに離れて生活していたが、その連中は早起きだったし、いつも興味のある何か、即ち漁の準備や修繕しなければならぬ船、泥の中に小さな水中の虫類を探すことなどをしなければならぬのであり、それからお腹を空かせたり、眠ったりするのだ。けれどもある日彼女が居なくなると、その家は空っぽになっていくように思われたし、男たちが漁から戻った時には、彼らは自分たちの獲物を誰に見せたらいいのかがもう判らないのだった。

この小さな社会の中心で、誰かが彼女に近づくと、彼女は微笑みながら決して何か言うことはなく、自分の思想や趣味は言い表すだけの価値があるものではないと信じ込んでおり、奇妙なほど控えめだったのである。ただ彼女は船が満潮の河口を横断するときには、人には気付かれないように元氣良く布製の安楽椅子で起き上がるのである。彼女は双眼鏡で、全力で密着しているかのように、沖合の神秘的な一点に集中したままで居るのだった。彼女はあらゆる船、漁師の船団、オレロンとベル・アンスの間を行

き来する汽船、ルネ・ファイエのボートの赤い帆、デルノード男爵の舟などを知っていたのだ。

彼女の別荘のすべての部屋が塞がってしまうと、彼女はお客をトランブラードの女友だちのブランシュ・ド・ラクルジューの家に宿泊させたのだったが、その友だちは兄のガエタンの死以来、ラ・ロシエルに住んでいたのだった。しかし彼女は過去への愛情の故に、トランブラードに祖父のオスカル・デュトリューのものであった家を所有していたのである。

ヴァランタンは少年時代にはオスカル・デュトリューに仕えていた。彼は緑色の食堂、長いルイ十六世式のサイドボード、上から下まで壁全体を緑で覆われた板などはその初めから変化していないことを知っていた。ルネ・ファイエはブランシュの祖先に興味を持っていたし、しばしばその年取った使用人に尋ねたが、その男は眼を半ば閉じて禿げ頭を露にして答えたのだった。

「夕食の後ではデュトリューご夫妻が客間を通って、その一人一人が自分の部屋に引き取られたのでした……。二つの部屋はお嬢様の部屋の前にありました。その当時はカーペットはありませんでした。ベッドとテーブルは今も当時と同じものです。」

「美しい家具だ。」ルネが言った。「極めて純粋なルイ十六世の様式だ。そしてその板壁は？」

「それと同じです、旦那様。ここでは何も変わっては居ないのですよ、お嬢様のお父さまに建設された回廊を別にししたら。」

「私の部屋には化粧室の奥に本棚がありましたよ。」

「それはデュトリュー様の後でここに住まれました娘婿の本棚でした。あの方は読書がお好きでしたからね。」

《なんて美しい家だ。》ルネが細長い一階の部屋部屋を歩き回りながら言った。そこは石灰で白く塗られたアーチ型の回廊で、彼は板壁や華奢で塗料を塗られた家具を眺めたりしたのだった。

「お嬢さんはじきに到着されるのかね。」

「私たちは今週はお出でになるのを待っているんですよ……とヴァランタンは帽子を脱ぎながら言った……それに私たちは体の調子が良くないように見えるギランソル夫人とジャン・バルヌリー夫人も待っているんですよ。」

「ジャン・バルヌリー夫人だって。」

「そうです、それにギランソル夫人ですよ。ルイズ夫人はこれらのご夫人方はこちらでお食事をすることを望んでおられると言っておられました。それはお嬢様も勿論ご存じです。」

お嬢様と呼ばれている人、ブランシュ・ド・ラクルージュは六十歳を越えていたが、非常に華奢で、左右に分けた波うったグレーの髪を持っており、そのグレーの目や優美さは彼女にあつては何も色褪せてはいないと言われていた。夫が居なかつたので人生が彼女に影響を与えることがなかつたのだ。至る所でルイズは慎ましく、親切で、少し夢見がちのお客さんの様な風をしていたのだ。今は彼女は家族もなく、昔の恋の打ち明け話をしたりしたが、その事実は疑われていたのだ。彼女の言うことに耳を傾ければ、その愛はいつも高揚させるようで、美しかった。そして人生を味わうためには思い出に身を任せただけで十分だったのである。《愛すること、それは与えることです。》と永遠の若さを持つ寛大な打ち掛け話の聞き手としての彼女は言ったのだった。

彼女は非常に空想的であつたので、ルネ・ファイエは、彼女が自分の創造した過去に捧げたこの詩的

な家を作ったのではないだろうかと思つたのである。

「この床はデユトリユー氏の時代に在つたというのは確かかね、ヴァランタン。」

「そうですよ、旦那様、ここでは何も変わつては居ないんですから。お嬢様のお父さまが作られたのはその回廊だけですからね。」

..

ジャンがアメリカに出発してから、ルイズはポーリーヌにベル・アンスにやつて来るように提案した。しかし彼女は余りに疲れていたので、未知の習慣に順応したり、礼儀正しさを無理に自分に強いたり、笑つたり、微笑んだりすることが出来なかつたのだ。彼女はどこでもいいあるホテルに出掛けるが、孤独で自由だつたのだ。

約束したにも拘わらず、彼女は医者 of 診断を受けたくないのだ。彼女の病は確かに医者や治療にとつては余りに微妙過ぎるのだ。彼は、彼女が従姉妹の所に泊まると思うだけでパニックになつたり、絶対に一人になりたいという、そして眠いときに床に就き、何の枷もなしに行つたり来たりしたいという願望を説明できるだろう。

けれどもジャンの出発以来、その家はほとんど空っぽだつた。しかしその部屋の中には過労の思い出が残っている。様々な命令をすること、マックスのことを気づかうことはもう彼女にとつては荷が重いのだ。このきつい疲労、近親者とその支配への恐怖心は肉体的な原因や確かな幻滅に基づくのではない。

彼女はただ誰のことももう考えたくないし、ジャンのことさえも忘れたたいのであるが、それはまるで彼女が戦争の時に彼のことを余りに考え過ぎたためかのようなのだ。彼女は彼が非常に変わって戦争から帰ってきて、また直ぐに出發したのではなかったにしても、彼からの手紙を待ちたくないし、それらが極めて優しいものであり、細々としたことが書かれているのかどうかを自問することもしたくないのだ。

家ではすべてのことがあの奇妙な疲労を呼び起こしたのである。特に非常に大きくなって、遅しくなっているマックスがそうである。彼が部屋に入ってくると、呼吸できるすべての空気を吸い込んでしまうように思えるのだ。赤ん坊、それは母親の命である。後になると有益な解脱が行われる。少なくともポーリーヌはそう信じていた。しかし彼はいつも自分の子供であり、彼女は自分自身の肉体の中にその存在を、そしてその肉体を貫く流れ、その弱点、その頑固さを余りにも厳しく感じているのだ。人は自分を消耗させることなしに他人の意志に逆らうことは出来ないのだ。他人の意志、そこにこそおそらく彼女にあつては致命的な点があるのであり、料理女との会話でさえも彼女に苦痛を感じさせる秘かな亀裂があるのだ。

「マックス、お前は休暇中には勉強すると約束したわね。」

彼は勉強したいと思っていた。そして計画もあつた。しかし先ず彼はクルーズ河に沿って徒歩旅行をするを考えていた。そしてテントと鍋が購入された。すべての準備が完了した。静かな調子の低い声で彼は自分の計画を話した。

「どんな服を持っていくの。」

「どんな服って？」彼は真面目な顔をして言った。

「雨が降ったら、お前はさぶ濡れになって眠る積もりではないでしょうね。」

「勿論だよ、時々雨も降るんだし……。僕たちの料理人は共産主義者なんだよ。彼はとっても器用なんだ。」

ポリーヌは、表面上は厳密な外見を持っているが、夢のなかで考えたようなその気ままな冒険に反対した。しかし彼女の反対はそれでも漠然としたものだった。彼女は特に心配することを恐れていた。一人の人間のために心を震わせることなんて！そして愛情のために苦しむなんてとんでもないことなのだ。

愛情、彼女はそれを先ず始めは苦しみとして、そして息詰まらせる心の欺瞞として知ったのだった。後になってその愛は、戦争の苦悶に至るまで人生のあらゆる衝撃を増大させたのだ。そして遂に心は汲み尽くされるのだ。彼女は長い間、もう一人子供が欲しいと思っていた。今はもうそれを望んではいないのである。

彼女は怠け心から、そして肉体的な休息の必要から何も考えなかった。彼女は今はただ非常に人がたくさんいると夢のように思っていた人里離れた一つのホテルを夢見ていたのだった。彼女の周りには多数の見知らぬ人が音もなく砂浜や苔の上を歩いているのだ。

ルイズはしきりに勧めて、彼女にブランシュ・ド・ラクルジーユの家を提供した。彼女はそこで食事を済ませて、望む時にはベル・アンスに行くのである。突然、トランブラードのその家はポリーヌには厳密に自分が望んでいたものとして出現したのだった。

ポリーヌはサントンジュの習慣に従って、庭と住居を閉じ込めていた壁に沿って歩いて行く。ヴァランタンが玄関の扉を開く。そして彼女は底の下を通っていく。明かりがその回廊を照らしているが、そのガラス窓は庭の中で輝いている。彼女は鉄の掛け金を持ち上げて自分の部屋に入った。そしてシャッターを押して、夜の明かりの元で、街道の端の船の帆を見たのだった。

翌日彼女は行き当たりばつたり、石灰が塗られた家々の間の小道を辿っていったが、そこは日光がきらきらと輝いており、鎧戸は半ば閉じられており、彼女にはバルバザックのいくつかの界限を思い出させた。突然現れたのは一つの木が生えていない悲しそうな平原であるが、そこは少し黄色くなったアーモンドの緑を帯びており、黒っぽい小屋が点在し、非常に広大なので二つ三つの村々が、牡蠣の殻の塊のように区別できたのである。

彼女は低い斜面に縁取られた水たまりの中に空が映し出されたのを見ていた。その沼は御柳の乱された羽飾りがその上に突き出ていたざらざらの植物に覆われているのである。彼女は再び街道に出くわすと、ルネに出会った。

「バルヌリーの奥さん、あなたがトランブラードに来られたのは初めてですね。僕が案内しましょう。この道はスードル河に通じているのです……そして運河にも。」

「あそこの鐘楼は何のですの？」

「マレンヌの尖塔ですよ……。運河は潮が引いているので水がありません。水は牡蠣養殖場に残ってい

ます。大潮の時にはそれが蘇るんですよ。運河とその養殖場の端を塗りつぶしているあの灰褐色の泥を見てご覧なさい、まるでそれは光に映って虹のようになり、植物の色褪せた調子や御柳の茂みやさんとり草と良くマッチしているかのようなんですよ……」

ポーリーヌは運河のほうへ目を向けて、その若い男の何も被っていない頭をちらっと見たが、そこでは少し太ったブロンドの髪をした顔とやつと気付かれる若々しい特徴があり、非常に白い歯だけが力強く見事な線を描いているように思えた。

「この道を辿って行きますと、マレンヌの目の前のラ・グレーヴでスードル河に着くのです。いつかラ・グレーヴに行きましょう。」

「ベル・アンスはどの方角ですよ。」

「ベル・アンスは松の森を三キロメートル行っただけですよ。しかしこれは別の道ですが。」

「私は戻りますわ。ルイズの所でお昼を御馳走になることになっているのです。そこへ私を車で連れて行って下さるのがデルノード男爵さんなのです。デルノード男爵ってどんな方なんですか。」

「森の中に住んでいる風変わりな人ですよ……。お会いになれば判るでしょう。彼が専ら野菜を運ぶのに使っている奇妙な車ですよ……。自転車にはお気を付けなさい……。」彼は彼女の腕に触りながら言った。この辺りの人は皆、沼の中の牡蠣の養殖場や海辺の牡蠣の生け簀に行ったり、あるいは単にちよつとの散歩にも自転車で行くんですよ……。何というエネルギーであるかをご覧なさい。あの古い錆びた自転車で彼らは何と元気に足を踏み下ろしていることでしょうか！……ギャランソル夫人、あれは一つの興奮です、水夫の気質の結果だと主張していますよ。この地方の娘たちは凄いいんだそうですよ……」

ポーリーヌはここに着くと、誰にも会わずに、八日間、ブランシュ家の回廊や庭に横になって居ることを決心したのであった。しかし彼女は毎日、ベル・アンスのルイズの所に行った。彼女はその別荘は若者で一杯であるのを見出したのである。突然海がすべての人を連れていってしまった。彼女はルイズの隣に坐ったままでいたが、ルイズは自分の若々しい目で、頬をバラ色にして、グレーのカールした髪を麦わら帽子の下に包んで微笑んでいた。時には彼女は自分の日焼けしたむっちりした手に持っていた双眼鏡を眼に当てたりしていたのだった。

「まあ、ジャックじゃないの、……あなたはどこからやって来たのよ、ジャック。あなたはリモージュにいるんだと思ってたわ。」

彼女はポーリーヌの方へ向いて言った。

「こちらはジャック、シュルピエール大佐のお孫さんよ。あなたは覚えていらつしやらないかしら。」

「私がジャックさんを覚えているかどうかですって。」ポーリーヌは、その青い目で笑っている今は亡きシュルピエール家のすべての者を思い出させた赤毛の大きな顔に氣を逸らされて言った。

「あなたは水が欲しいの？ ああ、そうなの、キャンプしてるのね。」

若者たちは戦後の最初の夏の間は、日の下でも厚着しすぎている未亡人たちや、港を集団で歩き回っていた少なからず寄り集まった男たちの間で得意になっていたのだった。ボルドーやコニャック、パリの娘や青年たちは冬の間は様々な大学に散らばっていたが、ヴァカンスになると集まって来たのである。それは一つの主義や思想や存在のためではなく、ただ喜びのために生きようという激しい欲望を持つてのことである。家を離れて未知の道の曲がり角に、自分がその日の主人になれる場所を見出すことは何

という大きな喜びであるだろうか。夜には砂丘の窪みに居る彼らの不意を襲うのだ。砂の上でのあだつばい食事の後では浜辺で焚き火が行われる。夜明けごろには鴉の鳴き声が彼らを目覚めさせる。そして海の男の舟で出発する。青年たちは帆を上げ、娘たちは網を手繰りよせる。彼らはモーム・ユッソンの逆流が揺り動かすその舟の後を追いつながら、沖合で水に浸るのだ。

時々その仲間はバラバラになる。若い娘たちは午後には車で連れ去られたり、厳かなデニスコートの鉄柵の中で虜となるのだ。その時青年たちは港をうろつきに行き、船員たちとお喋りし、船に乗り込むことを夢見るのである。水浴の時間には浜辺で、そして彼らが腕を組み合わせる大きな並木道でその集団は再編成されるのである。

ポーリーヌは他人から解放されたかのように、初めて世界を見て、青春を発見したのである。自分自身の青春は、彼女はそれを見ないで横断したのだったが、心は締めつけられ、人生の内に曖昧で重い様な何か判らないもの、一人の男と唯一の愛の重みを嗅ぎつけていたのだった。彼女はまるで子供の眼、そしてある種の妻や母の無邪気さを持つて夜の闇から出てきた様にそこから解放されているのだ。そして艶のある顔に魅了され、あの動揺、あの走るためだけのコース、あの笑い、彼女がそこに厳肅な意味を見出しているあの空虚さなど、すべてのものを受け入れているのだ。

自然とか青春を眺める流儀、更に時間が逃げるように過ぎていくというまったく新しい感情、様々なニュアンスがよりいっそう目立ったものになる黄昏時の日の光に突然照らされた様に思える物事の別のヴィジョン、彼女の過ぎ去った人生とは何の関係もない一つの精神などが突然、ポーリーヌの内面で彼女の過去の思想と入れ代わったのであったが、その時彼女の顔は少し年をとってはいるが、同じ特徴を

失わずに居たのだった。

「子供たちがそこに居るわ。」ルイズはセーターを着るために立ち上がって言った。

薄明かりの中で白い形や声などでそれと判ったのだ。

「私たちは浜辺のずっと遠くまで行ったのよ。」と一人の若い娘が言った。

通りでは元気な子供がジャズのありふれた曲を弾くアコードオンの伴奏を受けながら、口笛を吹いたり、歌ったりしている。

ヴェランダに居た二人の青年が直ちに立ち上がって、若い娘の方へ両手を差し出し、タイルの張られた床の上を滑るように踊りはじめた。その慎重な気迫に従順に従って、その若い娘たちは、規則正しく柔軟なステップで前進したり、後退したりした。そしてそのほっそりした胸を自分のダンスのパートナーの腕に少し倒して、ゆつくりと回転するのである。ボーリーヌは天井に下がったランプに火を灯した。輝くような髪と軽やかな服を照らしている青い光の下で何組かのダンスのペヤーが通りすぎて交差した。それから彼らは陰の中に姿を消すが、穏やかな顔をして、同じ調子に体を合わせながら、再び現れるのだ。音楽が通りの上で遠ざかっていく。そして若者たちは自分たちの動きを緩めて、微笑みとともに解放されるのだった。

..

「道路の埃を受けた後で、ここは何と気持ちがいいことでしょう。あなたはお元氣そうにしていらっ

しやるのね。」ポーリーヌは本を膝の上に乗せて、庭をぼんやりと眺めながら、長椅子の上に横になっていたソランジュ・ガランソルの方に向いて言った。

その若い女はポーリーヌの方に鋭くて貪るような小さな眼をじつと注ぎながら、急に振り向いたのだった。彼女は離婚していたが、ブランシュ・ド・ラクルジューが腸チフスに罹った後でトランブラードの家を提供してくれたのだ。ソランジュは戦争中の看護婦をしていた時の思い出や医師たちの軽い摩擦や負傷した兵士たちの送ってきた秋波などのことを話しながら自分の無為の生活を慰めていたのだ。

「ブランシュは何処にいるの。」ポーリーヌが言った。

「あの人はヴァランタンと一緒に庭に居ます。」

ヴァランタンの娘のアガータがこの快復期の患者のためにココアのカップを持ってきたのだ。

「アガータ、喉が乾いて死にそうよ、コップ一杯の水をいただけませんかしら。」ポーリーヌが麦わら帽子を膝の上に乗せて腰掛けながら言ったのだったが、いつもは蒼白いその頬は暑さのために赤くなっていた。

「あなたはベル・アンスから戻ってこられたの？ 今日は何をなさったの？」

「別に何もしませんが、私たちは海を見てたのよ。」

「双眼鏡ですの？」

「そうなの、でもどうして？ 私たちはルネの舟を見ていたのよ。あの人はレエ島に行ったのよ……あら、ありがとう、アガータ。」ポーリーヌはコップを受け取って、一口づつ飲みながら言った。「私は片目の青年が一人でボートを操れるというのが良く判らないのよ……あの人は本当にあの舟に情熱を持っ

ているのね。」

「ただ一つの情熱だけではないんですよ。」

「あの人は毎日海で過ごしているんですからね。」

「二日の一部ですよ。」

「あの人は舟に乗っていない時にはどこに行っているんだろうかと思うんですよ。ここではその姿が見られることは決していないんですからね。」

ソランジュは居心地が良くないかのように長椅子の上で向きを変えた。そしてその天使のようなほっそりした顔は、生き物たちが高揚した魂に押しつける苦悩の下で引きつったのだった。

「あなたはご存じないのね。」

「ええ、知りませんわ。あの人は恋をしているのかしら、若い娘を愛しているんですか。」

ソランジュは思いやりの心と、悪を告発するという必要性、その対立する二つの感情において当惑して沈黙を守っていたのだった。

「若い娘じゃあなく、年取った女性なのよ。」

「それは本当なの？」

ソランジュは燃えるような視線を逸らしたのだった。

「驚かせるわね、それは本当なの？　あの人はとても落ち着いた風をしているわよ。」

ソランジュは漠然とした言葉で自分のほめかきを打ち消そうと思っていた。そしてだしぬけに言った。

「私は若い男に対する成熟した女性の恋というものが良く判らないわ。」

ポーリーヌは以前にそれと似たような言葉をルイズに向けて発したが、彼女は答えてくれなかったことを思い出したのだった。今日は黙っていたのは彼女だった。その寛大さは年齢の突然の退化からやって来たのか、あるいは極度の純真さからなのだろうか。彼女はその点で驚かされたし、中央の並木道を縁取っている石の柱の間の庭に立っていたブランシュを見るために頭を向けたのだった。

ブランシュはぼんやりとした風をして家の方に歩いていき、砂の敷かれたテラスの真ん中に立ち止まった。突然彼女の顔が活き活きとなった。彼女は兎を持ってきて笑っていたデルノード男爵に手を差し出していたが、彼の長い歯が髭のなかから突き出ていたのだった。

∴

ポーリーヌは自分の下着を箆笥の引出しの中で整理して、今アイロンをかけたばかりの服を点検した。彼女はピケ（あわせ縫い）のカラーを直すために腰掛けた。そして窓から、庭の中を散歩しているルネに気が付いたのだった。そして彼女のその仕種や、白い麻のズボン、青いセーラー服から、彼がゆつくりと服を着て、午前中はどうしてよいか判らないでいることが察せられたのだった。

ポーリーヌは明るい服を着て、窓の支柱に屈み込んで、ルネを見ていたが、彼は自分のブロンドの髪を頭に押しつけて、ベンチの上に坐っていた。彼女は腕を伸ばしてゆつくりとシャッターを下ろしたのだった。ルネは立ち上がって陽気そうに言った。

「こんにちわ、奥さん、遅いですね、散歩でもされませんか。」

「どうなさったの、今朝は海水浴も舟遊びもされないのですか。」

「そうです、何もしないんですよ。ラ・グレーヴまで行ってみませんか。」

「行ってみましょう。」

ルネは指の周りに双眼写真機の革帯を巻き付けて、アメリカ海軍の縁の上がった白の小さな帽子を被った。

ポーリーヌは元氣良く庇の下を通過した時、ルネは玄関の扉を閉めて、通りで彼女と一緒にになった。

「僕はバルバザックではあなたにお目に掛かったことはありませんでしたね、バルヌリーの奥さん……。」

「私がバルバザックに住んでいたころは、あなたは赤ちゃんでしたからね。」

「今では私たちの間には何の違いもありますね……。まったく違いが無いんですよ。」

「いいえ、私はお婆さんですわ。」

「あなたは二十歳です、そして私の方がそれ以上ですよ。」

その口調はぶつきらぼうで、親しみがあつたが、少し重い感じがあつたが、少しも思わせぶりの気取りが無かった。そしてポーリーヌが抗弁する前に彼は四角になった水溜まりを指さしたのだった。

「牡蠣は海に生まれますね。それは数年は岸辺の生け簀にいるんですね。それから養魚場に滞在することになります、そこで緑の色を帯びるようになります、いっそうの風味を持つようになるんですね。それはその長所を、海の水と沼から湧き出る水の混ざり合うことと、さらに未知の海藻のお蔭を受けるので

すね。それはとても単純で神秘的で、古代から少しも変わらない養殖法なんです。でもそれはこの地方を人々に求めます。どんな外国人も、例え学者であつてもそれには失敗したんですね。彼らには一つの本能、そして養殖場がそれで空っぽになつてしまふ蟹の穴を区別することが出来る目が、つまり遺伝的な天与の才能が欠けているんですね……。」

ポーリーヌは彼の極めて正確な説明を面白く思つて、彼の言うことに耳を傾けていた。ルネは彼女が自分とあまり違わないで、それらの細々としたことに興味を感じていると思つていた。彼女は自分から非常に遠くにいて、一人の男の声を持ち、彼女がそれについては子供っぽさを感じていたこの自分を閉じている道連れの側で、即興的な態度を取り、新しい人間であらうと努めることが出来たのだった。彼は彼女を見なかったし、彼女は自由であつた。そして彼女は自分自身に、吟味された真実の存在にもう引きずり下ろされることはなかったのであり、何の秘密も残すことのないその人間の視線の下では、そこから何かが捨てられるということとは出来ないのだ。

「ラ・グレーヴまではあと二キロありますね、あなたにはきつくはありませんか。」

いや、彼女は、とりとめのないことを言いながら、気安い微笑みを浮かべて、長い間歩くことは出来るのだ。人は自分が望むところまで行くのだ。そして自分が気に入れば、他の人が何を望んでいるのかを、そして通りすぎてはならない地点や、自分が向いている方向などを言い当てようとしなくて立ち止まるだろう。疲れさせるのは他人のことを考えたり、愛している人の歩調に合わせようとする事であり、いつも余りに多くの意味がある言葉や、理解することが出来るその沈黙などに気を付けることなのだ。

「あなたは非常に事情通であるように思えます。牡蠣を売ることを考えておられるのですか。」

「いいえ、私は陶器を売ることを考えているのです。」

「どんな陶器なんですか。」

「あなたの陶器ですよ。イギリスの陶器はこの世に存在する最も美しいものです。しかしそれは優しい陶器です。私はリモージュのあなたの工場を訪れる前には、フランスの硬質の陶器というものを知りませんでした。フランス人に対しては、デパートや展覧会などでひどいものしか見せられてはいけません。フランス人を啓発しなければならいのですよ。私はあなたの会社の陶器を提供する店を作ることを見込んでいます。」

「それはいい考えだわ……ポリーヌが言った……私の夫がアメリカから帰ってきたらそのことを話してみますわ。」

彼女はジャンが肩を高くするのを見たように思ったのだった。しかし彼女は実業家の役割を演じて、考え込んだふりをしたのだった。

「あなたのお店は何処に置くつもりでおられますの。」

「パリですよ。例えばラ・ペー街などを。少なくとも私はパリに本店を置くつもりなんです。」

「今はなかなか容易には貸し店舗が見つかりませんからね。」

「私なら見つけてみせますよ。」

「どんな店構えを作りますか。」

彼は身振り手振りで説明しながら歩いた、そして時には封筒の上に略図を描くために頭を下げて立ち

止まったりしたのだった。

列車が街道の側に停車した。

「ここはラ・グレーヴですよ。」

河口を横断してきた大きな渡し船がゆっくりと近づいてきた。それは荷車を一台といくつかの自転車、三台の自動車を乗せており、さらにそれに車の持ち主たちが、実物を上手に真似た人形の付けられた贅沢な玩具のように、ハンドルの所に坐っていた。

「向こう岸の正面にマレンヌとすらつと聳えた鐘楼が見えますね。それは水夫たちが言うように航海の目標なんですよ。航海する者たちにとって目印なんですね。」

ポーリーヌは優しいけれども生き生きとした空気を深く吸い込んだが、その顔は遠くのクウブルとオレロン島のぼんやりした線の間に青くなった海の方に向けていた。それから彼女は赤味があった泥のエナメルのような河の土手や水と虹色になった光の下の雑草の平原を眺めていたが、その平原は濁った水と蒼白い植物に接触していた。

ルネはポーリーヌの方に双眼写真機を向けながら後退した。

「駄目よ。」

「動かないでください、あなたはとても素晴らしいんですから。」

「いけませんわ、日向では私は醜くなってしまうのよ。私には判っているのよ。私の年齢では写真は……。」

「あなたは何て艶めかしいんでしょう……！ さあ、あなたはお休みにならないといけません……いい

え、そうしなければなりません。」彼は彼女を眺めながら言った。「あなたは疲れています。私たちは料亭に行つて一息し、牡蠣を食べましょう。」

彼女は女たちにあんなに無関心に見えたこの青年の親切な様子に驚かされたのだった。

彼女が気後れさせられた時に時折取るほんのりとイギリス風のアクセントを持ったその愛撫するような声で言つた。

「あなたはお優しいのね……私は行つてもいいですね、でも牡蠣は？ シーズン・オフではありませんか。」

「ここではもうそのシーズンなんですよ。」

彼らは窓の横のテーブルの前の長椅子に腰掛けた。格子縞のブラウスを着て、栗色の髪をカールさせた女が裸足の足で二つのグラスを拭いて持ってきた。それから彼女はテーブルに一瓶の白のワインと丸みがあつてきらきら光る牡蠣が載せられた皿を置いた。

「これは砂丘に守られて成長した葡萄で作つたワインですね……ルネが言つた……これは荒いものです、レモンの一滴のように牡蠣には合うんですよ。牡蠣は明け方の身に沁みるような時が一番美味しいんですよ……ああ、最初の牡蠣ですね……！」

彼は顎を締めてから、いかにも美味しそうに一息ついた。

「いかがですか、何という新鮮さでしょうか……この塩辛い果実は……。」

彼はワインをポーリーヌのグラスに注いだ。

「私は近頃の若い娘たちはあなたの眉を顰めさせているのではと思つてゐるんですが……。」

「私は彼女たちが怖いのですわ。」

「バルバザックではあなたは別の教育を受けられたんですね。」

「そうですね……私は教育が無いために彼女たちは人を愛することが出来ないのではないかと思うんです。そして愛することが無ければ、あなたもお判りですね……。」

「本当ですね、あなたは人を愛する心を教えられたんですね。」

「愛することは禁じられていたのです。人生は何も教えてくれません、物を破壊するのです。愛することとはある種の心の準備を求めているのですね……、ある自制とか……慎重さ……心の中に非常に早くから教え込まれた信仰のように、前もってなされる夢想のようなものが。」

燃えるような過去の最も深いところから汲み取られたこれらの言葉を、ポーリーヌは少し気取ったのんびりした口調で言ったのだったが、それはまるで彼女が信じてはいないかのように、板壁の内側の仕切りの内で切り取られた窓の方に眼を向けていたのである。彼女は真珠の様な光沢を持った風景を、銀色の牧場の間の動かない帆などを見ていたが、ルネのボートや自分が操って自分を満足させてくれる対象に対する執拗な情熱のことなどを夢見ていたのだった。

「あなたは恋愛をしている女たちのことを話しておられるのですね……ルネは言った……その様な女たちはバルバザックでもいつも稀なことでした。風俗というものはその点では何も変わっておりませんよ。」

「あなたの舟は何処に在るんですか。」

「ベル・アンスの船橋の側です。」

「あなたは自分一人で操縦することが出来るんですの、舵を取ったり、帆を操作したりを。」

「それは非常に簡単なんですよ。」

「モーミュッソンでは潮の流れがありますね、……そして時化ること……砂州の上に巻き上がるその大波とか……舟の楽しさとはどんなことなんですの……危険への好みでしょうか……操縦ですか……むしろ私は夢見心地、ある種の怠惰だと思うんですが……それとも自由というのですか、それですね、自由ではありませんか……あなたが友人を一人連れていかれて、彼を陸地に連れ帰った後では、また一時一人で海の方に帰っていかれるように思えますが。」

彼は何も答えなかった。彼女は余りに内面的でうまく言い表すことが出来ない心の秘密に触れたのだった。彼女はその秘密を見抜こうとしながら、どちらがガラスから出来ているのかは判らずに微笑みながらルネの眼を見ていた。

彼女は唇の端でワインを味わった。そしてその空腹になった若い男を眺めていた。彼女は彼を愛している女性のことを考えながら、おそろくその女性も彼が食べている間はこの様にして彼を眺めているんだろう、その人は彼が望むことすべてをやり、何も求めず、与えるのだ……その人は彼を、人が自分では何も期待せずに一つのものを愛するように愛しているのだ……。それは微妙な……非常に純粋な関係なのだ……。』と思つた。

「あなたは舟で事故に遭うということは決して無かつたのですか……難破とか。」

「ありませんでした……。ある日ルイズを連れて行つたことがありますが、その時はどうしてかは判りませんが、錨が底に流されてしまったのです。私たちは海の真真中で引つ掛かってしまったままです。とても滑稽でしたよ……。」

「あなたはもうバルバザックには住まれないのですか。」

「私はパリに住んでいますからね。私は商業学校に通っているんです。私はルイーズが呼んでくれたので夏にここに来たのです。彼女は戦争中に私に対してとても親切にしてくれたのです。」

「私はあなたがリモージュに到着した時のことを覚えていますよ……。」

彼女は自分の腕のなかで眠っていた蒼白い顔の思い出に突然困惑させられて沈黙した。

彼は食事の支払いをして、パリでの価格とトランブラードのそれを比較しながら、その伝票を眺めていた。彼は帰り道で、トランブラードの小地主たちが、自分のことを仲介のブローカーの犠牲者であると信じるのはどうして間違いであったのかをポリーリヌに説明するためにまたお喋りになったのである。「彼らは自分たちに財産を作ってくれたのはその仲介者なのだということが判っていないんですよ。オスカル・デュトリューは、およそ一八八〇年頃の日付を持つこの地方の繁栄の本当の創造者なんですよ。オスカル・デュトリューは汽車を使ったのです。」

彼は立ち止まって言った。

「潮が満ちてきましたね。」

運河は赤味がかった潮で一杯になった。そして水面を通して沼では、目に見えない水路を通じて、微かにひたひたという音と共に迫ってくる水の流れが感じられたが、それは雑草や木々の生えた縁に至るまであらゆる穴を水に浸していた。そしてそこからその青みがかったり、少しばかり黄色がかった緑はその地面の色褪せた絹のものの悲しい色調を広げていた。

ポリーリヌは自転車ですれすれに通過したので、ルネの腕を掴んで言った。

「あなたはソランジュ・ガランソルのことをどう思っているの？」

「あの人はしばしば珍しいニュースを伝えてくれますが、あの人を信じてはなりませんよ。」

「人は誰も信じてはなりませんわ。それでも私たちが耳にすることはすべて重要なのではないでしょうか。言葉の力は不思議なものですわ。私が趣味として、決心として、一つの知恵として取り上げるすべてのものはほとんどが言葉ですからね……。」

「少し誇張ではありませんか。」

「確かにそうかもしれませんわね。」

∴

廊下の涼しい影の中で横になっていたが、ポーリーヌはなかなか眠れそうにはならなかった。彼女はブランシュ氏の控えめな足音や、閉じられる錠戸の軋む音などに耳を傾けていたのだった。家の中はしんと静まり返っていた。彼女は煙草に火をつけ、新聞を広げてから、今度は布の靴の紐をぼんやりと結び直したのだった。鏡の前で彼女は、緑の枝葉の模様の付いたレースの服を眺め、ラフィア繊維で編まれた帽子を被り、その大きな縁を波うったようにしたり、裁縫の袋を手にとったり、陶器製の背の高い円形の筒形のステッキ入れから籐のステッキを選んだりした。

人気のない街の明るさが彼女の眼を眩ませた。彼女は日陰の場所を捜しながら道の片側をゆつくりと進みながらベル・アンスへの道を歩いていった。彼女は何処へ行こうとしているのか判らず、垣根の側

の燃えるように赤くなつた雑草の上に腰掛けた。一台の馬車が通過したがそれは藁を一杯積んだ荷馬車だつた。そして彼女は自分の進む方向が判つてゐる若くて確かな足音を聞いた。彼女は頭を傾け、両肘を自分の方にくつつけて屈み込んだが、思わず自分の籐のステッキで二つの丸石を叩いたのだった。その打撃が彼女には並外れたものに見えるような鈍い音を立てた。

「どうしました、奥さん、こんな暑さなのにここにおられるんですか。」

「家中が眠つていたんですの。」

「私はテニスに行くんですよ。」ルネがラケットを見せて言った。

「私も少し体を動かさなければならいんですよ。」

「あなたはベル・アンスへ行かれるのですか。」

突然彼女は決心して言った。

「私はガロン・ドールへ行くんです。」

「ああ、……それでしたら森を通つて行かれるといいと思いますが。」

「私は知らないんですよ、それらの小道は。」

「お氣を付けて。いくつかの道はラ・クープルに通じていますよ、そこを通ると決して行けませんからね。」

ポーリーヌは立ち上がつて、ルネと並んで歩いて行つた。

「それじゃあ無茶ですよ。」彼は言った。

彼は彼女の腕を取つて、彼女をヒースの縁に止めて、ラケットで方角を示した。

「あそこですよ、小道は見つかると思いますよ。」

「いいえ、私は帰ることにするか、何処でもいいから腰を下ろしますわ。」

「あなたは気まぐれなんですね。」

彼は腕を曲げて時計を見た。ポリーリヌは思った。《あの人は彼を待つてゐるわ。デイトの時間なんだから。》彼は躊躇っていた、そして突然言つた。

「私はお供しましょう。あなたはその道が見つからないでしょうからね。さあ、行きましょう。」

ポリーリヌは導かれるがままにした。そしてなでしこやハハコグサを摘み取るために立ち止まつた。そしてヒースの茂みや、時折彼女の服にまつわり付き彼女の踝をちくちく刺したりするはりえにしだなどを横切つた。その時は彼女は笑っていたが、以前のバルバザックでの日曜日の散歩の時の気持ちを再び見出したのだった。

「坐りましょうか。」

「お疲れになつたの？」

「いいえ、そんなことは、でもあなたはお急ぎなんですか。」

「いいえ、坐りましょうか。」

彼女はえにしだの茂みの陰に陣取り、一方ルネは日向に横になつた。

「あなたはお仕事を持つてこられたのですか……彼が言つた……私は裁縫をする女性が好きではありません。それは糸を引つ張らずには一時も落ち着くことが出来なかつた母を思い出させるのです。」

「私は仕事をしようとしているのではありませんわ。でも指が動いているときには考えごとは出来ない

などとは思わないでくださいね。」

「ああ、考えること！……どうしてですか……行動しなければならないのは体全体ですよ、そして休息した後では……あなたは考え事をされますか。」

「時にはしますわ。」

「私は是非とも知りたいですね……。」

ポーリーヌは帽子を脱いで、その周りのリボンに花を指した。

「こんなことはあなたには面白くないでしょう。」

「面白いですよ、私は女性の頭の中ではどんな事が起こり得るのかということを良く考えるんですよ。それは判りにくいことですからね。」

「あなたは判ろうとはされていませんわ。」

「それは無駄なことでしょう。誰もその点では何も判っていませんからね。でも私はあなたが言われることを信じますよ。」

「私は他の人と同じですわ。」

「いいえ、あなたは他の人と同じではありません……ここは暑すぎますね。こちらに来ませんか。」

彼は一飛びして直立し、ポーリーヌの手を取って、だしぬけに彼女を立ち上げさせた。

「この砂の窪んだところに葡萄の木が見えるでしょう。私たちはこの葡萄から作られたワインを飲んだんですね。」

松の実が弾けて、えにしだの鞘が日の光で輝いていた。樹脂と暑い樹液の香りが淀んだ空気の中に集

中していた。

「ここはランド地方に似ていますね。」ポリーヌが言った。

「いいえ、ぜんぜん似ていませんよ。ランド地方には松の木の下、砂丘の起伏や、樹下、下草類、小さなアカシア、あのえにしだなどはありません……。春にはこのえにしだが満開になるのを想像してご覧なさい……。あの大きな茎が燃えるようになるのです……。」

「春に行かれたのですか……？」

ポリーヌは立ち止まった。

「何て静かなんでしょう……！」

ポリーヌはルネから離れたが、風がなく、彼らの周りの森の深さに気後れさせられたかのように思った。それから彼女は松葉に覆われた滑りやすい丘陵をよじ登ったのだった。

彼女はルネを、想像の上での逢い引きから、そして好奇心から、更に戯れから引き離すことを望んでいたのだった。一瞬彼女は自分とはまったく異なり、説明できず、今自分が嫌っている人物になっていたのだった。

しかし彼女はその案内人に釘付けだった。彼がその目に見えない小道を知っていた静かな迷路を通過て行きたいと思うところに随いていかなければならないのだ。彼らは前に進んだり、登ったり、松の木の下の似たような斜面を下ったりしたが、彼女は目的や、木々の混乱している中の前進を区別することは出来ないのだ。そこで彼女は窓の様に大洋の明るさを、そして長い砂浜の蒼白い縁を持つ裂け目を捜すのだ。

「これはどうしようもない妄想ですね……ルネが言った……あなたは何て子供なんでしょう。ガロン・ドールはずっと遠くなんですからね。二時間ほど歩かなければなりませんよ。私はあなたをベル・アンスへご案内しましょう。」

「ベル・アンスへですか。」

「直ぐ近くですよ。」

「いいえ、私は帰りたいんです。」

「直に着きますよ。今は満潮の時間ですね。私のボートでお連れしましょう。」

「私は舟で行きたくはありませんわ。」

「それじゃあモーミュッソンに行きましょう。あなたは大洋をご覧になりたいんでしょう。外套を持つてはおられませんね、しかし非常に暑いので早く帰りましょう。」

「トランブラードでは皆が待っていますわ。」

「誰もあなたを待つてはいませんよ、あなたはガロン・ドールに出掛けましたね。幸いにして私があなたの無茶を救ったんですよ。」

彼女の抵抗はその入りくんだ森の中では無駄だった。松の木と灌木の間を彼女のために通路を切り開くために枝を押し分けながら確信を持って進んでいくルネの後に随いていかなければならないのだ。

二人はベル・アンスに着いて、砂浜に下りていった。オレロン島に保護されて海は静かであったが、すでに養魚場の黒っぽい垣を覆っていた潮の流れの目立たない広がりを感じられたのだった。

ガロン・ドールの先端と島の間には砂州の明るい端が姿を現した。そしてその向こうではバラ色の細

い岸壁で泡立っていた波の輝くのも見えて来た。

「あなたのボートはどこですの。」

「こちらにいらつしやい。」

彼女は自分が怖いとは打ち明けられなかった。そして彼が諦めるほどのもつともらしい口実を捜していた。彼を説得し、落胆させる一つの理由を与えて、どんなに強い反対の意志が在るにせよ、それを打ち破らなければならないのだ。

誰かに会えば助かることができるだろう。若しルイズに会うことがあれば、まったく当然の事としてその連れから離されるだろう。

「私にはあなたの舟が見えませんが。」

彼女はその青年の元氣な歩調で歩いていった。何も言わないで、二人はルイズの戸の閉まった別荘の前を通りすぎた。浜辺で、そして防波堤で彼女は目で一人の友人を捜した。彼女の心を占領していたのは沈黙でありその速い歩調だった。話しながら彼女は敗北を見出すことになるう。

「あなたの舟はどこですの……？ あそこですの、船橋の横の、沖の方かしら、とても駄目だわ……。」
「そこにいてください、私を待っていてください。」ルネはグレーのフランネルのズボンをまくり上げながら言った。

彼はボートを砂浜の側に持ってきた。

「私はボートまで行けませんわ……。砂は濡れていますし……。」

彼は彼女を両腕に抱いて、眠れる子供のように運んでいき、彼女を揺れる舟の中に下ろしたが、彼女

はそこで、自分の肩を押さえてくれていたその手で支えられて立っていた。それから直ぐに小さなベンチに腰掛けた。その間に彼はボートを押して、鎖を引っ張ったのだった。

IV

ジャンはリモージュで失業していた若い技師のピエール・ソタールを雇ったのだったが、彼は母親と生活していた。技術部長のシャトネーは彼にガリバルディー街の工場で単なる職工長の役割を与えたのだ。けれどもシャトネーはその若い男の学識を評価しており、軽く領いたり、突然きりつとした態度で彼の観点を承認するように思われたが、それを実際に応用することとはなかった。シャトネーはそれが可能であった時でも、あらゆる変化には反対した。彼は年齢と経験が増すごとに、ひどく臆病になっていたのだ。

彼は新工場の仕事を指導していた。彼の引っ込み思案の天性にまったくそぐわないこの地位は彼の糖尿病をいっそう深刻なものにした。しかし彼はその役割を辞任するには臆病過ぎたのであり、ジャンは絶えず自分の一時の感情やぞつとさせる様なものによって彼を苦しめていた。新しい風洞付きの窯を建設するために最初のものを取り壊されたのだった。そしてほとんど何の吟味もしないでクレスマン式の窯が採用された。ドイツやチェコスロヴァキアで未知の機械が示されると、何としてもそれが入手されなければならないのだった。

ガリバルディー街のガラス張りの小部屋でシャトネーに単調な仕事を命じられて閉じ込められていたピエールは遠くから新工場の発展をそれぞれの詳細において考えながら見守っていたのだったが、その話を話すことは出来なかった。彼がジャンに近づく許可を持っていたにせよ、彼は力率という言葉の意味を知らない素人に、動力のためにコンデンサーを用いるとそれがどれだけ節約できるかと、クレスマン式の窯の不都合な因子や、青の顔料を焼くのに重油を用いる窯を使うことの利点などを説明することは出来なかったであろう。

彼の母は墓地への通りに面した小さな家に住んでいた。彼女は少しばかり目尻が下がっていたが、率先して微笑もうとしていた悲しい目をして、砂利道の両側にあった四角い野菜畑を縁取っていた花々を手入れしていたのだった。以前にまだ若い未亡人だった頃、息子を育てるために、彼女はジューリ氏の工場で陶器にバラの花を描いていたのだった。彼女の花への趣味は以前の職業に由来するものであったのだ。

ピエールは電車を降りてから、体を真つ直ぐにして、生まれた時から麻痺していた踝のせいで少し難しかったが、険しそうな歩調で家に向かって歩いていった。彼の母はその軽い不具を無視しようと思っていた。彼女は彼に言った。「ピエール、お前は姿勢が良くないよ。」そして彼女は彼を他の男と同様に元氣な若者と考えることに固執していた。この熱愛された息子は深く考え、口数も少なく、その目は非常に活き活きとしていたが、瞑想によって乱されたかのように、パチパチと瞬いていた。

春の宵や日曜日には彼は庭を耕さなければならなかったが、他方では母親は彼を優しく眺め、花の植木鉢の周りを回りながら、彼を元気づけていたのだった。彼はいつも彼女の側では彼女がその点ではまっ

たく満足してくれない従順な息子であるように感じていたのだった。

最近は一時だけ彼は世の中が照らされたように思った。彼は国立工業学校を二番で卒業したが、自分の天与の才と学問の能力を確信していた。現在は一人前の大人の男として、また子供っぽくて退屈な生活に引き戻されているのだ。彼は自分の母のところに睡眠と食事のために帰って来て、テーブルの右側に坐り、彼女が肉を切ってくれる時には皿を差し出し、急いでいる時でも彼女の前に起きることはなかった。そして彼は工場に戻って行ったが、彼は物を良く知っている者なのに、無用で無言の者のように小部屋に閉じ込められているのである。しかし輝いているが、視点を持たないその目で、彼は絶えずクレスマン式の窯、あるいはコンデンサーについて考察することを止めなかった。彼はまたシモーヌ・ジリーのことも考えていた。彼女はひどく痩せていたし、眼鏡をかけていた。しかし彼女は彼が決して話しかけることは無かったがそれでも彼が愛していた人間であった。この隠れた感情は彼の抽象的なものの探究を刺激したのだった。彼が自分の好みに従って組み立てた新工場のことを夢見た時、彼はシモーヌを驚かせようと思ったのだった。

ジリー氏はリモージュで最も古い工場の一つを持っていたが、彼はその経営をいい加減にしていた。彼は陶器委員会の会頭になることで、自分の事業の振るわないことを慰めていた。彼は他の者を刺激し、会議を開き、組合の利害のために旅行したのだった。彼のお蔭でリモージュで何度か美しい音楽会が開かれた。そして誰もがスタンドに囲まれた戸外のプールで泳ぐことが出来たのだ。このプールの水は濁っていたが誰もどうすることも出来なかった。そしてある日それが透明になっていくのに気付いたのである。

「私たちがそのお蔭を受けているのは、ピエール・ソータールですよ。」とジューリ氏は澄みきった水を通して緑のタイルが敷き詰められたプールの底を見ていたジャンに話しかけて言った。「彼は複雑な濾過装置でプールの水を浄化したんですね。あなたの工場には驚くべき青年が居るんですね。」

「私も知っていますよ。シャトネーも彼には満足しています。」

ジャンはピエールを自分の事務室に呼んで言った。

「シャトネーは体を壊している。それに彼は新工場の仕事に対しては余りに無気力だ。私たちは早くやらなければならないんだ。君はこれらの仕事を監督してくれたまえ。シャトネーはここではもう忙しすぎるんだ。君は全面的に自由にやっつけていい。私はそれはシャトネーに話しておいたよ。そして私と彼は意見が一致したんだ。」

「クレスマンについては私の立場はどうなりますか。」

「彼は発明者なので君は彼の指示に従ってくれ。彼は君が望む時にはいつでも来てくれるだろう。」

「私の言うことを信じて下さい。私はクレスマンの炉の考えはいいけれど、調整のやり方が十分ではないように思えます。私が恐れているのは火床が……。」

「それは細部のことだよ……。クレスマンの炉は他で実験済みだからね。その建設を急がなくてはならないよ。それは工賃を少なくしてくれるだろう。我々は職工たちにあまりに高額の給料を支払っている。そしてそれで我々は危なくなってしまうんだ。我々は外国に追い越されてしまうんだ。だから早くやらなければならないんだ。」

「私はあなたに先ずクレスマン式炉の報告書をお渡ししなければなりません。」

「君の望むようにやってくれ、だけど急がなければならない。」

ピエールは電車から降りて自分の家に戻った時、すっかり没頭していたので、ますますひどくびっこをひいていた。彼は何も見ないで鉄柵を押して、ポケットから鍵を取り出し、扇形のガラスの底の下の入口の扉を開けた。

ソータール夫人は裁縫の仕事を置いて眼鏡を外した。

「お前、遅いじゃないの。」

「僕はバルヌリーさんに引き留められていたんだよ。そして長時間話したんだよ。」

彼女はまるで人生は苦痛しかもたらすはずはないかのように怯えた風をして彼を見た。

「お前、バルヌリーさんに会ったのかい！」

「何も大したことはないよ。あの人は僕に昇進の希望を持たせてくれたんだよ。」

「お前の給料が増えるのかい。」

「多分ね、でも早くご飯にしようよ！」

彼はお腹が空いていた。そして喉が乾いていた。そして嬉しそうに息をした。まるで手足が力を得たかのように背伸びをしたかったのだ。

ソータール夫人は低い声で祈りを唱えながら息子を眺めていたのだった。

「お前、少なくとも皆さん方にお礼を言っただけでしょうね。」

「言いましたよ、お母さん。」

二人分の食事が丸テーブルの上に置かれた、食卓の中央には植物が置かれており、ソータール夫人の

場所の前には陶器製の四角い箱があった。

「ところでバルヌリーさんはお前に親切にしてくれたのかい。……でもピエール、気を付けなさい、お前、食べるのが早すぎだよ。」

彼は自分が間もなくシャトネーの地位を受け継ぐことになるだろうとはあえて言わなかった。その事は彼には現実的であるようにには思えなかったのだ。それにその事の重要性を判ってもらうことは出来ないうだろう。彼はまだまだ純粋なその考えを自分だけのために心に秘めておきたかったし、命を持つようになったばかりの非常に新しいその関心事を静かに賞味したかったのであるが、他方では作業場や囲いのある大きな正面玄関、そして自分が支配人としてそこに入ることになった仮事務所として使われる新しい小さな建物を思い浮かべていたのである。

「君は全面的に自由にやつていいんだ。」と彼にジャンが言ってくれた、しかしピエールは最も高い地位においても自由は制限されているということが判っていたのだ。何人かの人間の性格という微妙な障害物に衝突するだろう。理論的な確かさと極めて従順な素材の間には、厳しい計算の結果を修正し、完全な創造に対立するやわらかくて気短な肉体が忍び寄ってくるのだ。ピエール・ソータールは自分の観点からジャンやシャトネーやクレスマンの欠点を判断していたがそれを甘受していたのである。彼らの代わりに他の者たちが自分の人間的な性質のために似たような厄介事を当然引き起こすことになるだろう。そしてピエールは自分では理性を妨げる肉体の様々な力を感じることが出来るだろう。しかし急を要する仕事に引き出されるにしても彼は直ぐにクレスマンの窯の欠点を示すという欲望には反対しなかった。というのはジャンは直ぐに「それは細部のことだ。」と言ったし、クレスマンは彼のことを嫌ってい

たからである。

一カ月後には彼は燃焼の温度があまりに高すぎることを証明することが出来た。しかし彼は自分の批判と救済策を同時に提出するために、まだ時間を待っていた。

《結局……あの若者もシャトネーと同じのろまだ。》ジャンはある朝、アメリカから郵便を受け取った時、自分の机の上のピエールの報告書を見つけて思った。

ジャンはバブウゼと長い間話し合い、新しい高陵土の混合物を彼に提案してきたモラン氏を迎えた。それから彼は一時間ほど模型制作の工房で過ごした。自分の事務所に戻ってから、彼はピエールの報告書のことを思い出し、眼鏡をかけて急いで最初のページを読んだ。彼は時計を見て、食事前に直ぐにピエールに会いに出掛けることを決めた。

彼が新工場の仮事務所に入っていた時、タイピストは仕事を止めて立ち上がった。同時にピエールは職工長と隣室から出てきた。

「君の報告書を読ませてもらったよ……ジャンが言った……クレスマンの炉は欠点があるのなら、止めることにしよう。私は非常に興味深い自動燃焼装置のことを聞いた。」

「私は炉を完全なものに出来ると思います。火床の表面の面積を増やして、石炭を選ぶだけで十分ですよ……。」

「そうだね、私は君の報告書を読んだのだから。しかし実験に時間を取られることの無いようにしてくれ。そしてクレスマンの炉を撤去してくれたまえ。」

「あなたはあの炉のために多額の金額を使われていますね。それを改良したほうがいいと思うんですよ。」

若し新しい燃焼の装置を据えつけるならば……。」

「直ぐにやらなければならない。燃焼装置の建築家を君の所に寄こすよ。」

ガリバルディー街の少し暗い大部屋の事務所にいるあいだは、ジャンは日光の暑さを疑うことは無かった。彼は額を拭ってから、日が照っているにも拘わらず、微風の一吹きで清々しくなるために帽子も被らずに作業場を横断したのだった。それから自動車に乗ってプールに行った。

日陰の横のスタンドに立って、シモーヌ・ジューリは眼鏡の下の優しい視線を向けて、若い娘たちのあるグループに合図で答えていたのだった。太陽は澄みきった水の上で輝いていた。そこにはモラン氏のわずかな休息で柔らかく支えられた蒼白い体が見えたのだったが、他方では涙に暮れた彼の顔は洪面を作り、悩みに満ちて水面に姿を現した。

..

ジューリーの死後二年経ってから、九月の終わりに、ポール・デツカはジョンシュロールで舞踏会を開催したのだった。彼は自分の妻の死後、非常にわがままになっていた。彼の長女もそれに反対することは出来なかつたのである。ジューリーは病気の最後の日々に次のように言っていたのだ。《舞踏会をしなければならぬわね。子供たちは誰にも会うことがありません。長女たちはとても陽気な青春を持っていたわ。》デツカのあらゆる行動と子供たちに対する注意はジューリーの考えに結びついていたのだ。彼は彼女の思い出だけに生きていたのだった。

ポーリーヌは「こんな季節には着るものがないわ。」と思いながら、長椅子に広げた服を決めかねて眺めていたのだった。彼女は首筋に、生え伸ばすがままにしていた自分の髪を巻き付けて、恐る恐る自分がその髪を切らせることを決心した日と、自分自身の意外なイメージに驚いたことなどを思い出したのだったが、その時は朝方の出発のために準備したように鮮明で解放された女となっていたのだ。それから彼女はうわのそらで銀のラメの黒いサック・ドレスに体を通してみたのだった。

ジャンは薄い羅紗地の礼服の上に上着はボタンを留めて、車のなかで彼女を待っていた。彼はほとんど消えた煙草を投げ捨てるためにガラス窓を開けてから、また直ぐにそれを閉めた。

「少し開けたままにしておいてくれない。」ポーリーヌは繻子の靴を履いて小刻みの急ぎ足で近づいて言った。

マックスが車を運転したがったので、この機会のために運転手の制服を身に付けていた使用人が座席を入れ代わった。

「煙草のために窓を少し開けていたほうがいいと思うわ。」とポーリーヌが言った。

「もう吸わないよ。」

車はヴィユー・ポールを横断し、ボン・ヌフを通って田舎に着いた。

「君はバルバザックのクードレー嬢を知っていたんだっただけかしら。」とジャンが言った。

「いいえ。」

「私は自分たちが夜会へ行くので彼女のことを思い出すんだよ。彼女は判事と結婚した。そしてある日彼女は舞踏会に行くためにすべての宝石を身に付けたんだよ。彼女は自分のすべての宝石と愛人と共に

舞踏会の真つ最中にどこかへ行ってしまったんだよ。」

「バルバザックでは私は礼儀正しい人々しか知らなかったわよ。」

「彼女はとても礼儀正しい娘さんだったよ。彼女が使用人の女性を伴って教会に行った時には、その顔はヴェイルの下で厚化粧でやつと見えるくらいだったのだ。白粉で湿疹を隠していたんだ。彼女はその失踪の一年後に宝石もなくバルバザックに帰ってきたんだ。彼女は両親の所に避難場所を見出したのだったが、その両親は彼女を十五年間自分の家に閉じ込めてしまったんだ。彼女は外出しなかったし、自分の子供にも会わなかった。そして誰も彼女に話しかけることはなかった。私は彼女の両親が戦争の最中に死んでしまい、彼女は解放されたことを知ったんだよ。これはすべての恋愛の物語と同じように月並みのものだけれど、クードレー嬢のことを思い出すと非常に奇妙なものとなる。愛について作られる考えは、女性が問題になる時にはいつも陳腐で不完全なものとなるのだ。人は女たちが一人の男、情熱、あるいはただ一つの官能の虜になると信じている。女たちは、若し別のもの、何といったらよいのか判らないが……一つの郷愁……口にされることのないもので、彼女たちが恥ずかしいとは思わないし、失望したとも思わないようなもので一杯になった過ちと言えるものがなければ、それほどには気が狂ったようにはならないのだよ……。」

ジョンシュロールではデコルテの服を着た若い娘たちが、二重梯子の上で腕の伸ばしている庭師に提灯を手渡している。ポール・デッカは喫煙室でその仕事を監督しているように見えるが、その視線は妙に沈んでいた。彼は自分の最年少の娘が、その飾りつけでいいかどうかを尋ねたとき、驚いて跳び上がったのだった。努めてそうしているかのように彼の顔は和やかになり、すべての明かりが灯されていて、家

具が片づけられて良く反響するようになった客間に入ってきた。

大きな暖炉の横で彼は到着した人たちをこわばった微笑で迎えたが、妻の古い友人であると判ると少し緊張が解けるのだった。満員の自動車が何台か玄関の庇のところに止まった。広間の一つでは、黒い衣装で、レースと古い宝石で飾った婦人たちのグループが形成されたが、彼女たちは髪をリボンで縛り、少し皮肉っぽい元氣そうな小さな目をして、直ぐに同調するその横顔をしており、そのすべてが同じ家系の出身であるのが判るのだった。頭を動かして頷き、歌うようなアクセントで囁くように言うのだ。

「ねえ、以前はこんな風にして一つの部屋に残って、子供たちは別室にいるということはなかったわね。」

「昔は喪にふくすということが尊重されていましたがね。今では楽しむことしか考えていないんですよ。」

「私は向こうの方を一回りしてきます。娘を一晚中ほつてはおけないのです。」小柄の貴婦人はそう言つて近視の目で探しながら回廊の方へこっそりと忍び込んでいった。

大きな窓からは、ホールの中をもつれ合つたカップルが行ったり来たりしているのが見えたが、キリツとした服の上で男たちの腕が軽やかでゆつたりした素材の上でその体の線をなぞっていた。ポーリーヌはいつもこの無言の楽しみ、この節度はあるが単調な動きの前で驚いて立ち止まったのだ。彼女は白髪のカールした縁飾りをしてサツパリしているルイズに気が付いた。それから廊下に面したフランス窓を開けた。提灯の明かりが近所の芝生と満開のベンガルのバラ色の茂みをかすめるように当たっていた。彼女は手すりに肘を突いて暗闇に木の形や小道の慣れ親しんでいる線を再発見しようとしていた。彼女

はタンゴのアリアを口ずさみながらホールの窓に近づいて、目でマックスを探した。何組かのカップルが夏の太陽に焼けてゆったりした首筋を出して、体は自由にして、額は寛いだ様子で、波のように動いていた。バルヌリー家の人々の高い足はリズムの変化に応じて細やかに線を描き、彼らの長い頸は相手の踊り手の逞しい肩の上に慎ましく曲げられていた。何人かの女たちは唇を真つ赤にして、ダンスの鷹揚さにアクセントを付け、無邪気な視線のブロンドの髪の男たちに体を押しつけていたのだった。少しぎこちなくて、その腕は従姉妹の華奢な体をまだ抱き寄せてはいなかったマックスは危なっかしいステップのままに他の者たちの間に漂っているように思えたのだった。

ポーリーヌは廊下を進んでいつて食堂の窓から、テーブルにグラスを一杯載せているのを見た。ここでは若い人たちが大声で談笑していた。壁に凭れて髪を乱して、眼を輝かせて一人の若い娘が果物に齧りつき、自分を見ていた若い男にそれを差し出した。

碁盤目のタイルの上を滑るようにしてホールを抜け出したカップルが踊りながらポーリーヌに近づいた。提灯に火がついて、突然消えた。回廊の端でポーリーヌは柳の木の安楽椅子に坐った礼服の男を認めたのだった。

「あら、あなたなの、ジャン。気がつかなかったわ。寒くないの。」

「いや、寒くはない。私たちは直ぐに帰るよ。君はポール・デッカに気が付いたかい。あの眼は別の世界のものだよ、レコードを交換する身振りは自動人形の様だった。あれは心を締めつけるよ。」

「カトリーヌ伯母様はともきれいなね。」

「あの人はこれ以上きれいだったことはない。今いくつなんだろうか。」

「私、ホールに戻るわよ、それから帰りましょう……ポリーヌが言った……マックスが後に残りたいのなら、ジリー家の人と一緒に帰ればいいわ。」

「私はここで待つてゐるからね。」

玄関の庇の方で自動車の警笛が繰り返されるのが聞こえてきた。誰かが集合に間に合わないからなのだ。月の光の中で灌木の茂みが道路に暗い点の影を投げかけており、そこでは急速に消えていく人影が通過していた。

ジャンにとつてすべてのすらつとしてブロンドの髪の若い娘はアリーヌを思い出させた。彼は彼女が物陰から出てきて自分の側に坐りにやつて来るのを眼にするのだ。彼は心での対話を、そして自分を魅了し、心を引き裂く様な感動的な声を創作する。彼の娘のこの記憶、いつも感じやすい心のこの点は肉体や感情の法則からはすり抜けてしまい、疲れと、時間や不在による麻痺というものを知らないのだ。

けれどもパリではジャンはまだアリーヌを避けている。彼はまだそれは早すぎると考えるのである。しかしそれはまた遅すぎることを意味しているのである。彼女は大きくなっている。彼女の思想はその母によつて形成されている。彼女はおそらく傷だらけだろう。彼は彼女を時折、あるがままのものとして、そして他の者に作り上げられたものとして受け入れることを余儀なくされて、一瞬しか彼女に会うことはないだろう。若し彼女に話しかけて、父として介入することを望むならば、彼は先ず自分の立場を弁明することであり、説明できないことで心を動かすことである。そしておそらく彼の娘の内にナタリーの全体を再発見することになるだろう。

ナタリーにぶつかる恐怖、子供に対する尊敬の気持ちから沈黙を守るといふ義務、悔恨の気持ち、臆

病さ、これらの複雑な不安がジャンにあつては想像の上での娘の魅力的なイメージがそこに入った觀念によつて次のように翻訳されることになる。《もつと後になつて彼女が若くはなく、自分の母に結びつくことがあまり無くなれば、すべては解決されるだろう。》

..

二度目のアメリカ行きから帰つたジャンは、建築技師のビュスビーヌの待つてゐる新工場の作業場に出掛けた。

職工たちから解放され、仮の支柱や枠組みからはその裸の建物は初めはジャンには思いもよらない形であるように思われたのだつた。そして彼はその大きさを知つたのである。

彼はビュスビーヌの側を、地上に散乱してゐた石膏類の最後の堆積、足場用の横木や板の束、蛇のようになつて身に迫つてくる様な鉄骨類を避けながら無言で歩いていった。埃っぽい霧、香料のむつとするような臭いがセメントの蒸発で爽やかになつた空氣のなかを漂つてゐた。ビュスビーヌは常に仕事の結果を知つてゐたし、骨組みの外側を通じて自分の仕事の正確な見取り図を見抜いてゐた。ジャンにとつては突然ヴェールを剥がれたその建物をその建築技師は今完成されたものとして眺めてゐた。ジャンがその未来を夢見てゐたところで、ビュスビーヌはその老化の来るべき損傷を見てゐた。

ピエール・ソータールは炉のホールを見るために立ち止まつた。そして機器を調整するために制作の試みが始められてゐた建物を横断し、電気変圧器のある小部屋に入り込んだ。そこは白のタイルを敷き

つめたコンクリートの小部屋から成つていて、光輝き、清潔であつたし、そこでは何も動いてはいなかったが、工場全体に命を与えていた。

∴

洗濯物を片づけてから、ソータール夫人は息子に一瞥を向けた。彼女は草の上に下着類を置いてからピエールの側の椅子にどっかりと腰を下ろした。そして彼は二人の間に開かれていた本を取り除いた。

「お前は勉強しているのかい。」

「ある物を捜しているんだよ……。」

「お前は休まなければならないよ、気晴らししなければならぬし……。泳ぎを覚えたらいいじゃないかい。プールには若い人がいるよ。土曜日で今日のように暑い日には、そうするといいよ。」

ピエールは踝が痛むのではないかと恐れているということは敢えて言わなかった。特に彼はシモーヌ・ジーリに会つて、泳ぎの初心者であることを滑稽であると思われるのが怖かった。

「ジーリの奥さんは昨日私に、『それじゃああなたの息子さんは泳げないの？』と言つたよ。」

ピエールは自分の鉛筆を置いた。「僕に苗床を耕すように言つたじゃないの。」

ソータール夫人は微かに満足の表情をした。彼女は自分の息子の成功を誇りに思つていたが、家では息子を自分から遠ざけるその学識に苛立つていた。

ピエールは手に犁を持つて、非常にゆつくりと最も軽い地面を耕しながら、自分の計算を追求してい

た。少年時代から彼は母の意志を尊敬していたが、それは自分の内面的な独立を守るために抵抗することなく順応する必要があったある種の宿命と考えていたのだった。彼はそのせいで母親の願望を自分自身の希望と受け取るようになっていた。彼は泳ぐことが出来たら、プールで泳ぐのが好きになるだろうと思っていたのだ。

練習するために彼はヴィエンヌ河の端の人に見られることのない一隅を捜した。しかし漁師たちが彼を気後れさせた。そして彼は子供たちが飛び込んだり、跳ね回っているのを、そして柳の後ろで着替えたりするのを見ていた。彼は自転車でトリーオンまで行ったりした。水路や鉄筋コンクリートの橋、煉瓦の建造物、ダムなどが田舎の風景を変えていた。最近まで両側が険しく切り立っていた急流は湖水に変えられた。しかしもつと遠くでは花崗岩の岩がバラ色のヒースの間に顔を出しており、トリーオンの水は勢い良く褐色になって、栗の木の間を流れていた。垣根で囲まれた牧場では、手に棒を持って上っ張りを着た子供や黒い藁の帽子を被った老婆が編み物をしながら、数頭の雌牛の番をしていた。

食事の後で、工場へ行く前にジャンは睡眠のために取っておかれた薄暗い小さな部屋のソファに横になった。彼は眼を閉じて額に皺を寄せたり、蠅を追ひ払うために頭を振ったりした。そして使用人がジー氏が客間で待っている旨を伝言に來た。

「ジーリ？ 何の用だろうか……。」ジャンは肘掛け椅子の上に投げられていた上着を身に付けながら、

半ば寝惚け顔で言った。

ジーリ氏は明るいウールのチェヴィオットを着て、手に手袋を持ち、客間の中央に身じろぎもせず、深刻な顔をして直立したままでいた。そして彼の頬の上にあったさび色の染みは灰色がかった蒼白い顔の中で大きくなって、いっそう深くなるように思われたのであった。

「悲しいお知らせを持ってまいりました……彼は言った……ピエール・ソータールが死んだのです。彼はトリーオン河で溺死したのです。」

「ソータールだつて！」ジャンは今度は緊張して、すっかり目が覚めた顔で言った。

反射的に彼は直ちにピエールに代わり得る者のことを考えた。

「私たちはそれを昨夜知ったんです。彼の母親が、土曜日に彼が家に帰って来なかったと私に言った時、私は何か不幸があつたのではと思つたんですよ。」

「それは確かなんですね？」

「そうです。私は今朝彼の遺体を見たんです。」

ジャンはくらくたとして低い声で繰り返した。

「ああ、ソータールが……。」

戦争の日以来、これらの打撃に敏感な気質が彼の内に新たに形成されており、死というものがそれにとつては予期できず動転させるような知らせとなったもう一つの魂が出来ていたのだ。彼はまるで難しい言葉を理解しようとしているかの様に眉をひそめながら静かに彼は言った。

「ソータール……。」

彼は厳密にはピエールのことではなく、同時にソータール夫人やポーリーヌ、マックス、そして工場のことなどを考えていた。彼はあらゆるもののうちの死というものを、そして人生の奇妙な夢想の下での無の永遠なることを感じたのである。

「私はソータール夫人に会いに行つてこよう……恐ろしいことだ……この一人息子……彼の愛は……彼の誇りは……」

「本当に恐ろしいことです、私は昨夜は彼女の側で過ごしました。そして今お暇してきました。これは限らない悲嘆です……」

「すべては測り知れないものです、私たちは人生を生きたために作られているのではないと言えるほどです……」

「私は失礼します、私は母のところに行つて知らせてこようと思います……私たちはあの青年をととても愛していたんです、家族の一員の様に思っていましたのに。」

「ジーリさん、あなたのお母さんはいくつなんでしょうか。」

「もう八十歳以上です。母はいろんなことを見てきたでしょう……！ 多くの悲しみを……そして喜びを持ったことでしょう……それは誰にももう判りません……考えても見てください、私たちは四人の男の子と三人の女の子があります……それから多数の孫たちがいます……何人かの死ということもありました……。そして私は母の人生の一部しか知らないのです。彼女は若い娘のとき七十年の戦争でフィアンセを亡くしました。そしてそれから……私はよく考えるのです、彼女は人生というものをどの様に考えているのだろうか。でも彼女は人生というものをもう当てにはしていないのです……」

ジーリの母は、そこでは五十年来変わらないままである二階の客間の中にいる小柄の年取った婦人なのだ。赤いビロードの家具、マホガニーの楕円形のテーブル、ランプと絹製のシェード、半分引き上げられて、中庭の栗の樹が見えるようにさせている半ば開かれたチュールのカーテンなどがそれなのだ。彼女の横では小型テーブルの上には祈祷書と呼び鈴が載っている。彼女は手を膝に乗せて、黒のレースの縁飾りの中に顎を半ば隠してまどろんでいる。しかし扉が開くと彼女は直ぐに目覚めて、両手を安楽椅子の肘掛けの上に置くのであるが、機敏で好奇心に満ちており、微笑んでいる。そして彼女は節くれだつていていつも冷たい指で幼いジーリの娘を愛撫するのだった。

..

ストライキの日々にはジャンは、そこに少し活気を求めるために新工場によく出掛けた。ペンキ屋と電気業者が最後の作業を終えていた。

彼は新しい建物の中に微かなざわめきを聞きながら、ガラス職人と話していたが、その時玄関先にヴゼルを認めた。

「君がリモージュにいたとは知らなかったよ。」ジャンが言った。

「私はロシアに行っていたんだ。それから二年間はパリに居たんだ。」

「君はパリで何をしていたんだい。」

「私は働いていた。そして夢を抱いていたんだよ。レオン・ブルムの秘書になんたくてね。しかし彼は

秘書の使い方を知らないんだよ。」

「君は工場を見ていただろう。興味深いのは新しい炉なんだよ。見てみたいかね。この中庭は暑くないね。」

「君は戦争前に、つまり十二年前に初めてこの工場について話してくれたね。かなり遅くなったんだね。」広い部屋部屋を通り抜けながらジャンの後ろを歩いているヴウゼルが言った。

「戦争があつたからね……。それに私は躊躇っていたんだ……。」

「君が躊躇ったって？」

「私は仕事に頭を向けていなかったんだ……。何にでもまったく同じだと思うんだよ。アメリカではいつも細かい事柄に向けられていた戦争に行つたことが無かつた連中と論戦したんだよ。彼らは冷静な精神と実感的な感覚を持っていたよ……。私は少し気が弱くなり、仕事への熱を失つたよ……。君は判ると思うけど、それは人間を変えてしまうものなんだね。」

「そうだね、三年か四年の間だからね。」

「そうなんだよ、三、四年の間だからね。それに私は工場を始めただろう。しかし発明は速く進んでいくんだ。そのためには絶えずすべてを破壊していくことになるんだ。」

「この工場は相当の費用がかつただろう。」

「そうだ、相当なものだよ。」

「それで君は待ちながら古い工場で働くのかね。」

「そうだよ。」

「君はストライキが無ければ働くのかね。」

「そうだ。」

「ストライキには手を焼いているのかね。」

「そりゃーそうだよ。」

「君は労働者たちが求める賃金の増額に迎合するのは良くないと思っているのかね。」

「彼らはすでに二度ほど増額されているんだよ。」

「生活費が増加するのに従つてのことだ。実際彼らの収入は戦前よりも少なくなっている。」

「日雇い労働者の収入は増えているんだ。」

「日雇い労働者たちは多分そうだろう……。」

「すべての給料を数字で表してはいけないんだ……ジャンが言つた……すべての者にとつてと同じく労働者にとつて重要であるもう一つのものがあるんだ。確かに今日の労働者とロベール・バルヌリーの時代の労働者を較べてみると彼らは少しは失っているだろう。彼らはロベール・バルヌリーが彼らに与えた一つの幸福、つまり自分の仕事への誇りというものを失つたんだ。その代わりに彼らは請け負ひ契約と不満と欲望を持っている……。それが政治というものだよ。」

「君は今相当儲けているだろう。」

「私はこの新工場と、薪を使う炉を、燃料オイルを使う炉と入れ換えた古い工場に相当の金額を注ぎ込んだんだよ。私がこの様にして炎の側から救ひ出した労働者たちはそれが何を意味するかは知っているが、彼らは三年間の模索の最中に何度か壊された炉の価格は知っていない。それに私はストックを形成

することを望んでいるんだ。」

「ストックって？ 取引事業はこれ以上繁栄したことはないじゃないか。食料品雑貨の商人は一年で財産を作り、農民は借金を支払い、農地を囲い込み、自分の器具を改善している。」

「そんなことは長続きはしない。すっかり立ち直るのには一世紀を必要とするんだ。今日はすべてはまやかしだよ、その才能さえも。それぞれの都市が何でも手掛ける大人物を持っている。実際にはそれらの大家は軽率な若者かしばしば病人なのだ。しかし彼らは狂ったお金と錯乱した社会とに迎合しているんだ。目下のところは彼らは才能を持っているけどね。」

「君は将来にあらゆる信頼感を失ったんだね。この工場は巨大なものだ。」

「これは必要なものだ。五十年間ドイツ人たちはバルヌリー陶器を模倣してきたんだ。今彼らは我々を追い越している。不幸にしてヴァルダースホーフでは一人のドイツの労働者は一日に千八百のカップを作っている。同じ時代にその同じ機械でリモージュの一人の労働者は、組合に従うために六百のカップを作っている。そして日本人たちは低賃金で、一日に十五時間働いているんだ。」

「組合はその馬鹿な方針に反対するのは間違っているのかね。」

「組合は世界全体にその法律を施行することはあるまい。昨年（この報告に注目してみたまえ、というのはそれはおそらく決して二度と見られることの無いような事柄だからだよ）、一九二七年にリモージュの陶器の製造業者は労働者たちに五千万フランを与えたし、その必需品に対して同額を支出したんだ。特に次の詳細を覚えていてくれ、すなわち一万フランはアメリカからやって来るんだ。今日でもアメリカの小市民が豊かになると、バルヌリー商会の食器類一式を購入してくれるんだ。それは社会的向上の徴

なんだよ。彼らはその名声の故に普通のものよりは少しだけ高い我々の陶器を買ってくれるが、我々の競争相手のものよりもっと高いものは買わないんだ。」

「君はリモージュの労働者が一日に千八百のカップを作ることを望んでいるが、どうしてそれ以上は望まないのかね。機械に電気乾燥機を付ければ、一日に三千のカップを作れるよ。君の競争相手はいつも君の進歩に答えることが出来るよ。その様にして君たちは没落することになるよ。」

「私は出口のない状況、失った利益、無用な犠牲、そして希望で一杯になった人々しか見てこなかったんだ。」

彼らは印刷室に入った。ジャンはヴウゼルの肩に手を置いて微笑みながら突然言った。

「君は私と一緒にガリバルディー街まで一緒に来ないか。車なら五分しかかからない。私は君が興味を持つものを君に見せたいんだよ。」

入り口の側で彼はヴウゼルを通すために体をかわした。

「君は何て礼儀正しいんだ……ヴウゼルが言った……君はまだフオランプリーズの防空壕の入り口に居るつもりだね。」

突然ジャンは分隊の全員が入るには狭すぎた防空壕のことを思い出したのだったが、そこでは全部の隊員が泊まるためには頭と足を向かい合わせて横にならなければならなかったのだ。一人一人はその姿の内に四本の足を持っていたのだ。ただ最後に入った者だけが二本足しか持たないのだ。彼はまた砂地の中の羊小屋の臭いがしたもう一つのことを思い出した。羊の革の上にくすぐまってヴウゼルと彼は日々の爆撃下で将棋を差していたのだった。落下点が近づくと、遊びを中断し、距離を測定するのだ。時折

砲弾が間遠になったり、静まったり、鈍い音で炸裂せずに直ぐ近くに落ちたりした。そしてある刹那にはそれらは下から吹き上げられて、空中に投げ出されたり静められたりする可能性もあった。その時その沈黙の中で彼らは身動きせずにいたし、数秒間はその一人一人が自分の存在の秘密の中に引つ込んでいたのだった。

この思い出はジャンにその同じ自閉状態の様なものを呼び起こしていた。彼は歩みを緩め、突然その前にはヴウゼルに見せることを望んでいたその対象に無関心になっていた。《あの頃にはちよつとした仕種でさえも生と死の問題になる可能性があつたのだ……彼は考えた……今では我々はくだらないもののためにのみ生きているのに過ぎないのだ。》しかし直ぐに彼はこう考えた。《結局、つまらないのは生と死なのだ。重要なのは生に対座する態度なのだ。》

彼が車に腰を下ろした時、入り口の扉を締めるためにヴウゼルの膝に屈み込むようにして言った。

「君はその地下室しか残っていない美しい別荘のことを覚えているかい。あそこで我々は三人でグランド・ピアノの中に寝たじゃないか。」

「そうだね、ねずみの臭いがしていたね。」

「ポンテが私に言っていたけど、七月にはもう地下室が無くなっていたそうだよ。」

「ポンテだったって？ 君にそう言ったのはポンテではないよ。彼はスーピールで死んだんだよ。」

「それじゃあラブルースだね。」

「違うよ、君には良く判っていると思うけど、我々の二人以外では初めから一九一七年まで中隊に残っていたのはラティーだけだよ。」

「ほんとにそうだ、ラティだ。」

「中隊には三千人が入ってきたそうだよ……おそらくそれは誇張だろう……私は悪い時に、誰もが何も信じなくなり、戦争が何の意味も持たなくなった時に君と別れたんだね……。男たちは殺されるのに慣れてしまっていたんだよ。」

工場に入りながらヴウゼルはガラスの仕切りの方に眼を投げかけた。

「ここで仕事をするのかね。」

「事務員だけはね。」

ジャンは急いで扉を開けた。

「あちらに行こう。」

彼の事務室でジャンはテーブルの上のほんのりと薄緑がかった色合いのお皿を示した。

「ほら、これだよ。私は今我々が作っているものを君に見せたかったんだ。これは我が社の青磁のセツトだ。明の時代に支那人たちは淡緑の七宝で覆った花瓶を作ったんだが、決して色の付いた製陶用の粘土を大量に作るということはなかったんだ。我が社のものほど固くない陶器を作るドイツ人たちは色の付いた粘土を容易に手に入れたんだ。非常に高温で焼かれ、我々がやっている様にその釉薬が粘土と深く結びついている固い陶器にとつては、その困難は大したものなのだ。しかしその成果はご覧の通りのものなのだ……溶けた岩の外観を……宝石の様な素材を……月の光のようなデリケートな感じを。」

「その美しさが正にその白さや透明性に基づいている素材を着色するのは残念なことではないのかね。」

「私は流行に従わなければならないし、それを予感することさえもしなければならないんだ……。君が

残念がつているこの透明な白さはその繊細な感じの中に含まれているんだ……。それは月の光の感じと言っただろう……。正にそうなのだ。それは味気ないものと思うかね。」

「それはとても美しいよ。」

「この品はどうして美しいのか、おそらくそれが困難な条件下で創り出されているからなのだ。その質の良さは、炉の温度が数度高いこと、そしてそれは常にその色を変えてしまう危険があるほどの高い温度に基づいているのだ……。ここにこそ私が競争者や、組合が私に差し向ける障害物に対決する理由があるんだ……。つまり私の陶器は高価であるが美しいということなんだ。」

「この絶妙な調子を持つ皿と、別のもつとありふれていて、ほとんど似たようなものであり、何処にでも見られるようなものとの間の違いを感じるためにその美しさを評価するような人間がまだいると言うことなのかね。」

「それが問題なんだよ。私の立場としては、それは解決しているのだ。私は信念を持っている……。最も冒險的な……。すべての私の方策はこの信念に基づいているんだ……。さあ、この装飾を見てくれ。これはデュフィーのものだ……。君はその色に気付くだろう……。古典的な手法ではこの様な陰影は生み出すことはできないのだ。そして忍耐が必要だったんだ。いろんな苦心の話があるんだよ……。」

「その形はデュフィーのものなのかね。」

「いや、そうではない。それは私が考えた……。我々のものだ。我々の産業に無縁の芸術家には一つの形を作ることは出来ない……。それは陶器制作の二つ、その素材に馴染む想像力を要求するのだ……。この新しいセットを完成するためには十八カ月を必要としたのだ。各品ごとに三百あまりの模型が作られた

のだ。」

いつもジャンと話し合う時には論争家となるヴウゼルは、自分が見るのを止めることのないこれらの品々の前で気後れさせられたように黙ったのだった。彼はただ低い声で次のように言った。

「ここではこれ以上美しい陶器が作られたことは無かったのだ。」

彼は無言でジャンの後に付いて扉の方へ歩いていった。彼らは物も言わずに廊下に沿って行った。玄関の前で入り口の扉を開けながらヴウゼルは振り向いてジャンに言った。

「君は組合の書記長に会いたいかね。僕が彼に話しておくよ。彼らが要求している増額は過大なものではない。人々は多くの美しいものを生み出す、自分たちの向上によつて増大される文明に大々的に参加することを望んでいるのだ。そこには彼ら自身が完全には把握してはいないが、正当であり、君が認めなければならぬような考えがあるのだ。」

「その文明を破壊することから始めてはならないんだ。しかしどうして組合と議論しなければならないのだ。彼らは理解したいとは思っていないんだ。それが彼らの力なのだ。」

「それもまた君の力でもある。」

「我々はそこまで到達したね。それは力の問題なんだよ。」

ジャンは事務所に戻って、眼鏡を掛け、手紙を手にとってバブウゼを呼んだ。

「それじゃあ彼らは満足していないのかね。」彼は低いが満足そうな調子で言った。

「駄目ですね……バブウゼが言った……上手く複写されていない縁飾りがありましたよ。」

「ほらごらん、彼らはそれでも直ぐそれに気付いたね。」

急ぎの顧客を満足させるために、ジャンは、自分の所から離脱した別の工場でバルヌリー商会のストックから出した白物を装飾させていたのである。

「私の伯父さんはリモージュの職工たちは、その水が石灰質に富んでいないから、繊細な手と小さな骨を持つているんだと言っていた。」

「何れにせよ戦時中に我々が雇ったベルギー人たちはすべてを壊しましたね。」

「私はその水の話は信じないが、確かにうちの職工たちは特別の教育を受けているからね。」

「一つの工場から別の工場へ移っているのはその同じ職工なんですよ。」

「いや、違うよ、バブウゼ、彼らがここにいろかぎりは、同じではないよ。ここには他の所には見つからない何かがあるんだ。君もそれは良く判っているだろう……我々はもつと要求が多いんだよ……。」

その要求はずつと昔からのものだが、壁のなかにしみ込んでいるように思える伝統に支えられているものだ。それはロベール・バルヌリーまで遡るのだ。今日でも欠点の無い陶器を作っているのは彼なのだ。ジャンはこの不可分の工場の中の精神と腕との関係を感じていたが、その工場は多くの個性を持っている。そして周りの建物の麻痺や人気の無い仕事場、更衣室に吊り下げられた仕事着、並べられた道具の間の職工たちが一人も居ない空っぽの場所、消えた二十器の炉、それらの物が病氣の様に彼を悲しませたのだった。

「どうしても終わらせなければならない。」突然ジャンが言った。

「若しあなたが更に譲るなら、彼らは明日はまた始めるでしょう。どうして立ち止まるのですか。」

ジャンは自分が評価した職工たちには今まで以上に支払ってもよいという気持ちになっていた。男か

ら男へと、仕事を愛する職業意識を持つ者の間ではそれは理解することが出来るだろう。

しかしバブウゼはジャンを現実引き戻した。組合の指導者たちは彼らの特別の利害と守るべき評判、そして工場の利益にはまったく無関心な極めて一般的な考えを持つている抽象的な存在であり、彼らは工場を嘲笑し破壊してしまうことを望んでいるのだ。その様な人々は恩恵に対しては対立するのである。彼らにとっては功績や特に熱心さに対して報酬を与えることは重要ではない、それらはむしろ和らげることが適切なのだ。彼らは一人一人の人間を差別するのは認めないのである。

「それじゃあストックを持つのを断念するべきです。工場を建設したり、ストックを作ったり、すべての者の昇給をすることは出来ません。」

「我々は十分なストックは持っていないよ。危機は確かにやって来る。それは二年続く可能性もある。他の者たちが破産する時に職工たちを守り、何も売らないで数カ月持ちこたえるためにはストックは必要なんだよ。」

「それでは新工場は放棄すべきです。」

「いいかい、あれは不可欠のものなのだ……！ あれは彼らの未来なんだよ。」

ジャンは立ち上がって、ふくれ面をして事務所の中を歩いた。

「私は帰るよ。今日は何もする事がないからね。」

彼はうすい黄色の紙で皿を包んで、外套のポケットに滑り込ませると自分の車に乗り込んだ。」

霧の中で彼は通行人を前にして急にスピードを緩め、良く知っている通りを見ることなく、つながってぼんやりしている古い建物の正面や大きな壁に囲まれた庭、新しい家々、バラ色の煉瓦で作られた職

工たちのアパートやその小さなガラスの玄関などに沿って行つた。彼は花崗岩の欄干やどっしりとした境界標で凸凹になつてゐるように思われたヴィユー・ポンからヴィエンヌ河を渡り、最後の斜面の道を一気に登つたのだつた。

彼が車を車庫に止めてから、後ろの庭の鉄の扉を閉めた。彼の足取りは凍つた砂利の上でかりかりと音がした。玄関で外套と手袋を脱ぎ、暖房器に手を触れた。それからデリケートなやり方で包みから皿を取り出して、それを客間の大きな箱の上に置いた。

「ポーリース、これを見てごらんよ、この皿は美しいだろう……。」

「そうね、デュフィーのデザインだわ、私判るのよ。」

「この本はマックスのものかね、外に出ているのかね。」

「友だちのヴウゼルと出ていったのよ。」

「あの青年は私は好きではない。」

「私たちは子供の友だちを選んだりはしませんからね。」

ジャンは坐つてその本のページをめくつていたが、それから大箱の方に向いた。

「あの皿はきれいだ……その装飾は新しいものではないが、その形は……」

「その形って？」

「そうだよ、その細かいところが……」

ポーリーヌは自分の裁縫の袋を取つて、片手を夫の肩の上に置き、その皿をじつと見ていた。それからぼんやりとジャンの髪に指で触れた。

「あなたの髪は白くなったわね。」

彼女は窓の横の小さな綴織りの安楽椅子に腰を下ろした。

「何を作っているのかね。」

「バザーのための子供服を作ってるのよ。」

ジャンは針に糸を通して、布を平らに伸ばしている器用な手を目で追っていた。

「以前君は内の会社の陶器にもっと興味を持っていたね。」

「以前ですって。」

「そんなに昔のことではないよ……戦後私たちが青磁を作りはじめた時のことだよ。私は君がいくつかの質問をしたことを覚えてるんだ。そして私は考えた。《妻が夫の仕事に興味を持つことは楽しいことだ。》ある日私の説明が少し難しいことがあったね。それで私は、君がそれを理解しようとはせずに、私の答えを書き取って、それを暗記しているように思ったよ。」

「本当？」

「私は君が青磁に興味を持った男友だちを持っているのだと思っていたんだ。」

「私は男友だちなんていなかったわよ。」

「いるんじゃないの。君はベル・アンスでたくさんの友だちを持っていただろう。それはまったく当然の事だからね。」

「子供たちばかりよ。」

「子供たちと青年たち……。」

「あなたは確かに私をベル・アンスで見たと思っているのかしら。」

「私は君をルイズの家やトランブラードで見たんだよ……。」

「知っていますわ、でも私はあなたが本当に私を見たのかどうかと思っているのよ、……あなたはともぼんやりしていたでしょう。」

「戦争中たった一人であったり、兵士たちと一緒にいた習慣からだよ……余りにも長い間死と付き合っていたのだからね……。私は死というものを大して重要性がない事件のように考えるようになったんだ。それはすべての将来の展望を変えてしまうんだ……。私はもう戦後の自分がどんなであつたかを思い出することもできないんだ。自分がもう思い出せないような人間だったということは不思議なことだね。一生の内には二度や三度はそんな事があるんだよ……。君が言っていたように私はぼんやりしていた……。私は非人間になっていたんだよ。」

「あの頃のことを話すのは止しましょう。」

「私の帰還した頃のことかね。」

「私はすっかり忘れてしまったわ。」

「私はさつきヴウゼルと会ったのであの頃のことを思い出したんだ……。そして様々な回想を思い起こしたんだ……。でも私は確かに君をベル・アンスで見たよ……。深い気持ちで……。別離が与えるあの当然の視線で……。あのぼんやりした視線で……。私は君の若さを感じていたのだ。それは私には驚くべきもので、尊敬すべきもののように思えたし、それは対しては自分がいかなる権利も持っていないようなものなのだ……。そして私はそれを邪魔することは許されないようなものなのだ……。その時は君は僕の

ものではないように感じたのだ。」

「それは本当よ、ジャン、あなたは私を捨ててしまっていたんだから……。」

「私が最初のアメリカ行きから帰った後のある日、ベル・アンスで私は君の直ぐ側で、例えば数時間でも、すでに出来て、固定し、完成した自分というものを押しつけることの内には野蛮なものがあると感じていたんだよ。」

「あなたはとても冷たくて……誤解してしまうようだったのよ……あなたは私を見なかったのよ、あなたが見たのは私ではなかったようだったわ……。」

「いや、見たよ、君は魅力的だった、君は私とはまったく異なった人間であるように思えた。以前の君とは非常に異なっているようで……少し野性的であるように思えたのだ。君はヴァカンスの最中だったんだね。」

「私もあなたと一緒にヴァカンスしたいわよ……旅行したり……リモージュから出て……私たちはもう相当に年取ったのよ。それなのにいつも工場ばかり、どうしてなのよ。皆怒っているのよ。ギイはもう私に話しかけてくれないわ。私は一人でジョンシュロールに行く気がしないのよ。幸いにしてルイーズはそんなすべてをあざ笑っているわ。あの人たちはあなたが株を持っていないから配当を少なくしているとか、あなたが臆病すぎるとか、或いは大胆すぎるとか、あなたは無用なストックを蓄積しているとか、その残りのものは狂気染みた建設に浪費されているとか言っているのよ……。それにこの果てし無いストライキでしょう……あなた覚えていらっしやるかしら、今から五年前に奇跡的にピストルの弾を免れたことがありますたわね……職工たちはあなたの車を焼いたこともあったわ……そのすべては英雄

的なことなのかしら、むしろ無益なことではないのかしら。」

「すべてのものは結局は無益さに到達するんだ……おそらくその無益さは大したものだろう……。」

「ジャン、あなたは何を眺めているの。」

「私は君を見てるんだ。」

「私を苦しめないでよ。」

「少し前には君はとても若かった。君の言うように私たちはほとんど年取ってしまった……君の白くなっている、君も……眼の横も、口の横も小じわが寄っている……顔色も……風雪を過ごしてきたのだ……。しかしそれに気付くためには注意しなければならない……私の眼には君は少しも変わっていない。その年齢の跡も君には無関係のように思えるよ……人に愛された顔は文句のつけどころがないのだ……。私たちのすべてが変わってもそれは変わらないのだよ。」

「すべては変わっていくのかしら。」

「そうだよ、例えば私たちの考えも。私の愛についての考えは変化した。私は愛というものは一つの創造であると考えていた。それから完全さへの好みであると考えerようになった。それから今までは反対にあるがままに一つの存在を受け入れることであると考えerようになったんだ……。」

「そして今はどうなの？」

「今には私には判らないのだ、愛というものは確かに定義できない、神秘的なものだ……。私はおそらく今ではこう言うだろう、つまりそれは本当に自分自身であり、若くあり、年老いていく許しを持っている自由な存在を慈しむことであると。」

「それは本当ね、私は自分が老いていくを感じるわ。でもそれは私にとってどうでもいいのよ。私たちは私たち自身を越えているかのように結ばれているんですもの。」

「そうだよ。」

彼女はその子供服を肩まで持ち上げて、頭を反らしてそれを調べた。それからそれを膝の上に置いて、両手をその服の上に組み合わせて眼をジャンの方に向けた。

「あなたは旅行したくはないの。」

「私は今日になってその事を考えたんだ。このストライキでくたくただからね……この地獄のような苦痛……。気が変になりそうだよ。私は自分に語りかけてくれる品を眺めようとこの皿を持ち帰ったんだよ……。戦争中は私は病気にはならなかった、しかしこの時には私は離婚の直後のように悩まされていた……私は心を動かされているように感じる、それは何によるのか判らないが、それは深いのだ。」

「それじゃあ出掛けましょうよ。あなたは自分の地位に対して必要な気質を持つてはいないのよ。本当の実業家なら何も感じないわ。」

「そうとは言えないよ……。」

「バブウゼは一人で工場を経営できたのよ、それなのに今はあなたが留守にすることが出来ないなんて。」

「それは確かだね、彼は四年間良い指導者だったんだからね。私が帰還してから突然彼はまた私を絶えず必要とする雇われ人に戻ってしまったんだよ……。しかし数日なら留守にすることができるよ。私は喜んでベル・アンスに行くよ。」

「どうしてあなたはいつもベル・アンスの話をなさるの。」

「私はトランブラードではゆっくり休息できるだろう。ブランシュ・ド・ラクルージュに手紙を書いてくれないかね。彼女は私たちに家を貸してくれるだろう。アガートが私たちのために小さな舌びらめをフライにしてくれるだろう。デルノード男爵にも会えるだろう……。」

「ブランシュのところは寒いでしょうね。」

「ストーヴがあるじゃないか。レンスでは君はそんなに寒がりじゃなかったじゃないかね。私もバルバザックを離れてから二十五年になるんだね、あの冬の空をもう一度見れたら楽しいだろう……。」

「バルバザックにいらつしやりたいの。」

「そうじゃないよ、トランブラードはシャラント県だからね。」

「イタリアに行きましようか……。私たちは決してイタリアには行けないのかしら。」

「いや、駄目だろう、私は余りに年取っている、遅すぎるよ……。駄目だよ……。私は故郷へ帰るように、自分が知っている地方にちよつとした小旅行をしたいんだよ……。スードル河の沼は冬には美しいからね……。」

「それじゃあブランシュに手紙を書きますわ……。」

ポーリーヌは籠の中でバラ色の糸を搜してその服をたんだ。そしてもうそれを見ることはなかった。彼女は籠を手持って客間を横切り、ゆつくりと自分の部屋に上がっていった。彼女は階段に立ち止まって、窓からの明かりに照らされて、壁に掛かっていた狩りの版画を眺めた。それから彼女はこの親しみのある絵を、今まで見たことがまるで無かったかのように気付いて驚いたのだった。彼女は確かにジャ

ンのことを思いながら、自分が余りに注意を奪われていたので彼女の眼は毎日自分が見ていたものに気が付いていなかったのである。彼女は自分たちがいつもはあまり物を言わなかった時のように機械的に、余りに急いで客間から出てきたことを後悔したのだった。この数年来初めてジャンは彼女に屈託なく話したのである。しかし二人はその親密さにこれ以上の余地を残さないようなある種の職業や規則に従った行動という習慣を身に付けていたのだ。その階段、一階と二階の部屋部屋、友人たち、貧しい人たち、子供、いろんな用事、訪問客などで少しづつ家はほとんど感じられないような別離の意識を押しつけるのである。

..

古いベッドの白色やジュウイ産の布のカヴァー、二つの窓と花の模様の麻地のカーテンとの間の化粧台に置かれた象牙のブラシなどが部屋の中の薄明かりの中で際立って見えたのだった。ポーリー又は雑草の上に坐っている太った赤ん坊の写真をわきに押しやって筆筒の上に籠を置いた。スイス時代の頬のふくれたマックスを眺めながら、突然彼女はヴィエンヌ河畔のほの暗い家の中のもう一人の生気のないう子供を思い出すのだ。彼女は胡桃製の筆筒の扉を開けて、厚地のウールの外套とフェルト帽を身に付けて、急いで階段を下りて庭を横切り、ヴィエンヌ河に通じていた細い坂道を辿っていった。数週間前に彼女はこの様にして毎日のように大急ぎで黒っぽいモルタル塗りの平屋の方に通って行ったのだったが、そこでは一人の子供が泣き叫びながら、首筋を硬直させ、両眼を引きつけて脳膜炎で死んだのだっ

た。その苦しみが終わってから、彼女はその子供のベッドの横に止まっていたのだった。彼女はその子の母親と一緒に泣いたのである。彼女は其の妻と夫が部屋の中に直立していることや、その忍耐力、そして其の苦しみの中の非常に単純な善良さなどを思い出したのだった。彼らは工場の職工たちである。ストライキ以来彼女はあえてそこに戻ろうとはしなかったが、その宵には彼女は自分の臆病さが恥ずかしく思えたのだった。

窓の役割を果たしていた台所のガラス戸が開かれている。敷居の上に坐つて、体格のよい娘が生まれただばかりの娘をゆりかごのように揺すつてやつてゐる。その横では子供たちが、その髪を汚れた顔の上に垂らして口論している。突然動かなくなつて彼らは口を開けて、その夫人を眺めた。ポーリーヌは祖母さんは何処に居ると尋ねる。するとある仕種でその娘は家の中のほうを指さした。

壁と同じように黒ずんだ大きな暖炉には火が燃えていなかった。男たちはテーブルの両側に坐つており、トランプ遊びをしていたが、その肘の横には空になったグラスが置かれていた。その夫はポーリーヌの方に頭を向けたが、その遊びは止めなかった。その妻が明かりを灯した。

「長い間御無沙汰だったわね……ポーリーヌが言つた……あなたたちがどうしているか知りたかつたわ。」

「奥さんは私たちの子供に大変親切にして下さいましたね。」とその妻は言つた。

涙がひとしずくその頬を流れている。それから彼女は夫を見たが、突然こわばつたかのように押し黙つた。

「こちらはバルヌリーの奥さんよ、ヴィクトール、あなた知つてゐるでしょう……。」

「うん、知ってるよ……。ジャン・バルヌリーの奥さんだよ。」

彼は立ち上がったが、一言でお互いの関係を位置づけた。そしていづらくなったポーリーヌは二言三言交わしてから、急いでいるような風はしないでそこから立ち去ったのだった。自分の外套のポケットの中には少しばかりのお金が入った封筒を押さえながら、指を握りしめて彼女は自分の姉の膝の上の赤ん坊に微笑みかけたのだった。

彼女は足早に路地を上っていき、息切れして高みで振り返りながらリモージュと街の明かりを、そして赤や褐色になったルマジエの瓦の屋根を眺めるのだ。そしてぼんやりと輝いて盛り上がっている暗闇の中でスレートの古い屋根が見間違えるほどだったのである。

..

冬になるとトランブラードの沼地では小さな養殖池は青みがかった鱗の様にキラキラ輝いている。そして曇った空は夕方まで曙のような色合いを保持しているのである。河口の水は錆の色をした粘土質の土手の間で灰色になっている。すべては蒼白く平らなのである。明るい空は曇りがかっており、村々は消えてしまい、太陽の光線があなたに小さな鐘楼を浮かび上がらせているのだ。ベル・アンスの近くでは森は、その幹が美しい灰色の縞となつている大木の松の樹のアーチの下で、小さな緑の柏や若い松、そしてえにしなどの暗くて羊毛のように縮れた緑によつていっそう色濃く、更に色付けられている様に見えるのである。

「五年前に私たちはこの森に来たことがありますわ……ポリーヌは言った……あなたはとても無口でしたわ。」

「覚えているよ。私はアメリカから戻ってきた時だよ。私はまったくぼんやりしていた訳ではなかったが、自分が考えていたことで頭が一杯だったのだ。私はそれを言う必要はなかったんだ。それに私は面倒な言葉は好きではないんだ、それに人間が言うことはいやがおうでも微妙なものだからね。今は私は目覚めているよ。」

「それは私たちがヴァカンスの最中だからよ。」

「先月私がベナツクに、高陵土の採掘場を見に行った時、私は六カ月間私の副官をしていた戦友の一人のブロー司祭に会った。彼は辺鄙な地方に身を隠していたんだ。以前彼は自分の兄弟たちへの愛の故にこの世界から我が身を引き離したんだ。つまり彼は罪を憎んだんだよ。今彼は罪人を憎んでいる。私は今のこの時代に宥和することが出来なかったこれらの隠遁者たちの数はかなり多いのではないかと想像しているんだ……。私はよくこの孤立した人たちのことを考えるんだ……。この沈黙した人たち、確かに私たちの内の最も優れた人たちのことを。そしてしかし今まで表明されることがなかったこと……。《汝は様々な写し姿をつくらざるべし》、それは十戒の一つだよ。それは必要なものなのだ。つまり様々な写し姿をつくるべきなんだ。そうすると神が彼らに安住の地を与えてくれるのだ。」

「あなたは本当に繊細なのね。」

「私は以前の自分の沈黙を責めているんだ。それだけのことなんだ。」

「あなたは戦後は沈黙していたばかりではなくて、ぼんやりしていたわね……。私たちがこの森にやつ

て来た日に、あなたは私に「自分は散歩が好きではない。」と言ったのよ、それであなたはまたリモージュに向けて出発したのよ。」

「私はとても幸せな気持ちで出発したんだよ……。私が初めて若い娘の君を見たのだったけれど、君は他人に対して開けっ広げで、何の考えもなく、心もなく、輝かしい姿だった……。君は一人の若者を愛していた。」

「ジャン、何を言うのよ。」

「許してくれよ、その言葉はおかしなものだよ。君に自由な精神を与え、力と陽気な風を与える極めて漠然とした感情を愛と言うことは出来るよ……。その時私が考えていたこと、それを私は今敢えて言うことが出来るのかどうかは判らないが……。それで私はすべてを承認し、すべてを許したんだよ……。」

「ジャン。」

「君の幸福は何よりも私にとっては重要であるんだ、そしてそれはどこから生まれるかも同じように重要なんだよ。」

「あなたがいなくてどんな幸福があるというのよ。」

「私は君から何も取り上げてはいない。そしてどんな苦痛もなかった。君が若い人たちのところに、そして特に若い人たちのもとへ赴くことは私にとっては当然で無実のことだったんだ。君は休息することが必要だったんだよ……。愛される人間というものはあまりにも君の側に居すぎるんだね。それで君を疲れさせたんだよ……。それは君を押し退けてしまうんだ……。」

「あなたは私があなた以外の男性を愛することが出来たと思っていらいっしやるの。」

「いや、そうは思わない、私たちの間には打ち壊すことが出来ない愛があるからね。そして君がそれからちよつと逃げ出したと思ったのはその愛からなんだよ。君が別の人間の元で愛したものの、それは彼ではないんだ……それは君の若さ自体なんだよ……君の独立……或る女性……あるいはむしろある種の処女性というものだよ……」

「私はむしろあなたが一時私から離れていたと思っているのよ。」

「私はその時、愛の頂点にあつて、漠然としていて酩酊させるような地平線を予感していたんだよ、その時には人は自分の世界を、諸々の存在とその隷属するものの歪曲から作られている偽りの結合を断念するものだよ。」

「ねえ、私はあなたに逆らう積もりはないわよ、でもそのすべてはあなたの想像力の産物だわ。あなたは夢を見ているのよ。本当にあの若い青年との間には何にも無かったのよ……ほとんど何も。」

「ほとんど何も……。私もそう思っているよ。」

これらの思い出はポーリーヌを苦しめることは無かった。というのはジャンが呼び起こした女性とそれに結びついたすべてのイメージは彼女の存在からは切り離されていたものだからである。彼女はただジャンの感情のみを考えていたのだ。

二人は松葉の落ち葉の敷き詰められたその上を、そして濃い緑の湿った苔の上を歩いていき、ベル・アンスの浜辺に近付いたのだった。

「マックス……」

二人の各々に発せられたその名前は同じように二人の心を動かしたし、様々な反響を、そして未完で

ありながらいつも理解された交互の言葉などを呼び起こしたのである。

「あの若者たちは私の子供時代の仲間には似ていないよ……自分の息子に照らして青春というものを判断していたジャンは言った……自分の仲間たちはもっと勤勉であつたのかどうかは知らないが、彼らはもっと本を読んでいたよ。彼らにとつては女ももっと大きな重要性があつた。その女は本から出てきたんだよ。私は閉鎖的で煙草の煙で燻された少しばかり狭苦しいホテルのみじめな部屋部屋の栄養の足りないこの学生たちを思い出しているんだ。今日だったらこれらの者たちは、おそらくスポーツによつてもっと自然に近く、もっと反抗的だろう。自然は無益な言葉などではないのだ。野性的なものの中にもいいものはあるんだよ。確かにたまにはそこに戻っていかねければならないのだろう。」

「あら、あなたもよく知っているでしょうけれど、彼らの考えは……。」

「判っているよ。十五歳か二十歳の間にすべては消耗され、何度も燃え尽きてしまふんだよ。」

二人は浜辺に下りて、砂丘の陰に立ち止まつた。枯れて地面に倒れた松の樹が彼らに椅子として役立つた。そして太陽の最後の光がこの砂浜の窪みで彼らを温めてくれたのだつた。

「リモージュでは私たちはこんなに素晴らしい日々を持ったことは無かつたわね……ポーリーヌが言つた……互いに自分を見失つたり、また自分を見出したりする長い一日……それが私たちのレンズでの生活でしたわね。もっと後にあなたが工場を離れる時には、また私たちはレンズに戻りましょう。」

「私は工場を離れることはできないだろう。」

「どんなに年老いても？」

「駄目だよ。」

「それは残念なことだわ。年老いて、考えなければならぬことがたくさんあるというのに……。それとももしかしたら遅すぎるわ。あなたはレンズで、怠惰は有用なものだと言ったことがあったわね……。そして人生を自覚するために怠惰を自分の人生に混ぜ合わせなければならぬ、そしてそれが自分の自由なんだと、……。更に東洋のすべての智慧は怠惰を導き入れており、この智慧の小部分を取り入れなければならぬと、あなたは言ったのよ……。あなたはもうその様には考えていないの？」

「人生には私たちを凌駕するような突飛な力がある……。私たちを行動に駆り立てたり、愛させたりする力だよ。」

「工場にそんなに多くのものを与えること、それも狂気染みたことだわ。」

「愛もまた狂気染みているからね……。あの奇妙な意志、それは作られた諸々の写し姿(images tailées)の神秘というものだよ。」

∴

夕方になると黒い板製の小屋は赤い屋根の下で、室内が明るく照らされている。池の中で牡蠣が熊手で集められ、長靴を履いた女たちが麻のズボンを身に付けて、二本の指にはゴムのサックを付けて柳の籠を一杯にするのである。トランブラードの籠編み職人は遅くまで働くのだ。自転車は商人たちの店の敷居のところに集まったり鼻のように走り回っている。

ポーリーヌは玄関の扉を引っ張って開けた。

「食事にしましょう。」

「ちよつと行つてくる。」ジャンは反対側の歩道の所にデルノードを認めて言った。

「こんにちわ。」彼は言った。

彼は自分の生涯で二度ほど見たことのあつたこの親しみのある顔に一瞬微笑みかけた。一つの顔、一つの歴史、ある人格を持つて生きている人間を組み立てるのにはそれだけで十分だったのである。

「そうです、私たちはトランプブラードで三日を過ごすためにやつて来たのです。そしてブランシュ・ドラクルジーユのところに泊まつているんです……。この小さな街は夕方には活気を持ちますね。」

「その季節だからですよ。クリスマスの……。皆がクリスマス・イーヴのために準備するんですよ。」

「彼らはお金を稼ぐんですよね。」

「それは大したものですよ。」

「皆が？」

「皆です。戦争以来大変広まつたポルチュゲーズという牡蠣の養殖はマレンヌ産のものほど費用がかからないのです。いくつかの養魚池があれば、どんなに小さな所有者も、そして以前最も貧しかった者でも一財産を作るのです。」

「私はマレンヌ産のものが好きでしたよ……彼らはそのお金をどうするのですか。」

「ラ・グレーヴの国道まで出ると、デルノードは夜の闇のなかで新しい家を指さした。

「あれが皆が作っているものですよ。」

そして低い声で続けた。

「その客間は素晴らしいものです。そして食堂も。ピアノも、絹のカーテンも無いものではありません。ただその家は人が住んでいないのです。その後ろには一つの部屋と台所からなる離れが見えるでしょう。家族全員が住んでいるのはそこなんですよ。そして様々な習慣が守られているのです。」

二人は新たに村を横切った。ジャンは黙ってデルノードの言うことに耳を傾けていた。

「子供たちですか。彼らが学校へ行っているとは思わなくてください。彼らは養殖場で働いているのです。父親は実的な人間です。彼は子供以外に別の使用人は持っていません……。確かに素晴らしい車を持っています。それは容易に手の届く贅沢ですからね。一つの機械ですから。」

ポーリーヌは房飾りの付いた大きなシヨールで身を包んだ。そして両手を暖めるためにストーブの側に坐った。彼女の後ろには白い紙のシェードが大きなタッチで映し出していた素朴な造花で装飾された瀬戸物のランプが部分的にテーブルの上のはりえにしだの束を照らしており、花々の黄金色にアクセントを与えていた。彼女はシヨールの下の肩を屈めながら、回廊のほの暗くなった奥の方を眺めていた。突然彼女は立ち上がった。ガラス戸が開いて、デルノードの背の高いシルエットが現れたのだったが、彼は乱れた髪で頭が覆われており、垂れた口の下に隅に微笑みを浮かべていた。気品のある仕種で彼はゆったりした外套を脱ぐと、狩猟用のズボンと青いセーターを着て、ポーリーヌの手に彼の口髭でそつと触れたのだった。

「御主人様が私を晩餐に招いてくださいました。」

ジャンはいつもその新鮮さと魂の清らかさに驚かされて、自分の妻を眺めていた。微かな唇の震えが彼の口を生き生きとさせており、喜びの絶頂の後のように若返ったその顔の中で笑っていた。

「どうぞどうぞ、でも焼き肉とジャガイモしかございませんのよ。」

「私はアガートの焼き肉を知っていますよ、そして通りすがりにスーブの匂いを嗅いだものです。」

ひんやりとした食堂では葡萄の若枝が燃えてパチパチと音を立てていた。ポリーヌはとても陽気だったのでショールを脱いで暖炉に背を向けて腰掛けたのだった。このパチパチいう音が三人の会食者を暖め、寒さは部屋の隅っこに引っ込んだように思えたのだった。フェルトの上靴を履いたアガートはゆつくりとした歩調で、蟬引きした床の上を、背の高い悲しそうな姿で、優しそうな微笑みを浮かべて滑るように歩いていき、ポリーヌの前に御馳走の皿を置き、音も立てずに引っ込んだ。

「デルノードさんは繁盛している地方の内情を私に教えてくれたんだよ……ジャンはポリーヌを見ながら言った……貧しい人たちが豊かになると、恐ろしいのだ。人間は貧しくあるように作られているんだね。今までブルジュワたちはそれを理解していた、それで彼らは吝嗇なんですね。」

「私たちは、人々が裕福な生活に対して不器用なのを見て、ショックを受けたわけです……とデルノードは答えた……それは新しいことではありません、社会はいつも革命の内にあるのです。あなたは子供時代のことを覚えていますか。財産というものは最近のことで、不安定なものですよ。」

「この太陽の下では新しいものは何も無いと言われていますね、それはおそらく一つの気休めでしょう。しかしそんな事は絶対的に真実ではありません。ニューヨークやランブレードを見てごらんさい。あなたは労働が、そして知性が、更に機会が、科学と特にその応用の形の下で人間に、極めて迅速にあらゆる安楽さをもたらしましたが、それは非常に急速に人間を愚かにしているということを確認するでしょう。その警告の言葉は今ほど確実に私たちの祖先を驚かせることはありませんでした。それは恐ろしい

言葉です。人間の努力、その創造、そしてそれに結び付けられる数々の美德、つまり自我の眞の贈り物である慎ましく無意識の勇氣が結局のところは人間を墮落させるということが眞実ならば、人間には何が残るのでしょうか。」

「他には何も残らないんでしょうか。」

ポーリーヌは立ち上がった。そして彼らは皆回廊の方に戻った。

「ジャン、コニャックを出して下さらないかしら。」

ジャンは安楽椅子をストーブに近づけたデルノードのぼんやりした態度に気付いた。確かにラ・クルブルの森のあばら家に住んでいたこの孤独の男爵はある種の会話の習慣を失っていたのだった。その物言わぬ顔、その人を馬鹿にしたような顔、その知恵のあらゆる秘密の前でジャンは沈黙し、テーブルに二つのグラスを置いてから、おもむろに調子を変えて話しはじめた。

「あなたは今財産というものは絶えず動いていると言われましたね。しかしバルバザックではビュルゴー・デュペロンと二、三の成り金を別にすれば、百年も続いている金持ちの家が何軒あるでしょうか。ボンメレル家の様に二百年続いたものさえありますよ。これらの財産は戦争や革命、恐慌を通り抜けているんですよ……。」

「永い間昏睡状態に順応することが出来るのはコニャックという事業の特殊性でしょう。その取引人はその在庫が良質のものであって、年月を経てその価値が増加する一方では、その経費を削減することになるのです。その取引の関係が保持される限り、ある種の慣例と名声の權威がいつかは再び物を言うことになるのです。」

鑑識家に特有の仕種で、二人の男はゆつくりとクリスタルの内側から発散される香りを吸い込みながら、二本の指の中に挟んでいたグラスを静かに動かしたのだった。

「このコニャックはあなたにとっては興味があるでしょう……ジャンが言った……これはグラント・シャンパーニュではありませんが、やはり質が良くて、豊作の年のものです。一八三四年のファン・ボワなんです。ボンメル伯父の所有になるビーブルの土地の産物です。この独創的な人間は古い瓶を砂の中に埋め込んで保存してきたのです。そのやり方が悪いものではないことはあなたもご存じですね。私はブランシュの指示でその酒蔵でその発見をしたのです。」

ポーリーヌはジャンのグラスの方に身を傾けた。

「いい香りだわ……彼女は言った……樫とすももの樹の香りだわ……。」

デルノードはグラスを唇に持っていた。

「ファン・ボワは保存がいいんですね。この年のものを飲むことはめったにありません。この一八三四年のもので私の興味を惹くのはその質の良さと並んで、その不完全さですね。いくつかのグラント・シャンパーニュがいつも持っている葡萄の木の手は、バルヌリーの奥さんがすももの香りと呼んだスペインのランシオの香りの背後で消えてしまったんですね。その長所は欠点の直ぐ側にあるんですね。この木のデリケートな芳香はほんのわずかなことで、耐えられないワニスの臭いに変わってしまうんですね。」

「あなたはとても洗練された好みを持っているので、この様なコニャックを味わったり見分けたりすることができそうですね。それはボンメル氏の酒蔵長が言っていたように余りにも「特別のもの」です。けれどもこの酒がその素材を越えているのは非常に繊細で俗人には感知できないような特質によつてい

るのです。私は人間の努力と創造の意味は、それによって最も見すばらしいもののさえがその精髓に到達できる優れたものへの憧れの内にあると思うんですよ。あなたはボンメル家の無くなることはバルバザックの魂を傷つけていると確かに感じておられますか。けれどマルテルとかエネシーのような評価できる有力な商會がまだ存在していますし、それらはまったく質の確かな現代風のコニヤックを多数の人々の手の届くところにもたらしただけによつて、物質的な見地から、社会に大いに役立ったのですよ。」

「ボンメル家は消えることはありませんでしたよ。アルテュールが父の後を受け継いで居ますから。」

「アルテュールですつて。あの人はビュルゴー・デュペロン商會にいますよ。」ポーリーヌが言った。

「そうだよ……ジャンはポーリーヌを見ながら言った……アルテュールは二十年来ビュルゴー・デュペロン商會にいた。しかしその伯父の死後は父の會社に戻つてきているんだよ。」

彼はデルノードの方に向いた。

「ただアルテュールはビュルゴー・デュペロンの所で得た習慣や贅沢さと下等な取引の趣味を持つて歸つてきたのです。それを私はボンメル家の終わりと呼んでいるのです。」

「ボンメル家にも様々な習慣があります。それが彼に押しつけられたと考えなければなりません。今日アルテュールは彼の父に似ています。彼の父と同じく彼は上等のコニヤックを売っています。そしてそれをあまり多くは売っていませんよ。私はあなたがもう長らくバルバザックには行つておられないのが判りますよ。」

「そうですね。」

「あまり昔とは変わっていませんよ。」

「あなたはよく行かれるのですか。」

「直ぐ近くですからね。」

「同じ輝きを感じられるね、そう思わないかね、ポーリーヌ。」

「まったく同じではありませんわ。ここでは光がもっと強烈であるように思えます。けれどもその様な色調は、まるでその光が色を吸収してしまったかのようにもっと冷たいわ。」

「バルバザックまでお連れしましょうか。」

「有り難うございます、私たちはリモージュに帰ります。」

「車で一時間程です。午前中に行つて帰つてくれますよ。」

ジャンは立ち上がつて、ポーリーヌの方に一瞥を投げかけた。突然考え深くなって、ジャンは沈黙の後で言つた。

「いいえ、結構です。」

彼は食堂の入り口から外に出て、台所に入つていきながら、アガートに、もう寝室に下がつていい、玄関は彼が閉めておくと言つておいた。回廊に戻るために彼は中庭を横切つた。夜の闇の奥に乳白色の雲間からビロードのように滑らかな星々が輝いていた。彼はリモージュの星よりもっと生き生きとしたバルバザックの星のことを考えていた。

彼がナタリーと一緒に住んだ事があつたその親しみ深い小さな地方に決して戻ることはあるまい、それはおそらくは昔のことを知っている証人たちを恐れてのことなのだ。そして多分自分が自分自身の内に、自分が近寄ることの無かつた壁で囲まれた領域を失わずに居たかのように、もっと漠然とした感情

の所為であつたかもしれない。

V

アルテユール・ボンメルル氏はシゼの森を犬を連れて狩りをしたりすること、それに馬に乗っての日々の散歩も止めてしまっていた。九時には彼の事務所の入り口の舗装道路の上で彼の元氣な足取りの音が聞こえた。《皆さん、おはよう。》彼は愛想がいいが、支配人らしい口調で言ってから、事務員たちの部屋を横切って行つた。それから父から譲り受けた安樂椅子に坐つた。

壁には晩年のボンメルル氏の引き伸ばされた写真が掛けられていた。アルテユールの事務机には灰皿があつたが、以前はこの部屋では彼は喫煙を禁じられていたのだ。そして酒樽の板で作られた檜の床を覆っていたリノリウムの上にはラバ産のカーペットが敷かれていた。そして暖房器、電気、白いエナメル塗られた非常に明るい新しい酒の試飲室、それにグラスの戸棚と並べられた瓶の輝きがあるのだ。

「今朝は一リーヴルほどの位なのかね、ローズ君」

「ほとんど変化はありません、大体二百フランですね。」とその年取つた支配人は答えたが、彼の白い口髭は彼の生彩の乏しい眼から流れ出ているように思われた。

「面白い郵便物はあるかね。」

「はい、ございます、良い注文が。スエーデンの専売局から五万リットルの注文です。それと、ノルマンディーと北フランスから新しいグランド・シャンパーニュに対して二、三の注文があります。」

「確かにそれらの取引はいい加減にしてはならないよ。しかしそれらは面白いものではない。」

「これらの注文はそれでもかなりの額ではありません、アルテュールさん、そしてそれらは我が商會が信用されているという証ですからね。」

「フランスではこの極上のものに対する買い手がほとんど無いのだ。少なくともそれらは我々の名声を増大させていたものだからね。しかしノルマンディーやピカルデーの買い手たちは自分たちのカップにおいてこの素晴らしいブランドーを利用している。そして我々の名前は決して消費者たちには届いてはいないのだ。」

「これは確かな取引ですよ。良いサービスをすれば忠実なお客さんですよ。その人たちのためには宣伝する必要はありませんね。ポンメレルという名前だけで十分なんですから。」

「私が二、三の顧客に対してだけではなく、大衆にも知らせたいと思うのは正にこの名前なんだよ。どうして仲介無しでポンメレルの製品を売らないのかね。」

「確かにそうですね、アルテュールさん、しかしその質を保持することが出来ますか。」

「私はそのお金に対してその買い手に酒を与えるのだ。私はコニャックという言葉の価値を下げてくれないのだ。それに法律もそれを保護してくれている。そんな事はほっておこう。それだけのことだからね。私はうちのラベルに『フィーヌ・ポンメレル』として、輸出用には『ポンメレルズ・ブランドー』とする事にしよう。」

「スエーデンの専売局から注文を受けたのは『ボンメルズ・ブランデー』のことではありません。」
「君が櫛の樽に入れて送り出すコニャックが大衆のための混合酒になることになっていることを良く知っているだろう。私は自分でその混合酒を作りたいんだよ。」

「ボンメルがコニャックだけ、しかも最良のものを意味するのではなく、ブランデーをも意味するということが知られる日には、我々は大きな取引を失うことになるでしょう。」

「どうして我々は良質のブランデーを仕入れるのかね。インフレーションと共にあらゆる葡萄酒の所有者はお金を持っている。彼らは最早売ろうとはしないのだ。たった五年前には新たに所有者から買われたコニャックの一リットルは六フランだった。けれど来年の収穫に対しては十八フランということが囁かれている。我々は何処で買えばいいというのかね。」

「アルトゥールさん、あなたもご存じのように取引というものはいつも困難なものです。私はあなたのお父さんに、あなたを今誘惑している道に少し前進されたらとお勧めした時代のことを思い出しているのです。お父様は反対されました。今日になって彼は正しかったと思っています。」

アルトゥールは自分の頬を撫でて、疲れているように思われた。彼はローズの意見には親から譲り受けた性格から他人以上になびきやすかったのである。彼は議論によって、少しずつ彼を支配し、彼に父祖伝来の方針を取らせていたその家の秘かな力に対して反抗する力を除去するように努めていたのだと言われるかもしれないのだ。

アルトゥールはローズの消えるような声の内に逆らうことの出来ない力を感じたが、その力に掻き乱され、打ち負かされながらも、なおも反抗しながらその部屋の中を、少し子供っぽくはあったが、凶暴

な素振り歩いており、彼が着いた時に《皆さん、こんにちわ》という言葉を上から投げつけた支配人としての態度を急に失ったのだった。そして古典的な形の服をきちんと着こなしたキリツとした仕種で立ったままでいたが、それから威厳に満ちたビリツという音と共に、自分宛の個人的な手紙の封筒を破ったのだった。

「君の言うとおりだ、ローズ……私もそれはよく判っている……君とゆっくり話そう……私は夢を見ていたんだ……。」

一人の事務員が、一八七五年のグランド・シャンパーニュの所有者の到来を告げた。彼はスゴンザックからやって来て、アルトゥールの返事を求めているのだった。

「隣の部屋にお通ししておいてくれ、私が会おう。」アルトゥールが言った。

ローズの方に向けて突然厳めしい態度をして言った。

「私はこの製品を買おう。素晴らしいブランドだ。それで三十万フランの出費だが、いい取引になるう……。いいかね、ローズ、今朝は少し早く出発するからね。宗教会議のためにやって来ているテオフィール・サバティエがリモージュの牧師と一緒に我が家に食事に来ることになっているんだ……。今日の午後、私の妻が歓迎会を催すんだよ……。一杯の紅茶……。ブリッジになるだろう……。私は手紙にサインしに来る積もりなんだが、モニス夫人が、私もブリッジをやるように言い張るだろうと思うんだ。」とアルトゥールが脂ぎった頬にほんのりと皺を寄せながら言った。それはポンメルル氏の微笑を思い出させたが、落ち込んでいて目立たないものだった。

数日来、バルバザックのプロテスタント教徒たちの家では、提供する部屋部屋が風を通され、家の女主人たちは牧師や俗人たちを泊めるために、シーツを配ったり鍵の束を鳴り響かせていたのだった。

教会などで聖職者の費用に援助を与えるための手段などが検討された朝の会議の後ではいくつかのグループが、いつもは使われていない通路を賑わせながら散っていく。ただアルトウール・ボンメル夫人に招かれた者たちだけ、つまりパリからやって来たテオフィール・サバチエ、オラトワール派の牧師、そしてリモージュの牧師のフェリックス・デュクロ、それにアルトウールの友人でリモージュからやって来たポワレ氏たちはその町の外れまでその道を歩き続けたのだった。

以前はバルバザックの住民を驚かせたアルトウール・ボンメル家の美しい庭はその庭師たちの手入れにも拘わらず、木々が繁って自由放任にされたところがいくつもあった。そして満開のライラックとローリエが壁を覆い隠していた。ヒマラヤ杉はいつそう広大なピラミッドを形成して聳えていた。くましでの褐色になった背景の上で竹がデニス・コートンの東屋を隠していた。赤い小さなバラの一塊が蔓棚の上に繁っていた。そして邸宅はいつそう小さく思われたが、いつも翼と眼のところに黒い痕跡を持っている彫刻された竜で飾られている。

アルトウールは客間で新しいアルトウール・ボンメル夫人の肖像を眺めていた友人のポワレに近づいた。鮮やかな繻子の服を着た背の高い夫人は赤い漆の塗られた衝立を背にしてソファアに横になっ

ている。
「子供たちが望んだのですよ……自分の時代というものを理解しようとしなければなりませんからね……私はと言えば、書斎にあるカロリユス・デュランの肖像の方が好きなんですがね。マルグリットは

もつと若かったというのは確かですが。」

テオフィール・サバチエ氏は大柄であつたが、その小さな顔は灰色がかつた濃い眉で覆われており、白くて長い髪は彼の控えめな言葉にある種の飛躍を与えていた或る仕種で絶えず後ろに撥ねつけられていた。彼はアルトゥール・ボンメル夫人の肘掛け椅子の横に立つていた。彼女は静かな気品に魅了されたかのようにその優しさで彼に答えていたが、彼女がデュクロ夫人の方に向いた時には、その愛想のよい調子にはわかにかんだかくなつた。その元氣そうな態度、短い服にピッタリ合わされた体、太つた首筋の上で短く切られた灰色の髪などが、両頬の肉付きの良さにも拘わらず、反り返つた鼻や横顔にピツタリと調和していた。

アルトゥールはそのグループに加わつてサバチエ氏に言つた。

「息子が我々と一緒に食事をしないのが残念です。彼は今朝友人たちの仲間と出ていったのです……。まことに扱いにくい連中なんですよ……！」

ボンメル夫人は自分の夫に射ぬくような冷たい視線を投げかけた。

彼は善良さに満ちて、眼を客間の奥に反らしたが、そこでは三人の娘が、黄色の錦のカーテンの側の金箔の付けられた木製の小さな長椅子に坐つていた。

「そうですね、うちの娘たちです……一番年少の娘です……それに従姉妹がいます。」

微笑みながら彼女たちを眺めていたボンメル夫人は一瞥して牧師を指示して、突然眉をひそめた。直ちに元氣そうな手が膝の上のスカートを引き下ろしたが、嘲笑するような笑い声が耳打ちする声の中から湧き上がった。

黒のモーニングを着ており、太って灰色がかっており、尊大で人間味の乏しい使用人が客間の扉を開けた。それは三十年來同じ時間に、ゆつくりとしたアクセントの無い声で、『奥様、お食事の用意が出来ました。』と言ったアルノーであった。それから彼は自分の前を先を争って走っていった子供たちには目もくれないで、重々しく、静かな歩調で食堂に戻って、食器台の前に立った。東駅で保線区員兼看護兵を勤めていた戦争の後では、彼は以前の習慣を取り戻し、良家の流儀を忘れずにいたのだ。

彼は風俗の変化を良く見ていたが、相変わらずのやり方で、あまり育ちが良くない幼いモニクお嬢さんの腕の高さまでお皿を低くしたり、ワインを拒んで、お皿につぎ分けられるのを見ながらその度ごとに丁重にお礼を言う牧師のデュクロの躊躇いの前では平然としていたのだった。

彼がそこにいて念入りに髭を剃り、コンボート鉢の色をしたムースの中に蜜柑とアピ林檎のピラミッドを作ることができる限り、そして強いアクセントを付けた独裁的な調子で『マリスリーヌ、ムニユーを見せてくれないか。』と彼の妻に呼びかける限り、又食卓の給仕をするのに、白の手袋をはめて、若い女の使用人の手からほうれん草のクリームあえやほろほろ鳥の詰め物のお皿を受け取ったり、客から客へと、主人が自分でデカンタしたボルドー産のワインの瓶を持ち運んで、カモシカの革で磨いた銀製の食器が緞子のテーブルクロスの上できらきら輝いている楕円形の大きなテーブルの周りを一巡している限り、ポンメル家の基礎は揺らぐことはない。

五つの窓から少し冷たい光を受けている広大な食堂では、一時間の間、アルノーの視線の下で進展する世界にあって、古い使用人の習慣が生き残っていたが、そこではまた飾り気無い雰囲気、意味のない会話や大げさな微笑、そしてこの家の有名な料理の風味に秘かに心を奪われていた客たちの注意深い

仕種の上に重く伸しかかっていた。

喫煙室ではコーヒーが出された。食事で体が暖められたデュクロ夫人は片方の手の裏で両方の頬を撫でて、鏡に一瞥を投げかけた。そして片手にコーヒー・カップを持って窓に近付いた。彼女の眼は輝いており、褐色の髪を何も持っていない手で神経質そうに押さえようとしていたが、額の周りや、色づいた耳の上で膨らんでいた。彼女は秘かにベルトで締めつけられていたそのスカートを靴下の方に引き下ろしたのだった。

「奥様、あなたのコーヒーには砂糖が入っていないんじゃないやありませんか。」とビュルゴー・デュペロンの家に泊まっていた一人のノルウェー人が言った。「一つですか。」

「有り難うございます……有り難うございます……二つほどお願いします。」

彼女はコーヒーを一口飲んでから、そのカップを光の方に向けてから、夫の方に振り向いて、ニーム訛りで言った。

「私、このカップは知ってますわ。これはボーバトウーにあるものと同じですわね。フェリックス、覚えていらっしゃるかしら。」

デュクロ牧師はぶつぶつ呟きながらうなずいた。そしてポワレ氏が言った。

「この青磁はバルヌリーの最新の作品ですね、ご覧なさい、サバチエさん、何て美しい素材でしょう……！ この海の水の緑色の何とも言えない調子の内には、極めて正当なもの、自然だけのもののような過度の限界にまで達した完璧な点がありますね。」

「私はジャン・バルヌリーが良い趣味を持っていることを認めなければなりません。」とサバチエ氏が

言った。

「それは確かですね、……アルトウールが言った……ジャン・バルヌリーと私はお互いに自分の仕事では、如何なる犠牲を払っても質を保持するように努めているんです。」

アルトウール・ポンメルル夫人は、その言葉の中にビュルゴー・デュペロンの器用さに対する当てこすりを感したように思つて、眼を火のようにして、反論しようとした。その時可愛いモニックが彼女の腕にしがみついて耳打ちをしようとした。

「サバチエさんが今晚、お説教をなさるのを忘れたの、……彼女は小さな声で言った……もうじきその時間だわ。」

サバチエ氏は当惑顔の人々の前で微笑んでいた。

「あなたたちは来なくても勘弁してあげましょう。どうぞお楽しみなさい。それがあなたたちの年齢には相応しいことですからね。」

「私たちはこの若い者たちには匙を投げていますですよ。」ポンメルル夫人が言った。

「ほんとにどうしようもできない連中ですよ。」アルトウールが言った。

デユクロ夫人がサバチエ氏に近付いた。

「あなたはジャン・バルヌリーのことをまるで知り合いのようにお話されるんですね。私はジャン・バルヌリーの奥さんがとても好きなんですよ……！ あの方は私たち貧しい者の大切な援助人なんですからね。」

サバチエ氏は沈黙した。ポワレ氏が灰皿の上に葉巻の残りを置いて口を差し挟んだ。

「あの人はリモージュには直ぐには馴れなかつたんですよ。しかしこの夫人たちはあの人のことをとても評価しているんですね。ボンメルルさん、あの人はあなたの親戚の一人ではありませんか。」

「私の従姉妹です……つまり私の父が兄弟なんですよ……。」

デュクロ夫人は眼をサバチエ氏の方に上げて続けた。

「サバチエさん、あなたがリモージュにお出でくださる喜びを、いいえ、名譽と言わなければなりません、私たちに与えてくだされば、ジャン・バルヌリー夫妻に会うことができるでしょう。私の夫は……。」

サバチエ氏は時計を出してから、両眼を下げて冷やかに言った。

「ほんとは私はジャン・バルヌリー夫人を知っていました。しかしそれは同じ方ではありません。」それからアルテュールの濃い眉の下の青い大きな眼を見据えて、

「失礼しなければなりません。お暇する時間です。」

ボンメルル夫人は、客たちが客間を立ち去った後で、夫に対して一つの言葉や態度や忘れたことに対していつも小言を言ったのだった。

「あなたはあんなに強く主張するのは間違っているわよ。」夫人が鋭い声で言った。「アリーの宗教教育を行っており、ナタリーに対して大きな尊敬の気持ちを持っているサバチエの前であんな会話は場違いだわ。」

「僕はポーリーヌが好きなんだよ……僕の父は……。」

「男の人たちは何も見ていません。サバチエにショックを与えてしまったわね。」

「しかしデュクロ夫妻は……。」

「あの人たちは知らないわよ。」

「僕だって何を知っているだろうか。」

「私たちは知っているじゃありませんか。ねえ、アルトウール、そうでしょう。でもあれはとても嫌な話ですわね、私はもう誰にもそんな話を話してもらいたくないわ。」

門番が車を迎えるために鉄格子の二つの扉を開けた。そしてモニス夫人がそのガラス窓からカメオの様に美しい横顔を近づけてから、辛そうに息を切らして、重そうな体をや々と車から下ろしたが、他方では髪が褐色で敏捷で小柄の付き添い役の娘のマルトンが元氣良くハンドバッグとコートを取り上げた。彼女は客間に坐っていたが、体を真つ直ぐにして、上半身は肩掛けの下に隠してしっかりと支えていた。そして反論するのが好きなので、その会話に加わったが、喉から出てくる声は少しヴェールが掛かっており、時折は奇妙に昔の笑い声の爆発するような華々しさが立ち昇ったのだった。

「私はあなたと同じ意見ではありませんよ、いいですね、苦悩というものはいつも高貴であるとは限りません。この場合には私はその根底に、愛情と区別するのが難しい傷つけられた虚栄心があるのが判るのです。ある種の我慢がたい人々に対しては医者たちは一つの名前を付けていますね。自己偏執と虚栄心、不幸への趣味などが前代未聞の態度を誘発するのですが、それは偉大な外見を持ち、極めて執拗なものであるのですね……不自然な立場ほど抵抗力のあるものはないが故に執拗なのです……。これらの人々については多かれ少なかれ誤解され易いのです……。ジャン・バルヌリーはナタリーのもとを去

りました。彼は様々な理由があつたのです。」

「私は彼ら二人を知っています。彼はポーリーヌと結婚しました。ナタリーには我慢がならなかつたようです……。しかしバルバザックの私たちの世界では、バルヌリー以前に我慢がならない妻とか夫とかがいたのでしょうか……。離婚というものがあつたのでしょうか。」

「彼はナイーヴだつたんですよ。非常に若くして結婚しましたからね。」

「彼はナタリーを選んだのです。誰かに無理強いされたのですか。」

「若い男というものは選ぶのではありません。幻惑されるんですよ。そして後になつて判るんですよ……。忍耐強い人間と周りの者を墮落させてしまう様な不愉快な感情の喜劇を一生涯を通じて演じながら生きることもできるでしょう……。私はどんな事があつても他の人が幸福であることが好きです……。それは私にとつては一つの復讐なんです。」

「可哀相な幸福ですこと。」

「それを信じる風をすればそれで十分ですよ。」

「いいえ、絶えず自分の選択を修正し、自分が好きなように生きるために自分の道に不幸を撒き散らすことはいいいことではありません。離婚が許されることは法令で決定することでできます。その悲しい結果が防がれるということはありません。その夫や妻にハッキリと味方したりしなければなりませんし、或いは両方に様々な欠点が見いだされることになるでしょう。あなたは私のアルトゥールとの生活が容易なものだつたと思われませんか。……確かにジャン・バルヌリーは普通の人間ではありません。彼は妻を迎え、続いてその人を送り出し、また妻を迎え、また送り出します。彼は彼女に全財産を与えています。」

彼は貧しい者のふりをします。そして今度はバルヌリー商会の社長になりました。あの人の身振りは全て立派です。彼は何をしようと、他人に自分の道徳的な優越性を説得することができます、そして彼こそは一番最初に納得している人間なのです。彼もすべてのバルヌリー家の人々と同じく気取り屋なのです。私は青年時代にロベール・バルヌリーとその天才、芸術家的な趣味によつて相当に苛立たせられたものでしたよ。人は金持ちの時にはタナグラ（ギリシャの一村の名前、その古墳から発掘された精巧な陶製の人形：訳注）を買ったり、豪邸を建てることも難しいことではないでしょう。彼はたまたまいい時にリモージュとニューヨークの仲介者になりました。彼は関税をごまかすことを知っていました。彼の財産の秘密はそこにあるのです。そして他の者と同じように、自分に求められたものを売ったのです。」

「商人というのは自分に求められるものを売っているではありませんよ。人は商人に求めるではありません。商人が無理にあなただちに買わせるのです。」

「そうです、商人たちは自分が売っているものは美しいし良いものであるということ、他の者たちが売っているものは粗悪品であることを信じさせるのです。すべてはそこにあるのです。しかし私はリモージュの陶器が美しいとはまったく信じていません。私はむしろそれはひどいもので、ロシア人だけが満足できるものを作るんだということを聞いたことさえありました。」

「マルトン、……とお相手役の娘の方に向いて、モニス夫人が言った……今の話で、結婚したビビ・ロ口のためにお茶の道具のセットを買わなければならないのを思い出したわ。」

彼女は立ち上がって、アルトゥールを連れて、青い色の客間の方へ歩いて行った。

アルノーは音も立てずにテーブルの上にカップとグラスが載せられたトレイを置いた。新しくやつて

来た客たちに、ボンメレル夫人が紅茶とポルト酒とお菓子を勧めた。それから長椅子の上に、自分が肖像画の上でのポーズを取って横たわったのだった。彼女の周りには何人かの夫人たちが集まってきた。黒ずくめの衣装のアンナはもの静かで、その優しい顔を自分の髪の毛の柔らかな白と、頸の周りに巻き付けていたモスリンで包まれていた。他の夫人たちは黄色っぽい顔色をしており、こわばった特徴を持ち、微笑んでいるときでもその眼は悲しそうであった。地味な服を着た一人の未亡人は皺が一つもない額と悲しげな眼差しで、子供っぽい純真さを失わずにいたのだ。

青色の客間では羅紗の張られたテーブルがブリッジのために準備された。モニス夫人は金やダイヤモンドでさらさらする染みの多い手で機械的にトランプのカードを切っていた。彼女は鼈甲の眼鏡を掛けた。そして突然無表情で老けた顔つきになってカードを扇形に並べた。

ここでは軽かったりきつかったりする言葉、疑わしい情報、装われた優しさなどが、抽象的で外部の動きには無感覚である一つの世界では止まっていたのだ。時には啞然としたトランプの仲間の間で急に目覚めさせられたかのように短い小競り合いが沸き起こる。しかし直ぐにまた禁欲的なともいえる沈黙が形成され、一人一人はカードのイメージを覚え、上位のカードを数えたりするのに没頭しており、数字や基本的な言葉しか発せられることはないのだ。死のような沈黙が不眠症のように立ち上がり、一瞬トランプ遊びから離れて、ぼんやりとした眼をして、直ぐに追い払われる煙草の煙の中のグループに近付いて、またその計り知れない集中に戻っていくのだ。

突然ラッパの、そして苛立った犬の鳴き声、エンジンの振動の大音響が、モーターバイクの音に支配されて、その部屋一杯に広がった。

「窓を閉めてください。」

高い声や叫び声、そして笑い声などが近付いてきた。入り口の扉が開かれ、また激しく閉じられた。トレンチ・コートを着た若い男女が頭に何もかぶらず、髪をバラバラにして、襟を開いて入ってきたが、ハンドバッグや双眼鏡やカメラ、毛布などが腕にぶら下がっている。

「今日は、今日は……まだ食べ物は何がありますか。」

「さあ、皆さん、トランプをしている人を邪魔しないで、あっちに行つてらっしゃい。お茶やビールやサンドウィッチもありますからね……。」

ブリッジのテーブルから苦情の声が上がった。

「そんな事出来ません、止めましょう。」

アルトウールが喫煙室に逃亡することを提案した。しかし若い人たちは少し疲れてもう戻ってきていた。そして鏡の前で、両手で髪をなでついたり、ベルトを調整したりした。それから彼らは安楽椅子に身を落ちつけて、頭を背もたれの上で反り返し、両足を伸ばしていた。彼らは先ずは黙って煙草に火をつけてから食べ始めたのだった。

ボンメレル夫人が息子の肩に手を置いた。

「さあ、フィリップ、お友だちの世話をしてあげるのよ。」

「あのお嬢さんたちは自分でできるんだよ。」

戦争で一人息子と婿を失っていたアンナは、子供もなく、若者たちと氣を紛らせていた娘に近付いた。「お前、煙草の吸い過ぎは良くありませんよ。どこへ行っていたの。」

「ああ、お嬢さんは何もご存じではありません、アンナ叔母さま。彼女はずっと瞑想に耽っていたんですから。」

「奥さん……と痩せて筋骨たくましい、ひどく褐色がかった髪的青年が言った……僕たちはベル・アンズで昼食を食べました。そして勿論皆泳ぎました。水は冷たかったですよ。それから僕たちはコニヤックで休みました。そしてテニスとボート遊びをしました。あのクラブは素晴らしいですね。それから河でちよつと泳いでから今帰ってきましたんですよ。」

彼らは車やオートバイやサーキット・レース、そしてチャンピオンのことを話題にしていた。アルノーが礼儀正しく、重々しく姿を表した。そしてお皿やカップを、正に自分の立場にあつた人たちのように手慣れたやり方で片付けたのだった。

ある若者が立ち上がり、のんびりと部屋から部屋へと歩き回った。客間の開いた入り口から蓄音機のダンスの曲が聞こえた。

突然騒々しい足音がリズムに合わせて始めた。

「こつちにお出でよ、ロロ。」

すべての者が何も言わないで、しっかりと抱き合つたカップルになつて悩ましげにゆつくりとしたステップで旋回したが、それは回転したり、止まつたり足踏みしたりで中断されたのだった。

ブリッジをやっている者たちはテーブルから離れて、大窓の前に並んだりした。アルトウールは角の壊れたきついハイ・カラーから頸を出すのに頭を立て直し、金の鎖に貫かれたチョッキの下を引っ張つて、踊り手の平均の取れた動きを眺めていた。その踊り手は互いに頭を傾け合い、女たちの反り返つた

腰は若い男たちしつかりと抱きしめられ、足は真つ直ぐになり、両腕は剥き出しになっていた。

「それは魅力的だ……彼は言った……彼らは昔の身振りを取り戻しているんだ。」

モニス夫人は我慢ができないかの様にカードを置いて立ち上がり、自分の座席を退けて、柄付き眼鏡を開いた。

アルトウールの娘は、支那のクレープの上で背は透き通っている服でさらけ出して、片手でしつかりと支えられて、スポーツ・ウエアを身に着けたパートナーにピツタリと寄り添って、張出窓の前を通りすぎた。両足を絡ませて、腰と胸をピツタリくつつけて、二人は、平然とした顔をして、リズムカルに体を揺り動かしながら進んでいった。

「下品だわ。」モニス夫人は低い声で言った。

「あなたは気難しいのね、あの人たちはあんなに静かなのを見てご覧なさい。」

「本当に信じられない静けさだわ。」

突然騒々しく若い人たちがグループになった。また出掛けることになったのだ。そしてひどく興奮したフィリップが客間を横切った。

「早くしてよ、ミシェルとロロをアングレームまで送って来よう。夕飯には僕たちを待なくてもいいですからね。お父さん、お金ある？」

VI

リモージュやバルバザックでナタリーを知っていた人々は彼女のことを、少し軽く、突然神の恩寵に動かされて、或いは傷ついた恋人として、それとも単に固定観念に憑かれた一人の病人として、または絶対的な幸福が得られないために、拷問のみを受け入れる極端な天性を持つ女性の一人として考えていたのだ。ナタリーは自分自身や自分の人生について、少し変わっているが非常に正確な考えを形成していたが、それは絶えず作り替えられるが不変であり、いつも激しいものであり、かといって彼女の緊張した顔のように、厳しく、皺がないものだった。そこでは老年が近付いた言えるほどまでにフロレンス女の横顔のような端正な輪郭が残っていたのだ。つまり彼女はジャンを愛していたし、彼も彼女を愛していたのだ。ポーリーヌはポンメル氏の援助を得て彼らの幸福を破壊したのである。しかしナタリーはジャンが賞讃するものを保持していたが、それをずっと持ちこたえることは出来なかった。彼女は善であり、彼は悪だったのだ。彼女は忠実さを、そして家族を表している。彼女は何人もそれを奪い取ることが出来ない神聖なるものの守護者なのである。

外的な生活には決してしみ通ることがない者として、彼女には自己の肯定と永遠の観想を別にしては

何も存在しなかったのである。彼女は計算に基づいてしか耳を傾けない男たちと余りにぼんやりした女たちを避けていた。同時に彼女はその風がわりの人格が自分を不快にするような人々からは離れていたし、自分の気持ちが判ってくれると心で想像する様な話し相手を捜し求めていたのである。

彼女は遅くなつて少し静かで、自分自身からも解放された気持ちで目覚め、毎朝新しくして活動的で規則正しい生活を始めることを決心したのだ。

朝食後はゆつくりと外出するために着替えてから、何も見ないで通行人や車を避けながらメツシーヌ街を辿つて行つたのだつたが、彼女は自分が終日反芻していた変わらない思索と独り言に閉じこもるのだった。突然彼女はタクシーに乗り込むと、それは彼女をブルノンヴィル侯爵夫人の所に連れていった。

暗い鉄格子は木々の植えられた大きな庭を隠していた。呼び鈴が鳴らされると音もなく入り口の扉が開けられた。古い石で出来た小さな離れの敷居の上にはさも優しそうな門番が現れたが、彼は自分の役割に非常にびつたりだったので、現実離れしているように思われたのだつた。それからブルノンヴィル家の玄関が見いだされる。そして客間の大きなガラス窓の後ろには一人、二人と夫人の姿が陰のなかから浮かび上がつて来て、一瞬ガラス窓にハッキリと認められ、それから消えてしまった。たくさんの入り口があつたのにも拘わらず、廊下や客間は、その緞子の壁紙の上では枠だけが区別された古ぼけた絵で、薄暗かつた。

ラルマンディー家のマリー・ルイズはブルノンヴィル侯爵夫人の息子の嫁であつたが、戦争以来その義父たちと一緒に住んでいた。彼女はたちまちのうちにその家族の内に取り込まれ、その夫婦の幻

滅は、一つの名前と大きな社交的な役割が課していた義務と混同されたままであったのである。それに彼女の苦痛は、そこではあまりに実質的な背景の真ん中で人間の存在が非常に漠然としており、率直であるこの住居の中では具体的なものになることはあり得なかった。時折はこの著名な家庭では、地方から、或いは外国から移植された金持ちの生き生きとした血がその血統を若返らせることになったのだったが、ブルノヴィル家の青い眼と落ち着きと魅力的な無邪気さはいつも現れていたのだ。

マリー・ルイズは小説を書いていた。彼女がある小説家の妻のところで知り合いとなったナタリーは、その現実的で表現の豊かな悲しみの故に忽ちにしてマリー・ルイズの興味を惹いたのだった。そしてほとんど毎日のように二時間ほど、ナタリーは小さな客間に迎えられたのだったが、そこには自分の夫には内緒で本を書いていた小説家の妻も彼女たちに加わったのだった。そして時には他の部屋に呼び出されたマリー・ルイズの不在で中断されることもあったが、小説の一章が大きな声で朗読されたのであった。それを批評しながら打ち明け話をしたのである。ある者はその書き物を褒めるともう一人はその生活を賞讃するのだ。しかしその一人一人にとっては先ずは聞いてもらうことが重要なものだった。ナタリーは集中して熟っぽくなって自分の家に帰った。彼女は引き出しを開いて明けたままにしていたり、筆筒を空にしたり、下着を散らかしたり、部屋の中を歩き回ったり、セレスチヌを呼んでから、夜遅くなってすべての明かりを点けてから突然整理を始め、すべてを並べなおしたりした。

ナタリーは、自分の姉たちが結婚した時にはまだ子供だった。姉のフェルナンドはいつもバリに住むことを夢見ていた。セーヌ県庁で働いており、その両親はリモージュに住んでいたプロスペル・シャニエが彼女に結婚を申し込んだ時に、彼女は全く躊躇することはなかった。フィアンセとなって彼女が母

とパリにやって来た時、少し軽い興奮が呼び覚まされていた。プロスペルの余暇の時に、目に見える費用のことなどはまったく顧慮せずにいろんなアパルトマンを訪ねたのだった。しかしカペー夫人は家計の仕事を容易にする簡素さというものを褒めそやしていたのだった。少し幻滅したフェルナンドは次々に、パリ右岸や新しい家具を、そして小さな基盤目を持つガラス窓の扉で仕切られた白い部屋部屋を、エレヴェーターを断念し、サン・プラシッド通りの、少し破損してはいたが、手入れされていたアパルトマンに落ち着くことを受け入れたのだった。彼女はそこに田舎の小都会よりもっと狭い一角に、ほとんどそこを離れず、住んだのだった。しかしリモージュに戻ると、古い友人たちに羨ましがられて、自分がパリッ子の女であるように感じたのだった。

四人の子供が生まれ、彼女が養育てたのだった。一人一人を毎日のように彼女はベビー・カーに乗せたり、風船を持った手を引いてボン・マルシェの界限へと連れていった。彼女はそこに坐つて、指では裁縫をしたり、寒い時にはおやつの間まで彷徨い歩いたのだった。木曜日にはリュクサンブール公園へ行ったし、日曜日にはきれいなみなりをして六人揃って遠くまで散歩に出掛けたのだった。その時フェルナンドは体を真つ直ぐにして、悩み事や人との議論や月末の不安なども忘れて、穏やかな気持ちでプロスペルに並んで歩いたのだ。

二人の子供が結婚した。そしてフェルナンドは商会で働いている若い母親たちを援けるために自分の孫たちとの木曜日の散歩を再開したのだった。彼女は機械的な玩具で賑わっているデパートのショウ・ウインドウの前で立ち止まったり、エレヴェーターで下りたり、街中では各種自動車のブランドを見分けることを学んだりしなければならなかった。自分たちの責任事に没頭し、プロスペルの昇格の遅いの

を不安に思いながら、シャニエ家の人々はナタリーの嘆きには無関心だった。彼女は右岸の美しい通りにある豪華なアパルトマンに住んでいた。何の欠乏も無い苦痛というものをどうして信じることができるだろうか。

「彼女は厄介なことばかりを引き起こすんだ。彼女は自分の嘆きや恨み言やいつも同じことを繰り返す無用な議論でうんざりさせられているんだよ。」プロスペルは言った。

「的確に言わなければいけないわ、……フェルナンドが言った……彼女は悲しんだんだし、あんな打撃に耐える力が無かったのよ。」

「力が無かったって？ でもナタリーは疲れ知らずだよ。」

「私は精神的な意味で言ってるのよ。」

「彼女は悩みを抱きしめているんだ、それを目覚めさせたんだ、そして養っているんだ。それは彼女の誇りなんだよ。彼女には自分の家での良い仕事というものが無いんだ。」

「あの子は話したり、自分の気持ちを打ち明けなければならぬのよ。だから耳を傾ける必要は無いのよ、ましてや議論することなど無用だわ。」

食事が済んでから、家事が片づいてからフェルナンドは裁縫の道具の籠を目の前にして窓の横に坐った。群衆はけたたましい音を立てる乗合バスや小型自動車が行くつかの包みを抱えている。フェルナンドはこの凄まじさ、剃り上げた首筋、ほとんど何も身に付けず、泥のはねのしみが付いた靴下を履いていた、下品で浪費家のこの女たちのことを知っていたのだ。それに最近までは勘定台に釘付けになっ

ており、今は絹の服を着て自動車で走り回っていた女のパン屋と元氣な惣菜屋の女も知っていた。

彼女は窓を閉めて、自分の悲しそうな客間を、光らせることが決して出来なかった配置がまづい木製の家具や、すでに古くなって擦り切れていたカーペットや安楽椅子を眺めた。ここには耳障りな音を出す蓄音機を別にすれば、新しい豊かさを示すものは何も入ってくることは無かったのだ。毎週価格は上昇したが夫の給料は変化しなかったし、極めて注意深く確立されたその家の予算はどんなに厳しく儉約していたにも拘わらず、今やぐらついていた。けれどもプロスペルは自分の職業を守ることに固執し、苦々しうに用心深く自分の仕事を追求しながら、その安全性と退職金のことを話していたのだった。呼び鈴が鳴った。フェルナンドは扉を開けた。ナタリーが銀狐の毛皮を首に巻いて、入ってきた。そして片手を胸に当てて、玄関の戸棚に凭れ掛かった。

「あまり急いで上ってくるからよ。」フェルナンドは彼女を抱きしめながら言った。

「違うのよ……心臓なのよ……もう我慢できないわ……胸がドキドキするのよ……私が行くところ行くところについてくる苦しみなの……別に驚くことではないわ。」

「でも違うわ、ナタリー、五階まででしょう、当たり前だわ、さあ、お坐りなさい……お前に話があるから来るように言ったのよ……。」

「手紙を受け取った時、講演会に行くところだったのよ、それから直ぐ来たのよ……あの人のことなの、何か変わったことがあったの。」

「違うのよ。」

「あなたは判っているでしょう、私はいつもあの人を待っているのよ……あなたは私をどきとさせた

のよ。」

「何てお前はお馬鹿さんなのよ……フェルナンドは愛情をこめて言った……違うのよ……それは別のことだわ……。」

フェルナンドはナタリーを坐らせて、自分がその前に坐った。それから当惑したような風をして籠の中の裁縫道具を探した。

「私は仕事を続けていてもいいわね、私はやることがたくさんあるのよ。」

「でもいったい何なのよ。」

片手を震わせながら、フェルナンドは縫い始めたが、眼を下げて突然言った。

「アリーヌのことなのよ。」

「アリーヌですって？ あの子は病気ではないわよ。」

「お前はあの子のことを注意してやらなければならないよ。以前私はあの子をリセに行かせたほうがいいと忠告したことがあっただろう。その方がいい勉強が出来たと思うんだよ。あの子のことをもつと気をつけてやったほうが良かったんだよ。」

「私が気をつけるですって。でも私はあの子と一緒に勉強してきたのよ。あの子の宿題もやってやったわ……。リセに行つて、育ちの良い娘と一緒になればとんでもないお行儀を覚えていたかもしれないわ。あれはあの子に相応しい環境ではないわよ。あの子は人に使われる身分になるようには決められてはいないんだわ。」

「お前、落ち着きなさいよ、私は思い違いはしていないよ。お前は今お行儀のことを話しているけれど、

問題は本当にお行儀のことなんだよ。」

ナタリーは少し取り乱した風だったが、それは彼女がまるで現実に接触させられた時にはいつもショックを受けていたかの様だったのだ。

「私はあなたが言おうとしていることの意味が判らないわ。私はあの子にいい見本しか見せていないわ。」

「あの子はいつもお前と一緒にではないだろう。あの子はよく外出しているよ。」

「可哀相な子だわ、私があの子を無理にも私の側に引き止めて、絶えず私の苦しみの実例を押しつけることができると言うの。」

「あの子は夕方や夜に外出しているんだよ。いろんな所であの子は見られているんだよ、本当に悪い取り巻きに囲まれて……。」

「私はその情報をどこから入手したのか、その悪い取り巻きとはどんな連中なのかをあなたに聞きたいわ。」ナタリーが高圧的に言った。

「あの子がよく見られているモンパルナスの悪い仲間たちのことを言っているんだよ、家の子供たちが……。」

「ああ、それがあなたの子供たちなのよ。」

「私のすでに結婚した子供たちだよ、そうだよ。あの子たちは働いている。あの子たちは何か気晴らしを持つ権利がある……。いいこと、ナタリー、私は自分が言っていることが判っているよ。お前は気を付けなければならないんだよ。あの子の場合は子供らしい遊びなんだろう、自分でも判ってはいないわ。」

でもお前は注意してやらなければならないんだよ。」

「私は時間も心も持っているわ。それに力さえも……。男の子たちがあの子を連れていくのよ……。どうして私がその後を追うことができるでしょう。私はすっかり疲れたのよ。私は一人の娘を、父親に支持されたノーマルな条件下で育てることが出来ていたのよ、すべての尊敬すべき夫を持つすべての女たちと同様に。ジャン、私はあの子のことをどんな風に考えていたかを思うと……。あの人は英雄だったわ……。そのあの人は最も卑しい生活の中に落ち込んでしまったのよ。」

いつまでもジャンのことと自分の歴史のことを考えるのは止しなさい。お前は急いでやらなければならない仕事があるのよ……。本当に急がなければならない。お前には責任があるんだよ……。」

「私が責任があるって？ 彼女を捨てたのは私だというの？ あの子が家庭生活を持てないのは私の過失だというの？ 可哀相な子供だけであの子は若いし、美しい。それに愛らしい性格を持ってるわ。それなのに父親の罪の故に閉じ込められたり、罰せられたりしなければならないのかしら。」

「ナタリー、私はお前にそれを告げるのが私の義務だと考えたんだよ。以前にアリー又はよくここに来たわね。私たちはもうあの子に会っていないんだよ。それは残念なことなんだよ。私からあの子に言うわよ……。あの子はいい娘だということは判っているんだから……。」

「いい娘ですって？ あなたはあの子を知らないのよ。私はどうすることもできないわ、どうすることも。あの子は狡くて、嘘つきで、怠け者なのよ。いつも私を避けているのよ。あの子には心というものが無いのよ。私の悩みもあの子には無関係なのよ。」

「お前は自分の苦しみをあの子に見せすぎるわ。」

「あの子は家を去ること、逃亡すること……そして楽しく遊ぶことのみを考えているのよ。」

「若し家がもつと楽しければ……。」

「楽しい家ですって。可哀相に、フェルナンド、あなたは気が付かないのね。私にとって家庭は地獄だわ。私は悲しみに殺される女なのよ。」

フェルナンドは失望して裁縫していたものを落として立ち上がり、食堂のテーブルを準備しはじめた。

「子供たちが帰ってくるわ。私は孫たちにおやつをやらなければならぬのよ。お母さんたちが事務所から戻ってくるまで私が子供たちを見てやっているんだよ。皆私が準備してやるんだよ。お前は何もしなくていいからね。」

フェルナンドはそのアパルトマンの中を行ったり来たりしていた。彼女は再びその様な家庭的な仕事を見出していたのである。そして廊下を走り、ガス・レンジの前に立つ時、彼女は自分というものを感じ取り、それらの動きの静けさに確信を持ったのだった。彼女は扉を開けっ放しにして、疲れることを知らないナタリーの忙しげで哀れっぽい声を聞いていたのである。彼女は注意深く、ミルクやバターの分量を計ったり、サンドウィッチを切って、お皿に載せて食堂に戻ったりした。それからテーブルの周りを忙しく立ち回ったり、食器棚の後ろに姿を消したりしたが、他方ではナタリーは暖炉の前に立っており、鏡に写った自分の姿を見ながら、自分の周囲に起こることに無関心でありながら話すのを止めることは無いのだ。そして自分の顔の悲しうであつたり、誇らかだつたりする自分の表情を、そして怒った時の目の輝きや悲しんでいる時の優しさ等を見守っていたのである。そして子供たちは隣の部屋で遊んでいた。

階段の所で人の声が聞こえた。そして呼び鈴が繰り返して鳴らされた。

「お母さん、今日は、急いで、急いで、子供たちの準備をしてやって。私たちは今晚は外出するのよ。」

..

ナタリーは自分の娘を自宅で育てたいと思っていた。女の家庭教師たちはその子どものアリーヌに選んだ科目に興味を持たせようと努めていたが、ナタリーはその教師たちを独占し、彼らに自分の人生のことを話して聞かせたのだった。フェルナンドは十五才の自分の姪が何の教育もないのに気付いていたし、アリーヌがリセの半寄宿生になるようにさせたのだった。

いつも家の中で生活していたアリーヌは無感覚の固い殻の中で緊張させられていたので、外の空気を気持ち良いと思ったのだった。人々は微笑んでいるし、その身振りは静かである。叫ぶことはなく、人生の脅威や先天的な恥じらいなどを呼び起こすことなく話したのだった。彼女は自分が聞くことが不可能であると思っていた人間的な声に対して心を開いたのだった。

リセでは遊びの器用さとか優雅な身のこなし、その長い頸の上に誇らしく据えられたブロンドの髪の小さな頭の気品などが注目された。リズム体操の集まりや年末の園芸会の踊り手の役柄などのために引張りだされた。

食堂では容易に食傷ぎみになってあまり食べなかった。そして上級生がすでに勿体ぶった風をしていたテーブルの方を眺めていたのだ。その中の一人の、大きくて率直な眼差しをした褐色の髪のカミニツ

クが誰よりも彼女の気を惹いた。アリーヌは彼女に話しかけることは敢えてしなかったが、彼女に憧れていた。しかしアリーヌが下級生に輪舞を教えていた時に通りかかったりと、彼女は中央に直立して、両腕を頭の上で七弦琴の形に差し上げてバランスを取っており、自分のスカートを細い両足の周りに広げて、次第に速く回転させたりして、夢見心地の内にボーッと足元をぐらつかせたりしたのだった。また一人で廊下を歩いている時に、自分が読んでいる振りをしている本を片手に持って、額には自分の頭の上品な形を形成していたリボンをつんでいたし、一方では下級生たちが教室に向かつて急いでいた時には彼女は、自分がドミニックを認めるまで歩調を緩めていたのだったが、そのドミニックは深刻そうに独りぼっちで、読書に夢中になっているこの少女を通りがかりに認めてくれたのだった。

夕方には鐘の音が勉強室の生徒たちを我に返らせるのだった。半寄宿生たちは制服を脱いで、その一人一人は自分の個性を取り戻したのだった。アリーヌは最後に学校を出た。彼女は一人で帰っていった少女たちのグループに属していた。

アリーヌは楽しい気持ちを持たずに家に帰った。けれども通りや薄暗かった界限が怖かったので早足で歩いた。そこはすべての者が同じ仕事に打ち込んでいた温かくて静かな勉強室とは好対象をなしていたのだ。

開かれた引出しと布切れや手紙の包みで一杯になっていた箱の真ん中で、ナタリーは膝の上にメモ帳を置いて書き物をしていたのだった。

「アリーヌ、この服を畳むのを手伝ってよ……セレスティーヌは私のために何にもしてくれないのよ……私はこのアパルトマンで整理に明け暮れて人生を過ごすんだわ。」

母親が話すのを邪魔するためにアリー又は早口でその日の出来事を話したのだった。

「お前、リセでとんでもない口調を覚えたのね。門番の娘たちとしか会わないのね。私はお前が自分と同じような社会のお嬢さんたちと一緒に私塾のコースに参加して貰いたいんだよ。」

アリー又は勉強するために自分の部屋に落ち着いた。それから自分のノートを客間に運んでいった。しかしナタリーはどんな時にも入ってきたし、それから愚痴と忠告をまた繰り返し、出て行ってまた戻ってきた。

ある晩アリー又は泣きながら母の部屋に走り込んできた。

「私、いじめられたのよ。リセでは私、嫌われているの。」

「可哀相に、私たちは犠牲者なのね。お前のお父さんがお前を捨てたので、私はどうしても必要な犠牲を払わなければならないのよ。お前、ルロン夫人の塾へ行くのよ。」

海辺でのヴァカンスの後に、ある朝、アリー又はある朝、リセを追い出された十人ばかりの生徒たちの前でルロン夫人が文学の講義を行っていた香水の香りがする部屋に遠慮がちに入っていた。アリー又は太った手を動かして彼女に微笑みかけたロワゾーに気が付いた。ロワゾーは、最近異常に肥満しており、リセでは恐れられる存在であったが、スコットランド・ウールのセーターと、格子縞のスカートを履き、色褪せた髪の上に船員用のベレー帽を被っていて、すっかりきれいになつていた。

「ここは静かだよ、あなたも判るわね。今日の午後は何をするの。私と一緒にいらっしやいよ、でもあなたは化粧しなければ駄目だわ、余りに子供っぽく見えるんですもの。少し白粉を付けなさいよ。」

「私たちはどこへ行くの。」

「パレ・ド・グラスよ。」

そこは運動の内に集合の口実を求めていた迷える青年男女の避難所となっていた。銀色の円形競技場の縁にある手摺りに凭れて、アリーヌはまだ人の渦の中に溶け込めないでいたが、そこでロワゾーは突然大きくなり、目立っていたが、姿を消してしまった。

しかしアリーヌは急速にその講義から逃亡し、スケート靴の袋を隠して、疲れて太っていて父親の様な大柄の青年から車を借りることができるようになったのだった。

今では彼女は忍耐強く母親の小言に耳を傾けたのである。しかし電話の呼び出しや、車の警笛の合図には答えなければならなかった。その名前も知られていない若者たちの軍団が大きな裏地の付いた青い羅紗の外套を着て客間を行き来した。彼女は彼らの後を付きまとい、夏にはプールに、冬には氷の上に出掛けた。或いは駅のコンコースやモンパルナスにも行った。そしてどこであれ、人が集まれば、運動とイメージと蓄音器に気を紛らせるのだった。

「お前はこの頃は夕方外出するんだね。……ナタリーは言った……お前は私をひどく心配させているんだよ。恥ずかしいとは思わないの。」

ベッドに横になり、欠伸をしながら、本当には自分に向けて言われているのではなかった言葉に耳を傾けるのではなく聞くことに慣れており、結局は自分が望むことはすべてやってしまうことを知っていたので、アリーヌは空しい夢想の中で虚脱状態に陥っていた。そして自分が君、お前という言葉でやり取りしていたその若者たちの集まりの中で一つの、顔も思い出せず、自分がある中に愛情も本当の興味も投入していなかった野獣的な馴れ馴れしさに軽く触れるだけであつたが、それは彼女にとっては人生

の甘味のある単純さのように思えたのである。

彼女は男性の荒々しさとの接触や、気に入られようと心を砕くこともなく、精神的には守られていたが、その青年たちは我知らず、この素性の判らない仲間であるこの若い少女の冷やかな慎重深さを傷つけていたのだ。

..

光の広がりか土手の道の上に拡散し、木々の葉の落ちた枝を上から照らしていた。シャンデリアの輝き、大理石の上に激しく置かれる厚みのあるコーヒー・カップの受け皿の音、話し声、叫び声などがガラス戸を通りすぎて、カフェ・テラスを横切っているように思えるが、そこでは何人かの男たちが、パルトーでシツカリ身を包み、火鉢の周りで煙草を吸っている。

その中ではロシア人の女たちが、頭を何も被らずに高くして、寛いだ顔をして、髪を頸の上で束ねて低くカールさせて、刺繍を施された長い肩掛けの縁飾りを波の様に揺らせている。連れの男たちが早口のフランス語で際限もなく議論しているテーブルに肘を突いているルーマニア女たちの目に突然情熱が通過する。高尚で無造作で気紛れなアメリカ人の女、色とりどりの毛織物の服に身を包んだ金髪のスカンディナヴィア女たちが大胆に笑っている。何人かのフランス女たちが外国人の好奇心を示しており、不調和な声、鼻にかかった声、歌うような母音の声で、朗々と低い声で話している。無感覚だったり、興奮していたりする男たちが一人の女からもう一人の女の方に移っているが、親切そうなふりをしている。

そして直ちに口紅で化粧直しをしなければならない無関心の唇にキスしたりしている。

ドミニックは驚いたような目でこの集まりを眺めていた。日本人画家のこわばった髪や、ある詩人のオリヴェ色の顔色、もうじき三十才になる有名な太った娼婦などを教えてもらった。彼女は肉感的な音楽と二階のダンスの滑らかな音を感じていたが、彼女の視線はいつも、髪がブロンドで、賑やかな若者たちに囲まれた若い娘の方に帰っていったのだった。

ドミニックはそこを出る時に、彼女の方に進みよった。

「アリーヌ・バルヌリーさんじゃない。」

「そうです、そうです、確かにリネットですよ。」と若者たちの一人が言った。「どうぞお坐りなさい。」

「あなたは私が判らないと思います。」

長い間冷やかにアリーヌは化粧気のない顔を眺めていた。

「いいえ、良く覚えていますよ……。あなたはちつとも変わらないのね。」

「私はここに通りがかりに、お友だちやそのお兄さんたちと一緒に入ったんです。」

「私はよく来るんですよ。」アリーヌが言った。

「どうしてこんな所に来れるの。とても不愉快だし……。面食らわせるようだし……。」

「誰も慣れてますわ。」

「私は慣れることが出来ないと思うわ。それに他のことを皆止めなければならぬでしょう。」

「彼女には他のことなんてありませんからね。……アリーヌの仲間の一人が言った……彼女は昼間は眠っているし、私たちは集団を作って、彼女の徹夜のお相手をしてるんですよ。」

「私の家にいらつしやい、アリーヌ。ゆっくりお話ししましょう。火曜日のお茶の時間に待つてゐるわよ。忘れないでね。この直ぐ近くなのよ、ムシユー・ル・ブランドス通り三十八番地の二番だからね。」

「行くの。」

「多分ね。」

「誰かが付いていこう、面白いかもね。」

「私をほつといてよ、ポップ。」

「他へ行こう。あの娘は君を憂鬱にしましたね。」

扉の横でアリーヌは毛皮の襟を立てた。外に出てから彼女は一瞬冷たい空気に触れて立ち止まった。大通りではいくつかのグループが行き交い、呼び合い、カフェーからカフェーへと走っていった。連れが居ない者は頭を下げて、襟を立ててうろつき回っていた。

アリーヌは導かれるがままになっていた。力強い腕がその体をしっかりと支えており、反対側からは一つの手が彼女の元氣のない手を揺り動かしていた。

彼女の前では青年たちが終夜灯の明かりの下で、薄暗いダンスホールの扉を開いた。小さな部屋で一人の痩せた女が背もたれのない椅子に坐つて、髪を振り乱した子供のようなブロンドの髪を振りながら歌っていた。突然彼女は何も言わずに客たちの中に坐つて、彼らのグラスの中のブランドーに漬けられたサクランボを手を取つて、咳き込みながらむしゃむしゃ食べた。部屋の真ん中では、ピッタリとくつついて物も言わない人間の集団が音楽のリズムに合わせて、その場で動いており、まるで深い

酩酊によつて秘かに働きかけられたかのように代わる代わる膨らんだり、ちじんだりしていた。いくつかの沈んだ顔や髪的光沢が一瞬浮かび出たかと思うとまた集団の中に飲み込まれた。重い足踏みが床を揺らした。

アリーヌは身動きせずに、頭を壁に凭れさせて、虚ろな眼をして、自分の頸や剥き出しの腕を無用な愛撫に任せていた。

∴

「あら、あなたなの、アリーヌ・バルヌリー。お入り、待つてたのよ。」

ドミニックがアリーヌの両手を取つて、窓の方に引つ張つて行つた。そしてじつとその眼を見た。

「あなたが上つてきた時、私、これからやつて来ることになる人のことを思い浮かべようとしていたのよ。リセの可愛い踊り手さんか、モンパルナスである夜出会つた物憂げな女の子ではないかと……。」

アリーヌは視線を逸らした。

「私には判りません。どちらも違うように思います。」

「そうね、人は何処であれ、自分自身にはなれないものよ。私を見てご覧なさい……。もう見分けられないわ。ランプを点けましょう……。お坐りなさいな。」

アリーヌは何も言わずに、カーテンを閉めるために両腕を伸ばしている背の高いすらつとした若い娘を眺めていた。ドミニックはテーブルの隅にきんせんかの差した花瓶を置いた。それから微笑みながら

アリーヌの目の前に坐った。

「あなたは変わってはおられませんね。」アリーヌが言った。

「あなたの見方が悪いのよ。私たちの周りでも沢山のことが……私の内でも壊れてしまったわ。すべてが変わってしまったのね……。」

ドミニックは狭い部屋と、リボンで自分の首に下げられた銀製のユグノー教徒の小さな十字架以外には何の飾りも無い黒い服を見せた。しかしアリーヌはドミニックの顔、夢想家のようになったその率直な眼しか気が付かなかった。

「でも、以前はまったく違っていたわね。私たちは大勢だったし、つまらないことを面白がっていたわね……。」

「あなたは覚えていらつしやるかしら。」アリーヌは言ったが、ある子供っぽい表情が年の判らないその顔の上を通過した。

「ええ、覚えているわよ。あれは私の最後の気楽な……何の心配事の無い……幸福な年だったわ。お友達もいたし。」

「そうですね、あなたはお友達を沢山持っておられましたね。」

アリーヌは低い声で続けた。

「私、あの人たちは好きじゃなかったのよ。」

「どうしてですか、優しい人も何人かは居ましたのに……。」

「そうね、特に二人の人は……。」

「マドレーヌ・シストルとルシー・モーロンね……」

「私は一人ぼっちでした、誰も私を構ってはくれませんでしたから……。でもあなたを遠くから眺めているのはとても嬉しかったんですよ。」

「でもこのようにして会うことができたわ。」

彼女は立ち上がって、アリーヌの両肩を抱いて、陽気に接吻した。

「お茶を飲みましょう。もうお湯が沸いてるわ。」

ドミニックは生き生きとした仕種でアリーヌのテーブルに近づき、それから火の前に坐ってまだ熱い炭火にパン切れを差し出して、バターを塗った。アリーヌはコートを脱いだ。そして前が開きすぎた明るい服を着て、軽いハイヒールを履いていると余りにお洒落すぎる様に感じた。

「まあ、何てきれいなんでしょう。……ドミニックが笑いながら言った……私が恥ずかしいほどだわ。」

「からかわないでくださいな、私、自分は滑稽だと思っているんですもの。」

「あなたは煙草を吸うの？ 私もよ。煙草をお取りなさい。これが私の唯一の贅沢なのよ……。私、リセでは卒業以外のことを全然考えないで勉強が終えられると思っていたのよ。私の両親はこの年に亡くなったのよ。両親は自分たちの悲しみを克服することがどうしても出来なかったのね……。あなたは私の兄が戦死したのは知ってるわね。」

「いいえ、知りませんでした……。私は何も……。」

「私、一年ほど叔母のところまで生活しなければならなかったけれど、叔母はバリを去らなければならなかったのよ。私は一人が残って、この部屋を借りたのよ。勉強を続けるために、授業の時間の間、子供

たちの散歩の相手をしたり、外国人にパリを案内したりして、夜には何百という宛名書きをしたけれど、まるで監獄のなかにいるようだったわ。」

「そして今もそうなの？」

「私、文学士の称号を取ったのよ。博士号も取りたいわ。今は個人教授をしてるの。でも今では何とかやっていけると思ってるわ。必ず到達するわ。困難なことは物質的な問題に妨げられないようにする事ね……。時々気弱になることがあるわ……。」

「気弱ですって。あなたが？」

「私のような生活では足りないものが多すぎるんだわ……。」

二人は沈黙した。それから彼女は頭を上げて、短い髪を後ろに振りほどいて続けた。

「いいえ、私は泣き言を言っただけじゃないんだわ、今私がやってることはとても面白いのよ。」

アリーヌはゆっくりその言葉を繰り返した。

「あなたがなさっていることが面白いんですね、いいえ、あなたは不平を言っただけじゃないわ。」

ドミニックは自分が黙っている間は何かしら不安にさせるアリーヌを注意深く観察していたが、その化粧が透き通った仮面の様にその整った目鼻だちを覆っていたのだった。彼女は喜びも悲しみも無く、受身的にあらゆる飛躍、あらゆる感動を避けて自分を目覚めさせる身振りや視線を恐れるのに慣れていたのだ。

「それで、アリーヌ、あなたは私があなたの目的を理解するようにはならないということが判っているの？」

「私が？」

「あなたには面白いと思えるものが何も無いの？」

「良く判らないわ。」

二人は暖炉の前で離れてはいたが、近付いたままでいた。そしてアリーヌはドミニックがそこに入り込むのを断念していた虚しい幸福の中で麻痺していたのだった。その生活の未知のものの前で動揺させられて、ドミニックは立ち上がり、その部屋の中で音も立てずに、整理することに没頭していた。

二人が別れる時、ドミニックはアリーヌの肩の上に自分の温かい両手を置いたのだった。アリーヌは初めて自分が人に裁かれたり、拒絶されたのではないということを感じたのだった。彼女はこの開かれた両腕の間に身を投げかけることを望んでいたのかもしれない。しかしあらゆる自然の動きを逸らすのに慣れていたし、彼女は鏡の方に向いて、自分の顔に白粉を塗り直したのだった。

扉を閉める時に、ドミニックは彼女を引き留めたのだった。

「私、またあなたにお会いしたいわ、アリーヌ。また来てくれるかしら。」

「本当にそう思つて下さるの……？ おそろくね。」

..

牧師のデオフィール・サバチエはオラトワール派の教会付きに任命された時、彼は自分の新しい教区に住むことを望んでいた。彼は自分の信徒の熱心さと彼らの探究にも拘わらず、パンティエーヴル街と

ボーボー広場の間のミロメニール街に彼がずっと前から住んでいた広大なフロアーをそのまま保持しなければならなかったが、やっと維持される様なふるい家屋の階上にあつたのであり、それは混雑した狭い道に向かつていた両開きの巨大な門を持っていた。その住居の一部は彼の多人数の家族に占領されており、彼は非常に明るい中庭には大きくて天井の高い部屋を自分のために確保していたが、そこで彼は静かに集中することもできたし、客間で彼を待っていた訪問客たちを週に二度ほど迎えることも出来たのである。仮綴の八折り十六頁型の本で一杯になっていた本棚、宗教画の複製、黒い額縁に入れられた写真、彼が結婚させたり、その子供を教えたりして感謝している家族の贈り物などが色褪せた壁紙を覆い隠していたのだったが、彼は病人たちや瀕死の人たちの枕辺に侍して、苦しみや悲しみの中で厳肅に、父なる神の善意への同じ信頼の気持ちで彼らを導いたのであつた。

ナタリーは黒の衣装に身を包んで入って来て、暖炉の前を通りすぎたが、その上には、片手に剣を持ち、自分の信仰のあらゆるエネルギーにおいて凝り固まつていたコリニー提督のブロンズ像が載せられていた。彼女は腰を下ろすと、一瞬牧師と部屋の中の部分を分離していた大きなテーブルの前で身動きせずに居たのだった。

「牧師様、私は娘のことでお話したいのです。あの子が最初の聖体拝領を受ける時が来ています。ともかくあの子が宗教教育を始めることを望みます。あなたはあの子の来るのが遅すぎると思われるでしょう。しかしこの体格のいい娘は今まで少しぼんやり者でした。娘はとても良い心を持ち、非常に優しい天性を持っていますが、スポーツを好みすぎています……。それも止むを得ないことなのですが、娘の生活は私の傍らで悲しいものとなっています……。私は捨てられた女ですから……。生きている者の未亡

人なのですからね……。あなたはジャン・バルヌリーの名前をご存じでしょう……。」

「そうですね、奥さん、存じています。悲しい話は差し控えることにいたしましょう。悲しいかな、私はすべてのことを存じているのですからね。」

彼はテーブル越しにナタリーの方に手を差し伸べた。そこには黒くて厚い聖書、積み重ねられた雑誌、白い目のあるくすんだ色の大理石のインク壺などが置かれていた。彼はそれから指で髪をかきあげてから吸取紙の上に肘を付いた。彼はある種の職業的な必要性から悪の観念を認めていたが、それを目にすることに耐えることは出来なかった。

「いいえ、奥さん、それは無用なことです、私には判っています。」

しかし彼が苦悶に満ちた目をして、その長くて優しい手で遠ざけていたそれらの思い出はナタリーのすべての存在を構成するものだった。彼女はいくつかのイメージを思い浮かべて忽ち自分の中に閉じこもってしまったが、その変わらない色は、時に保護されて、その記憶としては余りに強烈であり、しばしば取り除く必要があった最初の力を失ってはいなかったのだ。彼女はそれが話したかった。

サバチエ氏は祈るかのように片手を自分の顔へ持っていたが、自分の義務はこの不幸な人々の言うことに耳を傾けることだと考えていたのだ。暫くしてから彼は立ち上がって、足音をひそめて部屋のかを歩き回ったが、まるで自分が歩くことでそれを妨害することを望まないある音楽家に耳を向けているかのように物思いに沈んでいた。彼はまたナタリーの目の前に坐って、聖書のなかの数節の刺繍が施されたカヴァーで覆われた安楽椅子の背もたれに身を凭れかけさせたのだったが、その椅子は、ある老嬢が自分が近づけるただ一人の男に情熱的になって贈った子供っぽい思い出だった。

彼は慰めの言葉をそつと口にすることを許してくれるような一時を待っていたが、ナタリーは初めは憔悴してしまったように思えたが、自分の悲しみを語りながら、どんな慰めも場違いであるかのように生気を見出していたのだった。

日が沈んだ。そしてランプを灯しながら次のように言うことが出来た。

「お嬢さんのお話に戻りますが（確かアリーヌさんと言われるのでしたね）、水曜日の六時の私の講義に寄こしてくださいませんか。特にお嬢さんの気持ちに逆らってはなりません……。」

ナタリーの弱さと習慣を知っていること、そして若さによる全能、祈り、頑固さ、威嚇、駆け引きなどによって、アリーヌは自分の独立を勝ち取っていた。しかし威厳こそ無かったが母親の権威がまったく無くなっていたのではなかった。アリーヌは人がそれから決して解放されることのない漠然とした慣例の力に左右されていた。時には避けることが出来ない訪問というものがあるのだ。ある種の身繕いは課せられるのだ。勉強はしないにせよ、講義に行ったり、ノートを持って行ったり、開いた本の前に坐ることはしなければならないのだ。

アリーヌは最初の聖体拝領の年齢は過ぎていたが、その儀式をいつも引き延ばすことは出来ないのだ。その様な慣習の違反は、習俗の革命が起こっているこの時代にも考えられることではなかったのだ。

「お前は今年は最初の聖体拝領を受けるんだよ。」

「はい、お母様。」

アリーヌを戸外に引きつけていたのは快楽への趣味でも特別の誘惑でもなかった。本当に彼女を楽し

ませるものは何もなかった。そして彼女は長い間同じ友だちと一緒にいるのが我慢がならなかった。彼女は自分を一人にさせず、何も要求することがない動く集団に身を投じることだけが必要だったのだ。そこで彼女は老人たちの喘ぎながらも口やかましい世界を、そしてその恐ろしい知恵を、さらに自分自身の個性さえも、それに親子関係や責任というものも忘れたのだった。彼女は若者たちの集団の中で無罪放免にされて眠り込んだようになっていた。しかし彼女が悪評判の烙印がおされてそこから出てくや否や、その鎮静された状態は停止した。彼女はすべての者に隠された非難と、自分に敵対し、不公平でもある判断を見抜くように思ったのだ。彼女は母親の長たらしい嘆きの内から次のような言葉しか覚えていなかった。《私たちは犠牲者です。すべての人々が私たちを嫌っているのです。》

そうだ、彼女はサバチエ氏の講義に顔をだし、週に一度だけその氣取った者たちの真ん中に腰を下ろすことになるのだ。しかし彼女はふてくされて、苛立ちやすく、外見を繕い、近付きがたい人間となるのだ。

オラトワール派の教会の正面の牧師館の三階の、褐色の壁紙の貼られた部屋で、若い関き手たちはサバチエ氏に主催された長いテーブルの周りに坐っていた。その左側には青年たちが陣取っていたが、その顔はまだ子供っぽくて、襟を開いており、濃い髪は一つの線で分けられており、両手はきれいに洗われていた。その右側には太っていたが元氣がなく狡そうな娘たちがいたが、彼女たちはすでに気難しく黄ばんだ小柄の老女たちに似ていた。それぞれが異なつた身分であり、貧しい者も金持ちもいたが、その多様な素性は服装の細かいところからやつと見分けられる様なものだった。

アリーヌがテーブルの隅に坐った時、リスの毛皮のコートを脱ぎ、柔らかなビロードの服と短い袖口

と肘の上に付けられていた彫刻された金の腕輪を露にした。誰も彼女に気付く様には思えなかった。ここに出席した者たちは皆同じような信頼感で迎えられたかのように、彼女に友情の気持ちを込めて話しかけたのだった。アリーヌは自分の周囲を見回すことはしなかった。そして同じくしながら緑のテール・クロスの上で爪にマニキュアをした自分の指だけを眺めていたのだった。

翌週には彼女は地味な服を着た。玄關に着いて、その小さな鏡で彼女は自分の白粉を付けない顔を認めたのだったが、それは蒼白くて病み上がりのように目立たないものだったし、それが自分を驚かせたのだった。彼女は他人の中でその様にして生氣に乏しくちこまったようになっていた自分を何者なのか疑いながら、テーブルの前に着席した。

ナタリーはいつもアリーヌの手紙を書いていた。サバチエ氏が洗礼志願者に求めた宿題をやってやったのは彼女なのである。その子供っぽい書体にすっかり麻痺してしまつて、アリーヌはやつとのことですの熱烈で、少し辻褄が合わない文章を書き移したのだった。

サバチエ氏はアリーヌの宿題の調子に驚かされたのだった。四月のある夕方のこと、彼はイエスの言葉の注釈についての講義《シモンよ、我、汝の手をとりて、汝が行くことを欲せざる所に導かん。》を終えてから、壁にピンで留められた地図と並んで、自分の後ろに掛けられていたコートの方に向かって立ち上がつて、アリーヌに向かって言った。

「私を待っていてください、私があなたをお送りしますから。チュイルリー公園を通って行きましょう。」

非常に短いオラトワール街は片側は全体が教会の地味な石によつて縁取られており、それに対して、リ

ヴォリ街のアーケードの下では、コリニー提督の雪のように白い立像が寄り掛かっていたが、それは鉄格子の後ろでオペラの衣装を付けていた通行人たちに会釈しているのだ。

サバチエ氏は車の間の通路を目で探しながら歩道の上に立ち止まった。古いルーヴル宮殿の地味な線と、行き来する交通路の車がちらちらする幅広で真っ直ぐな長い通り、ネオン・サインの最初の多彩な光り、そしてその後ろには蒼白い苔の斑点が付いた様に枯れた枝のぼんやりした群れとなつたサン・ジェルマン・ロークセロワのゴティックの林などが同時に目についたのだった。

彼が車道の反対側に達して、ルーヴル宮の中庭に入ることが出来た時には帽子を脱いで、ほんのりと埃っぽく青色で、その黒い建物の枠組みの中で震えていた大空の方へ目を向けた。車に轢かれやしないかという恐れの後で、そのだしぬけの沈黙は、足音さえも消えており、とても繊細な空を見させてくれた石畳のスペースの中で彼の心を捉えた。

庭園の中では狭い芝生と黄楊の生えた小さな丘が春の満開の時と次の満開の時の間の葉の落ちた茂みの地面を取り囲んでいた。突然フロックコート裾を翻すような仕種と共に彼は言った。

「最初の聖体拝領は私たちの宗教では遅くなるのです。というのは私たちは子供がその行為や誓約を自覚することを望むからです。あなたは何よりも第一に理解しなければならぬ次の言葉をしばしば聞いたでしょう。《我々は頽廢の内に生まれている。》若しあなたが自分の内にある悪を意識する時には、あなたは永遠なる幸福への道程の内にいるのです。若し悪が我々の内にあるにせよ、一つの声もあります……一人の友もいます……それに耳を傾けることを学びなさい……それを聞くのです……その時すべてのものは新しい誕生によって変容させられるのです……神との合一によって……」

彼が《頹廢の内に生まれた……》(nés dans la corruption) という言葉を発したのは、囁くような声でのことだったが、それはジャン・バルヌリーの娘に対して向けられた時には胸を刺すような悲痛なものだった。

アリーヌは彼から少し離れて歩きながら沈黙していたが、黄昏時にその庭を横断しているこの奇妙な二人連れを見ていたごく稀な通行人の好奇心に戸惑っていた。遠くからの通りのざわめきが和らげられて、規則的な間隔で聞こえてきた。そしてアリーヌは風通しはいいが不明確で、それで自分の孤独感を増大させる光の、心を奪ってしまうような円環の中に限定された空間に閉じ込められたように感じていた。

彼女は牧師が自分に示してくれた自分の両親のイメージに見覚えがなかった。そして自分の回想の内の何も自分の内に適応できるものはなかったのだ。彼女は自分に伸しかかろうとしていた偽りのヴィジョンに対して本能的な守りの姿勢で自分を取り消したのだった。

すでに数年前から彼女はジャンとナタリーを別れさせることになった理由というものをもう考えることは無かったのであり、自分の母親がしつこく呼び起こした状況の絶えざる回想を避けていたのだった。しかし彼女は絶えず途切れることのないドラマがその場所を持たないような生活を自分のために作り上げたいと思っていた。そしてその晩は牧師の高い声が彼女の生活の秘密のなかに入り込んで、特別な事情を知らず、人間の永遠なるもののみを知ろうとする宗教の名においてその秘密を歪めていたのだった。

「私たちは罪の子なのです……神は自分が愛する者を罰するのです……。」
アリーヌは両肩を曲げて、毛皮のコートを高く持ち上げた。

サバチエ氏はまだ黄金色をしている空の方に頭を上げた。そしてその空は紫色の陰影のなかに目に見えないその町を溶け込ませていた。どの様にして沈黙を打ち破っていいのかが判らず彼は突然自分の口調を変えたのだ。

「あなたはドミニックと付き合っておられるようですね。彼女は素晴らしい娘さんです。私は良く知っています。あの人は多くの長所を持っています。私はあの人があなたにとつてとてもいい友だちであると思います。」

突然我に返ったアリーヌは体を立て直して、興奮して上気した声で言った。

「あら、ほんとに私、あの人が大好きなんです。」

二人がチュイルリー公園の鉄格子の門の所に着いた時、コンコルド広場の雑踏が二人を止めたのだった。騒がしい車の間をするすると通り抜けなければならなかった。サバチエ氏はアリーヌを引き止めるために彼女の腕を求めて、少し躊躇った。彼女はすでに危険な通路の中に入っていた。それから前側にあった盛り土の上に立ち止まってから、群衆の中に姿を消した。

ロワイヤル街の光の輝きとカフェ・テラスの賑やかさの中で、彼女は夕暮れのいつものおのきをまた見出したのだった。心も軽く、やっと解放されて彼女は心を踊らせながら、ドミニックがたった一人で住んでいる家に出掛けていったのだった。

ドミニックの好奇心や判断、熱狂などがアリーヌの場合の押し殺されていた可能性を気づけたのであり、アリーヌがその女友だちを通してのみ、垣間見た禁断の世界の縁に彼女を近付かせたのだった。二人が時折散歩する時にはドミニックのクラスの仲間と出会ったが、彼らはドミニックの家までやって来て、夜遅くまで彼女の家にいて、哲学や芸術や政治についての会話を耽るのだった。アリーヌは黙っていたし、これらの議論では何も判らなかつたが、ドミニックの激しさやその表現の多様さは好きだった。

ドミニックはアリーヌが教会まで一緒に来ることを望んでいた。アリーヌは自分の女友だちの横に坐つたままであり、その礼拝には加わらずに、その態度を真似ていたのであつたが、少しづつその典礼の壮大で不変の展開に対する彼女の熱烈さと服従を感じ取っていた。ドミニックと腕を組み合せて互いに体を寄せ合い、アリーヌはその讚美歌集を開いたままにしておくのを手伝つて、二人は一緒にその歌詞を歌っていたが、その旋律は彼らを同じ感動の内結び付けたのだ。

サバチエの以前の影響と、最近のドミニックの影響下で、或いは別のハッキリしない理由の故に、ある日アリーヌは、倦怠と動揺によつて繋がれていた戸外でのあの輪舞が怖いものになつたのだ。彼女は電話で答えるのを止めた。忽ち友人たちの一群が散り散りになつてしまった。

アリーヌは家にいて、カーテンの無い窓の横に坐つて、いたんだ家具や品物に囲まれて、毛糸の玉で一杯になつた籠を足元に置いて、たった一人で編み物をしていた。以前の生活からはいくつかの癖が彼女には残つていた。朝遅く起きることと眠つたような態度がそれである。彼女は自分の注意力を集中することも、読書もできず、何も覚えられず、自分を臆病にするその生来の無能力には気付いていたのだ。彼女はまた自分が一人の男を、そして痛々しい混乱の中で最近あれ程親しく付き合つていた連中の一人

を愛することができないということも判っていた。

アリーヌは一人だけで家において、修道女の様な勤勉さと、自分が出来る良いことをその様にすべからず成し遂げたいという感情を持って編み物をする事が出来たのだった。編み針は迅速に動いたし、一列を終えるのに、針を変える時には肩がびくっと動いたのだった。そして黄楊の木の良い針が手の動きに従ってかちかちと規則正しい音を立て、その上に生気の乏しい顔がひたむきで催眠術にかかったような視線で屈み込んでいた。

サバチエ氏と話し合った時から、アリーヌは、この世には心を枯らしてしまい、精神を空虚にし、人を虚無に導いていく悪なるものが存在することを学んだのだった。そして心を生き生きさせてくれる良きものも存在するのだ。彼女はその本当の区別も知った。しかし自分があれ程長い間彷徨っていた通りに門を閉ざし、放棄してしまうことだけでは十分ではなかった。悪は自分の内にあったのだ。《我々は類廃の中で生まれた。》とサバチエ氏は言っていたのだ。

ひどく若いときに彼女は家の外に蒸発していったにしても、今ではどうして自分の中の思いを消してしまいたいと思ったのか判ったのである。

一人で客間で編み物をしながら、時々その危険な力が蘇って、彼女を恐れさせていたある感情を意識させるのだ。彼女が入り口の扉の鍵穴で鍵の音を耳にしたときには、彼女は頭をいつそう屈めて、針の動きはひどく苛立ったものになる。彼女の母の顔は、そして自分が我にもあらず目で追っていた余りに知りすぎている彼女の挙動、彼女の声はアリーヌを立腹させるのだ。彼女は編み物の速度を速めて唇をかみしめる。その窮屈さの下で高められた苛立ち、不自然で訳の判らない嫌悪感、それが彼女の肉体を

痙攣させる。一方では彼女は坐つていようと努めながら、少しずつ指の動きにある種の痺れを感じるのだが、それは進行している列車の中のように、精神は到達するべき目的の感じと共に、様々な思いの輪郭の中で散り散りになってしまうのだ。つまり次に何処で止めるかと、針に課せられている列の数とかなどがそれなのだ。

彼女は自分を支配して、ドミニックが生きていた優れた世界に参加したという考えが、食事中のテーブルの側に居させて、ナタリーが溜め息を突きながら、読むふりをしている本のページをめくる音に耳を傾けて、一夜を耐えるのを助けてくれるのである。

..

すでに数週間前からフェルナンドは、ボージョン病院に入院していた昔の日雇いの使用人の女を見舞いに行きたいと思つていた。そして指で地下鉄や乗合バスの路線地図を辿つてみて、自分がメッシーヌ街の周辺を通つていくことに気が付いた。彼女はその時を利用して、妹が先日 of 会話をちゃんと理解しているかどうかを確認するためにナタリーの家に行った。ナタリーがアパルトマンを変えるかもしれないという考えが彼女に気詰まりな満足感を与えていた。

フェルナンドは張り切つて、引出しから新しい手袋と、金属のイニシャルを持ったハンドバッグを取り出した。彼女は少し流行遅れの褐色のフェルトの小さな帽子の上に組み合わせられたリボンの花模様をあしらつていた。食事の後直ぐに彼女はモロッコ産の栗色のクレープの服を身に付けたが、それは特

別に詭えて作られており、体を包むのには十分なほどゆったりしており、滅多に身に付けるチャンスは無かったが、用心して長めに作られていた。そして頸の周りにはベージュと褐色の線の入ったシヨールを巻き付けたが、それはきらきら光るピンで留められたブローチで支えられていた。そして控えめの優美さを心地よく感じながら、彼女は踵が低いブーツの所為で太った踝が痛んでいたのに、行動的な女性の断固とした足取りで、真っ直ぐ歩いてバス停に向かった。

「何の御用なの。」ナタリーは客間に入ってくるフェルナンドに向かって言った。

「別に何でもないわよ、ボージョン病院からの帰りなの。それで通りがかりにお前に会いに来たんだよ。」

彼女はアリーヌを抱きしめてから、ナタリーに向かって言った。

「お前、ジャンの伝言を忘れてはいないわね。」

「ジャンにお会いになったの。」

「確か私は一週間位前のある午後、私の家でお前に言ったわね。」

「ジャンにお会いになったの。」

ナタリーは忽ちのうちに、無意識に自分の心から無用な夢としての外面的な現実の侵入をすべて退けていたのだ。

その奇妙な忘却の能力の内に悪意しか見なかったフェルナンドは苛立って言った。

「しかしあの伝言は重要なものだよ。お前、はつきり覚えているだろう。バルヌリー商会は深刻な危機に見舞われている。それは直ぐに判ることだよ。あそこのお得意はアメリカ人だからね。この危機は長

引くだろう。それは明らかだわ。ジャンはお前の年金を減額しなければならないのよ。お前はこのアパートマンを出なければならぬわ。そして他の人と同じようにするのよ。」

「あなたもアパートマンを変えるの？」

「私のは小さいし、家賃も高くはないわ。あれ以上のものは見つからないと思うのよ。それにプロスペルは公務員でしょう。この数年間、生活費は日増しに高騰していく時に、公務員の妻であるのは楽じゃないのよ。」

「そうね、でもあなたには旦那様があるわ。なのに私からは自分のアパートマンも取り上げたいと言うの。私はあなたを困らせているわ。恥ずかしい思いをさせているわ。私はここで忠実に、非難されることのないような生活をしているわ。私は家庭を持ちつづけて来たわ。ジャンは後悔しているわ。それであの人は私を飢えさせ、圧殺したいのよ。あなたはあの人と陰謀を企てているのよ。あなたの嫉妬心も私の義務感には勝てないわ。私はここに止まります。」

編み物をしながら、アリーヌは聞いていた。若し彼らが貧しくなれば、彼女が働かなければならないだろう。ドミニックが非常にしばしば勧めていたように、彼女は自分の家を避けるために働くことを夢見ていたのだった。しかし自分の何も知らないという気持ちと漠然とした怠け癖が彼女を引き留めていたのだった。必要ならば奇蹟が起こる可能性もあるのだ。

「いけません、アリーヌ。お前は働いてはなりません。私は良家の妻です。私はジャン・バルヌリーの妻です。私が株券を渡したとき、私はあの人を信用しました。だから、あの方はそれに対して義務があるのです……。私はお前を育て上げました、お前に自分の生涯を捧げました、そして幸福というものを

教えました。お前の傍らで名譽の貞節の模範を示すために、たった一人で病気であれ、不幸であれ、ここに止まってきたのです。その報いがこれです。お前も私を捨てようとしているのね、お前も……。そして私を十字架に掛ようとしているのよ。」

「いいえ、お母様、私は決して捨てたりはしませんわ。」

VII

狭い部屋の中で、非常に大柄で、白髪であり、痩せてはいるが肩幅はいつも大きかったジャンはフェルナンドの前に立ったまま待っていたが、それから彼女の方へ長い両足を伸ばして坐った。そしてその顔は悲しそうで、声は低く次のように言った。

「アリーヌのことであなたと話すためにお会いしたかったんですよ。人に聞いたところではあの子は明日ディアコネーズ（女執事…新教の或る宗派で、救済事業に専従する女性のこと。訳注）に任命されるということですが、本当なんですか。」

「ええ、本当です。」

「あなたはこの決心をどの様に考えておられますか。彼女は自発的に決心したのでしょいか。」

「まったく自由な決断です。」

「一つの悲しみ、……或いは何らかの介入ということは無いのですか……。」

「あの子は大きな悲しみを味わいました。あの子はドミニックという名前の女の友だちがありました。それでその人は人生における唯一の喜びでした。ドミニックは昨年病院で痛ましい状態で亡くなったの

です。アリーヌはその最後までその人の枕辺に付き添ったのです。それからあの子は病人を看護しながら神に我が身を捧げることを決断したのです。あの子はまず救世軍のことを考えました。しかしテオフィール・サバチエがディアコネーズへの道へ導いたのです。一年前からあの子はルーリー街の修道院で見習いをしていました。その儀式は明日行われるのです。」

「あの子は何処へ行くのですか。」

「私は知りません。女執事は自分たちが派遣される所へ行くのです。」

「他には動機は無いのですね、確かなんですね、どうかそれを教えてください……？ あの子には考えが無いんでしょうか……。何といえがいいのでしょうか。私に関係しているような考えが……。？ 私に関しての思いはどんなものなんでしょうか。それが優しいものではないことは判っています……。？」

「あの子は自分の感情については何も言いません。それを穿鑿する必要はないでしょう。でも私はそれが悪意を持ったものではないことは保証することが出来ます。」

「私は幻滅があの子とその道に導いたのだとは思いたくありません。」

「幻滅ではありませんよ……。他に進むべき道は無いという考えですから……。あの子にはそれが一番単純なことであるというのは確かなんですからね。あの子は非常に幸せな気持ちになっています。」

「私はあの子に会ってみたいと思います。」

「いいえ、その必要はありません。それは不可能なことです。今はその時ではありません……。」

「私には沢山の結び合わされたものがあるように思えるのですが……。」

「そのすべてはあの子のやり方で解決するように任せましょう……。私はあの子を深く愛していますか

ら……。長い間あの子は少し浮かれていましたからね。それから私たちは仲良しになったんですよ。でもあの子は悲しそうで……。迷っているようでした……。それで私はあの子のことが心配なんです。今ではあの子は美しくて晴々とした顔をしています……。心には喜びがあるのでしょうか……。私を幸せにしてくれる確信があるんでしょう……。あの子の横にいと確かに確信させられるんですよ……。」

「私はあの子に会ってみたいのですが。」

「いいえ、いけません。あの子を静かにしておいてやってください……。その本当の気持ちの中に……。あの子は話すことが出来ません……。あなたはあの子を臆病にしていますよ。それは良くないことです。」

「あの子の母親はどうしていますか。」

「この出来事はナタリーに影響を与えました……。或いは年齢の所為なんでしょうか。ほとんど急に非常識な、そして人を不快にさせるような肩苦しさが、彼女の強迫観念が無くなりました……。そうですね、彼女がこの直ぐ近くの小さな家に住むようになってから、彼女の内の何かが和らいだのだと言えるかもしれません。初めて彼女は生きている……。人間となっているというか、誰でも彼女に話しかけることが出来るのです……。」

「彼女はこの通りに住んでいるのですか。」

「この家の側を横切った通りに住んでいるんですよ。」

「しばしば会われるのですか。」

「毎日会ってますよ。」

「そうですか、それじゃあ私に会ったと仰しやいますね。」

「リモージュでは商売は上手く行っていないんですか。」

「ええ、少しも上手くは行っていないですね。誰もどうしたらいいのかが判らない時機に来ているのです。私たちは二十の炉のなかの三台で戦っているんですよ。あなたはナタリーに、今彼女が受け取っているだけのものは続いて送ることが出来ることを願っていると伝えてください……。私はそれを望んでいるのですから……。四つの工場は閉鎖しました。私はオペラ街の不動産を処分するためにパリにやって来たんです。そしてあらゆる経費を節減し……。それから時機を待つんですよ。」

「それじゃあ直ぐにリモージュにお帰りになるのですね。」

「明日の夕方か、明後日に……。」

彼は自分に固定されていたフェルナンドの黒い目を避けるために頭を反らした。

「私はアリーヌに会わずには出発したくはないんですがね……。」

∴

ジャンは一瞬ルーリー街の、高さが不揃いの孤立した家々の間を真っ直ぐ辿って、車道を横断し、この十一月の穏やかな日に全ての窓を開いていた女執事館の前で立ち止まったのだった。

彼は両開きの玄関の大扉を押して、がらんどうの中庭と赤い安楽椅子を備えた人気のない客室と横切り、礼拝堂の方に向かって行った。彼が入り口の扉を開けた時、会衆たちはアンブロワーズ・パレ（十

六世紀の有名な外科医、…訳注）の聖歌《幸ある日ぞ来たれり。》（La voici l'heureuse journée!）を歌っていた。ジャンは入り口の横に立つて、その小さな会堂を一杯にしていたぎつしり詰まった会衆の中にアリーヌを目で探した。確かにアリーヌは第一列の青い制服と白の被りものの漠然とした塊の中に坐っていた。

牧師が祭壇から下りてきて、聖体拝領のテーブルの前に坐り、十字を切ってから言った。

「アリーヌ・バルヌリー、あなたはあれ程大きな犠牲を払われて我らを贖われた神なる救世主への感謝の気持ちに貫かれて、女執事としての奉仕を通じて、神の所有物であるあなたの肉体と精神を神に捧げんと望みを自覚しておりますか。」

ジャンは心を締めつけられて、両眼を、牧師の真ん前に直立して、自分にはその白い被りものしか見分けられない女性の横顔に釘付けにしたが、静けさの内に少し震えていて、突然懐かしいものとなった一つの声を耳にしたのであり、それは次の様に答えた。

「はい、神の恵みによって。」

「アリーヌ・バルヌリー、あなたは神と合一した女執事の名前と教区の予備会議の方針に従って、評議委員会の指導の下で、あなたを使うことが適切であるとされている場所と仕事において、神と貧しき人々のために課せられる義務を受け入れる心構えが出来ていると自覚していますか。」

「はい、神の恵みによって。」

牧師は両手を伸ばして言った。

「慈悲深き神よ、救世主キリストよ、虐げられ、重荷を背負わされた者たちの友よ、勇氣と愛情を吹き

込む精霊よ、我らはあなたの教会のこの娘をあなたの真理の証人となすべく呼び出されたあなたに感謝します。彼女の内に、それによって古きものは消えてしまい、全てのものが新しくなるあなたの恵みを普く広められたまえ、彼女をあなた自身によってあなたの比類なき奉仕に捧げられ、彼女の生涯のあらゆる日々にわたって彼女を支えたまえ……。」

ジャンは涙に濡れた自分の目を逸らし、息を詰まらせている会衆の方に向けた。そして前方に身を屈めて、悩ましそうでまるで天啓を受けたかのような忘我の状態で自分の娘の方に向けられているナタリーの横顔を認めたのだった。彼は見つけられて、瞬間的には非常に純粹ではあったが世俗的な感情にかき乱されるのを恐れて、頭を垂れて、音もなく隣人から離れて、その教会から外に出た。

VIII

ジャンは二つの世界における企業の危機を予測していた。しかしその危機が現れるや、彼は自分の恐れていた危険には気付かなかった。現実の前で彼は盲目であつたのである。彼がその重要性和その後の結果も判らなかつた事件は彼にとつては相変わらず抽象的で、単なる会話のきつかけであるのに変わらなかった。

彼が《危機》と呼んだものは、アメリカからの注文が減少したのに気が付いた時、新しい局面を迎えることになった。しかし極めてわずかの利益でさえも注意を駆り立てる何とか許せるが有益でもある試験なのだ。そして突然悪弊が見出されることになるのだ。

彼が新工場を閉鎖して、まだ多数の人がいた古い工場に後退した時、自分の治療よりも以上に自然の力や熱の具合を信じさせる医者への信頼感と共にその最悪の事態を考えたとを想像していたのだ。それは父祖伝来の冷静さ、自分の内に無限の過去、その奇蹟的な血統、そして自分の復活の無意識の回想などを秘めているあらゆる生き物の樂觀主義によつて支えられていたのだ。

結局彼は雇ひ人の数を減らし、十八の炉を消してしまわなければならなかつた。彼は今や何の目的も

持たない大胆さや頑固さを放棄して、新たな反省に従い、夜の内に後退し、理解することを止めなければならなかった。

近頃は彼は労働者の不足に不安を感じていた。そしてその欠乏に対処するために機械を装備したのだった。突然それらの機械は数が多すぎるようになった。

彼が追跡するものはもう帰っては来ないだろう。しばらくの間は救済金を受け取った労働者は自由であり、ヴィエンヌ河の辺で園芸をしたり、魚を取ったりするだろう。それから彼らはリモージュを去っていき、長年の実践によって培ってきて、しばしば完璧であり、何世代をも通じて伝えられてきた陶器製造職人のしなやかな仕種を忘れてしまうだろう。

バルヌリー商会に再生の可能性を保持するためには全てをその持続に従属させ、人々を犠牲にして、握りの人たちだけを最後の窯の側に残して、出来るだけ多くの人を辞めさせるために心を砕かなければならないのだ。

その本能的な意志はジャンにあつては何らの議論も疑問も生ぜしめることはなかった。彼は信念を持ってそれを甘受したが、その犠牲者でもあったのだ。彼は国家の徴収に対して十分な準備金を準備することも出来なかったのだ。しかし彼は工場を閉鎖して、家族のためにほとんど無駄な執拗さの内に、溶解してしまう恐れのある資本を救済することは出来ただろう。そしてその資本が汲み尽くされてしまえば、彼はもう何の頼るものも見出さないであろう。彼には必要な法則が適用されることになろう。

今まで給料の増額を拒否し、その利益を意のままに用い、多くの反対にも拘わらず、後には余計なものとなる莫大な工場を建設した時に、彼は無知な人々の善のために行動してきたと信じていた。バルヌ

リー商会は彼にとっては、いくつかの伝統と共に消えてしまうことになる企業的な芸術におけるユニークな完全さのみならず、多数の家庭の団欒に容易さをもたらす手段をも意味していたのである。彼は様々な恩恵を与えずに、犠牲を要求するような自然の根本的な不正というものを決して容認しなかった。彼が青年時代と同様にまだ今でも、《人間が消すことが出来る過失は人間からのみ出てくるのだ。》と考えていた。しかし彼は自分の過失を消去し、他人を和らげるのに苦勞しているのである。人は様々な言葉や良い思いつきなどで慰められるのだ。ジャンは言葉や仮面や、自分自身に対するあれ程多くの逃げ口上や自己満足を許す内面的な生活の容易すぎる満足でさえも警戒していたのだ。おそらくは遺伝的な性格によって彼は、どんなに慎ましいものであっても、何とも定義できないが絶対的に確かなものである価値を、物質的な行動や行為による贈り物に与えていたのだった。

現在では彼が他の者たちの善のために与えていた役割は、自分が救済することを望んでいた人々を深淵へと撥ねつけるようにさせるのだった。その権利の保持者から冷淡さ以外のものは要求することのなかったその非人間的な立場では、別人が彼と交代することも出来たのだ。

ジャンはボーリーヌのわずかな落胆、全てのものを放棄しようという誘惑、そして単にレンズに戻るという執拗な希望などが今や自分の内で今まで以上に大きな力を及ぼしているかのように感じていたのだった。

しかし彼が工場のことを話した時には、彼女は何も言わないで、静かな風を装って、非常に注意深く耳を傾けたのだった。そして彼は彼女の側で彼女を見ることによって、そしてその人生に非常に良く結びついた身近な存在に、自分自身の言葉の内密な響きなどで、安堵するように感じたのだった。

「我々の現在の在庫でまだ二年ないしは三年は持ちこたえることが出来よう……。しかしその後は……。君も会社があらゆるリスクを冒すことになるのは判つてくれるね。」

「ええ。」

「そして君は持続しなければならないと思うかね。」

「ええ、思いますわ。」

「ここで立ち止まることは出来るだろう……。ジャンが言つた……。いくらかは救済されるだろう。今日私たちは破産したのではないが明日は……。」

「あなたは、まだチャンスがあるというのに、バルヌリー商會を清算することに同意し、工場を棄てようとなさるの。」

「チャンスはあるだろうか。」

「それを決定するのは私たちのやることじゃあないわ。」

「私たちが持続するのなら、やり方を変えて、他の会社がやっているように廉価店のための別の種類の陶器を作らなければならないと思うんだよ。」

「他の会社はその様な陶器を作るために存在してるのよ。バルヌリー商會で、バルヌリー商會の製品を作るのではなくれば、続けることなんかないわよ。」

「それこそが私の言いたいことなんだよ……。でも私はバルヌリー商會の製品の買い手はもういないんじゃないかと恐れているんだよ。」ジャンが言つた。

「やがて判ることよ……。フランスがありますわ……。」

「遅すぎるということはないだろうか。」

「青磁よりもはるかに美しいと私が思っている象牙色の陶器、あれをフランス人に提供してみるのよ。もうアメリカのことを考えるのは止めなさいよ。」

「象牙色の陶器はまだ完成してないんだよ。偶然二、三の製品で上手く行ったことはある。私はそれを放棄してしまっていたんだ。少しばかり珍しい調子のものであるために、種々の試作を続けて、非常に高価な見本の品を浪費してしまうのは道理に適ったことだろうか。」

「それはもつと珍しい調子というだけではありませんわ。この陶器はとても美しい物なのよ。」

「私は新しい形のものを考えていたんだけど……グラスのように縁の無い皿のことを。」

彼はポケットから鉛筆を取り出して、新聞の上にその輪郭を描いてみせた。

「これを見てごらん。最初の試作品はみじめなものなんだ。ガレット菓子のようなものなんだ。それで縁を少し高くしてみたんだ。そしてちよつと両側を掘って、縁の真ん中に細い溝を作ってみた……。するとたちまちその皿は生氣を持つようになったんだ。それは上手く行ったんだ。しかし別の心配事がある。それで考えるのをもう止めてしまったんだよ。」

「それこそ考えなければならぬのよ。」

白く塗られた部屋の中で、青い仕事着を着た男が所々で、練り土の塊の渦巻きの中から、皿やカップの形をした物を創り出している。いつもきれいに櫛を入れた活動的な何人かの女が多く空っぽのテーブルの中の一つのテーブルの周りに集まっている。ガラス張りの大きな仕事場のあちらこちらで、そし

て積み重ねられた煉瓦の鑄型が褐色の柱廊を形作っている火の消された竈がある薄暗い建物の中で、馬草の匂いにする部屋と粉碎機の雑音で振動する部屋で、練り土を捏ねる人や陶器の表面を磨く者、内径を測定する者、釉薬を塗る者、日雇いの者、ばらばらに散らばった人の面影などがバルヌリー商会のやり方を守り続けているのだ。

しかし新しい生がジャンの事務所を、そして模型製作者の仕事場、デザイナーたちが書類や先の尖った道具などが載せられたテーブルの前に坐っている小部屋などを満たしているのだ。象牙色の食器一式の研究が繰り返されている。その曲線や論争されてレリーフや装飾の場所を判断しながら熱を帯びているのだ。デュフィーの下絵や模型制作の反対論に説明が行われる。そして色合いへの考察が、微小な細部への配慮、気難しいと思われる判定者に対して何事も無視しないという意志などがすべての者に一つの希望を与え、混乱した世界の中での実行可能な一つの目的、一つの道を取り戻させたのである。

ポーリーヌはもう工場の運命とジャンの人物とを分離せず、その二つの混じりあったものを愛情に満ちた母親の様な心遣いで包んだのだった。遠くを眺めることなく、今のこの瞬間に足をしっかりと踏みしめていなければならないのだ。人は宿命的な出来事を耐えてきたのだったが、極めて些細な動き、気質、健康の沈滞などがいつでもその流れを変えてしまうことがあり得たのだ。ポーリーヌはジャンの健康を気遣っていた。

「あなたはクリスマススの休暇にはマックスと山へ行かなければならないわ。」

「今はお金を使う時ではないよ、私は冬のスポーツをするには年を取りすぎているからね。むしろ南フ

ランスの方がいいよ。」

「南部のニースの近くにも山はあるわよ。スザンヌ・ピカさんに聞いてみましょう。あの子はそこで十五日ばかり過ごしに行くのよ……。」

..

マックスのものに似た青い服を着て、縁なし帽を被り、頸の周りにはスカーフを巻き付け、厚い羊毛の手袋を付け、ジャンは重い靴を履いて元氣のない足取りでホテルの階段を下りて、郵便受けに視線を投げかけた。ガラスの入った扉が目の前で開かれた時、彼は口の中に冷気を感じた。そして彼は色眼鏡を通して黄色っぽい空を眺めてから運動用具の詰められた洞窟の方へ歩いていった。マックスは明け方にシュザンヌと一緒に出ていった。ジャンは近所のささやかな斜面で満足することになる。彼のために彼の体格に合ったスキー用具が選ばれ、何度か手さぐりで計ったり膝を曲げたりした後で、丈夫な紐で結び付けられた。彼は最後に両手にスティックを持って、固まった雪の上を進んでいた。そして片足を交互に挙げていたが、いつ何とき彼を運び去ってしまうか判らないもつれた付属品に絡まっていた。彼はバランスを取る骨を思い出して息詰まらせるような急降下に身を任せ、体を疲れさせるようなやり方で斜めにスロープをまた上った。彼は膝を曲げて、両眼を険しくして飛び出すや否や、倒れてしまった。それは精神の敗北だったのだ。彼の精神は速さの苦しさを拒否したのである。

彼はホテルに戻り、スキーを外して、ダンス靴の様な軽い靴がしっかりと大地にくっつくのを快く思っ

たのだった。そしてテラスのテーブルの前で日を浴びて坐ったが、食堂のガラスの仕切りに背を凭せ掛けて、紙を持ってきたら、ポーリーヌに手紙を書いた。《マックスは遠くの雪を求めてシュザンヌと出ていっている。二人は五時間のスキー滑りの後で昼食には帰ってくるだろう。》（シュザンヌは隣のホテルに泊まっているんだ。私たちはこのホテルでほとんどふたりつきりなんだ。）私はスキーをしようとした。その原則は忘れてはいなかったが、その運動はもう私の年齢には無理だ。それは疲れさせるし、特に退屈させる。それに私はこの高さは私にはニースの近くであつても適していないと思うんだ。明らかに私は年取つたのだ。それを確認したが別に悲しいと思うのではない。いくつかの遊びは自分には今は禁じられているにせよ、それでがっかりすることはない。その代わりに別のものが与えられているのだと、そしてその方がいいのだと考えなければならぬだろう。私にはそれが何であるかは言えないが、それは存在するんだよ。それは君に眉を顰めさせたあの快活な破壊のことを説明してくれるだろう。》

その最後の言葉は最近のある事件に関係していることである。つまり出発の前日に、トランクの中を探すために屋根裏部屋に上がった時、彼は女の使用人が、彼が若い時や戦争中にポーリーヌに宛てて書いた手紙の束を見つけたことに気付いたのだった。これらのてがみは彼にとっては非常に古いものと思えたし、二人には奇妙なものに思えたのであつたが、彼はそれらを一掴みにしてマックスの部屋の暖炉で焼却してしまったのだ。

ジャンは時折深い碧空と雪をいただいていない山々を見るために手紙を書くのを中断した。その山々は羊皮紙の様に色つやが悪くて落葉松の木々が疎らに点在していた。谷間の白い敷物の上には黒いシルエツトが子供のデッサンのように単純化されて、絶えず引つ繰り返されていたのだった。

彼が書き終えた時、場所を移って本を一冊開いた。しかし彼は道の端から息子の帰りを窺いながら、眺めていたのだった。

息子は自分の大きな両腕を挙げながら到着したが、顔を輝かせて、自分の父親の側に坐った。

「どうだったのか話してごらんよ。」ジャンは微笑を湛えた優しい目をしてその若い男に目を留めて言った。

しかしマックスの話は彼には理解しがたいものだった。若者のこの尽きることのない力が彼を当惑させたのである。以前には彼は彼は自分の息子に忠告を与えることが出来た。しかし今では疲労や節制や暑さ、寒さについて話すことが出来たにしても、理屈っぽい彼の考えはマックスには通用しなかったのだ。

「シュザンヌは？」

「彼女のホテルの前で別れたんだよ。彼女は直ぐに来るんだ。僕たちはスケートをするからね。」

子供の時のシュザンヌの母を知っていたジャンにとつて、今日のこの若い娘はその古いイメージから分離出来ないものであるのには変わりなかった。細い眉、赤く塗られた唇と爪、男っぽい服装など色々手直ししてみても、生涯を通じて耳の遠い夫に暴言を浴びせかけていた昔の気難しい栗色の髪の女に彼は気付いたのだった。新しい素振りや、遊びと動きを絶えず求めていたが、青年たちとの公然とした交際などの内に、彼は気取った口をして坐っている小柄の刺繍職人の女を思い出したのだった。彼女はマックスに気に入っているように思えた。ジャンは自分の息子が生活の外ではあれ、大地の上でしっかりと立ち、静かで悠然とした歩調で、彼女をお金の心配がなく、どんな事にも順応する覚悟ができている女と考えていることをハッキリと想像していたのだった。しかしジャンが見ていたすべての若

い娘たちは彼の目には無味乾燥で、自分の夫を絶望させるために作られているように思われたのであった。彼は少し疲れた顔にしか魅力を感じなかった。確かに年齢というものは彼に余りにも突き刺すような知覚や、人生には採用出来ず、無知よりもいつそう騙されやすく、自分で抑えておかなければならない奇妙な判断力を与えていた。彼は女を選ぶことにおいて、そして人生における行動について、自分の息子に常識的なことは何も言えないのだった。

ジャンはガラス窓を通して食堂のなかを見渡した。そして突然心配そうな顔をして新聞を広げたのだった。

「ご飯を食べに行こうよ。」

彼らは毎日その広い食堂に少し遅れて入って行ったが、そこでは正装したボーイが二十人ほど働いていたのだった。直ちに二人のテーブルは多彩なオードヴルの皿で覆われた。そしてハムが金属製の渦巻き型の容器に入れられてワゴンで運ばれた。ジャンは小声で言った。

「私たちは破産したホテルに泊まっていたと言っただろう。どうしてこんなに贅沢なことをしているんだろう。驚くべきことはまだ使用人たちが居ることだよ。」

「彼らはもう戻ってくることはない以前のお客を待っているんだね。」

「そうだよ。」

「あなたは工場の費用を十分に節減することは出来ましたか。」

マックスはがつがつ食べながら、それらの言葉を陽気に発した。

ジャンはスケートの先生の方へ顔を向けたが、彼はその朝たった一人で氷の上を軽やかに滑っている

のが見られたのだった。今は人目を惹くような美しい衣装に身を包んで離れたテーブルの前に慎ましく坐っていた。ジャンはそれから思い詰めた表情でガラス窓越しに輝く太陽を眺めていた。

「私は労働者と事務員を解雇したが、建物を減らすことは出来ないのだ。それらの維持費は高くつくのだ。税金も恐ろしいほど莫大だ。小さな工場のほうが楽だね。」

「要するに繁栄の時には大企業が小企業を押しつぶしてしまうんでしょう。危機の時にはその反対でしょう。いつも犠牲者は居るんですね。」

「その通りだよ。旅行者の中にも犠牲者は居るんだよ。ここに来るのに赤土の山を上ってきたその美しい道には石が散らばっていただろう。人から聞いたところではそれらの石が時々通行人の上に落ちてくるそうだよ。でも犠牲者たちは長い間それで苦しめられる訳ではない。そして運のよい人は自分たちの幸運に気付かないのだ。少し距離を持つて考えると私はその全てはどうでもよいように思えるんだ。若し私たちが不満の種を持つていけるとするならば、それは見通しを持っていないことに起因しているんだよ。」

「競争というものは知恵の究極の言葉ではありませんよ。」

「私たちはバルヌリー商会の英知のお蔭を受けている。その知恵は商会を破壊してしまうかもしれない。道理に基づく法則がこの世界で、我々を支配している不正で危険な原則に取って代わるならば、フランスという国は無用なものだと宣言されることになるだろう。フランスは天与の才能によって生きてきたのだ。その芸術家や製品は要らないのだ。ただ昔の好事家たちだけがその幻想を正当化してきたんだ。フランスが生み出すものは、別の場所ではもっと安価で入手できるんだよ。」

ホテルの食事は最初の日にはジャンの気に入っていた。今彼は全ての皿を退けて、ジャガイモを食べていた。彼らは頬を赤らめて、セーターの下では息詰まらせながら、テーブルを離れた。室内の暑さが太陽の熱気に呼応している様に思えるのだ。しかし彼らがコーヒーを飲むために坐っていたテラスでは冷えきった空気が彼らをホールの方へ退散させた。二人は封建時代の館を思わせる暖炉の横で大きな革の安楽椅子に腰を落着けたのだった。

マックスがその椅子から立ち上がると、情愛のこもった勢いで砂糖壺を父親のカップの方へ押して呟いた。

「ヴウゼルさんは、諸国間の、そしてヨーロッパと東洋との間の、そしてあるゆる人間の経済関係は変化したと考えていますね、そしてあの人は更に言葉を次いであなたの考えは……と……。」

「個々の人間の関係は絶えず変化してきたけれども、一人一人にとっては同じ価値というものがいいものなんだよ。」

マックスは顔を赤らめてから、消え入るような声で言った。

「ヴウゼルさんと同じように誰もが、協調が争いに取って代わり、奉仕の観念が利益の観念に取り替えられると考えることもできますね。人はすべての者の幸福のために働くのであって、一つの工場のそれのためではないですからね……。」

「私は勿論その様な決まり文句は判っていたよ。私はそれが実際に適用されたのさえ見たのだから。前線では我々は利益というものを抑えていたんだ。けれども戦争についての最善の判断というものを私は今朝読んだばかりの回想録の中に見出したんだよ。それは《自分の周囲を取り囲んでいる愚かさの重圧

は、戦時における私の最も大きな苦痛であった。』というのだ。

ジャンはテラスのテーブルに忘れてきていた鉛筆を探した。そして新たに坐り直して、膝の上に置いていた本の上に一枚の紙を置いてから、話しながら書きはじめた。

「お前は私よりも強く感じるだろう、或いは少なくともお前はもつと進んで社会の変容というものを受け入れるだろう。しかし私が結びついている考えというのは永続するものなんだ……。ゲーテは『西東詩集』というものを編んでいるし、モンテーニュは我々の時代とはまったく異なつて、多くの深淵で我々と隔たつてゐる異常な時代に最も美しい散文を書いていったんだ……。彼らは消え去ることの無かつたものを信じていたんだ……。」

ジャンは話を中断して自分の絵を眺め、コーヒー・カップをちらつと見ながら、ゆっくりと話しはじめた。

「いいかね、人間にとつて最大の試練はいつも自分の限界を意識しているということなんだ。自分の限界を受け入れるという範囲で満足しなければならないんだよ。それは辛いことだがそれを越えてしまふともう人間ではないんだ……。おや、あそこにシュザンヌを見たように思うよ。スケートをしにいつてお出でよ。私も直ぐに後から行くからね。このホテルに一瞬でも止まっていると、どうしても外出しなければならぬんだ。」

彼は突然マックスと一緒に二日間滞在したエストレル山（イタリア国境のプロヴァンス地方のアルプス山塊の名：訳注）のことを考えた。そして火事のためにその美しい稜線がむき出しにされていたその山々を嬉しい気持ちで思い出したのだった。石の多いその地面やバラ色の谷間にはローズマリーや西洋

山桃、ミルト、ヒースなどが生えている。銀色の小やぶには昔から立っている大きな松が一本孤立して聳えている。一人の通行人も打ち捨てられたこの奇妙な飛び地を乱すこともないのであり、無菌で物言わず、穏やかなエデンの園であり、そこではあらゆる至福が、つまり光と沈黙が結び付けられているのだ。

..

客車のクッションの上で穏やかに運ばれながら、ジャンは頭を昇降口の方に向けた。青い水の広がり、河岸の曲線が一瞬大空の中で揺れた。それから線路は岩と小灌木の林を辿っていく。赤みがかった入り江から彼はトラヤの椰子の茂みが認められた。列車はエストレル山塊に沿って行った。

彼はここにボーリーヌと一緒に住みたいと思った。確かにそれはリモージュの雨の中で、誰もそれを望みもしない類稀な陶器を求めて自分の最後の財産を賭けるよりは賢明なことであるだろう。しかし彼が望ましいとか、分別があると判断することは、すでに閉じていた両眼を愛撫してくれる昇降口の額縁の中の束の間の光景のように彼からは隔たったものなのだ。彼は理性も喜びも取り去ることのない人生の感覚の内にうっとりしていたが、それは列車の進行の方角の様に不思議な忠実さと忍従された意志として、取り換えることは出来ないのだ。

彼はバルヌリーの陶器に興味を持つかもしれないフランスの顧客について何人かの商人に尋ねてみるためにパリに止まった。

彼は多くの場所を走り回るのに少しの時間しか用意していなかったが、マルゼルブ街のデパートを出た時、以前にロベール・バルヌリーが住んでいたゴティック風の小さなホテルがあったその界隈の寂れた様子を驚かされたのだ。彼は自分の車に乗り込む前に、街路樹に縁取られた幅の広い歩道を数歩ばかり歩いた。

ジャンの青年時代以来、数多くの災害がこの通りの住民たちを襲ったが、そのゴティックは残っており、その消えることのない看板は黒ずんだ鉄柵のバルコニーの背後に蒼白いヴェールを今も残している窓の列の下で黄ばんだ木製の両開きの大門の間に嵌め込まれていたのだ。そしてショーウィンドウが作られて、物陰では店員がしつこいエキストラとして客を呼び込む準備が来ているのだ。それはモンソー公園の鉄柵の花柄の様に、そしてその芝生の穏やかな明るさや、車の規則的なざわめきのように、カナリアの可愛い鳴き声と共に、この町は、誰もがもう店に入っていくことはなく、あらゆる階級で一人一人の人間が少しずつその地位から追い払われている時でも、その装飾によって昔のままでありつづけていることを証明しているのである。

昔、ある朝ジャンが歩道の端で、その美しい羽毛の中に頸を埋めているイビスのように身動きせずに立っていたポール・アダムを認めたブルーヴァール・デ・ジタリアンで、彼は通行人の行列はいつもぎっしりで、とりわけ人々の群れは貧しい服装で泥だらけであるのに気が付いた。俟約によって生気を失って彼らはショーウィンドウの前を歩いていたが、しっかりと蟬引きされた靴や新しい手袋や、自分の新しい衣装を誇っていたマネキン人形が陳列されているのを眺めていた。

パッシーの高台では車を止めさせて、断崖の間の裂け目から河の浅瀬の白い小石を眺めたのだった。彼

の周り街路では苔が人に踏まれずに残っていた。他の街路も土に持ち上げられて浮き上がったばかりの白い立方体の霜柱が立っていた。

彼は似たような街路に従ってベルヴィル街、リラ街、ヴァンセンヌ街に自分を案内させたが、時には木々に縁取られていたり、突然大きくなって田園風になったりした。郊外に至るまで、どんな家も惨めさをむき出しにするものは無かった。ストイックで豊かなこの町は、そこで救いもなく、いくらかの紙も無く、人々は一口のお茶で暮らしているが、もう決して空腹になることはない様な部屋をしつかりと隠していたのだった。

もうリモージュの空気を吸い込んでいるよう思えた地下道の客車の前でジャンは雑誌を買ってから、一人の旅客がコートを下げていた座席の前のコンパートメントの一角に落ち着いたのだった。

彼の落胆させるような調査は彼を失望させはしなかった。ぼんやりした警告に対しては彼は内心の確信を対せしめたのであった。あらゆる創造者のように彼は人生との接触において、希望を抱く自分自身の理由があつたし、それは精神の活動にさえ基づいているのだ。彼は皿の周りを大きくするモチーフに靈感を得たカップの形を絶えず夢見ていたし、それを食器のあらゆるセットに応用することを望んでいた。彼は気を紛らすために新聞を開いたが、この世ではリモージュの陶器に何の影響も与えることがないようなものは無いかのように、個人的に自分に影響を与えたニュースによって辛うじてくすぐられるのだった。遂に彼は目を閉じた。

彼はゆっくりとコートを移動させて、バスク風のベレー帽を被った旅客に話しかけられた。それはジェリ氏であつた。以前はその美しい声は委員会でしか聞かれることは無かつたのだ。今日はその苦しみ

彼からいくつかの苦情を引き出させた。彼は饒舌になった。彼は決して深く考えることは無かったのだ。

リモージュまで、ジーン氏は停車する度にほんの少しだけ調子を下げて、民主主義や政治家や、学問、文学、機械、銀行家と職工、好戦主義者と平和主義者、そして自分がそのお蔭を受けているが、その後彼から贈り物を奪い取った時代というものを次々に呪ったのだった。

二人は新しい駅で一緒に客車から下りて、いくつかの企業の倒産ですっかり打撃を受けた死の町を前にして別れた。

恐怖が孤独の家々を通して広がった。暇な店主は入り口を眺めており、雇われ人は不安になって自分の後見人のことを思っていた。そしてフィアンセと老人は棄てられることを恐れていた。若いときにあれ程欲望を絶って儉約したブルジュワはますます貧しくなり、悪い癖と、自分の生まれを示す話し方を残しており、それを羨ましがらせているのだ。

ジャンは自分の家で目覚めて、長らくリモージュを離れていたような印象を持っていた。彼はその貧しい光が自分に気に入っているのか、悲しませているのかが判らずに、個々の品物に注目していた。しかし確かに彼は力を取り戻していたし、口笛を吹きながら、数年来忘れられていたが、自分には新しく思えていた衣装を身に付けたのだった。

工場では彼は会計係と会うのを避けるために直ぐにデザイナーと部屋に閉じこもった。彼は、リモージュを経由してパディラックへ行くホワード嬢の到着が告げられた時、そのデザイナーの肩に身を屈めていたが、彼女は工場を訪問することを希望していたのだ。

「見るべきものは何もありませんよ。」ジャンが言った。

そして彼は少し前から彼の事務所に雇っていたフレデリックの息子のテオドルにホワード嬢に付き添うことを任せていた。

ジャンにとつては工場は経済的に困難な問題、そして会計係との低い声での相談、深夜に砲火の如く人を目覚めさせるような考えなどを示す以外の何物でもなかったのだ。

リモージュでは近年毎年のようにアメリカからやって来た数億フランの注文が無かったのだ。ロベール・バルヌリーの征服は消されてしまっていたのだ。

《残酷な等級制を復活させて、別の基礎に基づいて、全般的な貧しさの中ですべてをやり直す必要があるだろう。》とジャンは考えた。しかし労働者は信念に満ちて抵抗している。彼らは自分たちから奪われている宝があるのであり、正当な法則というものは強力な経営者たちが除去されれば、すべての者の間に幸福を取り戻させるだろうと言われているのだ。おそらく彼らは間もなく約束された地を見ることになるだろう。それから彼らはロベール・バルヌリーがそこから引き出した曠野の羊飼いとなるだろう。

その様な幻想は、ジャンが人気がなく、暖房された細長い作業場を横切っていた間、ジャンに重く押ししかかっていたが、それで彼はアメリカの古い顧客のジー・ケー・ホワードの思い出に敬意を表したいと思つて、ホワード嬢を探していたのである。

冷やかなテオドルの横で、熱狂の所為でそこに踏み止まりながら、彼女は蒼白い渦巻きの中からいつも生き生きした源泉である壊れやすい製品を生ぜしめていた女の職工を眺めていたのだった。

「まあ、何て美しいんでしょう。」興奮してジャンの腕を揺すりながら彼女は言った。「それにあの人は何て面白いんでしょう。立派な姿だわ。」

「絵付けをする人たちがごろんになりますか。」

「ええ、是非お会いしたいわ……。あなたは美しいものの中に生きておられるんですね、バルヌリーさん。」

「喜んで窯をお見せしましょう、でも火は消えているのです。動いているのは一器だけなんですよ。」

「あら、まだ動いている窯を一つお持ちなんですね。それをどうしても見てみたいですね。」

「こちらでございます。」

彼らは暖炉の熱さの中を、背の高いグレーの棚を備えた部屋を横切ったが、そこにはちじこまった鳩の様に様々な陶器が並べられていた。

ジャンは階段を下りて、ベルトや機械の雑音を打ち負かすために大声をはりあげた。

「その窯は中庭の反対側にありまして……。」

少し歌うような調子で、丸みのある仕種で、ホワード嬢の方に身を屈めて、次第に自分の熱気に囚われて、ジャンは言った。

「あなたが今ごろになったまだ柔らかいあの練り土は最も古い岩石の結晶体から産出されたもので、地上の表面に現れた最初のものでありますし、火成岩と呼ばれているものです……。非常な高温の火で元の状態が復元されるのです……。」

薄暗い部屋で、二人の半裸の男が目も眩むばかりの燃え盛る火の中にシャベル何杯分かの石炭を投げ入れた。それから汗だらけの顔で入り口の方に戻ってきた。ホワード嬢は彼らに力強く率直な視線を留めた。彼女は彼らに尋ねて、彼らの生活や恋愛について知りたいと思っているかのようにだった。突然彼

らはシャベルを捨てて、こちらに走ってきた。彼女は振り向いてジャンが地面に倒れているのに気が付いた。顔は真っ赤で、苦痛でこわばった視線を投げかけながら彼は身振りで彼を助け起こそうとしている者たちを遠ざけた。

「テオドル、ポーリー又電話してくれないか、しかし心配させないように頼むよ。彼女がヴェルクルストル先生を呼んでくれるようにして欲しいんだよ。私を病院に連れていつてもらいたいのだ……。失礼ですがホワードさん……。私は膝の関節が外れた様に思えるんですよ……。馬鹿げた話ですが……。こんな穴があるとは気が付かなかったんです。テオドル、ホワードさんを模型制作の仕事場に案内してあげなさい。」

「いいえ、バルヌリーさん、あなたのお怪我は私の責任ですわ……。お気の毒なことをしてしまいました。私に付き添わせてくださいませんか。」

ジャンは顔色が蒼白になった。

「テオドルと一緒に行ってください。」

彼女はまだ大声を出して、手助けすると言い張っていたが、体の中に何か激しいものを抑えようとしてもがいて地面に横になった人の視線を目にして、彼の言う通りにした。

器用で微妙なものを取り扱うのに慣れていたのので、二人の職工は注意深く助け起こして、陶器を運搬するのに使っていた板の上に横たえた。

「門番の所へ置いてくれ、そして救急車を呼んでくれ。」一人の職工が自分の上着を丸めて、ジャンの膝の下に滑り込ませた。

「
あ
り
が
と
う
、
ミ
シ
エ
ル
。」

IX

《本当に不慮の事故なのだろうか。》ジャンは考える。しかし彼の六十歳になった祖母はもう歩くことは出来なかつた。そしてその伯父は杖をついているし……。

ヴェルクーストルは言った。「長引くでしょう。」数週間、あるいは数年間、自然の動きがぎこちなく思えるようで、苦痛を避けるためにのみ我慢できるこんな姿勢を否応なしに強いられるのだろうか。人は優しい声と静かな視線で彼をごまかしている。平らになつて身動きせずに彼は医学事典を読んでくれているポーリーヌに耳を傾けている。しかしポーリーヌは言葉を飛ばし読みするのだ。やつとのこととで彼に体温のページが示される。彼は規則的になつた図表を見て、その鋭い文字を読み取りたいと思つている。

周りの者は彼の辛さを理解していないような風を装っている。そしてすべての者は非常に平静で、何物にも脅かされることのない調子のよい人たちの慰めを持つているのだ。彼らは膝に水が溜まつていてと言つている。悪い部分は真綿でくるまれてくるような燃えるように熱くなつてゐる場所だけに限られると思われているのだ。しかし彼はその根はもっと深いものだと思つてゐる。

工場では誰も彼と入れ代わることは出来ない。彼も人と交代することは望んでいない。彼は郵便物に目を通し、返事を口述し、すべてを決定することを望んでいる。そしてバブウゼを呼びにやるのだ。

耐えがたい姿勢にも慣れなければならない。休み時間も休息ではないのだ。あまり苦痛を感じないという至高の幸福は決して完全なものではない。彼は煙草を吸い、読書し、ものを食べて話すことを考えている。しかし彼は偽りの食欲と耐えがたい欲望しか持っていないのだ。

彼の前には新聞が広げられるが、彼は飽き飽きして顔を背けるのだ。彼はクリームの中で潰したバナナや、純粹な煙草である東洋産の物をいくつか求めたが、その味が判らないのである。すべてのものが彼を疲れさせるのだ。彼は以前と同じ血液の温度も、同じ感受性も持っていないのだ。彼が別の肉体を持っていた時代の様々なものとの関係、趣味、習慣、昔の規律などはもう役に立たないものになっている。彼は時間というものが不規則である新しい世界では、野蠻でひどく移り気になっている。ある種の時間というものは流れていかないし、ジャンは全般的な沈滞の内で息を詰まらせている。そして別の時間は地下に隠れているがごとく走り去っていくのだ。

彼は不快な無為や永遠に続く期待のなかに身を潜めて、夕方や朝のやって来るのを、そして絨毯や廊下の床の上のポーリーヌの足音を、この力強くて元気な音を立てて走って入ってくる忙しげな足取りを窺っているのだ。彼女が勢い良く顔を輝かせて入ってくる時、彼女はすべてを刷新しようとしている様に思えるのだ。しかし《ちよっと出てくるわね》と彼女が言えば、彼は目を閉じて、ほとんど安心したように、《いいよ》と答えるのだ。彼女は彼の周りにまとわりついている苛立たしいものすべてを、遠ざかりながら運び去ってしまうのだ。

彼が正常な生活を奪われて落ち込んでいるときには、彼には自分がいつもその苦悩を知っていたように思えるのだ。苦悩が欠如しているような思い出はないし、苦悩に基づかないような思い出は何もないのだ。苦悩は彼が時折半ば熱に浮かされたように夢想するすべての彼の過去に、そして彼の未来に混じり合っているのだ。

∴

彼を取り囲んでいた様々な品々は、霧の中から出てきて、発熱の時間や強度に従って離れたり、呼応しあったりする。

それからすべてが目茶苦茶になってしまふ疲労がやって来る。歪んだ額の絵や家具の上の反射でさえも疲れさせるのだが、毎夕、日が沈む時にそれを待っていると、それはなかなか現れなかった。

遠い窓から投げかけられて、壁の上に浮かび上がっているその光は、そこで食事の用意をしている主婦ではないし、テーブルに肘を突いて読書している男でもない。それは彼にとっては一つの徴なのであり、彼はそこに有益な存在を見ているのだ。

ポーリーヌは自分がそこでは、ジャンが孤立していると同時に迷っており、時間や苦しみ以外の別の世界にある混沌というものが理解できないのだ。生きている者たちには余りにも現実的なのだ。沈黙している物事に耳を傾けるのは別の存在が必要となるだろう。しかし身繕いや野菜スープ、医師の訪れなどは少しだけ彼を生き物の方に連れ戻すが、彼の心に、ある生き物に似ているものを無理にも思い出させ

るのだ。

∴

彼はその病気に気が付いている。それはずっと前からのものである。以前のイメージは不思議に立体的になって彼の目の前に浮かび上がるのだ。バルバザックからの出発、病院、ホテルの部屋、苦しみ、孤独、薄紫色の服を着たポーリーヌなどのイメージがそれである。彼は今彼女が少し気取った風をして、厚いヴェールの下でどんなに内面的に震えているかが判っている。彼はその時には気付いていなかったものが見えるのだ。カーペットの花柄の上の足の震え、小さなハンドバッグを揉みくちやにする神経質な彼女の両手などである。

∴

彼は一番いい姿勢で、動かずに居ることが出来た。彼は少し枕の上に起き上がることができた。健康ということ忘れて、無視されて不安にさせる伴侶として、自分がもう知らなかった自分自身と一緒に生きることを学んだのである。

四十年来彼の人生や思想を占領していたすべてのもの、彼が動かし、撥ねつけ、学んで忘れたすべてのものが不調和な声となって彼を襲った。《私はいつも思い違いをしていた。》と考えて、今なお沸き立つ

ていて、他の思想を困らせていた無用な事柄を陰の中に押し戻そうとしていたのだった。

ポーリーヌは最早無言の存在としての安堵感以外のものを彼に与えることは出来なかったのだ。時折彼女の一言は彼を飛び上がらせたが、それはまるで彼女が突然彼を目覚めさせたかのようにあつたのだ。彼女は遠くから、静かではあるが、それと判るような足取りで自分が着いたことを知らせなければならぬのである。

彼を田舎に連れていくことが問題となつていた。ジャンは枝の繁つた古い木の下で、ただ庭に下ろされる方が良かったかもしれない。また手術のことも話題になつた。今は彼は自分の足が切られるという考えも彼にはどうでもよかったのだ。彼はもう歩く必要が無かつたのである。彼は何も要らなかつたのだ。

..

ジャンは庭に向かつて開いた窓を眺めていたが、そこからはカーネーションとすいかずら（忍冬）の香りが漂つてきた。使用人の女がそつと叩いて、扉を開けた。

「ファルディスーが旦那様に初物のサクランボを送ってきました。」

「それを私にちょうだい、マリー。親切な思ひつきだわ。」ポーリーヌはサクランボと木の葉で一杯になつた柳の籠を手に取りながら言つた。

彼女はその籠をジャンの横に置いて、コップを探し、彼のベッドの足元に腰を下ろして、二人は微笑

みながらサ克蘭ボを食べた。

「ジャン、あの日の桜の樹のことを覚えていらつしやるかしら……。」

突然ボーリーヌはとても丈夫であったジャンを見るといふ願望を持ったので、すすり泣きに襲われたのだった。

「間違つて種を飲み込んでしまったわ。」彼女はそう言つてマックスの部屋に逃げ込んだのだったが、そこでは彼女がベッドに横になって、体を揺り動かして悶える涙の発作もジャンには聞こえてこなかった。彼女は化粧室で顔を洗つてから、頬に白粉を付けた。そしてその部屋に戻つてきてジャンの横に坐つて、頭を垂れた。それからほとんど空になっていた籠からまた摘みはじめた。

「どうなつたの、種は……。」

「本当に息が詰まるかと思つたわ。」

「君はいつか私に持つてきてくれたライラックの花束のことを覚えているかね……私はその時（それ）は多過ぎる、私のところでは一本だけでいいんだよ。」と言つたよね。そうだ、日本人はこのようにして、花瓶に一本だけを入れて花を眺めるんだ。あれは去年のことではなかつたかね。」

「ええ、去年のことよ。」

「去年かね、信じられないな。ヴェルクーストルが何度か訪問してくれたのもつい最近のことのように思えるよ……でも去年の春は限りなく遠い昔になつていいるね……。私は余りに多くのことを忘れてしまつたよ……私はレンズでの君を思い出したいよ……でも君は同じままだね、私は判つていいるんだ……若し私がここに数年いれば、私は自分が回復して、庭に下りていくのが怖くなるかもしれないよ……。自分

のベッドから窓へはすでに一つの世界があるんだ……。身動きできない人間にとっては、すべてがその局面を変え、解消し、また違った方法で組み立てられるのだ……。つまり別の平衡を……。本当のそれを見つけないといけない……。すべてが変化している……。君以外は……。君はそこに本当の君として変わらずにそこに居るんだよ。」

彼女はジャンの顔を観察しながら、彼の言葉に注意を払わずに耳を傾けていた。

「あなたは少しお休みなさい。私が工場へ行ってきますわ。」

「うん、少し休もう。」

急にポリーヌの存在が、余りにも強烈な光の様に彼を疲れさせたのだ。彼は彼女のイメージを、彼女が居ないことによつて、少し距離を持つて眺めてみる必要があったのだ。

ポリーヌは毎日のように工場へ出掛けていった。彼女はジャンが仕事に無関心になつてゐるのに不安を感じていた。そして一種の迷信から彼の生活と工場の間、関係を感じていたのだ。象牙色の陶器の試作は中断されていた。彼女はジャンがそこに居た時のようにそれらが行われるのを望んでいた。ジャンに手紙を運び、バブウゼの代わりに指示を伝達するのは彼女なのである。彼女は事情を知らない誰よりも、自分の夫にどの様に話したらいいか、どんな時に近づいたらいいかを知つていたので。

この様にして彼は不安にさせるようなニュースは知ることがなかった。バブウゼは自分の主人を欺いて偽りの情報を伝えることを潔しとはしなかった。ポリーヌは数字を修正して、ジャンに間違つた計算書を渡すという責任を引き受けた。

「ああ、君じゃないか。」彼女と再会して嬉しくなつて言つた。

彼女はいつも工場の空気、男たちや将来の希望らしきものに向けられた事柄に接触して元気づけられてやって来たのだ。書類の入った鞆をテーブルに置いてから彼女は、ジャンを大地に結び付けた過ぎ去った生活への興味を掻き立てようとしながら、情熱を込めて言った。

「大西洋横断汽船会社が特等船室用の食器一式を注文してきたわ。パブウゼを驚かせたのは彼らの注文の正確さなのよ。あの人たちは高い品質を求めているのよ。今でも目の利く人はいるんだわ。」

彼女は、最後には損をすることになったその注文の値引きと心付けが高くついたことは隠していたのだ。

ジャンはその手紙を読みながら微笑んでいたし、その満足げな様子でポーリーヌを喜ばせるためにうわべをつくろっていたが、本当の嬉しさをも与えたのだった。

「良く眠れましたの？」

「いや、まどろんでいたんだ……私は工場のことを夢見ていた……私が工場のことを考えると、自分のやったことや何かが……。《我等の住まいは、羊飼いの天幕のように我々の遠くに、取り除かれて運び去られたり……。》これは私がその意味も判らずに、墓の前でしばしば繰り返した聖書の言葉だよ……。大地は我々の足の下で崩れて、運び去るのだ……。」

「でもジャン、そこには工場があるのよ。」

「それも長い間のことではない、私も同様だ。私がやったことすべては無駄なことだったのだ……。でも不思議なんだが、私は失われた生涯という感じは持っていないのだ……。人が愛し合った時には失った生涯というものは無いのだよ……。例えそれが人生の道具であるにすぎないにせよ……。その愛着、人

間や些細なものへの愛情は確かに減すべきものである、そしてその人生自身でさえも、死の前に我々から奪い取るその愛情、私はそれが何を意味するのか知りたいのだよ……あらゆる理性、最も古い経験にも反抗するその生き生きとした愛情が意味するものを……そして愛の根底にあるこの希望……それはすべてのものの根底にある希望が意味するものを……」

ジャンは夕方カーテンを下ろすことを禁止した。彼の体が高く持ち上げられた機械仕掛けのベッドから、彼は四角い低い窓から、空に星々が現れるのを、そしてリモージュの街に明かりが灯されるのを眺めていた。

..

ポリーヌは象牙色の食器類一式の最初のもので窯から取り出された時、工場にいたが、それを直ぐに自分のところに持って来させたのだった。

玄関には箱が置かれた。女の使用人が蓋になっている板を持ち上げて、馬草の覆いが掛けられた中側から薄い赤色の紙に包まれた品物を取り出した。ポリーヌはトレーにお皿や受け皿やカップなどで飾りたてて部屋に持って上がった。彼女は別のものを取りに下りた。そしてやがてベッドや箆筒やテーブルや椅子などが陶器で覆われたが、それらの軽やかで光を放つ塊が部屋を明るくしたのだった。ジャンは指の先で皿を撫でていた。

「ランプを近づけてくれないか、ポリーヌ、よく見えないんだよ。それをベッドの上に置いてよ。」

彼女はランプの脚を支えるために跪いた。ジャンが注意深く吟味している間、彼女は明るく照らされた彼の目鼻だちや、彼の顔をひどく老けさせた病気の痕跡を見つめていた。

「ランプを退けてもいいよ。素晴らしいね。私は満足だよ。」

ポリーヌはお皿も持っていこうとした。しかし彼はそれをその瘦せた指で抑えた。そして自由な方の手で彼はポリーヌの頭に触れた。

彼女は誰かが扉を叩くのを聞いてまた立ち上がった。

「奥様、お目に掛かりたいと言う人が居られます。この土地の人ではありません。デルノードさんと仰る方です。」

「よろしい、喜んでお会いしよう。」ジャンが言った。

デルノードは玄関に散らばっていた馬草や紙を踏みつけた。ポリーヌが階段を下りてきた時、彼は頭を挙げた。そして箱に躓いた。

「荷を解いていたので御免なさい。ジャンが見たいという新しい食器の一式を持ってきたところなんです。お上がりください。」

「私が彼を疲れさせるといふことはありませんか。少しは良くなられましたか。」

「良かったり、悪かったりですわ。」彼女は疲れて不安そうな表情でステップに立ち止まって低い声で言った。「きつと変わったなと思われまますわ。」

「本当のところは何があつたのですか。高いところから転落されたのですか。」

「彼は工場で転んで膝を挫いたんですよ。その打撃でハッキリとは判りませんが、ひどく昔の古傷が出

てきたらしいんですよ……。」

ポーリーヌは病氣の名前を知っていたが、他人の前で敢えてそれを口にするとはしなかった。けれども彼女は思案顔ではあったが、何の強制もなく非常にゆっくりと階段を上っていくことにある種の安らぎの感じを持っていた。彼女は微笑みながら、部屋の中に入って、屈託ない様子をして言った。

「ジャン、デルノードさんがいらしたわ。」

扉の方に向いて、

「さあ、その作品に囲まれている制作者が見えますね。」

「ねえ、君、……デルノードが快活に言った……まるで鴉が迷い込んだようだね。」

デルノードはベッドの横に坐ったが、その目はポーリーヌの方を見ていた。「君の奥さんは君がとても良くなつたと仰ったよ。」

「ええ、そうなんです。……ポーリーヌが快活に言った……もうじき私たちは海辺に行けるでしょう。」
デルノードは立ち上がって、テーブルに近づいた。

「素晴らしい陶器だ、相変わらず独創的だね、バルヌリー。」

「相変わらずそうなんだよ。」

「君は工場へ戻れるんだろう。」デルノードは両手を擦りながら言った。

「それははっきりはしていないんだ……。でも私は泣き言は言わない……。私は人生を眺める余裕も無しに突然死んでしまうのが怖いんだよ……。今は挫折者だ……。ところでこの象牙色の陶器は気に入ってくれているかね……。」

「素晴らしいよ。」

「私が子供の時には、従姉妹たちが人形の為にマグノリアの花弁でお皿を作っていたものだよ……それと同じ調子の柔らかくて美しい素材だった……。私は自分たちがそれを復活させたように思えるんだよ……、デルノード君、シャラントの話をしてくれよ。」

「景気のいいことは何にも言えないよ、君。」

「バルバザックのことを話してくれよ……。」

「市会議員の選挙でコニャックの昔の代表者たちは一掃されたんだ。人々は新しい人を望んでいるんだね。」

「そうだね、葡萄栽培者は自分のワインを売ることを望んでいる。若しエネシーがそれを買えないなら、国家がそれを買えと言っているんだ。」

「君はビュルゴー・デュペロンが倒産したのを知ってるね。」

「いや、知らない……ビュルゴー・デュペロンが？ それは初耳だね……。聞いたかね、ポリーヌ、ビュルゴー・デュペロンが。」

「ボルドーでは状況はもつといいということはないんだ。」

「知ってるよ、ここは失業者の町なんだ。田舎では多くの者がパリから戻ってきて、畑を耕しているよ。ブルノンヴィル家の者は農民だよ……。もつともあんまり良くない農民だけだね。」

「ポンメルは持ちこたえている、彼は大きな取引はしなかったが、小規模にやっている……。」

「ああ、ポンメルか、ポリーヌ、聞いたかね。気の毒な年老いたポンメル。若し彼がそれを知っ

ていたらねー、彼はいつも半ば破産していたんだ……。」

「あの会社はしっかりしているよ。」

「人生にはそれでも美しいものがある……。それらを見るためには忍耐が必要なんだ。そしてそれは捜し求めなければならない……。今日、この世界で失われているものは愛情なのだ……。」

「ジャン、話しすぎてはいけないわ。」

「デルノードにもつとこの事を話させてくれ、というの私はそれはそれを確信しているからだよ……。しかし人は確信している時には、もうほとんどそれを表現する声を持たないんだ……。愛というものは……。」
彼は咳き込んで噎せた声で早口で言ったが、身振りでその文句を終えたのだ。

「愛……人生には他に何にもない、……何にもないのだ。」

「デルノードさんを引き止めてはいけないわ、今晚トランブラードへ出発されるんですって。」
ポーリーヌはゆつくりとまた階段を下りた。

「どう思われましたか、あの人はずいぶん変わりましたでしょう。」

「ひどく痛むんですか。」

「できものが特に痛むようですが、時には長い休みがあるんです。手術のことも考えられました。私はそれは避けたいのです。」

「きつと良くなりますよ、……あなたもお判りと思いますが復活ということはありますからね……。」
「私も復活を信じていますわ。」

彼はポーリーヌを見て、彼女の顔が活気づくのを見る喜びの故に、彼女に滑稽な話をするのが好きだっ

た頃のことを思い出していたのだった。今ではその微笑みは、唇の端が下がって、ただいっそう悲しそうな表情を浮かべたときだけの彼女の目にはもう上つて来なかった。

「お引き止めて御免なさい。」

「まだ時間はあります。でもジャンに、私たちが彼の話をしていると思わせたくありません。」

「あなたもお疲れになられたでしょう。」

「ええ、……不安とそれに内緒話……あの孤独感……私と一緒に食事をされませんか。」

「止めておきましょう、あなたを疲れさせてしまいますからね。」

∴

ヴェルクーストルが帰って、鎮痛剤をうった後、ジャンはまどろんでいた。ポーリーヌは彼の横に坐って彼が眠るのを眺めながら、心の寛ぐのを感じていた。枕の上の彼の顔とシーツの上に伸ばされた彼の手は日が沈むのに従って蒼白くなっていくように思われたのだった。突然ポーリーヌの頬に涙が流れた。涙を抑える力もなく、ジャンを目覚めさせるのではないかという恐れから身動きもせず、彼女は自分の口にハンカチを押し当てて、頭をベッドの冷たい支柱に押し付けていたが、その時彼女は暗闇の中で、自分に触れようとして伸ばされたジャンの手を感じたのだった。

「痛みを感じないと楽だよ。」と彼は言った。

彼女は明かりをつけた。食事の前に、夜のために部屋が整えられる。ポーリーヌのベッドが広げられ、

テーブルは新たに、アルコール・ランプと共に湯沸かしや煎薬の箱などがナプキンの上に置かれ、様々なガラスの小瓶などで覆われたのだった。

ジャンの食事が四本脚の付いたトレーに載せられて持つてこられた。その脚はジャンの足がどんな物にも触ることが無いような高さがあった。

「奥様にお手紙が参っております。」

ポーリーヌは封筒を破つて、目を輝かせて食べるように下手な字で書かれた二枚の文面の上にざっと目を通した。

「マックスの手紙を読んでみましょうか。」

彼女はいくつかの言葉を飛ばして、苦い反省を引き起こすのを恐れて最後の文句の前で止まったのだった。彼女はジャンのある種の疑いが誇張されているように感じた。そして彼女は息子の手紙を受け取った時には嬉しかったのであり、そのたびごとに希望に満ちた興奮とともにそれを開いたのであったが、読んだ後では隠れた不安が彼女の心を捕らえたのである。そして直ぐに彼女は手仕事をしたり、物を片づけたり、台所に下りていかなければならなかった。

彼女がその部屋にまた上がってきて、枕元のランプを灯したとき、

「マックスは二十五才位になれば人に重んじられる様になると思うわ。青年時代と呼ばれるものは長く続きますからね。」

「そうだね、私は忘れていたよ、それは長く続くもんだよ。」

「あなたはあの子がシュザンヌと結婚すると思いいになるかしら。」

「私にはそう言ってたよ。」

「氣違ひ沙汰だわ……! 馬鹿げたことよ。」ポーリーヌは言った。「私には、自分の肉体であり、私自身でもある子供が、私と同じような目を持つていけないなんて理解できませんわ。私が愚かであると思い、我慢ができないような娘をどうして愛することができるとしようか。」

「君の言うとおりだ。あれはとても退屈で氣の毒な娘だ。しかしマックスがあんな娘と結婚したいと思うなら、それも間違ひではない。あの子を苦しめてはいけないよ。私たちはもう物事を有りのままに見ることは出来ないんだよ。彼が私たちに自分のフィアンセを紹介するなら、私たちはその娘を素晴らしい者として受け入れよう。そして《あの娘は上品だ。》と言おう。そしてそれがすべての者にとって大きな幸福であると考えなければならぬだろう……。新聞を持つていつてもいいよ……。私はもうそれを全然読みたくなんだよ……。戦争、マックスを待ち構えているのはそれなんだ。自分のことをあれこれと不安に思うのは何にもならない、しかし他人のために心を震わせることは……。」

「そうね、それは最悪のことだわ。」

「奇妙なことだけれど、肉体的な苦痛以外には、自分にとって本当に個人的であることはもう何も感じないという時代が来たんだね。人間の感受性は移転してしまっただよ。人間は幸福ではない、人は他人によつてのみ苦しむんだ。自分自身について残っているものは見分けることが出来ないんだよ。」

「ジャン、私ね、ずっと前からあなたにお願いしたいことがあったのよ。あなたはテオドルを会社にお入れになったわね。バブウゼが、近いうちに彼がアメリカに行くんだと言ってたわ。マックスをその代わりすることは出来ないんですの。」

「私の後継者になるのはテオドルだ。」

「テオドルですって？ フレデリックの息子の？」

「私は彼の才能が判っているからだよ。」

「でもあなたには一人の息子がいるんですよ。」

「彼は私の若々しさを受け継いでいる、彼は他へ行くべきなんだよ。世界は様々な子供を必要としている。しかしここでは一人の大人が必要なんだ。」

ポーリーヌはその夜はずっと眠らずにいた。しかし夏の短い夜は眠りと同じく、忽ちにしてあの熱っぽい物思いに吸い尽くされてしまったのだった。

朝になるとポーリーヌの折り畳み式のベッドは化粧室に運び込まれた。そしてその部屋は病室の感じを失った。看護婦の衣装を身に付けてポーリーヌは、彼の前で鏡を持って、彼が髭を剃るのを手伝った。彼はその身繕いに疲れて、頭を枕に凭せ掛けた。太陽に向かって開かれた窓からは、ファルディスーが道を掃き清めているの音が聞こえた。

ジャンは以前に古い『ルヴュー・ド・パリ誌』で読んだことがあったポール・ヴァレリーの文句を思い出そうとしていた。

「あそこの辞典の下に……。」

その雑誌をめくりながら、ポーリーヌはジャンのベッドに近付いた。そしてそのパッセージを見つけ、彼女は大きな声でそれを読んだのだった。

《あるイタリアの庭師は気だるそうに熊手で地上を掃いている。突然彼はその方言で話します。それは

午後の静けさの中で響きわたる。そして砂利を掃いている熊手のとても特殊な音に混じり合う。それは
労働は無駄なことだと言わんとしている様に思える……！≫

彼女はジャンの身動きしない姿を見て、読むのを中断した。

「ジャン。」

彼は目を開けた。

「あら、私、あなたの顔を見ていたら怖くなったのよ。」ポーリーヌは言った。

「どうしてだね、私は庭の桜の樹の下にいたんだ。」

ジャック・シャルドンヌの生涯

シャルドンヌは一八八四年一月二日、シャラント県バルブジューに生まれた。母方の父はアメリカからリモージュに移住して来て、陶器製造工場を設立したダヴィッド・ハビランドであり、父方の祖父は生粋のシャラント県人で、コニャック醸造会社を営んでいたエドモン・ブートルウである。言うまでもなくシャルドンヌの本名はジャック・ブートルウと言う。この様にして彼の内にはアメリカ人の血が流れている。そして彼のプロテスタント的な厳しさや自由の精神はそこからのものと考えることができるかもしれない。そして彼はこの両方の家族の世界を『愛情の運命』の内に大きく取り入れている。

彼は少年時代は父の事業が経済的不況のために、何時も不安を感じていたし、家庭のなかも厳しく冷たい雰囲気支配していたのに反撥を感じ、自分としては自由に暮らしていた。そして自分の従姉妹や従兄弟達の友人たちと芝居やダンス・パーティーをやったりしていた。それと同時に彼は非常に本が好きで、さすがに多くの本を読んだ。それはフロベール、ラ・ロシュフコー、パスカルであったし、特にドイツのニーチェから大きな影響を受けた。そしてロシアのトルストイに対しては生涯を通じて傾倒していた。

彼が十八歳になった時、破産してしまった彼の両親はわが子を手元に置くことを考えてパリに出る。

そして彼は法料の大学に進んでから、程なく兵役に服することになる。その後親友のアンリ・フォーコニエがマレー半島で行っていたゴムのプランテーションに協力したりした。それからパリで法学士となつてから、病を得てスイスに行き、シャルドンヌ^{II}シュル^{II}ヴェヴェイの村を知ることになる。一九〇九年一月十三日、ボルドーでマルト・シュレル^{II}シュネデルと結婚する。そしてパリで従兄弟の仲介でストック書店の秘書になった。そこでアポリネールや多くの文人たちと交流を持つことが出来た。十一年には長男のジェラルが生まれた。彼は二七歳になっている。間もなくストック書店が経営危機に陥る。彼は少なからず経営に参加していたので、その破産から訴訟に持ち込み、彼が勝利した。一九一六年、彼が三二歳になったとき父のジョルジュ・ブートロウは死んでしまう。

それから彼はシャルドンヌ村に行き、ベルビユー・ホテルに落ち着いた。そしてそこで彼の処女作である『祝婚歌』を書きはじめるのである。そこへ彼の妻と長男のジェラルが合流する。翌年五月には長女のフランスが生まれた。二年後にはパリに戻ってくる。そしてモリス・ドラマンと協力してストック書店をドラマン^{II}ブートロウ商会として導くことになる。一九二二年、彼が三七歳の時、ラルビュ・ド・フランス誌にジャック・シャルドンヌというペン・ネームで『祝婚歌』の初版を公にした。この作品はストック書店から単行本として公開されたが、彼が出版人であるという理由で、ゴンクール賞は受けることが出来ない。その翌年彼は奇妙な因縁でカミユー・ベルギーズ(Camille Belguise)と遭遇する。彼女は十三年後に、彼がマルトと離婚してから、彼の二人目の妻となるのである。それから間もなく彼はリュシー・ヴォートランの勧めでパリ近郊のラ・フレットに自分の地所を買い求め、そこに建築家アンリ・パコンの設計による家を持つことになる。一九二七年、ストック書店から『幸福な男の歌』を出

版する。そして一九二九年九月、四五歳の彼はレジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ賞を授与されることになる。一九三一年に公刊された『クレール』は大成を収めるが、フェミナ賞はサン・テクジュペリの『夜間飛行』に与えられた。翌年この作品にはアカデミー・フランセーズ小説大賞が授与された。一九三四年頃から『愛情の運命』第一部を書きはじめる。この年の終わりにはマルトとの離婚が成立し、翌年晴れてカミーユ・ベルギーズと再婚する。そして翌年にはこの作品が完成する。一九三七年一月に『ロマネスク』が、四月には『愛をめぐる随想』(L'Amour c'est beaucoup plus que l'amour)も公刊される。一九三八年には長女のフランスがアンリ・ムラーと結婚した。この年にストック書店から『バルブジューの幸福』が公刊された。この頃は第二次大戦の為に大いに苦労を余儀なくされたが、創作への情熱は全く衰えることはなかった。

彼はものを書きたい気持ちはあったが、実際に本格的に書きはじめたのは四十歳を過ぎてからである。先ず一氣に書き上げてから、それを長い時間をかけて彫琢するのである。彼は何時も「言葉の熱い心」を求めるのである、その表現が生きていた力を失わないように努めるのである。

彼はストック書店で様々な文人と遭遇しながらも、初めは文壇に出ることはあまり考えていなかったが、それは彼と交わった人々がジロドー、モーラン、モーリアック、モンテルラン、ベルナース、ジオノ等といった輝かしい存在だったからだ。自分は彼らの仲間になることを肯定することが出来なかったが、ベルナル・グラッセ書店が『幸福な男の歌』を評価して、彼に年金を提供することを申し出て、以後の作品は殆どこの書店から出版されることになった。その後の彼の創作の意欲はますます充実し数多くの傑作が世に送り出されたが、それらは戦後アルバン・ミシエル書店から全六巻の形で全集に纏めら

れるに至る訳である。

彼にはもう一つ忘れてならないことがある。彼は対独協力者として逮捕されたということである。一九三九年第二次欧州大戦が勃発したが、ストック書店は直ちに彼の故郷のシャラントに疎開しなければならなかった。しかし四十年の夏にはドイツ軍がこの地に入り、そこは占領地となった。シャルドンヌはヒットラーの如き独裁者は大嫌いだだったが、ドイツの文物には大きな尊敬の気持ちを持っており、ドイツとフランスの協力こそが、ヨーロッパの文化の没落を救うことが出来ると考えていたので、レジスタンス運動には加わらなかった。その為に戦後になって対独協力者の烙印を押され、故郷の解放委員会やヴェルサイユの戦犯法廷に召喚され、特に占領下に発表した『愛着』(Attachements)等に関しては厳しい審判が行われ、一時は投獄ということになったが、結局その嫌疑は晴れて釈放された。それでも彼はその後長らく誤解されつづけ、彼の文学に対して偏見が持たれる時間が長く続いたということは、彼にとっても苦いことであつただろうと思われるのである。戦後になって初めて発表した『空想的な人々』(Chimériques)の内にはその時のことが詳しく書かれており、彼が人間不信の気持ちに近付いたことや、死に対する願望などが読み取られ、厭世的な感情が色濃く表明されている。この作品は短編であるが、時代誌であり、人間の愚かさに対する呪詛のような感情が入り交じった随想的な何とも言えない不思議な作品となっている。

彼の文学を評価したエドモン・ジャルーは「ジャック・シャルドンヌの天才は、一番単純なもの、最も真実のものを、細心に墮すること、気取りに偏することもなく、しかもほとんど神秘的にと言える程に表現するところにある。自然で純粋な文章が、輝かしい光のなかに、突然深い神秘を帯びて現れる。

そのため人々はその文章を何度も読み返して、離れがたい気持ちにさせられるのである。」またアンドレ・テリーヴは『祝婚歌』の作者が現れたときから、批評家が満場一致で賞讃したが、彼こそはもしかしたら我々の時代のモンテーニュであるかもしれないのだ。」と言っているし、ジャン・ロスタンは「私はシャルドンヌは我等の時代の最も偉大な散文家であると思っている。」と言っている。またフランソワ・ヌーリッシエは『オプゼルヴァトゥール誌』で「奇跡は更新された。そして輝かしい成功もそうだ。そして我々はそこから秘密を捜し出すことを続けることが出来るのだ。」とも言っている。彼を絶賛する文章は枚挙にいとまがない程なのである。シャルドンヌの文学は「沈黙の小説家」と言われているが、誇張の無い、ニュアンスの豊かな文体の中に、夫婦愛の哲学を繰り広げると同時に、フランスのモラリストの伝統をしつかりと受け止めており、彼の文学は日本ではもともとと高く評価されるべき大家なのである。ところで彼が一九三四年に『愛情の運命』を三部作として順次公開してから、一段落したときにマルトとの離婚の手續きがやっと完了したので、その翌年にカミーユ・ベルギーズとやっと結婚することができた。出会ってから十二年目のことで、彼は五十一歳になっていた。

それからの彼は創作への意欲をますます高めていくのである。一九三七年には『ロマネスク』がストック書店から、三八年には『バルブジューの幸福』が同じ書店から出た。しかし次第に戦争の影響が大きくなっていく。彼が指揮していたストック書店をモーリス・ドラマンがジャルナックへ移したりした。彼は四十年にはカミーユと共にラ・フレットを離れて、ジャルナックの近郊のラ・モーリーに避難した。そしてその年末にはドリュ・ラ・ロシエルに復興されたN.R.F.誌の第一号で『モーリーの夏』を発表した。その後は彼のドイツ軍への協力の問題が暫く暗雲を投げかけることになるのは前述の通りである。彼は

一九四四年九月十二日に対独協力の疑いで逮捕され、コニヤックの監獄に投獄された。そしてその翌年の十一月末にその嫌疑は晴れたが、ストック書店からは退陣した。一九四五年、ヴェルサイユの法廷で彼に対する予審が開廷された時彼は既に六十歳になっていた。翌年彼は不起訴処分となったのだった。彼はその頃のことを『解脱』(Détachements)に書いている。しかしやがてその後は穏やかな日々が始まる。

四九年、彼はラ・フレットの家を根本的に改築して、再びそこに落ち着く。その頃には彼はロジェ・ニミエとの友情に捉えられる。彼の周りには次第に若い人々が集まってきた。一九五二年の大手術の後は、ポール・モーランとの友情が深まり、ほとんど毎日の様な文通が始まったのだった。

一九五三年五月、ジネット・ジタール＝オーヴィスト女史が最初の彼の伝記である『ジャック・シャルドンヌの生涯と芸術』を公にした。

その後は彼は時折イタリアやポルトガルを訪れたりしたが、その間に断続的に『早起きの人々』(Matinales)を、更に『女たち』(Femmes)を出版した。一九六六年、彼はスイスのシャルドンヌ・シュル・ヴェヴェイ市から「名誉市民」《bourgeois d'honneur》に任命された。そして一九六八年五月三十日、ラ・フレットの自宅で静かに永眠したのである。享年八三才であった。

訳者後記

ジャック・シャルドンヌの代表作を世に送り出すに当たつての訳者自身の感慨を述べることを許していただきたい。私にとってシャルドンヌとの出会いはもうかれこれ三十年前に逆上る。訳者は元々はドイツ文学を専攻しており、ドイツの大詩人フリードリッヒ・ヘルダーリンに取りつかれていた。しかしそのドイツ文学とは全く質を異にするフランス文学にも何故か強く引きつけられるのを感じていた。要するにこの全く相反するものに手を染めることとなった。しかしヘルダーリンについてはドイツ人が晩年に薄明に陥ったということに疑問を持たないことを何かしら納得できないでいた。そしてますます彼の世界に深入りしていく一方では、フランスの文学作品にも興味は次第に大きくなっていった。そして原書で少しづつボードレールやフローベール、モリエール、モンテーニュ等の作品を徐々に親しむようになり、その中で何故かシャルドンヌの『クレール』と『エヴァ』と更に『ロマネスク』に遭遇したのである。そして彼の作品の内の何とも言えないフランスの英知に満ちた静かな世界に魅了されていったという訳である。

ところでこのシャルドンヌの大作の題名はどのような経緯から生まれたのだろうか。『愛情の運命』(Les Destinées Sentimentales)は訳者の憶測ではフローベールの『感情教育』(L'Education sentimentale)

からヒントを得たのではないかと思ってる訳である。彼はフローベールの作品を愛読していた。従ってフローベールから芸術家の苦行僧的な営みを受け継いでいる様に思われるのである。訳者はこの二つの作品を読み比べて何となくその様に感じている。

シャルドヌの本名はジャック・ブートロウというのであるが、彼はこのペンネームを持つに至ったのには次のような事があつた。彼は若い時に病氣療養の為にスイスのシャルドヌヌ村で過ごし、この町がいたく気に入つたのであつた。そしてそれを自分のペンネームにしたのである。そしてシャルドヌ・シュル・ヴェヴエイ市から一九六六年、「名誉市民」に任命されたのは前記の如くである。その彼の最高傑作を日本語に訳出するのは訳者にとっては極めて楽しい作業であつた。そしてこの作品が青山社のご好意によって美しい一冊の書物になることができたのは訳者にとってはこの上ない喜びである。

最後になってしまったが、この翻訳が一冊の書物になるのに忘れることができないのは青山社の野下弘子さんに様々な形で懇篤なるご援助を頂くことが出来たということである。ここに記して心からの感謝を捧げたいと思つてゐる。

この訳書が日本におけるシャルドヌ理解の進展に少しでも寄与することが出来ればと願わずに出来ない所以である。

二〇〇三年 夏

森 健二

◆訳者紹介

森 健二（もり けんじ）

1942年東京生まれ。広島大学独文学科文学研究科修了。
ドイツのヘルダーリン、フランスのシャルドンヌ等を中心に研究。
訳書 マックス・デーネルト『バッハの世界像』（音楽之友社）。
現在 近畿大学助教授。

愛情の運命

2003年12月6日 第1刷発行

訳者 森 健二

発行者 池上 淳

発行所 〒229-1124 神奈川県相模原市田名11240

アメニティタワー5F

学術図書
出版 青山社

TEL 042-763-6440(代) FAX 042-763-6443

URL <http://www.seizansha.co.jp/>

振替口座 00200-6-28265 ISBN 4-88359-104-2

印刷・製本 株式会社 平河工業社



ジャック・シャルドンヌ

この作品は彼の代表作であるが、最もスケールの大きなものであり、制作に当たっては自分の生きてきた世界をそのまま取り入れているだけでなく、その主人公は彼自身の分身となっている。そして彼の作品の中で最大のものであり、彼が経験を通じて到達した、人生についての様々な結論的な章句が随所にちりばめられている。

ISBN4-88359-104-2 C1097 ¥4762E

定価（本体価格 4,762 円 + 税）